猫かぶり姫と天上の音楽

もり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
猫かぶり姫と天上の音楽

【Ｎコード】
Ｎ３０７９Ｏ

【作者名】
もり

【あらすじ】
断るのが面倒で受けたお見合い相手に迫られ、バルコニーから転落した音大生の花（ハナ）。それを拾ったのが、自称「神様」。で、拾得物は交番に・・・なはずが、違う世界へ届けられました。そこは魔法や魔物が息づく世界。「ここで音楽を奏でてね♪」って言われても・・・。※ご都合主義・主人公至上主義です。

1．面倒くさがりも程々に。（前書き）

初めて小説を書きます。拙い文章で申し訳ありません。
ただただ、自己満足の内容なので、深い心理描写などない、ご都合主義の話であることをご了承ください。

1．面倒くさがりも程々に。

――――『吾輩は猫である』……違うな……正確には『私は猫かぶりである』かな。

小泉花（こいずみはな）は自宅の居間にあるソファに腰掛け、大層な装丁のA四判の一枚の写真を見ながら心の中で呟いた。

――――っていうか『花』って!!　今時、『花』って名前はどうなの!?　世間には可愛い名前が溢れ返ってるというのに、『鼻』って!!　あ、変換間違えた。でも、まあ……お兄様の名前の『太郎』、弟の『次郎』よりはマシかな……お父様のネーミングセンスが最悪なのは確かだけど。

手元にある写真を凝視したまま、次から次へとまったく関係ない思考を巡らせる花の耳に父の声が入って来た。

「まあ……少し花よりは年上だが、誠実な方だと聞き及んでいる。家柄も申し分ないし、何より将来はあの桜庭グループの総帥だ。花は今以上に何不自由ない生活ができるぞ」

嬉々として言う父の顔を窺いながら花は口を開いた。

「……それで、お会いするのはいつなのでしょうか？」

――――少しって!!　少し年上って!!　十八歳年上は少しですか？

「今度の日曜日だ」

「そうですか……でもお父様、私はまだ学生ですし、あと二年も卒業までありますが？それにできたら海外に留学したいとも考えております」

――― 今度の日曜って……私の都合は丸無視なの！？

「先方は大学卒業までは待って下さるそうだ。留学は……諦めろ。留学などしなくても好きなように海外へ旅行に行けばよいではないか」

「……わかりました」

――― 結婚は決まり！？ それもそうか、桜庭グループと縁故関係ができれば小泉商事も安泰だもんね。この様子だと、結婚式の日取りまで決まってるんじゃないの？ というか、今以上に何不自由ない生活って……今、不自由だらけなんですけど！！ 何が一番不自由してるかって……そう、それは『愛』！！

ベタすぎるってことはわかってますが、愛が欲しいわけです。『真実の愛』ってやつが。別に、恋人からの愛を求めてるわけじゃない……ただの『家族愛』でいいのに。娘として両親には大事にされてるし、確かに物質的に不自由したことはないけど。まあ、うちは元華族の所謂（いわゆる）『旧家』というやつで、曾祖父の代からの事業も上手くいってるお金持ちってやつだから。幼稚舎から大学までは名門のお嬢様学校とやらに通わせてもらい『箱入り』に育ててもらいました。でも、十八歳も年上の『これ』に売り渡すのかと思えば、『愛』っていうより『投資』でしたね、はい。

花は手元の写真に視線を落とし、嘆息した。

それに気付かなかったのか無視しただけなのか、花の父親はすっかり冷めてしまったコーヒーを飲み干し、「会社に行ってくる」と言って、居間から出て行ってしまった。

「いってらっしゃいませ」

花は立ち上がり父親を見送ると、持ったままだった写真……見合い写真を釣書と共に小脇に抱えて居間を出た。すると父親を見送った母親が心配そうな視線を向けてきたが、気づかないふりをして部屋に戻り、大学用の通学カバンを取り上げると急いで玄関を飛び出した。

――― 心配はしても、夫に逆らってまでの行動はしないか……『母親の愛』もそんなものですよね。

「行って参ります！」

少し投げやりな口調になってしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「で、これなの？」

「そう、それなの」

花は大学のカフェテリアの一つのテーブルに座り、向かいに座る唯一と言っていい親友の立花沙耶（たちばなさや）の端的な質問に端的に返した。

二人の間のテーブルには今朝、父親から渡された見合い写真と釣

書が広げられている。

「身長百七十一センチってあるけど……どう見ても百七十センチないと思うけど……ってか、百六十五センチあるかどうか怪しくない？」

「まあ、シークレットブーツ履けば私よりは背が高く見えるんじゃないかな？」

「……花がヒール履かなければね」

花の身長は百六十四センチである。

「禿げてるし……」

「まあ、桜庭グループの重役なんて気苦労が多いんじゃない？」

「……太ってるし……」

「まあ、ストレスで食べすぎたのかもね？」

「しかも、三十八歳って……例え外見が悪くても桜庭グループの跡取りってだけでいくらでも女が寄ってきそうなのに、未だに独身って性格やら他にもかなり問題があるんじゃない？」

「もう！　沙耶ったら！！　さっきから酷いことばっかり言って！！　例えチビでハゲでデブの三重苦でも……ううん、三重苦だからこそ性格はいいはずだよ！！　じゃなきゃ人間としてどうよ？　って話だもん。やっぱ性格が一番大事だよ、うん。未だに独身なのはきっと忙しすぎて婚期を逃したてたんだよ！！」

「いや……あんたの方がよっぽど酷い事言ってますけど……まあ、それはいいけど。その言い様だと本気でこの話受ける気なの？」

「受ける気っていうか、断るの面倒です」

「いやいや、面倒ってあんた！　一生の問題だよ！？　これとキスできるのか！？　セックスできるのか！？」

「……目を瞑ればできると思う」

「バカだ……ここにバカがいる」

「私は音楽があれば、それでいいの。これと結婚してもきっと音楽は続けられるから」

「そもそも、結婚相手のことを『これ』って呼んでる時点で問題だと思うけど……あんたはホント音楽バカって言うか……あ、やっぱりバカなのか……しかし……これはないでしょ？　花なら音楽が続けられる結婚相手なんていくらでも見つけられるでしょうに」

「でも、お父様からのお話だからもう決定事項だと思う。逆らうの面倒だから。音楽に関係する以外の面倒は引き受けたくない」

「あんたの面倒くさがりも大概だよね……面倒だからいい子ちゃんを演じてるんだもんね」

「いい子ちゃんでいると楽だから。嫌な事があっても、心の中で悪態ついとけばスッキリするし。まあ、家族も先生も友達も上っ面の私しか見てないってことだよね。あ、沙耶は違うよ？　唯一本心を

語れる心の友だもん」

「心の友って……まあ、あんたの心の中にはブラック花が棲んでるよね。上手に猫かぶってるけど……みんなこの猫かぶりに騙されてるよね」

「いやいやいや、羊の皮を被った女豹の沙耶さんには負けます」

「女豹かよ……」

「あら、女豹さん。次の授業が始まりますわよ。私は第三ピアノ室ですのでこれで失礼致しますわ。ごきげんよう♪」

「……猫かぶり姫め」

そうして二人はそれぞれのレッスン室へ向かった。

二人とも音楽科のピアノ専攻の三回生である。恐らく面倒くさがりな花でもこのエスカレーター式の大学に音楽科がなければ、父親を説得して音楽科のある大学へ外部受験したであろう。それほどに音楽は花にとって大事なものだった。

2．後はお若いお二人で。

「では、後はお若いお二人で……」

仲人さん――なんとか銀行の頭取の奥様がお見合いには常套句の言葉を告げると、仲人夫妻と花の母親と、お相手の桜庭……桜庭……桜庭次期総帥のお母様が席を立った。

――― 桜庭なんて言うんだっけ？？？ ま、いっか。『桜庭さん』で。んー桜庭か……結婚すれば『桜庭花』になるのか……なんか、微妙。

二人きりになった後、しばらく沈黙が続いていたが、ようやく桜庭が口を開いた。

「花さんは大学でピアノを専攻していらっしゃるそうですね。よかったら弾いていただけませんか？」

その言葉に花は顔を上げ桜庭の顔を見た。

――― あ、鼻毛出てる。しかも三本も。さっきまで出てなかったのに……って、そうじゃなくピアノね……。

「そうですね、でしたら今度我が家に遊びに来て下さい。我が家自慢のピアノで演奏をお聞かせ致します。桜庭さんが来て下さったらきっと両親も喜びます」

にっこり笑って教科書通りの――心にもないことを言った。

「それは嬉しいお誘いだ。あ、でも……あそこにピアノがありますよ？あれで弾いて下さいよ」

――ええ！？　あれでって……ここで今？　この振り袖姿で？お茶を楽しんでいらっしゃる皆様の前で？？？　何言ってるの、このおじさん。

「いえ……残念ながら、今この場で皆様にお聞かせするほどの腕ではございませんので……桜庭さんにも恥をかかせてしまいますから……」

再びニッコリ笑って婉曲に断った。が、通じない。

「でも、ピアノ専攻してるんでしょ？　上手なんでしょ？」

――すごい……本物のバカボン初めて見ました。ちょっと感動です。

「上手かどうかは……ただ好きで、勉強させてもらってるんです。それに、私は小心者なので、人前で弾くのはちょっと……」

――これで引き下がる？　というか、引き下がれ！！

「わかりました。じゃあ、ちょっとお待ち下さい」

そう言って桜庭が席を立つ。

――やれやれ、引き下がった……さて、これからどうしたらいいのかな？　お庭散策とかが定番？　というか、帯苦しい。トイ

レ行きたい。でも面倒くさい。もう帰りたい。

一人鬱々としていると、桜庭が帰って来た。

「じゃあ、行きましょうか。」

――― どこに？　と聞きたいけど、淑女としては紳士の後ろを三歩下がって黙って付いていくべきなのかな……いや、なんか違う？　まあ、いいか。

そう思い黙って後をついて行き、エレベーターに乗り桜庭が最上階の一つ下の階のボタンを押すのを見た。

――― ???　ラウンジか何かかな？

疑問に思っているうちに目的の階に着き、エレベーターを降りる。

――― ……なんていうか……客室？？？　にしては扉が少ないし？？？

そうこうしているうちに、桜庭は大きな扉の前で止まり金色のカード――　どうやらカードキーらしいもので扉の鍵を開けた。

「さ、どうぞ」

そう言うと扉の中、部屋らしき場所へと促してくる。

上手く引き下がることも出来ず、花は部屋の中へと足を踏み入れた。そして、驚きに目を見張る。

――― スイートルームだ。しかも、超がつくデラックスなスイ

ートだ。たぶん、国賓級が泊る……初めて入ったけど、ホントにすごいな……あ、そう言えば、このホテル桜庭グループのひとつだ。

花の家も金持ちとはいえ、さすがにこんな部屋は利用したことがなかった。驚きのあまり、一歩二歩と部屋の中に足を踏み入れる。そうこうしているうちに扉の閉まる音がした。

――あれ？……あの……これは二人っきりってやつですか？？？……もしかして貞操の危機？

冷や汗が背中を伝う。目を瞑れば我慢できると思ってたけど、さすがに初対面で鼻毛の出てるバカボンとは……と焦っていると、桜庭が奥の扉を開けた。

「こっちがリビングになってるんです。ほら、あそこにピアノがあるでしょ？」

そう言って、部屋の中を指し示す。

『ピアノ』の言葉に花は反応し、先ほどまでの危機感も忘れ、桜庭の後をついてリビングに足を踏み入れる。と、同時に驚いた。

「わあ！　ベヒシュタイン！！」

喜び、ピアノの傍まで駆け寄り（と言っても、着物なので早くはない）まるで頬ずりでもせんばかりに撫でまわす。ピアノと言えばスタンウェイがあまりにも有名だが、ベヒシュタインも世界三大ピアノメーカーに数えられ、また花の一番好きなメーカーでもあった。

「じゃあ、弾いて下さい」

「はい？」

桜庭の不躾な言葉に嬉々としていた花は驚いた。正直、このピアノは弾きたい。でもこの格好で？　この振り袖にたすき掛けをしピアノを弾いている姿を想像し、少し興ざめしてしまった。

「ここなら人目もありませんから弾けるでしょ？」

そう言って、桜庭はニタリと笑った。

――――　バカボンがニタリと笑うなんて……残念。というか、気持ち悪いです。

桜庭の意図がわかったものの……納得はできないけれど半ばやけくそのような、でもベヒシュタインが弾けるという誘惑もあり、少し無理して弾くことにした。

「じゃあ、少しだけ……簡単なものを」

そう言って、ピアノの前に座り鍵盤を弾きだした。弾きだすと気分が高揚してきて段々とピアノと自分だけの世界に入っていく。そうして、三曲弾き終えたところで、ふと目線を上げると、すぐそばまで桜庭が寄っていたことに驚いた。

「げ！……あの……どうでしたでしょうか？」

恐る恐る、聞きながら立ち上がり距離を取ろうとしたが、桜庭にがっしりと手を掴まれてしまった。

――― ひいっ!!

「素晴らしい!! 実に素晴らしい!! この繊細な手があんな素晴らしい曲を奏でるなんて信じられない!!」

そう言って桜庭は詰め寄ってくる。なんとか花は距離を取ろうと後ずさるが、桜庭はどんどん前へと来るので、気がつけば壁際まで追い詰められていた。

――― この人素晴らしいしか言わないよ。ボキャブラリー少ない!! それに顔近い!!! 近すぎてキモイ!!! というか、目線変わらないんですけど!? 身長サバよみすぎだよ!!……いや、そうじゃなくて!! どうする? 私!? って、顔近付いて来たー!!! ぎゃあああああ!!!

なんとか花は桜庭を押しやり逃げようとするが、着物が絡まって上手く足が動かない。

――― すみません。嘘言いました。目を瞑っても我慢できません!! できませんでした!!!

切羽詰まったこの状況で、誰に言っているのかどうでもいいことを謝る。今は逃げることが先決だと言うのに、パニックとは恐ろしいものである。そうして、廊下への扉でなく、バルコニーへ続く窓へと向かい外へ出た。

「花さん、どうして逃げるんですか? どうせ、結婚するんだからいいじゃないですか。ただの婚前交渉ですよ」

そう言って、ニタつきながら桜庭は花をゆっくりと追い詰める。

バルコニーの手すりに縋り、近づく桜庭に恐怖の目を向け、花は叫んだ。

「ごめんなさい！！　無理です」

「無理でも我慢してもらわなきゃ」

――　ぎゃあああ！！　なんていうか生理的に無理！！

更に距離を詰める桜庭に、限界に達した花はバルコニーから身を乗り出した。

――　落ちる！！

そうして、花は地面に向けて落下していった……はずだった。

3．ネコババは犯罪です。

――――　落ちる！！

そう思った瞬間、花の体は手すりを乗り越えて下へと落下した。
プールの青さが目に沁みて、瞼を閉じる。

――――　ああ、私はここで死ぬんだ。たった二十年の短い人生だったけど、最後にベヒシュタインも弾けたし、まあいいか……。でも私、恋もしたことなかったな。どうせ結婚相手は選べない、そう思うと恋をしようとも思わなかったし、合コンも面倒で参加しなかった……少しくらい参加すればよかった。キスどころか、手さえ繋いだこともないんだから……いや、ひょっとしてさっきのアレって手を繋いだことになるのかな？……アレと？　アレが最初で最後？
いやあああああああああ！！
それはイヤ！　あり得ない！！　ああ、神様お願いします！！
アレが最初で最後ってのはやめて下さい！！

「うん、わかった」

「……へ？」

必死で祈っていた花の耳に随分軽い調子の声が届いた。

「だから、そのお願い聞いてあげるよ」

「へ？」

なにがなんだかわからない言葉が耳に届く。

――　ってか、私いつまで落下してるの？

そう思い、恐る恐る目を開ける。

そうして花の視界に入って来たのは……ただの白い空間。

――　ああ、これが死後の世界か。お花畑とかないんだ……。

キョロキョロしてそう思った花は、地に足を着けてないことに気付いた。

――　浮いているのかな？……いや……お尻と背中に当たるこの感触は違う気がする……？

少し落ち着いて自分を見下ろすと、横になった自分の体を支えるように手が見える。綺麗な手だ。いや、そこではなくて……これはいわゆるお姫様抱っこってやつじゃ？　確かに、自分の右側には細いながら、でもしっかりした体つきの……恐る恐る視線を上にあげていく。その先にあったのは無邪気に笑う亜麻色の髪の美少年だった。

「……あの、できたら下ろしてもらえませんか？」

「いや」

「はあ、そうですか」

――　困ったな。この体勢……人生で初めてのお姫様抱っこだ。

しかも自分より年下っぽい美少年に……人生初の体験です。あ、死後初の体験かな？

「いや、まだ花ちゃんは死んでないから人生初でいいんじゃない？　落ちてたからボクが拾ったんだもん」

「ああ、それはそれはご丁寧にありがとうございました。じゃあ、あの私帰りたいので……」

「ダメだよ、帰さない。ボクが拾ったんだからボクのだよ」

色々な事が流されながら二人の会話は進んでいく。

「いえいえ、それはネコババってやつですよ。拾得物はちゃんと交番に届けないといけないんですよ？　後ほど二割のお礼も致しますから、どうぞ帰して下さい。」

「へえ？　じゃあ命の二割って何くれるの？　例えば八十歳まであと六十年、花ちゃんが生きるとして、その六十年の二割、十二年の命くれるの？　だとしたら、花ちゃんの寿命は六十八歳か……まあ、そもそもこれは間違った計算だけどね。花ちゃんはここで死ぬ予定だったんだから。そう考えると、花ちゃんの寿命は０年だからその二割のお礼って無理だよね？　どうする？」

「いえ、どうするって言われても……どうしましょう？」

考え込む花を見て、美少年は無邪気に笑う。

「だから、花ちゃんはもうボクのだって言ってるじゃん。というわけで花ちゃんには使命を与えます！！」

「はあ」

「あのね、ぶっちゃけると、ボクって『神様』なんだ♪」

「ああ、それは御苦労さまです」

「いえ、ご丁寧にどうも……ってそうじゃなくて！　もう、さすがボクが気に入っただけあって反応が面白いな。あのね……ボクは『神様』って言っても、花ちゃんの住んでいた世界の『神様』じゃなくて、違う世界の『神様』なの」

「はあ」

「で、ボクが『神様』やってる世界の一つにユシュタールって言う世界があってね。順調に発展してたところなのに、今ちょっとヤバくてね」

「はあ」

「崩壊の危機に瀕してるんだ」

「それはご愁傷様です」

「いや、まだ大丈夫だから。ユシュタールのみんなも頑張ってるから。で、崩壊を防ぐために頑張ってくれる分、みんなの心も体も疲弊してて気の毒なんだよ」

「はあ」

「で、花ちゃんにみんなを癒してあげて欲しいと思って」

「はあ……はぁ！？」

「それがボクからの花ちゃんへの使命です！！」

ご機嫌で自称『神様』は言うのだが、意味がわからない。

「あの……それなら『神様』がなんとかしてあげればいいんじゃないですか？」

そう提案する花に、自称『神様』はチッチッチッ！　と舌を鳴らしながら人差し指を立て、顔の前で振る。少年の様でいて、花を片手で支えているのだからずいぶん力持ちだ。

「それが出来たら、苦労しないんだけどね。残念ながらボクは手を貸すことができない。なぜならそれはルールだから。『神様』には『神様』のルールがあってね……無暗やたらと手を貸すことはできないんだよ。それにボクはこう見えて忙しくてね。だから、せいぜい『神様の使徒』を遣わすことぐらいしかできないんだ」

「はあ。使徒ですか……」

「そう、使徒だよ。じゃあ、頑張ってね！　花ちゃん♪」

「え？　ちょ、ちょっと待って下さい！！　使徒って私の事ですか！？」

「そうだよ？」

「いやいやいや……私、何も出来ません！　奇跡とか起こせませんけど！？」

「大丈夫！　さっきも言ったけど、みんなを癒してあげて欲しいだけだから」

「だからどうやって！？」

「音楽だよ」

「音楽？」

「そう、音楽。そもそも　ボクが花ちゃんを助けようと思ったのは、君のその音楽による癒しの才能だよ」

「癒しの才能！？」

「そう。あまりにも綺麗な癒される音が聞こえてくると思って、ふらふらとあそこに吸い寄せられたら、花ちゃんが落っこちてってさ。もったいないから拾ったの」

「なるほど」

「では、ご納得頂けたようなので、よろしく！　じゃあ、ボク忙しいからもう行くね！！　あ、そうそう、とりあえず一番癒しが必要な子の所に届けるから。ユシュタールで素敵な音楽を奏でてね～！」

と言いながら、自称『神様』の声は遠ざかっていく。それと同時に視界は暗闇に染まり平衡感覚はなくなる。

「ええ！？　ちょっと待って！！　まだ納得してないんですけど～！！」

叫ぶ花の声はむなしく暗闇に吸い込まれていったのだった。

4．己を知ろう。

「陛下、どうかお聞き届け下さい」

国の主だった役職に就く者たちとの月に一度の恒例の晩餐を終わらせ、残った仕事を片付けようと執務室に向かう途中、大臣の一人に相談があると言われ今現在、執務室で対面しているのだが。

先程から無言を通す、マグノリア皇帝であるルカシュティファンを前に内大臣であるドイルは焦り、更に言葉を重ねていく。

「陛下、確かにご正妃をお決めになるのは難しいかもしれません。しかし、ご側室さえ一人もいないとは……今現在、後宮に仕える者たちは暇を持て余し、戸惑っております。この者達の為にもどうかご側室をお決めください。深くお考えなされなくてもよいではありませんか。貴族の娘たちの中から二，三人適当に召し上げれば……そのうち寵もわきましょう。私は……いえ、私を含めた陛下の臣は皆、陛下の御子を待ち望んでおります。今現在のこの不安定なユシュタールで陛下の御子がご誕生なされば、きっとマグノリア国内だけでなくユシュタール全土の民は希望に満ち溢れることでしょう。陛下がお気を煩わせる事はございません。よろしければ私めが程良い娘を見繕いますゆえ」

そう述べるとドイルは深々と頭を下げた。緊張し、焦る気持ちから少々早口になってしまったが、言いたいことは述べた。後は陛下の「是」と言う言葉を待つのみだ。

そんな様子を見て、皇帝の後ろに立つ近衛隊長のレナードは笑いを堪(こら)え、顔を崩さないようにするのに必死だった。

――― 最後の一言を言う為に、随分長々と述べたな。

ニヤつきたいのを必死で抑え、皇帝の言葉に集中する。

「そなたは……余の治世では不安か？」

皇帝は感情の窺えない声で、ドイルに問う。

「とっ、とんでもございません！！　そのようなことは決して！！」

ドイルは青ざめ床に頭を擦り付けんばかりに平伏した。後宮に息のかかった娘を送り、寵を受ければ、ドイルの宮廷での力も増す。そのようなあさましい考えからの此度の発言であったが、力を増すどころか、このままでは不敬罪で投獄されかねない。慌てて、取り繕いの言葉を探すドイルであったが……。

ピクリとレナードが反応した。顔つきが途端に険しくなる。

「陛下」

レナードの言葉に皇帝は「わかっている」と言うように軽く頷き、ドイルに言葉をかけた。

「さて、私はこれから部屋に戻るが、そなたも一緒に参らぬか？」

「は？……あ、あの……私めが陛下のお部屋に？」

「嫌か？」

「とっ、とんでもございません！！　是非！！」

慌てて否定したドイルは、「そうか」と呟き席を立った皇帝の後に続いた。もちろん、皇帝のすぐ後ろにはレナードが付き従い、その三歩程後ろに従う形でだが。

執務室を出た三人の後に皇帝付きの近衛が二人付き従う。

――― なぜ陛下は私をお部屋に？……まさか！　へ、陛下は男色家なのだろうか？……いやいや、例えそうでも私はないだろう。それに陛下は即位前……いや、皇太子になられる以前にはそれなりに女性とも付き合っておられたはずだ。

ドイルには皇帝の意図がさっぱり読めなかった。

そのうちに、皇帝の自室の前に着いた。その扉を近衛の一人が勢いよく開け、飛び込む。もう一人の近衛は皇帝の前で庇うように、レナードは相変わらず皇帝のすぐ後ろに控えているが、腰に佩いている剣の柄を握りしめ、いつでも抜刀できるように構えている。その緊張感溢れる中でも、皇帝は楽しげな笑みを浮かべていた。

何が何だかわからないまま、ドイルは緊張に強張った顔を必死で皇帝の自室内へと向けた。

そこには挑発的な夜着を纏った女が、近衛に剣を喉元に突き付けられたまま青ざめて立ちすくんでいた。

「へ、陛下！」

女は青ざめたまま、縋るように皇帝に呼び掛ける。

ドイルがよく見れば、女は最近社交界で可憐な乙女と人気を博している、とある伯爵家の娘だった。

――― 可憐な乙女がよくやる。

レナードは娘に向けて失笑を洩らし、侮蔑の視線を投げかけた。

そんなレナードの視線にも気付かず、娘は一心に皇帝に視線で縋り言葉をなんとか発する。

「陛下……私、あの……陛下を御慰めしようと……」

なんとも傲慢で恥知らずな言葉に一同息を呑むが、皇帝は優しげとも言える笑みを浮かべ、娘に剣を突き付けている近衛に視線を向けた。

「剣を引け」

その言葉に近衛は従い、剣を下ろした。

それに気を良くした娘は純真さの中に妖艶さが浮かぶ、そんな笑みを皇帝に向けた。

――――　娘!!　今のうちに早く出ていけ!!

レナードは青ざめ、伯爵家の娘に目で必死に訴えたが、娘は一向に気がつかない。そしてあろうことか皇帝に近づき、皇帝の左腕に触れた。

その仕草を見たレナードは、哀れな頭の悪い娘の為に瞳を閉じ祈った。

「キャアアアアッ!!」

途端、耳を切り裂くような娘の悲鳴が響き渡った。

そっと瞼を上げたレナードは、右腕を抑え苦しそうに呻き涙を流す娘と、その場に立ち相変わらず優しげな微笑みを浮かべた皇帝の姿が目に入って来た。

「余に触れるな」

一言呟いた皇帝は、青ざめガタガタと震えるドイルと青ざめながらも毅然と立つ近衛の一人、ランディに命令する。

「ランディ、この娘を牢へ。罪状は余の部屋への侵入と不敬罪だ。ドイルはその旨の書類を作れ。証人はそなたでいいな」

用は終わったとばかりに背を向けた皇帝にレナードは慌てて声をかけた。

「陛下、医師の手配は如何致しましょう?」

その言葉に、奥へと向かいかけた皇帝は振り向き、フッと笑った。

「その娘の右腕には治療はもう必要ないが。まあ、切り落とすしかないだろうから……そうだな、ランディ、医師の手配を」

その言葉を最後に皇帝は奥の部屋へと姿を消した。

ランディは右腕を――いや右腕だったと思われるものを抑えたまま泣き叫ぶ娘を強引に立ち上がらせ、部屋の外へと連れて行った。それに続いてもう一人の近衛も部屋を出る。部屋の外、扉の前で不寝の番をするのだろう。

その場に立ち尽くし、茫然としたままのドイルにレナードは声をかけた。

「ドイル殿、大丈夫か?」

その声に、ハッとしたドイルは慌てて転がるように部屋から出て

いった。
そうして、皇帝の自室の居間に一人になったレナードはソファにドサリと体を投げかけるように座り、眉間を揉みほぐした。

――― あれはいくらなんでもやり過ぎだ。あの娘の右腕、確かに切り落とすしかないだろう。

娘が皇帝の腕に触れた途端、嫌な臭いがした。それは皇帝に触れた娘の腕の焼けて焦げる臭いで、レナードが目を向けた時にはほぼ炭と化していた。
一瞬の間に何があったのか。
それは皇帝の攻撃魔法に他ならない。
皇帝の魔力は圧倒的に強すぎ、魔法を発動させるための詠唱さえ必要としない。その強すぎる魔力で他国を抑え、帝国だけでなく不安定なユシュタールを支えていると言っても過言ではないが、それ故に孤独を強いられている。

――― あの娘の言葉ではないが、誰か陛下を……ルークの孤独を癒し、慰めてくれる者があればよいのだが……。

眉間に手をやったまま、考え込むレナードの元に琥珀色の液体が入った瓶とグラスを二つ抱え皇帝が戻って来た。そして、自分とレナードの為に液体をグラスに注ぐ。晩餐の為の礼装から、くつろぐ為の服装へと着替えている。
マグノリア帝国の皇帝ともあろうものが、自分で着替え、臣下の為に酒を注ぐなど普通はありえないだろうが、現皇帝であるルカシュティファンはそうしたことを苦としない。
むしろ、傍に侍従が控えるのを嫌がり必要最低限しか置かない。
本当は近衛さえも嫌なのだが、それは対外的にも必要なので我慢しているありさまだ。

そうして幼い頃から親しくしているレナードのような一部の者には愛称であるルークと呼ばせている。もちろん、人目のない場合だけだが。

「ルーク、やりすぎだ」

強い口調でレナードは窘めた。

「あの女には虫唾が走る。あのようなあさましい女、ドイルが可愛く見えるほどだ」

その言葉にレナードは眉間を寄せた。

あの出来事は恐らくドイルから貴族たちに広がるだろう。後宮に娘を入れようとする貴族たちも、これでまた当分は大人しくなるはずだ。

ルークには到底及ばないが、レナードもかなり強い魔力を有している。ルークの部屋に何者かが侵入したことはすぐにわかった。この王宮にはルークの結界が施されているのだから。

侵入者が何者かはレナードにはわからなかったが、おそらくルークにはわかったはずだ。そして最近煩く飛び回る貴族たちへの牽制する為にあの場にドイルを連れたのだろう……それにしても、やりすぎだ。

更に眉間のしわを深めたレナードに、琥珀色の酒を飲み干し、ルークは告げた。

「レナード、あの娘を手引きしたものを探り出せ」

そう言ってルークは立ち上がり、奥の部屋――寝室へと姿を消した。

レナードも勢いよく残っていた酒を飲み干してから部屋を出てい

った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

貴族の情報網は恐ろしく早い。

恐らく、一昨晩の出来事を知らぬものは宮廷には最早いないだろう。昨日の朝には娘の父親である伯爵が恐怖に顔を引きつらせた真っ青な顔で平身低頭謝罪した。娘を部屋に手引きした人物はまだわかっていないが、今回はこの伯爵でないことは確かであった。

魔力を使えば犯人などすぐにわかるが、それには人の心に作用する魔法を使わねばならぬ為、魔力の消費が激しい。こんなことで魔力を大量に消費するのは馬鹿らしい。ユシュタール崩壊の危機に晒されている今現在は特に。

娘には十分な罰を与えてやったので、更に伯爵に罰を与えることすら煩わしい。そう考え、伯爵には娘の監督不行き届きとして、一週間の謹慎処分を下しただけだった。

そもそも、こんな煩わしい問題を引き起こす後宮自体をつぶしてしまいたいが、それはさすがにすんなり片付く問題ではない。

珍しく大きなため息をつくと、後ろに控えているレナードの笑いを含んだ声が聞こえた。

「どうした、ため息なんかついて。恋煩いか？」

「うるさい。黙れ。死ね」

「皇帝陛下のご命令とあらば、この命、今この場で陛下に捧げましょう」

「うるさい。黙れ。バカ」

「ご命令は撤回ですか？　それは恐悦至極に存じます」

また反応するのもバカらしく、仕事を片付けようと書類に目をやった時に、ルークの自室の結界が反応した。

「まただ、ルーク」

「まただな……しかも女だ」

今度は二人で溜息をつき、執務室を後にした。転移魔法で部屋に行ってもいいのだが、まあ一応、近衛を連れていくか、と言うことで歩いて部屋に向かう。

そもそもルークは近衛など必要ないくらいの強さがあり、それにレナードが加われば、恐らく一国の軍隊でも立ち向かえるかどうかなのだが。

二日前と同じ様に――いやドイルがいないので同じとは言えないが、再び扉の前に四人は立った。

「……明かりはついていませんね」

「開けろ」

レナードの言葉に構わずに扉に手をかけた近衛に命令し、扉が開かれた。

そして暗闇の中、侵入者の気配を探った。

5．夢オチを希望します。

長い間暗闇をさまよったような気もするが、一瞬だったような気もする。
花は無事に着地できた事に気がついた。視界はまだ暗闇の中にあるのだが……。

――― ええっと……私どうしたんだっけ？　バルコニーから落ちて……あ、『神様』に会って、まさかの展開で……とにかく今現在私はどこにいるのか……？

そう思い、手探りで周りを調べてみる。どうやら花は座った姿勢らしい。
少し平衡感覚を失くしてふわふわするが、自分の体勢は把握できた。そして地面らしきところに手をつく。

――― 砂？

随分サラサラとした砂の上に座っているらしいことがわかった。
腰を上げようとした瞬間、パッと目の前が明るくなって、あまりの眩しさに花は目を瞑った。
そうして、光に慣れた頃合いをみて、そろそろと瞼を持ち上げると……キラリと光るものが目に入り、また瞼を閉じる。

――― おーい！　『神様』、聞いてないよ～！！　これ、夢オチとかってないかな？　ないかな？　ないよね～。

そうして、また恐る恐る瞼を上げる。

――――　やっぱり夢オチはダメだったか。クソッ！！

乙女にあるまじき悪態を心の中でつき、冷静に状況を理解しようとする。

――――　はい。只今の状況、喉に剣が突き付けられています。それも二振り。

目の前には四人の男性が立っています。みんなこちらを見下ろしています。当然ですね。そして、私は今現在、どうやら……暖炉です！！　ここは暖炉です！！　暖炉の中でなんと、正座してます！！　しかも振り袖で！！　サンタクロースでもないのに。

そうだね……最近はサンタクロースも不法侵入で捕まる時代だもんね。剣くらい突き付けられるよね、世知辛い世の中だよ……でも私はプレゼントを届けに来たのではなく、むしろ届けられた方で。

……で、どうすればいいんでしょうか？　この状況。

無言でキョロキョロしていたかと思えば、ウーンと黙り込んでしまった花にしびれを切らしたのか、四人の男のうちの一人が声をかけてきた。

「お前は何者だ？」

――――　おお！……ぬおおお！？　なんかすごいイケメンさん！！　さすが異世界。髪の毛がキラキラしてる。これはプラチナブロンドってやつですか？　しかも綺麗な瞳……琥珀色……いや、金色だ！！　造作も整ってるし、眼福ですね！！　プラチナブロンドのイケメンって言いにくいから、銀髪のイケメンと呼ぼう。プラチナからシルバーに格下げしてすみません。

質問に答えず、ただ無言でひたすらイケメンを食い入るように見つめていると、イケメンは溜息をついて「立て」と言った。
それでも動かずにいると（というか、動けないのだが）、剣を突き付けていた内の一人が剣を構えたまま花の腕を掴み、無理矢理立たせた。

「あっ！　ちょっ！！」

花は慌てて立とうとしたが、振り袖であった為といきなり乱暴にされた為ふらついてしまった（決して足がしびれてしまったからではない）。それをすかさず、もう一人の剣をもった男が支える。

――　おお！　紳士ですね……いや、剣を突き付けている時点で違うか。それにしても、この剣士？　二人も随分イケメンです。黒髪の剣士に金髪の剣士。それにもう一人、なんだか驚いた顔のまま固まっているけど、彼もかなりのイケメン……というか、この亜麻色の髪のイケメンって『神様』にすごく似ている。『神様』を大人にした感じです。すごい、イケメン四人でイケメンズフォーだ。

そんな花の思考を読んだわけではないだろうに、銀髪のイケメンはもう一回大きな溜息をついた。

「もう一度聞く。お前は何者だ？　そして何のために、また、どうやってこの部屋に入った？」

銀髪の男――ルークにはこの女が不思議でならなかった。
ルークの結界が張られたこの部屋に――いや、この王宮に許可なく入ることは不可能に近い。魔力の欠片も感じられないこの女が侵入したということも驚きだが、そもそも魔力が全く感じられないのが信じられなかった。ユシュタールに生きるものは全てに大なり小

なり魔力が宿る。それが欠片も感じられないとは巧妙に隠しているのか。

ルークから上手く魔力を隠すということは、即ち、ルークよりも魔力が優れているということだ。とすれば、この王宮に侵入することも不可能でないだろう。だが、どうにもその様には感じられない。

では、誰かが引き入れたのか？　だとしたら何のために？

暗殺だろうか？　いや、それなら魔力の全くないこの女にルークを暗殺することなど無理だ。もうひとつ考えられるのが、一昨晩もあったことだが……それにしては……ずいぶん珍妙な格好をしている。ひょっとして人間ではなく魔物なのか？……いや、魔力のない魔物などありえない。

ルークだけでなく、この場にいる他の者たちも同じように、この女の正体について考えを巡らせていたが、わかるはずもなかった。

一方、「何者だ？」と問われた花はというと。

――――「何者だ？」って聞かれても……どう答えればいいのやら。『神様』から聞いたことを素直に答えて信じてくれる？　いや、それはないよね。だって自分自身でも信じられないし、怪しすぎるから。

いきなり暖炉に正座してる女って……怖くない？　怖いよね！！　しかも着物で！！　座敷わらしか、呪いの人形かっての！！　この腰までの真っ直ぐな黒髪が更に迫力を増すよね？　いや、こっちの人に呪いの日本人形って概念はないか……。

いやいや、そこが問題点ではなくて今は、私の正体が問題なんだ。「『神様』に言われてここに来ました」って言っても怪しすぎる。投獄されなくても病院に監禁されちゃうよね。というか、そもそも『神様』の名前聞いてない。この世界で『神様』ってなんて呼ばれてるのか……『神様』でいいのかな？

答えに詰まり、花は俯いた。そこでふと目にしたものに驚愕する。

――――　ぎゃあああああ！！！　振り袖が！！

これ、おばあさまの形見の着物なのに！！……なのに灰塗(はいまみ)れになってる！！

花は着物に付いた灰を落とそうと、剣を突き付けられているのも忘れて慌てて手で叩(はた)いた。

すると――。

灰が宙に舞って、辺りが粉塵で霞がかってしまった。

すぐそばにいた剣士の一人が咳き込み出す。そして当然、花も咳き込んでしまった。

他の三人も顔を顰めている。

「ず……ずびばぜ！　ゲホゲホッ！！」

花は謝罪を口にするが、言葉にはならない。そうこうしているうちに、銀髪のイケメンが衣服の袖口で口を押さえながら何やら呟いた。

途端、サッと空気が清浄になり、花と剣士の咳き込みまで治ってしまった。

「陛下、ありがとうございます。申し訳ございません」

剣士の言葉が聞こえたので、着物まで綺麗になって驚いていた花も慌てて謝罪とお礼を口にする。

「あ……私もありがとうございます。大変ご迷惑をおかけいたしま

した。申し訳ありませんでした」

そう言って深々とお時儀をする。顔を上げた花が見たのは、珍獣でもみるようなイケメンズフォーの顔だった。

しかし、今の騒動でパニックになっていた花の思考もずいぶん落ちついた。そして、自分の正体については詳しくは伏せることにした。と言っても、花自身詳しくわからないのが悲しいが。

――― だって、どう考えても胡散臭いもん。この国での『神様』に対する信仰度もわからないし……。

そう結論付けた花は、落ちついた思考と共に戻ってきた体の変調に気がついてしまった。

――― やばい……すっかり忘れてたのに、今非常にやばい!!このままじゃ……。

恐る恐るイケメンズフォーの顔を見渡すと、再び疑いの眼差しを向けられている。

――― しかし、今この疑いを解いている暇は私にはない!!

意を決して花は口を開いた。

「あの! すみません!!」

「なんだ?」

訝しげに銀髪のイケメンが問う。他の三人も更に眼差しを厳しくしているが構っていられない。

「お……」

「お？」

「お、お手洗い貸して下さい！！」

花は乙女として何かを失った瞬間だった。

6．自己紹介をしよう。

「お、お手洗い貸して下さい！！」

花がそう叫ぶと、四人の眼差しは疑いから驚愕に変わった。

――――　いや、なにも叫ばなくてもよかったよね、私。

便座に座ったまま、花は大きな溜息を吐く。

――――　しかも、トイレまでイケメンにエスコートされるなんて……ありえないくらいの恥かしさだよ。ああ、今ブラックホールがあるなら、迷わず飛び込むのに。

再び大きく溜息を吐いた。

驚いた四人の中でいち早く平静に戻ったのは、やはりというか銀髪のイケメンだった。

そして彼はニッコリ微笑むと「案内しよう」と言って、手を差し出したのだ。

魂が抜けてしまいそうな程の極上の微笑みに、漏れそうな事も忘れて――いや、むしろ別の意味で漏らしそうだったが、花はうっかり手を重ねてしまった。すると彼はもう一方の手を花の背中に添えてトイレの前までエスコートしてくれ、「どうぞ」とトイレの扉を開いてくれたのだ。

――――　ダメだ！！　やっぱり恥ずかしすぎる！！

勢いよく頭を抱えて俯いた花だったが、そもそもこんな恥ずかしい思いをすることになったのも、ホテルで面倒がって行かなかったからだ。あの時に行っておけば、そもそもこの世界には来ていなかったかもしれない。

――― いや……その場合、あのバカボンと結婚することになってたのかな……でも……あー!! もう!! なんであの時、バルコニーから落ちたの!? 私のバカ!!

「はああ……」

盛大な溜息をもう一度ついて立ち上がる。そして着物を整えていると、便器の水が流れた。

――― これって、水洗トイレ? しかも感知式……???

驚き周りをよく見てみると、水道の蛇口らしきものもある。

――― ここって、雰囲気は中世ヨーロッパの宮廷って感じだけど設備は最新式?……どういう世界なんだろう。

そう思いながら、念入りにしっかりと手を洗う。

人生初の男性と手を繋ぐという行為を一方的とはいえ、あんなバカボンによって奪われたのが、悔しく腹が立つ。

――― ま、でもさっき、銀髪イケメンと手を繋いだから人生最後ではないわ。『神様』ありがとう!

先ほどの事を思い出し、ご機嫌になった花は鼻歌交じりにスキッ

プでもしそうな勢いで、無駄に広い『お手洗い』の出口に向かい、扉を開けた。

途端――

「ぎょえっ！！」

乙女にあるまじき悲鳴を上げた。

扉を開けたすぐ外には四人の男、イケメンズフォーが立っていた。

しかも、相変わらず剣士二人は剣を構えて。

――おっ、おとひめー！！　誰か音姫プリーズ！！

もはや手遅れな、どうでもいいことを花は心の中で叫んでいた。

――し……死ぬ。私はきっとこのまま恥ずかしさで悶え死ぬ。

そんな花の羞恥に悶える内心には気づかず、銀髪のイケメンがイケメン剣士二人に剣を納めるように言う。そして、トイレの扉を開けたまま立ち尽くしている花に再び手を差し出して微笑んだ。

「とりあえず、あちらへ」

今度は微笑みに気をとられないように意識して、花はイケメンの手を取るべきか暫く逡巡した後、覚悟を決めて手を添えた。

居間にある、見るからに高級そうなソファへと歩む。

――そもそも私、どれくらいトイレに籠ってた？　考え事してたし、着物も大変だったしで、かなりの時間過ごしてたのでは……その間、ずっと待ってたのかな？

いやあああああ！！　違うんです！　大じゃないんです！！　小用だったんです！！　考え事してただけなんです～ぅぅぅ。

再び花は、心の中で悲鳴を上げたのだが。

「くっ！」

――――　わ、笑われた？

真っ赤になりながら花は、笑い声？　が聞こえた銀髪のイケメンに視線を向けたのだが、銀髪のイケメンは相変わらず優しげに微笑むだけで、他の三人も特に変わった様子もなかった。

――――　気のせい？

「どうぞ」

気がつけばソファの傍まで来ていた花は、イケメンに促されソファに腰を下ろした。銀髪のイケメンも向かいのソファへと腰を下ろす。

「ランディ、アレックス、お前たちはもうよい。ランディ、イレイザを呼んでお茶を用意するよう伝えてくれ」

「かしこまりました。失礼致します」

「失礼致します」

それぞれイケメン剣士たちは挨拶の後、一礼をして出て行った。

『神様』似の、亜麻色の髪のイケメンは銀髪イケメンの後ろに静かに立っている。

「さて、では改めて聞こうか。お前はいったい何者なのか」

そう言って銀髪イケメンは、先ほどの微笑みが嘘のような怖いくらいの眼差しで花を見つめた。

それは亜麻色のイケメンも同様だった。

ゴクリ。と花は唾を飲み込み、意を決した。

「あの……わ、私は、小泉花と言います。その……私は違う世界から来ました。なぜかはわかりませんが、気が付いたら暖炉の中にいて……信じられないと思います！　でも本当なんです！！」

「……」

イケメンは二人とも言葉を発しない。疑っているのだろう。

当然だ。花だって同じ立場なら、信じない。

それでもなんとか信じてもらわなくては、と思い言葉を探すが、上手く見つからない。焦った花だったが、そこへノックの音が響いた。

「入れ」

銀髪イケメンの返事に扉が開き「失礼します」と年配の女性が頭を下げ、カートを押しながら入って来た。

すぐ側まで来た女性はカートにのっていたポットからカップへと、紅茶らしきものを注ぎ、花の目の前のテーブルの上に置いてくれた。

銀髪イケメンが「どうぞ」といった仕草をしたので「いただきます」と一言断り、温かな湯気が出ているカップを口に含んだ。それを見届けてから、イケメンも同じようにカップを口へと運ぶ。

――― おいしい。

カップに注がれていたのは間違いなく紅茶だった。

花は温かい紅茶に癒され、知らず知らずのうちに「ほう」と小さく息を吐いていた。その様子を黙って見ていた銀髪イケメンはイレイザに声をかけた。

「イレイザ、青鹿の間を整えよ」

「……青鹿の間を、ですか？」

「ああ、そうだ」

「……かしこまりました」

そう言うと、イレイザは一礼をして部屋から出て行った。

銀髪イケメンは花がお茶を飲み干し、カップをテーブルに置くのを見届けてから口を開いた。

「まあ、そういうこともあるだろうな」

「はい？」

「そなたがこの世界の人間ではないという話だ」

「信じるんですか？」

「嘘なのか？」

その言葉に、慌てて花は否定する。

「い、いえ、嘘じゃありません！　ただ……」

「ただ？」

「いえ、自分でも突拍子もないことだと思いますので」

「確かに突拍子もないな。だが、そなたを見れば、信じざるを得ないだろう」

「私を、ですか？」

「そなたの存在自体が、突拍子もないからな」

「……私……突拍子もないですか……」

信じてもらえたのだから喜ぶべきなのだが、イケメンに存在が突拍子もないと言われたのは、些かショックだった。

「そなたのその格好も……おかしなものだが、何より、そなたには一切の魔力が感じられない。それはこのユシュタールではありえない事だ。この世界の生き物は、大なり小なり必ず、魔力を有している」

「魔力ですか……」

――――　魔力……ってことは、この世界は魔法の世界ってことなのかな？　その中で、まったく魔力がないって……いわゆるＭＰ（マジックポイント）がないって事だよね。みんなが持っているのに、私だけ０って……ＭＰどころかＨＰ（ヒットポイント）まで減りそうなくらいのダメージだわ……ホントに

私、この世界に必要なのかな？

果てしなく落ち込みそうになっていた花だが、亜麻色のイケメンがお茶を新たに注いでくれたことに気づき、お礼を口にした。

「ありがとうございます」

それに、亜麻色イケメンは優しげな笑みで答えてくれる。

――― おお！　これまた甘い笑顔だ。

落ち込みかけた花の心は急浮上する。我ながら単純だ。

お返しとばかりに、花もニッコリ微笑む。すると、亜麻色イケメンが口を開いた。

「俺の名前はレナード・ユース。レナードって呼んでほしい。ところで悪いが、もう一度名前を教えてくれないか？　さっきはよく聞き取れなかったから……」

そう言って亜麻色イケメン、もといレナードは気まずそうな顔をした。

――― やはり、イケメンはどんな顔しても様になるなぁ。気まずそうな顔さえかっこいいぞ。

「小泉花です。姓が小泉で、名前が花です」

「サアナ？」

「ハナです」

「ハァナ？」

「……はい」

どうも「ハナ」とは発音しにくいようで、「ハァナ」となってしまうようだ。

――― 欧米人によくある現象だな……そもそも今、普通に言葉が通じてる方が不思議なんだけど……ま、それはきっと『神様』のオプションかな。どうやら、文字も読めるっぽいし。

部屋の隅のキャビネットの上に無造作に置いてある、数冊の本をチラリと見てそう結論付けた。文字が読めるだけで、本の内容はタイトルを見てもさっぱりわかりそうになかったが……。

頭が良くなったわけでもなく、魔力というものも全くなく、欠陥だらけの『神の使徒』である自分に、こっそり嘆息した花だった。

7．空もとべるはず。

「ハァナ、私の名はルカシュテインファン・ヴィシュヌ・マグノリアだ」

「ハァナ」と呼ばれた途端、花は背筋がゾクリとするのを感じた。
やはり、「ハナ」ではなく「ハァナ」と聞こえるのだが、それがなんだか妙に甘ったるく色っぽい。
花は恋に興味がなかっただけで、異性に興味もあれば、イケメンを観賞するのも大好きだ。ただ、実際に観賞するだけでなく、自分の名前を呼ばれると……。
少し顔を赤くして花は、銀髪イケメンの名前を復唱する。

「ルカシュ、ルカシュ、シュテ……」

――― ごめんなさい。無理です。

早々に匙を投げた。
その様子を見て、銀髪イケメンは「ルークと呼べばよい」と、ニヤリと笑う。

――― なんか、今の意地悪っぽくない？　銀髪イケメン……もといルークはいじめっ子だな。
そもそも「ルカなんちゃら」って名前なのになぜに「ルカ」でなく「ルーク」？　ここでも欧米的な名前の略し方っていうか、愛称っていうか……。

そう思いつつも、ニッコリ笑って「ルーク？」と呼びかける。

呼ばれたルークも「ああ」と、ニッコリと笑って答える。

――― くっ!!……なんだよなんだよ、さっきから二人とも笑顔の安売りしちゃって!

惚れてまうやろ～!!……ちょっと古いか……。

花はお笑いが大好きで、密かにお笑いＤＶＤを集めていたりする。

そこへ、考え込むように黙って二人のやり取りを見ていたレナードが口を開いた。

「ハナのその服……その格好は空を飛ぶ為のものなのか?」

「!?　ぶっ!!　ッグ!!……ゲホゲホッ!　ゲホゲホゲホゲホ!!」

レナードの突飛な質問に思わず紅茶を噴き出しそうになったものの、振り袖を死守する為に堪えた花だったが。

――― く……苦しい!!　鼻と器官に紅茶が……!!

咳き込む花に、慌ててレナードが駆け寄り背中をさすってくれるのだが、咳は止まらず呼吸困難に陥り、本日二度目の死を覚悟した。

それを呆れて見ていた様子のルークだったが、小さく嘆息して何事か呟いた。

途端に花の呼吸が楽になり、咳も止まった。

――― あ……楽になった?

急に楽になり驚いた花だったが、先ほどの灰の時と同じように、ルークが何かしてくれた事に気が付き、顔をあげてお礼を述べた。

「ありがとうございます」

ニッコリ笑った花だったが、それと同時に……。

タラリ……。

鼻水が垂れた。

――― ぎゃあああああ!! 鼻水がああ!! 恥ずかしい!! 恥ずかしすぎる!!

スタッフ～!! スタッフ～!!

ここに……ここに、ブラックホールを持ってきて～!!

本日二度目のブラックホールを希望した。

もはや顔を上げる事さえできず耳まで真っ赤になって俯いていると、レナードがハンカチを差し出してくれた。

「……ありがとうございます」

――― ううん。贅沢言えば、ティッシュがほしい。人様のハンカチで鼻水ふけるほど図太くないんです。ああ、ハンカチ一枚も持ってない女って思われてる、絶対。違うのに……荷物はあの……バカボンのせいで!! ホテルの部屋に置きっぱなしになったんです。

それよりも今、いったいどんな顔なんだ、私は。鼻水もさることながら、涙もでちゃって……化粧グチャグチャだろうな……ああ……こんな超絶美形の前に晒す顔じゃないです、ホント……。

しかし、いつまでもウジウジと俯いているわけにもいかず、勇気を振り絞り……というか、やけくそで顔を上げ、レナードの質問に

ようやく答えた。

「残念ながら、これはただの民族衣装です。私の国の。だから空は飛びません」

――というか、飛べません。まあ、確かにこの振り袖とか羽ばたきそうだよね……頑張れば飛べるかもしれない。いやいや、飛べないって。それはもう今日、身をもって実証したではないですか。あそこで飛べていれば、こうして今、恥をかく事もなかったのに……。

無意味なことを考え始めた花はレナードの声で現実に引き戻された。

「そうか、いや……てっきりその格好は飛ぶ為のものなのかと……」

また気まずそうに顔を顰め、レナードは頭をかいた。

――可愛いじゃないか、このヤロー……って……。

「あの……お二人はまさか飛べたりとか……するんですか？」

恐る恐る、まさかね……という気持ちを込めて尋ねた花だったのだが。

「ああ」

あっさり二人に肯定されてしまった。

――飛べるんかい！

あまりの衝撃に言葉も出なかった。

――― 空まで飛べるって、この人たち……。なんか、私すごくこの世界で役立たずな気がするんですけど。本当に私なんかが必要だったんですか？

答えのない問いを『神様』に向けてぶつけ、本日二度目となる自身の必要性に疑問を抱いていた。

花はこの世界の人たちはみんな空を飛べると勘違いしていたが、実際は自由に空を飛ぶことができるのは、帝国でも数人しかいない。だが、それを知るのはもう少し先である。

「ハナ」

ひとしきり落ち込んだ花だったが、ルークの声にハッと顔を上げた。

気がつけば、いつの間にかイレイザが控えていた。

「今日はもう遅い。まだ、そなたには聞きたい事があるが、それは明日以降にしよう。部屋を用意させたので、今日はもう休むがいい」

ルークはそう言うと、イレイザに花を案内するように申し付けた。

「あ……ありがとうございます。それではお言葉に甘えさせて頂きます」

疲れきっていた花はルークの好意をありがたく受けることにし、深々と頭を下げた。そして「失礼します」と言って、扉の側で待っていたイレイザに向かい、部屋を出て行った。

それを黙って見送っていたレナードは、厳しい顔つきでルークに向き直った。

「どういうつもりだ？」

「何が？」

「何がじゃねえよ！　お前のあの態度だよ！！　見ていて、鳥肌がたったぞ！？　終いにゃ、気持ち悪くて吐き気までしてきたっつうの！！」

「お前、それは病気だ。医者に診てもらえ」

「ふざけんなよ！！……ルーク……お前、あの子をどうするつもりだ！？」

「……」

「お前、あの子の心を読んだんだろう？彼女の言ってた……違う世界から来たとかいうのは本当なのか？」

「さあ……それはわからんな。別に俺は心が読めるわけじゃない。触れれば、その者の考えていることがわかるだけだからな。あの娘が何のつもりでここに来たのかは知らん」

「だったら尚更、どういうつもりなんだ？」

「別にすぐ切り捨ててもよかったんだがな……面白そうじゃないか。あの娘が何者かはわからんが、変わった娘だというのは確かだ。きっと色々と楽しませてくれるだろう」

「ルーク……」

次の言葉を継げなかったレナードを無視して、ルークは立ち上がり寝室へと向かった。

「お前ももう休め。明日から当分、賑やかになるだろうからな」

笑いを含んだ声で、ルークは告げると寝室の扉を閉めた。

レナードは大きく溜息をつき、部屋を後にしたのだった。

7．空もとべるはず。（後書き）

ユシュタールの人たちは「ハナ」を「ハァナ」と発音しますが、表記は「ハナ」で統一します。

8．甘い話には罠がある。

「ふあああぁぁぁ……ああ！？」

朝、目覚めた花はいつも通りベッドの中で大きく伸びをしたのだが、自分が寝ている場所に見覚えがない事に気が付いて驚愕した。

――― どっ、何処、ここ！？　何？　この豪華なベッド……まさか、これが噂の異世界トリップというやつ！？

天蓋付きの五，六人は眠れそうなベッドの上に飛び起き、花は辺りを見回した。

――― いや、異世界トリップは昨日済ませたんだった……。

徐々に思考回路も動き出し、昨日の出来事を思い出した。

バカボンに迫られバルコニーから転落して『神様』に助けられ、イケメンズフォーに出会って、この部屋に泊めさせてもらうことになったんだ……そうそう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

昨晩、ルークたちの居た部屋を出た後、イレイザに案内されて連れてこられた部屋を見て、花は驚愕した。お見合い相手の桜庭から逃げ出した部屋、あのホテルの部屋にも全く劣らない豪奢な部屋だったからだ。

出入り口となる青い鹿が描かれた両開きの扉を開けると、落ちつきはあるが明らかに高級と思われる家具が据えられた居間、そして

それに続く寝室、バスルーム、それと……衣裳部屋？他にも小さな部屋がいくつか……とにかく、花が泊るには気が引けてしまうような部屋だった。

「あの……本当にここに泊っていいんでしょうか？」

花は間違いじゃないかと思い、イレイザに声をかけた。

「はい。陛下のお申し付けですので」

イレイザは単調な声で返答する。

「陛下……陛下とは、ルークの事ですか？」

――そういえば金髪剣士も、ルークの事を『陛下』と呼んでいたな。

「そ、そのようにお呼びすることは私には出来ませんが……確かに、その通りでございます」

今までの、どこか冷たいとも取れる感情を見せないイレイザの言動に、初めて動揺が見られた。

――やっぱりそうか。偉い人なんだろうとは思ったけど……『陛下』って、たぶん国で一番偉い人に対する呼び方なんじゃないだろうか？

それ以上は許容範囲を超えそうなので、花は考える事をやめた。

――まあ、いいや。今日はもう疲れたし、難しい事は明日に

しよう。

そうして、イレイザが下がった後、帯を解き振り袖を脱いで、長襦袢でベッドに入り、あっという間に寝入ったのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

これからどうしたもんか……と考えていたら、寝室の扉がノックされた。

「はい？」

花の返事に扉が開き、イレイザが入って来て一礼した。

「おはようございます。陛下よりお召物が届いておりますので、お支度を手伝わせて下さいませ」

花にはイレイザの言葉の意味がわからなかった。

いや、言葉自体は理解できるのだが、内容が理解できない。

「……お召物？」

「はい。何点か届いておりますので、ご覧になられますか？」

そう言ってイレイザは居間への扉を大きく開ける。

すると、その扉の向こう、花の視界に入って来たのは色とりどりのドレスだった。その他にも小物等が並んでいる。

――― クラクラする……甘い……甘すぎるよ、ルーク……。

痛む頭を押さえながら花は呻いた。

花は楽観主義者ではない。

面倒くさがりな為、「まあ、いいか」で済ますことは多いが、現実というものはわかっているつもりだ。

要するに『うまい話には裏がある』『甘い言葉には罠がある』これらの言葉を十分に理解している。

――― いったい、ルークは私をどうするつもりなんだろう？

そうこう考えているうちに、イレイザに「湯浴みの用意が出来ました」と告げられ、あれよあれよと言う間にひん剥かれ、お風呂に浸けられ、体を洗われ、気がつけば、髪も結われ、朝食の席についていた。

朝食を食べているとノックの音が響き、イレイザが応対した後に扉が開かれた。

部屋に入って来たのは、おそろいの服を着た若い女の子二人、昨晩のイケメン剣士と同じような、しかし少し色の違った服の若い男性が二人、この二人は帯剣しているので、やはり剣士らしい。そして四人よりは少し年上の、ウェーブがかったこげ茶色の髪の全体的に柔らかい空気を纏った男性だった。

五人はそのまま花の傍まで来ると、深々とお時儀をし、年長者と思わしき焦げ茶の髪の男が少し前へ進み出て来た。

「ハナ様、お初お目に掛かります。私、この宮廷で侍従長を務めております、ジャスティン・カルヴァと申します。どうぞ、お見知りおきを」

そう言って、更に深くお時儀をした後、顔を上げた。
温和な雰囲気の中に、知性と鋭さを湛えた紺碧の瞳は真っ直ぐに花の瞳を射抜いた。

――― うわっ！　この人もまた、すごいイケメンだ。他の四人も美男美女だし……ここはイケメン王国ですか？

「いえ、マグノリア帝国です」

「え！？」

心のぼやきに返事が返ってきて、慌てて花は声の主、ジャスティンを見返した。

「あの……カルヴァさん、ひょっとして私、声出してました？」

「はい」

笑顔で肯定され、花は真っ赤になった。

――― 恥ずかしい、バカだ私……。

赤面する花に、ジャスティンは話を続けた。

「ハナ様、どうか私の事はジャスティンとお呼び下さい」

「えっ？　あ、はい」

ジャスティンはハナの返事にニコリと微笑み頷く。

「それでは、この者たちを紹介致します。セレナ、エレーン、前へ」

その声に若い女の子二人が前へ進み出る。

「この者達は今日より、ハナ様付きの侍女となります、セレナとエレーンです」

ジャスティンの紹介と共に、二人は頭を下げる。

「ハナ様、セレナと申します。これからどうぞよろしくお願い致します」

赤い髪の娘が挨拶した後、少し薄い茶色の髪の娘もそれに続く。

「エレーンと申します。ハナ様にお仕えでき、大変光栄でございます。どうぞ何なりとお申し付け下さい」

侍女二人の挨拶が終わると、入れ替わるように剣士二人が前へ進み出て花の足元に跪く。

「この者達は、ハナ様の護衛を務めます、ジョシュとカイルです」

二人の剣士は顔を下げたまま、挨拶をした。

「ジョシュ・ダグラスと申します」

灰色がかった黒髪の若者が先に挨拶を述べる。

「カイル・ハートと申します」

少し茶色がかった金髪の若者が挨拶を終えると、二人はそのまま後ろへ数歩下がり、立ちあがると扉まで移動し、直立した。
そうした四人の挨拶の間、花はただポカンとしていたが、ハッと我に返り、ジャスティンに問いかける。

「あの……これはいったい……？」

「ハナ様がご不自由を感じられないようにとの、陛下のご配慮です。それでは、私はこれにて失礼致します。何かございましたら、この者たちにお申し付け下さい」

そうしてジャスティンは一礼して、扉へと向かった。

「あの、待って下さい！」

それに慌てて花は声をかける。

「何でしょうか？」

その場で振り向き、ジャスティンは答えた。

「あの、ル……陛下にお会いしたいんですが」

「陛下でしたら朝議が終わり次第、こちらにお見えになるそうですので、もうしばらくお待ちください」

そう言って、ジャスティンは部屋を出て行ってしまった。

――― 恐ろしい……私はいったい何に関わってしまっているのだろう。この甘い罠から抜けだせる気がしない。

花はどんどん追い詰められてしまっている気がしたのだった。

9．事後承諾ですか。

「本日の議題はこれにて終了です」

朝議の終了を告げる、議長である宰相の凛とした声が謁見の間に響き渡った。

だが、会議の場に和やかな空気は漂わず、むしろ緊張が高まっているようであった。

「へ……陛下」

震える声をなんとか抑えながら、内大臣であるドイルが声を上げた。

謁見の間にはピリピリとした空気が漂う。

その中でただ一人、和やかに微笑んでいる者がいる。それは、謁見の間の最奥に座す、マグノリア帝国皇帝その人だった。

「なんだ？」

ルークの深く艶のある声がその場に響く。

「お、恐れながら……陛下にお伺いしたい事が……」

ルークの微笑みにもまったく緊張を解く事もなく、ドイルは続けた。

「なんだ？申してみよ」

「今朝早く、後宮に仕えるものから伝え聞いたのですが……昨晩、青鹿の間に姫君を迎えられたと……」

「ああ、そのことか……ずいぶん情報が早いな」

そう言ってルークは更に笑みを深くするのだが、近衛隊長であるレナード、宰相のディアン以外のその場にいる殆どの者達が、皆一様に青ざめた。

「そ、それはその……たまたま……」

ドイルは真っ青というより真っ白な顔をして、しどろもどろに言葉を重ねる。それでも意を決して言葉を継ぐ。

「その……青鹿の間に迎えられた姫君は、いったいどちらの姫君なのでしょうか？」

発言しているのはドイルだが、それはこの場にいるすべての臣下たちの問いでもあった。

要するに誰の息が係っているのか、それを皆は知りたいのだ。

「そのほうらが知る必要はない」

キッパリ言い切ったルークに、ドイルは力なく俯いた。

しかし、それを継いだ形で外大臣のコーブが青ざめながらも発言する。

「恐れながら、陛下……青鹿の間は、ご正妃様のお部屋となる白凰の間に次いで、位の高いお妃様に与えられるものです。僭越な事と存じておりますが、何卒、その姫君のご素性をお教え頂きたく……」

――――　まあ、正論だな。

ルークの後ろに控え、事の成り行きを見守っていたレナードはチラリとルークを窺った。ルークがこの状況を楽しんでいるのは間違いない。

「名は『ハナ』と申す。愛らしい娘だ。まだここには慣れておらぬ故、皆に迷惑をかけるやもしれぬが、許してやって欲しい」

そう言うとルークは立ち上がった。有無を言わさないその態度に皆はそれ以上の追求を諦めた。

それからルークは宰相のディアンに声をかけた。

「ディアン、私はこれから後宮に向かう。何かあれば青鹿の間に伝えよ」

何食わぬ顔でルークはそう告げると、謁見の間を後にした。ルークが立ち去った後の謁見の間は嵐のような騒ぎになった。

『遂に、皇帝陛下の寵愛を得る娘が現れた！』

この驚くべき知らせは、瞬く間に宮廷を駆け巡った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

花が三杯目の紅茶を飲んでいる所に、青鹿の扉がノックされた。扉の内側に立っていたジョシュが対応している。

カイルは扉の外側に立っているらしく、イレイザはセレナとエレーンに簡単に引継ぎをすると、さっさと出て行ってしまったので、今、部屋の中にいるのは花を含めて四人だった。

しかし、花はどうすればいいかわからず気まずい沈黙が続いていたので、ただひたすら黙って紅茶を飲むしかなかった。

「皇帝陛下のお越しです」

ジョシュが緊張した面持ちで告げ、扉を開く。

入って来たルークに花は立ち上がり、貴婦人らしく挨拶をした。

「おはようございます、陛下。レナード」

その姿に、ルークとレナードは驚いたように立ち止った。

一応、旧華族の出身である花は、いわゆる上流階級の人間との付き合いを好む父親の意向により、一通りの礼儀作法を徹底的に仕込まれている。

「ああ、おはよう、ハナ。昨晩はよく眠れたか？」

気を取り直したルークが形通りの挨拶を返す。

「ええ、ぐっすりと。ありがとうございます」

そう答えた後に、ふと自分がこの部屋の女主人あることに気付き、ソファへと二人を勧める。ソファに腰を落ち着けたルークと、相変わらずルークの後ろに立つレナードの方へ向き「お茶でよろしいでしょうか？」と問い、肯定をもらうと控えていたセレナにお茶の用意をお願いする。

ここまでは完璧なはず。

花の実家には住み込みの家政婦と通いの家政婦がいて、その二人に対する母の態度を真似てみたのだった。
緊張した様子のセレナがお茶を淹れてくれ、それをルークに勧め、花は四杯目となるお茶の入ったカップを形ばかり口に付ける。
少し落ち着いたところで話を始めた。

「陛下、このような素敵なお部屋をご用意下さり、ありがとうございます。それにこのドレスも」

その言葉にルークは頷き、「よく似合っている」と褒めた。

「ところで……」

花はどう切り出そうか迷い言葉に詰まったが、率直に疑問をぶつけることにした。

「このようにして下さるのはなぜでしょうか？」

「なぜとは？」

「理由を教えて下さい」

「理由が必要か？」

「はい」

「そうか……」

ルークは一旦言葉を切ると、控えていたセレナとエレーンの方に言葉を向けた。

「お前たち、少し席をはずせ。ああ、お前もだ」

そう言ってジョシュにも声をかける。三人が一礼をして退室し、三人だけになったのを見届けて、ルークは再び口を開いた。

「さて、贈り物の理由だったな？」

「この部屋の事も含めて」

「ただの好意とは思わないか？」

「思いません」

「なぜ？」

「なぜでもです」

「そなたは一目惚れを信じないか？」

「信じません」

キッパリ言いきる花に、ルークはフッと笑う。

「随分、はっきり言い切るんだな」

「いえ……他の方の事はわかりません。でも、ルークがそのように愚かだとは思いません」

「一目惚れが愚かな事か？」

「それが、このような行動に移すとしたら、愚かです」

「なるほど」

ルークはニヤリと笑う。

「ルーク、正直に答えて下さい。あなたは私に何を求めているのですか？」

花の言葉にルークもレナードも正直驚いていた。

――この娘はずいぶん頭が働く……小賢しいだけか、それとも……。

しばしの沈黙の後、ルークは口を開いた。

「そなたは私の側室となった」

9．事後承諾ですか。（後書き）

10．既成事実はいりません。

「そなたは私の側室となった」

「はい？」

何となく、そんな気はしていたけれど……やはり、ルークの口からはっきりと聞くと、驚いてしまった。

――― 何で!?　何で私を側室に？　どう見ても、女に不自由はしていないよね？　さっぱりわからない。

自慢じゃないが、花の容姿は十人並みだ（本当に自慢じゃない）。自分の容姿で誇れる所と言えば、腰までのサラサラな真っ直ぐの黒髪と肌の色が白いくらいで、色白で七難隠して十人並みというわけだ。

驚いて固まっている花を見て、満足そうに笑ったルークだった。

「側室と言っても、本当の側室を望んでいるわけではないから安心しろ。まあ、抱いてほしいと言うなら、抱いてやるが？」

「結構です!!」

驚きから立ち直った花は、続いたルークの言葉をキッパリと拒絶した。

それにまた、楽しそうにルークは笑う。

――― くそ!　人をからかって楽しんでる!!　やっぱりいじ

めっ子だ！

……まあ、元々バカボンとも目を瞑ってするつもりだったから、やれと言われれば出来ますよ？

というか、寧ろ目を開けていたい！　この超絶美系のあんな姿や、あんな顔を見てみたい！！　でもそれは、ただの好奇心なだけだから。

やっぱり乙女としては愛する人としたいんです。あのバカボンにだって、きっと何らかの愛情を持てるだろうと思ってたからだし。何らかの愛情をね……無理だったけど。

「まあ、表向きだけとは言え、私の側室になるからには色々と苦労をすると思う。これらは、それに対する対価だと思ってくれ」

そう言って、ルークはドレスや部屋を手のひらで指し示す。

――――対価ねえ……。

「ここは後宮の中ということですよね？」

「ああ」

「では、私はこれから、他の皆様方とのドロドロ泥仕合をしなければならないんですね？」

ニッコリ微笑んで、花は言ったが。

「いや、その必要はない。ここには、そなた以外の妃はいないからな」

その言葉に花は目をむく。

――ええ!?　こんな美形の皇帝に一人もお妃様がいないの？……それって、まさか……。

「いや……別に私は不能でもなければ、男色家でもない」

「え？　何で私の考えてた事がわかるんですか!?」

「考えてたんだな」

「う」と言葉に詰まった花に、ルークは嘆息して続けた。

「私は人に触れられるのが好きではない。特に女に触れられると虫唾が走る」

――そ……そこまで言うか。でもまあ……。

「要するに、周りに牽制するためなんですね？」

「ああ」

そこまで聞いて花は次の質問をするか、少し躊躇した。あれだけ飲んだのに喉が渇き、紅茶を口に含む。

そうして勇気を出すと続けた。

「で、私は命を狙われる可能性があるんですね？」

その言葉に二人は驚嘆した。

花に護衛をつけたのは、もちろんその可能性が十分に考えられるからだ。だが、本人に指摘されるとは思いもよらなかった。

「念の為だ」

「念のため……」

花は考え込むように呟く。

「私の護衛をして下さるのは、ジョシュとカイルの二人だけですか？」

「……怖いか？」

護衛を増やして欲しいとの発言だろうかと、ルークは訊いた。

「いえ……いえ、それはやっぱり怖いですけど。ただ、命を狙われるかも知れない私の護衛となると、一日中ずっと付かなければいけないですよね？　それなのに二人だけというのは、彼らの負担が大きいんじゃないですか？」

かなり的を射た質問には、今までずっと黙っていたレナードが答えた。

「もちろん、二人だけだと到底無理だ。ただ、急な事だったので、身辺のしっかりしている者を選ぶ時間がなくてな。とりあえず、あの二人は間違いないので騎士団から急遽選出したんだ。もちろん、セレナとエレーンについても保証はできるから安心してくれていい。」

――――　騎士団……あの二人は騎士なんだ。と、言うことは昨日の二人も騎士か……おお！　なんだか、かっこいいなぁ。もちろん

剣士っていう響きもワイルドでいいけどね。でも騎士って言うと、高潔な感じでいいな。

「これから早急に選出するから、問題はないよ」

花はまったくどうでもいい事を考えてしまっていたが、続くレナードの言葉に我に返る。

「お手数をおかけ致します」

そう言って頭を下げた花に、レナードは苦笑する。

「いや……寧ろ、こちらの都合で、危険に晒してしまう事を謝らなければならない。すまない。ルーク、お前も謝れ」

しかし、ルークはレナードの言葉を無視して話を戻した。

「実際、そなたに護衛が付くのは昼間だけだから……六人もいれば十分だろう」

「えっ？　昼間だけですか？」

――――　普通、夜の方が危険じゃないのかな？

紅茶で喉を潤しながら、考えた花だったが、その疑問にルークはニヤリと笑って答えた。

「夜は私と寝るのだから、必要ない」

ブフッー！！

花は口に含んだ紅茶を、今度は盛大に吹き出した。……目の前に座る、ルークに向かって。

11．楽器演奏は貴族の嗜み。

「お前な……」

殺気漂うルークに、花は慌てて謝った。

「す、すみません！！」

急いで何か拭く物を、と立ち上がりかけたが、それをルークは「いい」と手で制した。

そして何事か呟くと、ルークの髪や顔に散った紅茶の滴や、上品だが豪勢な衣服に染み込んだシミがフワッと浮いて、パッと消えた――ように見えた。

あまりにも一瞬の出来事だったので錯覚かとも思ったが、実際、ルークには吹き付けてしまった紅茶の一滴もなくなっていた。

「あの……今のは魔法……ですか？」

「そう、ごく簡単な浄化の魔法だよ。まあ、俺たちが使うことは滅多にないけどね」

花の質問に答えたのはレナードだった。

「その滅多に使わない魔法を、ここ数時間で三度も使ったがな」

「す、すみません」

ルークの嫌味に花は謝るしかなかった。

そんな花に、ルークは小さく嘆息して先ほどの話題に触れた。

「側室を娶ったところで、通わなければ牽制になりもしないだろう」

「……それもそうですよね……じゃあ、私は寝室にある長椅子で寝ますね」

その言葉はすぐに否定された。

「それはダメだ」

「なぜですか？　女の人に触れられるの嫌だって言ってたじゃないですか！？」

「――確かに、触れられるのは好きではない。しかし、嫌悪するのは一部の女に対してだ。それ以外は我慢できない事もない。それに先ほども言ったが、私は不能ではない。それなりの生理的欲求を処理するためには女を抱くこともある」

――――　そこまで聞いてない！！　というか、処理って言うな！　処理って！！

花は動揺が顔に出ないように必死で我慢した。今、動揺を見せたら負けだ！！

「では、私と寝る場合にその……生理的欲求が起こったらどうするんですか？」

「……」

「なんですか？　その、残念な子を見るような目は？」

二人のやり取りに、レナードは俯き肩を震わせている。

ルークは大きく溜息をついた後、話を続けた。

「とにかく、別々に寝れば侍女たちはすぐに気付く。そしてその事に疑問を持たないわけがない。それが外に漏れる危険はできるだけ避けたい。それに……」

ルークの言葉は途中で途切れたが、続く様子はなかった。

確かにルークの言う通りだろう。まあ、あれだけ広いベッドなら十分、離れて寝ることも出来る。

「……わかりました」

そう答えたものの、花の声は沈んでいた。すると気遣ってくれたのか、レナードが励ますように言った。

「まあ、一番狙われやすい危険のある夜は、ルークと一緒にいることが一番安全を保障できる。何せルークはこのマグノリアだけでなく、ユシュタールで一番強い魔力の持ち主だ。暗殺者が十や二十、束になっても敵いやしないからな」

間違いが起こることはやはり全く心配していないのか、しっかり安全を保障されてしまったが、年頃の女としては微妙な気持ちになる。

乙女心は複雑だ。

――――　ん？　ユシュタールで一番魔力が強いって……ひょっと

して、ユシュタールの崩壊を防ぐために、一番頑張ってるのかな？
確か、『神様』は一番癒しが必要な子の所に送るって言ってたし……でも「子」って……『神様』にとってはルークも子供なのか……。

今更ながら『神様』の使命を思い出した花だったが、どうすればいいのかわからない。
ひとまずは『神様』について聞いてみることにした。

「あの……お二人は『神様』を信じていますか？」

なんだか、怪しい宗教家のような言い様になってしまった。
しかし、そんなことは問題ではなかった。
今までの和やかと言ってもいい雰囲気から、突然、空気が変わってしまったのだ。
どこか冷めたい、ひやりとした空気に。

「『神様』って、創造神ユシュタルのこと？」

レナードの声は硬い。

「ハナは神を信じているのか？」

レナードの問いに答える間もなく、ルークの酷く冷たい声がした。

「信じているっていうか……」

花には上手く答えられなかった。ただ自分の質問が、間違いだった事に気付く。
急に変わってしまったこの場の空気に困惑する。

「ハナは違う世界から来たんだろう？　その世界に神はいるのか？　神を信じているのか？　お前は、お前が存在した世界から弾き出されてしまったんじゃないのか？　それでも信じるのか？」

そう言って微笑むルークに、花は青ざめる。

問われた言葉にではない、それを問うたルークの様子がまるで狂気を孕んでいるようだったからだ。

――――　ルークは……『神様』に絶望している？

花は悟ってしまった。

ルークの深い『絶望』を。

そのことに、どうしようもなく悲しくなる。

「ルーク、言い過ぎだ」

レナードは、そう窘めながらも苦い顔をしている。

普段、上手く隠しているルークの苦しみをレナードは知っていた。

知っていながらも何も出来ない。そんな自分に腹を立ててさえいる。

レナードの言葉に、暴走しそうな怒りを抑え、ルークは大きく息を吐いた。

――――　この娘に当たるのは間違っている。

蒼白になっている花の顔を見て、ルークは後悔した。

「すまない」

囁くようなルークの謝罪の言葉に花は首を振って応えることしかできなかった。
ルークは絶望しているのだ。神に、世界に、そして自分自身に。

――― 癒してあげたい。

崩壊を防ぐ事も、ユシュタールを救うこともできないが、癒しの才能があるというのなら、せめて、ルークの心を癒してあげたい。
昨晩、出会ったばかりのルークに、なぜこれほどまでの想いを抱くのかはわからない。
それが『神の使徒』である故か。

『癒してあげて欲しい』

軽い調子で『神様』は言っていたが、ルールに縛られて動けない『神様』の切実な思いは伝わってきていた。
その事を本当は二人に伝えたかった。
しかし、まだその時ではないことを花は理解していた。

――― 私は私の使命を果たそう。

それが、拾ってくれた『神様』へのお礼になる。
花はそう決意した。

「あの……ここにピアノはありますか？」

「ピアノ？」

花の急な問いに、意表を突かれたような二人の驚きが伝わって来た。

それによって、先ほどまで張りつめた空気が弛む。

「あの……ピアノです。楽器の」

「楽器？　ピアノというのは楽器なのか？」

――　あれ？　ピアノが通じない？

「ええ……鍵盤が並んだ……鍵盤を押せば音がなる楽器です。」

「鍵盤？」

二人の反応に花は心底驚愕した。

――　ちょっ、ちょ、ちょっと待って！！　ピアノがないとか言わないよね？　鍵盤が何かもわかってない様子だけど……ええ！？

「あの……ここにはどんな楽器があるんですか？」

「楽器って……ここにあったか？」

「ええ！？」

レナードの言葉に花は驚く。

「楽器か……持っているのは、街の楽師くらいだと思うが……」

「えええ！？」

ルークの言葉に更に驚く。

「あの……皆さんは、楽器を演奏したりしないんですか？」

――――　楽器演奏は貴族の嗜（たしな）みだよね？

「何のために？」

「え？……えええええ！！？」

魔法よりも何よりも、ここが異世界だと言うことを花が一番に痛感した瞬間だった。

12．面会謝絶です。

――― ピアノどころか、楽器がないなんて……。

驚愕の事実に、花はしばらく呆然としてしまった。

――― うおいっ！　話が違うっつうの！！　責任者呼べー！！

心の中で叫んでも責任者がでてくるわけではないのだが、叫ばずにはいられない。

真っ青になって黙りこむ花を心配して、レナードが声をかけた。

「ハナ、顔が真っ青だが、大丈夫か？」

「……はい……ちょっと驚いただけです。大丈夫です」

力のない声で、花は返事をした。

そんな花の様子を見ていたルークが提案した。

「ハナ、楽器がほしいのか？　なら一度、楽師たちを招いてやる。その後、手に入るように手配してやろう」

その言葉に花は驚く。

「本当ですか？」

「ああ。まあ、すぐにとはいかないが。近いうちに呼び寄せよう」

――ルーク……優しいところもあるんだ。例え裏があるとしても、背に腹は代えられない。ここは恩を買ってあげよう。

何気に失礼な事を思いながら、花はお礼を言った。

「ルーク、ありがとうございます」

「寵姫の願いを叶えてやるのは、皇帝として当然だ」

そう言ってニヤリと笑う。

――やっぱり裏があったか……。

そう思いながらも意地の悪いルークに戻ったことに、花は安堵していた。

「ルーク、そろそろ……」

「ああ、そうだな」

レナードの言葉にルークが頷き、立ち上がる。

「では、ハナ、私は執務に戻る。だが、今宵は早めに来るので食事を共にしよう」

そう言って出口へと向かう。

「え？　もう？」

聞きたいことはまだまだあり、思わず本心から言葉を洩らしてし

まった。
それに再びルークがニヤリと笑う。
――――うわっ！！　なんか屈辱。
悔しがる花だったが、ルークの次の言葉に驚く。
「わかっているとは思うが、部屋を出る時は必ず護衛を連れるように。あと、王宮を見て回りたければ、ジャスティンに案内を頼めばいい。ジャスティンにはもう会ったな？」
「はい……？　後宮から出ていいんですか？」
「当然だろう？　別に私は、そなたを閉じ込めておくつもりはない」
この国の後宮は、日本の大奥とは違うらしい。
「それから、恐らくこの後、次々と面会の申し込みが舞い込むだろうが、嫌なら断ってかまわない。まあ、王宮をまわっていてもきっと次々と声は掛けられるだろうが、それはジャスティンが上手く対処するから、案ずる必要はない」
「面会の申し込みって……どなたから？」
「大臣や貴族や……まあ、腐った連中だ」
「ああ……なるほど」
「――まあ、そなたなら、上手く遇（あしら）いそうだがな」

そう言ってルークは出て行ってしまった。
レナードが「すまない」といった風に苦笑してルークに続く。
それに入れ替わり、セレナとエレーン、ジョシュの三人が戻って来た。

――― さて、これから、どれほどの醜い権力争いになるのか……。

花は深く溜息を吐いた。
正直、面倒くさい。
今まで、猫をかぶっていい子ちゃんでいたのも、できるだけ煩わしい人間関係を避けるためだったのに、面倒事に巻き込んでくれたルークに腹が立つが、しょうがない。
花には、この世界に他に行く当てなどないのだから。ルークの元を飛び出しても、野垂れ死ぬのが落ちだ。生きる為に、体を売らなければならないかもしれない。それを考えれば、ここに置いてくれるだけでも感謝しなければならない。例え利用されても。

――― まあ、いっか。

花の座右の銘は「川の流れのように」だ。流れに身を任せてしまえばいい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

セレナとエレーンが用意してくれた昼食を食べ終わった頃、青鹿の扉が叩かれた。
どうやら早速、面会の申し込みらしい。

ここの後宮は、妃の出入りも自由な上に、皇帝以外の男性が出入りする事も許されている。大奥とは大違いだ。

花は少し考え、面会を断るように申しつけた。「これから、王宮を見てまわりたいので」との理由をつけて。

ひとまずジャスティンの対応を見てから、花も対応を考えようと思ったのだ。そうして、ジャスティンが迎えに来るわずかな時間にも、何人もの面会の申し込みを断ることになったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

先ほど『王宮見学ツアー』から帰って来たところだったのだが、花は腹を立てていた。

ジャスティンの案内で王宮をまわっていると、出てくる出てくる、偶然を装って大臣やら貴族やらがワラワラ、ワラワラ色々な角から湧いてくる。

そして、皆一様に驚いた振りをする。

「おや、初めてお目にかかりますな。いったいどちらの姫君でしょうか？」

「このような美しい姫君にお会い出来るなんて光栄です。是非、お名前をお聞かせ下さい」

とか、なんとか。それにジャスティンが、一様に答える。

「こちらは昨日、『青鹿の間』に入られた、ハナ様でございます」

それに続く形で花は完璧な淑女の仕草で挨拶をする。

「花と申します。よろしくお願い致します」

そして、ニッコリ。それ以上は口を開きません。

「どちらから、いらしたのですか？」

「お父君はどなたですか？」

とにかく花の素性が知りたくてしょうがないらしい。

それに花は「ふふふ」と笑って答えるだけ。そうしてる間に、適当にジャスティンが遇ってくれる。

だが恐るべし、貴族の情報網。

いつの間にやら花が素性を明かさないことが回ったらしく、『素性を明かさない＝明かせない』と解釈したらしい。要するに、身分が低い――あの人たちの言うところの『下賤の身』と思ったようだ。

そうして、段々と「偶然に」出会う人たちの態度が変わって来た。

初対面のはずなのに、花に対する態度に明らかに侮蔑が含まれるようになってきたのだ。

それも態度だけではなく、言葉にもそれが表れるようになった。

「いったいどのようにして陛下を誑かしたのか……」

「下賤の身であさましい」

等など。ジャスティンには聞こえないように、すれ違いざまに投げかけてくる。

正直に言えば、「馬鹿らしい」の一言に尽きる。

しかし、花が腹を立てているのはそんなことではない。

国の中枢にいるあの人たちが、自分の出世と保身にばかり力を注いでいるのが見えてしまったからだ。

今、ユシュタールは崩壊の危機にあるというのに。

ルークが気の毒でならなかった。

それでも、そんな愚かな人ばかりではない、と思いたい。

先ほど、本当に偶然に出会ったらしい人。政務長官のセインは真っ直ぐに花を見つめ、言葉を紡いだ。

「陛下がご側室をお迎えになられ、非常に嬉しく思います。これで少しでも陛下の愁いが晴れればと願うばかりです。ハナ様、どうか陛下を癒して差し上げて下さい」

この言葉には、花も真摯に頷いたのだった。

13．時間管理は正確に。

「陛下のお越しです」

ジョシュの声に、花は立ち上がってルークを迎えた。カイルと入って来たルークはジョシュに声をかける。

「ジョシュと言ったか……ここはもうよいので下がれ。ご苦労だった」

その言葉にジョシュは深々と頭を下げ、花に向き直る。

「ハナ様、失礼致します」

するとカイルも続けて挨拶をする。

「ハナ様、私もこれで失礼致します」

ハナは二人に微笑んで応えた。

「ジョシュ、カイル、今日はありがとう。またよろしくお願いします」

その言葉に二人はもう一度頭を下げ、出て行った。

花の貴婦人ぶりもなかなか様になってきた。「お母様のように、お母様のように……」と呪文のように唱えながら応対しているのだ。

ルークは先程のカッチリした服装とは違い、少しゆったりとした

物を纏っていた。
食事が用意されたテーブルに勧めながら、花はルークをコッソリ観察する。

――― くそー。美形は何着ても似合うな。かっこいいぞ、コノヤロー!! それに比べて私は……。

花は小さく息を吐いて、夕刻の事を思い出した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

花はセレナに紙とペンを用意してもらい書き物をしていた。ペンはインク式のものだが、慣れてしまえば大したことではない。
頭の中の『生まれた事を後悔させてやるリスト』が、今回一杯になった為、新たに『生まれた事を後悔させてやるリスト～ユシュタール版』を手書きで作成することにしたのだ。
書き出すのは、もちろん日本語で。
花は人の顔を覚えるのは得意である。ただ、名前を覚えるのは苦手であった。
その為、リストには『チビのチョビ髭侯爵』『金髪のハンプティ・ダンプティ大臣』など、花なりの名前が記されていく。
そうこうしているうちに夕の刻になり、セレナに「ハナ様、そろそろご準備を」と声をかけられた。

ちなみに、ユシュタールでは一日の時間は、地球と同じ二十四時間であるようだ。それは、花が腕時計をしていた為わかった事だが、少し違うのは時間区分が大雑把なことだ。
基本一日は、四時～十時を『朝の刻』、十時～十六時を『昼の刻』

、十六時～二十二時を『夕の刻』、二十二時～四時を『夜の刻』と言い、四つに区分されるらしい。

ただこれは、一刻に六時間もあるので、さすがにもう少し細かい区分がある。それが『歩』と言い、『一歩』が二時間、更に細かい区分は『分』と言って、地球と同じようだが、『一分』が三十分になる。それ以下の細かい区分はない。

なので、地球時間で言う『十九時三十五分四十秒』をユシュタールで表現すると、『夕の刻』であり、細かく言うと『夕の刻、二歩、四分』と言う。

時間の待ち合わせをすると三十分も幅がある為、時間管理に厳しい日本人である花はさぞイライラすることだろう。

「そろそろご準備を」と言われて、思わず花は「いえ、私お料理は苦手で……」と呟いたが、準備するのは食事の事ではなく、花の事であった。

湯浴みをして、その後、香油で全身をマッサージされ、ドレスを着せられ、化粧をされ、髪を結われる。

正直なところ、裸を見られるのは恥ずかしいが、エステだと思えば開き直れて気持ちがいい。

ただ、なんというか……これって……。

「デザートは、わ・た・し♪」という、言葉がグルグルと頭の中を廻る。

――――　いやいやいや、ありえないから！！

そう心で叫ぶのだが、セレナとエレーンは夜着の準備もしている。

「こちらの方が、ハナ様の白い肌に映えていいわよ」

「いえ、それよりもこちらの方が、可愛らしくてゆったりとして…
…それに、簡単に脱がされるようになってるんだから」

「それもそうね……」

とか、なんとか。

――― いや、脱ぎませんから!! 簡単でも脱ぎませんから!!

やはり心の中で叫ぶのだった。

そうこうしているうちに準備ができ、鏡の前に立ったのだが、なんというか……まあ、うん。『かわいらしい』と言う言葉が無難だろう。

十人並みは、十人並みなりに頑張った!!

例え、側で跪いて見上げている侍女服姿のセレナとエレーンの方が綺麗でも。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「今宵のそなたも美しいな」

と、ルークに褒められたが、なぜだろう、無性に腹が立つ。

しかし、セレナとエレーンはその言葉に満足そうに頬を染めて頷いているし、このまま芝居を続けるしかない。

「ありがとうございます」

答えて席に着く。

そうして食事は始まった。

「王宮めぐりは楽しかったか？」

ニヤリとルークが笑う。恐らく、ジャスティンから報告がいっているのだろう。

「ええ、とても興味深くて……でも、とても大きくて、まるで迷路に迷い込んだようで、少し恐ろしく感じました」

貴族達の事を揶揄して言うが、それを聞いてルークはまたニヤリと笑う。

セレナとエレーンが控えている為に無難な会話が進んだが、あらかた食事が出そろった所で、ルークが二人に下がるように申しつけた。

二人が下がったのを見届けて、ルークは花に向き直る。

「さて、ではハナと、ハナのいた世界について知りたい」

それから、花は色々な質問をされた。

家族構成や花の社会的地位（これは、花の立ち居振る舞いからの疑問らしい）、地球の文明等々……。話せる事は正直に話したが、地球の文明については、恐らく説明を求められても上手く答えられる自信がなかったので、少し歪曲して説明した。

「文明は……ユシュタールとそう変わりはありません。ただ、決定的に違うのは魔法がない事です。私たちの世界では、魔法はおとぎ話の中にしかありません」

「魔法がない？……ではどのように生活しているんだ？」

「労働です。例えば、服が汚れれば、手を使って洗い、部屋が散らかれば、自分で動いて片付ける。そう言うことです」

「なるほどな……ここでの、魔力がほとんどない者達と似たような生活と言うことか」

そう呟いてルークは納得する。それに、花は質問した。

「人それぞれの魔力の差って、大きいんですか？」

「ああ、ほとんどない者達の方が多いな。魔法を使えても、せいぜいあの浄化魔法レベルだ。ある程度、魔力の強い者たちは役人や兵になる。それから、特に強い者たちは必然と王宮に仕えることになる」

「では、ここにいる人たちは皆、魔力の強い人たちって事ですか？」

「そうなるな」

――― ガーン！　益々、役立たず感がする……楽器もないし、本当に役立たずだ。この先どうしよう……。

黙り込む花にルークが声をかける。

「まあ、そう落ち込むな。そなたの事は私が必ず守ってやる」

「……」

――― キュンときた！！　今、すっごいキュンときた！！

ヤバいヤバい、このまま、この意地悪な皇帝陛下を好きになったら絶対、苦労する。気をつけよう。

そう固く心に誓った花は、ニッコリ微笑んで答えた。

「ありがとうございます。でも大丈夫です。確かに力で襲われたら敵いませんので、その場合はルークや、ジョシュ、カイルなどの護衛の方に助けて頂かないといけませんが、それ以外なら上手く対処してみせます」

――――そして、生まれた事を後悔させてやる。

花は気付いていなかった。そう言った花が、ルークと変わらないくらいの意地悪な微笑みになっていることに。

それを見て、ルークはまたニヤリとする。

「それは頼もしいな。思う存分やってくれてかまわない。ところで……そろそろ、やめないか？」

「え？　何をですか？」

いきなり話が変わり、花はキョトンとして聞いた。

「その敬語だ。二人の時やレナードと三人の時は敬語をやめてくれ。俺もやめる」

ルークのその言葉に花は驚いた。上手く言えないが、なんだか懐に入れてもらえた気がした。

「――わかりました。というか、普段から割とこの喋り方なんです

けど……頑張ります」

「頑張ることなのか？」

そう言って笑ったルークの顔は本当に楽しそうに見える。

――――　ヤバい！！　だからダメだって、私！！　もう……気をつけなはれや！！

自分をなんとか叱咤した花だった。

14．トイレはきれいに。

メインの食事が終わり、一旦セレナたちを呼んで食器を片付けてもらう。

――――　パッと魔法で片付けたりは、しないんだ……。

そんな事を思っていると、エレーンがデザートと紅茶を運んで来てくれた。そして二人は一礼をしてまた下がる。

ちなみに居間に続くいくつかの小さな部屋が彼女たちの部屋らしい。

デザートはオレンジのジュレのようなものだ。

それを口に運ぶのだが、花の頭の中には「デザートは、わ・た・し♪」と言うセリフがエンドレスに流れていて、味がよくわからない。

気がつけば、ルークに何か話しかけられていたようだが、聞いていなかった。

「え？　なんて言いました？」

「……他に聞きたい事はないかと、言ったんだ」

「聞きたい事？」

聞き返しながらも、花の頭の中には相変わらず「デザートは、わ・た・し♪」が流れている。

聞きたい事なら、たくさんあったはずなのに、咄嗟に出てこない。

焦った花の口から飛び出したのは――

「デザートは私？」

――――　ぎゃあああ！！　なんで口から出るんだ！？　私のバカ！！

「食べてほしいのか？」

自分の失言にパニックになっていた花は、ニヤリと笑って問い返すルークの言葉に更にパニックに陥る。

「何言ってるんですか！？　どんな変態ですか！？　誰がそんな事言ったんですか！？」

「お前だ、ハナ」

ルークは冷静に切り返す。

「そんな事、思ってても言いません！！」

「……」

もはや暴走した思考は止まらない。

「それよりも、ここのトイレってどういう仕組みなんですか？」

止まらないなら、突っ走るしかない。

「――俺はお前の頭の中の仕組みが知りたいがな」

呆れた様子でルークが返す。

「だって、ここのトイレ、すごいじゃないですか。水が流れるし。しかも勝手に」

「そうか？……今から百年ほど前からだが……」

「百年前からですか？　すごいですね。私の国とよく似た様式で驚きました」

会話を進めるうちに、花は落ち着いてきた……内容に問題はあるが。

「そうなのか？……そういえば……」

ルークはそう言うと考え込むように黙り込んでしまった。しばらく沈黙した後、ルークは再び口を開いた。

「今の仕組みを考えた男が、『違う世界から来た』と言っていたな。当時は、他国の事かと思っていたんだが……」

「ええ！？　本当ですか、それ！？……名前はなんて！？」

ルークの言葉に、花は驚愕した。

「名前は確か……カズ……カズゥオ……ああ、カズゥオ・サトーだ」

「カズゥオ・サトー？」

どうも、ルークの発音は聞き取りにくい。

「カズゥオ……カズ……カズオ・サトー！？」

思い当たった発音に花は興奮して声を上げた。それに少し驚いたように、ルークが答える。

「ああ、確かに、そういう名前だったと思う。知っているのか？」

「い、いえ、その人のことは知りません。でも、その名前は私の国では、よくある名前です！」

花の興奮は続く。

「そうなのか？　でも、あの男にはわずかながら魔力があったぞ？　だから、特に不審にも思わなかったんだが……」

「ええ！？」

――じゃあ、違うのかな？　そもそも、日本で感知式が開発されたのは最近だ。なのに、百年前って……サトウさんとやらは日本人じゃないのかな？　うーん、わからない……んん？……待て待て待て！！　ちょっと待て！！

花はサトウさんに気をとられて聞き流していた、不自然なルークの言葉に気が付いた。

「あの……まるで、百年前にルークがサトウさんと会った事があるように聞こえるんですけど……？」

恐る恐る聞いた花の言葉に、あっさりルークは答えた。

「んん？　ああ、変わった男だったぞ。百年ほど前、マグノリアで疫病が蔓延したときに、『疫病が広がるのは不衛生だからです！』と衛生面の改善案を上申してきてな。それで王宮だけでもと、あの男の言うとおりにしてみたら、王宮内での広がりが収まったものだから、急ぎ、マグノリア全土に布令を出した。すると、数ヵ月後には無事に疫病も終息したものだから、その後、あの男の指示で数年かけて、王宮や城下の下水設備を整えたんだが……」

――――　いやいや、そうではなくて……。

「ルーク……ユシュタールでは、一年は何日ですか？」

「四百二十日だが？」

「……ルークは今、何歳なんですか？」

「今年で……百四十三歳になるな」

「はい？」

「百四十三歳だ」

「……」

花は黙って、すっかり冷めてしまった紅茶を飲んだ。

「そういえば、まだハナの歳を聞いていなかったな」

「……二十歳です」

――― 三百六十五日の計算で。

「若いな」

「――どうも」

なんだか色々とどうでも良くなってきた花だったが、一応聞いておかなければと、口を開いた。

「あの……この世界の皆さんの平均寿命は？」

「平均……寿命も魔力によるからな。ほとんどの者たちは、だいたい百五十歳から二百歳くらいだろう。魔力の強い者たちは二百五十歳から三百歳くらいといったところだが、この王宮に限って言えば、四百歳に近いかもな」

「なぜですか？」

「この王宮には魔力の強い者たちが集まっている為、王宮内に魔力が満ちている。それが、皆の魔力に作用し、補っているからだ」

――― そんな、便利な機能が……。

「では、ルークもそれだけ長生きできるんですね？」

花の言葉に、ルークは苦笑した。

「王族や、王族に近い貴族たち……レナードもそうだが、その者た

ちは特に魔力が強いから、更に長く生きる。俺の父である先帝陛下は五百三十七歳で亡くなられた。文献によると、千歳近くまで生きた皇帝もいたらしい」

「すごいですね」

花は驚嘆した。

「無駄に長生きしても、しょうがないがな」

そう言ったルークの声にはどこか、自嘲めいたものが含まれていた。ほんのわずかな沈黙が落ちた後、ルークは突然立ち上がった。

「もう休むぞ」

そう言って、ルークは寝室へと姿を消した。

――――ええ!?　休むと言われても……どうすればいいの!?

一人残された花は、途方にくれたのだった。

15．地震、雷、火事、おやじ。

気が付けば、花は衣裳部屋の隣のパウダールーム（勝手に命名）にいた。傍では、セレナとエレーンが忙しなく動いている。
そして鏡に映った自分を見ると、例の脱がせやすいという夜着を着ていた。

――― ぬお!? どど、どうすれば!?

花はようやく我に返ったのだが、いつの間にやら化粧も落とし、歯も磨いていた事実に驚く。
どうやら無意識に行動していたらしい。

「御髪はこのまま背中へ流していたほうがいいわよね？」

「そうね。それより、陛下をお待たせしすぎじゃないかしら？」

「あら、殿方は少しくらい待たされた方が燃えるものよ」

「それもそうね」

そんな会話をしながら、セレナは花にほんのりと薄い化粧を施し、エレーンは艶が十分に出るまで、花の髪を梳かしている。

――― 綺麗な顔して何を恐ろしい事を言ってるんだ！ この二人は!!

花の心の焦りは、二人には届かない。

「では、ハナ様、私たちはこれで失礼致します」

花の仕度を終え、二人は一礼して居間への扉へと去って行く。花はもう一方の扉、寝室への扉を凝視した。

――――　事後承諾とはいえ、引き受けたんだから、やるしかない！！

いや、やる事はやりませんけど。

誰かへ言い訳しているような決意をして寝室へ足を踏み入れた。

が――

「ぎゃ！　おおお！！」

「……何の獣の雄叫びだ？　それは」

怪しい悲鳴をあげた花に、ルークが煩そうに顔を顰める。

「な、何してるんですか！？」

「……書類を読んでいるんだが？」

「何でそんな格好なんですか！？」

花は寝室へ入ってすぐの所に、立ち竦んだままだ。

ルークは寝台に座って、枕に凭(もた)れかかるような体勢で書類を読んでいるのだが、掛け布から覗いた上半身は何も身に着けていなかった。

「俺は寝る時、何も身に着けないだけだから気にするな」

「何言ってるんですか!?　嫌がらせですか!?　鬼ですか!?悪霊退散!!」

ルークは溜息をついた。

それから支離滅裂な花に、ニヤリと笑いかける。

「下も気になるか?」

そう言ってルークは掛け布をめくった。

「ぎゃあ!　変態!!」

慌てて顔を覆った花に「クッ!」と堪えた笑いを漏らして寝台から立ち上がり、長椅子に無造作に置いていた、薄手の上着を頭から被るように着た。

どうやら下穿きは穿いていたようだ。からかわれた事に気付いた花は、怒りを堪えた。

「もう寝ます!!」

そう宣言すると、勢いよく寝台に飛び込んで落ちそうなほどの隅に横になる。

それをやはり笑いを堪えながら見ていたルークは、先ほどの書類をトントンと纏めて何事か呟くと、書類がパッと消えた。

そして寝台に横になり、また何事か呟いた。

と、一瞬にして部屋が暗闇に包まれる。

背中でルークの気配を伺っていた花だったが、ルークが二度目に

呟いた後、部屋の灯りが消え真っ暗闇になった途端、絶叫した。

「ぎゃあああああ！！」

「今度は何だ？」

パッと部屋が明るくなり、ルークが上半身を起こして花を訝しげに見る。

「なんで真っ暗にするんですか！？」

「寝る時は暗くするだろう？」

「私は真っ暗だと眠れません！」

「……暗闇が怖いのか？」

「暗闇は平気です！　寝る時に真っ暗なのがダメなんです！」

「意味がわからん」

ルークは眉間を揉みながら、ほとんど呟くように言った。

「だって、真っ暗にして何かあったらどうするんですか？」

「何かって何だ？」

「地震、雷、火事、おやじに、暗殺者です！！」

「……」

何かを諦めたような大きな溜息をついたルークは、また何事か呟いて横になった。
すると、部屋はほんのりと灯りがついたような優しい黒色に染まる。

「ありがとうございます」

ルークの優しさに、花はお礼を言った。しかし、それには答えずルークは話を始めた。

「ハナ、一つ言っておく」

「なんですか？」

「俺はお前に、防御魔法を施している」

「え？　全く気付きませんでした。ありがとうございます」

「だから、この部屋には何もしていない。バカな奴らをおびき寄せられるものなら、おびき寄せたいからな」

「はい」

「この部屋は、強固な造りになっているから、少々の音は外へは漏れない」

「はい」

「だが、お前の先ほどからの雄叫びは、外に漏れているだろうな」

「……はい？」

「今頃、侍女たちは、俺たちがいったいどんな事をしてるのか、気になって眠れないだろうな」

「……どんな事って、どんな事ですか！？」

「知りたいのか？」

「結構です！！」

ルークが笑いを堪えているのが気配でわかる。

――――　マジメに聞いて損した！！　お礼言って損した！！

花は怒り心頭で掛け布に包まり、目を瞑った。

それを楽しそうに見ていたルークだったが、五分もしないうちに花から寝息が聞こえてきて驚いた。

――――　まさか、もう眠ったのか？

そっと近付き、花の頬にかかった髪を梳くってやるが、花の反応はない。

「本当に面白い奴だな」

そう呟くとルークは花を起こさないようにそっと抱き寄せ、寝台から落ちないように中央へ運んでやる。

それから小さく息を吐き出して、ルークは目を閉じた。

花の特技は『五分で眠れる事』であった。

16．賄賂は慎重に。

――温かい。

花は、ぼんやりした頭で思った。

――温かくて、硬い……ん？　硬い？？

目を開けた花が見たのは、薄手の布に包まれた硬い胸板。恐る恐る、視線を上へあげていくと……超絶美形の寝顔。

――ぎゃあああああああ！！

心の中で絶叫した。

別に昨晩、言われた事を気にしたわけではないけど。

すると、ルークが顔を顰めて目を開けた。

「朝から、うるさい」

「私、何も言ってないじゃないですか！？　それより、なんですか？　このベタな展開は！？」

そう言って離れようとした花だったが、ルークが回していた腕に力を込めた為、逃れられない。

「ちょっ！　何してるんですか！？　放して下さい！！」

「いやだ。俺はハナの嫌がる事をするのが好きらしい」

「何ですか!?　その変態発言は!!」

一生懸命、抜けだそうともがくのだが、ルークの腕はびくともしない。

――くそー!　この変態!!　ボケ!　ナス!　カボチャ!!

ずいぶん低俗な悪態を心の中で吐いていると、ルークの笑っているような気配がした。それと同時に、腕の力が緩む。

――よし!　今がチャンス!!

と、なんとか体を反転させて立ち上がろうとした。

途端に再び腕に力が込められ、今度は後ろから抱きしめられる形になり、花は再び悪態を吐く。

しばらくして、ルークが起き上がる気配がした。

――あ、やっと起きる?

花が安堵した瞬間――

「ぎゃあああああああ!!」

今度は声を出して叫んだ。

「な・な・な・何を……何で耳を噛むんですか!?」

左耳を手で押さえた花の顔は真っ赤だ。

「お前……もう少し、色気のある悲鳴は出せないのか？」

花の質問は無視して、ルークは呆れたように呟いた。

「ちゃんと必要な時は出せます！！　というか、そもそも悲鳴に色気は必要ありません！！」

「必要な時とは、どんな時だ？」

「男性を利用する時です」

色気があるかどうかは知らないが、ちょっと可愛く悲鳴を上げて「きゃ！　こわ～い」「きゃあ！　重くて持てな～い」など言えば、大抵の男性は動いてくれるらしい。

クラスメイトがよくそう言っていたが、残念ながら花が試した事はないのだが。

「……」

ルークはなぜか気の毒そうな視線を花に向けた。それから起き上がると、長椅子まで行き、掛けてあった服を着ながら言った。

「どうやら護衛たちも来たようだし、俺はもう行くが、お前はこのまましばらくこの部屋から出るなよ」

「なぜですか？」

「先ほどのお前の悲鳴を聞いて、朝から激しく励んでいると思っているだろうから、すぐに出て行ったらガッカリさせるだろう？」

「何を励んでいるんですか！？　なんでガッカリするんですか！？」

花が慌てて問い返すと、ルークはニヤリと笑い――

「結構です！」

「まだ、何も言ってないだろうが」

「結構です！」

花は畳みかけるようにルークの言葉を拒否する。ルークは残念そうな、しかし笑いを含んだ声で「じゃあ、またな」と言って消えた。

本当に、その場で消えたのだ。

――――転移魔法というやつかな？

花はそう思ったが、もはやそれくらいでは驚かなかった。

そしてルークの言葉に腹を立てながらも、素直に従って暫く寝室で過ごした。

その間、寝台横のサイドチェストにしまっていた『生まれてきた事を後悔させてやるリスト～ユシュタール版』を取り出し、新たな一枚の紙に『特別版』と記して大きくルークの名前を記入したのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

朝食を食べていると、青鹿の扉がノックされた。今日の護衛もジョシュとカイルだ。そして、今日はカイルが扉の内側担当らしく、

応対をする。そして花に尋ねた。

「ハナ様、どうやら贈り物が届いているようですが、お受け取りになられますか？」

「贈り物？……どなたから？」

「ハルンベルツ侯爵からだそうです。」

――――　ハルンベルツ……ハルンベルツ……ああ！　あの『チビのチョビ髭侯爵』か。

思い当たった花は暫く逡巡した後、頷いた。

「わかりました。お受け取りして下さい」

そうして、それを誰も使っていない侍女用の小部屋の一つに置くように指示した。

開封はしない。

それからほとんどひっきりなしに、贈り物が届くようになった。まあ要するに、貢物という賄賂だ。

相変わらず開封はしないままセレナとエレーンにカードが付いていても念の為、誰からかわかるようにメモを貼ってくれるように頼む。

送り主のわからない贈り物だけは受け取らないように指示する。たまに届くようだから恐ろしい。

贈り物を置いた部屋がいっぱいになる頃、ルークが青鹿の間に来た。夜は遅くなるので、昼の食事を共にしようと伝言を受けていたので、慌てることなく迎える。

花はルークが入って来た途端、朝のやり取りを思い出し、仕返しをしてやろうとルークに抱きついた。

「陛下！　待ち遠しかったです！！」

一瞬、ギョッと強張ったルークに「やった！」と喜んだ花だったが、気を取り直したのか、すぐにルークが抱き返してきた。急いで離れるつもりだったのに強く抱きしめられ逃げられずにいると、ルークが低く、甘い声で囁くように言う。

「余も、そなたに早く会いたかったぞ」

そして花の顎を持ち上げ顔を近づけてくる。

――――え？　え？　ちょ、ちょっと待って！！　ごめんなさい、ごめんなさい！！

花は心の中で思い切り悲鳴を上げ涙ぐむが、傍から見ると、嬉しそうに目を潤ませているようにしか見えない。

花の行動に、周囲は一瞬青ざめたが、その後の二人を「信じられない！」と奇跡が起こったかのように、一心に見つめている。

それもそのはず、あの冷酷で無慈悲な皇帝が、花を優しく見つめ抱きしめているのだから。

青鹿の扉は未だに閉じられておらず、この様子は外にいた後宮に仕える者たちも見ることになった。そして、その場面を見た者達によって、瞬く間に王宮に広まる事になるのだが。

花は、今それどころではない。

明らかに、ルークは面白がっている。優しい顔、甘い声にも花は騙されない。とにかく、周りにばれないように逃げ出さなければと思うのだが、ルークの顔は益々近づいてくる。

――――　ぎゃあああ！！

覚悟を決め、花は目をギュッと閉じた。
しかし、ルークは花の頬に軽くキスを落としただけだった。

――――　あれ？……助かった？

正直に言えばキスくらいは構わないのだが、それでもやっぱりファーストキスにはそれなりの夢を抱いている、というか、この衆人環視の前では嫌だ。
考えてみれば、頬にキスをされるのも初めてだったが、朝に耳を噛まれるという体験をしている為か、花はすっかり忘れていた。
そして、少しガッカリしているのも事実で……と、ルークの方を見ると、すごい意地悪そうな顔をして笑っていた。

――――　くそー！　またやられた！！

悔しがる花だった。
そして、一部始終を見ていたレナードは、花に「諦めろ」といった風に首を振った。

その後、食事をしながら花はルークに話を切り出した。

「今日は、朝から皆様にたくさんの贈り物を頂いたんです」

「ああ、聞いている」

「とても、嬉しいんですが、本当に頂いてもよろしいんでしょうか

？」

「構わないが……心配なら、どんなものが届いているのか、後で余も見てみよう」

「まあ、ありがとうございます」

そうして会話は進んでいるのだが、要するに贈り物に小細工がされていないのか調べて欲しいと、花はルークに頼んでいるのだ。

ジョシュやカイルは魔力が強いので、贈り物を受け取った時点である程度の安全は確認できているのだが、二人の魔力を上回る者が巧妙に細工をすればわからない。その為、念には念を入れて、ルークにお願いしたのだ。

「贈り主の名前はわかっているんだから、ここまで念を入れる必要はあるか？」

贈り物を納めた小部屋で、レナードと三人になった時にルークは訊いた。

「私が悪い事をするなら、人の名前を騙ってしますから。特に嫌いな相手の名前で」

そう言ってニッコリ笑った花に、満足そうにルークもニヤリと笑い返した。

やはりというか、いくつか、魔力による呪いがかかった贈り物が見つかった。ルークの魔力で本当の送り主もわかり、それによって王宮内の人間相関図がよくわかる事になった。

そして、この作業はその後も続く事になるのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

余談だが、受け取った贈り物はルークに許可をもらい、ドレスや宝石などの品物は商人に換金してもらって、マグノリアにいくつかあると言う孤児院に匿名で寄付をする手配をした。

お菓子などの食べ物は、そのまま城下にある孤児院に配ったり、日持ちのしないものは王宮の下働きの者達へ配ったりした。

お菓子配りは送り主の名前で行った為、後日、その送り主から花に「いやあ、いきなりお礼を言われて参りましたよ」と嫌味だったり、素直に驚きだったりを伝えてきたりしたので、花は「食べきれなくて……失礼だとは思ったのですが、せっかく頂いたのに捨ててしまうのも心苦しくて……」と心から申し訳なさそうに謝った後、ニッコリ微笑んだ。

それで大抵許され、その後も食べ物の贈り物は続く事になった。

ちなみに品物の方は、換金した事がばれないように、帝国内では流通させないようにしている。

そして贈ったものを身に付けてくれないと、嘆く者達に「陛下から頂いた物以外を私が身に付けるのを、陛下がお嫌いになるんです。でも素敵な物を頂いて、本当に嬉しく思っております。大事にしまっておりますので、お許し下さい」とこれまた申し訳なさそうに言った後ニッコリ微笑むので、身に付けてもらわなくても構わない、と贈り物が途絶える事はなかった。

そしてお菓子などを配る手配をしてくれているのは本当は花だと言う事が、いつの間にか広がり、また孤児院への寄付も、花である

ことがどこからともなく漏れ『皇帝陛下のご側室のハナ様』は民衆の間で人気を博すことになった。

寄付金の出所は謎のまま。

17．コサックダンスでどうでしょう。

ルークたちが帰ってから暫くすると、また青鹿の扉がノックされるようになった。

今度は、面会の申し込みだ。

後宮への立ち入りは、昼の刻、二歩、三分以降と決まっている。地球時間でいうと十三時以降だ。腕時計をしていて本当によかったと思う（しかも太陽電池）。

なんでこの世界の時間はこんなにややこしいんだと思うが、ひょっとしたら地球人より長い寿命の為、時間の感覚が違うのかも知れない。

そう考えると、花は自分がのんびり散歩をしている人たちの中で一人、必死でマラソンをしている気分になる。

午前中にあれほどの賄賂――もとい、贈り物が届いたのは、午後からの面会の為に心証を良くしようという魂胆もあるだろう。

だが、今日もジャスティンに王宮を案内してもらう予定なので、すべて断る。昨日は、次々と足止めされた為、まだ三分の一も回っていないのだ。

ジャスティンが迎えに来るまでに、セレナとエレーンに手伝ってもらって、贈り物の内容を送り主の名前と一緒にリストアップしていく。

宝石やドレス、甘そうなお菓子など様々な物が仕分けられていく。

その中で驚いたのが、昨日出会った政務長官のセインからも贈り物が届いていた事だ。

それは花自ら包装を開け、中身を広げてみると――スケスケの夜着だった。

――え？　『陛下を癒して差し上げて下さい』って、そう言う事!?　そう言う事なの!?　ねえ!!

心の中で、セインに思いきりツッコミをいれた花だった。

しかし、心がこもっているのはわかったので、この夜着は換金されることなく、花の衣裳部屋に仕舞われることになった。

これ以来、花の中でセインは『スケベ親父』と名付けた。せっかく名前も覚えていたのに。

そうして作業を進めるうちに、ふと花の視界に空き箱が入った。

――そういえば、昔はよく空き箱を太鼓代わりに叩いて遊んだな……。

昔を思い出した花は、ハッとした。

――楽器がなければ作ればいいんだ!!

そう思い立った花は、居ても立ってもいられず作れそうな楽器を考えていたが、そこへジャスティンが迎えに現れ、一旦中断することにした。

やっと使命が果たせるかも。そう思うと心が軽くなる。

次から次へとまた湧いてくる、貴族たちの失礼な振る舞いも気にならない。

今日の王宮見学ツアーには、護衛の二人とエレーンに付いて来てもらった。昨日はセレナだったので、今日は青鹿の間で待機してもらっている。要するにお留守番だ。

「ねえ、エレーン。エレーンは今、何歳なの？」

花たち一行は、『月光の塔』という塔がある場所へ続く渡り廊下を歩いていた。
ふと、昨日のルークとの会話を思い出した花は、気になってエレーンに尋ねた。
「私ですか？　私は若輩者で恥ずかしいんですが、四十八歳です」
「……へー」
それから、セレナが五十三歳、ジョシュが百十四歳、カイルが九十八歳、そして、ジャスティンが二百八歳だという事を聞いた。もう、驚くのもバカバカしくなってきた。
王宮を案内してもらいながら、貴族たちに邪魔されない間はジャスティンに、この世界の色々な事を聞いた。
魔力というのは、五十歳くらいにピークに達し、そのまま力を持続していく。その持続時間には個人差があり、徐々に魔力が衰え始めると、容姿も衰えていく。しかし、衰え方にも個人差があるらしく、衰え始めて五十年くらいで亡くなる人もいれば、百年くらいは生きる人もいるらしい。
ちなみに、この王宮にいると、魔力を補えるのでやはり、衰え方は緩やかになるらしい。
それと、魔法についても聞いた。
この国に住むほとんどの人間が、簡単な魔法なら使えるらしい。
簡単な魔法とは、明かりを灯したり、汚れたものを綺麗にしたり等、生活に欠かせないような魔法で、生活魔法という。そして、そういう魔法でも、魔力の差が魔法の差になるらしい。
例えば、浄化魔法では、汚れた服一枚を綺麗にするのが精一杯といった力と、家一軒を丸ごと綺麗にする程の力と、それくらいの差

がある。
そして、魔力がある程度強くなければ使えないのが、攻撃魔法や防御魔法らしい。これらは生活魔法に比べて格段に魔力も使うし、呪文も難しいらしい。だが、特に魔力の強い者、王族レベルの魔力を有する者は、別次元に魔法を存在させる事ができ――なんたらかんたらで、詠唱を必要としないらしい。とにかく凄いってことだ。
最後に特別な魔法として、治癒魔法というのが存在するらしい。これは本当にごく限られた一部の人間にしか使えないらしく、また治癒と言っても、個人の持つ治癒力を高めるものなので、失ったものを取り戻せるわけではないらしい。
例えば、治るのに一か月かかるような怪我を、治癒力を高めることによって、一時間で治すとか――要するに、早送りだ。

ジャスティンの説明はわかりやすく、途中に邪魔が入ってもある程度理解することができた。
ちなみに、ルークとレナード以外の花に関わる信用のおける人たちには、異世界ではなく遠い地方から来た、ということになっている。
あと三分の一の王宮見学はまた明日、と部屋に戻る事にした。その途中で花は外に目を向けて、思わず声を上げた。

「あ！　あれ！」

「ハナ様、どうされました？」

ジャスティンが同じ方向を見て、不思議そうに聞いてきた。当然だろう、外には別段、変わったことなどないのだから。

「あの葉っぱが欲しいです」

「あの木の葉ですか？」

「はい」

恐らく、その場にいた花以外の全員が不思議に思っていただろう。しかし皆、何も言わず「五，六枚欲しいです」と言った花の言葉に従い、ジャスティンが採って来てくれた。

「ありがとう」

満面の笑みでお礼を言った花に、ジャスティンは一瞬、眩しそうな顔をしたが何も言わず、その場で深くお時儀をしただけだった。

そうして、一行は青鹿の間へ戻ったのだった。

ジャスティンに採って来てもらった葉、それは月桂樹によく似た葉っぱだった。

昔、よく遊びに行った、母方の祖父の家の庭で育てていた月桂樹の葉で祖父がよく、草笛を吹いてくれていたのだ。

それを思い出し、寝室へ一人下がって当時の祖父の真似をして、唇に葉をあてる。

ブウー。

――― 難しいな……。

ハフー。

――― うーん、こうだったかな？

と、何度も何度も吹いてみるが、一向に音が鳴らない。そして、

段々と花は酸欠状態になって、寝台に寝転んだ。
その酸欠の苦しさに、花は思い出したくない事まで思い出した。

――― 私……笛の才能……というか、吹奏楽の才能がないんだった。

花は音楽の授業が大好きだった。そして小学三年生になって、リコーダーを使うことになった時には、ずいぶん張り切っていた。というより、張り切り過ぎていた。

そして、みんなで演奏している時に段々と息継ぎが出来なくなり、意識すればするほど出来なくなり、酸欠状態になって倒れたのだ。慌てた音楽の先生は、養護の先生を通さずに救急車を呼んでしまい、救急車で病院に運ばれてしまった。

それからも頑張ったのだが、花のトラウマというより先生のトラウマになったらしく、花がリコーダーを吹く時には、恐ろしい程の視線を感じた為、上手く吹けず、そのまま花のトラウマにもなってしまった。

その後、トラウマを克服しようと中等部へ進級して、部活で吹奏楽部に入部したのだが、悉く失敗に終わり、結局、パーカッション（打楽器）を担当する事になったのだった。

――― 笛なら、なんとか自分で作れるんじゃないかと思ったのにな……。

結局、笛関係は諦めることにして大きく溜息を吐いた。

――― 正直なところ、打楽器が一番簡単なんだろうけど……。

吹奏楽部では、パーカッションを担当してたので、思い入れもあるのだが。

確かに、太鼓などの打楽器は、簡単に作れて気軽に演奏できる一番身近な楽器だろう。しかし、癒しとしてはどうなのだろうか。もちろん、太鼓一つで色々な音を出せ、楽しむ事はできる。思わず躍り出したくなるような、心が弾むような楽しさが作れる。

――― でも、何か違う気がする。

思わずルークがウキウキと躍っている場面を想像して、花は顔を顰めた。

そして、なぜかルークがコサックダンスを踊っている場面まで想像してしまい、一人爆笑した花だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

それから結局、いい案は思い浮かばず夕食を済ませた後、寝る準備を整えて一人寝室にいた。

寝台に座ると、サイドチェストの上に置いた葉っぱが視界に入った。

なんとなく、諦めきれずにもう一度、葉を口にあてる。

べへー。

バフー。

やはり、どうにも吹けない。

ブビー。

ベブー。

「何してるんだ?」

「ばぎょ!!」

突然、後ろからルークに声をかけられ、花は飛び上がるくらいに驚いた。ルークは顔を顰めている。

「ハナ……お前の悲鳴は、段々と人間離れしていってるぞ?」

「誰のせいだと思ってるんですか!?」

「で、何をしてたんだ?」

花の言葉は相変わらず無視してルークはもう一度訊いた。花もそんなルークにこだわっても無駄なので、素直に答える。

「これは、く……」

「く?」

素直に答えようと思ったが、楽器演奏を「なんの為にするのかわからない」と言うルークに、まともな音を出せない花が草笛を説明するのは誤解を招きそうで、草笛の名誉の為にやめた。

「これは草です」

「……そうだな」

「葉っぱとも言います」

「……そうだな」

「では、寝ます」

「……そうか」

草笛の名誉は守れたかもしれないが、花の名誉は守れなかった。
そうして寝台に横になった花はルークのコサックダンス姿をまた想像して、一人クスクス笑ってしまい、ルークから白い目を向けられていたのだが、気付かなかった。

そして、また五分で眠りに落ちた。

18．嘘と噂と真実。

「なあ、ルーク。お前、最近の貴族達の退屈凌ぎの話題を知っているか？」

レナードは執務机に座って書類にサインをしているルークに話しかけた。

「知らん」

ルークの返事はそっけない。

「ハナが大臣や貴族、ご令嬢達と面会を始めた事でのハナの評判だ」

「ほう？」

どうやら少し興味をもったらしいルークに、レナードは話を続けた。

「なんでも、ハナは『どこぞの市井の娘で、たまたま陛下の目にとまった幸運な娘。従順で微笑む事しか能のない、御し易い娘。』だそうだ」

「ッ！」

レナードから聞いた花の評判に、ルークは笑いを堪える。

「とんだ猫かぶりだな」

思わず呟いたその言葉に、レナードも笑う。

「皇帝陛下の溺愛ぶりから、ハナを取り込んでしまえば権力はほしいまま、と今のうちにハナの後見につく為に皆、画策しているらしいな」

「ああ」

実際、ルークの元にはすでにその旨の申し出がいくつか来ていた。

「まあ、ハナがお前の子を産めば、次代の皇帝陛下の後見になれるんだから当然だろうが……。だが、一部の貴族やその娘たちは、ハナなど取るに足りないと、己がハナに成り代わろうと奸計をめぐらせているらしいぞ」

「……馬鹿ばかりだな」

ルークは溜息を吐いて握っていたペンを机へ放った。

「まあな、だが馬鹿だからこそ、何をしでかすかわからん。俺も気を付けるが、お前も十分にハナの事は気を付けてやれよ」

レナードの忠告にルークは「ああ」と答えた。

「しかし、お前がハナを『青鹿の間』に入れた時には心配したが……無用だったな。あれほど賢い娘とは思わなかった。ルーク、お前は知ってて入れたのか？」

「……いや、まさかあれ程とは思わなかったな。ただ、面白いと思

ったただけだ」

「お前……」

ルークの言葉にレナードは呆れた。

「だが、拾い物だった」

本心から出たであろうルークの言葉にレナードは大きく頷いた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

花が、ユシュタールに届けられて、八日が過ぎた。

「ハナ様、陛下は今日はかなり遅くなられるそうなので、先にお休みになるように、との事でございます」

セレナがルークからの言付けを伝えに来た侍従に応対した後、花に告げた。

花は弦楽器なら作れるのではないかと思案しており、まずは弦の調達の為にと、ユシュタールの動物図鑑を読んでいた。

実際、花はギターなら多少だが弾く事が出来る。

「そう」

心ここにあらず、といったていで返事をしたが、次のセレナの言葉に意識を向けた。

「なんでも、セルショナードから非公式の使者が来ているそうですよ」

「……セルショナード」

花は呟いた。

花は大臣や貴族達と面会しても、ほとんど話さずニコニコと微笑んでいるだけなので、始めは花に世辞を言ったりと、機嫌を取るのに必死になっていた者達も、そのうち花の存在を忘れているかのように、その場にいる者達で話し始めるのだった。

それを聞きながら花は、たまに興味深そうに相槌を打ったり驚いたりする。

すると、聞いてくれていると思って気を良くするのか、話している者達は饒舌になる。

基本、貴族達は自分に関わりのない噂話が大好きだ。まあ、それは貴族に限ったことではないが。

そして、その会話の中でよく飛び交っているのが、セルショナードという国の名だ。

セルショナードはマグノリアの北東に位置する国で、肥沃な大地に作物が良く育ち、海に面している為、海産物も豊富でとても豊かな大国らしい。

そのセルショナードの動向が最近『きな臭い』というのだ。

その国からの非公式の使者というのは、歓迎できる話ではなさそうだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ルークは疲れていた。

セルショナードの使者との会談は芳しいものではなかった。だが、非公式とはいえ、一国の使者をもて成さないわけにはいかない。そうして非公式の晩餐が開かれ、やっと先ほど解放され自室に戻って来たところだった。

そこへ、ノックの音が聞こえた。

扉の外の護衛が来訪者の名を告げる。

「ハルンベルツ侯爵がお越しです」

その名前にルークはうんざりしたが、今回の会談の立役者である侯爵を追い返すわけにもいかず、通すように告げた。

侯爵が入って来た途端、入室を許可したことを後悔した。

侯爵は娘を三人伴って現れたのだ。

以前から縁談を勧めて来ていたのだが、断り続けても懲りもせず、遂には三人同時にと言いだしたのだ。三人同時に娶って気に入った者を正妃にすればいい、と。

その申し出に虫唾が走ったのは言うまでもない。

ルークは憮然として席も勧めずにいると、ハルンベルツはその場で立礼し、許してもいないのに話を始めた。

「陛下、本日は誠にお疲れさまでした。此度の会談は、思わしいものとはなりませんでしたが、何卒、お気落ちなされぬよう申し上げます。この先、セルショナードと一戦交えることになりましても、このマグノリア帝国は盤石の如く、安泰でありましょう」

つらつらと述べるハルンベルツの言葉に、ルークの怒りは募った。

――――こいつは、何を根拠にこんなに驕っているのだ？

ハルンベルツの家系は、現在の当主であるジョージ・ハルンベルツの祖父が先々代皇帝の実弟という事から始まったと言うだけの、今はただの臣下に過ぎない。しかも、現当主のジョージはあまり魔力が強くなく、国政にも何も役に立たず、今回たまたまセルショナードの使者がハルンベルツの妻と縁続きだったという事で、仲介を頼まれたにすぎないのだ。

恐らくこの先、戦になろうとなるまいと、役に立つ事など一つもないだろうに、どこからこの自信に溢れた発言が出てくるのか。

馬鹿とは恐ろしい生き物である。

そして、更に馬鹿な娘達の発言によって、ルークの怒りは頂点に達した。

「陛下、そろそろお戯れはおやめになって下さい。あのような下賤の娘を陛下のお側におくものではありませんわ」

「そうですわ、陛下。あのような愚鈍な娘、きっとすぐに陛下を退屈させてしまいますわ」

「陛下、私なら陛下を退屈させませんわ。寝所でもきっと……」

それを笑って聞いていたハルンベルツが口を開いた。

「陛下、どの娘も立派な教育を受けており、何より、高貴な血を受け継いでおります。陛下のご正妃となり、陛下の御子を産むのに申し分のない娘たちです。この先の陛下の愁いを晴らす為ならば、命を賭す覚悟もあるでしょう。何卒、ご考慮くださるようお願い申し上げます」

ハルンベルツの勿体ぶった馬鹿馬鹿しすぎる言葉に、ルークは一言返した。

「なら、死ね」

「え？」

ハルンベルツも娘達も驚いて聞き返す。

「今すぐ、愁いを晴らす為に死ね」

「へ、陛下……」

ルークの冷酷な言葉に、慌ててハルンベルツが縋るような声を漏らす。そして、娘の一人が、媚びるような甘えた声を出し、一歩前へ出た。

「陛下……」

途端――

「寄るな」

ルークの声と共に、四人は壁際まではね飛ばされた。そして尚、何かに押し潰される様に壁に張り付いたままだ。

娘の一人がその圧力に耐えられず血を吐き出す。

ハルンベルツは忘れていたのだ。皇帝が冷酷で、無慈悲だという事を。

たった十日前に伯爵の娘が皇帝の不興を買って右腕を失ったばか

りだというのに。
なぜ、忘れてしまっていたのか。
更にルークの力が強まり、四人共が血を吐いた。最初に血を吐いた娘はもはや気を失っている。

「ルーク！！」

切羽詰まった、近衛隊長の声がした。
レナードはルークの攻撃魔法の気配を感じて、急遽、転移魔法で駆け付けたのだ。

「ルーク！　やめろ！！」

ルークの部屋に転移した途端、目にした光景にレナードは慌てて止めに入るが、ルークは力を弛めようとしない。
仕方なくレナードは剣を抜き、レナードの攻撃魔法でルークの魔法を緩衝する。
それによってルークの魔法は解かれ、四人は圧力から解放された。しかし、四人はぐったりしたまま動かない。息は辛うじてしているようだが。

「ルーク……」

何があったのか、レナードにはだいたいの想像がついたが、ルークに何と声をかければいいのかわからなかった。
するとルークは無言で、バスルームへと消えた。
レナードは詰めていた息を吐き出し、急いで医師の手配と、四人を運ぶ手配をする為に動いた。

19．遠くへ行きましょう。

「まだ、起きていたのか？」

ルークの声に、寝台に座って図鑑を読んでいた花は顔を上げた。

「――ルーク」

花はホッとしたような顔で笑う。

その花の笑顔を見て、ルークは呟いた。

「……別に、笑うしか能がなくても構わないがな」

「え？」

ルークの声は花には届かない。それに構わずルークは続けた。

「今日は遅くなるから、先に休むように伝えたはずなのに、なぜまだ起きているんだ？」

花はいつもルークが来るまで起きて待っているので、今日はわざわざ、言付けをしたのだった。時刻は地球で言う0時を回っている。

花はルークの問いにしれっと答える。

「私、明るすぎると眠れないんです。だから早く暗くして下さい」

「――お前な……」

花の言葉に、ルークは怒ったような、呆れたような声を出す。
もちろん花は明るくても眠れる。そして、それをルークもわかっている。
ルークは先程までの暗澹たる思いが、花の笑顔によって消えていくように感じた。

花はルークが心配だった。ユシュタールに迫る危機を、ルークは必死で防いでいる。なのに、ルークも誰も、何も言わない。
貴族達はそれを当たり前の事としか思っていないようだ。
そして、これから戦争が起こるかもしれない。詳しい事はわからないが、他国もルークの力に頼っているはずなのに。なぜなのか。
花は腹が立って、悔しくて、心配で、悲しくて、グシャグシャの気持ちだった。

寝台にルークも入って来て横になったので花も横になった。と、いつものように、部屋は優しい黒色に染まる。
ぼんやりとした暗闇の中、ルークの影を見ていた花だったが、そっとルークに近づき、抱きしめた。
意識的に、寝台でルークに近づいたのはこれが初めてだった。

「どうした？　抱いてほしくなったか？」

そう言ったルークのニヤリと笑ったような気配がしたが、花はそれを無視した。

「ルーク、大丈夫？」

「……大丈夫だが？」

「本当に大丈夫？」

「俺は、大丈夫だ」

少し含んだ言い方に花は気付いたが、気付かないふりをして答えた。

「そう。それならいいです」

「いいのか？」

「いい。ルークが大丈夫なら、私はそれでいいです」

「――お前、それは……」

言いかけたルークだったが、花の寝息を聞いて、溜息を吐いた。

「相変わらず……」

そう呟いて、ルークは心から楽しそうに笑った。

――お前、それは殺し文句だろう。

最後まで言わなかった言葉を飲み込んだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

――苦しい。

花は、息苦しさに目が覚めた。
その苦しさの原因はすぐにわかった。
ルークがかなりの力で花を抱きしめているのだ。すっかり慣れた体勢だが、こんなに力を入れられたことはない。

「ルーク？」

声をかけるが返事はなく、ルークは苦しそうにうなされていた。

「ルーク！」

先ほどより大きな声を出すが、ルークは目覚めない。
花はなんとか動く右腕で、ルークの背中をなでる。

「ルーク、大丈夫だよ」

何度も優しく声をかけながら背中をなで続けていると、腕の力が緩んだ。
ホッとした花はルークの腕から抜けだし、起き上がった。そのままルークを見下ろすと、ルークはまだ苦しそうに眉間にしわを寄せ、歯を食いしばっている。
眠りの中でまで苦しんでいるルークに、悲しみが募る。
花はルークの傍に座り背中を優しくなでながら、小さい頃にナニー（乳母）に歌ってもらった子守唄代わりだった歌を歌った。
優しく起こさないように、そっと。
随分、久しぶりに歌った曲だったが、ちゃんと覚えていた。
歌い終わってふと気がつくと、ルークが目を開けて驚いたように花を見ていた。

「あ……」

花は歌を聞かれた事が恥ずかしくて、赤くなりながら、しどろもどろに話した。

「あの……ルークが……あんまりにも、うなされてて……歌を……」

そんな花に構わず、ルークは起き上がり花に詰め寄った。

「ハナ、今のはなんだ？　治癒魔法の呪文か？」

「え？　呪文？　ち。違います。ただの歌です。ご、ごめんなさい、起こすつもりはなかったんですけど……」

「歌？　今のが？」

この言葉に花は傷ついた。

――――う。そりゃ、久しぶりに歌ったから、音痴だったかもしれないけど……。

「ハナ、もう一度歌ってくれ」

「ええ！？」

――――この状況で、もう一度歌えるだろうか？　いや、歌えない。

なぜか反語を使って、心の中で否定した。

花は子供の頃から歌を歌うのが大好きだったが、酷く傷つく出来事があってから、人前で歌う事をやめてしまった。

それからは誰もいない時、ピアノ練習室などで歌った。ピアノを弾きながら歌うこともあったが、決して、人には聞かせなかった。

そして今、ルークに歌ってくれと言われても、改めて歌うことの恥かしさと言ったら。

だが、ルークの眉間にしわを寄せた真剣な眼差しに、先ほどの苦しそうな顔を思い出して覚悟を決めた。

「……じゃあ」

そう言って一度咳払いをし――咳払いすると、なんだか却って恥かしさが増したが、勇気を出して歌いだした。

遠くへ　遠くへ行きましょう
小鳥さえずる　森をぬけて
風のわたる　丘をこえて
遠くへ　遠くへ行きましょう
そこがあなたの愛する場所

遠くへ　遠くへ行きましょう
星のまたたく　砂漠をこえて
光かがやく　水面を渡り
遠くへ　遠くへ行きましょう
そこがあなたの愛される場所

歌っているうちに、ノッてきた花だったが、歌い終わるとやはり恥かしい。俯きがちに、ルークを見やる。

ルークは驚いたような、しかし、泣きだしてしまいそうな顔をしていた。

「ルーク？」

花はルークの表情がつかめず、恐る恐る声をかけた。

「ハナ……お前はいったい何をしたんだ？」

「え？」

問いかけながらも、ルークは自分の両の手を見て握ったり開いたりしている。

「ルーク？」

もう一度、花は問いかけた。

「魔力が……満たされている」

「え？」

やはりよくわからない花に、ルークは少し困ったように笑う。

「ハナ、ユシュタールが今、崩壊の危機に瀕しているのは知っているか？」

「――はい」

「――それを食い止める為に、魔力の強いものたちは必死で力を注いでいる。俺も、そのうちの一人だ……だから、俺自身がいくら魔力を生み出しても、次々と流れ出してしまって、俺の魔力の器が満

たされるという事は、今までなかった」

実際は、ルーク一人で食い止めているのに近かったが、それは言わなかった。

「それが今、満たされている」

「ホントに？」

「ああ。それに……何というか……上手く言えないが、とにかく、今すべてが満たされているような気がする」

「え？」

ルークの言葉に、花は驚いた。

「ルークは……少しは楽になれた？」

「ああ」

花の問いにルークは強く頷く。

それを見た花は本当に嬉しそうに笑った。

「よかった……」

――――　少しはルークを癒せた？　ルークは楽になれた？　私は役に立てた？

誰に聞いているのでもない問いかけを心の中で繰り返す。

気がつけば花は泣いていた。ポロポロと涙がこぼれ落ちてくる。

「ハナ、泣くな」

ルークはそっと花を抱き寄せた。

音楽を奏でられるのは楽器だけではない。声も素敵な音楽を奏でられる。

素敵な声で、素敵な歌を、素敵な音楽を。

歌声は心を満たし、体を癒す。

その事に花は気付いた。

花の歌でルークを癒せるなら、また歌おう。

涙の止まらない花は、それでもルークの腕の中で決意したのだった。

20．夢見る乙女と黒い妖精。

「ハナ、泣くな」

そう言ってルークは花を抱き寄せた。

声を出さずに涙を流す花をこれ以上見ていたくなくて、自分の腕の中に隠してしまったのだ。

すると花はルークの背中に腕をまわして、ギュッと抱きついてきた。

愛しい。

その感覚にルークは自覚した。

――――ああ、俺はハナが好きなんだな。

それはあまりにも簡単にルークの胸の中にストンと落ちた。

ルークはそっと花を胸から離し、涙に濡れる顔を見下ろした。

「ルーク？」

自覚してしまうと花の声までもが愛しい。思わずその声をすくい取るかのように、花の唇に口づける。

「ルーク？」

花は少し驚いたように、首を傾げた。

――ああ！　もう、なんだ!?　この可愛い生き物は!!
珍獣だろうが、猛獣だろうが構うもんか！

そっと花を抱き寄せたまま寝台に横たえ、そのまま覆いかぶさるように上になる。それからルークは花の額に、涙に濡れた両瞼に、頬に、軽い口づけを落としていく。
そして、唇にも軽く落とした後、舌で、花の唇の輪郭をなぞる。
と――

（ぎょわ！）

花の心の悲鳴が聞こえた。

＊＊＊

花は何度もキスを落としていくルークを、ぼんやりと見つめていたが、唇にキスされ、ルークの舌を唇に感じた瞬間、我に返って思わず心の中で悲鳴を上げていた。

――ぎょわ！

と、同時にルークの動きが止まる。

――ぎゃあああああ！　何をなさるでござるか!?　この御仁は!!

もはや何語かわからない言葉で、なおも心の悲鳴をあげる花に、一時停止したままだったルークが低く笑い出した。

「ク、……クハッ！　ハハハ！！」

その笑い声は段々と声を上げ、本当に楽しそうに笑うので花は驚いた。

――――　ルークの笑い声、初めて聞いたかも。

笑いの止まったルークは少し考えた後、もう一度軽く花の唇にキスをすると、上半身を起こした。

そしていつものニヤリとした笑いをして花を見下ろす。

「ハナ、俺の秘密を一つ教えてやる」

「聞きたくないです」

すかさず答える花だった。花の本能は聞かない方がいいと告げている。

「なぜ？」

相変わらずの予想外の返答に、ルークは笑いながら聞き返す。女とは秘密が大好きなはずなのに。

「悪役の秘密を知った登場人物は、たいてい消されるんです。その場で殺されるか、泳がされて殺されるか。どっちですか？」

「知るか！」

花の言葉に思わず反応してしまったルークは軽く息を吐き出して、サイドチェストの上にのっている水差しから水を注ぎ、一気に飲み

干した。
そして新たなコップに水を注ぎ、花に差し出す。花が水を飲んだ後、コップを受け取り、また話を始めた。
「俺は、人が考えている事が読める」
「え？」
驚いて聞き返した花を無視して続ける。
「別に、常にというわけではない。ただ俺が……」
「ウソでしょー！！」
ルークの声にかぶさるように、花が悲鳴を上げた。
「じゃあ、じゃあ、あんなことやそんなこと、心の中でこっそり、ルークに五寸釘打ったり、コサックダンス踊らせたり、レナードとの事、想像したりしたの全部ばれてるんですか！？」
「……」
花の告白？　にルークは無言を通していたが、なぜだろう、静かな怒りを感じる。
「色々と、問いただしたい事はあるが……特にレナード云々というのは……だが、それは後だ。ハナ、俺は人に触れると心が読める」
やはり秘密を知ると殺される、花はそう思いながらも、ルークの話を聞いた。

「触れると？」

「ああ。だが、いつも読んでいるわけじゃない。普段は意識して読まないようにしてる。たまに必要だと思う時だけだ」

「じゃあ、初めて会った時、トイレまでエスコートしてくれたのって……」

「ああ、お前の心を読む為だ」

「やっぱり、あの時笑ってたんだ！！」

花は恥ずかしさのあまり、頭を抱えた。それを見てルークは笑いを漏らした。

「だが、あれでお前は殺されずにすんだんだぞ？　怪しい事この上ないお前が、部屋まで与えられるのは、おかしいとは思わなかったか？」

「そりゃ、思いましたけど……」

「まあ、それでだ。俺は滅多な事ではこの力は使わない。人の心なんて読めない方がいいに決まっているからな」

ルークのその言葉には深く頷いた。人の心の中なんて知らない方がいい。

「だがな、読みたくなくても、読んでしまう時がある」

「そうなんですか？」

「ああ――相手が、あまりにも強い思いを抱いている時だ」

「強い思い？」

「大抵は欲望だな」

「欲望……」

出世したい、権力がほしい、名誉がほしい……人の欲望は際限がない。そんな思い程、強く出るものだ。

ルークは読みたくないものほど、読んでしまう。知ってしまう。人の笑顔の下に隠された、反吐がでるほどの欲望を。ルークが皇帝であるが故に、余計に向けられてしまう感情。

女に触れれば、美しく艶めいた微笑みの下のドロドロとした欲望が見える。

皇太子に就いた頃にはまだ、この力は弱かった。しかし、魔力が強まるごとに、この力も増していき、人に触れられるのが耐えられなくなった。当時はまだ力の制御もできずに、振り回された。制御できるようになっても、相手の強い思いは勝手に流れ込んでくる。

それがルークの孤独を強める結果になった。

「この力の事を知っているのは、レナードとジャスティン、それから、宰相のディアンだけだ」

「そうですか……」

「ああ。変に警戒されても困るし、これ以上化け物扱いされてもな……」

「ルーク……」

自嘲めいたルークの言葉に花は言葉を失う。

――――　これ以上って……ルークは化け物なんかじゃないのに！！

自分勝手で馬鹿な貴族達に怒りが募る。

そんな花を気遣ってか、ただ単に面白がってか、ルークは言葉を続ける。

「だが、お前は違ったな」

「え？」

「お前の強い思い……というか、あのダダ漏れの思い……あまりにも突拍子がなくて面白い」

その言葉に花は真っ赤になった。

「違います！　あれは私じゃなくて、頭の中に住んでいる黒い妖精の仕業なんです！」

「――黒い妖精……」

呆れたように呟いたルークだったが、そのまま話を続けた。

「では、その妖精に言っておけ」

「何をですか？」

「俺に触れる時は、平常心を保て、と」

「何ですか！？　その熱血格闘マンガのようなセリフは！！」

「マンガ？」

「いいです。気にしないでください」

「……とにかく、心を読まれたくないなら、別のどうでもいい事でも考えておけ。それが無理なら、あまり俺には触れるな。俺も気を付ける」

そう告げた時の、ルークの表情があまりにも切なくて、花は胸を締め付けられたように感じた。

しかし、その後に続いた言葉にパニックになる。

「で、レナード云々というのは……」

「ぎゃあああ！　違うんです！　ほんの出来心なんです！！　別に腐女子じゃないんです！　ただ、夢見る乙女なら、美形男子二人が常に一緒にいる所をみたら、誰だって想像しちゃうんです！！　ごめんなさい！！」

「……先ほどからお前の言っていることは、よくわからん……わかりたくもないが……碌でもないと言う事だけは、よくわかった」

「う！」

言葉に詰まった花を見てルークは楽しそうに笑うと、「もう寝るぞ」と言って横になった。

それを恨めしそうに見ていた花だったが、しばらくして横になる。
そうして花はまたルークに抱きつく。
ルークは驚いた。あの話をしても尚、花が自分に触れてくるとは思わなかった。

「ハナ……」

呼びかけたルークの言葉に花は寝息で答えた。

「またか……」

今回は一分もかからなかった。

ルークは花の歌に心身ともに癒されたのを感じていた。
しかし、それは気付くきっかけに過ぎなかった。
魔力がいつ枯渇するかもわからない事に怯え、強すぎる力ゆえに孤独を感じていたルークの心を、花はその存在をもって癒してくれていた。
いきなり暖炉の中に現れた珍妙な格好をした娘が、これ程までにルークの心を占めることになるとは思いもよらなかった。
まだ、たったの八日だと言うのに。この先、どれほどルークの心を癒し、苦しめるのだろう。
もはや花がいなければ生きていけない。そんな愚かな言葉が飛び出してきそうになる自分に、ルークは苦笑した。

そして、ルークは何十年かぶりになるユシュタルへの祈りを奉げた。
ユシュタルが花をルークの許へ遣わしてくれたのかはわからない。
ただ花がこの世界に、ルークの許に存在することに、感謝を込めて。

心から。

21．君子危うきに近寄らず。

――― ぎゃあああああああ！！

「ハナ……朝から煩い」

「だから声は出していないじゃないですか！！」

「今度はどうした？」

ルークは花の抗議を相変わらず流して尋ねた。

「ルーク！　昨日、私にキスしましたね！？」

「……今更？」

「今更じゃありません！　私の大事なファーストキスを！！」

「ハナ……お前、二十歳だったよな？」

「それが何か！？」

「遅くないか？」

ユシュタールの成人は十八歳からだ。

「いいじゃないですか！！　初めてに年齢は関係ないんです！！その時が、その人にあった適齢期なんです！！」

「では、昨日がお前の適齢期だったんだな」

「……あれ？」

ルークは笑いをこらえながら、花に回していた腕に力を込めた。

「それでは、今からもう少し先にいこうか？」

「な、何を言ってるんですか！？　先って何ですか！？」

顔を真っ赤にした花に構わず、キスをしようとしたルークだったが――

グゴゴオオオ！！

「……」

「今のは？」

「お腹がすいたみたいです」

「腹の音か？」

「そうみたいです」

「……お前は、腹にも獣を飼っているのか」

「『腹にも』ってどういう事ですか!?　『も』って!!」

ルークは笑いながら起き上がると、花に手を差し出した。花は怒りながらも迷わずその手を取った。

自分の力の秘密を知っても花の態度は変わらない。それがルークには嬉しかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「そういえば、まだ会った事ないのですが。宰相さんと」

「……」

二人は青鹿の間でそのまま、朝食を食べていた。

花の何気ない一言に、ルークは不自然に無言で食事を続けているが、花はそれに気付かない。

「確か……ディアンさんでしたっけ?」

ガシャン!!

「も……申し訳ありません!!」

お茶の用意をしていたエレーンが、食器を取り落としてしまったようだ。

「いいのよ。エレーンは大丈夫?」

花の言葉にエレーンはブンブンと首を縦に振るだけで、言葉が出ないようだ。

「？」

花は不思議に思ったがルークに視線を戻し、もう一度ルークに訊いた。

「陛下、宰相のディアンさんは、どのような方ですか？」

最近はみんなの前でも神密度を表す為に、ルークへの言葉を少し砕けたものにしている。

「……」

「陛下？」

いつまでも無言のルークに訝しげに問いかける。

するとルークは軽くため息を吐いて口を開いた。

「ハナ……世の中には知らない方が、幸せと言う事もある」

「――わかりました」

ルークの言葉に疑問を挟むのはやめた。

『君子危うきに近寄らず』素敵な言葉だ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

転移魔法でルークが執務室に着いたとほぼ同時に、扉がノックされレナードが入ってくる。
普段、転移魔法を行える臣下たちは一旦扉の外に転移して、ノックをした後に部屋に入るようにしているからだ。緊急時は例外だが。

「おはようございます、陛下」

レナードの顔を見た途端、ルークは手元にあった文鎮を投げつけた。
慌ててそれを受け止めたレナードは驚きの声を上げた。

「急に何するんだ！　ルーク！！」

部屋に二人きりの為、というより、驚きの為に敬語が抜けている。

「すまん、わざとだ」

「お前……」

謝罪になってない謝罪の言葉に、レナードは言葉を失う。
レナードは一瞬、ルークが昨日の怒りを引きずっているのかとも思ったが、どうやら違うらしい。

――――　それどころか、これは……。

ルークから溢れだす魔力に驚く。
人の持つ魔力を見る事が出来るのも、限られた者たちだけだ。
レナードはルークからこれほどの魔力を感じる事も初めてだったが、何よりも魔力の質が違う事に気付いた。何が違うのか、と問わ

れても答えられはしないが。

「ルーク、昨晩、ハナと何かあったのか？」

それしか原因が考えられず、訊いたレナードに今度は応接テーブルが飛んできた。

もちろん、魔力で飛ばしたのだ。

「お前！　魔力の無駄使いをするな！！　というか、打ちどころ悪ければ死ぬだろうが！！」

応接テーブルは大理石でできている。

「心配するな、レナード。俺は今、最高に気分がいい。だから、一思いに殺してやる」

「殺す気なのかよ！？」

レナードが本気で抗議の声を上げる。と、そこへ――。

「そうですね。レナードの為にも一思いに殺っちゃってあげて下さい」

突然割り込んだ第三者の声に、二人の動きは止まる。

「ディアン、いつの間に？」

「ノックはしましたよ」

ルークの少し引きつったような声の問いに、第三者である宰相の

ディアンは答えた。

「昨晩は、随分『おいた』をしてくれたみたいですね？」

「……」

ディアンの微笑みを含んだ声を聞いた二人はその場に固まった。

「いっその事、死んでいれば良かったものを、中途半端に生き残って――なんで助けたんですか？　レナード」

「俺かよ！！」

理不尽すぎるディアンの言葉に、レナードが堪らず声を上げる。

「『死人に口なし』と言うではないですか。生きている方が、事後処理が大変なんですから。あんな、居ても居なくても良いような、いや、寧ろ、いない方が世の為、人の為になった馬鹿を助けるなんて、バカですか？」

と、文句を言うディアンに、レナードは「泣いてもいいかな？」と呟いた。ルークはと言えば、『黙して語らず』の姿勢を貫いた。

今日はレナードの厄日らしい。

ちなみに、ルークの暴挙の原因は花に関係があるに違いないと確信していたレナードは、後ほど、花に訊いたのだが「ごめんなさい！　悪気はなかったんです！！」と、涙目で謝られ、逃げ去られたのであった。

だが、レナードにとって『知らない方が、幸せ』であるのは間違いないので、これでよかったのだろう。

22．長いものには巻かれろ。

「あ、すみません」

花は慌てて伸ばした手を引いた。

「いえ、こちらこそ」

同じように手を引いて微笑んだ男性を見て、花は頬を染めた。

――― ストライクど真ん中!! すごい好みの顔!!

その男性は、燃えるような赤い髪で眉は少しつり上がっているのに対し、それを和らげるかのように目尻の下がった翡翠色の瞳をしていた。

つり眉、垂れ目が好みの花は心の中でガッツポーズをした。

そんな花の心の中での称賛にはもちろん気付かず、男性は先程二人が同時に伸ばした手の先にあった本を取り出し、差し出した。

「はい、どうぞ」

――― こ、このシチュエーション!! これは、まさに王道!!

花は王立図書館にいた。

数日前にジャスティンに王宮を案内してもらった時から、ずっと気になっていた場所だ。

この王立図書館は王宮の中にあるのだが、紹介状があれば誰でも

立ち入ることができる為、花の警護の関係上、近づく事が出来なかった。

読みたい本があれば、セレナかエレーンにお願いすれば適当に見繕って持って来てくれるので不自由はない。だが、本好きの花としてはどうしても一度、実際に図書館を見てみたかったのだ。

それで、ルークに我が儘を言ってしまった。

ルークは今までこちらの理不尽な要求に文句も言わず、飲んでくれるだけだった花からの初めての我が儘を許した。

そして花は今、侍女服を着て侍女に扮しているのだ。

護衛もすべて利用者のような格好をして、さりげなくついている。

これはゆっくり見て回りたいと言う花の意向を受けて、用意してくれたルークの心遣いだった。堂々と大勢の護衛を付けた方が簡単だと言うのに。

花には知らせていなかったが、何度か花を狙って侵入者が青鹿の間に現れていた。別に花の命を狙った者に限ったわけではない。花を攫えば、マグノリア帝国皇帝との交渉の切り札にできる。

花への皇帝の寵愛ぶりが伝わるごとに、そんな思惑を持った者たちも増えていた。

「いえ、私は今度で構いませんから、お先にどうぞ」

そう言って遠慮した花に、男性は心配そうに訊いた。

「でも、それでは君が主人に怒られるんじゃないか？」

男性は花が、仕える主人の為に本を借りに来たと思ったようだ。

「いえ……あの、これは……自分の為についでに……」

しどろもどろに花は答えた。
いつの間にか一般客に扮したカイルが、本を選んでいるかのようにして傍に立っている。男の向こうには他の護衛もいる。
それに男は気付かないまま、花に微笑んで聞いた。
「セルショナードに興味があるの？」
本はセルショナードについて書かれたものだ。
「あの……海がとても綺麗だと聞いて……いつか行ってみたいと思って……」
実際はこれから戦争になるかもしれない国の事を知りたかったのだが、そんな事は言えない。
「そうなの？　嬉しいな。セルショナードはとても綺麗な所だから是非、遊びにおいでよ。歓迎するよ」
その言葉に花は驚く。
「セルショナードの方なんですか？」
「そう。だからこの本は君に譲るよ。ただ単に、俺たちの国がどんな風に書かれているのか気になっただけだから」
男はそう言うと、本を花に押しつけるように渡した。
思わず受け取った花に、男はまた微笑むと「じゃあね」と言って去って行った。
花はその姿を見送り、手元の本に視線を落とした。

――― 使者の人だったのかな？　それにしては、くだけた態度だったから、従者の人かな？

そう思った花だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「殿下、ご出立の準備が整いました」

「ザック、ここではリコだ」

「はっ！　申し訳ございません」

ザックの慇懃な態度に、リコは苦笑する。

「俺はここではお前の従者だ。マグノリアを出るまでは気を付けなければ……ザック様」

最後の方は自分にも言い聞かせるように言ったリコは、出て来たばかりの図書館に視線を向けた。

「護衛が五人に、更に隠れた術者が二人……ずいぶん過保護だな」

そう呟くと、燃えるような赤い髪に翡翠色の瞳をした男、リコはその場を立ち去った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

――― あれ？　レナード？

その後、他の本を物色していた花は、少し先にレナードがいる事に気がついた。

「レナード？」

図書館内の為、少し落とした声でレナードに呼び掛ける。

レナードはそれに気付き、花の方を振り向いて微笑んだ。それを見てレナードの方に近づいていた花は足を止めた。

「すみません。間違えました」

花の言葉に、レナードは面白そうに微笑んで言葉を発した。

「よくわかりましたね？」

「はい。レナードではありませんでした。間違えてごめんなさい。さようなら」

そう言って、踵を返した花だった。

『君子危うきに近寄らず』今が実行の時だ！

が、腕を掴まれてしまった。渋々、花はレナードのそっくりさんに向き直る。

護衛が現れないのは、危険人物ではないからだろう。

――― でも、すっごい危険なオーラが出てる！！

心の中で自分に警告を発するが、最早どうしようもないので、挨拶をすることにした。

「はじめまして。こんにちは」

一応侍女に扮しているので名乗らなかった。

すると、レナードのそっくりさんが爽やかに微笑んだ。

――――　こんなにドス黒い爽やか笑顔を見たのは初めてだ……。

そう思った花だったが、その後の男の言葉に納得した。

「始めまして、侍女様。私はこの国の宰相を務めております、ディアン・ユースと申します。以後、お見知りおきを」

――――　うわ！　これが噂の宰相さんだったか！　以後、お見知りおきしたくない！！　この場でこの縁、ぶち切りたい！！

花の本能が、これまでにないほど告げているのだ。

『この男、第一級危険人物なり』と。

それでも花は、かき集められるだけの猫をかき集めて、ニッコリ微笑んだ。

「ユース……と言う事は、やはり近衛隊長のレナードとご兄弟ですか？」

「いいえ。まったく関係ありません。赤の他人です」

また爽やかに微笑んで否定するディアンに、花も微笑み返す。

「まあ、そうでしたか。それは大変失礼致しました」

――――　って、んなわけあるかー！！　その、寸分違わない顔かたち、名字まで一緒で赤の他人の訳がない！！

心の中で激しくツッコミを入れた花だったが、逆らってはいけないオーラに素直に従うことにした。

『長いものには巻かれろ』素敵な言葉です。

23．ナンパでお茶会。

「図書館は楽しまれましたか？」

「ええ、とても。大体どんなものがあるのかも把握できましたので、満足しております」

もう我が儘は言いません。と暗に告げる。やはり護衛たちも堂々と守る方が楽だろうし、これ以上迷惑をかけるのは申し訳なかったからだ。

その言葉に更に爽やかに笑ったディアンは恐ろしい事を提案した。

「では、せっかくお会いできたのですから、これから一緒にお茶でもどうですか？」

――――なぜこれほどの爽やかな笑顔でナンパなセリフを吐いていながら、ここまで負のオーラを振りまけるのだろう……。

花はディアンの笑顔に戦慄したが、なんとか勇気を振り絞り、断ろうと口を開いた。

「あの……お誘いはとても嬉しいのですが……もう戻らないと……」

「大丈夫です」

――――何が？　何が大丈夫なの！？

思わずカイルたち護衛の方へ視線を向けるが、みんな申し訳そう

に目を伏せ、下を向いた。

――――　くそー！　見捨てられた！！

花はカイルたちを恨みたくなったが、しょうがない。自分が同じ立場なら、迷わずそうしただろうから責められない。仕方なく、ディアンの提案と言う名の脅迫を受けた。

「わかりました……では、お言葉に甘えまして……」

こうして、試練のお茶会開催が決定した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ディアンに連行されたのは、貴族達のサロンだった。

侍女姿の花とディアンがサロンに入室した途端、そこにいた貴族達が沈没船から逃げ出すかのように、我先にと消えて行った。

恐らくディアンが誰かを探しに侍女を連れて入って来たと思ったのだろう。

――――　この人……いったいどれ程の恐怖政治を行っているの？

マグノリア帝国の恐怖政治は二大巨頭によって行われており、ディアン以上にルークは臣下たちに恐れられている事を、花はまだ知らなかった。

レナードに言わせれば二人とも邪悪なオーラを纏いすぎて、もはや魔王と冥王にしか見えないそうだが。

「おや、空いていて助かりましたね」

そう言って爽やかに微笑むと、サロン付きの侍女にお茶の用意を頼む。

――――　いや、空いていたんじゃなくて、空いたんです。たった今！！

花は心の中で相変わらずツッコミを入れながら、勧められた席に座る。

そうして、お茶が運ばれてくるまでのとても短くて恐ろしく長い間、二人無言で微笑み合っていた。

――――　ここで目を逸らしたら負けだ！！　きっと殺られる！！

まるで獰猛な猛獣に相対した時のように、自分を叱咤して花は睨み――いや、微笑み続けた。

部屋には、花とディアンの二人と急きょ駆け付けたセレナの三人だけだった。

いくら皇帝の信厚い宰相とはいえ、皇帝の側室と二人きりになることは許されない。

ちなみにディアンはレナード並に魔力が強いらしく、護衛は扉の外に控えている。

そうして恐る恐るといったていで、サロン付きの侍女がお茶を運んで来てセレナに引継ぎ、下がった後、ディアンが口を開いた。

「そういえば、侍女様はハルンベルツ侯爵をご存知ですか？」

侍女姿のままの花を、嫌味のように『侍女様』と呼んでディアンは尋ねた。

「ハルンベルツ侯爵ですか？　何度か偶然にお会いしておりますし、素敵な贈り物を頂きました。それに三人のお嬢様方とも一度、お茶をご一緒させて頂いております」

「そうなのですか？　では今、生死の境を彷徨っているのはご存知ですか？　お嬢様方三人と仲良く」

「そうなのですか！？」

花は素直に驚きを口に出した。

――――　内容にも驚きですが、言い方にも驚きです。怖いです。

「ええ、昨晩の事なのですがね……」

「暴漢にでも襲われたのですか？」

色々賄賂も頂いたし、お見舞いの品でも贈ったほうがいいだろうか？　と思案していると、ディアンの口から更に驚きの言葉が出てきた。

「いえ、皇帝陛下のお力だそうですよ」

「陛下が！？」

「ええ。昨晩、セルショナードからの使者との晩餐の後に」

「そうですか……」

「ハルンベルツ侯爵もお嬢様方も、肋骨がすべて折れてしまって、いくつか臓腑に刺さり、また他の臓腑も圧迫によって損傷が激しいそうです」

「宰相様！」

淡々と怪我の具合を告げるディアンに、セレナが青ざめた顔で抗議の声を上げる。

女性に聞かせるような話ではない、ましてや皇帝の側室に話す内容ではない。

しかし、花はそれを聞いても少し顔色を悪くしただけで、また同じように答えた。

「そうですか……」

花は昨晩のルークの様子を思い出していた。あれほど苦しんでいたのはハルンベルツのせいなのかと思うと、ハルンベルツに同情よりも、怒りが湧く。

ディアンはそんな花を観察しながら紅茶に口をつけると、お菓子の載ったお皿を持ち上げた。

「この、チュシャの実のタルトはおいしいですよ？　おひとつどうぞ」

そう言ってディアンは、血のように赤い色をした実がジャム状に潰され、ベッタリとタルトに載せてあるお菓子を勧めてきた。

「ありがとうございます」

花はニッコリと微笑み、タルトの乗ったお皿から一つ取り、口へ

と運んだ。
それをまた、爽やかに微笑みながら見ていたディアンが口を開く。
「そういえば、このタルト……ハルンベルツ侯爵の好物でしたよ、確か。侯爵が少しでも回復されたら、お見舞いに如何ですか？」
――――さっきから、ネチネチネチネチ……このネチネチ宰相め！！
花は心の中で勝手にディアンを名付けてから、微笑んで答える。
「まあ、なぜ私が侯爵のお見舞いを？」
「なされないのですか？」
「ええ」
「では、陛下がなぜこのような事をなされたかは、お聞きにならないのですか？」
「何のために？」
花は微笑みながら、わからない、と言う顔をする。
例え侯爵に一片の罪がなくとも、皇帝が断罪をしたのなら、それは罪なのだ。それを側室である花が口に出す事はあってはならないし、見舞いをするという事は皇帝の意に反すると言う事だ。
それをわかっていて問うてくる宰相の真意を量ろうと、花は微笑んだままディアンから視線を外さなかった。
それを受けたディアンは爽やか暗黒笑顔ではなく、ニヤリと笑った。

あの、ルークの意地悪そうな笑みとよく似ていた。
どうやら、色々と試されていたらしい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「レナードって、双子だったんですね」

夕食後のお茶を飲みながら、花はポツリと呟いた。

「……会ったらしいな」

「はい」

「災難だったな」

「はい」

実に簡潔な応答が続いたが、次に花は疑問を口にした。

「ルークとレナードと……ディアンは幼馴染みなんですね？」

「ああ、あいつらは身分も申し分なく、年も同じだったから、俺が生まれた時から将来の俺の近侍として、一緒に育てられたんだ。勉強も遊びも常に一緒だったが……何をしても、いつもディアンが一番だったな」

「え？　でも……」

魔力はルークが一番ではないのか、と花は疑問に思ったのだが、その疑問にルークはすぐに答えてくれた。

「子供の時は皆、ほとんど魔力は持っていない。体の成長が止まる十八歳くらいから、魔力は増していくんだ。魔力が急激に伸びだしたら、体の成長はほとんど止まる。まあ、生まれた家系で、だいたいその子供の魔力がどれくらいになるかはわかるもんだ。たまに例外もあるがな」

「なるほど」

「あいつは子供の頃から、色々な意味で最強だったな……レナードが体を鍛えて騎士になったのも、元はあいつに……」

そこで、言葉を切ったルークの後を花は継いだ。

「勝つためですか？」

「いや……殴られても、蹴られても、痛みに耐えられるように、と……」

「レナード……」

――― 前向きなんだか、後ろ向きなんだが……。

なんだか花は色々とレナードが気の毒になってきた。

あのネチネチ宰相の弟に生まれたばかりに、いらない苦労をしたのかと同情する。

その時、ふと思った事を口にしてしまった。

「ディアンって……鞭とか持ってそうですよね」

「ん？　鞭は持ってないぞ？　あいつが持っているのは……いや、やめておこう」

「何ですか！？　なんで途中でやめるんですか！！　気になるじゃないですか！！」

本気で言ったわけではない言葉に、妙に気になる言葉を続けられて花はルークに詰め寄った。

「いや……ハナ、やはり人間知らない方が幸せな事もある」

朝と同じ事を言われたが、今度は納得できなかった。

「ええ！？　なんですか！？　それ！！　気になって眠れないじゃないですか！！」

「……じゃあ、気になっておけ」

「えええ！！」

＊＊＊

そんなやり取りがあったものの、結局、その日の花は、二分で眠りに落ちた。

「――やっぱりか」

ルークは一人呟いたのだった。

24．バカは風邪ひかない。

花は、雨の降る景色を自室の窓から見ていた。
今日は少し肌寒く、居間の暖炉に火が入れられている。
これからマグノリアは冬を迎えるらしい。このユシュタールにも四季があるのだ。
ただ、冬でもかなり北に行かないと雪は降らないし、夏は南に行かなければ暑さを感じない。なので、このマグノリアの帝都サイノスではあまり夏は感じられず、春・秋・冬といった感じらしい。

花は窓の外に目を向けたまま、ずっと考えていた。
自分の使命について。
あれから毎晩、ルークにあの歌を歌っている。ルークは嬉しそうに聴いてくれるので、花もとても嬉しくなる。歌が終わると、ルークは花に軽くキスをし、そして二人で眠る。
花はずっとこのままでいたいと願ってしまう。
初めて会った時の、苦しそうな悲しそうなルークはもう見たくない。今なら自分はルークを癒せているのだと信じられそうだ。
でも、このままでいてはいけないとも思う。
『神様』は花にユシュタールのみんなを癒してほしいと言った。
だとしたら、ずっとルークの許に留まるわけにはいかないのではないか。ユシュタールはとても広いのだから。

――――でも、どうやって世界中に音楽を……歌を……？

ここにはテレビもラジオもない。とすれば、吟遊詩人のように旅をしながら歌うのか。
なぜか『毎度、ご町内を大変お騒がせしております。こちらは…

…』と、古紙回収業者のように、軽トラに乗った花がマイクを持ってユシュタール内を歌いながら回る姿を想像してしまった。

――― ないないない！！　いや、軽トラに乗るんじゃなくても、マイクを持つんじゃなくても、自分の歌を聞いてくださいって回るなんて恥ずかしすぎる！！　それに……。

花は考え込んでしまった。

ユシュタールのみんなということは、セルショナードも、と言う事なのだ。

でも花はセルショナードにいい感情が持てなかった。セルショナードの民が悪いわけではないとわかっているが。

もし戦争が始まれば、一番に傷つき、苦しむのは民だ。いつも民は為政者の犠牲になるのだから。

だからといって、セルショナードの民に罪はない、と割り切る事ができるだろうか。

――― 『神の使徒』失格なんじゃ……。

そう思うと、どんどん弱気になっていく。

それにずっと考えている事がある。

もし、この世界中に音楽を奏でて癒しを届けられたなら、その後はどうなるんだろう？

『神様』は言っていた。「花は死ぬ予定だった」と。

だとすれば、『神の使徒』としての役目を終えた後は、天国へと旅立つのか。

考えれば考えるほどわからず、熱が出そうだった。

――― まあ、いっか。なるようになるでしょ。

久しぶりに、花は「まあ、いっか」と考えることを投げ出した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ハナ様の侍女のセレナです」

訪問者の名を衛兵が告げた。

「入れろ」

花の侍女が訪ねてくることなど初めてだったので、ルークは花に何かあったのかと心配になった。

「ハナに何かあったのか？」

セレナが入室してきた途端、ルークは問い質した。

「ハナ様が、御気分がすぐれないとおっしゃったので、先程医師に診て頂きましたところ、お風邪を召されてしまったようです。それで――」

セレナはまだ言葉を続けていたが、ルークは最後まで聞かずに立ち上がるとパッと消えた。どうやら花の下へ転移したらしい。

「『うつすといけないから、今日は来ないで欲しい』との言付けだったのですが……」

セレナは呟き、それを聞いたレナードは吹き出した。

「セレナ、青鹿の間まで送るよ」

そう言ってレナードはセレナと一緒にルークの執務室を出たのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

薬を飲んで眠っていた花は額に誰かの手を感じ、目を覚ました。

「――ルーク？」

「起き上がらなくていい。そのまま寝てろ」

ルークは起き上がろうとした花の肩を押さえて優しく言った。

「ルーク……うつすといけないから、今日は来ないでって頼んだのに……」

花は少し怒ったように呟いた。

「大丈夫だ。俺は大人になってから、風邪も、他の病気にも罹った事はない」

「……バカは風邪をひかない」

思わず呟いた花に、ルークはペチっと花の額を叩いた。

「痛い、酷い、病人に優しくない」

「優しくされないような事を言うからだろう。魔力が強ければ、病気にもならないんだ」

「えー、なんでも魔力だね。私、ラ・フランスだ」

「なんだ、それは？」

「洋ナシ（用なし）です」

「……ハナ、大丈夫か？」

呆れたルークだったが、いつもの花とかなり様子が違うので急に心配になってきた。

「んー大丈夫。季節の変わり目にいつも風邪ひいちゃうんです」

「そうか。治癒魔法をしてやろうか？　早く楽になれるぞ？」

「痛いのイヤ」

なんだか注射や点滴を思い出してそう言ってしまった。

「痛くはない。むしろ、気持ちいいぞ」

「なんかそれ、いけない誘惑みたい。ルークのスケベ」

「……本当に、大丈夫か？」

そう言ってルークは花の額に手をやる。かなり熱が上がって来たようだ。

「んー花は只今、病気療養中の為、黒い妖精のブラック花ちゃんが対応しております」

「ハナ……」

「ねえ、ルーク」

「ん？　なんだ？」

「ずっと、傍においてね。離れないで……」

その言葉を最後に、花はまた眠ってしまったらしい。

「……」

――――　なんだ？　このかわいい生き物は！

ルークは思わず花を抱きしめようとして、堪えた。というか、悶えた。

内心ダダ漏れの黒い妖精、ブラック花ちゃんは、ルークに『萌え』という感情を教えたようだった。

次の日、すっかり熱の下がった花もまたすべてを覚えていた為、ブラック花の言葉に悶えた。

羞恥のあまりに。

25．微笑み合戦の行方。

――― ピアノ弾きたい。

この世界にきてもうすぐ二十日になる。花はそれだけピアノに触れていなかった。

今まで毎日、何時間もピアノを弾いて過ごしたのに。

もし今ここにピアノが現れても、思うように指が動かないだろう。

――― ピアノを弾いて、誰にも聞かれない場所で思いきり歌を歌って、そしてピアノが弾きたい。

日々、花のピアノへ思慕は募るばかりだった。

しかし、そんな花の気持ちを少し慰めてくれるような話が、お昼にもたらされた。

「街の楽師を、三日後に王宮に招くことにした」

ルークの言葉は、ピアノへ、また故郷へ焦がれ、落ち込んだ花の気持ちを一気に浮き立たせてくれた。

――― 三日後か……どんな楽器があるんだろう？

セレナたちに訊いても、どうも要領を得ない。どうやら、楽師たちが奏でる楽器、音楽は庶民たちのもので、貴族階級には縁がないらしい。

ちなみにセレナもエレーンも、そして護衛騎士たちも、みんなすべて爵位をもった貴族の子女たちだ。

――― そんな高貴な方々に仕えてもらうなんて、なんか色々すみません。

花は旧華族の出身とはいえ、所詮今は一般庶民な自分の為に、いつも気を配り世話をしてくれるセレナとエレーンに、また自分の身を盾にしてでも守ってくれるだろうカイルやジョシュ、他の護衛達に感謝した。

もちろん、何度か花を狙った侵入者がいた事は気付いている。でも、ルークも皆も何も言わないので、気付かないふりをしていた。

――― 私は、安心して彼らに守られていればいい、私が不安がれば、彼らの矜持を傷付ける。

そうした花の態度に彼らはいつしか、義務から忠誠へと気持ちを変えていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ルークとの昼食の後、浮き立つ気持ちを王宮を散策して紛らわしていた花だったが、向こうから歩いてくる人物を見て、気分は急降下した。

――― 回れー、右!!

自分に、コッソリ掛け声をかけ、本当にその場で回れ右をした。

従っていた侍女のセレナも護衛も、突然の花の奇行に驚きはしたが、黙って付いて来てくれた。

そして、角を曲がった途端――

「ぎゃあ！」

花は淑女にあるまじき声をあげた。心の中とルークの前ではよく上げているが。

「おや、これはハナ様、偶然ですね」

そう言って、先ほど廊下の向こう側にいたはずのネチネチ宰相は、爽やか暗黒笑顔を見せた。

「ええ、本当に。こんにちは、ディアン」

ニッコリ微笑んでみせた花だったが、いつもの貴族達に見せるような優雅な微笑みではなく、心なしか引きつっていた。

「はい、こんにちは。では、お暇そうなので、お茶にしましょう」

――――　強制ですか……。

こちらの気持ちも予定も聞く事もなく、「お暇そう」と、決定してしまったお茶会だった。

そしてまた、貴族たちのサロンまで強制連行され、また貴族達はサロンから逃げ出したのであった。

「ハナ様、順調に作業は進んでいますか？」

お茶が運ばれてくるまでの間、またもや微笑み合戦が無言で繰り広げられた。

それからお茶を飲む間の一時休戦後ディアンが口を開いたのだが、何の事かさっぱりわからない花は素で聞き返した。

「？……何の作業ですか？」

「子作りです」

ブフッー！！

花は口に含んだ紅茶を、また盛大に噴き出した。
目の前に座るディアンに向かって。

「す、すみません！！」

何日か前とまったく同じ状況に陥った花だったが、よくよく見ると、そうではなかった。

「いえ、構いませんよ？」

そう爽やかに黒く微笑むディアンに被害はまったくない。
二人の間にあるテーブルには、花が噴き出したお茶が散っているのだが、よく見れば、ある一定の位置からディアン側には一切散っていなかった。

――― 魔法？

ハンカチで口を拭きながら、花は思った。
側ではセレナが慌てて浄化魔法を行っている。
しばらくすると落ちつき、また会話は繰り広げられていくのだが。

傍目には和やかな雰囲気で、会話しているように見えただろう。
実際、和やかだった。花の心の中を除いて。
会話内容を要約すれば、「子作りにしっかり励め」だ。

――― もし、『表向きだけの側室』だなんて、この人が知ったらどうするんだろう……。

そんな恐ろしい事を考えて、花は身を震わせた。

――― よくわからないけど、絶対ヤバイ!! ばれないように気をつけないと!!

そう心に誓った花だった。
その後も、和やかに見える会話が進んでいたが、突然、パシンッ!! と何かが割れる音が響いた。

途端――

「死ね!! 宰相!!」

と言う怒号が聞こえたと同時に、ドンッ!! と、衝撃が花を襲った。
一瞬、目を瞑った花だったが、目を開けると花の前にはセレナが庇うように立っていた。幸い、花もセレナも無傷のようだ。どうやら、見えない壁のようなものが、突然現れた侵入者二人の攻撃から守ってくれているらしい。
その壁はセレナではなくディアンが張った結界だと、なぜか花は理解してディアンを見る。
と、ディアンの胸の辺りが、ポウッっと光っているのが見えた。
そこまで本当に一瞬の出来事だったのだが、次に花が意識した時

にはルークの腕の中にいた。

「ハナ……」

ホッとしたような、ルークの声が耳のすぐ近くで聞こえる。

ルークに後ろから守るように抱きしめられているのだ。側にはレナードも険しい顔で立っていた。どうやら、異変を感じてすぐに駆けつけてくれたらしい。

花は自分の体から力が抜けるのを感じた。

やはり、かなりの恐怖を感じていたらしい。ルークがいるだけでこんなに安心できる。

そうして落ちついた思考で、ディアンと侵入者たちに視線を向けて、驚いた。

――――あれ？

もう一人増えている。

いや、正確には一人とは言わないのかも知れない。

ディアンと侵入者の間に立っていたのは、浅黒い肌に漆黒の髪、金色の瞳をした超絶美形。だが、花の目を引いたのはその容貌ではなく、その漆黒の髪の間から覗く、羊のようにくるりと巻いた角。

その彼？　が狂気染みた笑顔で、侵入者二人と戦って――いや、いたぶっていた。

その後ろで、ディアンは腕を組んだまま爽やか暗黒笑顔で立って見ている。そして「アポルオン、殺してはいけませんよ」と言い、アポルオンと呼ばれた彼は「はい！」と嬉々として答えた。

――――ご主人様？

そんな言葉が花の脳裏を掠(かす)めた。

その後、なぜか中々開かなかったらしい扉から護衛たちが飛び込んできたが、侵入者たちの姿を見て足を止めた。
二人は『世界ビックリ人間大賞』なるテレビ番組に出演する軟体人間のように背中が反り返ったような姿勢で呻いている。何か見えない物に縛られているようだ。

――――体が柔らくて、良かったね。私なら無理。

と思った花だったが、バキバキと骨の折れるような音がしていたので、決して良かった事はないだろう。
そうして、二人は駆け付けた警備兵によって引き立てられていき、護衛もまた、花の無事と、皇帝が一緒にいるということに安堵して、扉の外へ出ていった。
扉が閉められた途端、ニコニコしていたアポルオンが、ディアンに向き直って更に笑みを深くした。

「役に立ったでしょ？　ディアン様」

そう言ったアポルオンにディアンは微笑みながら、いきなり蹴りを入れた。

「え？」

花は思わず驚きの声を上げた。
アポルオンは、ディアンに蹴り飛ばされて床に蹲る。
そのアポルオンの頭にダンッと足を乗せてグリグリ踏みつけながら、ディアンは爽やか暗黒笑顔で言った。

「どこがどう、役に立ったのか説明してほしいですね？　私の役に

立ちたいと思うなら、私に防壁魔法を発動させるなんて鈍間な事をしていてどうするんです？　あの馬鹿共が侵入してくる前に、いや、生まれる前に殺しておきなさい。それよりも、寧ろお前が私に殺されなさい」

ディアンは、更にアポルオンを踏みつけた足に力を入れる。

「え？」

花はまた、驚きの声をあげた。

しかし、すぐに我に返ってディアンを止めた方がいいのでは？と、ルークの方に向き直ったが、ルークもレナードまでも、諦めたような表情で首を振る。

もう一度二人に向き直った花が見たものは、踏みつけられて悲痛な――いや、恍惚な表情をしたアポルオンだった。

「ディアンさま～。痛いです～。ゾクゾクします～。でも、それ以上やられちゃうと、ちょっとヤバいです～」

「え？」

花は更にもう一度、驚きの声をあげた。

先ほどの狂気染みた姿からは想像もつかないような、嬉しそうな声をアポルオンは上げている。

それにディアンは「なら、逝ってしまえ」と踏みつけていた足を上げ、アポルオンは「え？　ちょ、それはちょっと！！」と悲鳴を上げたかと思うと、ダンッ！！　とディアンが足をもう一度強く踏み下ろした時には消えていた。

「チッ！！」

ディアンの舌打ちが聞こえる。
花はディアンの胸元がまたポウっと光っているのに気付いた。よく見るとそれは、胸元に挿してある黒く艶のあるペンだった。

「……ルーク、今のは……？」

花は少し呆けたような様子でルークに訊いた。

「――あれは魔ペンだ」

「え？」

「魔ペンだ」

「え？」

こんな言葉は言いたくない、といった屈辱的な表情をしているルークに、花はもう一度言わせてしまった。

「魔ペンだ」

「……魔剣じゃなくて？」

花の言葉に、返事はなかったのだった。

26．不可侵の森と至極の宝。

このユシュタールにはいくつかの『不可侵の森』と呼ばれる森がある。

その森に、人間は立ち入ってはならない。なぜなら『不可侵の森』は、魔物たちがすむ場所だからだ。一度（ひとたび）、森へ足を踏み入れたなら、立ちどころに魔物たちに襲われる。

しかし、伝説は語る。

『不可侵の森』の最奥まで行き着けば、至極の宝を得る事が出来るだろう。と。

＊＊＊

「で、行ったんですか？　ディアンは」

「行ったんだ」

花の質問にルークは淡々と答えた。

あれからルークはディアンに「お前はもう、ハナには近付くな」と命じた。

どうやらディアンを狙った侵入者というか、暗殺者は後を絶たないらしい。そして、それをディアンは楽しんでいるらしいのだが、すごく迷惑な話だ。

その後、花はルークに青鹿の間へ送ってもらい、ルーク達は執務に戻った。

そして今、夕食後のお茶を飲みながら、例の『魔ペン』について

話を聞いていた。

「確か、俺が皇太子時代だから……七十年は前になるが「ちょっと、行ってきます」と嫌がるレナードを引き摺って行ったな」

「レナード……」

花は、その時の光景が目に浮かぶようだった。

「その時に何があったのかは知らん。ただ、レナードは酷く憔悴して戻って来たな」

「……一応、聞きますが、ディアンは？」

「腹いっぱい肉を喰った後の猛獣のような顔をしていたな」

「……」

花はやはり、その時の光景が目に浮ぶようだった。

「まあレナードにとって幸いな事に、レナードはそこで魔剣を手に入れた」

「魔剣？」

やはり魔剣はあったのかと、花は驚いた。

「ああ、今佩いているのがそうだ。念の為に言っとくが、絶対触るなよ。下手に触ると、魂を食われる」

「……気をつけます」

さらりと言うルークに、花はひいた。

――――　そう言う事は早く言っといてほしいな。万が一、何かあってからじゃ遅いよ。

「それで、あの魔ペンはいったい……？」

花のその言葉に、ルークは思いっきり顔を顰めた。

「ディアンの後を付いてきたんだ」

「はい？」

「飛んで」

「はい？」

さっぱり、要領がつかめない。

「あの魔ペンが、ディアンの後ろを飛んで付いてきたんですか？」

花はなんとか話をまとめて聞いてみたが、ルークから返って来た答えは違った。

「いや、飛んで付いてきたのは魔剣だ」

「……」

なんだか、さっぱりわからない。仕方なく根を詰めてルークの話を聞いた。
ルークはどうも、あまり思い出したくない出来事らしかったが、それでもゆっくりと話してくれた。

＊＊＊

レナードとディアンが不可侵の森から帰還した時、ルークは驚いた。
ディアンの後ろに、ふらふらと剣が飛んで付いて来ているのだから。
だがディアンはそれに全く構わずに、無視を続ける。仕方なくルークは剣について訊いてみた。

「ディアン、あれは何だ？」

「はい？　あれ？　何の事ですか？」

「いや、お前の後ろに飛んでいる剣だが」

「はい？　何をおっしゃってるんですか？　耄碌なさいましたか？」

「……」

ルークはそれ以上、問い質す事をやめた。
そして、ルークも同じように無視することにしたが、後ほどレナードに聞いたところによると、あれはレナードの魔剣と対になる魔剣らしい。
それ以上はレナードも語らなかったので、訊かなかった。聞いても碌なものではない事はわかっていたからだ。

そうして、ディアンが後ろに付いてくる魔剣の存在を無視して一か月が経った頃、ついにキレた。

――魔剣が。

「おい！　お前！！　いつまで俺を無視してるんだ！！」

魔剣から姿を現したアポルオンはディアンに詰め寄った。そして……泣きを見た。

更に違う世界を見た。というか、扉を開いてしまったらしい。

そうして、今のアポルオンが出来上がったわけだが、魔剣がなぜ魔ペンになってしまのか。

それは当時、まだ宰相ではなかったが、文官として働いていたディアンが剣を持ち歩く事などするわけもなく、焦れたアポルオンが常にディアンが持ち歩いていたあのペンに乗り移ってしまったのだ。

ディアンはあのペンを大事にしていたらしく、かなり憤ったが、その大事なペンに当たるわけにもいかず、アポルオンがペンから出て来る度に、先ほどのようなやり取りになるらしい。

＊＊＊

「そんなに大事なペンだったんですか？」

ディアンが、そこまで大事にするペンというのが気になった。

「ああ、ジャスティンから貰った物らしい」

「ジャスティンから？」

「ああ、ジャスティンは俺達三人の教育係だったから、随分、世話になった。たぶんディアンはジャスティンにだけは頭が上がらない

んじゃないか？」

「ジャスティン最強ですね」

すごく意外な新事実である。

花はもう一つ、気になる事を訊いた。

「抜け殻になった、剣はどうなったんですか？」

「今は、ただの剣となってしまったから……恐らく、レナードが大事に持ってるんじゃないか？」

「レナードの対の魔剣……魔ペンになっちゃったんですね……」

「――ああ」

「レナード……」

レナードにも、歌を聞いてもらった方がいいな。と思った花だった。

27．空気を読め。

夕の刻に入った頃、ディアンがルークの執務室へ、ノックと同時に入ってきた。
ルークはそれを見て顔を顰めた。この時間に顔を出すディアンは碌な話を持って来ない。
そして今回もその通りだった。

「陛下、早く子どもを作ってしまって下さい。まさか、しばらくは二人きりを楽しみたい、などとバカな事は思ってないでしょうね？あなたのような、地位と顔しか取柄のないような性格の悪い男、さっさと仕込んでおかないと、あのように頭のある娘には逃げられてしまいますよ。ハナ様が我に返られる前に、お早くお願いいたします」

「……」

ルークはこの時「お前にだけは、言われたくない」と言う言葉を飲み込んだ。
ディアンに何かを言えば、百倍になって返ってくるからだ。
言いたい事を言って満足したのか、ディアンはさっさと帰って行った。

「レナード、あいつをなんとかしろ」

「謹んでお断り申し上げます」

「申し上げるな」

「無理です」

ルークの八つ当たりのような言葉に答えたレナードだったが、その後、思わずひとり言のように呟いた。

「それにしても、ディアンに気に入られるなんて、ハナも気の毒な……」

「……そうだな」

それにはルークも同意せざるを得なかった。

「だが、ディアンの言い分じゃないが、ハナがお前の子を生むのが一番、貴族たちへの牽制になるんだがな」

今、ルークの執務机に上にあるのは貴族達からの正妃候補の名簿だった。花が側室になったらなったで、今度は「正妃を」と煩い。

「……それができれば、苦労はしないがな」

最初に『表向きだけの側室』だと言ってしまったのだ。

その言葉にルークは縛られていた。

思わず呟いたルークの言葉にレナードは反応した。

「――お前まさか……まだハナに手を出していないのか？」

「……悪いか？」

「いや、悪くはないが……」

レナードは驚きを隠せなかった。
ルークとは長い付き合いなので、何を考えているかなど大体わかる。
だから、ルークが本気で花に惚れてしまったのもわかっていたし、花の存在のお陰でルークの心が安定している事に安堵もしていた。
そんな奇跡をもたらしてくれた花にレナードは感謝していたし、ルークの為に本気で花を守ろうと誓っていた。
――― だが、まさか、毎晩一緒に寝ておきながら、まだ抱いていないとは……。
それだけ、大事にしているという事なのか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「へっくしょいっ!!……ちくしょうめぇ」
「まあ、ハナ様、お寒いですか？　少し暖炉の火を強くしましょうか」
淑女らしからぬ、と言うより、女性らしからぬクシャミをした花だったが、セレナはそれには触れず、心配して声をかけた。
「いえ、大丈夫です」
花はうっかり地が出てしまったクシャミに顔を赤らめながら答えた。

――――　ううん。失敗した。でもクシャミくらいは気持ち良くしたいよね……。

そんな事を考えながら、花はまた目を瞑った。

今、花はセレナに化粧をされ、エレーンに髪を結ってもらっている。

今日は花が初めて公式の場に出るという事で、二人はかなり気合を入れている。

宮中で晩餐会があるのだ。

最近、緊張の高まっているセルショナードとの交渉に力を注いでくれている臣下を労うためと言う名目で開かれる晩餐会。

それに街の楽師を呼んでいるので、皇帝の寵妃である花にも楽しませようと皇帝が花も呼んだ、ということになっている。

いよいよ楽師たちを見る事ができるのだ。

随分回りくどい事だが、宮中のややこしい仕来(しきた)りの為らしい。

そうして花は相変わらず、十人並みは十人並みなりに頑張ったという仕上がりになったのだが、セレナとエレーンは手放しで賞賛してくれるので、花は居た堪れなくなったのだった。

時間になりセレナに付き添われて広間に入った花は、全ての席の末席へと案内された。セレナはかなり憤っているが、当然と言えば当然なので花は気にしなかった。

例え皇帝の寵妃とはいえ、花は何の身分も持たないのだ。

それでも普通は皇帝の側に配されるものらしいが、悪意ある誰かの差し金なのだろう。

――――　私は全然、全く気にしないんだけどな……いっそのこと床に正座してもいいくらい。

ふかふかの絨毯を見ながら花は思った。そしてセレナを笑って宥めながら、用意された席に座る。
花はとにかく楽器に、音楽に触れられるだけで十分だった。

しばらくするとディアンが現れ、ルークの入室を告げた。
レナードを供に入ってきたルークは花を目に留め、次に他の者達を見回した。
一気にその場の空気が凍りつく。
花はルークの冷たい怒りを感じた。それに驚きつつも花は笑った。
ルークに向けて、満面の笑みで。
ルークの怒りは花を思っての事なのだ。
どうかその怒りを収めて欲しい。

――――大丈夫。

そんな思いを込めて、花はルークに笑いかける。
ルークは、花の微笑みを浮かべた顔をじっと見返した。
しばらく二人は見つめ合っていたが、ふとルークの怒りが緩んだ。
と、同時にその場の空気も緩和する。
その場にいた者たちは、詰めていた息を吐き出した。
一部の愚かな者たちは、花の笑顔を「さすが、陛下に媚びるのが上手い」と侮蔑したが、聡い者たちは花の微笑みによる無言の説得に感謝していた。
そしてこの席次を仕組んだ者を呪った。
もし皇帝が怒りをとかなければ、恐らくこの場にいた者達全員が、なんらかの処分を受けただろう。
そんな事もわからない愚か者に怒りを覚える。

そうして始まった晩餐はどこか緊張をはらんだものだった。

更に愚か者は悪意を以って、この席次を決めていた。
花の隣の席に着いたのは、多くの女性と浮名を流しているジェームズと言う子爵であり、少年のように悪戯っぽい瞳を輝かせた優しい顔の青年だった。
多くの貴婦人たちは、ジェームズの巧みな話術に引き込まれ、時折見せる少年のような眩しい笑顔に虜になった。そして、悪戯っぽい瞳が急に真摯な眼差しになり、甘い言葉を囁かれると、完全に落ちてしまうのである。
一方、ジェームズも自惚れが強く、自分に靡(なび)かない女性はいないと思っている。それが例え皇帝の側室だとしても。
愚か者はそんなジェームズを花の隣に配し、少しでも花がジェームズに惹かれればいいと、そして、皇帝の不興を買えばいいと願ったのだった。

花は怒っていた。
せっかくのおいしい食事をゆっくりと食べたいのに、隣に座ったジェームズと言う子爵がひっきりなしに話しかけてくる。
しかも、その話の内容が全く面白くない。
花は一生懸命、愛想笑いを浮かべて適当に相槌を打っているだけなのに、そんな花には気付かず、ひたすらしゃべり続けている。

――― 空気読め!! このＫＹ野郎!!

花は心の中で叫びながら、なんとかこの男の口を閉じさせる方法はないか、今この場にホッチキスがあれば留めてやるのに、と考えていた。
そんな二人のやり取りを、周りの者達はチラリチラリと窺っていた。一部の者は嬉々として、一部の者は恐々として、一部の者は顔を顰めて。

そうして同じように皇帝を窺う。皇帝は無表情に二人の様子を見ていた。

ルークはなんとか怒りを抑えていた。

目の前で繰り広げられる馬鹿気た光景に。

花は明らかに愛想笑いを浮かべている。それに気付かず、口説き続ける馬鹿な男を殺さずにいるのは、偏(ひとえ)に、花がこの後の楽師たちを楽しみにしていたからだ。

そして何より、この席次を仕組んだ愚か者に憤りを覚える。この場を見渡せば大体が想像つくが。

この場で嬉々としている者達の、余りの愚かしさに笑いさえ込み上げてきていた。

ジェームズは相変わらず花の愛想笑いに気付かない。

いい加減うんざりした花は思わず溜息をついてしまった。

それを何を勘違いしたのか、ジェームズはテーブルに置いていた花の左手を握り締めて言った。

「僕は、あなたの愁いを晴らしてさしあげたい」

一瞬、呆気に取られた花だったが、すぐに嫌悪の為に吐き気がしてきた。

――――　キモすぎる！！

すぐさま手を引き抜くと、握られた左手をナプキンでこれ見よがしに拭いた。

そして、そのナプキンを床に捨てたのだ。

それは余りにも、あからさまな拒絶だった。

28．マナーは守ろう。

食事中に自ら物を落とすなど、大きく礼儀に反している。
ナプキンを床に落とした花は、それを犯してまでジェームズに対して強い拒絶を表したのだ。

ルークはジェームズが花の手を握ったのを見た瞬間、怒りが頂点に達し攻撃魔法を発動しかけた。
しかし、花のキッパリとした態度にそれを思い止まる。
ルークはそれほどの怒りを露わにした花を初めて目にして驚いたのだ。
それによって少し冷静になったルークは、側に座っているディアンに声をかけた。

「ディアン……」
「わかっています」

ルークの言葉を最後まで言わせず、ディアンは答えた。
ディアンもかなり怒っている。
それを感じたレナードは自身の怒りも忘れ、ジェームズに憐憫の情を抱いた。自業自得とはいえ、この先彼に待ち受ける地獄を思うと祈らずにいられない。
そして、ルークは立ち上がった。

その瞬間、広間は静寂に包まれた。
皆、呼吸さえも止めてしまったかのように。
ルークは花の下へと歩を進めた。
ジェームズは花の態度に訳がわからないとポカンとしていたが、

ルークを目の前にしてやっと自分がどれほどの愚かな事をしていたかに思い至ったようだった。

「へ、陛下……」

余りにも愚かなジェームズは色を失くした顔で慌ててその場に立ち上がるが、謝罪の言葉さえも口に出す事が出来ない。

そんなジェームズを全く無視して、ルークは花だけを見つめた。

そしてルークを目の前にして立ち上がった花を、ルークはそのまま抱き上げた。

「え？」

花は思わず声をあげた。

瞬間、花とルークの姿がその場から消える。

「え？」

それはジェームズをはじめ、その場に居た全員の言葉だった。

＊＊＊

花は気が付くと、ルークにお姫様抱っこをされたまま先ほどの広間とは全然違う、書斎のような部屋にいる事に気付いた。

「え？」

花は再び驚きの声を上げた。

そこはルークの執務室だったが、花はそれを知らない。

「ルーク？」

伺うように声をかけた花をルークはその場に下ろした。

「ルー……！？」

ずっと黙ったままのルークにもう一度声をかけようとした花は、途中でその言葉を遮られた。

「ん！？」

ルークの唇で唇を塞がれていた。

言葉を発する為に開いていた花の口の中に、ルークの舌が侵入してくる。

あまりに突然の事に花は後じさるが、すぐに壁に阻まれた。そのまま花は壁に押し付けられて、ルークの貪るような深い口づけに、なされるがままになってしまった。

それでもなんとかルークを押しやろうと、ルークの胸を押したり叩いたりしたが、すぐにその手を捕らわれてしまい、為す術もない。

「ル……や……」

唇の隙間から洩れる声は言葉にならない。

余りにも激しく長いキスから解放された時には、花はグッタリしていた。

それを支えるようにルークは花を抱きしめた。

「ルーク……」

なんとか言葉を発したが、後が続かない。
そのまま暫く無言でいた二人だったが、やっと呼吸を整えた花が改めて言葉を発した。

「いきなり何するんですか!?　私を殺す気ですか!?　息が出来ないじゃないですか!!」

「ハナ……」

ひどく怒った様子の花だったが、どこか焦点がずれているような気がする。

「窒息するじゃないですか!!　私は呼吸(いき)をするのが苦手なんです!!」

「ハナ……それは人間としてどうかと思うが。まるで、魚が「泳ぎが苦手です」と言っているようなもんだぞ」

「何言ってるんですか?　魚はしゃべりません!!」

「……」

どんどん話が逸れていってるが、それが花の照れ隠しだと言う事は、抱きしめた花から伝わってくる気持ちでルークにはわかっていた。

「ハナ」

「……なんですか?」

優しく呼びかけるルークに、花は不貞腐れて答える。

「苦手なら練習すればいい」

「え？――な！？」

そして、また唇を塞ぐルークに、未だ抱き締められたままの花は抗う術がない。

「や、ルーク……」

先程よりは短いキスに花はなんとか声を出すが、再び唇を塞がれる。

何度も何度も繰り返される深く短いキスに、再びグッタリとした花だったが、ルークはそのままキスを頬へ、耳へと移す。

と――

「ぎゃあああああ！！」

花の悲鳴が部屋に響いた。

「な・な・なな、何で耳に舌を入れるんですか！？」

いつかの朝のやり取りのように、花は左耳を手で押さえ真っ赤になっている。

「ん？　消毒だ」

「何のですか！？」

訳のわからないルークの言葉に、花は狼狽える。

「あの馬鹿の声を耳に入れただろう？」

「意味がわかりません！！」

動揺する花に構わず、ルークは耳を押さえたままの花の手に口づけた。

そして――

「いたっ！！」

その手にそのまま噛みついた。

「な、何するんですか！？」

「消毒だ」

先程と同じやり取りが続く。

「歯形が付いてるじゃないですか！？」

痛みではない何かに、花の目に涙が滲む。

それを見たルークは再び優しく花を抱きしめて言った。

「ハナ、泣くな……襲いたくなる」

その言葉に花の思考は停止した。

それにルークは苦笑して、花の額に優しくキスをする。

「さて、戻るか」

そうして、今度は部屋の扉から外へ出た。

広間へ戻った花はそこにジェームズが居ない事に気付いたが、何も言わず席につく。

食事中に席を立ち、あろうことか花を抱き上げ消えた、余りにも大きく礼儀に反するルークの行動を諌める者はもちろんいない。

ただ、席に着いたままじっと下を向いて頬を紅潮させた、心なしか、目に涙が滲んでいるような花の姿を見た一同は、「何をしたんだ!?　何を!」と、コッソリ心の中で皇帝に突っ込んだのだった。

29．猫に鈴、犬に首輪。

――――　くそー！　ルークの変態！！

花は俯いたまま自身の膝の上に乗せた左手の甲に付いている歯形を見ながら、心の中で悪態を吐いていた。

そしてチラリとルークを窺う。

と、ルークと目が合い慌てて逸らす。

＊＊＊

先程広間へ戻る時に、花は転移魔法について聞いたのだが、転移する時に別の者も同時にというのは、かなり魔力を使うらしい。

「もう、こんな無茶なさらないで下さいね」

後ろにいるルークの近衛騎士たちに気を使いながら、花は心配そうに言った。

その花の言葉に、ルークはあっさり返した。

「そうか？　俺は別にあの場でもよかったんだが、ハナが嫌がるだろうと、わざわざ移動したんだがな」

「え！？」

それ以上、花は言葉を発する事は出来ず、ただ心の中で悪態を吐くに止めた。

＊＊＊

――― 何がよかったのよ!? 何が!!! しかも噛みつく!? 耳だって噛まれたし、犬!?……狂犬ルークめ!!!

花は俯いたまま相変わらず心の中で悪態を吐きながら、ルークに新たな名前を付けていた。

――― 狂犬ルーク……誰か、鈴……いや、首輪だ! だれか首輪をルークにつけて!!! でも、ルークに首輪……なんか倒錯的じゃない!? うわー。しかも……。

花はまた、チラリとルークの方を窺う。ルークの両隣りにはレナードとディアンが座る。

――― なんなの!? あの三ショット!!! 乙女の夢!? くはー! ごちそう様!!! お腹いっぱいです。イケメン王国万歳!! デザートはやっぱり、ルークの首輪……くは。

先程までの怒りはどこへ行ったのか、それとも心の中で仕返しをしているのか、花の思考は段々と危ない方向へ向かっていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

食事が終わり、本格的な酒宴になる頃、いよいよ楽師たちが入室してきた。

――― ドキドキする。

花は瞳を輝かせていた。

それを満足そうにルークが見ている事にも気付かずに。
そして、広間に入室してきた幾人かの男たちの手にある楽器に花は注視した。

――― 小鼓、マラカス、タンバリン、横笛、コンガ……ギター？

花はそのギターのような楽器を凝視した。

――― ギターとは、少し違う……リュート？……ビウエラ？

ビウエラはギターに良く似た形をしているが、ギターの中心にある丸い空洞がない弦楽器だ。
もし、あれがビウエラならば……ギリシア神話に登場する吟遊詩人オルフェウスの楽器だ。冥府の者達をも魅了する才を持つ者の楽器。
これが何を意図するものなのか。
花は心が高揚するのがわかった。
なんとか心を落ち着けて、もう一度、楽師たちを見やると。

――― おお！！ 踊り子さんたちもいる！

花は食い入るように見てしまった。

――― 楽器……楽器も大事だけど、こっちも大事な気がする、女として！

踊り子さんたちは、いわゆるアラビアン風の扇情的なものではなく、どちらかと言うとフラメンコダンサーのようなドレスだ。
みんな美人で女の色気が滲み出ている。
そしてリーダーらしき人物の口上が終わり、演奏が始まった。

「あれ？」

思わず花は声を漏らしてしまった。予想していた曲調と随分違ったからだ。

予想していたのは、踊り子さんたちの衣装から、なんとなくフラメンコのような激しさの中にも、少し哀愁漂うようなロマ音楽。

それが、イメージ的にはサンバ、あるいはマンボのような、色々ミックスされた陽気な音楽だった。

そしてそれに合わせて楽しそうに踊る、踊り子達。

最初は呆気に取られていた花だったが、次第に同じように明るく楽しい気分になってくる。それは、他のこの場にいる貴族たちも同じようだった。

笑顔を振りまきながら躍る、踊り子達は、たまにチラリチラリと艶っぽい流し目を向ける。

その視線のほとんどは上座に座る三人、特にルークに向けられているのがわかった。

――――　踊り子さんたち、みんな美人だなぁ。

花はそんな事を思いながらも、その視線の先にルークがいる事に、チリリと胸が少し痛んだのだった。

結局、予想とはかなり違う音楽ではあったが、楽しむ事ができた。そして自分の使命に、少し希望が持てた。

――――　あの人たちと……特に、あのビウエラらしき楽器奏者と話がしてみたい。

そう思った花だったが、残念ながらそれは叶わず、楽しい時間は過ぎていった。
そして楽師たちが退室した後、セレナに促されて、花もルーク達に挨拶をして退室した。

＊＊＊

「セレナ？　部屋へ戻るのではないの？」

青鹿の間へとは違う廊下へ案内されて、花はセレナに尋ねた。

「はい。陛下がこちらへおいでになるようにと」

「陛下が？」

セレナの答えに驚きながらも、花は素直に案内された部屋へとセレナの先導で入る。
その部屋はどうやら楽師たちの控室となっていたようだった。
そうして短い時間ではあったが、楽師たちと話をする事ができ、シューラと言うビウエラのような楽器も少し触らせてもらい、シューラ奏者から手ほどきを受ける事ができたのだった。
また踊り子達も、とても優しい人ばかりであった。
花はルークの心遣いがとても嬉しかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

部屋に戻った花は、先程の楽師たちとのふれあいがとても嬉しくて、その前にあった事などすっかり忘れてご機嫌だった。

あまりにも嬉しかったので、花は『生まれてきたことを後悔させてやるリスト～ユシュタール版』に記入された人物達に、恩赦を与えていた。

リストはポイント制で、ポイントがいっぱいになったら後悔発動になる。

そのポイントを減点していく。

ちなみに、このリストでポイントがいっぱいになったのは、今までには『特別版』に記されたルークだけなのだが、なぜか返り討ちにあっている気がする。

「何を書いているんだ？」

「どぎょ！！」

相変わらずの花の悲鳴にルークは笑う。

「もう！　いきなり現れるのはやめて下さい！！　やましい事が出来ないじゃないですか！！」

「……してたのか、やましい事を」

「何言ってるんですか！？　してるわけないじゃないですか！！　ハハハ」

「……まあ、いいが」

あまりにも白々しすぎる花の返答にルークは呆れながらも、流すことにした。

そんなルークに安心して、花は今日の事に改めてお礼を言った。

「あの、今日はありがとうございました！！」

「ん？」

「楽師達と会わせてくれて。すごく嬉しかったです！！　シューラって楽器を今度持ってきてくれるんです！！」

シューラ奏者は、その場で花にシューラを献上してくれようとしたが、やはり弾き手に馴染んだ物を頂くのは申し訳なくて、花は固辞した。

結局、近いうちに新しいシューラを届けてくれる事になったのだ。

「そうか」

本当に嬉しそうに話す花に、ルークは優しく微笑んで答えた。

「ルーク、本当にありがとう」

再びお礼を言う花にルークはニヤリと笑う。

「言葉だけか？」

「え？」

「感謝は言葉だけなのか？」

「はい？」

「やはり、感謝は言葉だけでなく態度で示してほしいがな」

「な、何そんな三流の悪役みたいな事言ってるんですか！？」

慌てる花にルークは相変わらずニヤリと笑うだけだ。

それに花は腹を立てる。

でも実際、今日の事は本当に嬉しかった。使命の事だけでなく、楽器に、音楽に触れられたのだから。

それを考えれば、ルークには感謝してもしきれない。

「な……何をすればいいですか？」

「何をとは？」

ルークは益々意地悪そうな笑みを深めて聞く。

「感謝を態度に表すのにです！！」

「そうだな……ハナがしたいと思う事をしてくれればいい」

「ええ！？」

一番簡単なようで、一番難しい事を言われてしまった花は、驚きの声を上げた。

――――　くそー！！　デコピンとかしてやりたい！！

向かいにいるルークを睨んでそんな事を考えた花だったが、覚悟を決める。

そして――ルークの唇にあわただしいキスをした。

それから花はルークに顔を向けることなく「もう、寝ます！！」

と宣言して、掛け布に包まった。
ルークは真っ赤になった花を、楽しそうに、そして愛しそうに見ていた。

――――　いつか絶対ルークに、三回まわってワン！　って言わせてやる！！

花は小さな復讐を決意して、眠りに落ちたのだった。

30．見た目に騙されるな。

「申し上げます！　本日未明、セルショナードの軍勢がサラスティナ丘の国境を超え、帝国領内に侵攻を開始しました！」

息を切らしながら報告する武官からは、疲労と焦燥が感じられる。恐らく魔力を馬に与えながら、一晩中馬を走らせてきたのだろう。サラスティナ丘からここまで、普通に馬を走らせて三日はかかる。その武官からもたらされた知らせに、議場は大騒ぎになった。

「馬鹿な！　何かの間違いでは！？」
「卑劣な！」
「そんなもの、すぐに叩きつぶせばよい！！」

皆が各々に口を開き、近くの者達と話し始める。

「お静かに！」

そこへ、宰相ディアンの声が響き渡った。
途端、場はシンと静かになる。そして、ディアンは武官に問い質す。

「セルショナード軍の数は？」

「は！　恐らく、歩兵三千、騎兵二千のおよそ五千かと」

「五千！？」

一人の大臣が驚愕のあまり洩らした声からまた、場は騒然となる。

「サラスティナに駐屯している兵は確か、三百だったんじゃないか？」

「セルショナードは本気で帝国に戦を仕掛けて来たのか！？」

皆が信じられないといった様子だ。

だがそれも、当然かも知れない。

マグノリア帝国は、ユシュタール創世とほぼ同時に、創世神ユシュタルの祝福を受けた一人の男、ヴィシュヌが建国した国だ。

ヴィシュヌは強大な魔力によってユシュタール全土を統治し、マグノリアは帝国と呼ばれるようになった。そしてユシュタールと共に順調に発展を遂げてきた。

それから十代ほど後の皇帝が広がりすぎた帝国を分割し、皇子達に治めるよう、それぞれに分け与えた。

それが今の、一帝国・七王国となっている。

今まで何度か、七王国同士の戦はあった。しかし、未だかつて、帝国に戦を仕掛けて来た国などなかったのだ。

しかも今、マグノリア帝国皇帝を失うようなことがあれば、ユシュタール自体を失いかねないというのに。

――――　セルショナードの王はいったい、何を考えているのだ？

その場の誰もが、疑問に思った事だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「かわいい！」

花は思わず声を上げた。

セレナ達と花は今、貴族からの貢物の選別をしていた。昨晩、ルークに安全を確認してもらった物だ。

その中に、ウサギのような形をした動物のぬいぐるみが入っていたのだ。

今までドレスや宝石、お菓子などは貰ったが、ぬいぐるみは初めてであった。

「まあ、本当に」

「かわいいですね」

セレナとエレーンが同意の声を上げる。やはり、女性はかわいい物が好きだ。

そのぬいぐるみは、ありがたく貰うことにし、花の寝室にある書き物机の上に飾った。

＊＊＊

夜の刻に入って随分経った頃、ルークが寝室に現れた。

花は寝台に座り枕に背を預けて本を読んでいたが、ルークの姿を見て本を閉じる。

「ハナ、俺を待たずに、先に寝ろと言っただろう？」

「この本の続きが気になって、眠れなかったんです」

そう言ってニッコリ微笑んだ花は、『世界魔物大図鑑』をサイドチェストに置いた。

「ハナ……」

ルークは呆れたような、困ったような顔で微笑んだ。

セルショナードが帝国に侵攻を始めてから三日が経っていた。ルークはそれ以来、朝早くから、夜遅くまで執務に追われている。

――― せめて、起きて待っていたい。

花にできる事は、疲れたルークに癒しの歌を歌うくらいしかできないのだから。

そんな花の気持ちはルークの心を温かくする。

その時、ふとルークは違和感を感じた。

――― なんだ?

その違和感を探ろうと、注意深く部屋を見回す。

そして机の上にある、ぬいぐるみに目を止めた。

「ハナ、それはどうしたんだ?」

ルークの質問に、花は「それ」を視線で追う。

「ああ、サルト伯爵から頂いたんです。すごくかわいいので、ここに飾っておきたくて」

嬉しそうに花は答えた。

「サルトから？」

ルークは不審気に机に近づくと、ぬいぐるみを手に取り、顔を顰めた。

「ルーク？」

ルークの態度に花は不思議そうにする。

「ハナ、これには呪（しゅ）が掛かっている。かなり巧妙に掛けてあるから、昨晩はどうやら気付かなかったらしい。すまない」

その言葉に花は驚いた。

「呪ですか！？」

「ああ、これをこのまま側に置いておけば、普通の者なら体調を崩し、そのうち寝込む事になるだろうな」

「ええ！？」

ルークから聞かされた事に花は青ざめた。

「ハナ、心配しなくてもお前は大丈夫だ」

「え？　なぜですか？」

花はルークの確信に満ちた言葉を不思議に思った。

「普通の者と言っただろう？　お前は普通じゃないから大丈夫だ」

「えええ！？」

ルークのひどい答えにショックを受けた花だったが、ルークは笑いながら続けた。

「これは魔力のある者にしか、作用しない呪だ」

「魔力に？」

「ああ、だから全く魔力のないハナには効かない」

その答えに納得するも、花はハッと気付いた。

「だったら、ルークには良くないじゃないですか！！」

花は慌ててルークから、そのぬいぐるみを奪うように取り上げた。

それにルークは笑う。

「心配ない。俺はそれぐらいの呪じゃ堪（こた）えない。サルトもそれは分かっているはずだ」

「でも！――でも、全然大丈夫なわけじゃないんですよね？　そんなのダメです！！」

――――　今、ルークは大変な時なのに！！　こんな……。

花は怒りのあまり体が震えた。

そんな花にルークは安心させるように優しく言う。

「ハナ、心配するな、大丈夫だから」

「……このぬいぐるみ、すぐに処分して大丈夫ですか？」

処分することによって、変な魔法が発動したりしないか心配して花は訊いた。

「ああ、大丈夫だ。明日、セレナに言って――ハナ！？」

ルークの言葉は、花の行動によって途切れ、驚愕に変わった。

花はルークの「大丈夫」の言葉を聞くとすぐに、ぬいぐるみを暖炉に投げ入れたのだった。

あまりの出来事に、ルークは呆気に取られた。

「……」

先程まで、花が「かわいい」と言っていたぬいぐるみが真黒に焼け焦げていく。

「私、怒ってるんです！」

「ハナ……」

「この部屋でルークは過ごすのに！　それなのに、こんなものを贈ってくるなんて！！　例え、ルークにとって大した事ではなくても、私には大した事なんです！！」

「ハナ」

ひどく怒って顔を紅潮させた花をルークは抱きしめ、宥めるように優しくキスをする。
ルークは花の気持ちが嬉しかった。
「にしても、ぬいぐるみにはかわいそうなことしたな」
そう呟いたルークに花は答えた。
「大丈夫です。ちゃんと、ぬいぐるみの為に祈りましたから」
「なんて？」
「『成仏しろよ！』って」
「……」
花の世界の祈りの言葉は、ずいぶん高飛車だな、と思ったルークだった。

31．ブラック無糖。

「ルーク？」

ぼんやりとした薄い闇の中、ルークが部屋の中を歩いている気配がした。

花が声をかけるとその動きは止まり、気遣うような声が聞こえた。

「ハナ、起こしたか？」

「ううん、大丈夫です。おはよう」

「……おはよう」

花の朝の挨拶に優しく返したルークは寝台に起き上がった花の傍まで来ると、浅く腰を掛けた。

部屋は未だ薄闇の中。

「ハナ、まだ早い。もう少し眠ったほうがいい……それに今日は体調を崩すんだろう？」

そう言うルークの、ニヤリと笑う気配がした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「私、怒ってるんです！」

昨晩、そう宣言してからしばらく後、花はルークに聞いた。

「私が聞いた噂では、サルト伯爵は『傲慢で自己中心的、利己的な排他主義者で魔力はそれなりにあるけど、国政の為でなく、主に自己利益を追う為に使っている』とありますが、どうでしょう？」

「全く間違ってないな……ただもう一つ、大馬鹿者と付け加えておいた方がいい」

ルークは苦笑しながら答えた。

あのぬいぐるみは間違いなくサルトから贈られたものであった。ぬいぐるみに掛けられた呪が露見しないと、よほど自信があったのか、送り主の工作さえなかった。確かに巧妙に仕掛けられており、一度はルークも見逃したが、それは多くの贈り物に紛れていたからだ。

あれ一つを取ってみればルークにはわかる物なのに、ルークの力を甘くみているのか。

「まあ、確かに以前ならわからなかったかも知れないな。今はハナが俺の魔力を補ってくれているから」

そう言って花の額に軽くキスをする。

あれから花がルークの為に歌うと、ルークの魔力は補われる。最初の時ほどの力ではないらしいが。

花はくすぐったがるように笑い、話を続けた。

「じゃあ、伯爵が国政に参加できなくなったら、困る人はいますか？」

「全く以て、いない。ああ、伯爵の腰巾着は困るか……」

ルークの答えに花は納得したように頷く。

それから少し黙りこみ、花は再び口を開いた。

「ルーク、私は明日は体調を崩すので部屋から出ません。でも心配しないで下さい」

「それは何の予言だ？」

訝しげに聞いたルークに、花はサラリと答える。

「皇帝陛下のご側室は、サルト伯爵から頂いたお菓子を食べて体調を崩すようです」

「……なるほどな」

花の冷めやらぬ怒りを感じたルークは、苦笑しながら花の頭をクシャリと撫でた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「私ももう起きます。ルーク……あまり無理しないで下さいね」

「ああ」

心配そうに言う花の唇に、ルークは返事をしながらキスを落とす。

軽く口づけるだけのつもりだったのに、思わずキスを深めてしま

う。
花の頭を軽く支えるだけだった左手に思わず力が入り、花の頬に添えていた右手は優しく首筋へ撫でるようにすべっていく。

「ん……」

花の唇から零れる声に更に煽られる。
が、その時、居間からコトリと物音が聞こえ、ルークは我に返った。
花の唇から無理矢理に自身の唇を引き離し、一度大きく深呼吸をする。

「ルーク？」

花がそんな様子のルークに心配そうにする。
ルークは未練を断ち切るように勢いよくサッと立ち上がると、花に微笑みかけた。

「どうやら護衛も来たようだし、もう行かなければ」

そう言ってルークは部屋を明るくし、パッとその場から消えた。
後に残された花はボーっとしたまま、パフっと寝台に寝転んだ。

――――　くそー！　朝から色っぽいな、ルークは！

花は心の中で叫んだ。
最近、どうもキスをすることが当たり前になってしまっている。
ルークとのキスは嫌などころか、嬉しいかもしれない。
でも、ルークはどういうつもりなのか、花は考え込んでしまう。

――― 以前言ってた、生理的欲求ってやつかな？　うほ！

相変わらず怪しい声を心の中とはいえ、また上げた花は寝転んだまま悶えた。

――― せ、生理的欲求って奴だったらどうしよう！！　その先も求められたらどうする！？　どうする！？　どうするんだー！？　うがー！！

ひとしきりジタバタと悶えた後、花は大きく息を吐いた。

――― 嫌じゃないかも……っていうか、ルークじゃなきゃ嫌かも？

そんな事を考えて、ハッとする。

――― 私、ルークが好きなのかな！？……それは……ダメだ。

その気持ちに驚き、そして否定した。

花は自分の手をカーテンの隙間から差し込みだした朝の光にかざした。

――― オケラだってミミズだって生きているのに、私はどうなんだろう。

自分の存在がわからない。

こうして自分の手のひらを見れば、真っ赤に流れる血潮とやらも見える。青いけど。

心臓はドクドク脈打ってるし、呼吸もしている。考える事もしている。

ルークは私に触れて、私はルークに触れる。

――― 確かに、私はここに存在している。

でも、使命を遂げる事が出来た後は？

以前から考えているように、天国へと行くのだろうか？　それとも、この世界で生きていくのか？

だとしても、長くてせいぜい六十年の命だ。花には魔力が全くないのだから。

その六十年の間に花は年老いていく。

皺くちゃになって、腰も曲がって……でも、ルークは、みんなは今とほとんど変わらず、若く美しいまま。

――― 怖い！

それを考えると怖くてたまらない。

恐怖にそのまま飲み込まれてしまいそうだ。

――― 考えちゃダメだ。いつもの通り「まあ、いっか」でいこう。

花はそれ以上考えるのをやめ、色々な感情に蓋をした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

花の病気は、セレナとエレーンによって後宮に広められた。

「ええ、先程、医師に診て頂いたんですが、どうも良くないものを

お召しになったようで……今は寝込んでいらっしゃいますの。私、心配で……」

「今朝はお元気で、朝食の後にサルト伯爵から頂いたお菓子をお召しになっていらしたんですが、その後、ご気分がすぐれないとおっしゃられて……」

普段、花の事を一切漏らさない二人の話を、後宮に仕える者たちは興味深く聞いた。そして、それは風よりも早く王宮へ広がって行く。

「ハナ様は毒を盛られたらしい！」
「サルト伯爵が！？　なんて事を！！」

毒など一言も出てはいないし、サルト伯爵のお菓子を食べていた、というだけの話から、噂はあっという間に、『サルト伯爵が花に毒を盛った』と言う話しになった。

それに青ざめたのはサルト伯爵当人だ。

呪を掛けたぬいぐるみを贈りはしたが、お菓子を、しかも毒入りのお菓子を贈った覚えはない。

サルトには娘が二人いた。

その娘をなんとか後宮へ、正妃へとやりたかったが、今のままでは皇帝は受け入れそうにない。

といって、ハルンベルツ侯爵のようにゴリ押しをしようとして、命を危険に晒す愚は犯せない。

また皇帝の花への寵愛ぶりを見れば、花を殺すのは得策ではない。

ならば、体調を崩させてしまえば、御子を望めないと言う事で新たに妃を娶る事を勧められる、と思い付いたのだ。

それで、わざわざ七王国の一つ、サンドル王国で評判の魔術師に

皇帝でも見破れないという呪を、高額の報酬と引き換えに掛けさせたというのに。

――――　あの嘘つきめ！！

狂ってしまった計画に、サルトは魔術師へと怒りを向けた。

噂はサルトから人を遠ざけ、サルトは孤立してしまうようになった。

それどころか、皇帝からは常に冷たい視線を向けられる。

実際、ルークは花への仕打ちに、サルトへかなり怒りを募らせていたので当然だ。

結局、王宮で身の置き所がなくなったサルトは、病気療養を理由に王宮を辞し、領地へと戻ったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

花は『生まれてきた事を後悔させてやるリスト～ユシュタール版』、通称『後悔しろ！　リスト』から、サルトの名前を削除した。

ついでに、サルトの妻と娘二人の名前も一緒に。

三人の女性は、特権階級にありがちな典型的勘違い人間で、花の事ばかりか侍女たちの事まで、酷く貶めていたのだ。

ブラック花は甘くない。

それは、たった二十年間の花の人生が甘くなかった為なのか。

番外編。レナードの苦難。

今、タベルナ（食堂兼宿屋）の食堂で難しい顔をして座っている若い男、レナード・ユースは、先月十八歳の誕生日を迎え成人した所だった。

名門侯爵家、ユース家の次男として生まれ、容姿にも恵まれている彼は、その誕生日を迎えた先月、頭脳、体力、そして、魔力共に騎士団基準を合格し、来月から騎士団に入団する事が決まっていた。

誰もが彼の事を羨み、彼になりたいと言う。

そんなレナードの切実な願い、それは……。

『代れるものなら代ってくれ！！』

と言うものである。

＊＊＊

レナードの前には、一人の女性がいた。

城下にある大通りから一本路地を入った場所にある一軒のタベルナの食堂で、二人は向かい合わせに座っている。

女性は先程からずっと俯き、ハンカチを握り締め泣いている。

周りの食堂利用客からは、チラリチラリと視線を向けられている。

きっと周りの者たちは、いいとこのお坊ちゃんが女性を弄んだあげく、捨てようとしているとでも思っているのだろう。

皆、一様にレナードへの視線が冷たい。

それもそのはず、この女性の言葉がシンとした食堂に響き渡っているのだから。

「酷いわ、レナード！！　十八歳になったら結婚してくれるって言ったじゃない！！　まだまだ未熟だけど、絶対、私を幸せにしてくれるって！！」

――――　そんな無茶な事、言ったんだ……。

「だから私、婚約者と別れたのに！！」

――――　ええ！？　それはまた早まった事を……。

「私に、あんな事しておいて、今更、別れたいなんて！！　もう私、お嫁にいけない！！」

――――　あんな事ってどんな事！？

「なんで何も言ってくれないの！？　もう一度、あなたの優しい声で私の名前を呼んで！！」

――――　えーっと……。

「お願い！！　何か言って、レナード！！」

「あの……お名前はなんて言うんですか？」

「！？」

＊＊＊

――――　クソッ！！　ディアンの野郎！！　また、人の名前騙りやがって何してんだ！？

レナードは先程の女性に叩かれて腫れた左頬を抑えながら、屋敷へ帰る為に大通りを歩いていた。
先程の女性は魔力が程々あったらしく、平手打ちをする時にわざわざ魔力をのせて叩いてくれたので、結構効いた。そんな気の強い所が、ディアン好みだったのだろう。
レナードは、ディアンに先程の場所へ呼び出され「わざわざ何だろう？」と思い、行ってみたら修羅場が待っていたのだ。

――――　クソッ！！　これで何度目だよ！！

もう一度レナードは悪態を吐いたが、これが何度目なのかはわからない。

――――　次は絶対、騙されないからな！！　ディアンめ！！

この誓いも何度目なのか。
そうして歩いていると、ふと目の前に若い男が立っていた。

「あなたがレナード・ユースさん？」

いきなり尋ねてきた男に訝りながらも、レナードは答えた。

「――そうだが？」

「では、ついて来てくれますか？」

そう言って男は歩き出す。
何が何だかわからなかったが、思わず男の後をレナードは追った。
男はレナードを振り返りもせず、スタスタと進んで行く。

「お前、何なんだよ？」

ずっと黙ったままの男にしびれを切らして問いかけたレナードだったが、男は急に立ち止まった。

「着きました」

男がそう言った場所は、行き止まりになった薄暗い路地裏だった。

「？　お前……！？」

訳がわからず、再び声を掛けようとしたレナードは、数人の男に囲まれている事に気付いた。

その中から顔に傷のある体格のいい男が一人、前へ進み出てくる。

「お前がレナード・ユースか？」

「そうだが、お前らは？」

レナードの質問に答える者はなかった。

いきなり男たちは、棒やナイフをレナードに向けて振り回して来たのだ。

「な！？」

なんとか男たちの攻撃をかわしていくが、何せ数が多い。何度か棒で殴られ、膝をつきながら、それでもナイフからは逃れようと苦戦する。

騎士団入団が決まった以上、私事で一般人に魔力を揮う事は許さ

れない。

――――　クソッ!!　このままじゃ!!

本日何度目かの悪態を吐きながら、なんとか逃げる手を考える。
と、そこへ更に数人の男が駆けつけて来た。
万事休す。レナードは、その状況を呪った。

「お頭、違いますぜ!!　この男じゃありません!!　あっしらがやられたのは銀髪野郎でした!!」

――――　え？

駆けつけて来た男の一人の声に、レナードは唖然とした。

「何!?　お前レナード・ユースなんだろう!?」

お頭と呼ばれた男がレナードに詰め寄る。

「そうだけど……」

切れて腫れた口からは、思うように声が出せない。

「でもお頭、コイツじゃありやせん!!」

先程の男がジッとレナードを見て叫ぶように言う。

「じゃあ、間違いなのか!?」

「間違いです!」

「……」

二人のやり取りにレナードは言葉もなかった。

――――　銀髪のレナード・ユース……。

レナードは立ちあがると、男たちを一睨みしてから無言でその場を立ち去った。

男たちもまた、無言でレナードを見送った。

＊＊＊

「ルーク！！」

すごい形相で、というか酷い顔でレナードは王宮のルークの部屋へ怒鳴り込んだ。

そこにはディアンもいて、ルークとチェスをして遊んでいた。

「おや、レナード、随分と男前になりましたね。整形に成功したんですね、おめでとう」

ディアンが驚きもせず、心配もせずに言う。

「ディアン！　お前もだ！！」

レナードは二人を睨みつけるが、ルークはレナードの存在そのものに気付いていないかのように、チェス盤をジッと睨んだままだ。

それに腹を立てたレナードは、ズカズカと二人の側に行って、チェス盤を机からはたき落とした。

「お前ら、いい加減にしろ!!　俺の名前を騙るな!!」

その言葉にディアンはしれっと答える。

「レナード、私は仮にもユース家の跡取りですよ？　その私がおいそれと名乗れるわけないじゃないですか。いいですよね、次男坊は気楽で」

「な!?」

嫌味で返され、何を言えばいいのかわからなかったレナードに、更にルークが言葉をかける。

「レナード、皇子の俺が市井で名を名乗れるわけがないだろう。いいな、お前は気楽で」

「な!?」

再び言葉に詰まるレナードに、ルークがため息を吐いて続ける。

「しょうがないな、レナード。俺の貴重な魔力でお前の怪我を治してやる」

そう言うとレナードに向けて治癒魔法を始めた。

途中でディアンも加わる。

「しょうがないですね、今回は特別ですよ？」

暫くすると、レナードの怪我はすっかり良くなった。

それを満足そうに見た二人は……。

「レナード、お礼は？」

「え？　お礼？」

「そうですよ、貴重な魔力を使って治癒してあげたんですから」

レナードのポカンとした顔に、ディアンは諭すように言う。

「あ、ありがとう」

思わずお礼を言ったレナードに、ルークが呆れたように言う。

「感謝は言葉だけじゃなく、態度で示せ」

「え？」

「もちろん、そうですよね。先程ジャスティンから「三人のうち誰か手伝いを」と頼まれましたが、レナードが行ってくれますね」

「ああ、それで許してやろう」

ただただ、呆気に取られていたレナードだったが、ルークの「ほら！　早く行け！」と言う言葉に追い立てられて、部屋を出て行ったのだった。

「あれ？」

ジャスティンの部屋へ向かいながら、何かがおかしいと思わずに

はいられないレナードだった。

番外編。レナードの苦難。（後書き）

読んで下さり、ありがとうございます。
まだまだ、やんちゃな１８歳の３人でした。
１８歳でも（ルークはまだ１７歳）治癒魔法が仕えるくらいには魔力があるみたいです。

32．ご利用は計画的に。

「もういい加減、この馬鹿共を始末するか」

「そうですね、では方法を考えましょう」

「おいおいおい」

レナード、ディアン、そしてルークの三人は今、ルークの執務室にいた。

「病死、事故死、弾劾裁判後の処刑、どれにしましょうか？　不正の証拠書類はすでに揃えていますが」

「手っ取り早く、事故死でいいんじゃないか？」

「いやいやいや」

二人の物騒な話に異論を唱えるレナードだったが、その言葉は二人へ届かない。

と、そこへ突然もう一人の声が割って入った。

「何を三人で物騒な話をしているんですか？　おやめ下さい」

その声にルークとディアンの二人はピタリと話をやめ、レナードは呟いた。

「三人って、俺も入ってるのかよ……」

突然現れた人物、それは侍従長のジャスティンだった。
ジャスティンは、「ノックはしましたよ」と言いながら、持っていた包みをルークへと渡した。

「陛下、頼まれていたものです。それとディアン、やるなら三番目にして下さい」

そう言うと、来た時と同じように音もなく去って行った。

「――回りくどいやり方ですが、ジャスティンが言うんじゃ仕方ないですね」

ディアンは嘆息しながら言った。
ルークの執務机の上には嘆願書があり、内容は『ご正妃を』といつもの物ではあったのだが、それは一部貴族達が連名で署名してある、正式な物であった。
今この時期に、提出してくる馬鹿共に三人の怒りが募っていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

――― 綺麗な人だなぁ。でも、ちょっと目が釣り上がってきつく見えるな。それに性格の悪さが顔に出てる感じ？

花は目の前に座っている、貴族令嬢を見て思った。そして、隣へ目を向ける。

――― こっちはこっちで、すごい唇。ああいうのを魔性の唇っ

ていうのかな？　でも、なんだかテカテカしてて、虫とか引っ付きそうで嫌だな。

花は黙って微笑みながら、更に隣の女性を見た。

――――　この人もすごい美人。ただちょっと鼻が高すぎるな、まあ鼻ペチャの私が言うと僻みっぽいけど、この人の場合、ただでさえ高い鼻が家柄と容姿を鼻にかけて、更に高く見えるんじゃない？

……ああ！　もう、その鼻、拳でへし折ってしまいたい！

花の思考はだんだんと、物騒なものに変わっていった。

それもそのはず、今、花は三人の令嬢と青鹿の間でお茶を飲んでいるのだが、始終にこやかに進んでいるように見える会話の内容が酷い。

「まさか、陛下がのっぺり顔をお好みになるなんて、思いもよりませんでしたわ」

「皇帝陛下は、とてもお優しい方ですから、身分の貴賤をお問いにならないのですわ」

「きっと、ハナ様には私たちが考えも及ばないような、技巧をお持ちですのね」

などなど。

それに花はにっこり微笑んだまま、「そうですね」「陛下は本当にお優しくて」「まあ！　ふふふ」と答える。

後ろに控えている、セレナとエレーンの顔が、赤くなったり、青くなったりしている。

三人の言葉に怒りを募らせているようだ。

――――　のっぺり顔は否定はできない。ルークは意地悪だけど優しいし。でも……技巧って何だ！　技巧って！！　ご令嬢の言う事なの！？

彼女たちの言葉の一つ一つに花に対する嫌味の棘が含まれていたが、花は笑顔でそれをかわし、三人を『キツネ目』『タラコ』『ピノキオ』と命名した。

ここ数日、花の苛立ちは募るばかりだった。

当初、五千のセルショナード軍に対し、三百しかいなかったサラスティナ丘の駐屯兵たちは、圧倒的な数による急襲で、そのほとんどが命を落とした。

一夜にして、サラスティナ丘とその周辺はセルショナード軍に占拠されてしまったのだ。

早馬によってもたらされたその報せに、近隣にそれぞれ駐屯していた兵八百をサラスティナ丘に向かわせ、同時に魔力の強い将校クラスの兵を帝都等から数十名急ぎ派遣したが、もちろん数で勝てるわけもなく、じりじり後退しながらも、今以上の侵攻を辛うじて防いでいるに過ぎない。

そして、セルショナードが侵攻を開始してから五日が経った今日、帝都やその周辺から急ぎ編成した兵三千がサラスティナ丘に到着したはずだ。

本来ならもっと兵の数を増やし、圧倒的数で叩きつぶしてしまえば簡単なのだが、何せセルショナードの目的がわからない。

もし、他国と同盟していたら？　その疑いも捨てきれず、他の国境警備を疎かにするわけにはいかない。

連日届く戦況は思わしいものではなく、そしてそれが側室である花の耳にまで入ってくる事が問題だった。

ルークやレナード達に聞いたわけではない。
噂として入ってくるのだ。
それは貴族達の口から、何か面白い事でも起こっているかのように語られる。
どこか遠い国で起こっている話のように。
花も日本にいた時は、遠い異国での戦争のニュースを他人事と捉えていた。
しかし全くの無関心だった訳ではないし、ましてや面白がった事など一度もない。
貴族令嬢たちの無関心さにも腹が立つが、何より国政に関わっているはずの貴族達が、嘆かわしいといった言葉を口にしながらも、のんびりお茶を飲みながら醜聞を楽しんでいるかのように語ることに、やりきれない怒りを覚える。

――――腐ってる。

花は自分がこの状況で微笑んでいられることが驚きだった。
本当は今すぐ立ちあがって、罵詈雑言を浴びせてやりたい。
でも、皇帝陛下のご側室はそんな事をしてはいけない。
きっとルークは笑って気にしないだろうけど、ルークに余計な物を背負わせたくない。
花の笑顔はルークのため。

そうして今は、戦争には全く無関心な令嬢達の相手をしている。
この令嬢達は正妃候補に決まった、と花に挨拶に来たのだ。
三人は花に牽制をしに来たものの、花では相手にならないと思ったのか、そのうちお互いがお互いを牽制しはじめた。

――――馬鹿馬鹿しい。

サルト伯爵の贈り物も、結局は娘を後宮に入れる為であり、その為ならば目的であるはずのルークまでも多少とはいえ傷つけても構わないといったものだったのだ。
その所業に、花の怒りは頂点に達した。
――― この人たちは、ルークを道具としか見ていない。
自分たちの欲を満たすためだけの道具。
今、この世界の、この国の状況を何も理解せず、ただ目の前の権力を欲しているだけ。
『皇帝陛下が全てを御して下さるはず』
貴族達のこの言葉に、花はひどく慨嘆(がいたん)していた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その夜も、随分遅くにルークは現れた。
起きて待っていた花にルークはもう何も言わなかった。
そして、寝台に座っていた花の膝の上に包みを置いた。
「ルーク？」
「贈り物だ」
そう言ってルークは優しく笑った。
今まで、ルークにたくさんのドレスや宝石など贈ってもらったが、

直接渡されたのは初めてだった。

「開けていいですか？」

「ああ」

嬉しそうに聞いた花はワクワクしながら包みを開けた。

「かわいい！！」

花は思わず声を上げた。

中には猫のぬいぐるみが入っていたのだ。急いで取り出し、ぬいぐるみを抱きしめる。

「かわいい」

嬉しそうにもう一度言うと、花はルークに満面の笑顔でお礼を言った。

「ありがとうございます、ルーク」

「前のはダメになってしまったからな」

直接ダメにしたのは花だが、ルークは優しくそう答えた。

花は立ち上がり、改めて書き物机の上に猫のぬいぐるみを置いて、ルークに向き直った。

「ルーク、本当にありがとう」

再びお礼を言う花に、ルークはニヤリと笑う。

――― あれ？　この展開は前にも……？

そう思った花はそこでハッとした。

「やっぱり、感謝は言葉だけじゃなく、体で払えって事ですか！？」

慌てて思わず出て来た花の言葉を聞いたルークは更に意地悪そうな笑みを深めた。

「体で払ってくれるのか？」

「あれ？」

花は何か間違えた気がした。

「態度で示せと言った覚えはあるが……」

「まっ！　まま、間違えました！！　すみません！！　出直して来ます！！」

あまりの恥かしさに、挙動不審になった花は寝室を出て行こうとしたが、当然ルークに捕まった。

そして、そのまま抱きしめられる。

「あの……」

「払ってほしいな」

「！！……ぶ……分割払いでお願いします！」

頭の中はパニック状態で、ルークにはそれも伝わっているはずだ。
そして、花の口から出て来たのは分割要求だった。
恥かしさのあまり俯いたままの花だったが、抱きしめられた体にルークから堪えた笑いの振動が伝わってくる。

「じゃあ、一回目を払ってくれ」

笑いを含んだ声でルークが要求する。
顔を真っ赤にした花は睨みつけるように見上げた。
それからルークの首に腕をまわして、グイッと引き寄せて背伸びをすると、噛みつくようなキスをした。
そして、急いで離れると「おやすみなさい！」と叫んで、寝台に飛び込む。
そんな花を、笑いを堪えながらルークは見ていた。
花は恥かしさのあまり、掛け布に頭まで包まる。

――――あれ？そもそも払う必要はなかったんじゃ……？

と、花は思ったが、少し気付くのが遅かった。

33．果ての森と虚無。

ユシュタールという世界には『果て』がある。
その『果て』には、鬱蒼と木々の繁る森があり、『果ての森』と呼ばれる。
『果ての森』がユシュタールを囲み、その中に世界は在るのだ。
そして、『果ての森』は魔物たちのものであり、人間は立ち入る事が出来ない。
魔物達の中には人里に現れ、人間や家畜を襲うものもあるが、それらは低俗な種であるらしく、ほとんどの魔物たちは森から出てくる事はなかった。
しかし近年、人里への魔物の出現数が格段に増えていた。
魔物は並みの人間より魔力も腕力も強いため、一度魔物が出現すれば被害は甚大なものになる。
この魔物出現増加の原因、それはユシュタールが『果て』の外から崩壊を始めた為の『果ての森』減退によるものだった。

『果て』の外に広がるのは『虚無』の世界。
『虚無』の世界が全くの無なのか、それとも何かあるのか、それは誰も知らない。
ただ、その『虚無』がユシュタールを飲み込み始めたという事実だけを知る。
今はまだ『果ての森』が少し飲み込まれたに過ぎない。
それは力のある者たちが、魔力によって抑えているからだ。
だが『虚無』は、魔力さえも飲み込んでいく。
皆の魔力が尽きる時、それはユシュタールの終わりを意味する。

一帝国・七王国の王たちは代々、魔力を駆使して『果て』の外にある『虚無』を制し、国土を広げてきた。
『虚無』を制する事ができれば、『果ての森』がまるで後退したかのように国土が広がる。
その後退から逸(はぐ)れた森が『不可侵の森』となったのだ。
もちろん、魔力の強い王ばかりではなく、その時代には国土の拡大よりも維持に力を注いだ。
そうして何千年、何万年とユシュタールは発展してきたのだ。
それがここ数十年で突如として、『虚無』の勢いが増した。
決して、王たちの魔力が弱体したわけではないのだが、『虚無』に飲まれまいと前進を始めた『果ての森』の為に、国土の維持さえも儘(まま)ならなくなっていた。
その為、王たちの足りない力にマグノリア皇帝が力を補い、『虚無』を抑え込み、『果て』の崩壊を辛うじて防いでいる状態だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ハナ様、ハナ様！　お聞きになられてますか？」

「え？」

「ですからハナ様、陛下にハナ様から、ご正妃をお娶り下さるようお勧め下さい、と申し上げているのです」

花は今、青鹿の間で貴族達三人と面会をしていた。
今朝、急ぎお会いしてお願いしたい事がある、と面会の申し込みがあったのだ。

――― その急ぐ内容がこれか……。

花は呆れて言葉も出なかった。

そんな花に畳みかけるように、貴族達の言葉は更に続く。

「陛下はもう百四十三歳になられた。その御歳でご正妃がおられないばかりか、ご側室がお一人のみなど由々しき事態。御子様の事を考えても、このまま看過するわけには参りません。陛下がご正妃をお娶りなさるようにお勧めするのは、側室であるハナ様の義務でもありますぞ」

「……義務ですか」

――― すごい義務だな。自分の旦那さんに新しい奥さん勧めろって事だよね。それにしても、この人たち頭わいてんの？

相変わらずの貴族達の危機感のなさ、身勝手な言い分に腹が立つ。

「ですが、今この時期に陛下に申し上げるべきではないのでは？」

そんな花の言葉は貴族達の失笑を買ったようだった。

貴族達の一人、内大臣のドイルが子供を諭すように、花に言う。

「ハナ様、この時期だからですよ。このまま、陛下に何かあったらどうします？　一刻も早く陛下には御子様を生(な)してもらわねばならないのですよ」

その言葉に花の何かがプチッと切れる音がした。

花は憤ってドイル達を問い詰める。

「あなた方は、陛下にいったいどれ程の事を望むのです？　膨大な魔力を注いでユシュタールをお守り下さっている今、更にセルショナードとの戦に魔力を注ぐようお願いし、今度は御子まで生されるよう望まれるとは。だとしたら、あなた方は何をなさるのです？　陛下の為に、ユシュタールの、マグノリアの為に何を？　人柱となって、ユシュタールの果てに立ち、その魔力すべてをユシュタールを守る為に注いでくれるのですか？　それとも今すぐ戦場へ赴いて、その魔力の限りにセルショナード軍を撃破してくれると言うのですか！？」

ひとしきり言い終わって多少スッキリした花は、頭が冷えると同時に焦った。

今までニコニコと微笑むだけだった花の激昂に貴族達は驚き青ざめている。

――――しまった！

花が気付いた時には遅かった。

が、気を取り直して、何重にも猫をかぶった。

「あの……ですから今、陛下に私から申し上げるのは心苦しく思いますので、どうかお許し下さい」

そう言って、いつものニコニコ笑顔に戻ったのだが。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「お前は本当に不思議な奴だな」

「何がですか？」

花とルークは寝室の長椅子に並んで座っていた。

先程まで、花が歌を歌っていたのだ。最近は最初の歌だけでなく、その時に花が歌いたい歌を歌っている。どうやら歌に関係なく、ルークを癒す事が出来るようだ。

「魔力の器はないのに、生成する事はできるなど、器用というか、奇妙というか……」

考え込んで言うルークの言葉に、花は怒ったように聞き返す。

しかし、ルークの言葉も仕方がないものだった。

「奇妙って何ですか！？　奇妙って！！」

魔力には三つの要素、『器』『生成力』『制御力』が必要となる。

『器』とは、魔力を溜め込むためのものだ。『器』が大きければ大きいほど、溜め込む魔力も大きくなるので、それだけ魔力も強くなる。

そして、『生成力』とは、その名の通り、魔力を生成する力だ。

例え『器』が大きくても、魔力を生成する力がなければ『器』は満たされないので、魔力も大きいとはいえない。

最後に『制御力』だが、先に述べた『器』や『生成力』がいくら大きくても、この『制御力』がなければ、魔力は使いこなせないので宝の持ち腐れとなる。

この三つが上手くバランスが取れて初めて、その人物の魔力の大きさとなるのだ。

ただし、例外がある。

ある程度強い魔力の持ち主は、魔力のやり取りができるので、『

器』が大きければ、『生成力』が多少なくても補う事ができる。
その為、王宮に住まうものは、王宮に満ちた魔力を『器』に自然と補っているのだ。

花は歌うことによって、魔力を生成することが出来るようだ。しかし、溜め込む『器』が全くない為、そのすべてを『器』の持ち主に与えるのだった。
また花の生成する魔力はとても心地よいので、それを取り込んだルークは心も体も癒されていくように感じた。

「もったいないな、それだけ魔力を生成できるのに」

本当に惜しい、というようにルークは呟く。
それから、ふと思い出したように笑いながら、ルークは言った。

「そういえば、今日ドイル達にずいぶん面白い事を言ったそうだな」

「ええ!!　なんで知ってるんですか？」

花は驚いて聞き返した。

「忠義に厚い侍従達が、嬉々として広めていたようだぞ」

ルークは貴族達の主従関係を嫌味っぽく揶揄した。
普通、侍従は主人の会話の内容を漏らしたりはしない。主人の秘密は徹底して守る。
それが為されないのは、侍従が主人に忠誠心を抱いていないからだ。
貴族達を花がやり込めた事がよほど面白かったのだろう。

「ええ……」

花は、その言葉に不満そうに頬を膨らませた。

「しかし、人柱とはいい考えだな」

ニヤリと笑ったルークに、花は更に頬を膨らませる。

そこで花はある事を思い付き、それをルークに伝えようと口を開いた。

「いっその事、私が『果て』に行って歌い続ければ、この……」

その言葉は最後まで続けられなかった。

苦しいほどの強い力でルークに抱きしめられたのだ。

「ダメだ!!」

ルークが酷く怒った声で否定する。

花はルークの怒りに驚いた。

「絶対にダメだ……」

再び否定するルークの声には、怒りと悲しみと苦しみが含まれているようだった。

「ルーク……」

強く抱きしめられた花は息も出来ないほどだったが、ルークの縋るようなその声に、なんとか慰められないかと声を発するが続かない。

自分の言葉がルークを傷付けてしまった事に、花は酷く後悔した。

「ごめんなさい」

花はなんとか声を出し、ルークに謝った。「傷つけてごめんなさい」と気持ちを込めて。

そして、ルークの背中を宥めるように撫でた。

ルークは花の言葉に、花を失う恐怖に一瞬にして襲われ、思わず縋りつくように強く抱きしめた。

花を失う事など考えるだけで気が狂いそうだ。

花の謝罪の言葉が耳に入り、また花の手が優しく背中を撫でる温かさに、冷静さを取り戻していく。

それと同時に力を入れすぎていた事に気付き、腕の力を少し緩める。

花のホッとしたような気配が伝わった。

ルークは花を抱きしめたまま、言葉を紡ぐ。

「ハナ、俺はお前が好きだ」

背中を撫でていた花の手がピタリと止まる。

花の驚いたような、動揺した感情が伝わってくる。

――――これは卑怯だ。

そう思い、ルークは花に回していた腕を離し、花に触れないように花に向き直る。

そしてもう一度告げた。

「俺はハナが好きだ」

花は耳まで真っ赤になって俯いた。

――――　ルークが私を好き？

花はルークの言葉を聞き間違えたのかと耳を疑ったが、ルークが花から離れ、もう一度告げた言葉に信じざるを得なかった。

ルークの言葉に何を言えばいいのかわからない。ルークの気持ちはすごく嬉しい。「すごく」という表現では表せない程だと思う。でも、どうすればいいのかわからない。

花はただ、俯いて黙り込むしかできなかった。

それを見ていたルークは、小さく息を吐き出した。

「ハナ、混乱させてすまない。これからも最初に言った通り『表向きだけの側室』で構わない。ただ……」

ルークはそこで一旦、言葉を切った。

上手い言葉が見つからないのか、一瞬黙り込んだ後に続けた。

「傍にいてくれ、ハナ。今はそれ以上を望まない」

その切望の滲んだ声に、花は頷くことしかできなかった。

ただただ、何度も黙って頷く。

それに少し安心したようにルークはもう一度小さく息を吐き出し、立ち上がった。

「もう遅い、寝るぞ」

その言葉に花も続いて立ち上がり、寝台に入った。

しかし、その日の花は五分で眠る事は出来なかったのだった。

３４．刺客と自覚。（前書き）

今回、少し残酷描写が含まれていますので、苦手な方はご注意ください。

３４．刺客と自覚。

「ハナ様、本日昼の刻三歩（十四時）に晩餐会の時のシューラ奏者が面会を求めて来ておりますが、どうなさいますか？」

セレナが扉の外の言付けを届けに来た、小間使いからの伝言を花に伝えた。

「お受けして！」

花の慌てたような、嬉しそうな返事にセレナは微笑みながら頷いた。

いよいよシューラが手に入るのだ。

今まで沈んだ様子で物思いに耽っていたのが嘘のようにパッと表情の明るくなった花に、セレナ、エレーンだけでなく、その場にいた護衛までもがホッとしたような顔をした。

花は昨晩のルークの言葉をどう受け止めればいいのか分からず、ずっと悩んでいたのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

花とセレナ、護衛たちはシューラ奏者と会う為に、王宮の応接の間へと向かっていた。

外からの面会者と会うには、後宮ではなく応接の間で会うのが決まりなのだ。

楽器に触れられる、手に入れられると思うと心なしか歩調も早く

なる。
とそこへ、向こうから二人の女性がやってくるのが見えた。どうやらどこかの貴族令嬢と侍女らしい。
二人は外からやって来たばかりらしく、まだ外套を纏っていた。
そうして、花の前に来ると立ち止った。

「これは、ハナ様。お久しぶりでございます。このような所でお会いするとは」

そう言って微笑んだ令嬢の顔はとても可憐で可愛らしかった。

「……こんにちは」

花はこの令嬢に覚えはなかったが、侍女を従え高貴な身分が窺える身なりだった為、訝りながらも挨拶をした。

――― こんな可愛らしい人、一度会ったら忘れそうにないけど……。

それとも、面会を始めた頃には大勢の令嬢ともお会いしたので覚えてないだけなのか。
そう思っていると、令嬢は思いついたように声を上げた。

「そうだわ！　私、ハナ様に差し上げたい物がございましたのよ」

そう言うと外套の中で何かを探り始め、それから何かを見つけたのか、顔を上げニッコリ微笑んで近づいてきた。
条件反射で花も令嬢に近づく。
その時、ハッとセレナが何かに気付いたように声を上げた。

「ハナ様、その方は……」

と、同時にすぐ側に控えていたカイルが、花を引き寄せながら剣を抜いた。

「ハナ様！」

カイルの剣はそのまま令嬢の左手をなぎ払う。

辺りに鮮血が飛び散り、花の頬にも生温かいものが散った。

その場に、小刀を握ったままの血に塗れた手首が落ちる。

令嬢の悲鳴なのか、セレナの悲鳴か、どちら共かも知れない甲高い耳障りな声と、護衛たちの怒号が聞こえる。

令嬢の後ろに控えていた年配の女性は術者らしく、攻撃魔法らしき詠唱を終え、花たちに向けて放った。

途端、閃光が走り花は目を瞑ったが、パシンという衝撃音がしただけだった。

どうやらカイルが瞬時に防壁魔法を作動させたらしい。

術者は再び詠唱を始めていたが、それは突如現れたレナードの剣に遮られ、終えることなく術者と共に散った。

その場に蹲(うずくま)るように倒れた術者の体から鮮血が流れ出す。

「ハナ、見るな」

ルークの声が聞こえたと同時に、花の視界はルークの右手によって塞がれた。

ただその場に立ちすくむ事しかできなかった花を後ろからルークは抱きしめる。

「陛下！　なぜその女なのです！！　私にこのような仕打ちをしながら、そのような婢女(はしため)をお側に置かれるなど！！――」

令嬢の狂乱染みた叫声は途中で掻き消え、一瞬の静寂の後、エレーンの驚きに満ちた声が聞こえた。

「ハナ様！！」

花はルークと共に青鹿の間に戻っていた。

「エレーン、お茶と湯の用意を」

ルークの言葉に、エレーンは急いでその場を離れた。

自身を見下ろした花は、頬に手を当て、自分の顔や服に散っていた血痕が消えている事に気付く。

花はルークを見上げて微笑んだが、花の顔は青ざめ少し震えていた。

「ハナ、すまない」

謝罪の言葉を口にしたルークは、苦しそうに顔を歪めると花を再び抱きしめた。

――― 大丈夫。私は大丈夫だから。

花はルークに伝わるように、心の中で呟き続けた。

しばらくして、エレーンの淹れてくれた温かい紅茶を二人黙ったまま飲んだ。

護衛が扉の外で待機している気配がする。セレナはまだ帰って来ないが、恐らく飛び散った血を落とす為に、身を清めているのだろう。

「ルーク、私は大丈夫だから戻って？」

そう言って、花は微笑んだ。

「ハナ……」

ルークは躊躇った。

しかし、花は引かなかった。

「大丈夫。エレーンもいるし、私はこの後少し休みます。せっかく来てくれたシューラ奏者には申し訳ない事をしたけれど……」

そう言って、再び花は微笑んだ。

暫く逡巡した後、ルークは小さく「わかった」と呟くと、花の頬に優しくキスをして立ち去った。

花はルークを見送った後、湯あみの用意ができたと告げるエレーンに待ってくれるようお願いし、トイレへと急いだ。

そして、吐いた。

胃の中の物を全て吐いてしまい、吐き出す物がなくなった後、これ以上エレーンを待たせては心配させると、急いで居間へ戻る。

居間にはセレナが戻ってきており、また非番だったはずのジョシュが扉の内側で護衛をしていた。

皆に申し訳なさそうに花は微笑みを浮かべ、湯あみの為にまた居間を出た。

＊＊＊

しばらく寝室で休んだ後、居間へ行くとそこにはシューラが届け

られていた。

「まあ！」

思わず声をあげた花に、セレナが気遣うように微笑みながら告げた。

「陛下がシューラ奏者とお会いになったそうです。それで明日、同じ時刻にこちらに来るようにと、お約束して下さったそうですが、先にシューラだけでもと、こちらにお届け下さったんです」

「陛下が？」

「はい」

「シューラ奏者は明日、この部屋に来るの？」

「はい」

恐る恐るといった感じで花はシューラに触れながらも、ルークの優しさに涙が溢れそうになった。

花がどれほどシューラを、楽器を切望していたか、ルークは理解してくれているのだ。

先程までの暗く沈んでいくような気持ちが、慰められていく。

――――どうしよう。やっぱり私はルークが好きだ。

もう否定する事ができない、止める事ができない。

認めてしまえば、こんなにも心から溢れてくる愛情に気付く。

その感情に、胸を締め付けられながら花は込み上げてくる涙をこ

らえたのだった。

35．悪いのは誰だ。

「ハナは大丈夫なのか？」

執務室に戻ったルークに続いてすぐに現れたレナードは訊いた。

「――ああ」

「今日は、もういいんじゃないか？　ハナの傍にいてやった方が……」

「ハナに、大丈夫だから戻れと言われたんだ」

その言葉にレナードは驚いたように声を上げた。

「本当に？」

「ああ」

短い返事と共に、ルークは嘆息して書類に目を落とす。

そんなルークの様子を見ながら、レナードは考え込んだ。

あんな場面を目にしたら、普通、女性は泣き叫ぶものではないのか。気を失う女性だっているだろう。男でも慣れないものは悲鳴を上げ、失神してもおかしくない。

実際、セレナも悲鳴を上げ動揺が激しく、落ち着くのに時間がかかったのだ。

「ハナは……出来すぎじゃないか？」

思わず漏れた言葉に、レナードが後悔した時は遅かった。

「どういう意味だ？」

ルークの静かな怒りが伝わってくる。

しかし、レナードは上手く言葉を続けられなかった。

「……いや、今のに深い意味はない。すまん」

それからしばらく、重苦しい沈黙が続いた。

ルークにもレナードの言いたい事はわかっていた。

確かに花は出来過ぎなのだ。

ある日突然、暖炉の中に現れ、異世界から来たと言う娘。

花は自分の置かれた状況をいち早く理解し、不満を漏らすことなく、ルーク達の望む以上に上手く事に対処してくれる。

――――　それどころか、あの歌は……いや、歌じゃない、ハナそのものが俺にとってはなくてはならない存在になってしまった。

花は何があっても、笑っている。

先程も、青ざめ震えながらも微笑んでいた。

だがあれは花の仮面にすぎない。

あの微笑みの裏に花は色々な感情を隠している。ルークにはそれがわかっていた。ルーク自身、冷酷で非情な仮面の裏に本当の自分を隠しているのだから。

しかし、花はルークの前では仮面を外し、色々な表情を見せる。

もちろんそれが全てでないのは解っているが、そんな花の前だからルークも素の自分を見せる事が出来るのだ。

「レナード、なぜあの女はハナがあの時間にあの場所を通る事を知っていたんだ？」

ルークは、手元の書類から目を上げることなく聞いた。

「今、調べさせている」

レナードの返事は、「なぜ」に対してではない。

内通者がいるのは明らかだ。その内通者が誰なのか、そして誰の息がかかっているのかを調べさせているのだ。

あの娘は恐らく、その者に躍らされたに過ぎないのだから。

ルークもそれはもちろん判っていて聞いたのだ。

「ハナの結界を強化しないとな……」

ルークはひとり言のように呟いた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「もう扱えるのか？」

「ルーク？」

寝室でシューラの弦をポロンポロンとゆっくり弾いていた花に、ルークが声をかけた。

花はルークが突然声をかけても驚かなくなったが、今日はいつもより現れるのがかなり早い為に驚いたのだ。

「綺麗な音色だな、この前は気付かなかったが」

花の驚きに構わず、ルークは続けた。

「これは、私の国ではどちらかと言うと、ゆっくりと奏でるんです。私はこの楽器を扱った事はないんですが、これに似たギターと言う楽器なら少し弾けたので」

そう言ってそっとシューラをテーブルに置いた。

それから、改めてルークに向き直る。

「ありがとう、ルーク。シューラも、明日シューラ奏者に会わせてくれる事も」

零れそうなほどの笑みを見せる花に、ルークは眩しそうに目を細めて答えた。

「いや、構わない。せっかくの面会を台無しにしたのは俺のせいだからな」

いつものニヤリとした笑いをしない、どこか距離を置いた感じのルークに、花は直接の距離を縮め、ルークの手を握った。

それから長椅子へと引っ張って行き、並んで腰を掛けた。

手はまだ握ったままだ。

「ハナ？」

そんな花の行動に、ルークは少し戸惑っているようだった。

「ルーク、今日のあの女性は、以前ルークが罰して右腕を失くしてしまった人ですか？」

「ハナ……知って……？」

花の爆弾発言にルークは驚きを口にした。

それに花は少し困ったように答える。

「色々な人が、色々な事を親切ごかして教えてくれるんです」

その言葉にルークは考え込むように黙り込んでしまった。

「ルーク、あの女性はどうなるんですか？それにあの術者らしい人はどうなったんですか？」

「ハナ……」

花の質問にルークは言葉を詰まらせた。

しかし花は引かなかった。

「ルーク、私知っておきたいんです」

花のその言葉に、真剣な眼差しに、ルークは暫く逡巡した後、口を開いた。

「あの娘は一通りの調べが終わったら処刑される。それと、あの術者はあの娘の乳母だったそうだが、あの時に絶命したらしい」

皇帝の側室を殺そうとしたのだから、当然の処置だろう。

また術者に関して言えば、本来証人となる人物をすぐに殺す事な

どしないのだが、あの時、詠唱していた攻撃魔法は、その前の比ではない程強力だった。
その為、レナードも慌てたのだ。
恐らく術者の命を掛けての物だったのだろう。

「そう……」

花の声は平淡だった。
繋いだ手からは、花の感情は何も窺えない。
その事がルークの心を冷たくする。

「ハナは俺を嫌うか？　冷酷で非情だと、他の者のように俺を恐れるか？」

酷く冷たい声で責めるようにルークは聞いてしまった。
しかし、他の者なら恐れ慄くであろうその声音に、花は優しく微笑み、握った手に力を込める。

「私、小さい頃、犬を飼いたかったんです」

「……犬？」

いきなり変わった話の内容にルークは驚き、ただ聞き返すだけだった。

「ええ、犬です。だけど、お父様は動物が嫌いで許してもらえなかったんです」

「そうか」

この話がどこへ行くのかさっぱりわからず、ルークはただ相槌を打つだけだった。

「それで、近所に犬を飼っているお家があって……その犬はいつも庭の小屋の側に繋がれて寝ていたんですけど……」

「それで？」

「ある日、私、そのお家の庭に入り込んで、繋がれている犬に近づいたんです。だけど、その犬は寝たままで相手にしてくれなかった。名前を呼んでも、撫でても反応してくれなくて、尻尾を振って欲しくて、遂に尻尾を思いっきり引っ張ったんです」

「どうなったんだ？」

結末に興味を引かれたルークは続きを促すように聞いた。

「思いっきり噛まれました。血がたくさん流れて、すっごく痛かったです。今でも傷が残ってるんですよ、ほら」

そう言って花は、繋いでいた手を離し、ルークに右手を見せた。確かに花の右手の甲には二か所の白く少し引きつったような痕が残っていた。

「すごく痛くて、たくさん泣いて、もちろん両親にも怒られて、だから人の敷地に勝手に入り込んで、勝手に我が儘を押し付けるような事はもう二度としないと誓ったんです」

花は、話は終わりとばかりにニッコリ微笑んだ。

本当は、この話にはまだ続きがある。
怒った父親が犬の飼い主に抗議をし、結局犬は処分されてしまったのだ。
花は自分の軽率な行動が何の罪もない犬の命を奪ってしまった事で、罪の意識に苦しみ、酷く悲しんだ。
だが、それはルークには告げない。

「ハナ……」

ルークは少し呆れた様な、困った様な顔で少し微笑んで、花の傷痕の残った右手を取り、口づけた。

「ルーク……」

少し上擦ったような声で花はルークの名を呼んだ。
それに応えるように、ルークは上目遣いで花を見ると、ニヤリと笑う。
そして、右手に噛みついた。

「ルーク!?」

今度は驚いたような声でルークの名前を呼んだ。

「な・な・何で噛みつくんですか!?」

「その話でいくと、俺は犬だろう?」

「えええ!?」

何でそうなるの？　と言いたい所だが、違うとも言い切れないようで、花は言葉に詰まる。
そんな葛藤をする花には構わず、ルークは花を抱き寄せ、唇にキスをした。
そのまま下唇に軽く噛みつき、驚いて開いた花の口内に舌を侵入させ、花の舌を絡め取る。

「ん……」

激しく深いキスに、花はただ身を任せるしかなくなる。
背中に回されたルークの左手は、優しく宥めるように花の背を撫で、右手は首筋から肩へと滑って行く。
花の唇から離れたルークの唇は、そのまま花の喉元へとキスが続いた。
と――

「ぎゃふん！！」

花が悲鳴？を上げた。
ルークは顔を上げ、呆れたようにため息を吐く。

「だからハナ、もう少し色気のある声を出せないのか？」

「だだ、だって！　なんでまた噛みつくんですか！？」

首筋を抑え、顔を真っ赤にして涙を浮かべた花に、ルークはニヤリと笑って答えた。

「バカだな。俺の優しさなのに」

「な！？……意味がわかりません！！」

涙ぐんで抗議する花の頭をポンポンと叩いて、ルークは立ち上がるとさっさと寝台へ向かった。

しばらくそんなルークを睨んでいたが、結局、花もルークのあとを追い、寝台に入る。

そして、パニック状態で気持ちの落ち着かないまま、それでもルークに抱きつき――一分で眠りに落ちた。

「――なんだ、この拷問は……」

ルークは一人呟いて、眠る努力をしたのだった。

36．犬も歩けば棒に当たる。

――― 狂犬ルークめ!!

翌朝、鏡の前に立った花は心の中で叫んだ。
花の鎖骨の少し上、首の根元の所にくっきりとルークの歯形が残っていたのだ。
それを見たセレナとエレーンは「まあ、ホホホホ」となぜか嬉しそうに微笑んでいる。

――― なぜ喜ぶ？　あなた達の国の皇帝は変態なんですよー!

心の中で二人に訴えながら、恥かしそうに花は告げた。

「あの……今日は首元が隠れるドレスがいいです」

その言葉に二人は残念そうに答える。

「まあ……隠されてしまうんですか？」

「陛下の愛の証をお見せしないんですか？」

二人の言葉に花は絶句した。

――― な、何言ってんの!?　普通、人に見せる物じゃないよね!?　愛の証って何!?……ま、まさか、この世界の人たちって噛みつくのが普通なの!?

知識はあれども経験が全くない花は、その辺りを誤解して悩む事になるのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「セルショナードの目的はいったい何だ!?」
「本当に他国と密約を交わしてないのか!?」

その日の議会も紛糾していた。
ルークは片肘を立て頬杖をついたまま無表情に、後ろに控えたレナードは冷めた目をして、大臣達を見ていた。
ディアンに至っては宰相席で目を瞑って座っている。

「サンドル王国を始めとして、他国も此度のセルショナードのマグノリア侵攻には非常に義憤しておるようです。セルショナード軍に対抗するためにマグノリアに兵を派遣してくれるとまで言ってきております」

外大臣のコーブの言に、内大臣のドイルが噛みついた。

「それが罠だったらどうする!?　マグノリアに兵を引き入れた途端、牙を?いたらどうする!?」

「そのように疑心暗鬼に囚われていては、いつまでたってもセルショナードに対する事はできぬ!!」

そうしてまた、議会は紛糾する。
そのうち誰かが言いだした。

「陛下の魔力で事の真偽を判じて頂ければ……」

その言葉に同調する声が上がる。

「そうだ、陛下が魔力をお使いになって下されば……」

「では、いっそセルショナード王の考えをお読み頂ければいいのでは？」

その意見に政務長官のセインなど幾人かは顔を顰めているが、殆どがその意見に同意の声は上げないものの、光明を見出したような顔をしている。

――― どいつもこいつも勝手な事言いやがって、反吐が出る！

レナードはそんな大臣達を見ながら、思わず歪みそうになる顔をなんとか平静に保つ。前に座るルークの顔は見えないが、恐らく無表情のままだろう。

そうしてレナードはチラリとディアンの方へ視線を向けて、凍りついた。

――― 笑ってる……ディアンが笑っている……。

レナードは見なかった事にして、視線を大臣たちに戻す。

ディアンは二日前、花のドイル達に対する『人柱宣告』に甚く感動していた。

「さすがハナ様、なんと素晴らしい事をお考えになるのでしょう。あの馬鹿なカス共も少しは役に立つ事もあったんですね」と言って、微笑んだあの笑いだった。

議場は「陛下にお任せすれば」と言った楽観的な空気になりつつあり、そこへ外政長官のサントスが恐る恐るルークに声を掛けた。

「へ、陛下……」

「なんだ？」

冷徹な声でルークは返事をする。

それに気圧されたようではあったが、それでもサントスは勇気を振り絞り続けた。

「先日、力の強い術者に聞いたのですが……最近、頓（とみ）に陛下の魔力が強くなったと……」

その言葉は更に議場を喜びに沸かせた。

「おお、それはなんと……」

「ではセルショナードなどすぐにでも撃破できるのでは……」

また無責任な発言が飛び交う。

そこにルークの静かな声が聞こえ、皆が聞き入る。

「確かに……その術者の言う通り、余の魔力は上がっておる」

その言葉に歓声が上がる。

「しかし、それに比するように『虚無』の勢いが増しておる故、余の力はこれ以上別には割けぬ」

ルークの言葉に、「そんな！」といったような悲鳴染みた声があ

ちこちから上がる。
実際、セルショナードの侵攻に符合するかのように『虚無』の勢いが増しているのだ。
そしてまた、議会は紛糾していった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

花にとってその日はとても楽しい一日だった。
シューラ奏者とシューラについて、音楽についてかなり語り合えたのだ。
花はシューラ奏者からシューラのお手入れ方法などを聞き、シューラ奏者は、花の拙いながらも奏でた音楽に感動していた。

「このように静かに奏でるなんて思いつきもしませんでしたが、何とも言えず心地よい音色ですね」

そしてまた会う約束をして、シューラ奏者は帰って行ったのだ。

そんなご機嫌な気分だったのだが、夜着に着替えて首元の歯型を見た途端、ルークへの怒りが湧きあがり、『後悔しろよ！リスト』の特別版にまた新たに『ルークの変態！！』『スケベ！！』等書き加えていたのだった。
そして、心の中でも罵詈雑言を浴びせていた。

――――もう！　ルークのバカ！！　絶対絶対、いつか三回まわって……。

「ハナ？」

「わん！」

思わず花が吠えてしまった。

――― 私が吠えてどうする！？

自分にツッコミを入れながら、恥ずかしさのあまり真っ赤になって花は抗議する。

「もう！　急に声を掛けるのやめて下さい！！」

「ハナ」

「何ですか？」

「襲ってもいいか？」

「は……！？　な、何言ってるんですか！？」

「ダメなのか？」

「ダメです！！」

「……そうか」

心底残念といった表情でルークは呟いた。

――― な、何でそんな顔するの！？　いやいや、意味わからないし！　ダメダメ、情に絆（ほだ）されちゃダメ！！

花は自分に喝を入れながらリストを片付け、急いで寝台に入ったのだった。

ルークの不可思議な態度に首を捻りながら。

一方のルークは思わず聞いてしまった事を後悔していた。

――――次からは聞かずに襲おう。

掛け布に包まった花は、なぜか背中がゾクリとしたのだった。

37．キレてない。

「――ルーク？」

かすれた声で花はルークを呼んだ。

しかしルークからの返事はなく、ただ苦しそうな息遣いが聞こえてくるだけだった。

花はルークの腕の中で、なんとか身動ぎしてルークの背中を優しく撫でると、強く抱きしめられていた腕の力が少し緩む。

そうして、少し楽になった花はルークの背をそのまま撫でながら起こさないように小さな小さな声で歌う。

すると、ルークの呼吸は段々と落ち着くのだった。

もう何日もこんな夜が続いていた。

ルークは眠りに落ちると苦しそうに呻き、うなされる。

しかし、花は朝になってもその事には触れなかった。それによって更に苦しめてしまうのではないかと心配したのだ。

悩んだ末に花はジャスティンに相談することにした。

「ハナ様は陛下のお力の事はご存知ですね？」

「触れると……という？」

「ええ、そうです。そのお力です」

ジャスティンは肯定した後、暫く沈黙し、また話し始めた。

「恐らく、陛下のそのお力の影響でしょう。眠りに落ちて無防備に

なってしまう為、力が制御できず、色々な感情が流れ込んでくるのでしょう」

「え？　でも……」

花はその言葉に驚いた。

触れているのは花だけだ。花が苦しめるほどの感情をルークを与えているのかと、涙が出そうになる。

それを見たジャスティンが慌てたように謝罪した。

「ああ、誤解させてしまい、申し訳ありません。決してハナ様のせいではございません。陛下は以前、急激にお力が増されていた時、お力を制御しきれずに触れなくても強い感情を読み取ってしまわれていたのです」

その事が、ルークを非情で冷酷な皇帝へと変えていったのだが。

ジャスティンは話を続ける。

「陛下がお苦しみになっているのは、恐らく戦場からの感情の為でしょう」

「戦場！？」

ジャスティンの顔は「やりきれない」と言ったとても厳しいものだ。

「ええ、死に瀕した者の感情は恐ろしく強い。陛下はそれをお読みになっているのでしょう」

「そんな！！」

花はジャスティンの言葉に愕然とし、青ざめた。
血液が逆流しているのではないかと思うほど、耳の奥でドクドクと音がしている。
戦場で死に瀕している者の感情を読んでしまうなど、どれほど恐ろしい事だろう。それが何百、何千と流れ込んで来るとしたら？
――ルークが壊れてしまう。

花は座っていても倒れてしまいそうで、椅子の肘掛をギュッと握った。
その様子に気付いたジャスティンは隣室に控えていたセレナ達を急いで呼び、新しくお茶を入れ直すように言いつけた。
そして、ジャスティンは花の側まで来ると片膝をついて右手を胸に当てて言った。

「ハナ様、あなた様がいらっしゃられてから陛下は変わられた。いえ、昔の陛下に戻られた。あなた様は陛下の癒しなのです。お願い致します、どうかこのまま陛下のお傍にいて差し上げて下さい。そして、どうか私が忠誠を誓う事をお許し下さい」

そう言うとジャスティンは花のドレスの裾に口づけた。
花は驚き、ただジャスティンを見つめるばかりだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「どういうことだ？」

思わず声を漏らしたのはレナードだ。
そこは、王宮にある小さな会議室だった。サラスティナ丘から報告の為に戻った将校の告げた内容にレナードは驚いたのだ。
レナードだけでなく、その場にいるセイン、内政長官のグラン、軍部を統括する大将のガッシュ、他数名も驚き、次いで渋い顔をした。
ルークとディアンのみ、いつもと変わらず無表情なままだ。

「なぜ、セルショナードにそれほどの魔力のある者達がいるのでしょうか？」

セインが驚きを隠せないままに疑問を口にする。
ルーク達は、対セルショナードの為の軍議を行っていた。そこへもたらされた報告は皆に動揺を与えた。
それは、王族クラスの魔力の持ち主が多数セルショナード軍に在ると言うものだったのだ。

「さて……セルショナード王はそんなに子だくさんでしたかね」

ディアンの惚(とぼ)けた言葉がその場に落ちる。

「ディアン！！　こんな時にバカ言うな！　そもそも、セルショナード王がどんなに頑張ろうと、魔力の強い者の子供は容易く生まれないだろうが！！」

「いやいや、レナード。下手な鉄砲も数撃てば当たるっていうし、大勢の側室がいれば、十数人くらいは何とかなるんじゃないのか？」

ガッシュの言葉にレナードは驚愕する。

「どんだけやりまくってんだよ！？」

「あの、そもそも論点が違うのでは？」

「……」

グランの冷静な言葉に二人とも押し黙る。そのままグランは発言を続けた。

「それにしても、王族クラスの魔術師がセルショナードに十数人もいたとは思えませんな。やはり他国が力を貸しているのでしょうか？」

皆がその言葉に緊張したが、ルークの静かな発言でそれは弛んだ。

「いや、それはない。サラスティナ丘から他国の王族の魔力は感じられない」

実は、ルークは少しの魔力を割いてセルショナード軍を探っていた。

ただ、それを公にするとまた、馬鹿共が変な期待をするので黙っていたのだ。

少し緊張を解いた一同は、続くルークの言葉にまた驚いた。

「だが……セルショナードの王族の魔力も感じられない」

「え？　それはいったい……」

セインの言葉は途中で途切れた。

セルショナード王には三人の王子と四人の王女がいる。
しかし、王太子の地位にあるのは第二王子との話から、恐らく第一王子は魔力が弱いのだろう。
また、王女の四人のうち第四王女以外の三人の王女は、一度はルークに謁見したことがある。
要するにお見合いだったのだが、その時にルークは三人共魔力が弱い事を理由に断っている。ただの難癖だったが。あとの第三王子と第四王女の魔力の程は判らない。
ただ言えるのは、セルショナード王が歴代王にない程の魔力の持ち主だと言う事だった。
王太子はそれに次ぐ程の力らしい。

その王たちの魔力が加わらずに、マグノリア軍に苦戦を強いている事が驚きだった。
数で言うなら確かに不利な戦いだったが、兵士たちそれぞれの個々の能力はマグノリア兵の方が圧倒的に優れている。本来なら五千のセルショナード軍に三千のマグノリア軍でも十分に渡り合えたはずだったのだから。
それではこの苦戦は、十数人の強力な魔術師たちの力によるものなのか。

――――それほどの魔術師は、いったいどこから現れたんだ？

皆の心の中には疑問だらけだった。

サラスティナ丘からじりじりと後退していたマグノリア軍は、更に後退するしかなく、今はサラスティナ丘に一番近い街のセンガル近くまで後退していた。
結局、軍議は更にサラスティナ丘に向けて千の追加派兵をする事で決着した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

王宮内は、開戦当初のどこか楽観的な雰囲気から、悪化していく戦況に徐々に重苦しいものへと変わって行った。
それは王宮内だけでなくマグノリア全体もそうであった。

その中にあっても、やはり馬鹿は馬鹿で大馬鹿者であった。
ルークがユシュタールの崩壊を防いでいる限りはマグノリア帝国は安泰だと言うのだ。
今回の戦は、セルショナードの戯れだと、ルークがユシュタールを質に取っているも同然なのだから、本気で向かってくるわけがないと。
今まさに、その戦で何百、何千の兵たちが命を落とし、その苦しみをルークが背負っていると言うのに。

花は微笑みを浮かべながらも、心の中で呪文を唱えていた。

――――　キレてないっすよ！　キレてないっすよ！！

そんな花には構わず、馬鹿貴族は更に言葉を続ける。

「ハナ様、ですから陛下は今、大切なお体なのですから、くれぐれもお疲れさせませんように。ご寝所であまり我が儘をおっしゃらないようにお願い致します」

そう、したり顔で諫言する伯爵夫人に花は笑顔で頷く。

――― 三枚刃でもキレテナーイ！！

花はもはや、自分が何を言って自身を宥めているのか分からなくなっていた。

今、口を開けば間違いなく取り返しがつかない事になるだろう。

そう思い、唯ひたすら黙って微笑んでいた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

それから数日後、サラスティナ丘の防衛線が突破され、センガルの街がセルショナード軍によって占拠されたという報せが届いた。

センガルに留まっていた者は皆、兵士も無辜の民も関係なく無差別に殺戮されたという報と共に。

38．天上の音楽。

センガルの凶報はマグノリアに暗い影を落とした。
王宮に仕える者達の中にもセンガルやその近辺出身の者がいるらしく、泣き崩れる者や、家族知人の無事を確認する為に右往左往する者もいた。
逃げ遅れた女子供まで容赦なく殺されたのだ。
皆の心に悲愴感と共に絶望が襲う。
そして、今まで以上に強い憎しみが生まれる。セルショナードにも同じ苦しみを、と。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

花は寝室でシューラを弾いていた。
まだ指がぎこちなく、ゆっくりゆっくりと。
昨晩、ルークは現れなかった。花が『側室』になってから初めての事だ。
シューラを置いて、花は窓辺へと足を向け、外を眺める。
曇天の空の下、帝都サイノスは悲しみに包まれているようだった。
マグノリアの民の憎しみと絶望が、花にさえ伝わってくる。

――――ルーク……。

花はルークを想った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

議会はこれまでにない程、紛糾していた。
なんの結論も出ないまま、少しの休憩を挟んで一日以上も続いている。
ただ、訌争（こうそう）しているだけなのだ。

――― なぜ、こんな時にこんな茶番に付き合わなければならないんだ！

レナードは焦れる気持ちを抑え、視線だけ動かして周りを見やる。
皆、疲労の色濃い顔をしている。
ディアンは相変わらず考え込んでいるように目を瞑っているが、本当は寝てるんじゃないかとレナードは疑った。
大臣たちは怒鳴るように発言しているが、何の意味も為さない内容だ。

――― やはりディアンの言う通り、さっさと始末しとけば良かったか……。

そんな危ない事を考え出したレナードもやはり疲れているのだろう。

＊＊＊

ルークは疲弊していた。
ここ毎晩、眠ると襲ってくる負の感情を花が癒してくれているのは気付いていた。
しかし今、ただ無意味に流れるこの時間にも、ルークを苛むよう

な感情は流れ込んでくる。なんとか制御するのだが、気を抜くと再び流れ込んでくる。

それ程に、マグノリアは負の感情に覆われているのだ。

昨晩、少しの休憩時間に花の寝室へ行くと、明かりを煌々と灯したまま花は眠っていた。

起こさないように頬にそっとキスを落とし、再び窮屈な会議へと戻った。

――― ハナ……。

ルークは花を想う。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ハナ様、本日も陛下はお越しになられないそうなので、お気になさらずお休みなさるようにと」

セレナが気落ちした様子で伝える。

花はそれを微笑みで受け止め、皆に心配をかけないようにした。

気がつけば、花の腕時計は二十一時を回っている。

花は窓から、王宮のルークがいるであろう謁見の間の方向を眺めた。

王宮もサイノスの街も悲しみに包まれているようだ。

その時、雲間から隠れていた月が顔を覗かせた。

――― 満月……。

花はその美しい光に心を奪われた。

月光が王宮の端に聳え立つ塔を白く浮かび上がらせ、輝かせている。

――――『月光の塔』

花は王宮の案内をしてくれていた時のジャスティンの言葉を思い出した。

「セレナ、私『月光の塔』に行きたいです」

「ハナ様？　まさか今からですか？」

「そう、今すぐに」

花の突然の我が儘な発言にセレナは驚いた。

しかし普段、花がこのように我が儘を言う事はなかったので、戸惑うと共に叶えて差し上げたいと思う。

「ハナ様、暫くお待ち下さい。手配して参ります」

そう言ってセレナは部屋を出ていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

花は『月光の塔』の最上階に来ていた。

側にはセレナといつもの護衛の二人、それにルークの近衛である、始めてこの世界に来た時に会った、ランディとアレックスもいた。

花は天を仰ぐように顔を上げた。天窓からは月光が優しく降って

くる。
ここは『祈りの間』。
創世神ユシュタルは月の光を好み、満月の夜にはユシュタールの地に降りてくる。
それはこの世界に伝わる神話。
「……ですから、人々は満月の夜に祈りを奉げるのです。ユシュタルの為に、己の為に。この『月光の塔』では、代々の皇帝陛下や皇族の方々が祈りを捧げてこられました。そしていつしかこの部屋は『祈りの間』と呼ばれる様になったのです」
そんなジャスティンの言葉を思い出し、なぜかここへ来なければと思ったのだ。
そして、ここへ来てわかった。花が今すべき事が。
この部屋は今、『神様』の力で満ちている。
花は悲しみに満ちた王宮を、街を見渡す窓へと近づく。
窓を開けると直接、優しい月の光が花に纏う。
目を瞑り、大きく息を吸った花の体に月の光の力が、『神様』の力が満ちた様だった。
花は歌った。
心からの歌を、鎮魂歌(レクイエム)を。
その歌声は月の光となって、マグノリアに降り注ぐ。
見上げれば、キラキラとまるで月の精が舞っているかの様に光り

輝く。
そして、その光は優しく皆の傷ついた心を癒す。
悲しみが癒えていく、憎しみが消えていく。
これほどの優しい歌声を今まで聴いたことはなかった。

それはまるで、天(そら)から降り注ぐ、天上の音楽。
花の歌声は、天上の音楽となってマグノリアを優しく包んでいったのだった。

39．お月見には団子。

相変わらず、馬鹿馬鹿しい内容で会議は進んでいく。
この儀礼的とも言える悪しき慣習を早々に是正して名ばかりの大臣たちを廃しなければ、この国はセルショナードとの戦に関係なく、内側から腐り落ちるだろう。
ルークは冷めた目で大臣たちの訌争を見ながら、物思いに耽っていた。
その時、ふと花の歌声が聞こえたような気がした。

――――ハナ？

ルークは立ち上がり、引き寄せられるように窓辺へと行った。
そんなルークの行動に、一瞬にして静寂に包まれた議場にも花の歌声が響く。
そして皆、同じ様に窓辺へと寄って行く。

窓の外は、眩いばかりの月の光に包まれていた。
月光が舞い踊っているかのように輝き、そして降り注ぐ。
歌声は耳に聞こえるよりも心に響き、その歌声に、心の中に光が灯るような温かい気持ちが生まれてくる。
悲しみが、憎しみが、癒されていく。その心地よさに皆、涙した。
花の歌声は、王宮に、サイノスに、マグノリアに響き渡る。
皆が家から外に出て、天を仰ぐ。
そして、その優しい天上の音楽はサラスティナ丘へ、センガルへと降り注ぐ。
それはマグノリアの民だけでなく、セルショナードの兵士たちへ

も同じように。

＊＊＊

ルークは『月光の塔』へ飛んだ。
花の許へと。
もう何十年も足を踏み入れる事のなかった『祈りの間』は、優しい光に包まれていた。
ルークが現れた事にも気付かず、セレナも護衛達も涙を流し、ただ花を見つめている。
花はひと際、眩い光の中で歌っていた。
その姿はまるでユシュタルに祝福を受けているかのように、光輝を纏っている。
ルークはその神々しいまでの花の美しさに心を奪われた。
またルークのあとを追って現れたレナードも、ディアンも同じようにその姿に心奪われ、見入るのみ。

やがて光り輝く美しい時間は、花の歌と共に終わりを迎えた。
しかしその場にはそのまま優しい静寂が満ちる。
そしてそれは、花によって破られたのだった。

＊＊＊＊＊

花は歌に心をのせ、癒しをのせて歌う。

――――どうか悲しまないで、苦しまないで。

そして無残に命を奪われた者達へ祈りを込めて歌う。

――― 苦しく、悲しく、悔しかったでしょう。でも、どうか安らかに天国へ。

歌は花の心のままに人々を癒し、御霊を導く。

歌い終わった後も暫く花は、その場で祈りを捧げた。

そして、あまり皆を待たせてはいけないと思い振り向いたのだが……。

「どぎょっ!!」

驚きのあまり奇声を発してしまった。

――― な……なんか増えてる!?

花が振り返ったその場には、当初からいたセレナと護衛四人だけでなく、ルーク、レナード、ディアン、そして更にセインや他の大臣たちがいた。

セインは歌が終わるや我に返り、ルークのあとを追う為に詠唱し転移魔法で『祈りの間』へとやって来た。

そんなセインの行動に我に返り、転移魔法が使える者は皆次々とここへやって来ていたのだ。

――― こ、こういう場合どうすれば……?

焦った花は、とりあえず猫をかき集めてかぶり、ニッコリ微笑んで言った。

「皆さまお揃いで……お月見ですか？」

――――　ってちがうでしょー！！　みんな、お団子持ってないし。いや、そういう問題じゃない。うはー！！　みんな引いてる、引いてるよ！！　戻って来てー！！

皆が呆気に取られているのは花の言葉のせいではないのだが、花はそれに気付かない。

そして、一番に戻って？来たのはやはりルークだ。

花に近づくと、いきなり抱きしめキスをした。

――――　も、戻って来すぎっす！！　近い！　近いっす！！

パニックに陥っている花の思考はルークには伝わっているはずなのに、ルークのキスは激しさを増していく。

「あ……」

花の思考は深まるキスと共に深く沈んでいき、何も考えられなくなる。

呼吸（いき）さえも儘ならず、力の抜けていく花を抱きしめたまま、ルークは大臣たちに告げた。

「会議は一時中断する」

そして、花を抱えたままその場から消えた。

＊＊＊＊＊

二人は花の寝室に移動した。
と――

「ぎゃあああああ！！」

我に返った花は悲鳴を上げた。

「ハナ……」

呆れた声を出すルークに向き直り、花は睨みつける。

「ルーク！！　なんであんな事するんですか！？」

「あんな事とは？」

何かを諦めた様子のルークは、エレーンにお茶の用意をするように言うと、花の質問に聞き返しながら長椅子に腰を掛けた。
そんなルークの前に仁王立ちになり、花は答える。

「みんなの前で、キ・キキ、キスをした事です！！」

「なんだ、そんなことか」

日本人の花にとって人前でキスをする事にはかなり抵抗があるのだが、ルークの気にも留めていないような素っ気ない返事に、花は腹を立てた。

「そんなことじゃないです!!　人前でキ、キスするなんて、お天道様が許しても私が許しません!!」

「……あのまま、あそこで押し倒しとけばよかったな」

ポツリと呟くようなルークの言葉に、花は驚く。

「にゃ!!　にゃな、なにを言ってるんですか!?」

「……」

焦って呂律（ろれつ）の回らない花の言葉に、ルークは自身の額を右手で覆うと目を瞑り、大きく息を吐き出した。

「ハナ……とりあえず、お茶でも飲んで落ち着け」

その言葉と同時にエレーンがノックをしてお茶を運んでくる。

エレーンはお茶をカップに注ぐと何も言わずに下がったが、その瞳は涙に濡れていたようだった。

長椅子に並んで座り、暫く黙って二人はお茶を飲んでいたが、ルークの呟きが沈黙を破った。

「参ったな……」

「何がですか？」

花は不思議に思って訊いた。

「ハナの力のことが皆に知れてしまったな」

「はい？」

突然の言葉に花は訊き返す。

「まだ一部の者しか知らないが、あの奇跡のような出来事はハナの歌の力だと、すぐに広まるだろうな」

「……まずかったですか？」

心配そうにする花をルークは抱き寄せた。

花はこれから今まで以上に多くの者に狙われるだろう。

今までの『マグノリア皇帝の寵妃』と言うだけの利用価値が、花自身の『癒しの力』が知れ渡る事によって大きく変わる。

ルークには皆の心が癒され落ち着くと同時に、皆の魔力までもが上がった事を感じていた。

もちろん皆、己自身の事にはすぐ気付くだろうし、力のある者なら他者の事にも気付くだろう。

花はまるで『賢者の石』のように多くの者が欲望を掻き立てられ探し求める存在になるだろう。

人間の欲望は際限がない。

欲を満たす為には平気で他者を傷付け、その事を厭わない者が数多くいることをルークは十分に知っている。

花がそんな者達の醜い争いに巻き込まれると思うと、どうしようもない嫌悪と焦燥に襲われた。

「ハナは俺が守る」

誓うように呟いたルークに、花は微笑んだ。

「私もルークを守ります」

同じ様に誓った花にルークは苦笑する。

そして感謝するように優しくキスをしたのだった。

４０．猛獣出没注意。

奇跡のような一夜が明けると、セルショナード軍はセンガルから撤退し、サラスティナ丘に改めて陣を構えた。
その報せに多くの者が安堵し喜んだが、ルークや他の聡い者達はセルショナード軍の行動に懐疑的だった。
そしてそれは、花も同様だった。

――― 戦争ってそんなに単純なもの？

例え万の兵が戦意消失したとしても、たった一人の将に戦意があれば戦争は終わりはしない。
そして、その将はマグノリアではなく、セルショナードにいるのだ。

しかしながら、議会の大半を占めたのは、単純思考の意見だった。

「奴らはハナ様のお力に恐れをなして逃げたのです。このまま国境外まで駆逐すべきです！！」
「いや、それではぬるい！　このように辛酸を嘗めさせられたのは由々しき事。いっそ、セルショナードに攻め込むべきです！！　我がマグノリア帝国には、陛下とハナ様がいらっしゃる。恐れるものは何もありません！！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「馬鹿だ馬鹿だと思っていたが、あそこまで馬鹿だとは……」

あの夜から二日が過ぎていた。

ルークの執務室でぼやいたレナードに、ディアンが微笑みながら言う。

「レナード、そのような言い方は馬鹿に失礼です」

「……そうだな」

微笑むディアンには逆らわないのが得策。そう判断したレナードは思い切って話題を変えた。

「ルーク、お前はハナの力の事を知っていたのか？」

あの夜からレナードはずっと疑問に思っていた。

しかし、今まで何と無く触れられなかったのだ。

「……ああ、少し前からな」

ルークは少し躊躇った後に答えた。

「ハナはいったい何者なんだ？ユシュタルの御使いか何かか？」

「……」

レナードの問い詰めるような口調にもルークは答えない。答えられないのだ。

ルークもその事については何度か考えたが結局は考える事をやめた。

花が何者であろうとルークにとってはどうでもいいのだから。
そこにディアンが口を挟んだ。

「まあ、いいではないですか。ハナ様が神の御使(みつか)いだろうと、魔王のお遣いだろうと、ハナ様なんですから」

「いや、お遣いはないだろう、お遣いは……」

思わず突っ込んだレナードだったが、ディアンの言葉には頷くしかなかった。
そもそもディアンは、ある日突然現れ側室になった花に対して疑いを抱く事もなく、ただ花の人格のみを判断して認めたのだ。
ディアンは常に肝心な物のみを判断し重視する。
その潔さにレナードはいつも感心していた。
もちろん、不審人物に目を光らせていなければいけない近衛隊の人間としては真似したくてもするべきではないのだが。

「ところでレナード、前から注意しようと思っていましたが、ハナ様のことを呼び捨てにするのは頂けませんよ」

ディアンの尤(もっと)もな言葉にレナードは言葉を詰まらせた。

「え？　いや、それは……何と言うか……今更変えろと言われても……」

しどろもどろに答えるレナードに、ディアンは呆れたように告げた。

「しょうがないですね。では代わりに私のことをディアン様と呼ぶのなら見逃してあげましょう」

「なんでだよ！？」

二人のバカなやり取りを見ながら、ルークはセルショナードの思惑について考えていた。

――――　セルショナードの目的はいったい何なんだ？

ルークも、主だった者たちも未だそれが解らず、防衛に徹する事しか出来ないのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

貴族達の豹変ぶりは酷かった。

今までの、遜った態度の中にも侮蔑が見え隠れしていたものから、明らかに媚を売るような、何か物欲しげなものへと変わった。

それは予想出来た事なので別に花は気にしなかったが、今まで親しく好意的だった後宮に仕える者たちが少し距離を置いたような、畏敬の念を持って接してくるようになったのが残念だった。

それでも変わらない者たちも多くいる。

セレナやエレーン、それに護衛たちも変わらない。

だから花も変わらない。今までと変わらず過ごせばいい。

「ねえ、エレーン……いつも散歩する時にお留守番をお願いしてしまってるけど、たまには一緒に行かない？」

最初の頃はセレナと交替で花の散歩に付き合ってくれていたのだ

が、この頃はいつもお留守番だ。
それが花には不思議で、たまにはエレーンもどうかと誘ってみた。
「い、いえ！　大丈夫です！！　私、お留守番が好きなんです！！　お誘い頂いたのに我が儘を申しまして、大変申し訳ありません！！」
そう慌てて謝ったのだった。

「ねえセレナ、毎日散歩に付き合ってもらってるけど大丈夫？　嫌なら言ってね？」
エレーンの態度に、ひょっとしてセレナにも無理強いをしているのではと心配になり花はセレナに聞いたのだが、セレナは花の言葉に、「とんでもありません！」と強く否定した。
王宮から出る事が叶わないのは当初からわかっていたが、青鹿の間にずっと籠りきりというのも気が滅入るので、毎日散歩と称して花は王宮内をぶらぶらとしているのだ。
その為、昔の日本の大奥というのは皆、気が滅入っただろうなと花は思った。

――――　そりゃ、陰惨なイジメも横行するよね……。

そんな事を考えていた花に、セレナが少し躊躇ったようにした後、話しを始めた。
「あの、ハナ様……ハナ様は随分、宰相様にお気に入られてしまいましたね」

「え？……そうなのかな？」

セレナの話の脈略が掴めず、花は驚いて返事をした。

「はい……それで宰相様は時々、ハナ様がお散歩をなされているとご出没なされるので……」

――― セレナってなんだかディアンの事、猛獣扱いしてない？

そう思いながら、花はセレナの話の続きを聞いた。

「実はエレーンは宰相様の遠縁に当たるのですが……エレーンは宰相様を酷く恐れていまして、少しでも接触しないで済むようにと、ハナ様とのお散歩に付き添わせて頂くのを遠慮しているようなのです」

「……そうですか、それじゃあ仕方ないですよね」

恐らくディアンはエレーンに何かトラウマを植え付けたんだろうな、とセレナの話からエレーンの言動に納得していると、当のディアンが前方から現れた。

――― 出たよ、猛獣が。誰かこの猛獣宰相に鈴でも付けてくれないかな。半径一キロくらい離れてても聞こえるような鈴を。

花は新たにディアンを名付け、王宮においては全くの意味をなさない事を考えながら、逃げる事を諦めニッコリと微笑む。

「こんにちは、ディアン。ごきげんよう」

「こんにちは、ハナ様。今日は東のサロンに行きましょうか」

さっさと挨拶して通り過ぎようとした花だったが、しっかり腕を掴まれると方向転換をさせられ、東のサロンまでエスコートされてしまったのだった。

――――　くそー！　今回もダメだったか。

ディアンにとって、ルークの「ハナに近づくな」命令は意味をなさず、あれからも何度か捕まっていた。

そうしてまた、微笑み合戦へと突入したのだった。

「あまり何度も申し上げてハナ様のご負担になってしまうのも本意ではありませんが、『仲良くお手々繋いで眠る』だけでは愛は生まれても御子様はお生まれになりませんよ？」

相変わらずの爽やか暗黒笑顔で言われた言葉に花は撃沈する。

――――　なんか、色々バレてる！？

それでもなんとか笑顔で乗り切っていると、ジャスティンが現れた。

「ハナ様、失礼致します。ディアンに用事がありまして」

「ええ、私は全く！！　構いませんよ？　是非！！　どうぞ！！」

花の言葉は所々、妙に力が入っていた。

ジャスティンは花に一礼するとディアンに向き直った。

「ディアン、あなたを連れ戻してくれと方々から頼まれましたよ。まだ執務の途中でしょう？　ハナ様を煩わせていないで早々に戻って下さい」

ジャスティンの言葉にディアンは一瞬、顔を顰めたように見えたがすぐにいつもの暗黒笑顔に戻り、花に挨拶をすると去って行った。

――――　その方々の方たちに幸あれ。

ディアンの笑顔を見た花は祈らずにはいられなかった。

「ハナ様、お部屋までお送りいたします」

そしてジャスティンの申し出に花は頷き、青鹿の間まで送ってもらうことにした。

「やれやれ、ディアンのお陰で今日は残業ですよ。こんな遠くのサロンまで来てるとは思いませんでしたから」

――――　なるほど。なんでわざわざこんな遠くまで来たのかと思ったけど……。

花はジャスティンの言葉に納得しながらも違和感を覚え思わず疑問を口にした。

「あれ？　残業ですか？」

「ええ、私は昼の刻が終わるまで（十六時まで）しか働かないと決

めているので」

花は思わず腕時計を確認した。今現在の時刻は十六時三十分過ぎだ。

「そうなんですね。その後に何か用事でもあるんですか？」

それで夜にジャスティンを見かける事がないのか、と納得しながら聞いた質問の答えに花は驚いた。

「はい、家族と過ごします。家族との時間を大事にしたいので」

「え？　ジャスティンってご結婚されてるんですか？」

「はい。ご存じなかったですか？　妻と今年五歳になる息子がいるのですよ」

そう答えたジャスティンの笑顔は愛情に溢れている。

――――　マ、マイホームパパだったのか……。

ジャスティンの意外な一面を知った花だった。

41．もみじ鍋はおいしい。

「フン♪　フン♪　フン♪　～フン♪」

「何だ？　その歌は」

「ふんがっ!?」

長椅子で『世界魔物大図鑑パート?』をパラパラと眺めながら歌っていた花は、突然のルークの声に、また飛び上がらんばかりに驚いた。

――ふんが！　って何だ!?　私はフランケンか!!

花は自分の上げた奇声に情けなくなる。

「ハナ……いい加減、人間に戻れ」

「戻るも何も私は常に人間です!!」

ルークのダメ押しに、一応の抵抗は試みた花だった。

「ユシュタールでは青鹿を始め、鹿は聖獣だというのに鹿のフン……」

呆れたように言うルークに花も同調する。

「私の国では白鹿を始め、鹿は神獣でもあります」

「それなのに、その歌……」

ルークは花の言葉に驚いたように呟く。

「い、今の歌は、修学旅行の時にみんなで歌う歌なんです！！　それに鹿は食べるとおいしいんです！！　それよりも、ジャスティンって結婚してたんですね？」

「……ああ」

あからさまな話題転換に、ルークはたくさんの言葉を飲み込んで返事をした。

やはり花の世界は奇妙な世界だな、と思いながら。

「五歳の息子さんがいるそうですね。ルークは会った事あるんですか？」

「ああ……確か一歳くらいの頃に一度会ったな」

花の質問にルークは少し考え、思い出すように答えた。

それに花は羨ましそうに呟く。

「いいなぁ、かわいいだろうなぁ……」

「ハナは子供が好きなのか？」

「はい」

嬉しそうに答えた花にルークはニヤリと笑い、花を抱き寄せる。

「なら、今から作る努力をするか？」

「ふんがっ！？」

本日二度目のフランケンな奇声を上げ慌てる花の額に軽いキスを落とし、苦笑しながら話を続ける。

「まあ、残念ながら魔力の強い者は中々子供を授からないがな」

「そうなんですか？」

新たな事実に花は驚く。

「ジャスティンも婚姻から七十年くらい経ってやっと授かった。先帝陛下には正妃・側室、その他諸々合わせて五十人くらいこの後宮にいたが、結局は俺を含めて四人だけだったしな」

「ご……五十人……」

花は無駄に広いなと思っていたこの後宮に五十人もいたと聞いて、やはりこれぐらいの広さは必要なのかと納得した。

――――　ってか、その他諸々ってなに！？　お手付きってやつ！？

しかし、ルークの話をきけば貴族達が『正妃を、もっと側室を』と勧めてくるのも理解せざるを得なかった。

子を生し、子孫を残すのも王としての義務だ。

もちろんルークはそれを十分に理解しているだろうし、花が口を出す問題ではない。

そんな花の考えを読んだようにルークは自嘲し、吐き出すように言った。

「貴族達にとって俺は皇帝として失格だろうな。だが、そんなことはどうでもいい。ただ、ジャスティンの子供が生まれた時、ジャスティンの為じゃなく己自身の為に喜んだ俺は人間として失格だ。最低な奴だ」

「ルーク？」

笑みを浮かべたルークの顔が苦しそうに見えて、花は心配そうに握った手に力を込める。

「ジャスティンの妻は俺の姉だ。ジャスティンも姉上も十分に魔力が強い。だから姉上が男子を産んだと聞いて、これで皇統を継ぐ者が生まれたと安堵したんだ」

ユシュタールでは魔力が強ければ強いほど、子は生し難い。父と母になる者がお互いに魔力が強ければ強いほど魔力の強い子供が生まれるが、その分、授かり難いのだ。

その為、皇帝や他国の王達は魔力の低い者も娶る。そうすることによって己の血脈をより多く残す為に。

また、片親の魔力が低くても、稀に強い魔力を有する者が産まれる事もある。

魔力の全くない花が皇帝の側室として認められ、期待までされているのはその為だ。

花はルークを抱きしめ、力を込めて言った。

「ルークは最低なんかじゃないです！」

ありふれた言葉しか言えない自分がもどかしい。

ルークは今までどれ程の重圧を受けて生きて来たのか。

花でさえも旧華族の小泉家に産まれた為に徹底して自分を殺して生きてきた。

父親はとても旧弊な人間で反抗も甘えも許さず、自我さえも奪っていく。

花が猫をかぶりながらでも心を持てたのは幼い頃、常に傍にいてくれたナニーと音楽のお陰だ。

それでも花は自分の人生を諦めていたし、恐らくバルコニーから転落しなければ結局は桜庭と結婚し、結婚後は桜庭家の跡取りを産む義務を課せられて生きただろう。

ルークには何か心の拠り所になるものがあっただろうか？

力が強い為に皆の欲望に塗れた声を聞き、ユシュタールの崩壊を防ぐために常に魔力を消費し、帝位にある者として子を生さなければならない義務に縛られている。

花はルークを抱きしめながら、静かに願った。

ルークを癒せるというのなら、このままずっと傍にいて癒したい。

いつかルークは正妃を、側室を娶るかもしれない。私がいつまで傍にいられるかもわからない。

それでもルークの傍にいたい。

「私はルークが好きです。ルークの傍にいたいです」

花の囁くような告白に、ただ抱きしめられるままだったルークはその腕に力を込め、強く花を抱きしめた。

二人は長い間、ただ黙って抱き合っていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「クラウス様、あの娘、マグノリア皇帝の側室は本当に皆の言うようにユシュタルの御使いなのでしょうか？」

まだ少年のように見える若々しい姿を深く被った灰色のローブで隠した男は、同じように灰色のローブを目深に被った男に問いかけた。

クラウスと呼ばれた男は、暫しの沈黙の後に口を開く。

その声はローブに阻まれくぐもっていながらも深く、美麗な音色のようだ。

「……そのようなことあろうはずがない。恐らく皇帝の力か何かだろう。そのような娘、すぐに化けの皮がはがれるであろう。ガーディ、そなたは再びマグノリア王宮に潜りその娘を闇に落とせ。くれぐれも皇帝には気付かれるぬよう、よいな？」

その美麗な声に何の感情ものせずクラウスは命じた。

「はい、かしこまりました」

それに応じたガーディと呼ばれた男は、一礼すると一瞬後にその場から掻き消えた。

その場に唯一人残ったクラウスは、欠けゆく月を見上げ嫣然と微笑んだ。

42．効率化には時間短縮。

黒い……暗い闇の中。
寒い。冷たい。
赤い……熱い炎の中。

――― サム……サム？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ハナ様、ターダルト王国の大使から贈り物と面会の申し込みが来ておりますが？」

「どちらもお断りして下さい」

花はセレナに返事をすると大きく溜息を吐いた。
あの夜から、マグノリアの貴族達だけでなく他王国の使者などより贈り物や面会の申し込みが増えて来たのだ。
以前から多少はあったのだが、それらは常に断って来た。
皇帝陛下のただの側室でしかない花が他国の使者と会うなど、ややこしい事態を招くことはあれど利益は何もないと、今まで受けなかったのだ。
本当は、これ以上の面倒な人間関係を築きたくなかったというのが正直なところだったのだが。
しかし今、面会を申し込んできているのは明らかに皇帝の側室ではなく、『癒しの力』を持った花に会う為だ。

世界中に癒しの音楽を届ける為には会うべきだろう。
ユシュタールの民を癒す事、それが花のこの世界での存在意義なのだから。

――― でも今はまだルークの傍を離れたくない。ううん、本当はずっと離れたくないけど……もう少しだけ待って欲しい。

今の不安定なマグノリアから、ルークから離れられない。
それが言い訳でしかない事は花もわかっていた。

――― 『神様』は怒るかな？

ぼんやりとそんな事を考えていた花だったが、セレナとエレーンの会話が耳に入って来て驚いた。

「ええ？　セレナって婚約者がいるの！？」

思わず大きな声を出してしまった花に、セレナは苦笑しながら答える。

「いいえ、ハナ様。婚約者がいたんです。今はいません」

「ええ……」

その言葉に花は、どう反応すればいいのかわからなかった。
ユシュタールでは成人は十八歳からだが、大体は長い青春を皆楽しみ、結婚するのは五十歳前後らしい。
もちろん魔力による寿命の差から一概には言えないが。
そして貴族の子女たちにはほとんどの者に婚約者がいるらしく、その者達が正式に婚姻を結ぶのも五十歳前後となるらしい。

「十代の頃より決められていた許嫁だったのですが、どうしても私その方を好きになれなくて……というより生理的に受け付けなくて、だから私、レナード様よりハナ様の侍女のお話を頂いた時に喜びのあまり小躍りしてしまいました」

いつも落ち着いているセレナが小躍りするところを想像して、花は思わず微笑んでしまう。

それでもやはり気になったので聞いた。

「でも、本当に私なんかの侍女になってよかったの？」

侍女になれば、仕える相手を一番に優先しなければならない。その為、結婚後も侍女を続けている者はかなり少なく、貴族の子女が侍女になるのは大抵が結婚前の行儀見習いの為であって、結婚後も続けることはない。

結婚間近だっただろう年齢のセレナが、花の侍女になったのには当分結婚の意思がないと示す為なのだ。そして花の侍女となった事で婚約も破談となったのだった。

「ええ、もう何十年も嫌で仕方なかったんです。あの男から解放されてどれだけ嬉しいか！　ハナ様には本当に感謝しております！！　それだけでも有難いですのに、ハナ様の素晴らしさときたら……」

なんだか段々と熱の入ってきたセレナの語りにくすぐったくなってきた花は、打ち切る為に慌てて相槌を打った。

「確かにわかるわ！　私も婚約者となる方にお会いした時にどうしても生理的に受け付けられなくて、思わず逃げ出してしまったから」

そしてバルコニーから落ちたのだが。
あのバカボンの事を思い出し嫌な気分になった花だったが、突然のレナードの声にその感情を抑えた。

「え？　ハナ様って婚約者がいたんですか？」

取り繕いの微笑みを浮かべてレナードの方に向き直る。

「今日は転移して来られたんですね」

これ以上は思い出したくなかったので、レナードの言葉を無視して花はルークに声を掛けた。
今日は久しぶりに昼食を一緒に食べる約束をしていたのだ。
いつも昼間は扉から入って来るのだが、今日は転移してきたらしい。

「ああ、時間短縮の為だ」

ルークの返事に花は嬉しそうに微笑んだ。
その笑顔を見てルークは、なぜか顰めていた顔に笑みを浮かべた。
ルークは最近の忙しさに花と過ごす時間がほとんどなかった為、今日は無理に時間を作ったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ハァナ」

「ぶみゃ！？」

突然耳元で聞こえた、いつもより艶っぽいルークの声に花は驚くと同時に甘く痺れるようで腰が抜けそうになった。

「ルーク!?」

顔を真っ赤にしながら振り向いた花だったが、そのまま唇を奪われてしまう。

書き物机でユシュタールの世界地図を見ていた花をルークは椅子から抱きあげると、寝台へと向かった。

それなのに、ルークはキスをやめるどころか深めていく。

「ルー……ッ!?」

仰向けに横たえられた花は驚いて声を出そうとするが、その声はそのままルークの口に塞がれ吸い取られてしまう。

花に覆いかぶさるようにしてルークはキスを続けていたが、一度、花を強く抱きしめると起き上がった。

「ルーク、何をしてるの?」

ルークの動きを、ただ目で追う事しかできない花の頭の中はパニックになっているのに、なんとか出せた小さな声は呑気な事を聞いていた。

その問いに、花を切なそうに見下ろしていたルークは再び覆いかぶさるように花に近づくと、艶めいた声で花の耳元に甘く囁く。

「まだ何も……まだ何も始まってないだろう?」

その言葉に、もはや何も考えられない。

それなのに花の口は再び小さな声を発した。

「何を始めるの？」

「ハナは何を始めたい？」

すぐ間近にある、あまりにも美しい顔が優しく甘く微笑む。

もし花が横になっていなければ、あまりの微笑みに腰が砕けて倒れていただろう。それどころか、今すぐ気を失ってしまいそうだ。

返事をしない花にルークはもう一度甘い声で聞いた。

「何をする？　ハナ」

「あ……」

なんとか声を出そうとする花をルークは優しく促す。

「あ？」

花はありったけの、なんとか機能している思考をかき集めて答えた。

「あっち向いてホイッ！！」

＊＊＊

ルークは眠っている花の髪を優しく梳いていた。

あの後、『あっち向いてホイ』が何なのか、聞こうとしたルーク

に花は「ルークはしちゃダメです！！」と涙目で訴えた。
そして「もう寝ます！！」と宣言した後、いつも通りすぐに眠りに落ちたのだ。
笑いながらその様子を見ていたルークだったが、本当は笑っていないと無理にでも花を抱いてしまいそうだった。
花の「ルークが好き」と言う小さな告白を聞いてから、ルークの心は喜びに満たされている。

――――だが、俺は……。

ルークは花の事を想えば想うほど、己の想いに縛られ身動きが取れなくなってしまっていた。

――――これが愛とかいうやつか？……バカだな、俺は。

ルークは己の言葉に自嘲し眠る花の頬に優しくキスを落とすと、自身も眠る為に目を閉じた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

黒い……暗い闇の中。
寒い。冷たい。
赤い……熱い炎の中。

――――サム……サム？

赤い、赤い炎が！！

「キャアアアア！！」

花の張り裂けそうな悲しみと痛みに満ちた悲鳴が明け方の部屋に響いた。

43．火の不始末に気をつけよう。

まだ太陽も顔を出さない早朝、ルークは花の寝顔を見ていた。
気の滅入る一日がまた始まる。
このまま花の傍にいたい気持ちを抑え、花の頬にキスを落とすと起き上がり、寝台からそっと出て寝室の暖炉に火を入れた。
魔力で炎は制御できるので一晩中でも暖炉の火を絶やす事はしないでいいのだが、花が嫌がる為いつも消すのだ。

「火は見てるんです！　私たちが油断するその時を！！」

防火標語のような花の言葉にルークは笑ったが、それでも花の嫌がる事はしない。
暖炉の火がパチパチと爆(は)ぜて勢いよく燃えだした。
その音に反応したのか、花が身動(みじろ)ぎした。
と――

「キャアアアア！！」

花が張り裂けそうな程の悲しみと痛みに満ちたような悲鳴を上げた。

「ハナ！！」

ルークは慌てて花を抱き寄せた。
しかし花は悲鳴を上げ、ルークの腕から逃れようと暴れる。

「いや！　いや！！　サムが！！　サムがぁ！！」

「ハナ！！　大丈夫だ！！……ハナ！？」

涙を流しながら暴れる花をなんとか宥めようと、ルークは抱いた腕に力を込めながら花に声をかける。

徐々に落ち着いてきた花にルークも声を落とす。

「大丈夫だ。大丈夫だ、ハナ」

優しく囁くようなルークの声に安心したのか、段々と花の体から力が抜けていく。

ルークは腕の力を緩めると、花を宥めるように背中を優しくさすった。

「陛下！！」

「ハナ様！？」

扉の外から緊迫した声で護衛と侍女が呼びかける。

「私たちは大丈夫だ。ランディ、お前達は持ち場に戻れ。セレナはお茶を用意してくれ」

扉の外から緊張の緩む気配と共に、「かしこまりました」とそれぞれ応じる声がした。

ルークが花の部屋に来る時はルークの近衛達が不寝の番をしているのだ。

「ハナ、大丈夫か？」

背を撫でながら腕の中の花を見下ろしたルークはその異常に気付

く。

「ハナ！？」

花はルークの切迫した声にも応えず、ただ涙を流しながら虚空を見つめているだけだった。

ルークは花の瞳をジッと覗きこみ、優しく声をかける。

「――ハナ？」

やはり花はなんの反応も示さなかった。

「レナード！」

「どうした！？」

扉のすぐ外からレナードが応じる。

ルークの異常な気配を感じたレナードはすぐに青鹿の間に現れ、居間に控えていたのだった。

「ディアンを連れてすぐに来てくれ。もちろんお前も」

「わかった」

レナードの気配がすぐに消えた。

ルークはそっと花を寝台に横たえ、優しい手つきで瞼を閉じさせた。それでも花の閉じられた瞳からは涙が零れ落ちている。

＊＊＊

「陛下！？」

レナードと共に転移で現れたディアンは花の異常な様子に気付き、驚いたようにルークに声をかけた。レナードも驚きに目を瞠っている。

「ディアン、アポルオンを貸してくれ」

「おい！？」

今度はレナードが驚きに声を上げたが、ディアンは了解したとばかりに胸元のペンに向け声をかけた。

「アポルオン、出て来なさい」

一瞬ペンが光り、その場にアポルオンが姿を現した。

「呼んだ？　ディアッうッ！！」

アポルオンの声は途中で途切れ、アポルオンはその場に蹲る。
どうやら、ディアンの蹴りが入ったらしい。

「い……いきなりは効きます、ディアン様」

呻くように言うアポルオンの言葉を無視し、ディアンはルークに声を掛ける。

「陛下、お好きにどうぞ」

「すまん、ディアン。アポルオン、ハナを見てくれ」

本人の意思を無視して会話は進んでいくが、アポルオンは素直に二人の言葉に従い、チラリと花に視線を向けた。

「あ～あ、どしたの？　この女。ダメじゃん」

「な！？　どういう事だ！？」

呑気な声で答えたアポルオンの言葉に、レナードは驚き問い詰めた。

ディアンは何も言わずアポルオンに再び蹴りを入れたが、珍しく顔を顰めている。

「うあっ……つ、なんつうか、闇に囚われてんじゃないの？　闇の魔力の臭いがプンプンするもん」

心なしかディアンから離れて立ち上がったアポルオンは呻き、それでも呑気な口調を変えずに深刻な言葉を吐いた。

「闇の魔力……」

レナードが茫然とした様子で呟いた。

花の枕元に跪いたルークは、花の顔をジッと見つめたままだったが、アポルオンの言葉に唇を噛んだ。

ルークは己を責めていた。

なぜもっと早く気付かなかったのか、と。

花はここ最近、毎晩眠りに落ちるとうなされ、ルークが抱きしめながら優しく声をかけると落ち着くという事を繰り返していた。

花は闇の魔力で己の、花の中に潜む闇に襲われていたのだ。

闇の魔力は、闇に紛れてしまえば気付き難い。しかも花自身の闇

を利用されたのなら尚更だ。
それでもルークは気付くべきだったのだ。
なのに、花の口から洩れる『サム』と言う名前に気を取られて、深く考える事をやめてしまった。

「魔族が関わっているのか？」

暫くの沈黙の後、レナードが再び口を開いた。

「知らね」

相変わらず呑気な声でアポルオンは答える。
闇の魔力は魔族の、魔物の中でも高等な者達の力だ。
その為、魔族に属するアポルオンをルークは呼んだのだ。花自身の闇の奥に潜んだ闇の力はルークでも判り難い。
そして――

「アポルオン、ハナを闇から救いだすのを手伝ってくれ」

ルークはアポルオンに頼むが、アポルオンは嫌そうに顔を顰めた。

「え～なんで俺が？　その女の闇じゃん、めんど……」

ディアンからの殺気を感じたアポルオンはそれ以上の言葉を飲み込んだ。

「私からも頼みますよ、アポルオン」

恐ろしい程の爽やかな笑顔でディアンが頼む。アポルオンには脅

迫にしか思えなかったが。

「え～？　ディアン様、無理ですよ！他人（ひと）の闇の中に潜らなきゃいけないんですよ？　行きは闇を追って辿り着けても、戻る事は難しいんですよ！？」

必死で抵抗しようとするアポルオンにレナードも声をかけた。

「アポルオン、俺からも頼む」

「誰がお前の頼みなんか聞くか、バ～カ！」

その返事にレナードは己の魔剣の柄に手を掛ける。

「バ～カ、それは俺と対の魔剣だぞ？　俺を攻撃する為になんて抜けるわけないだろ？」

鼻で笑ったアポルオンに、レナードは握った柄に力を込めて剣を抜き、切りかかった。

「あれ！？　なんで！？　何でなの、ねえ！？　メレフィス！？」

アポルオンは討ちかかってくる剣を左腕に嵌めた幅のある装飾された腕輪のような物で防ぎながら、対の魔剣に宿る魔族の名を呼んだ。

「お前のバカさ加減にメレフィスも腹立ててんだよ！！」

メレフィスの代りにレナードが答える。

そこにルークの冷めた声が割り込んだ。

「レナード、悪いがメレフィスも呼び出してくれ」

「あ？……ああ、わかった」

その声にレナードは我に返り、己の剣に呼び掛ける。

「メレフィス、出て来てくれ」

剣に宿る魔族を呼び出すなど、相当の魔力を消費するので普通はそのような頼みをする事も受ける事もない。

だが今はそのような場合ではない事を皆がわかっている。

ちなみに、アポルオンについては色々と規格外なので皆気にしない。

レナードの声に反応するように魔剣は一瞬光り、アポルオンと同じような浅黒い肌、黒髪に金色の瞳、そして羊のようにくるりと巻いた角を持った美麗な顔をした魔族が姿を現した。

「メレフィス、すまない」

「……」

レナードの申し訳なさそうな声に、メレフィスと呼ばれた魔族は何も答えない。

それを気にした風でもなく、ルークが声を掛けた。

「メレフィス、悪いが手伝ってくれ」

「……」

声は発しなかったが、メレフィスは了解したというようにコクリと頷く。

「え？　メレフィス受けちゃうの？　なんで？　危ないよ？」

「……」

アポルオンの言葉にもメレフィスは答えない。
というよりこちらは完全に無視しているようだ。

「しかし陛下、魔族を精神の中に入れるなど、ハナ様が壊れませんか？」

ディアンの冷静で尤もな疑問にもルークは動じることなく答えた。

「俺も行く。メレフィスとアポルオンは道を示してくれるだけでいい。俺がハナの精神（こころ）を守る」

その言葉に、ディアンは軽く瞑目すると頷いた。

「わかりました」

レナードは何も言わず、ただ厳しい顔つきで花を見つめている。

「え？　俺が行く事は決定なの？　ねえ？」

ルークの言葉からずっと、ぼやいているアポルオンに応える者はいなかった。
目を瞑ったまま、未だに涙を流して横たわる花の傍に跪いたルー

クは、花の手を握り直すと祈るように瞳を閉じた。
ルークの魔力が花を包み込む。
それと同時に、メレフィスと不満顔のアポルオンの姿が掻き消えた。

＊＊＊

「……いいのか？　ハナどころかルークだって戻って来ないかも知れないぞ？」

その様子を黙って見守っていたレナードがディアンに問いかける。

「どちらにしろ、ハナ様が戻って来られなければ陛下は壊れてしまうでしょうから」

「まあな……ルークを癒してくれる者が現れないかと願っていたが……ハナの存在は諸刃の剣になってしまったな」

ディアンの淡々とした返答と同じようにレナードも淡々と語る。

「陛下はもう限界でした。その陛下の許にハナ様が現れたのは奇跡です。奇跡が続かなくても私はユシュタルを恨みませんよ」

ディアンの言葉にレナードは小さく頷いた。

「ただ、この状況を招いてくれた者にはそれ相当の報復をせねばなりません」

そう言って、いつも以上にどす黒い微笑みを浮かべたディアンに、

レナードはいつもと違って大きく頷き同意したのだった。

４４．臭い物に蓋。

「ねえ、みつ。どうしてお母様もお父様も来て下さらないの？」

明日は花が初等部に入学して初めての音楽会だった。

しかし、明日来てくれるのはナニーである美津のみだと、『みつ』こと矢島美津子から告げられたのだ。

「花様、旦那様はお仕事がお忙しいのですよ。それに奥様は今、お腹に赤ちゃんがいらっしゃるから体調が思わしくないのです。美津じゃご不満かも知れませんが、花様の演奏なさってるお姿は私がちゃんと見させて頂きますから我慢して下さいませ」

「ううん、みつが来てくれるのは嬉しいよ！」

そう言って花は美津に抱きついた。

英国ナニー協会公認の美津は、花が産まれた次の日に小泉家にやって来て以来、花の面倒をずっと見てくれたナニー（乳母）だ。

花にとって美津は家族以上の存在だった。

滅多に顔を合わす事のない父親や、花に触れる事もない母親、六歳年の離れている、今はどこかの名門中学の寮に入っている兄に比べて常に傍にいてくれる人。

音楽が好きになったのも美津のお陰だった。

美津の子守唄代わりに歌ってくれる歌はとても綺麗で恐い夢を見る事もなく安心して眠れ、美津の弾いてくれるピアノは心が弾むように楽しく、喜びに溢れた。

今は専門の講師についているピアノの練習も、始めは美津に教えてもらっていたのだ。

「あ、サムが来てるわ！」

そう言って駆け出そうとした花を、美津は引き止めた。

「花様、あのような使用人と親しくなどなさってはいけません」

「でも、でも……」

納得しかねるといった様子の花に、美津は大きく溜息を吐いた。

「花様、私はこれから少し用事をして参ります。その間お一人でお遊び頂けますか？　決してお庭からはお出にならないで下さいませ」

その言葉に花の顔はパアッと明るくなる。

「はい！」

花は元気のよい返事をすると、見逃してくれた美津に力いっぱい手を振って部屋を出て行った。

＊＊＊

「サム！」

サムと呼ばれた壮年の歳の頃を少し過ぎた男は、駆け寄ってくる花を見て微笑んだ。

「やあ、お嬢さん。今日はせっかく掻き集めた落ち葉をまき散らすのはやめて下さいよ」

サムの笑いながらの言葉に花は「う！」と立ち止まる。
前回、サムに会いに来た時に、掻き集めてあった落ち葉の山の誘惑に耐え切れず、そのまま飛び込んだのだった。

「ち、違うわ！　前は止まれなかったの！！　ちゃんと今日は止まれたもの！！」

サムは夏頃から小泉家に週に二、三回の頻度で出入りを始めた植木職人だった。
彼はれっきとした日本人なのだが、彼の名字『佐久』を花はどうしても言えず、いつも『サム』と呼んでいるのだ。
好奇心旺盛な花はすぐに彼に近づき仲良くなった。
七歳の子供らしい子供でいられるのは、美津とサムの前でだけなのだ。

――――　そうだ……ギターもサムが弾いて聞かせてくれたんだ……。

そんな事を考え、花はこれが自分の思い出の中なのだと気付いた。

――――　ああ、そうか……そうだ、だったらこの先は……思い出したくない！　見たくない！！

花の願いも虚しく思い出は紡がれていく。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「え？　お嬢さんはサンタクロースを信じてないんですか？」

「そうよ。だって私の所には一度も来てくれた事がないもの。サンタクロースが良い子の所に来るって言うなら、一番に私の所に来るはずだもの。だからいないのよ」

その言葉にサムは苦笑する。

「それはきっと、お嬢さんの所に来たくても来れなかったんですよ。だってこの家の煙突は塞がれているし、警備も厳しいですから」

サムはそう言うと少し考えるように黙り込む。

「そ、そうなのかな？　来たくても来れなかったのかな？」

花はサムの言葉に安堵していた。

幼稚舎の頃から、お友達が冬休み明けにサンタクロースに何を貰ったか楽しそうに話しているのを聞く度に、サンタクロースなんていない、ずっとそう言い聞かせていた。

でも、この時期に幼稚舎で歌っていたサンタクロースの歌でもあるように、きっとサンタクロースはドジだから花の家には入ってこれなかったんだ。

そう思うと、花は幼稚舎に入ってからの特に辛かったこの時期が少し楽しいものに思えて来た。

――――　あわてんぼうのサンタクロース。

「ふふ」と笑う花に、サムは内緒話をするように話し始める。

「お嬢さん、今年のクリスマス・イブの日には寝る時に窓の鍵をかけずに寝るといいですよ。お嬢さんの部屋はあそこでしょ？」

サムは花の部屋を指さして言った。

「そうよ、あそこ！　サム、すっごくいい考えね！！」

喜んで大きな声を出した花を、サムは窘めるように小声で告げる。

「お嬢さん、この話は内緒にしときましょう。二人だけの秘密です」

『秘密』と言う言葉にワクワクして、花は共犯者の様な気分で大きく頷いたのだった。

＊＊＊＊＊

二十四日の夜は窓の鍵を開け、いつもなら五分で眠れる所がワクワクして中々寝付くことができなかった。

それでも、いつしかグッスリと眠りに落ちる。

そして次に目が覚めた時には真っ暗な闇の中にいる事に気がついた。

――――　あれ？

何かがおかしいと花は気付いたが、それが何かなのかは自分の体に意識が向くまで理解できなかった。

そして理解した時には、信じられなかった。

この真っ暗な闇は、ひょっとしたら車のトランクの中にいるからじゃないのか。

聞こえてくる耳障りなエンジン音と振動で花は思った。

それに花はどうやら口を粘着テープか何かで塞がれており、腕を後ろ手に縛られている。
まさか、そんな訳ない。
花はこれが夢だと思い込もうとして、もう一度眠りに落ちることにした。眠れば嫌な事は忘れられるから。

＊＊＊

次に目が覚めたのは、ドサリと体を地面に落とされた痛みによるものだった。
しかし、目を開けてもやはり真っ暗な闇の中で、何が起こっているのか花にはわからない。
だが、そのうち真っ暗に閉ざされた扉の向こうから男達の言い争う声が聞こえ、七歳の花にもやっと状況が理解できた。
誘拐されたのだ。

そして、それにサムも加わっている。
何を話しているのかはわからない。ただ二人の男の怒鳴るような声と、サムの哀願するような少し悲鳴染みた声が聞こえて来るだけ。
花は再び目を閉じた。

――――　これは夢、すごく悪い夢。だって今日はサンタクロースが来てくれる日だもの。私は良い子だから、きっと素敵なプレゼントを持って来てくれるもの。

眠るのだ。
眠れば悪い事は全部忘れられる。だからもう一度眠るのだ。

＊＊＊

ぼんやりとした暗闇の中、目の前にサムの顔があるのに気がついた。
いつもの陽気な顔とは違い、何か痛ましげな物を見るような、苦しそうな顔をしている。
サムは花の口を塞いでいたテープを剥がし、腕を縛っているロープをナイフで切っていた。

「――サ……？」

サムと呼びたいのに、声が出ない。
サムはそんな花の様子を無視して呟いた。

「逃げるんだ。ここから逃がしてやるから」

ここに花を連れて来たのはサムではないのか、なのに逃がそうとするなんて花は訳がわからない。
だがサムの言葉通りに遂げられる事はなかった。

「おい、佐久！！　何してるんだ！？」

その怒気を含んだ声にサムはビクリと動きを止め、それからゆっくりと声を発した男の方へ振り向いた。

「この子を逃がすんだ。殺すなんて聞いていない」

「馬鹿かお前は！！　顔を見られて生きて帰せるわけないだろうが！！　しかもこいつの親父は警察に知らせるなって言葉を無視してさっさと知らせたんだ！！　よっぽど金の方が大事で娘の命など惜しくないんだろうよ！！」

怒鳴り散らす男の言葉を花は冷静に聞いていた。

――――　ああ、お父様にご迷惑をかけてしまった。

たった七歳の子供が考えるような事ではない事をぼんやり考えていたが、いきなり襲った衝撃と痛みに一気に現実に戻る。

サムが花に覆いかぶさっていた。

その衝撃に驚いたのだが、胸のあたりにチリリと感じる痛みがわからず、目を凝らす。

すると怒鳴り散らしていた男とは別の男が血に濡れたナイフを振りかざしていた。

それからもう一度、衝撃が襲ったが、花は再び意識を手放した。

楽になる為に。

＊＊＊

花は顔に感じる熱で目を覚ました。

目の前には真っ赤に燃える炎が見える。真っ暗闇の中に炎は赤々と輝いているようだった。

パチパチと火が勢いよく爆ぜる音がする。

体を起そうとした花は手の平のぬめりとした感触にハッとする。

――――　血だ。

花の周りには炎とは違う赤で染められていた。

そのまま真っ赤に染まった先に視線を向けると、蹲ったまま動かないサムがいた。

「サム？」

なんとかサムの方へ行こうとしたが胸の辺りがチリリと痛み、花は自分の胸を見下ろす。
そこは真っ赤に染まり、それがサムのではなく自分の血だと理解した花はやっと現実を直視した。

「いや！！　いやぁ！！　サム！？　サム！！」

必死でサムの名を呼ぶが、蹲ったままのサムはピクリともしない。
炎の勢いは益々大きくなっていき逃げなければいけないのに、花にその意識はなくただサムに近づこうと体を這っていく。
外にサイレンの音が聞こえたような気がした。
そうして花は何度目かになる、意識を手放す事にしたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

花が連れられた場所は頑丈にできた倉庫で火の回りが遅く、また花は寝転んでいた為、幸い煙を吸わずに済んで助かったのだ。
胸の傷は花を庇ったサムの体を貫通して花の鳩尾を傷付けたものだったが、傷もそれほど深くなく命に別条はなかった。

結局、身代金目的の誘拐は失敗し、三人の仲間のうち一人は仲間割れの為殺害され死亡、もう二人はその後警察に捕まり服役する事が決まったらしい。
しかし、この事件は世間で取り扱われる事はなかった。
花の将来に傷が付くと言う名目で小泉家の力を使ってマスコミに箝口令が敷かれたのだ。

花の父親は、病院のベッドに横たわる花に酷く憤慨していた。
「なぜ、鍵をかけていなかったんだ!!　今回の事件はお前の不注意のせいだ!!　いったいどれだけの人に迷惑をかけたと思っているんだ!!」
この父親の言葉に花は謝る事しかできなかった。
そして、母親の姿を入院中に見る事は一度もなく、「お前のせいでもし、お腹の子に何かあったらどうするんだ!?」との父親の言葉から、体調を崩したらしい事がわかった。

父親に怒られる事は恐くない。母親が姿を見せない事も悲しくない。
ただ、花のせいで美津が酷く父親に怒られ、土下座せんばかりに謝罪しているのを見るのが辛かった。

それからサムの事を考えた。
サムは違法賭博で作った莫大な額の借金があったらしい。

サムはなぜ私を庇ったんだろう。
庇うくらいなら最初から裏切らないでほしかった。
嘘をついたなら最後まで嘘をついていて欲しかった。
どうして助けたの?
どうして殺してくれなかったの?
あの時死んでいた方がずっと楽だったのに!!

花が成長すると共に、負の感情までも大きく成長していた。
それにずっと蓋をしてきたのだ。
それが今溢れ返って大きな闇となって花を襲う。

どうして嘘をついたの？
どうして殺してくれなかったの？
あの時、死んでいた方がずっと楽だったのに。
そう、死んだ方が楽なんだ。
このまま死んでしまえばいいんだ。

真っ暗な闇の中、花は自分の死を望む感情に囚われていた。
ここはとても気持ちがいい。
このままここで闇に飲まれてしまえばいい。
ゆらりゆらりと闇の中にたゆたう気持ち良さに、花はゆっくりと瞳を閉じた。

――――　ハナ！！

どこかで花を呼ぶ声がする。
それでも花は応えない。
じっと闇の中で瞳を閉じたまま。

――――　ハナ！！

何度も花を呼ぶその声はとても逼迫（ひっぱく）していた。
その声は段々と悲しそうに、苦しそうになる。
花はそんな苦しそうな声を聞きたくなかった。
彼はいつも苦しんでいる。
だから彼の苦しみを少しでも和らげてあげたい、癒してあげたい。
彼が好き。

彼の傍にいられるなら、私は辛くても苦しくても生きていたい。

「ハナ！！」

「……ルーク！？」

真っ暗な闇の中、花は自我を取り戻した。

ここがどこだかわからない。それでもルークが傍にいるのがわかる。

私は辛くても苦しくてもルークの傍で生きていきたい。

花はそう強く願い、ルークの声がする方へ手を伸ばした。

「ルーク！！」

花の伸ばした手をしっかりとルークが掴んだ。

「ハナ」

優しく温かい、そして安堵したようなルークの声が聞こえた。

45．あばたもえくぼ。

「な！？……バカな……」

薄暗い部屋の中で一人、瞑目していたガーディは驚きの声と共に目を開けた。

クラウスに命じられて以来、ガーディは夜毎、欠けゆく月と共に深まる闇に紛れ、皇帝の側室を闇へと落とす術を徐々に施して来た。

いくら闇に紛れる魔力とはいえ、皇帝ほどの魔力の持ち主に気取られぬように術を施すのは至難の業である。

それをどうにか掻い潜り、闇の一番深まる新月の昨晩、ようやく術は完成したのだ。

後はきっかけさえあれば、術は発動する。

そして、大した時間をかける事なく術は発動し、皇帝の側室は闇へと落ちたはずだった。

術は完璧だったのだから。

「これはいったい……」

ガーディの小さな呟きはカーテンの隙間から差し込む朝陽に溶け込んだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ハナ」

ルークの優しく温かい安堵した声を聞いて、花もまた安堵した。

「ルーク」

あまりの喜びに涙が出そうになる。

しかし、何かがおかしい事に花は気付いた。

「あの、ルーク……ここはどこですか？」

繋いだ手からは確かにルークの温かさが伝わり、ルークの気配もしっかりするのだが、とにかく真っ暗闇で何も見えない。

「ハナ、ここはハナの精神（こころ）の中だ」

「ええ！？」

――――なんだ、そのファンタスティックでファンタジックな展開は！？

花は何をどう考えればいいのかわからず焦ってしまう。

「どうでもいいから、さっさと出るぞ」

「どびゃ！！」

いきなり聞こえた第三者の声に花は驚いた。

相変わらずの花の驚きに、ルークは笑いながら声の正体を教えてくれる。

「今のはアポルオンだ」

「アポ……」

名前を覚えるのが苦手な花は、その名前を聞いてもピンと来なかった。

それに腹を立てたのか、アポルオンは怒ったように自己紹介をする。

「俺様はディアン様の魔ペンのアポルオンだ！！」

「ああ！！　あの、マゾっ子マゾ君！！」

やっと思い当たった花は嬉しそうな声を上げたが、アポルオンの怒りを更に買ったらしい。

「誰がマゾだ！？　しかも二回も言ってんじゃねえ！！　ブス！！」

どうやら自覚のないらしいアポルオンの怒りに一瞬怯んだ花だったが、繋いだルークの手に力が込められたのに驚き、アポルオンの事はとりあえず無視することにした。

「ルーク？　どうかした？」

「……いや、なんでもない。ハナ、気配もあまりないしずっと無言だから気付かないかもしれないが、ここにはレナードの魔剣に宿るメレフィスと言う魔族もいる」

ルークの説明に花は驚く。

相変わらず真っ暗闇で何も見えないのだが、もう一人？　存在しているとは思いもよらなかった。

――――　ええ？　ここって私の精神の中なんだよね……定員オーバーなんじゃ……。

考えると色々と許容範囲を超えそうなので、花は考える事をやめた。

お得意の「まあいっか」と。

そして、とりあえず挨拶をする。

「メレフィスさん、始めまして」

「……」

返事はなかったが気にしなかった。

というより出来なかった。アポルオンが暴れ出さんばかりの勢いで怒っていたからだ。

実際、見えないだけで暴れていたかも知れない。

「てめぇさっきから無視してるんじゃねえよ！！　さっさと出るっつってんだろうが！！」

「あ、すみませんでした」

花は謝ったが、ルークの「気にするな」との言葉に気にするのをやめた。

アポルオンはブツブツ文句を言いながらも、スタスタとどこかへ進み出す。

「あの、アポルオンさん！！」

「ああ！？」

何も見えないのだが、気配でアポルオンが去っていくのがわかり、花は呼び止めた。

「どこへ行かれるんですか？」

「バカか、てめぇ！　出口に決まってんだろうが！！」

アポルオンは苛々と花の質問に答える。

「え？　でも、出口はこっちですよ？」

花はアポルオンの進もうとする方向とは間逆の方向を指した。

するとルークもメレフィスもスタスタとアポルオンを置いて、花の指示した方向へ進み出した。

やはり何も見えないのだが、なぜか皆なんとなく気配でわかるようだ。

「え？　あ、ちょっと！！　なんでみんなそっちに行くんだよ！！」

アポルオンを置いて来ている事を気にして花が振り返るとルークが握った手に力を込めて言う。

「気にするな、ハナ。アホは置いていけ」

「ええ？　でも、私の精神（なか）にアレを置いて行くのは嫌です」

「ああ、確かに」

花の言葉にルークは納得し、仕方なくといった感じにアポルオンが追いつくのを待った。

メレフィスも何も言わないが、ずっと傍にいるみたいだ。

「んだよ、お前。なんでこっちが出口ってわかんだよ？」

追い付いてきたアポルオンが拗ねたように聞いてきた。

「ええと、自分の精神（なか）ですから、なんとなくですけど……」

「なんとなくでこっち来てんのかよ！？　信じられねえ！！」

花の言い分に納得できない様子で口調を強くするアポルオンに、ルークが聞く。

「では、お前は何であちらへ行こうと思ったんだ？」

「勘」

キッパリ簡潔に答えたアポルオンだったが、すぐに悲鳴を上げた。

「いてっ！！　ぎゃ！！　やめろって、メレフィス！！」

二人？　の魔族がいるからこそ、この闇の中で真っ直ぐ進む事が出来るのだがルークも花も、とりあえずその存在を無視する事に決める。

そうして二人しっかりと手を繋いで進んでいくと、その先に光が見えて来た。

その光はどんどん近付いて来る。
そしてあっという間に皆を飲み込んでしまった。

＊＊＊

「気が付いたか？」

花が目を開けると、ルークが跪いて覆いかぶさるように花の顔を覗き込んでいた。
その顔は今にも泣き出しそうな、それでいてとても嬉しそうに見える。

「ルーク、ありがとうございます」

そう言って微笑んだ花もまた泣き出しそうだった。
花は起き上がろうとしたが、それをすぐルークに制されて肩の上まで掛け布を引き上げられた。
ちゃんと起き上がってみんなにお礼を言いたかったのだが、ルークに「お前はまだ夜着のままだ」と言われて諦める。
花はルークの向こうから心配そうに窺っていたレナードとディアン、そして後ろに控えるように立っているアポルオンとメレフィスにもお礼を言った。

「みなさん、ありがとうございます」

それに安堵したかのようにレナードは優しく微笑んで頷き、ディアンも軽く頷いた。
それからすぐに、メレフィスはレナードの魔剣へと輝いて戻る。
一呼吸おいてルークは立ち上がりアポルオンに近づくと、いきなり蹴りを入れた。

「え？」

花は驚きの声を漏らしたが、ルークはそのまま蹲るアポルオンを踏みつけている。

それを気にすることなく、ディアンが「居間でお茶でも頂きますか」と踏みつけられ蹲るアポルオンを更に踏みつけて寝室から出て行き、それに続いてレナードも「じゃあ、俺も」と言って出て行った。

「ええ？」

再び花は驚きの声を上げたが、ルークは呻くアポルオンを更に強く踏みしめた。

「う、痛いって、ルーク……」

「お前はアホだが、ハナはかわいいだろうが！！」

「えええ！？」

ルークのルークとも思えない発言に花は驚き、ただただ茫然とした。

どうやら先程の花への『ブス』発言がルークには許せなかったらしい。

そしてこの恥ずかしい拷問は暫く続く事になるのだった。

46．愛の証。

「陛下、酷くお疲れの様ですから今日はこのままお休みになった方が良いでしょう。ジジイ共の相手は私がしておきますから」

あれから再び眠りに落ちた花から目を離す事を不安に思ったルークは、ディアンの言葉に感謝した。

実際、ルークの魔力の消耗は激しく休息は必要だったのだ。

それはレナードも同じで、ディアンはレナードにも休むように告げると朝議の為に青鹿の間を後にした。

「いくら無意味な内容ばかりとはいえ、朝議を休んで側室の部屋に籠もるなど、大臣共は眉を顰めるだろうな」

「気になるのか？」

苦笑しながら呟くルークに、レナードは聞いた。

「いや、全く」

「だろうな」

レナードも笑うと、扉から出て行った。

だが、いくら朝議や謁見などは控えることが出来ても、その他にやるべき事は多大にある。

ルークは花の枕元に椅子を置いて座り、ディアンが運んで来る大量の書類に目を通していた。

ふと、花が身動ぎする。
途端にルークは心配そうに花を見つめ、呼吸の安定している花に安堵の吐息を漏らした。
そして書類を脇に置くと、しばらく花を見つめたまま考え込んだ。
花が眠る時に暗闇を怖がり、火を焚いたまま眠る事を嫌がるのは、あの忌まわしい出来事が原因なのか。

先程ルークは花の闇を覗いてしまった。
花が基本的に人を信用していない事も、笑顔の下に様々な感情を隠している事にもルークは気付いていたが、まさかあのような幼い頃にあれほどの酷い経験をしているとは思いもよらなかった。
それでも、ルークに見せる花本来の姿は明るく前向きで、優しさに溢れている。

ルークは闇に囚われてしまった花を救い出すつもりだった。
しかし、本当に救われたのはルークの方ではないのか。
悲しみと苦しみに飲み込まれてしまった花には、必死で呼びかけるルークの声も届かないようだった。

――――　このまま花を失うのは耐えられない！

花を失う恐怖に襲われたルークもまた闇に飲み込まれそうになったのだ。
そんなルークの悲しみと苦しみに花は反応した。
そして、花自身があれほどの悲しみと苦しみに囚われながらも、ルークの為に己の闇から抜け出した。

花はいつも恐れることなくルークの手を握る。
そこから伝わる感情は慈しみ溢れ、ルークを苦しみから救う。
花自身は気付いていないようだったが、ルークの手を取った花は

あれほどの闇の中に在っても、光に包まれ輝いていた。
ルークは花と闇の中に囚われてしまう事も覚悟していたのだが、花が闇の中で指し示した道はすぐに出口へと繋がり、心地よい光に包まれると同時に現実へと戻れたのだ。
あの心地よさは花の生み出す魔力のようでもあった。

花は本当に不思議な存在だが、そんな事はどうでもよかった。
ただ、愛おしくてたまらない。
ルークは花の頬にかかった髪を優しく耳へとかけてやる。
すると、パチリと花が目を開けた。

「すまない、起こしたか？」

申し訳なさそに言うルークに花は微笑む。
そして自身を覆っている掛け布を持ち上げると、囁くような声で言った。

「ルーク、こっちに来て」

「ハナ？」

驚いて見つめるだけのルークに花は少し寂しそうにもう一度囁く。

「ここに来て？」

寂しそうな花の顔を見たくなくて、呆然としながらもルークは言われるまま、花の隣に横たわる。
すると花はとても嬉しそうに微笑んだ。

「ギュッとして？」

次いで出た花の言葉に、クラクラしながらもルークは花を抱きしめると、花もルークに抱きついた。

「サンタクロースが……」

「ん？」

花が呟くように言った言葉にルークは聞き返す。

ルークはサンタクロースが何なのかはよく解らなかったが、あの闇の中での幼い花の言葉を思い出し、心配になった。

しかし、花は嬉しそうに話す。

「あわてんぼうのサンタクロースは私の所に来るのを忘れてたみたい。だから、二十年分のプレゼントをくれたのかな」

そう言うと、花はルークに強く抱きついた。

ルークはただただ花が愛おしくて、優しく花の額にキスをする。

それにまた花は嬉しそうに笑い、そしてルークを見上げて小さな声で聞いた。

「ルーク、キスしていい？」

その言葉にルークは驚く。

「――かまわないが……」

なんとか返事をしたルークに更に花は言葉を継ぐ。

「どこにしたらいい？」

「……どこでも」

余裕を失くしたルークの答えに、花はしばらく「んー……」と考えていたが、ルークに抱きついていた腕をほどいた。

そして、ルークの上品で豪奢な衣服の釦（ぼたん）を襟元から順に外し始める。

「ハナ！？」

驚きの声を上げるルークに構わずハナは、釦に少し苦戦しながら疑問を口にした。

「こんなにキッチリした服でルークは苦しくない？」

「……いや、大丈夫だが……」

「そうなの？」

「すごいね」といった感じで応える花はルークの動揺に頓着せず、胸の中ほどまで釦を外すと、襟元を広げた。

そして――

「ッ！？」

花はルークの肩に噛み付いたのだった。

驚きのあまり呆然とするルークに構わず、花は嬉しそうに呟く。

「歯形つけちゃった」

「ハナ……」

困惑するばかりのルークに、花は満足そうに笑う。

そして今度は優しく、ルークに付いた自身の歯形にキスをすると花は再び眠りに落ちた。

どうやらブラック花ちゃんは、歯形が愛の証と信じているようだった。

47．太陽に吠えろ。

「はううおおお！！」

「ハナ、吠えるな」

「吠えてません！！　悶えてるんです！！」

「……そうか」

頭を抱えて寝台の上に蹲る花に、ルークは呆れながらも安堵する。
一方、花は先程の自分の行動を思い出し羞恥に悶えていた。

――――　噛み付いちゃったよ！！　ってか、それよりも服脱がしちゃったし！！……そもそも、なんでルークは止めないの！？　ルークのバカ！！

花の思考は徐々にルークへの八つ当たりに変わる。

「もう！！　ルークのスケベ！！　変態！！」

そしてそれをルークへとぶつけた。

「……なぜ俺が謂(いわ)れない非難を受けなければならない」

ルークは少し諦めた様に呟きながら、居間に控えているセレナにお茶を用意するよう言いつけた。
それから二人は居間でお茶を飲んでいた。

と、そこへディアンが現れる。

「ハナ様、もうよろしいのですか？」

心配そうに声をかけるディアンに花は微笑んで答えた。

「はい。ご心配をおかけして申し訳ありませんでした」

そんな様子の花を見て、ディアンは安心したように微笑む。

――――うお！　猛獣宰相の本物の笑顔を見ちゃった……。

その笑顔は花以上に、後ろに控えているセレナとエレーンに衝撃を与えた様だった。

「陛下、少しよろしいですか？」

二人は花から少し離れ、何事かを話し始めたので、花は黙って紅茶をゆっくりと飲んだ。

そして、キリの良さそうな所でルークへ声をかける。

「陛下、私はもう大丈夫です」

安心させるようにニッコリ微笑む花をルークはジッと見つめると、軽く息を吐き出した。

「では私は執務に戻るが、もし何かあったらすぐに知らせてくれ」

ルークは花に言い聞かせるように言うと、セレナ達に視線を向ける。

その視線を受けた二人は大きく頷いた。
立ち去る前にルークは花に軽くキスをしたが、それを受けた花はルークの顔を見て心配そうに声をかけた。

「陛下は……大丈夫ですか？」

「ああ」

花の言葉に優しく微笑むとルークはディアンと出て行った。
それを見送った花は、ルークの顔色が良くなかった事が気に掛かり、皆の前でキスされたことには思い至らず、後で赤面するはめになったのだった。

それから花は少し遅めの昼食をとり、セレナ達と楽しく話をしてゆっくりと過ごした。
気がつけば、外はオレンジ色の光に包まれている。
花は寝室の窓辺に腰かけ、暮れゆく太陽によって黄金色に輝くサイノスの街を見下ろした。
しかし、その心に映るのは幼いあの日の思い出。
再び過去の辛い思い出に囚われそうになった花は楽しかった事もあったのだと思い直す。
サムが庭の物置小屋にあったギターを見つけて弾いてくれた時の事を思い出した。
弦が緩んで調律のできないそのギターは、調子の外れた音を奏でて花を笑わせてくれた。
暫くして、サムが新しい弦を張り直して弾いてくれた曲。
それに合わせて歌うサムの声はとても深くて優しかった。

――――　サム……。

サムを想い、花はシューラを取り出した。
まだ人を癒せる程の音色を出す事は出来ないけれど。
花はシューラの音色にのせて歌った。
サムが奏でてくれたあの曲を。
それは優しい愛の歌。
その歌声は王宮へ、サイノスへと響き渡る。
まるで風が花の歌声を少しでも遠くへ届けようとしているかのように、風に乗って流れゆく。

＊＊＊＊＊

まだ本調子でないルークは、それでも溜まった執務をこなしていた。
それはレナードも同様で、些か顔色が悪いままルークの後ろに控えている。
「レナード、その鬱陶しい顔で後ろに立つな、気が滅入る」
「陛下、こんなに愛嬌のある顔に何を言うのですか」
「ディアンと同じ顔をして、愛嬌とかぬかすな！」
二人の無駄な口論は続く。
だが、その時ルークが動かしていた手を止め、驚きに顔を上げた。
「ハナ？」

レナードも花の歌声に気付き、窓開けた。
花の優しい歌声が季節外れの暖かい風と共に舞い込んで来る。
ルークもレナードも、心と体を癒してくれる優しい歌声に耳を澄ました。

＊＊＊

歌い終わった花は暫く窓からぼんやりと街を眺めていた。

「ハナ」

「にょっ！？」

ルークの声に驚き、花は慌ててシューラを置いて立ち上がった。
するとそのままルークに抱きしめられる。

「ハナ、あまり……」

ルークの言葉は続かなかった。

「ルーク？」

不思議そうにルークを見上げた花は、ルークの顔色が良くなっている事に気付き、嬉しそうに微笑んだ。
ルークはその微笑みを眩しそうに目を細めて見つめ、優しく花の頬を撫でた。
それから、結い上げて留めてあった髪留めを外す。

「にゃにょを！？」

柔らかな髪はサラリと、驚く花の背に流れ落ちる。
その艶やかな髪を優しく梳きながらルークは軽く花にキスをした。
そして花の髪を一束すくい取ると口づける。
再びルークは唇を重ねると、今度は深く激しく奪うようなキスを繰り返した。

「ん……」

花の洩らす声に、ルークの体中の細胞が反応する。

――――　ハナが欲しい、俺のものにしたい、俺だけのものに。

ルークの心と体は花を激しく求め、凶暴な程の独占欲に支配される。
花の歌声を誰にも聞かせたくない。花を閉じ込めて誰にも見せたくない。
そんな荒れ狂う感情をなんとか抑え付けた。

選択の余地を与えず花を側室という立場においた己の傲慢さに、花を愛せば愛すほどルークは罪の意識に苛まれた。
苦しいほどに花を求めていながらも無理に唇を離すと、花は凭(もた)れかかるようにルークに抱きつく。

「ルーク大好き」

花の甘い囁きにルークは様々な感情を抑え、強く花を抱きしめ瞳を閉じた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

この日サイノスの街は、あの満月の夜の奇跡のように、愛情に満たされていた。

闇に囚われた者たちの心を除いて。

48．女心と男の事情。

花がこの世界に届けられて二か月が過ぎようとしていた。
居間でゆっくりと本に目を通していた花だったが、本の内容は少しも頭に入らない。
それは別の思いに囚われていたからだった。

――― ルークは……どうして何もしないんだろう……？

恐らくルークが知れば泣きそうな内容だったが、花は本気で悩んでいた。

――― 毎晩同じベッドで寝てるのに何もされないって女としてどうなの！？……やっぱり私が……。

花はさりげなくセレナとエレーンを窺う。

――― 二人とも美人だなぁ。嫌味を言いに来るご令嬢達もみんな綺麗だし……それに比べて私は……でもルークはかわいいって言ってくれたよね！

自分の容姿をよく理解している花は落ち込みそうになったが、アポルオンに言っていたルークの言葉を思い出し、気分を浮上させた。
が、また別の考えが浮かんでくる。

――― かわいいって言っても色々あるよね……いろいろ……例えば……キモカワイイとか？

「ぐほ！！」

己の考えで激しくダメージを受けた花は思わず叫んだ。

「ハナ様、大丈夫ですか！？」

「ハナ様！？」

セレナとエレーンが慌てて駆け寄って来る。

花は顔を赤くしながら、急いで謝った。

「ごめんなさい！　何でもないです！！」

気がつけば、扉の内側にいたカイルまでもが、厳しい顔つきで様子を窺っている。

花は三人に安心させるようにニッコリと微笑むと、自己反省会を始めた。

――――　何やってるの私！！　落ち込んでも態度に出さない。これ鉄則。例えキモカワイイでもいいじゃない、かわいいんだから……いや待て、ブチャカワイイって事もありうる。っていうか、キモいよりはブサイクの方がありじゃない？　うんうん、きっとそうだ！！ペットでもブサイクな子の方がかわいかったりするよね、うん……ペット……ペットか……。

再び落ち込んでしまう花だった。

――――　そうか、ペットか……そうだよね、ペットにもキスするもんね。うん……あれ？　でも前にルークに好きって言ってもらったよね……あれからはないけど……あれもペットに対するような好

きとか？……だってそうだよね、普通、本気で好きな子と同じベッドに二か月近くも一緒に寝て何もないってありえないよね……たぶん……ありえるのか？　いやいやいや……どうなの？

経験の全くない花にはそこの所がわからない。だからと言って、誰かに相談するわけにもいかず、益々悶々と考えてしまった。

ルークの心、花知らず。である。

――――　生理的欲求もあるって言ってたけど、それってどれくらいの頻度であるものなのかな……うーん。もっとみんなの話まじめに聞いとけばよかったな。

女子校だったとはいえ、クラスの大半の子たちには彼氏がいたようで、時には猥談まがいの話で盛り上がる事もあった。

花も興味がなかったわけではないが、あまり熱心に聞いていたわけでもないので、それなりの知識しかない。

もちろん家でそんな話は絶対に有り得ず兄弟とも年が離れていた為あまり接点もなく、男性の生態？　というものがよくわからなかった。

そうしてまた考え込んだ花は、もう一度さりげなくセレナとエレーンを窺った。

今度は顔ではなく胸元の方へ、そして自分の胸元を見下ろす。

――――　残念！！……そうとしか言いようがないです、はい。いや、ちゃんとあるよ、あるよね？　君たちは胸だよ。間違いないからね。

なぜか、自分の胸に向かって言い聞かせ出した花だった。

――――　やっぱり必要なのは色気かな。色気……って、何考えて

るの!?　これじゃあ私、すごくそういう事したいみたいじゃない!!!　違うのー!!!

自分で自分が恥ずかしくなった花は心の中でひたすら悶えていたが、そのうち考えすぎた為か花はお腹が痛くなってきた事に気が付いた。

――――　う……痛い。ズシリと痛い。でもこの痛み……。

少し考えてから花はトイレへ行ったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今朝もやはり議会は紛糾していた。

――――　毎日毎日、飽きもせず同じ事ばかりよく繰り返せるものだな。

レナードは冷めた目で大臣たちを見ながら思っていた。
あの夜から大規模な戦闘はないものの、サラスティナ丘では睨み合いが続いている。
結局、セルショナードの思惑がわからないまま、膠着状態が続いているのだ。
それに誰もが苛立ちを募らせている。
そしてそれはレナードも同じだった。

――――　まさか、昨日ハナに起こった事はセルショナード側の手の者か?

闇の魔力を使う者が魔族以外にいるとは聞いた事もないが、だからと言って全く無いとも言い切れない。
まだ闇の魔力についても、魔族についても知っている事など僅かでしかないのだから。
セルショナード軍にいると言う王族クラスの魔術師、まさかその者達の仕業なのか。
レナードはチラリとルークを見下ろした。

――――ルークは何か知っているのだろうか？

ルークは何でも自分一人で抱え込んでしまう。レナードにはそれが時々歯痒かった。
自分はルークに比べて何の力にもなれないが、それでも頼って欲しいと思う。
一人で苦しみ、孤独を強めていくルークを見ていたくなかった。
だからこそ、そのルークが心を委ねる存在が現れた事が嬉しい。
しかしもし、セルショナードがその事を知って花を狙って来たのだとしたら？
その考えがレナードから離れない。
そんなレナードの思考は騒がしい議場の中でひときわ甲高く響いた声によって打ち切られた。

「陛下、恐れながらお伺いしたき事がございます！」

今までの議論で熱くなった勢いのままに、外大臣のコーブは声を上げた。
それにルークは冷めた声で応じる。

「なんだ？」

それでもコーブは興奮のままに発言をする。

「ハナ様はいったいどのような御方なのですか？」

途端に議場は張りつめた静寂に包まれる。

皆があの満月の夜から、いや花が側室として現れた時から抱いていた疑問だった。

そしてそれは、昨夕のシューラの音色にのせて聞こえた歌声に更に増すばかりだったのだ。

「――以前も申したと思うが、その方らが知る必要はない」

相変わらずルークの声は冷めていたが、その中には怒りが含まれているようでもあり、それを感じ取ったのかコーブは押し黙った。

そこへ内大臣のドイルがしたり顔に言う。

「まあまあ、ハナ様が何者でもよろしいではないですか。あのような稀有な御方が我がマグノリア帝国に、しかも陛下のお側におられるという事実が重要なのです」

その言葉に賛同する声がいくつも上がる。

そしてそれはそのうちに心得違いなものへと変わっていく。

「是非、お側で聴いてみたいものだ」

「次の満月の夜にも歌って頂きたい」

「いっそ毎度、満月の夜に歌って頂ければよろしいのではないでしょうか。きっとユシュタルもお喜びになるでしょう」

そこへ一人の老齢の大臣が熱っぽく声を上げた。

「何も満月にこだわらぬとも昨夕の歌声も見事だったではないですか！　私の魔力は今も満たされたままですぞ！！」

実際、この場にいる者達の魔力は皆、満たされている。
それは魔力の衰えによって『器』に穴が開いたように魔力が流れ出し、魔力の枯渇を待つだけだった者達を驚嘆させ、歓喜させた。
もちろん、しばらくすれば元の状態に戻ってしまうのはあの満月の奇跡から判っている事ではあったが。
議場はその大臣の言葉から更に熱に浮かされたような状態になった。
それに反して、ルークの纏う空気が恐ろしいほど冷たく、冷然としていくのだがそれに気付く者は少ない。

「ではいっその事、戦場でハナ様に歌って頂けば兵士たちの力は――」

ある長官の発言は最後まで続く事はなかった。
議場の窓ガラスが激しい音と共に一斉に粉々に砕け散ったのだ。
その砕け散ったガラスは議場内へと飛び散る。
瞬時に防壁魔法を作動させた者達によってほとんどの者は無事だったが一部の、熱に浮かされたように発言し立ち上がっていた者達は、その破片を浴びてしまった。

「今、何か申したか？」

議場にルークの静かな声が響いた。
その静かな声が響き渡るほど、議場は静寂に満ちているのだ。
痛みに呻く声すらない。
皆がただ息を飲み、微動だにせずその場に座す事しかできなかっ

た。

皇帝の怒りを買ったのだ。

ここ最近の緊迫した情勢にも関わらず穏やかに見えた皇帝が、瞬時に以前の無慈悲で冷酷な皇帝へと戻っていた。

そして今までならば、こんな状況に陥ると必ず取り成していたはずの宰相が目を瞑ったままである事に、縋る思いで視線を向けた者達は愕然とする。

そして、近衛隊長もまた同様の態度である事に絶望的な思いを抱いた。

――――どうすれば……。

誰もがこの場で発言する事を恐れ、ルークの言葉に答える事が出来ないでいたのだった。

４９．男心と女の事情。（前書き）

別の意味で少し血生臭いのでご注意ください。

49．男心と女の事情。

「やっぱり……」

便座に座ったまま、花は呟いた。

下腹部にズシリとした鈍痛には覚えがあったのだ。

月のものが来てしまった。

地球にいた頃から考えても二か月以上来ていなかったので、環境の変化によるストレスのせいだろうと思いつつ心配はしていたので花は安堵した。

――　それにしてもどうしよう……。

暫く考えたが、やはりセレナ達に相談するしかなく、恐る恐るトイレから出たのだった。

ただ、最新式のトイレの事を考えると実は意外と心配の必要がないのではないかと思いつつ。

――　羽つきがあったらいいな。

と、呑気に考えながら。

しかし、例えトイレは最新設備でもそれを伝授したという『サトウ』さんは、日本人かどうかの問題以前に男性だったのだ。

よって、花の期待は見事に打ち砕かれた。

「――これですか……」

「はい」

それは昔の生理用品そのままといった感じの、布を何枚か重ねてその間に綿が入っているような物だった。

――――も、漏れる……確実に漏れます！！

花は一日目の夜から二日目にかけてかなり量が多いのだ。

幸いなことにその後は少量になり大抵五日程で終わるのだが。

地球の現代科学の最新技術を駆使した？　超吸収熟睡ガードでも油断すれば大変な惨劇になるのにと、焦った花だったが、次のセレナの言葉に救われた。

「ハナ様、これに浄化魔法を施しますので暫くお待ち下さい」

「え？　浄化魔法！？」

なんでも、先に浄化魔法を施しておけば漏れも臭いもなく、常にサラサラ快適で過ごせるらしい。

「浄化魔法ってなんて便利な……」

再び便座に座った花は呟いた。

そして何の魔法も使えない花がこの世界で生きて行くにはやはりみんなの助けが必要な事に少し落ち込む。

その後、生理痛の為、花は絶対にルークには知らせないようにとお願いし、少し休むことにしたのだった。

＊＊＊＊＊

「今、何か申したか？」

再び静かな声で問いかけるルークの言葉に応える者はいない。
その場には恐ろしいほどの緊張感が漂うだけである。
今やルークの怒りは議場だけでなく王宮中に伝わり、その激しい怒りに魔力の弱い者は体に変調を来す程であった。
議場内で直接ルークの怒りを受けている者達は皆、呼吸も儘ならない程の圧迫感に苦しんでいる。
その中で政務長官のセインが皇帝であるルークの勘気を被る覚悟で、この場をなんとか取り成そうと発言する為に、痺れるような重い体を持ち上げた。

＊＊＊＊＊

一時間程眠り、目が覚めた花は異変に気付いた。

――――　ルーク？

花に魔力などわかる訳はないのだが、王宮を取り巻く魔力が変わった気がした。
それは、ピリピリと肌を刺すようでルークの怒りを感じる。
急いで身支度を整えて、花は居間へと向かった。

――――　ルークは大丈夫なのかな？

花は心配になった。
しかし、部屋にいるセレナやエレーン、カイルも何事もないよう

にしているので、少し安心する。
何か大変な事が起これば、知らせは来るはずだ。
窓から見渡しても王宮に何事か起きた気配は感じられなかった。
ただ、ルークの怒りが感じられるだけなのだ。

「ルーク……」

花は小さく呟いた。
本当は今すぐルークの傍に行きたいが、それは許されない。
何があって怒っているのか、苦しい思いをしていないか、花は心配で胸が詰まりそうになる。

だから花は歌った。
音楽はいつも花を慰め癒してくれる。同じ様にルークも癒してあげたい。
花はルークに気持ちを届けるように歌った。
ルークに届くように、ルークだけの為に。

ルークには笑っていて欲しい。幸せでいて欲しい。
ルークが好き、大好き。

花の気持ちをのせた歌は優しく王宮に響き渡った。

＊＊＊

セインが覚悟を決め重い体を持ち上げた時、ガラスの砕け散った窓から花の歌声が舞い込んできた。
それは優しく宥めるように、また深い愛情に包まれるような心地よい音色。
その歌に呼応するかのように議場に、王宮に満ちる魔力が、ルー

クの怒りが穏やかになっていった。

「おお！」

議場の皆が聴き入る中で、驚嘆するような声が小さく上がる。

「ああ……」

その声に共鳴するようにいくつか上がったその声の主たちは己の体に起きている奇跡に信じられない思いだった。

先程の、ガラスの破片を浴びて傷付いた体が癒えていくのだ。

それはゆっくりとだが、体に刺さった破片を押し出し傷が塞がっていく。

「なんと……」

他の者達もその奇跡に驚きの声を上げる。

ルークはそれを目にしながら小さく息を吐き出した。

やがて花の歌が終わると共に奇跡も終わりを迎える。

しかし、その場は驚きと喜びの興奮に満ちていた。

「本日の会議はこれまでと致しましょう」

宰相であるディアンの凛とした声が議場に響く。

いつもの通り、まだ何も決議に至っていないのだが、これ以上の議論が不可能な事は明白だったからだ。

怒りを収めたルークは、ディアンの言葉と同時にその場から消えた。

それに、その場にいた者達は安堵し喜んだ。

『ハナ様が陛下の怒りを鎮めて下さった』と。

＊＊＊＊＊

「ルーク」

突然現れたルークに驚く事なく、花は嬉しそうに笑った。
歌い終わって、ルークの気持ちが落ち着いている事に花は安堵し、更に現れたルークの顔を見て安堵する。
そしていつもの様に、ルークに抱き寄せられキスを受けた。
セレナ達はルークが現れた時点で姿を消している。
ルークが再びキスをしようとして、花はハッとした。

「ハナ？」

いきなりルークの腕から抜け出して距離を取った花にルークは驚いて声をかける。

「来ちゃダメです！！」

酷く焦った様子の花にルークは心配して近寄ろうとしたが、花は更に逃げるように距離を取った。

「臭うんです！！」

「ハナ？　何を言って……」

自分の発言にパニックになった花は、更にとんでもない事を口走

ってしまう。

「女の臭いがするんです！！」

恥ずかしすぎる自分の言葉で限界に達した花は、半泣き状態でトイレへと駆け込んだ。

その場に茫然としたルークを残したまま。

花の言葉を誤解したルークは、まったく身に覚えのない事にどうすればいいのか解らず、暫くその場に立ち尽くしていたのだった。

＊＊＊

その夜、花は悩んでいた。

『漏れない、臭わない』と聞いてはいたが、やはりルークと一緒に寝る事が躊躇われていたのだ。

そこでルークが現れた時にお願いした。

「ルーク、今日は別々に寝ませんか？」

「なぜ？」

花の言葉にルークは驚いたような、少し傷ついたような顔をする。

その顔に花はそれ以上何も言えなくなった。

「いえ、今のは冗談です」

後悔と共にそう言うと、花は寝台に上がった。

そこで、ふと閃いていそいそと作業を開始する。

そんな花を不思議に思いながら、ルークは手元の書類に目を落とした。

「ルーク」

声を掛けられて視線を上げたルークは、寝台を見て眉を顰める。

「何だ、それは？」

寝台の真ん中は枕が置かれ、二つに区切られていた。

「ここからこっちが私の陣地で、そっちがルークの陣地です。今日は私の陣地に入って来ないで下さいね」

「……」

「ね？」

驚き半分、呆れ半分で言葉に詰まったルークに、花は真剣な顔をして念を押す。

ルークは大きく息を吐き、同意した。

「わかった」

それに安心したように花はニッコリ微笑んで、自分の陣地で横になった。

すぐに花の静かな寝息か聞こえて来る。

暫く書類に目を通した後、寝台に入ったルークは枕を床に落とし花を引き寄せた。

自分の陣地に。

そして花をしっかり抱きしめて眠りについたのだった。
花の心、ルーク知らず。なのか。

50．怒った時には卓袱台返し。

――― あれ？

目が覚めた花は現状に違和感を覚えた。
それが何なのかよくわからず暫く考えた後、ハッとして恐る恐る自身のお尻に手をやる。

――― よかった、漏れてない。

安心して、視線を上げるとルークと目が合った。

「ぎゃっ！！」

途端に顔を赤くしてルークの腕から逃れ、そのまま起き上がり後退して寝台の上で正座をする。
そのままルークを怒ったように見下ろした。

「陣地に入らないで下さいって言ったじゃないですか！！」

「入ってない」

「え？」

「俺は入ってない」

片肘をついて上体を少し起こしたルークの言葉に、花は現状を確認する。

「あれ？」

確かに昨晩花が定めた境界線よりルークは出ていない。
それどころか花が今現在その境界線上にいるらしい事に気付く。
慌てて花は正座姿勢のまま後退り、深々と頭を下げた。

「どうもお邪魔しました」

「……いや、構わない」

花の方を見ずに答えたルークはそのまま寝台から立ち上がり、上着の置いてある長椅子へと向かったが、その肩は小刻みに震えている。
それに花は気付かず、いつの間に枕が落ちたのかと首を捻っていたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「今日は……いつにも増してすごいですね。」

部屋に届けられる貢物の数を見て花は呟いた。
ここ最近の貢物は以前より増してはいたが、今日は特にすごい。
しかも、届けられる物の全てに呪（しゅ）などが施されず、純粋に贈り物らしかった。
もちろん、カイル達が判断できる範囲での事だが。

「はい。それと同時に面会の申し込みも非常に多いのですが、どう

されますか？」

セレナの言葉に花は悩んだ。

正直なところ、体は本調子ではないのでゆっくりしたいという気持ちもある。

しかし昨日、一昨日とも面会を断り部屋に籠りきりだったし、昨日ルークからなぜあれ程の怒りを感じたのか知りたい気もした。

――― セルショナードの事も気になるし……。

結局花は、幾人かの大臣・貴族達と会う事にしたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

それから三日続けて大臣・貴族達と面会したが結局、ルークの怒りの理由はわからなかった。

それでも花が原因だろうと言う事が何と無くわかり、花は落ち込んだ。

貴族達には、以前のようにあからさまに歌を強請(ねだ)られなくなったばかりか、妙に気遣われるようになっていた。

それどころか、貴族達だけでなく王宮全体が花に気遣っているようで落ち着かないのだ。

このままここにいていいのか、そんな不安が花を襲う。

そして、ルークの態度に最近どこか距離を感じる事で益々その思いを強くしていた。

「最近、やけに熱心にユシュタールの地図を見ているんだな」

長椅子に腰かけて、本サイズの地図帳を見ていた花にルークが声をかけた。

「知らない事ばかりだから面白くて。私はマグノリアの他の街どころかまだサイノスの街にも行った事ないですから」

何気なく答えた花だったが、ルークは花の言葉に酷く辛そうな顔をした。

「ハナは……王宮から出たいか？」

「いえ……あの……ルークはお出かけになったりしないんですか？」

上手く答える事が出来ずに、花は濁してしまう。
それにルークは気付かない振りをして、花の質問に答えた。

「今は、王宮から出たくても出られないな」

「え？どうしてですか？」

ルークの返事に驚いた花だったが、続く言葉に更に驚く。

「この王宮に皆の魔力が満ちているのは知っているか？」

「はい」

「その中には歴代皇帝の魔力も含まれている。特に初代皇帝ヴィシュヌの力は非常に強い。俺は今、それらの力に補われているからユシュタール全土へも力を配する事が出来る。だが王宮から出ればそ

の力を維持する事は難しいだろうな」

歴代皇帝達の恩恵とも言えるその力は、直接補うものではなく魔力を生成する力を補うものらしく、またその恩恵は皇統に近い者にしか与えられないらしい。

しかしその話からすると、ルークはもう何十年もこの王宮から出ていない事になる。

この鬱々とした気が滅入るような場所から。

「ルーク……」

花は思わず心配そうにルークを見た。

ルークは何でもないといった様子で、花の寝室に最近持ち込んだ書類に目を通す為の椅子に座って書類に目を落としている。

「もしハナが、この王宮から出たいのなら出してやる事もできる」

「ルーク？」

突然の言葉に花は驚くが、ルークは書類から視線を外すことなく続ける。

「後宮に入った者は一生出られないわけではない。たまには実家へ帰る事も許されている。ハナに実家はないだろうが、セインにでも後見につかせれば街にあるセインの屋敷に滞在する事もできる」

花は何と答えればいいのか解らなかった。

確かに王宮の外には興味があるし、自分の使命を考えればこのまま王宮に閉じ籠ったままでいられないのも事実だ。

だけど……。

「ルークは……私が傍にいない方がいいですか？」

少し悲しげに聞いた花の言葉はすぐに否定された。

「違う！！」

ルークは書類が散るのも構わず勢いよく立ちあがる。

「違う……そんな訳ないだろう！？　そんな……」

上手く言葉を継ぐ事ができない様子で苦しそうにルークはその場に立ち尽くした。

そんなルークに花は少し躊躇いながらも近づく。

「確かに王宮の外に興味はあります。でもそんな事どうでもいいんです。私はルークの傍にいたいです」

その花の言葉にルークは何とも言えないような顔をする。

そしてルークは苦しそうに言葉を吐いた。

「ハナ、俺は始めにお前の意思を無視して勝手に側室という立場に置いた。それによって貴族達から嫌がらせを受けるだろう事も、命を狙われる事さえもわかっていたのに。ただ、面白半分にだ。それがどんなに傲慢な事だったか、今更わかったところでお前に傍にいて欲しいなんて言えるのか？好きになって欲しいなんて……」

突然のルークの告白に花は驚いた。

しかしそれと同時に悲しかった。

今まで伝えてきた花の気持ちがルークに伝わっていなかったのか

と思いながらも、もう一度伝える。

「私はルークが好きです」

「ハナ……」

花の告白にルークは少し悲しそうに微笑む。

それに花は段々と腹が立ってきた。

「ルークは間違ってます！　もし今ここに卓袱台があったら私はひっくり返してます！！」

「ハナ？」

花の予想外の怒りに驚くルークだったが、花はそれには構わず続けた。

「だって、私は不審人物でした！　あの時、本当なら牢に入れられても、殺されても文句言えない立場でした！　良くて王宮から追放です！　そうしたら私は生きて行く為に何をしないといけなかったか！！　それなのに側室なんて破格の扱いです！！　面白半分でも何でも私は救われたんです！！」

勢いよく告げた花は息継ぎの為に一呼吸置いた。

ルークはそんな花に呆気に取られている。

そうして、花は少し落ち着いて話を続けた。

「もちろん、衣食住を保証してくれたからルークを好きになった訳じゃないです。それだったらレナードを好きになってます。だってレナードの方が優しいし、どう考えても常識人ですよね。でも私が

好きなのはルークなんです。例えルークが意地悪で傲慢で変態でも、私はルークが好きなんです!!」

最後の告白に力を入れてルークを睨んだ花だったが、ルークの顔を見て毒気を抜かれた。

「なんで笑ってるんですか？」

肩を震わせ、笑いを堪えた顔のルークは震えた声で言った。

「すごい言われ様だな、俺は」

「だって……事実ですから」

拗ねた調子で言う花に、ルークは堪え切れずに遂に笑い出した。

一通り笑った後のルークの瞳には少し涙が滲んでいる。

ルークの笑いに驚いたような、それでも拗ねたような花をルークは抱き寄せた。

「悩んでいるのがバカらしくなったな」

その言葉に花は嬉しそうに同意する。

「はい、バカです」

「……そうか」

そう言ってルークは花に軽くキスをした。

そしてニヤリと笑う。

「じゃあ、もう遠慮はいらないな」

「はい？」

言葉の意味がいまいち飲み込めない花に更にルークは意地悪そうに笑って言う。

「もう遠慮はしないから、覚悟しとけよ」

そう言ってルークは花の耳に軽く噛みついたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「……ガーディ、お前はわざわざ己の失敗を報告に来たのか？」

真っ暗な闇の中に響くその声にはなんの感情も感じられない。

ガーディと呼ばれた男はそれには何も答えず、ただ床に頭を擦り付けんばかりに平伏していた。

そしてしばらく続いた沈黙を破ったのはガーディだった。

「クラウス様、ご報告したい事がございます」

「申せ」

それから、二人の男の会話は暗闇の中で続いたのだった。

51．嫉妬は時に殺意を生む。（前書き）

少し残酷な表現があります。

51．嫉妬は時に殺意を生む。

「陛下、おはようございま――！？」

ノックとほぼ同時に入って来たレナードの挨拶は途中で途切れた。

「すまん、わざとだ」

ルークの冷たい声にレナードが噛み付く。

「当たり前だ！！　偶然ナイフが飛んで来てたまるか！！　ルークいい加減に、い！？」

レナードの言葉はまた途中で途切れた。

受け止め持っていたナイフを取り落としたレナードは後頭部を抑えながら呻く。

「おはようございます、陛下」

勢いよく扉を開け入って来たディアンをレナードは恨めしそうに睨み付けた。

「ディアン！！　部屋に入る時はノックぐらいしろ！！」

「大丈夫です。レナードがそこにいるとわかったので開けたのですから」

「何が大丈夫なんだ！？」

レナードの怒りを無視してディアンはルークへと報告を始めた。
その内容にレナードもすぐに押し黙る。

「陛下、セルショナードの王城にいる者から報告が参りました」

「述べろ」

先程までのどこか和やかな雰囲気とは打って変わって、三人の顔つきは厳しいものになりその場には緊張感が漂う。

「セルショナード王は国境全体にかなり強い結界を張っており、内にも外にも警戒を怠らないようです。その為に報告が遅れたようですが……報告によると、一年程前からセルショナード王の側にクラウスというかなり強い魔力をもつ魔術師が侍るようになったそうです。そしてそのクラウスには弟子と称する何人もの魔術師がいるようです」

「では、その者たちがサラスティナ丘のセルショナード軍に加担しているわけか……」

「そのようです。まだ正確な弟子の人数は、報告して来た者にも把握できていないようですが、やはり十数人はいるらしいと」

それだけの数の魔術師がいったいどこから現れたのか、クラウスと言う者がいったい何者なのか、目的は何なのか、わからない事ばかりでその場にはしばらくの間沈黙が落ちた。

「しかし、それほどの結界を掻い潜(くぐ)ってよく報告できたな、そいつは」

レナードの感心したような言葉にディアンが淡々と答える。

「この報告書は、先日和睦の為に送った使者の口の中から出てきた物です」

「口の中！？」

「ええ、使者の首だけがセルショナードより戻って参りましたので。密偵にとっても、このような形で死者を利用するのは躊躇われたでしょうが……苦肉の策でしょう」

「その首はいつ戻って来たのだ？」

ルークの冷静な問いに、ディアンも冷静に答える。

「先程です」

「そうか……丁重に葬ってやれ」

そう告げたルークは険しい顔つきで黙り込んだ。

「セルショナードに和睦の意思はないということか」

レナードの呟きは静かな部屋に静かに落ちた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「父上！！　マグノリアからの和睦のための使者を殺して首を送り返したというのは本当なのですか！？　まさかその様な愚かな……」

少し垂れた眦（まなじり）を珍しく釣り上げて赤い髪の男、リコは父であるセルショナード王に問い質した。

「リカルド……誰が儂にそのような口をきくことを許した？」

「父上……」

厳しい顔つきのセルショナード王に、リコは言葉を詰まらせた。

リコの正式名称であるリカルドと呼ぶことに父王の怒りを感じる。

そこに取り成す様に、ローブを目深に被った男が口を開いた。

「王よ、よろしいではないですか。殿下は少々お気が弱くていらっしゃるようです。未だに帝国に脅威を抱いておられるのですから」

「クラウス！！」

その言い様にリコは肩を怒らせ、男を睨みつける。

「私は帝国など恐れてはいない！！　脅威を感じるとしてもマグノリア皇帝のみだ！！　皇帝がどれほどの力を有しているか、そなたとて知っておろう！！」

「おや、殿下はあのような腑抜けを恐れておられるのですか？」

「何を――？」

クラウスの言葉にリコは気色ばむ。

「確かにマグノリア皇帝の力は強大でしょう。しかし今現在、皇帝は王宮から出る事も叶わぬほど虚無を抑えるために力を削がれている。まるで羽を?(も)がれて飛べない鷹の様に無様に。我が王のお力がこれほどに強大な今、そんな皇帝など恐るるに足るでしょうか?」

「では帝国を滅ぼし、皇帝を弑(しい)した後に誰がこのユシュタールの崩壊を防ぐというのか!?」

その言葉にクラウスはほくそ笑む。

「我々はなぜこれ程に虚無が勢いづいているのかを解してございます。ですのでこのまま皇帝には虚無に身を捧げて頂き、その後に虚無を抑え、ユシュタールを我が王に統べて頂けばよいのです」

それにセルショナード王は満足そうな顔をするが、リコにはどうしてもクラウスの意図が別にあるようで納得がいかなかった。

「虚無が勢いづいている原因とはなんだ?」

リコは静かな声で問い詰める。

しかしクラウスはそれに答えない。

「まだ、それを明かす事は残念ながらできません」

申し訳なさそうにするクラウスをリコは訝しげに睨む。

「例えお前の言う通りだとしても、今、皇帝の側にはユシュタルの御使いと言われている娘がいるのだぞ。その娘の歌声を聴けば立ち所に傷が癒え、魔力が満ちるという。そのような娘を擁する皇帝を

討つ事ができるのか？」

リコの言葉にクラウスは嘲笑を見せる。

「まさか、殿下はそのような戯言を信じていらっしゃるのですか？
たとえそれが真実だとしても、取るに足りぬ問題ではないですか」

「どういうことだ？」

その問いはまた答えを得られずに終わった。
それまで黙っていたセルショナード王が苛立ったように告げる。

「リカルド、下がれ。そなたは先程から見苦しい」

「父上！？」

「リカルド、二度言わすでない」

その有無を言わせぬ言葉に、リコは唇を噛み締めながらも退室の礼をとり、その場から辞した。
その後、王とクラウスの間にどのような話が為されたのかは知りようもなかったが、ただどうにも胸騒ぎが治まらず、リコはそのまま自室へと向かい、控えていた側近の二人に声をかけた。

「ザック、お前はクラウスを見張ってくれ、トールドはサラスティナ丘の軍に駐留するほかの魔術師たちを見張ってくれ」

「殿下……」

ザックの驚いたような声に、リコは顔を顰めて謝罪する。

「すまない、無茶を言っているのは分かっている。だがどうにも嫌な予感がする。取り返しがつかなくなる前になんとか手を打ちたい」

切羽詰ったようなリコの言葉にザックとトールドは黙って頷き、了解の意思を示した。

リコの勘は昔から良く当たる。

幼い頃より側でリコを見てきた二人はその事を十分に分かっていたのだった。

52．遠慮なく頂きます。

「――今日もまたすごいですね……」

次々と部屋に届けられる貢物を見て花は驚いていた。

その花の言葉にセレナが気遣うように口を開く。

「今夜は……満月ですから」

「ああ、もうそんなに経つんですね……」

セレナの言葉に花は納得した。

送り主の名前を見れば高齢の大臣・貴族たちがかなり多い事から、暗に貢物で今夜の歌を強請（ねだ）っているのだろう。

花は居間の窓際にある長椅子に座って、最近の午前の日課になりつつあるシューラの演奏を始めた。

その音色にセレナもエレーンも、扉の内側にいる護衛さえも嬉しそうに聴き入る。

もちろんそれは三人だけではない。

王宮中の者達が作業の手を止め、足を止め、その音色に耳を傾けていた。

シューラから紡がれる優しい音色は、花の歌声ほどではないが皆の心を満たし魔力を補う。

あれから何度かシューラ奏者と会う事ができ、花のシューラを弾く腕はずいぶん上達していた。

最近では、シューラ奏者に花が曲を教える事もあった。

それは優しい愛の曲。
シューラ奏者によって、その曲がユシュタール中に響き渡るのはもう少し先の話。

しかし花はシューラを奏でながらも別の事に気を取られていた。

――― ユシュタールに来てから六十日か……。

この世界の月は地球と違い二十日周期で満ち欠けをする。

――― 『神様』大盤振る舞いだな……。

満月の夜にユシュタルが地上に降りて来ると言う神話と共に、皆の願いを聞き届けてくれるという言い伝えに、花はそう思ったのだ。
そして花がこの世界に届けられたのも、満月の夜だった。

――― それにしても……『神様』届けるだけ届けといて、後は放置？　これが放置プレイってやつ！？　いくらなんでも酷くない？　ピアノがないなんて聞いてないし、無茶振り過ぎない！？

今更な怒りにわく花だった。
怒りにまかせてシューラを弾いていた為、ベロンっと嫌な音を出してしまい我に返る。

――― し、しまった……。

花は少し顔を赤くして、再びシューラを弾く事に集中したのだった。

＊＊＊

その夜、花は中天に懸かろうとする月を見ていた。
窓から眺める『月光の塔』はその白壁を銀色に染めていく。
貴族達から聞いた話では、セルショナードとの戦況は益々悪くなっているらしく、花は小さく嘆息した。
戦争はみんなの心に影を落とす。
それはマグノリアだけではなく、セルショナードにも他の国にも同じように。
やはりこのままここにいる訳にはいかないのでは、とどうしようもない焦燥感が花を襲う。

――――でも、せめて今は……。

花はもう一度『月光の塔』を見つめた。

「にょ！？」

いきなり後ろから抱きしめられて、花は驚きの声を上げた。

「ルーク！？」

ルークは花の驚きを無視して花のうなじにキスをする。

「にゃにょ……！？」

驚きと同時に背中がゾクリとするような感覚に戸惑い、花は恥ずかしさに抵抗した。

それにルークが仕方ないといった様子で、花を抱きしめる腕の力を緩める。
花は少し安心して深呼吸を何度か繰り返すと、ルークに向き直った。

「ルーク、今日は早いですね」

「ああ」

そう答えるとルークはキスの為に顔を近づけてくる。
焦った花は慌てて口を開いた。

「げ、げげげ……『月光の塔』に行きたいです！！」

花の言葉にルークはピタリと動きを止めた。

「ハナ……」

少し心配そうな、それとは別の感情も入り混じったような顔でルークは花を見つめた。
それに花は困ったように微笑んだ。

「私、歌いたいです。みんなの為に、ルークの為に」

あの夜の花の歌声はマグノリア中に響き渡ったと聞いた。
それが本当ならば、『月光の塔』で歌うべきだ。
花はそう決意してルークを見つめ返す。
暫く見つめ合っていた二人だが、ルークが大きく息を吐き出すと頷いた。

「わかった」

それに嬉しそうに笑った花は、護衛をお願いしなければとセレナに声をかけようとしたが、ルークに止められた。

「いい。俺だけで大丈夫だ」

花がそれに小さく頷いた瞬間――

二人は月光の塔の『祈りの間』に来ていた。

「ルーク！？　無茶はしないで下さいって……」

「大丈夫だ」

驚きと心配で花が上げた声はルークの穏やかな声に遮られた。

花は優しく微笑むルークに、胸が苦しいほどにドキドキしてしまう。

――――　ルーク……すごく綺麗。

天窓から降り注ぐ月の光がルークの白金の髪をキラキラと輝かせ、いつも金色に輝いている瞳は月の光を溶かしたように金と銀が混じり合って神秘的な光を放っていた。

そんなルークに心を奪われてしまった花は、落ち着く為に何度か深く息を吸った。

すると、体中に月の光が満ちて心が和いだ。

花は歌った、優しい愛の歌を。

その音色は、月の光と共に降り注ぐ。

花の歌声から紡がれる愛は皆を優しさで満たす。
そして胸を満たすその優しさを、皆は大事に抱え込んだのだった。

ルークは目を細めて、月光に包まれ歌う花を見ていた。
その神々しいまでの美しさは触れる事を躊躇わせる。
それなのに、触れていなければ花が消えてしまうのではないかと心配になり、今すぐ駆け寄って抱きしめたくなる。
ルークは拳を固く握り、その衝動をどうにか抑えていた。

歌い終わった花をルークは再び後ろから強く抱きしめた。
それに今度は驚かなかったが、そのまま抱きあげられてやはり花は驚いた。

「ルーク!?」

そして一瞬で寝室に戻っている事に更に驚く。

「無茶はしないでっ!?」

花の心配を含んだ抗議の声はルークの唇に塞がれる。
そのままキスを続けながらルークは花を寝台に横たえ、自分も寄り添った。

「ルーク?」

少し不安そうな声を出す花に、優しく宥めるようにキスをしてルークは囁く。

「遠慮はしないって言っただろう?」

その言葉を花が理解する前にルークは激しく唇を奪った。
そのままルークの唇は次第に花の唇から首筋をたどっておりていく。

「ま、待って……」

思わず声を上げた花に、ルークはなぜか悲しそう微笑んだ。

「悪い、無理だ」

そう言うとルークは枕の方へと後退っていた花の腰をつかみ、乱暴とも言える勢いで引き寄せた。
その仕草とは逆に、キスは優しく甘く繰り返される。
ルークの両手は花の腰から胸へとすべっていき、花が気付いた時にはドレスの胸元のリボンが解かれていた。

「……あれ？」

不思議そうな花の声に、ルークはニヤリといつもの意地悪そうな笑みを浮かべた。
コルセットなどを必要とするほどカッチリした物でもないが、夜着ほどシンプルでもないはずなのに、簡単に脱がされていくことに驚く。
そして再び激しく熱く唇を奪われた花は徐々に何も考えられなくなっていった。

「痛い？」

気遣うような優しいルークの声にぼんやりと我に返る。

「んん……」

花は大丈夫と答えたかったのだが上手く声を出す事ができず、ただ何度も首を横に振った。

そんな花にルークは慈しむように優しいキスをする。

この甘い時間の中で、体に伝わる小さな震えが自分のものなのかルークのものなのか、それとも二人のものなのかわからず、ただ花は力いっぱいルークにしがみつく事しかできなかった。

番外編。レナードの受難。（前書き）

いつもありがとうございます。
今日は本編の方はお休みです。
すみません。

番外編。レナードの受難。

小鳥の囀（さえず）る声で目覚めたレナードはそのまま窓辺へと行き、勢いよくカーテンを開けた。
外は明けゆく太陽の爽やかな光に包まれている。
いい一日になりそうだ、と思ったレナードは朝食をとりに家族用の食事室へと向かった。
すると、そこにはすでにディアンがいた。

「遅いですよ、レナード。では行きますか」

「は？　どこへ？」

レナードを見るや否や、ディアンは立ち上がるとレナードの腕を掴みスタスタと食事室を出ようとする。
その勢いに押されながらもなんとかレナードは行き先を聞いた。
が、その答えに驚愕する。

「不可侵の森ですよ。レナードの騎士生活恐らく五十周年を祝して冒険へ行くのです」

「待て待て待て！！　なぜ冒険だ!?　ってか「恐らく」って何だ!?　しかも不可侵の森ってありえねえだろ!?」

「おや、騎士ともあろう者が怖気付いたのですか？　恐らく五十年も騎士をしているのに？」

呆れた、とばかりに言うディアンにレナードはこれ以上何か言っ

ても無駄だと悟る。
そして隙を見て逃げ出したのだった。

＊＊＊＊＊

「助けてくれ！　ルーク！！」

先頃、皇太子の地位に就いたルークの部屋にレナードは助けを求めて駆け込んだ。

「断る！」

そんなレナードをルークはキッパリと切り捨てた。
それに納得しかねるようにレナードが食って掛かる。

「何でだよ！？　まだ何も言ってねえよ！！」

「お前が助けを求めて来る時は常にディアン絡みだ。ジャスティンの所へ行け！」

明解なルークの返答にもめげずレナードは更に言い募る。

「ジャスティンは今日、シェラサナード様とデートなんだよ！！
そんな時に邪魔して見ろ、ディアンよりも恐ろしい災いが降りかかって来るだろうが！！」

「姉上と？　そうか、それではしょうがない。腹を括れ」

ルークの無情な言葉に言い返そうとしたその時。
勢いよく部屋の扉が開かれ、魔王の如きディアンが現れた。

「やはり、ここにいましたね」

「お前ら兄弟はノックぐらい覚えろ」

呆れたように言うルークにディアンは悪びれもせず爽やかに微笑んだ。

「おはようございます、殿下。今日は冒険日和ですので、レナードの恐らく騎士生活五十周年を祝って不可侵の森へちょっと出かけてきます。ですから、しばらくお側を離れる事をお許し下さい」

「不可侵の森!?……そうか……もちろん構わない。まあ、気を付けて行って来い」

非常に嘘臭い笑顔を浮かべながらルークは二人を励ますと、同情の視線をレナードへと向ける。
二人の会話の隙に逃げようとしていたレナードは、すぐさまディアンに捕まえられて引き摺られるように部屋から出て行った。

「……レナードに幸多き事を」

その様子を気の毒そうに見ていたルークはポツリと祈りの言葉を呟いたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「レナード、恐らく騎士生活五十年ともあろう者が、そのような魔物にてこずっていてどうするのです」

呆れた様子のディアンに、ついにレナードは噛みついた。

「お前は何もせずに、何言ってんだ!?　俺が昨日から何体の魔物と戦ったと思ってんだ!!　少しはお前も働け!!　戦え!!」

「何を言ってるのですか、レナード。私は文官ですよ?　戦うなんて野蛮な事出来る訳ないでしょう。それとレナードが何体の魔物と戦ったなんていちいち数えている訳ないでしょう?　私は薬草摘みに忙しいんですから」

そう言うと、不可侵の森でしか摘めない薬草でいっぱいになった籠を大事そうに抱え直した。

それから何やら図鑑のような物を取り出すと、ディアンはレナードに頼んだ。

「あ、レナード。その魔物の角は滋養強壮に大変効果があり高値で取引されるそうですから、切り取って下さい」

「い・や・だ!　何で俺がお前の小遣い稼ぎに付き合わなきゃならないんだ!!　もう十分だろうが!!」

不機嫌な調子で答えたレナードは来た道を戻ろうとした。

が、その肩をディアンががっちりと掴み、暗黒笑顔で微笑む。

「レナード、私は何も私利私欲だけでこの森に入った訳ではありませんよ?　この森でしか摘めない薬草でいったいどれだけの人が救

われる事でしょうか……あなたは病に苦しむ人を見捨てるのですか？　騎士道精神はどこへ行ったのでしょう。嘆かわしい事です」

「――わかったよ!!　もう少し付き合ってやるよ!!　ただし、その魔物の角を切り取るのは可哀そうだろう？　そもそも侵入者は俺たちだ。襲ってきたから倒しただけであって、コイツも本来ならこんなところで倒れる必要はなかったんだ。角まで失くしたらコイツ立ち直れないんじゃないか？」

ディアンの言葉に不服そうにしながらも結局は付き合うことにしたレナードだったが、気を失っている魔物の角を切り取る事には躊躇いを見せた。

「さすが、騎士道精神をお持ちですね。魔物にまで情けをかけてやるとは……でも安心して下さい。その魔物の角はまた生えてきますから」

「そうなのか？」

「たぶん。だから苦しむ人たちを助けると思って」

そう言ってディアンは優しく微笑む。

その微笑みに驚いたレナードは、ディアンの返事が「たぶん」だった事に気付いていなかった。

「なあ、あの伝説は本当かな？」

角を切りながら顔を上げずにレナードは聞いた。

「そうですね、今回の目玉商品にするつもりですから無いと困りますね」

その答えに驚いてレナードは顔を上げる。

「お前……至極の宝を売るつもりなのか！？」

「さあ、それは物を見てみないと何とも言えませんね」

そう答えたディアンだったが、次に口を開いた時には不快そうに顔を顰めていた。

「ところでレナード、先程から鬱陶しい『あれ』をなんとかして下さい」

「……気持ちはわかるが、今のところ害はないしな」

そう言うと二人は『あれ』を煩わしそうに見る。

二人に視線を向けられている事に気付いた『あれ』は一瞬隠れたかと思うと、次には二人の目の前に仁王立ちで現れた。

「ハッハッハッ！　よく聞け人間ども！！　至極の宝が欲しければ、この森の最奥へと行くのだ！！　さすれば、宝が手に入るやも知れん！！　もちろんそれには試練を乗り越えてもらわねばならないがな！！……ププ。『知れん』と『試練』……ププ」

『あれ』と呼ばれた魔物は、偉そうに述べた自分の寒い言葉に一頻り笑った後、二人に目を向けた。

が――

「え？　いない？？？　どこ行った！？」

慌てて辺りを見回した『あれ』は二人がずっと先を歩いて行くのを見つけて慌てて追いかける。

「ちょっ！！　置いて行くなよ～！！」

そうして二人に追いついた『あれ』は恐ろしい形相で咆哮を上げた。

「お前ら！　ふざけるな！！　この俺様を無視するとは殺されたいのか！？」

その怒りに触れるだけで並の人間なら昇天しただろう。

実際、その怒りを帯びた魔力は近くにいた下等な魔物を昇天させた。

が、二人は『あれ』が見えていないかのように会話を続けながら進んで行く。

「……だから、いくらなんでも至極の宝は売っちゃまずいだろ？いらないなら王宮の宝物庫で保管すればいいんだし……」

「バカですね、レナード。それでは一銭の得にもならないではないですか」

「お～い！」

「だから、儲けようとするなよ！！」

「お～い！！」

「だからあなたはバカなのですよ、なぜ儲けにもならないのにこんなとこまで来ないといけないのですか」

「お～いってば！！」

「お前がこんなとこに俺を連れて来ておいて何言ってんだ！？」

「おい！！　って言ってんだろ！？」

再び咆哮を上げた『あれ』に二人はピタリと立ち止り振り向く。

「うるさい！！」

二人の息の合った怒声に、『あれ』は思わず直角に腰を曲げ謝罪した。

「すみませんでした！！」

それから結局『あれ』は無視されたまま大人しく、二人の後に憑いて行ったのだった。

番外編。レナードの受難。（後書き）

読んで下さり、ありがとうございます。
※「憑いて行った」は敢えてです。

番外編。アポルオンの屈辱。

幸か不幸か『アレ』に憑き纏われるようになってからは魔物に襲われる事はなくなり、それからはすんなりと森の最奥と思われる場所に辿り着いたのだった。

そこは今までの禍々しい邪悪な空気に塗れ鬱蒼とした木々が繁る森とは違い、清涼な空気が漂う場所であった。

色とりどりの花々が咲くその場所は、森の中にぽっかりと穴を開けた異空間とも言うべき別世界で、その中央に座するように大岩が在り一対の剣が突き刺さっている。

「おい、ディアン。あれ……」

その神々しさに言葉を詰まらせたレナードだったが、ディアンは顔を顰めて呟いた。

「剣でしたか……」

そんな二人の間を風の様に黒い物体が通りぬけたと思ったら、例の『アレ』が岩の上で仁王立ちになる。

「ハッハッハ！！　人間ども、よく来たな！！　俺様は……！？」

その口上は最後まで続かなかった。

一対の剣の一振りが一瞬輝き、眩しさに二人が目を閉じ再び開くと『アレ』によく似た姿形の魔族が『アレ』をタコ殴りにしていた。

「いて！！　痛いって！！　ごめんって！！　いててて！！　悪

かったよ!!　ちょっと遊びに行くだけのつもりだったんだよ!!
三年帰らなかっただけじゃん!!」

「……」

「ギャ!!　やめろって!!　しょうがないじゃん!!　森なんてどこ向いても似たような木ばかりなんだかっつ!!　ヤメ……ギャー!!」

その様子を呆気に取られて見ていたレナードが気の毒そうに聞いた。

「……お前って迷子だったの？」

「てめえはバカか!!　俺様が迷子になんかなるわけねーだろ!!　ちょっと帰り道がわかんなくなっただけだ!!」

「迷子じゃん」

なんとか相方？　の猛攻から逃げ出した『アレ』はレナードを睨みつけ反論したが、結局レナードに切って捨てられる。
そこまで黙って見ていたディアンだったが爽やか暗黒笑顔でレナードに告げた。

「さ、帰りましょうか、レナード」

「え？　お持ち帰りしないのか？　あんなんでも金にはなるだろ？」

「レナード、あんなものを売り払っても苦情・返品で大損ですよ。危ない橋は渡らないのが一番です」

突然のディアンの心変わりに驚いたレナードだったが、その説明で納得する。

「なるほどな、確かに。あ、でも……ちょっとだけ待ってくれ」

そう言うとレナードは大岩へと駆け寄り、『あれ』に怒り心頭といった感じの魔族に声をかけた。

「俺はレナード・ユース、マグノリア帝国の騎士だ。よかったら名前を教えてくれないか？　そして、俺の剣となって欲しい」

契約を求めるレナードの真摯な言葉に、応えたのは『あれ』だった。

「バ～カ！　お前なんかにメレフィスが名前を教える訳ないだろ？」

そう言って『あれ』は鼻で笑ったが、すぐ様そのメレフィスの鉄拳に見舞われる。

「あ、ごめ！　ギャ！！　いてっ！！　つい、ついうっかりなんだよ！！」

「……」

あまりの『あれ』のバカさ加減に言葉を失くした二人だったが、レナードが気を取り直してメレフィスに再び声をかける。

「……メレフィスと言うのか。では、改めてお願いする。メレフィス、俺の剣となって欲しい」

その言葉にメレフィスは『あれ』への鉄拳制裁を止め、ジッとレナードを見つめた。
レナードにとってはとても長く感じられた時間だったが、実際はほんの僅かだったのかも知れない。そして、メレフィスはコクコクと二度頷いた。

「え!?　メレフィス受けるのか!?　こんなバカそうな奴なのに!?」

バカはお前だ!　とその場の誰もが思ったが口には出さない。
『あれ』の言葉をメレフィスは無視したままその場から輝いて姿を消した。
レナードは恐る恐るほんのりと輝く剣の柄を握ると、意を決したように力強く握り直しグイッと引いた。とその剣は驚くほど簡単に大岩から抜ける。
レナードは剣を天に向かってかざし惚れ惚れとしたように見入った後鞘に納め、腰に佩いた剣と取り換えた。

「では、帰りましょう」

その様子を黙って見守っていたディアンは、そう言うとさっさと踵を返した。
そんなディアンに『あれ』が慌てて声を掛ける。

「あっちょ!!　俺を忘れるなよ!!」

『あれ』の悲痛にも聞こえる声にも構わず、ディアンは一路サイノスを目指してスタスタと歩み出す。
それでもなんとかディアンの前に立ちはだかった『あれ』は名乗

りを上げた。

「俺様はアポルオン！　お前がどうしてもと頼むなら、お前の剣になってやって……っておい！！　無視すんな！！」

行く手をふさぐアポルオンと名乗る『あれ』をサッと避けて先へと進むディアンとレナード、そして一振りの魔剣に、涙目になったアポルオンは必死で追いかけた。己の宿るべき剣を持ったまま。

と、突然ディアンが足を止め、振り向いた。

途端にアポルオンの顔が輝く。

「――『緋紺（ひこん）の宝玉』の在り処を知っていますか？」

ディアンの突然の質問に一瞬驚いた顔をしたアポルオンだったがすぐに気を取り直したのか、少し拗ねたように「ああ」と肯定する。

しかし、驚いたのはアポルオンだけでなくレナードも同じだった。

『緋紺の宝玉』とは、至極の宝の中でも有名な魔宝（まほう）であり、手にする事が出来たならば魔力を自在に操れるという物だ。

その宝玉は魔力の増幅を願えば緋色に輝き、抑制を望めば紺碧に輝き所有者の望みを叶えてくれると言う。

ディアンがその宝玉を求めているのならば、理由は一つしかない。

「ディアン……まさかルークの為に？」

ルークは数年前から急激に増大する魔力を制御しきれずに苦しんでいる。

その力は余りにも強大で突如として暴走する事もあった。

しかし今現在、ルークは非常に辛い立場にいるはずなのに弱音を吐かない。

レナードはなんとか力になりたいと願いつつも、何も出来ない自

分に歯痒い思いを抱いていた。それはディアンも同じなのだ。
そんな二人の思いを踏みにじるかのようにアポルオンは嘲笑した。

「ハッハッハ！　残念だったな！！　今は『緋紺の宝玉』を手にする事は出来ないぞ！！　宝玉に宿っていたばあさんが高齢の為に、里である『果ての森』に後継者を探しに帰っているからな！！」

その言葉にディアンは一瞬、こめかみに青筋を浮かべたがすぐに平然として呟いた。

「しょうがないですね、ルークに高値で売り付けようと思っていましたのに」

そして、また踵を返してさっさとその場から立ち去る。
本心ではディアンが失望している事はレナードには分かっていた。
そんなディアンを慰めるようにレナードは横に並んで歩きながら、以前からの誓いを改めて述べる。

「俺はルークを守る……ルークに比べたら俺は力不足で、そんな事はおこがましいかも知れないがな」

そう言って笑ったレナードに、ディアンは大きくため息を吐いた。

「まったくその通りです。まあ、それでも訳のわからない宝玉よりはマシかも知れませんね」

ディアンは、そう呟くと更に続ける。

「そもそも、魔宝などに頼ろうとした私がバカでした。仕方ないので私たちなりに頑張りますか。私はこれからルークを政治的に利用

しようとする馬鹿な輩の相手をします。レナード、あなたはルークの力を恐れるあまり命を狙おうとする、更に馬鹿な輩を相手して下さい。身を挺してでも。そして死ね」

「ああ、わかった……って、ちょっと待て!!　今すごくいい話だったよな!?　でも、最後おかしくなかったか?　いや、絶対おかしかったよな!?」

そうして仲良く二人と一振りの魔剣は帰路に就いたのだった。

「……あれ?やっぱ俺の事忘れてない?」

やはり涙ぐんで呟くアポルオンだった。

番外編。アポルオンの屈辱。（後書き）

読んで下さり、ありがとうございます。
アポルオンはバカで方向音痴ですが、魔族の中では最強クラスです。

53．爪のお手入れは大切です。

――――　ぎょわあああああ！！

「ハナ……」

目覚めた花が心の中で上げた悲鳴に、ルークは呆れたように小さく息を吐き出す。

ルークの腕の中で目覚める事にはすっかり慣れた花がったが、今朝はそうもいかなかった。

「だ、だだ、だだ！！　はは、はだ、はだだ！！……」

言葉に出来ないほど慌てふためいている花に構わずルークは腕に力を込め、ギュッと花を抱きしめる。

――――　ぎゃおお！？　ダダ、ダメです！！　もう、無理です！！　いっぱいいっぱいです！！

相変わらず心の中で奇声？を上げる花をルークは無言でしばらく抱きしめていたが、今度は大きく息を吐いた。

「まあ……これ以上は無理か……」

そう呟くと、ルークは寝台から起き上がった。

もちろん、何かで隠す事もせず堂々と。

花は思わず「ぎゃ！！」と声を上げて目を瞑る。

しかし、恥ずかしいながらも気になるのが乙女心というもので、チラリとルークを窺い見るが――

「ぎゃほ！！」

そう叫ぶと、花は掛け布を頭まで被った。

花に背を向けて服を着ていたルークはその奇声に振り返ったが、スッポリと掛け布を頭まで被っている花の奇行には慣れてしまったのか、優しく微笑むと再び身支度を整え出す。

一方の花は、掛け布に包まり悶えていた。

――― せせ！　背中！！　ルークの背中に爪痕があります！！　誰のものなのでしょうか！？　誰の……って私ですか！？　私なのですか！？　ぐは！！……いや、きっとあれは猫に仕業に違いないのです！！ふふふ……。

段々と現実逃避を始めた花にルークが声をかける。

「ハナ、大丈夫か？」

その気遣わしげな声に、恐る恐る花は真っ赤に染まった顔を掛け布から出す。

ルークはすっかり服を着て、寝台に腰を掛けていた。

「あ……」

頭は大丈夫です。と、言いかけた花だったが、次のルークの言葉に質問の意味を取り違えている事に気付く。

「身体は……きつくないか？」

その優しい問いに花はただ黙って頷くことしか出来なかった。

花の答えに安心したのか、ルークはホッとしたように微笑むと花の頬に軽くキスをして立ち上がる。

「……もう行かなくては。ハナはもう少し休んだ方がいい」

そう言って優しく花の頭を撫でると、ルークはその場から消えた。

――――　……ど、どどどどうしよう!?　いや、何が？　わかんない!!　でもどうしよう!?

ルークが去った後も花はパニック状態でひたすら悶えていたが、ふと動きを止めて自分の手を見つめた。

――――　爪、もっと短くしたいな……って、ちちち、違うんです!!　そういうつもりではないんです!!

なぜか誰かに言い訳をする花だった。

ピアノを弾く為にいつも短かった花の爪は今、以前より少し長めに綺麗に整えられている。

シューラを上手く爪弾く為でもあり、この世界の爪切りを上手く扱えないこともあり、いつもセレナ達に手入れをお願いしているからだ。

――――　ピアノ弾きたいなぁ……。

ピアノを想うと切なくなる。

それでもこの世界でルークに出会えた事は『神様』に感謝したい。

――――　本当にルークは優しいよね……これが理想の恋人ってやつなのかな?

などと、ほんのり頬を染めていた花だった。
が――
――なんじゃこりゃー!?
まるで誰かに憑かれたような言葉を心の中で吐いた。
鏡の前に立った花は自分の体を見て驚いたのだ。
それは体の諸処(しょしょ)に浮いた赤いアザ。
唖然としている花の顔はこれ以上ないほど真っ赤に染まり、あまりの衝撃に呼吸困難に陥りそうになっていた。
そして、それを見たセレナとエレーンはやはり「まあ、ホホホホ」と嬉しそうに微笑んでいる。
――こ、ここ、これ、これってキキキ、キスッ……キスマーク!?
再び心の中で叫びながらも、なんとか花は落ち着いた声を出す。
「あの……首元まで隠れるドレスでお願いします」
その言葉に二人はやはり残念そうに答えた。
「まあ……隠されてしまうんですか?」
「陛下の情熱の証をお見せしないんですか?」
――な、何言ってんの!?　ってか、今度は情熱の証!?……愛の証は……付いてないか……いやいやいや!!　ガッカリなんてしてませんから!!

二人の言葉に焦りながらも思わず歯形を捜してしまう花だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その日の議会は朗報に沸いていた。

先程、早馬によってもたらされた報せは、昨夜遅くにセルショナード軍がサラスティナ丘より撤退を開始したと言う驚くべきものだったのだ。

「昨夜のハナ様の歌声も素晴らしいものでしたから、セルショナード軍の者共も心を入れ替えたのでしょう」

「だが、このまま素直に見逃していいものか？　こちらは大変な損害を被り、辛酸を嘗めさせられたのですぞ！！」

「確かに尤もです。それにしてもハナ様の美しい歌声が月の輝きとともに響き渡ったあの幻想的な時間は忘れられませぬな」

など、各々が好き勝手に話している。

そうした浮かれた大臣達とは対照的に、ルークやディアンなどの主だった者達の顔つきは厳しいままで、それに気付いた大臣たちは慌てて花の事は禁句とばかりに口を噤む。

それでもその場は終始明るいものだった。

＊＊＊

「いったい何を考えてるんだ！？」

苛立ったレナードの声が小さな会議室に響くが、残念ながらそれ

に応える声はなかった。
その場にいる誰もが、同様の疑問を抱いていたからだ。
今回のセルショナード軍のサラスティナ丘侵攻は不可解な事ばかりではあったが、それでも一番に考えられる理由としては領土拡大が目的ではないかと皆が考えていた。
だが、セルショナード軍が撤退を開始した今となってはその理由も当て嵌まらないと思われる。
まさか大臣達の言葉通り、花の歌声によって改心したなどとは到底考えられないからだ。

マグノリア帝国の北東に位置するセルショナードは、肥沃な大地に穀物がたわわに実り、国土に面した海を流れる暖流に乗って泳いでくる豊富な海産物に恵まれた豊かな大国だ。
そして、その暖流の影響で年間を通して常に温暖な気候なのだ。
一見すれば、とても隆盛した国に見える。

しかしセルショナードは今、ある危機を迎えていた。

豊富な食物と温暖な気候、そして現王の強大な魔力による治世に後押しされ人口は急激に増加し、今現在においてそれは飽和状態を迎えている。
このままでは食糧供給が追いつかなくなることは目に見えているのだ。
穀物と海産物以外に特化した産業も資源もないセルショナードが他国から食料の輸入に頼るのも限界があり、恐らく一度でも飢饉に見舞われれば、瞬く間に王国は衰退の一途をたどるだろう。
もちろん、歴代にない程の魔力を有する現王の治世において飢饉などというような事態が起こるとは考えにくいが。
そもそも、王がそれほどの力を有しながら何故、国土拡大が叶わ

なかったのか。

その原因は千数百年前に遡る。

現王より数代前の王の時代に隣国ターダルトとの戦において『果ての森』に面する北の国土を奪われ、更に不運な事にその戦において王の魔力が弱まっていた時に天変地異が起こり、辛うじて残っていた『果ての森』に面する北東の大地が割れ、海が傾れ込んでしまったのだ。

『果ての森』に面する大地がなくなったセルショナードはそれ以来、国土拡大を成せないでいる。

それ故、『果ての森』近くのサラスティナ丘侵攻かとも思われたが、それならば何故過去の戦で怨恨もあり王の魔力でも勝っているターダルト王国へではなく、わざわざヴィシュヌの再来とまで言われるマグノリア皇帝を頂く帝国なのか。

それどころかユシュタールの危機である今は国土拡大よりも、維持に各国が躍起になっているというのに、いくら『果ての森』に面していないとはいえ他人事ではないはずだ。

そして、それを考えれば、皇帝を失う事など考えられないはずであるのに。

結局、セルショナードの思惑が攫めないまま皆は押し黙っていた。

「何を考えているんだ……」

レナードが再び吐いた言葉は静寂に満ちた会議室の床へと吸い込まれていった。

54．お腹の冷えは大敵。

枕を背に寝台に座って『王宮七不思議』を読んでいた花は、書類に目を通していたルークが立ち上がった気配に視線を向けた。

「ぎゃお！！」

花の奇声に動きを止めたルークが不思議そうに訊く。

「どうした？」

「な、何で服を脱いでるんですか！？」

「……以前に言ったと思うが、普段寝る時に俺は何も身につけないからだが？」

どうやらルークは今まで気を使ってくれていたらしいが、花にとってはそれどころではない。

「何言ってるんですか！？　ダメダメです！！　お腹壊します！！」

「……」

以前の言われ様に比べて随分良くはなったな、と思いながらルークは結局ため息を吐いて服を着直した。それに安心した花は、ルークの「どうせすぐ脱ぐのに」と言う呟きは聞こえない。

そして次の朝、前日と全く同じ事態に陥り、生まれて初めて花は自分の寝付きの良さを呪ったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

満月の夜から三日後、セルショナード軍がサラスティナ丘から完全撤退し、その後セルショナードは全国境を封鎖した。

それは王の魔力によって施され、ネズミ一匹通さないほどの強力なもので、王の許可がない限りはセルショナードに入る事も出る事も叶わず、行商人達は足止めを食うことに不満を漏らしたが、それ以上にこの完全封鎖がマグノリア帝国からの報復攻撃を防ぐ為のものではないかと先行きに不安を抱いたのだった。

当然、マグノリア議会は紛糾したがそれでも以前の悲壮感漂うものとは違い、どこか優越を含んだ余裕あるものだった。

「やはり帝国の権威を取り戻す為にも、ここは報復攻撃に打って出るべきです！！」

「しかし、セルショナード王の魔力は陛下に次ぐ程強大なもの。その力が注がれて封鎖された国境を突破するのは至難の技ですぞ」

「まあまあ、そう目くじらを立てなくてもほっとけばよろしい。国境封鎖などといった捨て身の策、そのうち立ち行かなくなって白旗を上げて参りましょう」

結局、いつもの如く結論も出ぬまま問題は先送りされた。

「本当にあの時間は無駄だな」

思わずぼやいたルークを窘める者は誰もいない。

「早急に手を打たないといけませんね」

ディアンの相槌の後、今後のセルショナードへの対応が検討された。セルショナードは講和の為に話し合う事さえしようとしない。しかし、センガルの受けた仕打ちを思えばこのまま見過ごす訳にはいかないのだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その日は皆の疲れもかなり溜まっているようで、早めに会議を切り上げることにした。ルークはそのまま執務も切り上げ、久しぶりに花と夕食を共にしようと青鹿の間へと赴く。

だが、先触れもなく訪れた為に花は留守だった。

「申し訳ありません。只今ハナ様はシューラ奏者と面会をなさっておられまして、もうお戻りになられると思うのですが……」

慌てて使いを出そうとするエレーンをルークは止めた。それからレナードに帰るように促し、窓際の長椅子に腰を掛け花が戻るのを待つことにする。

先程まで聞こえていたシューラの音も聞こえないので、花はそれほど時間を置かず戻るだろうと、黄昏が忍び寄る街を眺めながらルークは久しぶりにゆっくりとした時間を過ごした。

――――　最初は限りなく怪しい、珍妙な娘だと思ったのだがな…

…。

ふと、花と初めて会った時の事を思い出し、思わず笑みをこぼす。

――― いつの間に、こんなに心を奪われたんだろうか……。

気がつけば、そんな事を考えていた。

それから最近の花を想う。

『好き。ルークが好き。大好き』

触れあう肌から伝わる花の気持ちは、甘い蜜のようにルークを蕩けさせる。あれほどに無垢な愛情を注いでくれる相手など今までいなかった。

恥じらう姿に更に煽られ、花の口から洩れる甘美な声に衝動を抑えられなくなる。

それでも己の理性を総動員して花を怖がらせないよう、無理をさせないようになんとか抑制しているが、正直それがいつまで保(も)つかは分からない。

思わず目を瞑り大きく息を吐き出した時、花の気配がした。

「陛下！」

青鹿の扉が開き、嬉しそうに入って来た花を見ると今すぐその理性が飛んでしまいそうになる。

それでもなんとか自制し、花に軽いキスをするに止(とど)める。

＊＊＊

久しぶりにルークとゆっくり食事ができ花は嬉しかった。食後のお茶を飲んでいる今、セレナ達は気を利かせて部屋に下がっている。他愛もない話を楽しみながらも、ふと落ちた沈黙の後にルークが口を開いた。

「ハナ……お前には以前の世界で婚約者がいたのか？」

突然の質問に花は驚いたが、それでも何とか答えた。

「婚約者と言うか……結婚が決まった相手？でしょうか……」

「……どう違うんだ？」

眉を寄せて聞くルークに花は困った顔をする。

「えっと……結納っていうか、正式に婚約をした訳ではなく……親の決めた相手です。まだ、一度会っただけですし」

「ハナは……その男と結婚するつもりだったのか？」

ルークは少し躊躇いながら質問した。それに花も同じように躊躇いながら頷く。

「そうですね。恐らくあの時、あの人に迫られて逃れる為にバルコニーから落ちなければ結婚していたと思います」

「……それでこの世界に？」

「はい」

ルークの感情の窺えない静かな問いに花は再び頷いた。
バルコニーから落ちてこの世界に来たとルークには伝えていたからだ。

「でも、助かりました。あのままバカボンと結婚するのはやはり嫌だったので」

花はそう言って笑った。

「バカボン？」

「はい、あ、バカボンって言ってもあの国民的人気者のバカボンではなく、ましてやバカボンのパパの事でもなく、バカなボンボンを略してバカボンって事です」

思わず謎の言葉「バカボン」を聞き返したルークは、花の説明で益々理解不能になったが諦めた。そして吐き出すように呟いた。

「バルコニーから落ちてしまうほど嫌な結婚相手から逃げ出したというのに、この世界に来ていきなり側室にされたのはついてなかったな」

苦笑するルークのその言葉に、花はまだ気にしているのかと少し怒ったように答える。

「そんなことないです。だって私、本当はラッキーって思いましたから」

「ラッキー？」

驚くルークに花は意味が通じなかったかと、もう一度言い直した。

「幸運に思いました。だってルークすっごくカッコいいから」

「は？」

ルークは呆気に取られたような顔をしている。それに花は少し悲しそうに苦笑して続けた。

「正直に言えば、どうでも良かったんです。あちらの世界に私は大切に思える人がたった二人しかいませんでした。その二人は血の繋がった家族でもないんです。一人はもう亡くなってしまって……もう一人は大切な友達です。本当は今もすごく会いたいですし、私があちらでどういう扱いになっているのかよくわからないので心配かけているかと思うと、堪らない気持ちになります。それでもあちらの世界に帰りたいとは最初から思いませんでした」

そこで一呼吸置いた花は、紅茶を一口飲んだ。そして心配そうに見ているルークに笑いかける。

「だから、この世界に来た時も本当はどうでも良かったんです。今まで通り、流されて生きればいいと思っていました。でも大切な人がたくさん出来ました。セレナもエレーンも、レナードもジャスティンもカイルもジョシュも他のみんなも、いきなり現れた私の事をあの満月の夜以前から大切にしてくれました。そして今も変わらずにいてくれます。私はそんなみんなが大切です」

例えそれがルークの側室と言う立場だったからだとしても、なんの蟠り（わだかま）もなく好意的に接してくれる事が花は嬉しかった。

そして花はテーブルに置かれたルークの手に自分の手を重ねた。

「私にとってルークは……すっごくすっごくすっごく、大事で大切なんです。すっごくすっごく宝物で大好きなんです……なんだか上手く言えません」

そう言って花は残念そうに笑った。ルークはそんな花の重ねられた手を握り返し小さく呟く。

「やはり無理だ」

「え？」

花は上手く聞きとる事が出来ずに聞き返すが、ルークはいきなり立ち上がると握った花の手をそのまま引き寄せ、傾いだ花の体を抱き上げた。

「ルーク！？」

驚く花をそのままお姫様抱っこで寝室へと連れて行き、寝台にそっと横たえる。

この後の当然予想される展開に花は戸惑い、ルークのキスが唇から首筋をたどって胸元近くにおりると思わず腰が引けて声を洩らしてしまった。

「やっ……」

その声にルークはピタリと動きを止め、顔を上げた。そして上目遣いに少し悲しそうな声で聞く。

「いや？」

そんな反則技を使われた花は、顔を真っ赤にして首を横に振る事しかできなかった。
それなのにルークは更に追い詰める。

「ちゃんと言葉で言って欲しい」

花はこれ以上ないほど赤くなった顔に涙を浮かべつつ答えた。

「……いやじゃないです」

そう言ってギュッと目を瞑った花に、ルークは良く出来ましたとばかりに唇に、頬に、瞼にキスを落とし、再び唇に戻る。
今度は甘く激しく。
ずっと目を瞑ったままの花には、ルークの顔がいつも以上に意地悪そうに、そして嬉しそうに笑んでいる事に気付かなかった。

55．嘘つきは泥棒のはじまり。

「リコ様、申し訳ありません！！」

リコの部屋に入ってくるなり頭を下げたトールドに、リコは微笑む。

「かまわん。お前が無事に戻ったならそれでいい。」

その優しい言葉にトールドは更に頭を下げる。部屋には先程同じように戻ったザックもいた。

「何があったか話してくれ」

一転、厳しい声音で報告を求めるリコにトールドは頭を上げ険しい顔つきで報告を始めた。

「リコ様、申し訳ありません。術者たちをサラスティナ丘撤退の折に見失ってしまいました。術者たちがそのままマグノリアに残ったのか、セルショナードに戻ったのかはわかりません」

そう言って再び頭を下げるトールドを横眼で窺いながら、クラウスに張り付いていたザックが報告を継いだ。

「特にクラウスに大きな動きは見られませんでした……今日までで術者たちがクラウスの元に戻ったのは確認しておりません」

二人の報告にリコは暫し黙って考え込んでいたが、ふとトールド

を見やって言葉をかける。

「トールド、お前の魔力は……ずいぶん満ちているな」

トールドはリコの疑問に嬉々として語り出した。

「リコ様、やはりユシュタルの御使いと言う皇帝の側室の噂は本当でした。四日前の満月の晩にサラスティナ丘に奇跡の歌声が響き渡ったのです。その……余りにも幻想的すぎて正直なところよく覚えていないのですが、眩いばかりの月の光と共にその歌声が降り注ぎ……気が付けば心の中が温かく満たされたような……とにかく自分の魔力が限界まで満たされていたのです！」

最後は興奮を隠しきれない様子で語るトールドにリコは驚く。

トールドは淡泊な顔と同じように性格も淡泊で、薄い茶色の瞳はいつも無関心にくすんでいるのに、今のトールドの瞳は輝いていた。

それには、トールドと正反対の何事にも全力疾走で情熱的に輝く碧い瞳の持ち主であるザックまでもその瞳を大きく見開いて驚き、ポカンと口まで開けている。

そんな二人の侍従の態度に苦笑しながらも、リコは再び黙って考え込んだ後、呟いた。

「今のセルショナードにとって、その娘は邪魔だな……殺してしまうが早いが……」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その日は冬の初めにしてはかなり冷え込んでいた。恐らく、昼間の今でも外では息を吐き出せば白く曇るだろう。

「ハナ様、シューラ奏者が先日にお伝え忘れた事があるとかで、夕の刻に面会を求めて来ておりますがどうなされますか？」

セレナが扉の外に言付けを届けに来た小間使いを待たせて花に聞いた。

「ええ、もちろん構いません」

花はそう答えると、外の小間使いに御苦労さまと言うようにニッコリ微笑みかける。

それから再び手元の本に目を落とした。

＊＊＊

初冬のこの時期は夕の刻になるとやはり陽が落ちるのが早く、黄昏色に染まる王宮の庭園を眺めながら花は応接の間へと向かっていた。

すっかり通い慣れた回廊を暫く歩き目的の扉の前に着くと護衛の一人がノックをして中の人物の応答を確認し、扉に手を掛ける。

と、不意に辺りは暗闇に閉ざされた。

いくら今夜が新月とはいえ、余りにも突然で早すぎる。

「ハナ様！」

セレナの動揺を抑えた声に、花もなんとか気を落ち着けながらセレナへと手を伸ばす。

瞬間――

閃光が走り、花の視界に護衛達に混じりローブを被った三人の人物が一瞬映る。が、余りの眩しさにすぐに目を閉じた。

その時、花の耳は「パシンッ！！」と大きな音を捉えたのだが、それと同時に体を雷に打たれたような衝撃が襲い、そのまま花は意識を失ってしまったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「経済制裁をしようにも、セルショナードは自らしているようなもんですからな……」

「しかし、今のままじゃ行商人達を質に取られているようなものではないですか？」

「いや、この時期にセルショナードに入ったと言う事は彼らにもそれなりの覚悟があるのでしょうから、私たちがそこまで気に掛ける必要はないと思いますが」

小さな会議室で連日行われる議論も内容にあまり進展がないと言えば進展がないが、それでも少しずつではあるが、セルショナードへの対応も決まっていた。

「海上の方はターダルト王国をはじめ、各国が協力を申し出てくれておりま――！？」

政務長官のセインの言葉は途中で途切れた。王宮に張り巡らされ

たルークの結界が反応した事に気付いたのだ。
もちろんその場にいた誰もが気付いたが、その時にはもうすでにルークとレナード、そしてディアンは消えていた。
ディアンまでもが消えた事に皆は重大な変事を予見した。

ルーク達が駆け付けた時にはすでに闇は晴れていた。
そしてその場には重症に見える護衛達やセレナ、そして術者らしきローブを纏った男が二人倒れていた。どうやら術者達は絶命しているようだ。
ルークはそれらには構わず、ただ花の姿が見えない事にどうしようもない苛立ちと焦燥に駆られていた。

「ハナ……」

なんとか意識を集中させ花の気配を追う。
花に施した己の防御魔法が破断されている事がルークの焦慮を益々募らせていったが、破断された防御魔法の欠片の気配を辛うじて拾いすぐに追いかける。そんなルークにレナードとディアンも急いで続いた。

そこは王宮の地下にある小部屋らしく術者らしい男が二人、やはり絶命して倒れ伏しているだけだった。
そして、そこで花の気配も己の術の欠片もピタリと途切れ、全ての気配が掻き消えていた。
思わずルークはよろめき、湿った石壁に背をつく。大きく何度も深呼吸を繰り返すが、動悸がおさまらない。

「ルーク！！」

レナードの切羽詰まって叫ぶような声もすでに耳に入らず、己の呼吸する音がやけに耳触りに聞こえた。目の前に赤い靄がかかったように視界が翳み、ドクドクと恐ろしいほど早く脈打つ心臓の音が頭の中で響く。

「ルーク落ち着け！！」

レナードは荒れ狂いだしたルークの魔力に圧されながらも、ルークに近づこうとするが叶わない。

その余りの魔力に倒れていた術者の亡骸は塵と化していき、頑丈なはずの石壁は亀裂を走らせ今にも崩壊しそうになっている。

その力はもはや、小部屋だけでなく王宮全体へと伝わりあちらこちらか悲鳴や怒号が上がっていた。

今はまだ、ルーク自身が施した王宮の結界と歴代王の魔力を含む王宮に満ちた魔力によって、この凄まじいまでのルークの力の暴走は王宮内のみに留まっているが、このままではマグノリアどころかユシュタール中に広がってしまうのは時間の問題だった。

そうなればユシュタールは虚無に飲み込まれる前に崩壊を迎える事になるだろう。

「アポルオン出て来い！！」

ディアンの珍しい怒声にすぐさま反応して輝き出て来たアポルオンは状況を見て取るや、急いでルークの暴走を抑える為に魔力を注いだ。

「レナード！　お前もメレフィスを呼び出せ！！」

必死にルークの力を少しでも抑えようとしているレナードは絞り出すような声で己の剣に呼び掛ける。

「メレフィス頼む!!」

メレフィスもレナードの声に輝き出るとアポルオンと同じようにすぐさま魔力を注ぐ。

この暴走した力を抑える為に、魔族たちやレナード、ディアンだけでなく恐らくセイン達も力を注いでいるはずだ。

魔族たちの強大な力によって、辛うじてルークの暴走した魔力を抑える事が出来ているがそれも長くは保たないだろう。

「ルーク!!　落ち着け!!」

ディアンがルークになんとか近づき声を限りに呼びかけるが、ルークは目を閉じたままで届かないようである。

「ルーク!!　このままではユシュタールは崩壊してしまう!!」

「――構わないだろう？　こんな世界に何があるんだ？」

ディアンの叫びにルークは暴走する力とは逆に、妙に冷徹な声で言葉を吐き出した。

「ハナ様がいるでしょう!?　ハナ様はまだ生きています!!　だが、このままだとハナ様まで巻き込んでしまう!!」

その言葉にルークの暴走した魔力が少し弛んだようだった。それにディアンもなんとか自身の気を落ち着け、続ける。

「ハナ様は間違いなく生きています。でなければ、ここまで手の込んだ事をする訳がない。ルーク、ハナ様を取り戻さなければ！」

ディアンの必死の訴えに、ルークは何度も何度も大きく深呼吸を繰り返すと暴走する力を徐々に集束させて己へと戻していった。

それを見届けたメレフィスはレナードを心配するように見つめた後に輝き消え、アポルオンはチラリとルークを窺いそしてディアンに目を向けた後、無言のままメレフィスの後を追うように消えた。

それから暫く部屋には息を荒げた三人の呼吸する音だけが響いていた。

「状況を……状況をセレナ達から聞いて参ります」

天を仰ぐように顔を上に向け目を閉じているルークに、荒い呼吸のままディアンはそう告げるとその場から立ち去った。

レナードは蒼白な顔のまま床についていた膝を無理に立たせ、ルークへと近づく。

「ルーク……とにかく戻ろう」

レナードの言葉にルークは体を壁から起こし、目を開けた。

その久しぶりに見る暗い瞳の輝きにレナードの背中を冷たいものが走る。

――――　これはまるであの時の……いや、あの時以上だ……。

レナードは久しぶりに思い出した嫌な記憶になんとか蓋をし、ルークに続いて小部屋を後にしたのだった。

56．生ものですのでお早めに。

混乱した王宮の事後処理は、急ぎ戻って来たジャスティンを中心に行われた。

暴走したルークの魔力に中(あ)てられ魔力の弱い下働きの者が一名運悪く亡くなった他に重篤者が八名、重軽症者は百名を優に超えていたが、それはまだ正確な数ではないだろう。

重傷だった花の護衛達は異変に駆け付けた近衛達によってルークの魔力から守られ、幸い一命は取り留める事ができ、セレナは意識を失っていただけだった為、程なく回復し状況説明をする事ができた。

「いきなり暗闇に包まれ……それから二つの閃光が走り、その光の中で三人のローブを纏った術者がいる事がわかりましたが……私には何もすることが出来ませんでした。申し訳ありません……」

セレナは嗚咽を堪え震える自身の体を抑えようと抱きしめる。そんなセレナを駆け付けて来たエレーンは抱き寄せ慰めの言葉を紡ぐが、そのエレーンさえも静かに涙を流していた。

護衛達が回復すればまた別の話が聞けるだろうが、今はこの情報だけで答えを導き出さなければならない。幸い、近衛達の機転で術者たちの骸も残っている。

ディアンは黙ってその場から立ち去ると、ルークの気配を追い執務室へと歩いて向かった。

ルークの執務室前には大臣達が陣取り、何故入れないのかと執務室前の護衛に食って掛かっている。

それにディアンの疲れは限界に達した。

「これはお大臣達、暗愚な頭を寄せ合って何を為されているんですか？」

「な！　宰相殿、失礼であろう！！」

内大臣のドイルが青筋を立ててがなり立てる。しかし、ディアンはまったく動じずいつもの爽やかさが抜けた、ただの暗黒笑顔で続けた。

「おや、その愚鈍な頭でも己への誹謗には鋭敏なのですね。では暗愚ではない頭のあなた方に教えて頂きたい。今、この場で何を為されているのですか？」

「わ、私たちは陛下の御身を心配して……先程の事はいったい何があったのかと……」

ディアンの笑顔に気圧されたように外大臣のコーブが答えた。このドイルとコーブは常に反目し合っているが、こういう場合のみいつも手を組むのだ。

だが、その答えにディアンの笑顔は更に黒くなる。

「それで今からもう一度先程の出来事を再現しようと？　わざわざ陛下の怒りを買いに来られるとはその勇気ある行動、甚（はなは）だ感服いたします」

そう言うとディアンは立礼の最敬礼をした。

「な、な、な……」

ドイルは怒りに顔を強張らせ言葉を継ぐ事も出来ない様子だったが、コーブはディアンの言葉に蒼白になってドイルに帰るように促す。

「ドイル殿、戻りましょう。今は我々は必要ではないようです」

そして、ドイルを引っ張るように去って行き、他の者達も黙ってそれに続いた。その様子を黙って見送ったディアンはそのままノックもせずに執務室へと入る。

護衛達は余りにも黒いディアンのオーラに圧され、ただその場に直立不動で顔を強張らせ立っている事しかできなかった。

部屋にはルークとレナードの他に政務長官のセイン、内政長官のグラン、そして近衛のランディの五人がいた。

扉の外でのやり取りは聞こえていただろうに、皆それには触れずただ険しい顔で佇んでいる。

その中でルークは執務机の上に肘を置いて組んだ両手に顎をのせたまま、一点のみを見つめているが、それがどこを見ているものなのかはディアンには分からず、ただルークの瞳が暗く淀んだ光を放っている事にレナードと同様に嫌な記憶が蘇る。

ディアンは大きく深呼吸をすると同時に色々なものを抑え付け、それからレナードへ視線を向けた。

レナードはディアンの視線を受け、少し戸惑ったように苦笑する。

「俺は大丈夫だ。なぜかメレフィスは俺の魔力を使わなかったらしい」

その言葉にディアンは少し驚いたように片眉を上げたが、すぐに

いつもの爽やか暗黒笑顔に戻った。
確かに、あれ程の力を使いながら更にメレフィスに力を与えていればレナードは今この場に立っている事など出来なかっただろう。
メレフィスのその行動は驚くべきものだったが、アポルオンの常を考えれば出来ない事はないのだろう。
『緋紺の宝玉』にしても、緋色に輝く時は持ち主に力を与えるのだから。魔宝についてはまだまだ解らない事だらけだが、今はそれが問題ではない。

「今回の事件はかなり用意周到に練られていたようです。しかもその為に少なくとも術者の四人は命を捨てています。それもただの術者ではない、恐らく王族クラスの力を持った術者達が、です」
ディアンは淡々と今回の事件の経緯についてセレナの説明に己の推測を交えながら語り出した。

「始めにハナ様達を襲った術者は三人いたようです。そのうちの一人が護衛達の足を止め、もう一人がハナ様に施された陛下の防御魔法を破断し、最後の一人がハナ様を転移魔法で地下へと連れ去ったのでしょう。そして、残った二人はその場で自害したかと？」
そう言って、ランディへと視線を向ける。ランディは肯定するように小さく頷くと、ディアンの言葉を継いだ。

「護衛達と共に倒れていた術者はいずれも魔力を使い果たしたらしくその体は枯れ果てた枝の様に衰えておりました。恐らく始めから、役目を果たした後は己の命を残った魔力で絶つ覚悟だったのではないかと思います」

花の護衛達は三人いた。騎士達の中でかなりの上位に入るその三人を相手にするには、例え王族クラスの魔術師とて全魔力を注がなければ確実ではないのだ。そして、ルークの防御魔法を破るのはそれ以上に至難だったに違いない。

また普段、気軽にルークは花を抱えて転移しているが、それさえも通常ならば容易い事ではないのだ。

「地下の部屋に残されていた術者の死体のうち一体は、ハナ様を転移させた者でしょう。もう一体は恐らく、その後ハナ様を連れ去った者……一人とは限りませんが、その者の気配を完全に消す為に働いたのでしょう」

その言葉にセインが疑問を挟んだ。

「しかし、例えその場からの気配を消して時間稼ぎが出来たとしても……こんな短時間でハナ様を連れてマグノリアを出たとは考えられない。だとすれば陛下ならハナ様の気配を追えるはずです。それが不可能なのは……」

その後に続く言葉を濁したセインだったが、言いたい事は皆に十分に伝わった。それにルークの気配が剣呑になり、ディアンはすぐに言葉を継いだ。

「いえ、それならば――」

ディアンは途中で言葉を切った。それを不思議に思う間もなく、ディアンの胸元が光り、アポルオンが姿を現す。

「あのさ、あそこに闇の魔力の気配が微かだけどあったぞ」

突然のアポルオンの登場にセインやグラン、ランディは呆気に取られたが、その言葉にすぐに真顔に戻り話に聞き入る。

「んで俺、思うんだけどさ……あの女、！？……うっ……」

アポルオンの言葉は途中で途切れた。どうやらディアンの蹴りが腹に入ったらしい。

それを堪えながらアポルオンは言葉を言い直し、続けた。

「あの……お姫様ですが、たぶん別次元に放り込まれたんじゃないかと思います」

「別次元！？」

その場にいた誰もが思わず声を上げていた。ルークでさえ、驚いたようにアポルオンを見やる。

「そう、別次元。ディアン様だって詠唱が面倒な魔法とか別次元作って放り込んでるでしょ？　あれです」

「……あんなものに人を入れる事が出来るのか！？」

レナードの驚き焦った声が響く。

「さあ、人間でやった事はないけど……俺ら魔族はよく生け捕った獲物を放り込むぞ？」

「……何のために？」

「食うため」

敢えて聞いたレナードの言葉に、あっさり答えたアポルオンは再びディアンの蹴りを受けて倒れ込む。ディアンはそんなアポルオンの腹部を無言のまま右足で抑え付けた。

「グッ！　つ……だって便利なんだもん！　持ち運びも簡単だし、殺してしまったら二，三日で腐っちまうけど、生きたままなら十日は大丈夫だし」

「では、今すぐお前が試しに入ってみなさい」

そう言うとディアンは己の作りだした別次元空間を開こうとした。

「ちょっ！！　ちょっと待って！！　むりむり！！　無理です！！」

慌ててディアンの踏み付け攻撃から逃れたアポルオンはそのまま壁まで後退（あとじさ）る。それにディアンは訝しげに問う。

「なぜ、逃げるのです？」

「そんな、いきなり人間がやるのは無理です！！　別次元の空間ってどちらかっつうと闇の領域だし！！」

その言葉に今度はレナードが問う。

「だとしたら、ハナを連れ去ったのは魔族なのか？」

「わかんねぇよ！！　この前もそうだけど、魔族がいるならすぐわかる。だけどそんな感じはしねんだよ！」

皆が考え込むように口を閉ざすなか、ルークだけが笑みを含んだような声で言葉を発した。

「アポルオン、それなら試しに私をお前の別次元空間に入れてくれ」

「なっ！？」

その場にいた誰もがルークの言葉に驚く。だが、ルークはそれに構わず立ち上がるとアポルオンへと近づく。

再びアポルオンは後退ろうとするが、壁に阻まれ怯えたように叫ぶ。

「無理だって！！　そんな事出来ねえよ！！」

「何故だ？　生きたまま出て来れるんだろう？」

ルークの声は厳しいものに変わり、アポルオンを問い詰める。アポルオンは助けを求めるようにディアンを見るが、ディアンさえもルークを止める事が出来ないでいた。

それほどルークの纏う空気は冷たく近寄り難いのだ。

「別次元に入っちまったら、ルークの魔力もこっちでは途絶えちまう！！　そしたら虚無を誰が抑えるんだよ！！　お姫さんは大丈夫だよ！！　それは保障する！！」

そう叫ぶとアポルオンは逃げるように輝き消えてしまった。

そしてその場には重たい沈黙が落ちる。

すぐにそれを破ったのはディアンだった。

「では……ハナ様は別次元に閉じ込められ、連れ去られたと考えて間違いないようですね。ここまで手の込んだ事をするのです。無事なのは確かでしょう」

「しかし、いったいなぜそこまでして……」

グランが驚愕し思わず声を洩らす。

「……間違いなくセルショナードの仕業だな」

レナードは苦渋に満ちた顔で言葉を吐き出した。

魔族でもなく、闇の力を操る術者。

不明な事ばかりだが、やはり今回の襲撃は例のセルショナード軍に加担していた謎の魔術師の集団以外に考えられない。

そしてレナードの言葉に反応したのはセインだった。

「まさか、セルショナードの国境封鎖はハナ様を連れ去る為に？」

セインの疑問に答える者はいなかった。

皆、驚きのあまり言葉を発する事が出来ないのだ。

花を取り戻すには国境を越えなければならないだろう。通常ならば、それは問題でもなんでもない。

だが国境を王の魔力によって完全に封鎖している今、セルショナードに入るには大軍をもってして入るか、強大な魔力を持つ者が穴を開け入るしかない。

それはどちらにしても国境侵犯であり、同時にセルショナードへの宣戦布告となる。

花が正妃だったならばそれも致し方ないが、一介の側室一人、しかも何の身分もなく正式に手続きも踏んでない妾一人にそこまでする事は普通では考えられない。

もちろん報復攻撃と言う名目はある。
だが再び戦を、疲弊している兵や国民に課していいのだろうか。

「これは……挑発行為に他なりません」

再び口を開いたセインの言葉は、静かに部屋に響き渡った。

57．ブランクを埋めよう。

次の日の議会は混乱し荒れた。
しかし、飛び交う意見の大半はセルショナードへ侵攻を開始するべきだと言うものだった。

「ハナ様は今や、国民からも絶大な支持を得ているのです！！　それをセルショナードなどに奪われたとあっては！！――」
「しかし、セルショナードの仕業とはまだ決まった訳ではないのでしょう！？　もし間違いだった場合どうなさるのですか！？」
「何を馬鹿な事を！！　セルショナード以外にいったい誰がこのような大それた事を企むのですか！？」
「そうだ！！　それに例え間違いだったとしてもセルショナードには煮え湯を一度飲まされている！！　報復攻撃に移ったとして誰が責めよう！？」

怒号の飛び交うなか、ルークはただ目を瞑り静かに座しているだけだったが、その内では力が荒れ狂い今にも暴走してしまいそうであった。
レナードとディアンはそんなルークにいつ何があっても対処できるように気を配り、またジャスティンさえも隣室に控えて王宮復旧の指示を出しながら、ルークに意識を向けていた。

「これ以上セルショナードに虚仮（こけ）にされたままでよいのですか！？　たった今も帝国は不甲斐ないと風の様に噂が各国を駆け巡っているというのに！！」
「それではあなたは、ただ面子の為に再びセルショナードと開戦しようと言うのですか！？」

「では貴殿はこのままセルショナードを捨て置くと言うのですか！？」

「そうではない！！　もっと時間を置いて考えるべきだと言ってるのです！！　早急に事を運ぶべきではないと！！　とにかくハナ様のご無事を確認し、それから……」

議会は激しく意見が衝突し、益々混乱を来していたが、そこへある長官の切迫した声が上がる。

「ハナ様が陛下の御子を身籠られていたらどうするのです！？」

誰もがその言葉に息を呑み、一瞬にして議会は静寂に包まれた。

それはレナードもディアンも同様で、思わずルークを窺う。ルークは一瞬身動ぎをしたようにも見えたが、やはり目を瞑ったまま微動だにせずその胸中を推し量る事はできなかった。

魔力の強い者の子は宿し難いとは言え、絶対にないとは言い切れないのだ。

もし本当に花が身籠っていたら……。

それはただの側室略奪ではなく、皇帝の御子を人質に取られた未曾有の国難に発展する。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

結局、何も決まらぬまま五日が過ぎて行った。

その間にサラスティナ丘に駐屯している軍は兵達の強い意向もあ

り、そのままいつでもセルショナードへと侵攻出来るように準備は進められていたが、花の行方を決定付けるものがない為、その場で足止めされていた。

「ルーク、お前ちゃんと寝てるのか？」

レナードの心配そうな声にルークは小さく「ああ」と答えた。しかし、その顔を見れば答えは別のものだと間違いなくわかる。ルークは久しぶりに自室の寝室で休んでいるのだが、眠れる訳がない。一度、夜中にふと花の寝室に行ったのだが、花がいない事実に耐えられずにすぐに戻った。

なんとか花が現れる前の自分に戻ろうともしたが出来る訳もなく、ただじっと、寝台に横たわり目を閉じて眠る努力をしていただけだった。

そんなルークを心配しながらも、レナード自身眠れていない。

――――ルークを、ハナを守ると誓ったのに……。

己の不甲斐なさが歯痒く、苛立ちが募るばかりである。

また、花の不在は王宮にもサイノスにも暗い影を落とし、それはマグノリア中に伝播していった。

「陛下、セルショナードから使者が参りました」

ディアンがノックも無しに入って来るなり告げたその言葉にルークは久しぶりに大きく反応を示した。

そして警戒したレナードとディアンを従え、謁見の間へと向かったのだった。

＊＊＊

謁見の間にて面した使者は壮年の男だった。
男は平伏したまま、セルショナード王からの朝貢（ちょうこう）だと言う絢爛な文箱を差し出した。
使者の男からはそれなりの魔力が窺えたが、文箱からは一切の魔力を感じなかった為、ルークは受け取るように指示をする。
それを警戒しながらも検分の為にディアンが蓋を開け、瞠目した。
すぐにいつもの冷静な態度に戻りはしたが、文箱をルークへと差し出すその手は僅かに震えていたかも知れない。
その常ならぬディアンの態度に、ルークは気構えていたのだが。
後ろでレナードが息を呑む。

文箱に納められていたのは、光に輝き艶めく長い黒髪。

何度も何度もルーク自身の指で梳いた黒髪は間違いようもなく、花の芳香がまだほんのりと残っていた。
ルークは歯を食いしばり己の胸を右手で鷲掴むように抑え、暴走しそうになる力をなんとか制する。
使者は許可もなく顔を上げると恐ろしいまでに荒れ狂う気を纏ったルークを、顔を歪ませて嘲笑した。

「たかが娘一人にそのように取り乱す青二才など我が王の敵ではない！　早々に王の元へ下るがいい！！」

そう叫ぶと使者はその場に倒れ伏し、控えていた護衛がすぐに駆け寄ったがもはや事切れた後だった。

ルークはなんとか気を落ち着けたように見せかけるとレナードと共に退室し、ディアンは淡々と処理を進め始めたのだが、セイン達はただそれを座して見守る事しか出来なかった。

＊＊＊

その後、主だった者がルークの執務室に集まったが結局誰も言葉を発する事が出来ず、ただ重たい沈黙がその場を支配しているだけだった。ルークは目を瞑ったままで一見平静にも見えるが、その実は限界なのではないかと皆が心配をしていた。

と、急にレナードの魔剣がカタカタと音をたて、ディアンの魔ペンは胸元から隠れるようにディアンの懐へと潜り込んだ。

皆がそれを不審に思い、ディアンがアポルオンを呼び出そうとしたその時、ノックの音が響きジャスティンが一礼と共に入って来た。

「ジャスティン！？」

レナードは思わず驚きに声を上げた。

ジャスティンはいつもの侍従の出で立ちではなく、旅装に身を包み腰に剣を佩いている。その剣はジャスティンの騎士時代の魔剣であり、婚姻と同時に封印した物だった。

アポルオンとメレフィスの動揺はジャスティンの魔剣に反応したものだったのだ。

「ジャスティン、お前……」

ジャスティンと同じ紺碧に輝く瞳を驚きに見開き、セインは声を上げる。

その場の誰もが驚くなか、ジャスティンは深々とルークに頭を下げ請願した。

「陛下、私に姪となるハナ様を迎えに行く許可を」

ジャスティンの言葉にハッとしたディアンはその場から瞬時に消える。

ルークはセインへ視線をやり、問いかけた。

「セイン、お前はいいのか？」

「もちろんでございます。私などでよければ是非！」

二人のやり取りに、他の者もやっと納得がいったようだった。

すぐにでもディアンは養子縁組の書類を持って戻るだろう。

セインはカルヴァ侯爵家の当主でありジャスティンの実兄である。

セインと花の養子縁組が整えば、ジャスティンにとって花は姪となるのだ。

皇帝が身分も何もないたった一人の側室の為に、軍を動かす事は愚かとしか言いようがない。例えその娘が国民に絶大な支持を得ていたとしても、他国にとっては暗愚にしか映らないのだ。

そしてそれは少数の兵でも同じ事だった。

だが、攫われた身内を救いに行くとなると話は変わる。己の大事な身内が野蛮な族によって攫われた場合、無許可で国境を越えようと誰も責める者はいない。

例えその野蛮な族が王家の人間だったとしても、他国にとっては許容するべきものであるのだった。

ルークはこんな時にそんなものに縛られている己と己の立場に嫌悪するが、そんなルークをジャスティンは理解しているのだ。

「――ジャスティン、姉上は……」

ルークの気遣うような言葉にジャスティンは微笑んで答えた。

「魔剣の封印を解いてくれたのは妻のシェラです。陛下、大変申し訳ありませんが、私がハナ様と戻るまでシェラと息子のクリストファーを王宮に滞在させて頂いてよろしいでしょうか？」

「……もちろんだ」

ジャスティンの妻でありルークの姉であるシェラサナードは、花が現れるまで唯一ルークが心を許していた女性と言ってもいい存在だった。

ルークはジャスティンの配慮に感謝しながらも、戻ったディアンが用意した養子縁組の手続き書類にサインをする。

と、そこへ今まで黙っていた軍大将のガッシュが声を上げた。

「ジャスティン、俺が国境まで送ってやる」

「ガッシュ殿、それには及びません。どうか貴殿はこのままサイノスで陛下のお力に……」

ジャスティンは丁重に断りかけたが、それに構わずガッシュは畳み掛ける。

「なあに、気にするな！　どうせ俺がここにいても役には立たん。無い知恵は絞れんしな。セルショナードの国境を無理に通る為には魔力が必要だろ？　俺が抉じ開けてやるからお前は力をしっかり温存してセルショナードに入れ！」

そう言って笑うガッシュの強引な説得に結局ジャスティンは頷き、国境まで送って貰う事になった。
そして、僅かの時間も惜しいとばかりに発とうとした所、執務室の扉が激しくノックされ許可も与えていないのに三人の男が傾れ込んで来た。

「お前ら……」

驚きに声を洩らしたのはまたもやレナードだった。
三人の男は礼もそこそこにジャスティンに詰め寄る。

「私たちもお供させて下さい！！」

三人の中で一番年若いコーディはその碧い瞳に真剣な光を宿し、ジャスティンを見据えた。同じようにカイルとジョシュも無言のままジャスティンを見据える。
恐らくジャスティンの服装から当然予測される事を、誰かが三人に伝えたのだろう。

「ジャスティン、一緒に行け」

ルークは大きく息を吐き出しながら告げた。
花の護衛である三人の気持ちはよくわかる。何よりルークが一番に飛び出して行きたいのだから。
それでも躊躇いを見せたジャスティンの背中をガッシュは力強く叩いて笑った。

「こいつらが足手まといになる事はないさ。思う存分こき使ってやれ！」

そうして結局、四人と国境までのガッシュを加えた五人で旅立つ事になったのだった。

58．知ったかぶりは恥をかく。

『花ちゃん、お歌じょうずだねぇ』
『花ちゃん、また歌ってよ！！』

『どうやったら、そんなに綺麗な声が出せるの？』
『小泉さんのような歌声を天使の歌声って言うんでしょうねぇ』

『花ちゃんって、歌が上手いからって音楽の田中先生にひいきされてない？』
『あ、言えるー』

『花！！　お前は小泉の家に泥を塗る気か！！』

――――　……さい……。

『ねえ！　田中先生、辞めさせられたって！！』
『ええ！？　それって小泉のせいって事！？』
『そうだって！！　小泉の父親が怒鳴り込んで来たって！！』
『うわ！　サイアクー』

――――　……さいって……。

『クスクス。小泉さんどうしたの？』
『あ、もしかして上履きないの？　やぁだ、どうするぅ？』

「――もう！　うるさいって言ってるでしょ！！」

花は叫んで起き上がった――――つもりだった。

「……あれ？」

久しぶりに初等部の頃の夢を見たと思って、あの頃には言えなかった言葉を思いっきり吐いたのに。

目が覚めて寝台の上にいるかと思いきや、花は四つん這いの状態で床に手を付いていた。

「あれ？」

今一つ自分の状況が飲み込めないでいた花は、その場に座り込み辺りを見渡す。

そこは豪華な装飾が施された応接間のようであったが、花が知る限りではマグノリアの王宮にこのような部屋はなかった。伊達に毎日散歩していた訳ではないのだから。

自分の状況に思い至ると同時に、すぐ後ろの騒がしさに気が付いて振り返る。

「ガーディ様！　大丈夫ですか！？」

「ガーディ様！！」

その場には小さく呻いて蹲る男と、その人物を心配して声を掛けるローブを纏った男が二人いた。

――だ、大丈夫かな？　誰か人呼んで来た方がいいかな？

などと花が心配していると、蹲っていた男が苦しそうにしながらも体を起こし、花を見た。

「あの……大丈夫ですか？」

「……」

念の為に花は聞いてみたが、やはり返事はなくまだ苦しそうだ。

「この女！！――」

「やめろ！」

ローブを纏った男の一人が花に向かって来ようとし、花は思わず座ったまま後退ったが、苦しそうにしていた男の制止する声に助けられる。

大分落ち着いてきたらしい男……よく見ればまだ少年と言ってもいいような男の顔を見て花は驚きに声を上げた。

「あれ？　あなたは……」

とは言ったものの、名前が出てこない。

――えーっと誰だっけ？　よく見た顔なのに……えーっと……。

そんな花の様子を見て男は微笑む。

「私の名前はガーディです」

「ああ、そうそう！　ガーディさん！！」

「まだ名乗った事はありませんでしたが……」

「……」

――――　アイヤー！！　知ったかぶりしちゃったよ！！　大失敗！！

顔を覚えるのは得意だが、名前を覚えるのが苦手な花はついつい知ったかぶりをしてしまい、恥をかいてしまった。

それでも、花は気を取り直して聞かなければいけない事を聞く。

「あの……ガーディさん、あなたは確か王宮で働いていた方ですよね？　ここはどこですか？　あれから時間はどれくらい経ったのですか？　そして何の為に私がここに？」

ガーディと言う男はマグノリア王宮で小間使いとして働いていたはずだ。

そのガーディは花の矢継ぎ早な質問の一つ一つに答えてくれた。

「私はセルショナード王の魔術師の一人です。マグノリア王宮へは間諜として潜入していました。ここはセルショナード王国のクジサスにある離宮です。あなたをマグノリア王宮からお連れして……一日といったところでしょうか。何の為にかは……後ほどお分かりになるでしょう」

クジサスはマグノリアとの国境近くにある街だが、ターダルト王国とも近いため城塞都市の様相を呈している。そこにある離宮と言うのなら、恐らく守りが厳しく外からの侵入は難しいだろうが、脱出路としての抜け道だってあるはずだ。

花はすっかり頭に入っているセルショナードの地図を思い浮かべながら考えていたが、ガーディはそんな花の心を読んだように告げた。

「残念ながら、逃げ出す事は不可能ですよ。例えここから逃げ出せてもセルショナードから出る事は叶いません。とすれば、再び捕まる事は避けられませんし、その場合はあなたの無事を保障できませんので無駄な事はしない方がよろしいでしょう」

その言葉に一瞬挫けそうになったが、それでもめげずに花はニッコリ微笑んで質問を続けた。

「ガーディさん、あなたはセルショナード王の魔術師となる前は何をなされていたんですか？」

ガーディは一瞬、その質問に虚を衝かれたような顔をする。

『従順で微笑む事しか能のない娘』と思っていた花の、先程からの質問にガーディはその考えを改めた。そして気持ちを切り替えると、優しく微笑んで答える。

「ガーディで構いませんよ。それと……私が何をしていたかですが、あなたが知る必要はありません」

「そうですか……では、ガーディ……にお友達は何人いるんですか？」

「さあ、何人だったか……残念ながら昨日、数人亡くなりましたね」

「まあ、それはお気の毒です。それで、その命の代償に得た物にそれ程の価値がありましたか？」

「それはこれからわかると思いますよ」

暫くの間、ディアンとはまた別の微笑み合戦が繰り広げられたが、結局花の得られた情報は少なかった。

その後ガーディは出て行ったがローブを纏った男が一人残ったのは、恐らく見張りの為だろう。どうやらここは花の為に用意された客間らしく、ガーディと入れ違いに侍女二人が入ってくると湯あみだ何だと世話を焼かれたので大人しく従った。

そして今、用意された食事しながら花は男の隙を窺っていた。果物をむく為のナイフを見つけたのだ。

緊張しながらも、なんとか花はそれをコッソリとナプキンで包むと椅子とドレスとの間に隠し入れる事が出来た。

――――　後でなんとか隠し持てるように考えないと……。

そんな事を考えながらも、花は自分の行動に驚いていた。

今までなら、「まあ、いっか」で流されていただろうに。

でも今はルークの許に、みんなの許に帰りたいと切望している。

花は窓に目を向け、曇天の広がる冬の空を眺めた。

――――　ルークに会いたい。

ルークを想うと、花は苦しくて泣きたくなった。

きっとルークは酷く心配しているだろう。

それでもどうか、あまり悲しまないで、苦しまないでいて欲しい。

本当は今すぐ駆け出してルークの許に帰りたい、泣き叫んで暴れてしまいたい。
でもそれは出来ない。
必ずルークの許へ帰ると決めたから、今は耐えるのだ。
花は強く決意すると、何事もないように再び食事を続けたのだった。

＊＊＊＊＊

「ガーディ様、王太子殿下が到着なさいました」

「わかった」

ガーディは立ち上がると、離宮の外邸へと向かった。
長い廊下を足早に進みながらガーディは転移できない己に苦笑する。
今度こそ花を闇へと落とす為に別次元空間へと閉じ込めた完璧な状態で術を施していたが、なぜかいとも容易く破られてしまった。
通常では考えられない事だが、一度目と同じように眩いばかりの光が花を包み込んで闇を振り払い、空間から脱出したのだ。
その反動でガーディは魔力に損傷を受け己の生じた空間は歪み、修正する為に更に魔力を消費してしまった。

――――　あの光はいったい何なのか……。

計画は少し狂ってしまったが、修正は利く。
王太子の待つ部屋の前まで来ると、これからの事に意識を集中させてガーディの為に開かれた扉の中へと入って行った。

59．とかげのしっぽ切り。（前書き）

不快に思われる内容が一部含まれているかもしれませんが、物語の舞台設定であることをご了承ください。

59．とかげのしっぽ切り。

食事の後、花はナイフを隠し持つためにトイレに籠もった。

――― こういうのって太ももに装着できたらかっこいいよね…

…でも、このヒラヒラのスカートを一生懸命捲り上げてナイフを取り出すのはちょっと……。

そんな事を考えながら、何とかドレスのスカートにたくさん入ったドレープに紛らわせて隠す事ができた。衣装替えの時には気を付けなければならないが。

それから暫くして戻ってきたガーディは一人ではなかった。

ガーディと共に入って来た人物に目を向けた花は、その人物にどこかで会ったような気がして記憶の手帳を懸命にめくり始める。

――― えーっと……このつやつや赤い髪には覚えがあるんだけど……顔もどことなく……でも、これ程の美形を忘れるとも思えないし???

その赤毛の人物をコッソリ窺いながら考え込む花だったが、ガーディが紹介を始めたので記憶の手帳めくりを中止した。

「ハナ様、こちらはセルショナード王国の王太子殿下であらせられます、マクシミリアン・セルショナード殿下でございます」

「殿下、こちらはマグノリア皇帝のご側室であらせられた、ハナ様

でございます」

セルショナードの王太子など知る訳もなく、気のせいかと花は思い直した。

そして、ガーディの言葉に引っかかるものを感じながらも、一応淑女らしい仕草で挨拶をする。

「花と申します」

名字は名乗らなかった。

しかし、どちらにしろ花の挨拶に返事はなく、王太子は値踏みをするように花を上から下まで見るとガーディに向き直り口を開いた。

「ガーディ、何かの間違いじゃないのか？」

「いえ、間違いではございません」

「しかし、あのマグノリア皇帝の寵妃だったのだろう？　ユシュタルの御使いとまで言われていると聞いたぞ？」

「はい」

「なのにこれなのか？」

「はい」

王太子の信じられないといった口調にも、ガーディは平坦な声で答える。

二人のやり取りを聞いていた花は何が問われているのかを正確に理解していた。

――ええ、ええ、これですみません。十人並みですから、わかっていますから。私だってルークとの事は信じられないくらいですから。

心の中で半分拗ねながら謝罪していた花は、続く二人の応酬の中で王太子の信じられない言葉を耳にして驚愕した。

「こんな女を娶れというのか？」

「はい」

「はい！？」

花が驚きのあまり上げてしまった声に二人は振り向き花を見るが、そのままガーディは王太子を諭すように続ける。

「殿下、王のご命令です」

「……わかっている」

――いやいや、ちょっと待って！！　わかってないから、わからないから、意味がわかりませんから！！　二人で話を進めないで！！

心の中で叫びながらも花はなんとか気を落ち着け疑問を口にしようとするが、それをガーディに遮られてしまう。

「あの――」

「では殿下、どうぞごゆるりと」

そう言うとガーディはローブを纏った男と出て行ってしまい、花は王太子と二人きりで残されてしまった。

――― ゆるりと何を!?……やばい、何かやばい気がする……。

じりじりと花は後退り王太子から距離を取るが、王太子はため息を吐いたかと思うといきなり振り向き、せっかく花が空けた距離を一気に詰めて花の手首を乱暴に握った。

「あの!?」

花の言葉を無視して王太子は、ガーディが出て行った扉とは間逆の扉へと花を引いて行く。

「どちらへ!?」

慌てた花の質問に振り向きもせず王太子は答える。

「寝所だ。お前を正妃にせよと父上のご命令だから仕方ない」

――― ちょっと待って!! だからって何故いきなり寝所なの!?

王太子の答えに驚きながらも、花は力いっぱい足を踏ん張って進む事を拒否した。それを訝しげに王太子は振り返る。

「何をしている?」

「私は嫌です!!」

精一杯拒絶を示した花だったが、それを嘲笑して王太子は告げた。

「何をバカな事を。お前は拒む事はできないし、許さない」

「私は皇帝陛下の側室です！！」

「それがどうかしたか？　何も問題ないではないか。それどころか私はお前を正妃にしようと言うのだ。何を不満に思うことがある？」

「それでも私は嫌です！！」

花は一生懸命に拒絶の意思を表そうとするが伝わらず、どうすればいいのか分からなかった。

以前から何となくではあるがこの世界の社会通念、社会制度には花も気付いていたのだが。

ユシュタールでは、魔力が強く身分の高い男性が正妻の他に幾人かの側室・愛人を持つ事は当然であり、愛人をやり取りする事も珍しくなければ、皇帝や王達が側室を臣下へと嫁す事もある。

しかしこれは一方的なものでなく、女性にその旨を伝え了承が得られて初めて成立する話であって、強引に成されるものではない。だが、稀に不埒な者が手に入らない女性を無理矢理奪う事もあった。

基本的に女性は男性ほどの大きな魔力の『器』を持って産まれる事が少なく、魔力も力も弱いため保護・庇護されるものであるらしい。

そのような社会で女性達は己の望む男性の許へ嫁ぐ為の努力を怠らず、時には望みの地位の男性の許へと辿り着く為に他の男性を踏み台代わりにする女性もいるほどだった。

しかし当然ながら花に受け入れられる話ではない。
それでも以前の花ならば、この美形の王太子を前にして「まあ、いいか」と諦めていたかも知れない。ルークとも似たような状況であったのだから。
だが、ルークはこんなに乱暴ではなかったし、冷めた態度の中にも気遣いと優しさが感じられた。なのに今、王太子から感じられるのは花に対する苛立ちだけで、とてもではないが「ラッキー」と思えるはずがない。

「まさかお前は皇帝に義理立てしているのか？」

拒む花に王太子は冷笑し、それから苛立ちを抑え宥めるような優しい口調に変えて続けた。

「お前はもはや皇帝の手から離れたのだ。そして私の下に来たのだからすでに私のもの。心配せずとも皇帝より優しくしてやる。お前も皇帝のかつての側室のように、いつなぶり殺されるのかと脅えて過ごすのは嫌だろう？」

王太子の嫌な言葉の後半部分に花は反応してしまった。

「何を……何を言ってるんですか！？」

「何をとは？……まさかお前は知らないのか？　皇帝が皇太子時代に己の側室を何人も寝所で殺した事を」

そう言って笑う王太子の顔は愉悦に輝いている。
花は信じられないような話に蒼白になりながらも今は考えるべき

ではないと動揺する心を抑え、王太子の手を振り解いた。
だが、すぐまた掴まえられる。
焦った花が隠したナイフを握り締めて取り出すと王太子は驚いたように手を放した。
その機会を逃さず花は王太子と距離を取る。
「まさか、そんな小刀で俺を殺せると思うのか？」
すぐに気を取り直した王太子は、先程までの苛立った様子から急に楽しそうになり顔を綻ばせて聞くが、花はそれには答えず急いで出口へと向かった。
が――
「ああっ！！」
花は驚きと痛みに思わず呻いた。
緩く編んで背に垂らしていた髪を王太子に掴まれたのだ。
「逃がす訳ないだろう？」
言い聞かせるような王太子の声は楽しそうに弾んでいる。
掴まれた髪を強く引っ張られ後ろによろけそうになった花は、持っていたナイフを握り締め勢いよく振り向くと――自身の髪を切り落とした。
その行動に驚愕する王太子の隙を衝いて出口への扉に辿り着いた花だったが、なぜか扉を開ける事が出来ない。
「ク、ククククク……ハハハハハ！！」

異様な笑い声に、花は開かない扉を背にして振り向いた。
王太子は切り落とした花の髪を持ったまま、恍惚とも言える表情で楽しそうに笑っている。

――― 恐い！　この人、本当にやばい人だ……。

花は本気で王太子を恐いと思った。

「無駄だ。その扉は俺の魔力で閉じてあるからお前に開ける事はできない」

そんな花を見ながら楽しそうに、満足そうに王太子は告げると一歩前へと足を踏み出した。
花は再びナイフを力強く握り締めると、自身に向けて刃を当てる。

「近づかないで下さい！！」

花の見せた覚悟にも楽しそうな表情を崩さず王太子は足を止め、そして持ったままの花の髪の毛に口付けた。

「なるほど、皇帝がお前を気に入ったのも頷けるな。お前とは十分楽しめそうだ」

「意味がわかりません！！」

あまりの不気味さに花は悲鳴のような声を上げた。それに王太子は囁くように答える。

「そうか？　ならゆっくり教えてやる」

ゆっくりと近づく王太子に、花の体中の全神経が逆立って恐怖を訴える。
王太子に触れられるのは耐えられそうにない。

――――……ルーク！！

花はルークを想い浮かべ、そしてナイフを握り直して目を瞑った。

が、急にドサリと音がした。
花はその音に、恐る恐る目を開いて――

「へ？」

思わず花は間抜けな声を上げてしまった。
視界に入ったのは、床に倒れ伏した王太子。そしてその王太子のすぐそばに立つ碧い瞳を輝かせた男。
花と目が合った男はニカッと笑うと、声高らかに言葉を発した。

「ジャジャーン！！　お姫様を救いに騎士（ナイト）登場！！」

「……へ？」

花はもう一度間抜けな声を上げてしまったのだった。

60．灯台下暗し。

「ジャジャーン！！　お姫様を救いに騎士（ナイト）登場！！」

「……へ？」

突然現れた騎士の言葉に呆気に取られている花に構わず、当の騎士は嬉しそうに続けた。

「いやー、夢が叶ったな。お姫様の危機に颯爽と駆け付ける騎士って一回やって見たかったんだよなあ」

どうやら独り言らしい事に気付いて、このままそっとしておいた方がいいのかと花は悩んでいたが、騎士は花と再び目が合うと急に精悍な顔つきになった。

そして花の側まで来ると片膝を付いて騎士の正式な礼を取る。

「私の名前はザッカリー・マルケスと申します。どうぞザックとお呼びください。それではお姫様、ここからさっさと脱出致しましょう」

騎士はザックと名乗ると、またニカッと笑って花に右手を差し出した。

――――　どうしよう？　この人悪い人じゃなさそうだけど……信じていいのかな？

花は少し躊躇ったが、結局ザックの手に自身の手を委ねた。

例えこの人物を信じるべきではなかったとしても、このまま王太子の下に残るよりは千倍はマシなはずだと、ザックを信じる事にしたのだ。

己の差し出した手に、恐る恐るといった感じではあったが手を重ねてきた花に、ザックは眩しいほどの笑顔を向ける。それからサッと立ち上がり花の手を強く握り窓辺へと歩き出した。

「あの、どこへ？」

先程の王太子とのやり取りとよく似た状況ながら、花の気持ちは全然違った。

それは輝く碧い瞳を更に輝かせているザックの明るい雰囲気のお陰だろう。

「今、魔力を使う事は出来ないので、このまま窓から脱出します。申し訳ありませんが少しだけ目を閉じていて下さい」

――――いやいやいや、窓からって……確かここ五階でしたよ？……まさか窓から入って来たのかな？

ザックの言葉に花は疑問でいっぱいになったが、それでも信じると決めたのだからと目を閉じる。

と――

「ぐえっ！！」

いきなり荷物のようにザックの肩に担ぎ上げられた花は思わず潰れたカエルのような声を出してしまった。

恥ずかしさに顔が赤くなったが、それでも目を閉じたままでいると、気が付けば花は地に足を着けていた。

――――　ええ!?いつの間に……。

あまりにも一瞬の出来事に花は驚いたが、ザックが声を低めて話し始めたので結局、謎は解けないままになってしまった。

「ここから少しの間は別行動です。お姫様はこの生垣に紛れてあちらに見える使用人用の小さな通用門の所まで誰にも見つからないように隠れながら進んで下さい。私はそこでお待ちしております」

その言葉に花は不思議に思いながらも、黙って頷く。

不安ではあるが、己の運命をザックに委ねたのだから、最後まで従うべきだ。

そう決意した花はザックと別れ、時間は少しかかったもののそれでもなんとか通用門まで人目に付かず辿り着く事ができた。

たった一人の見張りはザックが昏倒させたらしい。

花は申し訳なく思いながらもザックの用意してくれたフード着きの外套を羽織り、門の外へ足を踏み出す。

こうして花は、この世界に来て初めて街へと出る事になったのだった。

門を出るとザックは先に歩き出し、その後ろを花は黙って着いて行った。

街中の入り組んだ裏通りを人目に付かないように進む。何度か同じ道をグルグルと回り、賑やかな通りにまで来るとザックは「失礼」と言って花の肩を抱いて歩き出す。

そこでやっと花は気が付いた。ここはどうやら花街らしい。

「ここまで来れば大丈夫です」

花を安心させるように言うザックの雰囲気は先程と少し違うようだった。

それが顔に出たのか、ザックは笑いながら説明を始める。

「今は魔力を解放しているので少し違って見えるかも知れません。お姫様の逃走に私が関わっている事が知れるとまずい事になりますから、先程までは一切の魔力を封じていたんです」

それから「いやあ、魔力を封じるのは肩が凝って」と一人ぼやくザックに、花はどうしてそこまでして助けてくれたのだろうと思いながらもそれには触れず、ずっと気になっていた別の事を口にした。

「あの、ザックさん、私はお姫様ではなくて花と言います。花と呼んで下さい」

その言葉にザックは少し驚いたようだったが、またニカッと笑う。

「ザックと呼び捨てで構いません。ハナ様」

ザックの言葉に少し不満に思いながらも花は妥協する事にした。

そしてまたザックは話を続ける。

「今、ハナ様の気配は私の魔力で覆っていますから追手に見つかる事はありません。まあ、追手がいればの話ですがね。なにせ思いっきり殴りましたから、恐らく王太子はまだ目覚めていないでしょう。あの変態は魔力は強いですが、体は全くできてないですからね。最高に素敵な機会を頂きありがとうございました」

なぜかお礼を言われてしまった花だったが、その後に続いた説明

で今までの道程に納得する。

「ここまでハナ様の気配を追っても一人で逃げて来られたと思うように細工はしております。気配がこの場で途切れてしまっても、これだけの男女がいれば紛れてしまってもおかしくはありませんし、ここに私の魔力の気配が存在していてもおかしくはないですから。しょっちゅう私は出入りしていますからね。ハッハッハ！！」

――――　いや……そこまでの説明は要らないし……。

楽しそうに笑うザックに内心で突っ込む花だった。

それから、賑やかな通りを少し入った路地裏にある宿屋らしき建物に着くとザックは裏口から入り、ある部屋の扉をコンッココンッと変わったノックして開いた。

ザックに促されて入室した花は、机に向かって座る赤毛の人物に驚き肩をビクリと揺らす。

しかし振り向いた顔を見てホッとするが――

「あれ？」

今度こそ見た事のある顔に思わず驚いて声を上げてしまった。

それに赤毛の人物は優しげに微笑んで口を開く。

「はじめまして、と言うより、お久しぶりと言った方がいいかな？あの時は自己紹介もせずに失礼してしまったけど。私はリカルド・セルショナード、セルショナード王国の第一王子だ」

王宮の図書館で出会った、花の好みド真ん中のイケメンがセルショナードの王子だった事に驚きつつ、花もフードを外して淑女の礼

をすると自己紹介をした。

「リカルド殿下、あの時は大変失礼致しました。私は花と申します。どうぞよろしくお願い致します」

花の挨拶に頷きながらもリコは、フードを外した時に肩に垂れた花の髪を見て顔を顰めた。

「すまない。愚弟が酷い事をしてしまったようだ」

「いえ……大丈夫です」

謝罪に応じた花にリコは少し悲しそうに微笑んだ。

――うわー！　なんか哀愁漂うイケメンってキュンと来るな……そっか、兄弟か……それであの凶悪変態を見た事があると思ったんだ。顔が何となく似てるから……いや、でも雰囲気があまりにも違いすぎる……。

今更ながら、あの王太子と目の前の王子が兄弟だった事に思い至る。

「ハナ、着いて早々悪いが、場所を移動するのでついて来てくれ。それと私の事はリコと呼べばいい」

――うお？　なんか、キュンとしてしまった……やっぱ好みのイケメンに名前を呼ばれたからかな？

花はリコに名前を呼ばれて胸がキュっと締め付けられたように感じてしまったが、気を取り直すと再びフードを被る。

それから今度はリコに腰を抱かれて花は宿屋を出る事になった。
花街を歩く為の偽装も兼ねてリコの魔力で花の気配を覆ってくれているらしい。
ザックはどうやら花街に残るらしく、その場で別れた。

「どこへ向かっているのか聞いてもいいですか？」

花の遠慮がちな質問にリコは少し楽しそうに笑って答える。

「離宮に戻る」

「え？」

その答えに驚く花に、リコは更に楽しそうに笑う。

「逃げた者がまさか再び戻って来るなんて普通は思わないだろ？」

その言葉に納得した花は、それでも少し不安に思いながらもリコと歩いた。
逃げる時とは違い真っ直ぐに歩を進めたせいか、あっという間に離宮へと辿り着く。
離宮はずいぶん騒がしくなっており、幾人かが門より急ぎ駆け出していったが、王子であるリコに門番が止める訳もなく、リコが連れている花にも不審の目を向ける者はいなかった。
そして、この離宮でリコが滞在しているらしい部屋へと簡単に入る事が出来たのだった。

部屋には一人の男が控えていた。

「上手くいったようですね、リコ様」

「ああ……ハナ、この男は私の侍従でトールドだ。トールド、ハナだ」

「ハナ様、トールドと申します」

リコの紹介に続いて頭を下げたトールドに、花も慌ててフードを下ろして挨拶をする。

「花と申します。よろしくお願いします」

「え？」

「え？」

トールドの驚いたような声に、花も釣られて驚くが、トールドはリコへと問いかけるように視線を向け、そして再び花を見て何故だかガッカリしたような表情になった。

――――あれ？　ひょっとして、ひょっとしなくても私にガッカリしてます？　してますよね？泣いてもいいですか？　いいですよね？　えーん！！

二人の無言のやり取りを敏感に察知してしまった花は心の中でとりあえず泣いた。

どうやらセルショナードで花は、マグノリア皇帝の寵妃、ユシュタルの御使いという噂が先行して、なにやら多大な期待をされてしまっているようだ。

それから、勝手に落ち込んで勝手に気を取り直したらしいトールドは無表情にも見える顔付きに戻ると、報告を始めた。

「ザックがどれほど力を込めたのか……王太子が気付いたのは先程のようで、それから俄かに王太子の近衛や魔術師達が騒がしくなりました。ハナ様の気配を追って早速、街への捜索が始まったようです。しかしガーディの指示で念のためにこの離宮内の捜索も行われています。兵達がこの部屋にもやって参りましたので、存分に探させてやりましたが……今のお帰りで宜しゅうございました。それと、ご指示の物は隣の部屋に用意しております」

「そうか……ご苦労だった」

トールドに応えると、リコは花へと向き直り微笑んだ。

「隣の部屋に着替えを用意してある。まだ侍女を付けることは出来ないが、湯浴みも出来るようにしてあるから、ゆっくりして着替えるといい」

リコの気遣いに花は感謝して甘える事にした。
それから浴室へ行き、外套を脱いだ自分の姿に愕然とする。

――――こわっ！！

薄汚れ、しわになってしまったドレスに、むき出しの腕は生垣を通った時のものか、あちこちに引っ掻き傷が出来ており、何より自分で切り落とした髪が酷かった。
短くなった髪を見ると悲しくなったが、なんとか気を取り直してゆっくりとお風呂に浸かる。
すると落ち込んだ気分も浮上してきた。

お風呂からあがると剃刀でバラバラだった髪をなんとか切り揃えた。

腰まであった髪は、肩までの長さになってしまったが、軽くなった頭に気分も軽くなるように気持ちを切り替える。

そうこうしているうちに結構な時間が経ってしまい居間に戻ると、すでにザックが戻っており報告をしているようだった。

姿を現した花にリコは一瞬、痛ましそうな表情を見せたが、すぐに優しく微笑むと椅子を勧めてくれる。

リコと向かい合うように座ると、トールドがお茶を淹れてくれ、男性陣の行き届いた気遣いに感謝しながらお茶を飲み、ザックの報告に耳を傾けた。

「やはりハナ様の気配が消えた花街を中心に捜索は行われています。かなり必死な様子で全ての建物、部屋をくまなく探しているようです。私もいきなり部屋に押し入られて参りましたよ。ハッハッハ！！」

――――……一人で部屋にいたんだよね……きっとそうだよね……うん、そうだ。

ザックの言葉になぜか自分を納得させていた花に、リコが口を開いた。

「ハナ、悪いが二，三日はこの部屋に隠れていて貰わなければならない」

「わかりました」

その言葉に素直に頷く花に、更にリコは続けた。

「それからハナに頼みがある」

「何でしょうか？」

ここまで世話になっておきながら頼みを断る事は出来ない。

そんな気持ちでいた花は、その内容に仰天した。

「その後、私の正妃になって欲しい」

「……はい？」

本日二人目の夫候補登場であった。

61．弱虫の強い決意。

「その後、私の正妃になって欲しい」

「……はい？」

リコの求婚？に花は一瞬呆気に取られ間抜けな顔をしてしまった。だがすぐに気を取り直し、少し俯いて考え込む。その様子を見ていたリコは心配そうに告げた。

「ハナ、今日は疲れただろうから詳しい話は明日にしよう」

その言葉に花は顔を上げるとリコの目を真っ直ぐに見て応えた。

「いえ、大丈夫です。ですから教えて下さい。この国で私は一体何の駒になっているんですか？」

花の発言にリコや他の二人も驚くが、花はそのままリコから視線を逸らさなかった。

『癒しの力』を持ち、マグノリア皇帝の寵妃である今の自分にどれ程の利用価値があるのか、花は正確に理解しているつもりだった。しかし、セルショナードの王太子がなぜ花をわざわざ正妃にまでしようとするのか、そしてそれに対抗するかのようになぜ第一王子のリコまでもが、ここまでの手間をかけて花を正妃にと望むのかがわからない。

リコは答えに詰まってしまった。

王太子のように無理強いをする気がないリコは、花の了承を得たかった。

しかし今、目の前にいるマグノリア皇帝の側室は『微笑むしか能のない、御しやすい娘』ではない。真実を話さなければ納得しないと告げる花の真っ直ぐな視線から、リコは思わず目を逸らしてしまう。

そこへ今まで黙っていたザックが口を開いた。

「ハナ様、殿下はあなたをお守りする為に申し出ておられるのですよ」

その言葉に、花より先にリコが反応する。

「ザック！　余計な事は言うな！！」

「しかし、殿下……」

叱るようなリコの言葉にザックは尻尾を垂れた大型犬の様にシュンとしてしまった。

「どういう事ですか？」

落ち込むザックを横目に見ながらも、花はリコに説明を求めた。

だがリコは顔を顰めたまま何も言わない。

暫く沈黙が続いた後、今度はトールドが口を開いた。

「あの王太子（へんたい）をはじめとする諸々からお守りするには、ハナ様に確固とした地位が必要なのです。そしてそれには第一王子であるリコ様のご正妃となって頂くしかありません」

トールドの説明に、リコの申し出の理由は理解できた。今の花にとってはとても有難い申し出なのだ。

だがしかし――

「なぜそこまでして私を助けるのですか？」

トールドが口を開いてから諦めたように、座ったまま俯いてしまったリコに向けて花は疑問をぶつける。

だがそれに答えたのもトールドだった。

「リコ様も私たちもこれ以上の戦は避けたいのです。ハナ様は今、ユシュタルの御使いとマグノリアの民達に崇敬されていると聞き及んでおります。そのハナ様を略奪してしまった以上、マグノリアの民は黙っていないでしょう。この先、ハナ様奪還の為にマグノリア軍がセルショナードへ侵攻を開始するのも時間の問題かと思われます。その時に我々は出来る限り穏便に、ハナ様に皇帝の下へとお戻りして頂きたいのです。賢帝と名高い今のマグノリア皇帝ならば、必ずリコ様のお気持ちを汲んで下さるはずです」

トールドの言葉に耳を傾けていた花だったが、そこへ突然リコの声が割り込んだ。

「違う。そうじゃない」

リコの否定の言葉にトールドもザックも驚くが、リコは膝に肘を置いた状態で伏せた頭を抱えて呟く。

「――やめた」

花は何が何だか分からず、ただ黙ってリコを見つめていた。リコ

は自身の燃えるように赤い、少し波打った髪を急にグシャグシャと掻きむしったかと思うと、力強く膝を打って声を上げた。

「よし！！」

顔を上げたリコは花と視線を合わせて微笑んだ。

その笑顔は先程までの優しさの中にもどこか物憂げな感情が浮かんでいた表情とは違い、王宮の図書館で初めて会った時のような花が心惹かれた爽快なものだった。

そして困った顔をしているザックとトールドに向かって言葉を投げる。

「カッコつけるのも、言い訳を重ねるのもやめだ」

そう言うとリコはザックとトールドに出て行くように告げた。

「しかし、リコ様……」

不満を漏らすトールドをザックは強引に連れ出す。

二人きりになった事に多少の不安を感じた花に、リコが申し訳なさそうに言った。

「あいつらは俺の事を買い被り過ぎている。俺はそんなに出来た奴じゃない、ただ臆病者の弱虫なだけだ」

リコは今までの王子様然とした優しげな態度から、少し乱暴とも言えるような態度になっていた。

一人称も変わってしまっている。それでも花にはこちらの方が自然に思えた。

「では正直に話そう。だがその前に一つだけ聞きたい。ハナが一体何者なのかを」

その質問に、今度は花が答えを詰まらせた。

ユシュタルの御使いとまで言われている今、なんと答えればいいのか。

『神様』の事はルークにさえ打ち明けていないので言うつもりはなく、悩んだ末に結局、今までの貴族達相手の説明に少し加えて答えた。

「たまたま……マグノリア王宮で陛下のお目にとまり、お側に召して頂いただけの幸運な娘に過ぎません。マグノリアの人たちが奇跡と言って下さる『力』も、私自身、最近知ったものです」

そう言って微笑む花にリコは一瞬眉を寄せたが、諦めたようにため息を吐く。

「まあ、いいだろう」

そう呟くと、真っ直ぐに花を見つめて話し始めた。

「今のセルショナードにとって、ユシュタルの御使いとまで言われているハナの『癒しの力』は必要ない。いくら魔力が満ちていても、戦意を消失してしまった兵など要らないからな……ハナは、邪魔な存在でしかないんだ」

小さく頷く花を見て、リコは少し困ったような表情で続けた。

「父上達はハナを殺す気なんだと思った。それが一番手っ取り早いからな」

それにまたハナは頷いた後、連れ去られてからずっと抱いていた疑問を口にした。

「それでは私がこの国に連れてこられたのは、マグノリアに圧力を掛ける為ですか？　でもそれなら王太子殿下の正妃にする必要はありませんよね？　私をこの国に置くことでマグノリアに屈辱を？」

「それもあるだろうが……一番は皇帝に揺さぶりを掛ける為だろう。皇帝がハナを大切に思っている事は俺でも分かるくらいだ。だからこその正妃だ。己の大切にしていた娘が他の男のものになったと知らされるのはどれ程の苦しみだろうか？　いくら皇帝とはいえ、他国の王子の正妃に手を出す事は出来ないものだ……例えそれが略奪された側室だとしても。あの王太子達が事を急いだのもその為だ。さっさと既成事実を作ってしまいたかったんだろう」

「そうですか……」

諦めているような、抑揚のない花の返事にリコは顔を顰める。

「ハナ、聡いのは良い事だが、物分かりが良すぎるのは問題がある。先程からハナはずっと我慢しているだろ？　もっと抵抗して自分に我が儘を言うべきだ」

その言葉に花は驚いた。

花が今まで微笑みの下に隠していたものを見抜かれてしまったようで動揺してしまう。そして限界にまで張りつめていたものが切れてしまい、思わず本音が漏れ出した。

「だったら……だったら今すぐに帰して下さい！！」

「……それはできない」

「なぜですか！？」

花は今までこんなに感情に任せて怒鳴った事などなかった。
連れ去られてからずっと堪えていた感情が溢れ出して止まらない。
ルークの許に今すぐ戻りたい。
もう一度、ルークの笑顔を見たい。
その為ならば例え誰かを傷つけても構わない。そんな凶暴な感情さえ生まれてしまう。
花は目の前に座り、矛盾した事を口にするリコを睨みつけた。
が、リコは泣きそうな顔をしていた。泣きたいのはこちらの方だと言うのに。

「俺には力がない。王族としての魔力もなく、父上を説得する力もない」

弱々しく呟くリコに花の怒りは急速に萎んでいく。
セルショナードの王太子が第二王子であることから、恐らく第一王子は魔力が弱いのだろうとマグノリアの誰もが噂していた。
力が弱い事をリコが苦にしていない訳がないのだ。
花には掛ける言葉もなく、その場には重たい沈黙が落ちた。
しかし暫くして顔を上げたリコは、何かをふっ切ったように力強い眼差しで真っ直ぐに花を見やると、宣言するように言葉を放った。

「それでも俺は、セルショナードの王子だ。この国を裏切る事は出来ない。ハナを国境まで連れて逃がす事は出来る。しかしそれは父上の知る事となるし、そうなれば俺は裏切り者として国を追われる事になるだろう。だが、今そうなる訳にはいかない。こんな俺でも

ザックやトールド、他にもたくさんの人間が慕ってついて来てくれている。俺はそんな奴らを見捨てる事も、このままこの国を捨てる事も出来ない」

リコは花から目を逸らし、小さく息を吐き出した。

「だからハナ一人を助ける為にも、こんな回りくどい事をしなければならないし、この国でハナを守り通すには俺の正妃と言う立場にするしかない。本当は隠し通せたら一番いいんだが……父上が本気を出せばすぐにでも見つかってしまうだろうから不可能なんだ」

リコの心情が吐露された言葉に花は何を言えばいいのかわからず黙り込む。

しかし続く沈黙が花を不安に陥れた。

このままリコの正妃となる事はルークを苦しめることになるのではないか。本当にルークの許に戻れるのか。

そんな考えに囚われ脅えてしまう。だがそれはリコに伝わったらしい。

「皇帝はハナを諦めないだろう。だからきっとハナには迎えが来る。それが少数の兵だろうが、大軍だろうがその時には必ず戻れるように手を打つ。だからそれまでは俺がハナを守る。父上にとってみれば俺だろうが、王太子(ばか)だろうがハナを正妃にするのはどちらでも構わないはずだから」

そしてリコは安心させるように微笑んだ。

「俺の勘は良く当たるから、ハナは安心して迎えを待てばいい」

「でも……」

それでは結局、リコ自身が犠牲になってしまうのではないか。裏切り者の誹(そし)りを免れないのではないか。

花の躊躇いに、リコはやはり微笑んだまま応える。

「これは俺自身の為だ。俺はこの国の民を守りたい。その為にはハナに迎えが来るまでに今度こそ父上を説得してみせる。奴らは……魔術師達は皇帝を弑してもユシュタールは大丈夫だと言う。父上はそれを信じているが、そんなもの嘘だ。それも俺の勘に過ぎないがな……」

リコの言葉に花は蒼白になったが、すぐに気を取り直すと覚悟を決めた。セルショナード王は、魔術師達はルークを殺すつもりなのだ。

でもそんな事は絶対にさせない。

国境を越えて逃げる事が出来ないと言うなら、リコの言葉を信じて迎えを待とう。

それまで、私は私なりにルークの為に戦ってみせる。

「……わかりました。リコを信じて迎えが来るまでの間、リコの正妃を演じてみせます。でも私は……マグノリア皇帝の側室です。それはこの先ずっと変わる事はありません」

花の激しいまでの決意を込めた眼差しにリコは射貫かれた。

だが小さく揺らいだ己の感情を抑え付け、花の言葉にリコは大きく頷いたのだった。

62．おまじないは迷信ですか。

「娘はまだ見つからないのか！？」

花が逃走してから一夜が明けたが、依然花の行方が掴めない事に王太子は苛立ち、配下の者たちを怒鳴り散らしていた。

その怒りと共に発散される魔力に圧され配下達は言葉を発する事も出来ないようだったが、そこへガーディが口を開いた。

「お前たちに聞きたい事がある。昨夜、花街辺りでリカルド殿下とその近衛の気配を感じたが、何か知っているか？」

その問いに一人の兵が気力を振り絞る様にして答えた。

「王子殿下については分かりかねますが、殿下の近衛に関しては、昨夜確かに花街にて姿を確認しております」

「一人だったか？」

「いえ――」

「兄上がここに居るのか？」

二人の問答に割り込む形で王太子が問いを投げかける。

「はい、リカルド殿下は三日程前よりこの離宮にご滞在なされておられるようです」

質問を邪魔された事を意にも介さない様子でガーディは答えた。

それに王太子は少し考え込むと配下の一人にリコを呼ぶように申し付ける。
そして程なくしてリコとザックが王太子の部屋へ姿を現した。

「マックス、どうかしたのか？」

王太子を愛称で呼ぶリコに一瞬、王太子は忌々しそうな顔を見せたが、すぐに笑顔に戻ると応じた。

「兄上がこちらにおられると聞いたので、ご挨拶をしようと思いまして」

「その為にわざわざ私を呼びつけたのか？」

顔を顰めるリコに、王太子は優越に顔を輝かせる。

「いえ、もちろんそれだけではありません。兄上とそこの近衛に伺いたい事があるのです」

「……なんだ？」

訝しげに問うリコに、王太子は嫌な笑みを浮かべる。

「お恥ずかしい話ですが、実は昨夜マグノリアへの切り札とする娘を逃してしまい、残念ながら花街で見失ってしまったのです。兄上とその近衛はセルショナード中の花街にお詳しいようですから、当然このクジサスの花街にもお詳しいでしょう。それで何かご存知ではないかと思いまして」

その嫌味な口調の質問にもリコは顔色を変えず答えた。

「悪いが、私は知らないな……ザック、お前は何か知っているか？」

「申し訳ございません。私も昨晩の事については……他の事に夢中で」

ザックもリコの問いに仰々しい程に神妙な顔つきで答えた。

が、すぐにニカッと笑うと続ける。

「いやぁ、それで昨晩は花街全体が騒がしかったんですね？　私なんて最中に押し入られて驚きましたよ。まあ、押し入った奴も私のものを見て驚いていましたがね。ハッハッハ！！」

誰も聞いていない事までザックは語り、豪快に笑った。それから王太子の配下の一人の兵に目を止めて更に続けた。

「あっ、お前昨日の奴じゃん！！　まあ、あれだ……俺のと比べて落ち込むんじゃないぞ！　元気出せよな！！」

その言葉に皆の視線が集まった兵は、顔を真っ赤にし口をパクパクさせている。

「ザック……お前はもう黙っておけ」

リコの呆れたような言葉にザックは慇懃に返事をした。

「はっ！　かしこまりました！！」

二人のやり取りにやっと気を取り直したのか王太子が一度咳払いをして、再び嫌な笑顔を浮かべて口を開いた。

「さすが兄上はずいぶんお上品な部下をお持ちだ。その優秀そうな部下共々、兄上に頼みがあります。どうか花街に慣れていらっしゃるお二人に、その娘の捜索を手伝って頂きたい。今からすぐにでも」

頼みと言いながらもその有無を言わせない言葉に、リコはため息を吐きながらも了承する。

「わかった。ではその娘の詳しい特徴を……」

そうして二人は王太子の部屋を後にしたが、部屋を出てすぐにガーディに呼び止められた。

「リカルド殿下」

「……なんだ？　ガーディ」

立ち止まって振り向いたリコにガーディは深々と頭を下げる。

「お止めして申し訳ございません。しかし、一つお伺いしたい事がございまして……」

「申してみよ」

「ありがとうございます。して、殿下は何用がおありになってこのクジサスにご滞在なされておられるのでしょうか？」

「……特に理由はないが？　ただいつもの気まぐれだ。私たちがいる事でお前達の邪魔をしているなら悪いが許せ」

「いえ、邪魔などと、とんでもございません。後から参った私たちの方が大変失礼な事を……申し訳ございません」

そう言ってガーディは再び深々と頭を下げると、二人が遠ざかるまで見送った。

その後、ガーディは王太子の部屋に戻ると、未だ苛立ちの治まらない様子の王太子に請願する。

「殿下、ハナ様が自ら切り落とされた御髪を私にお預け下さい」

「なぜだ？」

王太子はガーディの求めに訝しげに問い返す。

「王のご指示により、ハナ様の御髪のみマグノリア皇帝へお返しする事になりました。すぐにでもその為の使者が王都より参ります」

「……なるほどな。どうせその様な小賢しい事を考えたのはクラウスだろう？　しかし、お前達はいったいどうやって連絡を取っているのだ？　王都までここから馬で二日はかかると言うのに？」

その王太子の問いにガーディはただ微笑むだけだった。

「ふん……まあいい」

そう言って王太子は寝室へと去って行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「それにしても殿下はよく、このクジサスにあいつらが来るとお判りになりましたね」

花街の路地裏で適当な捜索をしながらザックがリコに問いかけた。

「ああ、それは……ほとんどいつもの勘だ。いや、どちらかと言うと予測か？　あいつらが彼女を殺すつもりだったなら俺にはどうしようもなかったが……なぜかそれはないと思えて、ならば略奪してくるだろうと。彼女を連れ去った後、いきなり王都に連れ行くのは流石に無理だろうから、とすれば国境近くの街に一旦立ち寄るだろうと思っただけだ。そして寄るならこのクジサスだと。ここは三方を不可侵の森に囲まれている。奴らはどうやら森を好んでいるように思えるからな」

そう言うとリコは、店の裏口に置いてある大きなバケツの蓋を開けているザックを窘める。

「ザック、いくらなんでもそこには居ないだろう？」

その言葉にザックはリコを見て応えた。

「そうですか？　でも殿下、そこにも居ないと思いますよ？　というか、絶対に無理です」

「そうか？」

どこかの家のポストを開けていたリコは残念そうに答える。

「そうです。それと、いくら殿下でもよそ様の家のポストは勝手に

開けてはいけません」

「……そうか」

そんなやり取りを繰り返していた二人だったが、ふとザックが心配そうに呟いた。

「あの二人は大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だろう。トールドは他人（ひと）の裏をかく事には長けているし、彼女も……驚くほど聡いしな」

そう返すリコにザックは心配そうにする。

「殿下、彼女に惚れたらダメですよ」

ザックの言葉にリコは苦笑した。

「いや、それは……俺の好みはもっとこう……」

「ああ、ですよね！　正直なんていうか……皇帝の趣味って変わっていますよね？」

「……ああ」

などと、二人が失礼な事を話し合っていた頃、花はと言うと……。

「へっぶち！！」

変なクシャミをしていた。

――――　あー思いっきりクシャミしたい。でも大きい声出せないし……。

数部屋ある客間とはいえ、やはり隠れている身なので、出来るだけ音も立てないようにリコの寝室で本を読んで過ごしていた。

そして念の為に侍女の衣装を身に付けている。更に念には念を入れて、掃除道具なども傍に置いてあったりするのだ。

今は、隣の部屋で書類に目を通しているトールドの魔力に覆われているらしい。

と、そこへ突然その隣の部屋から大きな物音がした。

花は慌てて掃除道具を持ってトイレへと駆け込んだが、それから特に人の気配もなく、恐る恐るトイレから寝室へと戻った。

そして居間への扉に耳を付けて様子を窺う。

するとトールドの呻くような声が聞こえ心配になったのだが、決して声を掛けるまでは開けてはいけないと言われていた為、花は躊躇った。

しかし結局、何度か逡巡した後にそっと扉を開けて覗き見る。

トールドは一人、左腕を抑えて蹲っていた。

「大丈夫ですか？」

慌てて花は駆け寄り声を掛けるが、トールドは何とか「大丈夫です」と答えて花に微笑みかける。

だがその顔は青ざめ、脂汗が浮いていてとてもではないが「大丈夫」には見えない。トールドの抑えている左腕を見ようと花が手を伸ばすが、トールドに抵抗された。

「少し捻っただけですから」

そんな言葉が信じられる訳もなく、花は無理矢理にトールドの衣服の左袖を捲り上げた。

そして絶句する。

左の上腕部には酷い裂傷が走り、そこが黒く膿んでいた。

余りに酷い傷に今まで普通に過ごしていた事が不思議であるほどだ。

「ハナ様、大丈夫ですから」

「でも……」

「うっかり痛み止めの魔法を切らしてしまっただけですから」

そう言ってトールドは苦笑するが、すぐに真剣な顔で花を見つめて懇願するように言った。

「ハナ様、この事は絶対にリコ様におっしゃらないで下さい」

「でも、治癒魔法を……」

リコにそれが出来るのかどうかは分からないが、手配はしてくれるはずだ。だが、その言葉にトールドは力なく首を振った。

「私も治癒魔法は使えますが、この傷には効きません。恐らく闇の魔力による傷でしょう。悪化を抑え、痛みを鎮めるだけで精一杯なのです」

その傷はサラスティナ丘で魔術師達を追う時に受けたものだった。
もしその事をリコが知れば、リコが己自身を酷く責め、苦しむのは目に見えている。
だから絶対に知られてはならないのだ。
顔を顰めて説明するトールドは本当に辛そうで、思わず花は傷に触れないように、優しく腕をさすりながら囁いた。

「いたいの、いたいのとんでいけ。いたいの、いたいのとんでいけ」

昔、ナニー（乳母）の美津に転んで怪我をした時によくしてもらったおまじないだった。
それを旋律に乗せて唱えるのだ。

「いたいの、いたいのとんでいけ♪　とおくのおやまにとんでいけ♪」

するとトールドが驚きの声を上げた。

「え？」

「え？」

それに花もつられて驚きの声を上げたが、トールドの傷を見て本当に驚く。
黒く膿んだ傷が淡い光に包まれていた。
目を凝らして良く見れば、淡い光が一つ一つシャボン玉のように丸くなって黒い靄のような物を包んでは消えていく。
その度に、傷が治っていくのだ。
それからすっかり元通りになったらしい左腕を、トールドはただ呆気に取られたように見ていた。

花も驚きつつ、それでも心配を口にする。

「痛くないですか？」

その問いにトールドは「はい」と小さく返事をした。

花はその返事に嬉しそうに微笑む。

そんな花を眩しそうに見つめるトールドの瞳は、何か読みとれない感情を宿して揺れていたのだった。

63．旅立ちの時。

次の日、リコの寝台で一人目覚めた花は他に誰かが寝た形跡がない事に安心しつつ、申し訳ない気持ちになっていた。
花の気配を隠すためにはある程度近くにいなければならないらしいが、他の部屋では急に捜索の手が入るかも知れず、リコの寝室で休むことになったのだ。
だがやはり寝台で眠る気にはなれず、連れ去られて最初の夜は長椅子で掛け布を一枚拝借して包まって眠った。
しかし、朝になり目が覚めるといつの間にか寝台に移されており驚いたのだが、昨夜も同じ事を繰り返したようだ。
一度眠るとなかなか目覚めない花をどうやらリコは寝台に移してくれているらしいのだが、ではリコはどこで眠っているのだろうかと心配にもなる。

それから暫くして身支度を整え終えた頃に、寝室の扉がノックされた。
部屋に入って来たリコは花が居心地が悪くなるほどジッと見ていたかと思うと、ふと笑みをこぼす。

「面白いな、ハナは」

「ぬは？」

突然のリコの失礼発言にショックを受けた花だったが、それをリコはクスクスと笑う。

「いや、すまん。悪い意味じゃなくて……マグノリア王宮で会った

時も思ったが、ハナは本当に魔力が全くないんだな」

その言葉に花はルークを思い出して切なくなったが、続くリコの話にその想いに無理に蓋をした。

「ハナがここまであの王太子達に見つからないのはその為もある。全く魔力のないハナは他の者たちの魔力の気配に染まりやすいみたいだな。一昨日の夜には皇帝の気配にすっかり染まっていたが……今はもう、ほとんどないな。俺と……トールドの気配が濃い」

それを聞いて花は思わず服の袖をクンクンと嗅いでしまった。それを見たリコが吹き出す。

「いや、においはしないって！」

「……条件反射です」

笑うリコを顔を赤くしながら睨みつけたが、そのリコがふと笑いを止め再び花をジッと見つめるので花は思わず身構えた。

「な、なんですか？」

「ハナはこれから俺の正妃を演じる訳だが……どこまで演じきれる？」

そう言って、真剣な顔で近づいて来るリコに、花は後退る。

壁まで追い詰められた花に、リコは少し困ったような顔をして花の顎に手を掛けた。

「これくらいはして欲しい」

「え！？」

花の言葉は続かなかった。リコに唇を奪われたのだ。

だが花は……。

「っ！？」

リコが驚いて唇を離す。

「噛むなよ！！」

「条件反射です！！……舌まで入れる事ないじゃないですか！？」

「必要事項だ！！」

「どこがですか！？　変態！！」

「な！？……あのなぁ、本物の変態を知っているだろうが！！」

「……それも、そうですね」

「……」

「……」

二人の奇妙な応酬は微妙な空気に包まれて終わった。

それからリコが大きく息を吐き出して忠告する。

「ハナ、お前はあの王太子（へんたい）に随分気に入られたらしい。だから本当

にこれは必要な事だ。その理由はそのうち分かる……分からない方が幸せだと思うが。とにかくあれには十分に気を付けろ」

リコは厳しい顔つきでそう言うと、すぐに安心させるように微笑んで居間へと戻った。

花もそれに続く。

と――

「もう睦み事は終わりですか？」

トールドが残念そうに言う。

「睦み事ではなく、揉め事です！！」

慌てて否定する花に、ザックは大笑いする。

花は朝からすっかり疲れてしまっていた。

どうもこの三人は最初の印象と違うようで、調子が狂ってしまう。

いや、ザックは変わらないが。

それから四人で朝食をとっていたが、リコが再び真剣な顔で話を始めた。

「ハナ、明日にはここを発とうと思う。だが、出立時にハナがいると目立つから先にクジサスの街で待っていて欲しい。だから今夜はザックと一晩街で過ごしてもらうことになる」

それを聞いた花は、チラリとザックを窺う。するとザックは花の視線に気付いてニカッと笑った。

「ご心配はいりません！！　私の好みはもっとこう……」

言葉と共に動くザックの手つきに、花は心の中で効果音を付けて確認した。

――― ボッキュ、ボーン。ですね？　はいはい。

＊＊＊

相変わらず花の捜索は行われていたが、今はクジサスの街から外へと範囲が広がっているらしい。

そうして花は一晩、クジサスの宿屋（連れ込み宿？）で過ごすことになった。

そこで分かった事だが、リコ達はこの街でかなり人気があるらしく、協力者らしき人たちが離宮から街中から何人もいたのだ。

翌日の早朝、一旦ザックは離宮へと戻り、その間を信頼できる協力者という人が護衛として側に付いていてくれたのだが、その時に色々とリコ達の話を聞いた。

王子としては魔力の弱いリコはセルショナード王城では冷遇され、リコは成人してからずっとセルショナード国内を視察と称して転々としているらしい。

しかし、気取らない性格で親しみやすく国民からの人気は絶大で、王太子はそれを良く思っていないらしいなどなど。

その後、旅芸人らしき集団に混じってリコ達と街の外れで合流した花は、セルショナードの王都、コステイに向けて旅立った。

花が連れ去られてから五日目の朝の事だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ジャスティン、どっからセルショナードへ入る気だ？」

ルークの執務室を出て、王宮の厩舎へと向かう途中でガッシュがジャスティンに尋ねた。

「カオシエの先からです。恐らくハナ様はすでにセルショナード王城へと連れ去られているでしょう。ですから王都コステイに向かいます」

帝都サイノスからセルショナードの王都コステイまで直線で繋ぐ線上近くに位置する街カオシエ。しかし、それは『近く』だ。

「真っ直ぐにコステイに向かうなら、シリムからの方がいいんじゃないか？」

ガッシュの疑問にジャスティンは歩を弛めずに進みながら答えた。

「セルショナードへ結界を破って侵入した時点でセルショナードの兵達に追われることになるでしょう。出来る限り先を急ぎたいので、それらを一々相手にするのは避けたいのです。ですから国境を越えてすぐにある不可侵の森に入り追手を撒きます」

その言葉にコーディが声を上げた。

「不可侵の森!?」

「なんだコ―ディ、怖気づいたのか？　だったら一緒に行くのは止めとけ！」

ガッシュは意地悪そうな笑いと共に、コ―ディを窘めた。

「いえ！　大丈夫です!!　ちょっと驚いただけですから!!」

気張って言うコ―ディに、ジャスティンは苦笑する。

「安心しなさい、コ―ディ。この魔剣がある限りは他の魔物は寄って来ません。森に入っても魔物相手に時間を取られていたらどうしようもないでしょう?」

その言葉にコ―ディがホッとした頃、厩舎へと通じる広場に出たのだが、五人はそこで足を止めた。

「お前ら……」

ガッシュが思わずといった感じで呟く。

そこには五頭の馬を連れたランディやアレックスなどの近衛達が待っていた。

そしてその馬たちはそれぞれが限界まで近衛達の魔力で満たされていたのだ。

「ジャスティン様、我々にはこれくらいしか出来ませんが、どうかハナ様をお連れになってご無事にマグノリアに……陛下の許にお戻り下さい!!」

「――もちろんです」

近衛達の真摯な眼差しを受けてジャスティンと花の護衛達、そしてガッシュも大きく頷く。そこへ近衛達の間からセレナとエレーンが姿を現した。

「ジャスティン様……お荷物になるのはわかっているんですが、どうかこれをハナ様にお届け下さい」

そう言ってセレナが差し出したのはケースに入ったシューラだった。運びやすいように包まれてある。

「ハナ様はこのシューラがやっと馴染んできたと、とてもお喜びになられていたんです。ですから……」

エレーンの言葉にジャスティンは頷き、セレナからシューラを受け取ると、それをコーディが進み出て受け取り背負う。

その後、皆に見送られ王宮から一路カオシエへと急ぎ旅立つ五人の姿を、ルークとレナードは執務室の窓から無言で見守っていた。

それは花が連れ去られてから五日目の夕刻の事であった。

番外編。ルークの煩悩。（前書き）

本編３６話後辺りの話です。

番外編。ルークの煩悩。

「ハナ」

「ルーク！？」

夜も更けた頃、寝室の長椅子で本を読んでいた花は突然現れたルークに驚いた。

突然現れた事に驚いたのではなく、ルークの姿に驚いたのだ。

いつもは寛(くつろ)いだ恰好でも、すべてが整えられているようであるのに、今のルークの髪は濡れて少し乱れている。

「ルーク、髪が濡れてるじゃないですか！」

風邪はひかないというが、やはり花は心配になる。

しかしルークは意に介さない様子で「ああ」と言うと、あっという間に魔法で乾かしてしまった。

瞬間、綺麗なプラチナブロンドがサラリと揺れる。

その様子を魅入られたように見ていた花にルークが尋ねた。

「ハナは今日が誕生日なのか？」

その言葉に一瞬キョトンとした花だったが、すぐに思い当たり困ったような顔をした。

「それは……前の世界からの日数で数えると、今日が誕生日になるのかも知れないんですけど……」

花の誕生日は初夏なのだが、今ユシュタールでは晩秋である。
しかも一年が四百二十日なのだから、正直な所よくわからない。
ちなみにこの世界では、『太陰暦』とでも言うか、月の朔望が一巡する二十日間が一か月で二十一月まであり、太陽が世界の周りを回っているのだ。

それにしても先ほど、夕食の時にポロっと「今日、誕生日かも…」と洩らしただけなのだが、それがどうやらルークに伝わったらしい。
ルークは花の隣に座ると、花の手を取って手首の内側に口付けた。

「ルーク？」

それから、ルークは戸惑う花の唇に軽くキスをして微笑んだ。

「ハナ、誕生日おめでとう」

「……ありがとう、ございます」

真っ赤な顔のまま、花はやっとの思いでお礼を口にする。
それから花は微笑もうとしたのだが、よくわからない感情が押し寄せてきて上手く笑えなかった。
ルークのたった一言が嬉しくて、花の瞳は涙で滲む。
すると、ルークは抱えるように花を引き寄せて自分の膝の上に座らせた。

「ルーク！？」

花は驚きと恥ずかしさに声を上げる。
しかしルークはそんな花に構わず耳元で囁くように訊いた。

「何が欲しい？」

「え？」

「ハナの欲しいものを教えてくれ」

「……ほしいもの？」

今まで誰かに欲しいものなど訊かれた事のなかった花は一瞬困惑したが、それでも答えはすぐに出てきた。

ずっと『真実の愛』というものが欲しかった。

でももう、そんなものはいらない。

花はルークにそっと抱きついて答えた。

「何もいらないです。ただずっとルークの傍にいたいです」

花の答えに今度はルークが困惑したようだ。

だけど、花には本当にそれだけでよかった。

ルークが花のいる世界に存在していてくれるだけで。

今までの二十一年間、ただ流されて生きているだけだったけれど、これからはルークの傍で生きていたい。

心から大切に想える人がいる。

それがこんなに幸せな事だとは知らなかった。

ギュッと強くルークに抱きつくと、ルークは花の髪を撫でるように優しく梳いて、頬にキスをした。

そのままルークの唇は頬からうなじへとゆっくりすべっていく。

が――

「ハナ……その呪文はなんだ？」

ルークは花のうなじに唇を押しあてたまま聞いた。

「……九九です」

「クク？」

「はい……私の国では平常心を保つ為に唱えるんです」

「……なるほど」

納得の言葉を納得しかねる顔で呟いたルークは、そのまま花を抱き上げた。

「ぬお！？」

驚いた花は慌ててルークに再びギュッとしがみつく。

ルークは小さく笑いながら、花を寝台へとおろした。

「もう時間も遅い」

そう言うとルークは自分も寝台に横になると再び花を抱きしめる。

つかの間の沈黙の後、ルークは小さく息を吐き出すと口を開いた。

「ハナ……今度は何を数えている？」

「羊です」

「何のために？」

「羊を百八匹数えると煩悩を払えるんです……ああ！　何匹まで数えたかわからなくなったじゃないですか……」

「……すまん」

思わずルークは謝罪の言葉を口にした。

それから、やはり花の世界には変わった事ばかりだな、などと思っていると花の小さな寝息が聞こえてくる。

――――　まだ、二十匹も数えていないだろ……。

ルークは苦笑し、寝入った花を抱きしめ直して優しくキスをすると目を閉じた。

それから、羊を数え始めたのだった。

次の日、ルークは花に羊のぬいぐるみを贈った。

「ただの迷信だな」と呟きながら。

番外編。ルークの煩悩。（後書き）

読んで下さり、ありがとうございます。

※　もちろん羊を１０８匹数えても煩悩は追い払えません（笑）

64．五十歩百歩。

「僕、ジャスティン様が元近衛騎士だとは知っていましたが、魔剣までお持ちだったとは知りませんでした」

通常では信じられない程の早さで駆ける馬の上で、コーディが呟くように言った。

それにカイルが応える。

「私も噂でしか聞いた事はなかったがな……ジョシュ、お前は？」

「私が騎士になった頃には、ジャスティン様はもうすでに騎士を引退なされて陛下の侍従として働いておられたから、詳しくは知らないが……魔剣を封印なされた時に気になって先輩騎士に尋ねた事はある」

そこで言葉を切ったジョシュにコーディが急かすように訊いた。

「何て答えが？」

「……皆が目を逸らし、話を逸らし、答えてくれなかったな」

「……」

ジョシュの返答に二人は暫く黙り込んだが、コーディはどうしても気になるようで、今度は最後尾にいるガッシュに尋ねた。

「ガッシュ大将、大将はジャスティン様の魔剣の事はご存知ですよ

ね？」

「ん？　ジャスティンの魔剣か？　まあ、あれだ……『百聞は一見に如かず』だ。うん。――ただ一つだけ言っておく。ジャスティンが剣を抜いたら絶対に、後ろに下がっていろ。できたら百歩くらいは……無理なら五十歩でもいい。わかったな、絶対だぞ！！」

何事にも豪快で屈託のない様子のガッシュが珍しく言葉を濁した事に、三人は益々興味を引かれ、先を行くジャスティンの背を無言で見つめたのだった。

夕刻に王宮を出てから一晩馬を走らせ、カオシエへ到着したのは朝靄が陽の光に掻き消えていく頃だった。

街の警備兵達の詰め所で食事をとりつつ、国境付近の情報を得る。セルショナード王の強大な魔力で結界が張られた国境だが、やはり警備にも怠りはないようで定期的に兵達が巡回しているらしい。恐らく国境を越えた時点で兵達に囲まれるのは避けられないようだが、当然それは予想の範囲内なので、とりわけ動じる事もなく十分に休憩を取った。

その後、五人は再び馬を走らせ昼過ぎには国境へと辿り着く事ができた。

「おお、おお、これはまたすごいな……」

セルショナード王の結界を前に、ガッシュは嘆声をもらした。

「王の魔力が強大だとは聞いていましたが、これは……この力を全国境へと張り巡らせる程の力を持っているのなら、私達が太刀打ち

できる相手ではないですね」

ジャスティンの言葉にカイル達三人は息を呑む。

「諦めるのか？」

「まさか」

ガッシュの問いにあっさりと答えたジャスティンの顔は、これから立ち向かう困難を楽しみにしているかのように笑んでいた。

その笑みを久しぶりに見たガッシュもまた嬉しそうに笑った。

「よし！！　んじゃ、いっちょやるか！！　あ……お前らは万が一セルショナードの奴らが攻めて来た時の為に備えとけよ！！」

ガッシュは張り切って気合を入れると共に、国境警備の兵達に声を掛けた。

それからガッシュは集中を始め、とある攻撃魔法の詠唱を始める。

普段、詠唱を必要としないガッシュだが、詠唱によって渾身の魔力を込め、薄い膜が張ってあるような結界の一点に集中して放った。

それは結界に静かに吸い込まれていったかと思われたが……。

刹那――閃光が走る。

皆が思わず目を瞑ったと同時に、凄まじいほどの爆音と爆風が辺りに広がった。

まだ耳鳴りがする中、ガッシュの大声が響く。

「ちょっとやり過ぎたか！？　まあ、いいか！！　ほら、お前ら今のうちだ！！」

その声に気を取り直した三人と、何処までも冷静なジャスティンが急ぎ結界の綻んだ穴に向かって進む。穴はすぐに修復し閉じようとするが、それをガッシュが抑える。

「ジャスティン！！」

ガッシュの切迫した声に、ジャスティンは頷いて笑って見せた。

「わかっています」

攻撃魔法の衝撃がセルショナード側にも伝わったらしく、続々と兵達が駆けつけて来る気配がしていた。

「必ずハナ様をお連れして戻って来い！！」

ガッシュのその声を最後に結界は再び閉じられ、セルショナードの地に立った四人はあっという間に孤立したのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「殿下！」

「わかっている」

ザックの緊張した声にリコは大きく頷いた。

クジサスを立った翌日、旅芸人たちと行動を共にしていたリコたちは昼食のために王都コステイへ続く街道を少し逸れた草原で休憩していたのだが、たった今、国境の結界が一瞬撓(たわ)み、何者かがこのセルショナードへ侵入してきた事が伝わってきたのだ。

それはある程度力のある者ならわかった事だろう。

しかし、それが何人でどこから侵入したのか等の詳細はリコたちには判らない。

恐らくそれが判るのは王と王太子、そしてクラウスやガーディくらいだろう。

だが、侵入者の目的が花の奪還である事は明白であり、花を穏便にマグノリアに戻すためにはすぐにでも侵入者のもとへと行くべきだった。

三人は焚き火を囲んで座りゆっくりとお茶を飲んでいた所だった。

花は少し離れた場所で旅芸人の子ども達と遊んでいる。

「リコ様、どうされますか？」

「待ってくれ」

そう応えると、リコは頭を抱えるようにして俯き黙り込んでしまった。

暫くその場を沈黙が支配する。

次にリコが口を開いた時、その声は決意に満ちていた。

「このままコステイへ向かう」

「殿下？」

ザックは少し戸惑ったような声を上げる。

「恐らく侵入者は少人数だ。どこから侵入したのかがわからない以上、俺たちがどこへ向かえば出会えるのかもわからない。情報を集めるには時間が少なすぎる。父上がハナの捜索に力を入れるのも時間の問題だ。このまま進めば遅くとも明後日にはコステイに着くから、それまでに体裁を整えて花の安全を確保する。侵入者も必ずコステイに来るだろう。まあ、全て俺の勘に過ぎないがな」

「いえ、殿下の勘ならば間違いありません」

リコの言説にザックは先程とは違い、確信に満ちた声で応えた。

それに続いてトールドが確認する。

「この事はハナ様にお伝えになられますか？」

「……いや、暫くは伏せておいた方がいいだろう。」

そう答えると、リコは立ち上がって子ども達と一緒にいる花の方へと向かった。

＊＊＊

そろそろ出発の時間らしく親の呼ぶ声に、子どもたちは走って戻りだしたが、三歳くらいの男の子がみんなを追って駆け出し、派手に転んでしまった。

そのまま男の子は泣き出してしまい、慌てて花が駆け寄り抱き起こす。

しかし、盛大に擦りむいて血が滲む足を見た男の子は更に大声で泣き出した。

花はその場に座り込み、男の子を膝に乗せて優しく声をかける。

「あれれ、擦りむいちゃったね。でも、おまじないをかけると痛いの治るかな？」

「お……おまじ、ない？」

男の子はしゃくり上げながらも、花の言葉に反応する。

「そう、おまじない。みてて……いたいの、いたいのとんでいけ～♪　あっちのおやまにとんでいけ～♪」

優しく男の子の足を撫でながら花がゆっくりおまじないを唱えると、以前と同じように男の子の足の傷を淡い光が包んだ。

それに男の子は驚いたように泣き止むと、ポカンと口を開ける。

それから少し泥は付いたままだが、傷がふさがった足を見て不思議そうな顔をした。

「……これまほうなの？」

「んー……おまじないかな？」

「おま、じない？？……わかんないや。でもありがと！」

そう言って男の子は花にキスをした。

花は一瞬驚いたが、すぐにクスクスと楽しそうに笑いだす。

その様子を少し離れた所から見ていたリコは、花の『癒しの力』を目の当たりにして驚愕していた。

――――　今のは治癒魔法か？　しかし、あんな詠唱は聞いたこともないし、あのように光るのも見た事がない……それに……。

男の子と笑っている花の笑顔に、リコの胸はチクリと痛んだ。
花はいつも微笑んでいる。
それにこの五日間、何度か声を出して笑っていた。
しかし今、目にしている花の笑顔を見ると、それがただのまやかしに過ぎなかったのだと思い知らされる。
心から楽しそうに笑う花の笑顔が眩しくてリコは思わず目を細めた。
だが、すぐに気を取り直すと花の方へと歩み始める。

「ハナ」

リコの呼びかけに、花はハッとして顔を上げたが、リコを見ると一瞬泣きそうな顔になり、それからすぐにいつもの柔和な笑顔に戻った。

――――ああ、やはり俺たちは……俺はまだ信用されていないんだな。

その事実がリコを苦しめる。
リコ自身、ハナに話していない事など侵入者の件を含めてたくさんあるというのに。
あまりに身勝手な己に思わず自嘲する。
そんな思いを隠して、男の子を抱き上げると花に手を差し出した。

「もう、出発するぞ」

一瞬、花が躊躇ったのをリコは見逃さなかったが、すぐにそれを覆い隠してリコの手を取り立ち上がった花はやはり微笑んでいた。
なぜだかリコは無性に腹が立ち、花がさり気なく離そうとした手

を強く握り、戸惑う花を無視してみんなの元へと戻って行ったのだった。

65．百聞は一見に如かず。

「陛下、シューラ奏者が意識を取り戻しました」

王宮を出て行ったジャスティンたちを見送った後も暫く窓の外を黙って眺めていたルークに、ノックと共に入室してきたディアンが報告する。

花が連れ去られた後に応接の間で倒れているシューラ奏者が発見されたのだが、ルークの力の暴走により、魔力の弱いシューラ奏者は重篤な状態に陥っていたのだ。

「それで？」

冷めた声で先を促すルークに、ディアンは一度レナードに視線を向けてから続けた。

その視線にレナードは己の剣に手をかけて、いつでもメレフィスを呼び出せるようにする。ルークが再び力を暴走させてしまった時に備えているのだ。

「やはり、今回の謀（はかりごと）に彼は無関係のようです。どうやらハナ様のお名前で呼び出されたそうなのですが……その言伝を持ってきたのが小間使いのガーディという男で、この男の姿はあれから誰も見ておりません。また以前、ハナ様を襲ったウシューズ伯爵の娘の件ですが、あれについてもどうやらそのガーディと言う男が関わっていたようです」

一息にここまで告げたディアンは少し間をおいてルークの様子を窺い、それから再び続けた。

「どうもこのガーディという男は闇の魔力を使うようです。アポルオンに調べさせた所、ウシューズ伯爵は闇に囚われていると。此度、あれだけの魔術師達を陛下の結界内に引き入れる事が出来たのはガーディだけでなく伯爵が関わっていたからです。それとどうやら伯爵だけでなく他にも数人の貴族たちも闇に囚われているらしいと」

その報告を聞いてもルークに何も変わりはなかったが、ただ先程以上に冷徹な声でディアンに告げた。

「ウシューズも、その貴族たちも決して私の前には連れてくるな」

ディアンは「御意」と簡潔に答えたのみで、再びレナードに一度視線を向けると退室していった。

ルークにはその男たちを前にして冷静でいられる自信がなかった。間違いなく、怒りを抑える事が出来ずに殺してしまうだろう。だが、それはまだ良い方かも知れない。自分がどうなってしまうのかが分からないのだ。

再びルークは窓の外を、セルショナードの方向を眺めた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

セルショナードの地に立った四人は程なく、セルショナードの軍勢に囲まれた。

その数は優に百人を超えている。

だが、それだけの人数を前にしても四人は怯む事も、気負いもな

かった。
　対するセルショナード軍の兵達からは圧倒的数の為か余裕さえ感じられたが、それを将軍らしき者が強く叱責する。
「お前ら、気を抜くな!!　奴らは相当の魔力だぞ!!」
　その言葉に兵達は気合いを入れ直し臨戦態勢に入った。
「ジャスティン様、行きますか？」
　淡々と問うカイルに、ジャスティンも同じように淡々と返す。
「いえ、念の為に話し合いを試みてみましょうか」
　そう言って、ジャスティンは数歩前に進み出ると、先程の将軍らしき男に向かって口上を述べた。
「私はマグノリア帝国王宮で侍従長を務めておりますジャスティン・カルヴァと申します。此度、このセルショナードに参りましたのは、我が姪にあたるカルヴァ侯爵家当主セイン・カルヴァの娘ハナが不埒者により貴国に連れ去られた為、それを追っての事。ここに我が皇帝陛下の朱印状もあります。どうか、このままお通し下さいますようお願い申し上げます」
　そして朱印状を掲げ頭を下げたのだが、残念ながら将軍は書状を検める事もなく吐き出すように宣告した。
「悪いが我が国は今、全国境封鎖中だ。如何なる理由があろうと何人たりとも通す訳にはいかん。よって、貴様らを国境侵犯の咎でこの場で処刑する」

将軍はそう言うが早いか、己の剣を抜き捨てジャスティンに斬りかかった。
それをジャスティンはサラリとかわし、数歩後退する。

「ジャスティン様！！」

カイル達が駆け寄ろうとするが、ジャスティンはそれを手で制す。

「大丈夫です。さて、こんな所で魔力を消費するのも馬鹿らしいですし、ここはこの子に任せますのであなた達はもう少し下がっていて下さい」

その言葉と同時にジャスティンは腰に佩いた剣の柄を握った。
思わず後退った三人とは対照的にセルショナード軍はジャスティン達の方へと進み出る。
そしてジャスティンは剣を抜いた。
鞘から抜け出た白刃は強烈な光を放ち、あまりの眩しさにカイル達三人も敵兵達も瞬間、思わず目を瞑り、再び目を開けると……。

「え？」

その場にいる全員が驚きの声を上げた。
恐らく動じていないのはジャスティンと、そのジャスティンにべったり巻き付いている妖艶な美女だけだろう。
波打ち艶めく腰までの長い黒髪に金色に光る瞳、浅黒い肌は魔族の特徴。
しかし、アポルオン達とは違い頭にはピョコリとのぞく、ふわふわした黒い猫のような耳に、お尻には機嫌良く揺れるふわふわの黒いシッポがあった。

「んもう、ジャスティン様のい・け・ず♪　何十年も縛るなんて、うち……めっちゃ辛かってん。ちゃんと埋め合わせしてなぁ？」

そう言いながら、人差し指の漆黒に輝く尖った爪でジャスティンの背をツツっとなぞる。

「はいはい、後でね。それよりもリリアーナ、なぜ私があなたを呼び出したかお分かりでしょう？」

妖艶な美女、もとい魔族のリリアーナの誘惑にも動じずジャスティンはテキパキと自分に巻き付いたリリアーナの艶めかしい手足をほどいてその場に立たせるとポンポンとリリアーナの背を叩く。

「ほんま、つれないわぁ」

不貞腐れながらリリアーナはカイル達の方をチラリと見る。

思わず更に後退る三人だったが、ジャスティンがリリアーナの顎を捉えてクイッと向きを変えさせた。

「リリー、そっちじゃなくて、こっちです」

「ええ？　あの子たち、めっちゃおいしそうやのにぃ……まあ、こっちでもええけどぉ。めっちゃお腹すいてるしなぁ」

そして、御馳走を前にした肉食獣のようにペロリと舌舐めずりをする。

今まで呆気に取られたように、成り行きを見守っていたセルショナード軍はリリアーナの視線を受けて一瞬動揺をみせたが、すぐに気を取り直して剣を構えた。

「うふふふ。ジャスティン様、全部食べちゃっていい？」

「全部……まあ、気の毒ですがある意味人口抑制にもなるでしょうし、いいですよ」

嬉しそうに笑うリリアーナの要求に、ジャスティンは少し考えて許した。それを受けて更にリリアーナは顔を輝かせ喜んだ。

「やった！！　ほな、いっただっきま～す！！」

その掛け声と共にリリアーナの姿は霞み、ジャスティンの握っている剣が光を放ちビリビリと振動する。

「くっ！！」

ジャスティンは顔を顰めて剣を握り直すと、セルショナード軍に向かって空（くう）を薙いだ。

一瞬の静寂の後――ドンッ！！　とその空間に凄まじい圧力が加わり、敵兵達はその場に押し潰される様に倒れ込む。

それはただ気を失っているだけのようで、その顔はなぜか恍惚として見える。

そしてその場に立ったままでいられたのは魔力が強くリリアーナの魔力に呑まれなかった者達と、数十人の……。

「リリアーナ、好き嫌いはいけませんよ」

ジャスティンが静かに窘める。それに再び姿を現したリリアーナがシュンとして答えた。

「だって……好みちゃうもん……」

幸か不幸かその場に残った数十人はリリアーナの食指が動かなかった者達らしい。

その者達が青ざめているのは決して食べ残されたからではなく、あまりにもすごい衝撃だった為だろう……たぶん。

「な！？……何が……！？」

将軍は驚きのあまり言葉が続かないようだった。

何が起こったのか理解できないのだ。その場に倒れている者達は皆、魔力は十分残っているのだから。

リリアーナの魔力は精気を吸い取る。この場合、性的な精力と言った方が早いかも知れない。

それ故、ガッシュも先輩騎士たちも、アポルオンやメレフィスさえもリリアーナを恐れ敬遠しているのだ。若干、憧れている者達もいるらしいが。

「うふ♪　ごちそうさまでした♪」

先程以上に艶めいて見えるリリアーナは将軍に向かってウィンクすると、ジャスティンに向き直って甘えた声を出した。

「ジャスティン様、うち頑張ったやろ？　ご褒美ほしいなぁ」

「はいはい、後でね。では、少し休んでいて下さい」

ジャスティンの言葉に「え～？」と文句を言いながらも素直に剣へとリリアーナは戻って行った。

そして、その場には微妙な空気が流れる。

「さて、それでは残りを片付けますか」

三人は剣を納めたジャスティンの言葉にハッと我に返ると己の剣を握り直す。

「ジャスティン様、剣は……」

「私は素手で十分です」

カイルの心配した声にも、ジャスティンはあっさりと答えた。

リリアーナの魔力に呑まれなかった者達と食べ残し数十人、総勢五十人余りのセルショナード軍は気を取り直した将軍の合図と共に、四人に向かって攻撃を開始した。

詠唱を必要としない者達の攻撃魔法はジャスティンが全て防ぎ、隙を与えずそのまま攻撃魔法を繰り出す。

カイルも得意の防壁魔法を盾代わりに片手にかざして、魔力を込めた剣で数人を一気に斬り倒した。

ジョシュは瞬時に何事かを唱えると、疾風の如く敵兵の間を駆け抜ける。その跡にはただ力を失くした者たちが倒れていった。

シューラを背に負ったコーディは己に最大の防御魔法を施すと、そのまま攻撃魔法を詠唱なしで次々に繰り出していく。

結局、時間にして一分（三十分）にも満たない時間で将軍を含めた全てのセルショナード軍を撃破し、そのまま不可侵の森へと急ぎ踏み入ったのだった。

＊＊＊

その後、王都コステイに向けて上弦の月が沈むまで森を進み、今やっと焚火を囲んで明け方までの休息を取っていた。

リリアーナはジャスティンの胡坐をかいた膝に頭を乗せて丸くなり気持ち良さそうに目を閉じている。　その頭をジャスティンが優しく撫で、それに合わせたようにリリアーナのシッポも揺れていた。
どうやらそれがご褒美らしい。
そしてなぜか、カイルとジョシュはサイノスの方向に向かって土下座をしていた。

――――　もっと卑猥な事考えていました。シェラサナード様、申し訳ありません。

二人は心の中でジャスティンの妻に謝罪した。

「この先、四人組の男は間違いなく手配されているでしょうから、明日からは二手に別れてコステイを目指します。それぞれ魔力は極力抑えて行動して下さい」

そうして明日からの計画を話し合い、ジャスティン&コーディ組とカイル&ジョシュ組に別れて行動する事になり、更に詳細を詰める。
それから寝る段になって、コーディがどうしても気になっていた事を口にした。

「あの、ジャスティン様はその魔剣を不可侵の森で手に入れられたんですか？」

「ん？　いえ、この子は王宮の宝物庫で封印されていたのですよ。それが、兄・セインの供で宝物庫に行った時に、封印の解けかかっていたこの子になつかれてしまいましてね」

リリアーナの戻った魔剣を優しく撫でながらジャスティンは答え

た。

――――　まるで捨て猫を拾ったみたいな話し方だな……。

カイルとジョシュは二人の会話を聞きながらそんな事を思っていた。

「え？　じゃあどうしてご結婚された時に、また封印なされてしまったんですか？」

「まあ……色々と邪魔されてしまいまして……」

「え？　いったい、なにを？？？」

――――　そりゃ、ナニをだろう……。

コーディの無邪気な問いにカイルとジョシュは口には出さず突っ込んだ。

ジャスティンも曖昧に微笑むだけだったので、結局コーディは答えを得られなかったのだった。

66．ムードは必要です。

クジサスを発って三日目の夜、花は割り当てられた小さなテントの中にいた。

旅芸人達には王太子の正妃候補の花とリコが恋に落ちて駆け落ちし、王に認めてもらう為に王都コステイへ向かっていると説明をしているので、皆が気を回して花とリコだけのテントを用意してくれたのだ。

「なに？　その古典的ラブロマンス……」と花が呆れたのは言うまでもない。

そして明日はいよいよ王都コステイに入るのだ。

「覚悟はできたか？」

テントに入って来るなり投げかけたリコの問いに、花は微笑んで答えた。

「はい……大丈夫です」

そんな花の微笑みを見たリコは一瞬顔を顰めると、急に花の手首を掴んで引き寄せ押し倒した。

そのままリコが覆いかぶさる様に押さえつけた為、花は身動きが取れずに狼狽する。

「何をして……！？」

驚いて悲鳴じみた声をあげた花の口を、リコの口が塞いだ。

「ん……！？」

あまりにも突然の事に花は状況が理解できず、リコの舌を受け入れてしまった。

花は必死で抗(あらが)おうとするが、それを許さないリコの巧みな舌の動きに簡単に支配されてしまう。

それからリコの唇は花の喉に、首元にと途中チリリとした痛みを残しながらおりていく。

暫くしてリコは起き上がり、涙を堪えている花を冷めた目で見下ろし呟いた。

「まあ、こんなもんか」

「なにが……何がですか！？」

花は涙に滲んだ瞳でリコを睨みつけた。

その問いにリコは首を傾(かし)げ、フッと笑うと花の首元に己が付けた赤いアザを指でゆっくりなぞりながら答える。

「俺たちは熱烈に愛し合っているんだから、これくらいの熱情の痕がないと説得力がないだろ？」

リコがその言葉と同時に力を弛めたので、花はリコから逃れ狭いテントの端へと後退(あとじさ)った。

「だったら！　最初からそう言ってください！！」

花の怒りにもリコは心外だといった様子で片眉を上げる。

「それじゃ盛り上がらないじゃないか」

「何を盛り上げるんですか！？」

意味不明のリコの言葉に花は噛み付く。

「何事にも雰囲気（ムード）が必要だろ？」

「そんなものいりません！！」

否定する花に向けて、リコは盛大にため息を吐いた。

「これだから女は面倒くさいんだ。すぐに雰囲気（ムード）が足りないって言うくせに、こっちが努力しても鼻で笑って台無しにするんだよ。それで男にどうしろって言うんだよなぁ？」

「……すみません。さっぱりわかりません」

リコの愚痴めいた問いかけに花は素直に答えたが、やはり未だに状況がよく理解できない。

そんな花を見てリコは意地悪そうに笑った。

「覚悟できたんだろ？」

その言葉に花は一瞬顔をこわばらせ、逆にリコはいつもの優しそうな笑顔に戻る。

「まあ、心配しなくてもこれ以上は何もしない。ただ、これからの事を考えると必要なことだ」

そう言うと、リコはジッと花を見つめた。

「……何ですか？」

その視線の居心地の悪さに、花は不機嫌を隠さないで訊く。

「よかった……完全に皇帝の気配は消えたな」

安堵した様子のリコの言葉に、花は益々わからなくなる。

「どういう意味ですか？」

花の問いに、リコは一気に距離を詰める。

狭いテントにこれ以上の逃げ場はなく花は焦るが、リコはそんな花の焦慮には構わず片手を花のお腹に添えて囁くように言った。

「ここに……皇帝の子はいないということだ。皇帝ほどの魔力を持つ者の子なら、腹に宿れば必ず気配でわかる。それが今どんなにまずい事かはわかるだろ？」

「……はい」

リコの言葉に花は顔を赤くして頷く事しかできない。

「まあ、通常なら魔力の強い者の子どもは大歓迎なんだがな」

そう言ってリコは安心させるように笑った。

ユシュタールでは魔力の強い者の子どもは歓迎される。

それが例え自分の子でなくても、男性は喜び家族に迎え入れるの

だ。

もちろん魔力が弱い者の子であっても、自分が娶った女性がすでに身篭っていたならば、家督を継ぐ以外の全ての権利を自分の子と同様に与えなければならない。

それ故に女性は安心して、男性に身を委ねる事ができるのだった。

また、子どもにも選ぶ権利はある。

子どもの父親が誰なのかは魔力の気配でわかる為、実の父親の許で暮らす事も、母親と新たな父親の許で暮らす事を選ぶのも自由なのだ。

花が最初にそれを知った時は少し驚いたが、地球にも同じような風習の社会があったなと納得したものだった。

ただ今の花は、次から次へと変わるリコの態度に戸惑うばかりだった。

しかしそんな花に頓着せず、更にリコは花の右手を取ると何事かを唱え始める。

すると花の体の中を電流のようなものが走り抜け、その甘くしびれるような感覚に思わず目を閉じた。そして目を開けた花は驚いた。

自分の右手小指に、リコの瞳と同じ色の澄んだ翡翠色の指輪がはめられていたのだ。

「これは？」

「正妃の証だ」

リコは花の右手をジッと見つめたまま言葉を継いだ。

「少々時間は掛かったが、これでハナの地位は保証される。これがあれば粗末に扱われる事はないし、他の男はハナに手を出せない。

……それにしても随分はっきり色が出たな。この指輪はハナが纏う俺の気から作り出したものだが、普通は妃本人の魔力が邪魔をしてもう少し色も濁るものだ。やはりハナに魔力が全くないからか……」

最後は呟くように言うと、リコは花の右手小指の己がはめた指輪に口付けるる。そして手を離したが、花はただただ驚いて呆然と指輪を見つめているだけだった。

しかし暫くして我に返ると、花は段々と腹が立ってくるのを感じた。

リコの行動に理解はできたものの、やり方に納得がいかない。花は寝転んだリコの上に覆いかぶさると、驚くリコを無視して首筋に口付けた。

「ッつ！！」

思わず声を洩らしたリコは呆気に取られたように、起き上がった花を見上げた。

そんなリコを見下ろして、花は吐き捨てる。

「まあ、こんなものですね……ふんっだ！」

そして花はふてた様にリコの隣で横になると丸くなった。

唖然として花を見ながらリコは赤くアザが出来たであろう首筋を抑えていたが、すぐに聞こえてきた花の寝息に笑いを堪え切れず小さく吹き出したのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

次の日、コステイに到着した花達は都の入り口で旅芸人たちの馬車から降り、別れを惜しんだ。

旅芸人達はしばらくコステイで稼いだ後、再び旅立つらしい。その際、口裏を合わせてくれることはしっかりと約束をしている。

クジサスの外れで花を拾い、その後馴染みのリコ達と偶然出会ったのだが、すぐに二人は恋に落ち、花が王太子の探していた娘だと気付いた時には手遅れだった、と。

「……今時、三文芝居でもそんな話はないですよ？」

花は再び呆れたが、リコは何食わぬ顔をして答えた。

「変に凝るより単純明快の方が、みんな受け入れるもんだ」

「そんなものですか？」

訝る花にザックが笑って言った。

「これから王に会いに行くんだから、王道を行かないと！　ハッハッハ！！」

「……」

「……ハナ、殴っていいぞ？」

リコの有り難い申し出を残念ながら花は辞退した。

「いえ……手を痛めそうなので遠慮しておきます」

「……それもそうだな」

そんなやり取りをしながら歩いて進む四人だったが、街の中心部に近づくにつれ花はその賑やかさの中にも漠然とした不安を覚えた。
街の人々は皆明るく活気に満ち溢れて見えるのだが、どこか影が差している様にも感じる。
そしてその不安は王城を視界に捉えた瞬間、恐怖に変わった。
王城を黒い靄のようなものが覆っているのだ。
それは以前、夢の中で囚われた闇のようで花の心をざわつかせ、思わず隣のリコの腕をしがみつくようにギュッと握った。

「ハナ？」

花の脅えた様子に気付いたリコは、自分の腕を握る花の手をそっと撫で、それから優しく握ると手を繋いだ。

「大丈夫だ、ハナ。俺が守ると言っただろ？」

そう言って、安心させるように微笑むリコに花はハッと息をのむ。
リコの瞳が金色に輝いていたのだ。
それは一瞬で、目の錯覚だったのかも知れない。
しかし、その金色の輝きを見た花は一気に心が晴れ、落ち着いていくのがわかった。

「お願いします」

そう返す言葉と共に微笑む花に、今度はリコが息をのんだ。
柔らかな淡い光に包まれた様に見える花の、心からの温かな笑みがリコの心に沁みていく。
リコは思わず繋いだ花の手を強く握り締め、何とか微笑み返すと再び歩み始めたのだった。

67．大根役者とサクラ。

街の中心部に差し掛かったところで、店頭にいた一人の男が声を上げた。

「あ！　リコ様！！」

その声を合図に次から次へとリコ達に声が掛かる。

「リカルド殿下、いつお戻りになったんですか？」
「リコ様、当分は王城にご滞在なされるんですよね？」
「ザック様、いい加減ツケを払ってください！」

などなど。なるほど、国民に人気が高いと言うのは本当のようだ。
徐々にリコ達の周りに人垣ができ、花はしり込みをしてリコの後ろに隠れてしまった。
そんな花の様子に気付いた一人の若い娘がリコに尋ねる。

「リコ様、そちらの方は……？」

その言葉に皆の視線が一斉に自分に向き、花は益々リコの後ろに隠れようとしたが、リコがそれを許さない。
皆の視線が花からリコと繋いでいる手へと移り、再び上へと戻る。
リコは繋いだ手を強く引き、花を前へと押し出すと腰に手を回して皆に紹介した。

「私の妃だ」

一瞬、場はシンとなり、それから驚嘆の声が上がった。

「リコ様がついに！！」
「嫌ーそんなぁ！！」
「リカルド殿下、おめでとうございます！！」
「ザックさん！　あなたはうちの娘の責任を取って下さい！！」

などなど、騒然となる。

「遂にリコ様がお妃様を娶られたとあってはコステイ中の娘たちが泣きますな」
「いやいや、セルショナード中の娘たちだろう？」

そのうちそんな話で盛り上がり始めたが、遂に誰かが質問の声を上げた。

「で、その幸運な方はどちらのご令嬢はなんですか？」

その問いに再びその場はシンとなる。
と、そこへ今までずっと黙ったままだったトールドが口を開いた。

「この方は、マグノリアの民にユシュタルの御使いと崇敬されておられますハナ様です。皆、御無礼のないようにお願い致します」

トールドの紹介にその場の者達は驚き息を呑むが、花はトールドが花の正体を正直に明かした事に驚いていた。

――――　え！？　まだ王様の許可も貰ってないのに言うの！？

しかし、そんな花の胸中に構わず気を取り直した群衆は口々に話

し出す。

「ユシュタルの御使いって……確かマグノリア皇帝の側室だったんじゃ……」

「奇跡の歌声で兵達を癒したと聞いたぞ？」

「絶世の美女らしいが……？」

――ちょっと待ってー！！　何か今聞こえた！！　恐ろしい言葉が聞こえた！！

外套のフードを被ったままの花に期待の視線が向けられる事に花はたじろぐ。

だが、この雰囲気で挨拶をしないのも花に染みついた礼儀が許さない。花は有る限りの勇気と猫をかき集めてフードを取った。

「あの……花と申します。どうぞよろしく……」

花の挨拶の声は再々度シンとした場に耐え切れず、小さくなっていた。

「……」

「あ……あれだな！！　ずいぶん可愛らしい御方だな！！」

誰かの気遣う様な声を皮切りに、その場に肯定の声が満ちていく。

――――　いい人たちだ。みんないい人たちだ。けど、居た堪れないのでその辺りで止めて下さい！！

みんなの必死のフォローに心の中で嘆く花を、リコは強く抱き寄

せてみんなの前で軽くキスをした。
そしてリコは驚く花と群衆に向かって悪戯っぽい笑顔を向ける。
「かわいいだろ？」
――― ぎゃあああ!!　もう無理!!　これ以上の羞恥プレイは耐えられません!!　誰かスコップを!!　穴掘ります!!　今すぐ、穴掘って入ります!!
リコのキスと言葉に、花は有り得ないほど動転し顔を真っ赤にする。
そんな花を皆、初々しいなと微笑ましく思ったのだった。
それから暫くして、リコに最初に声をかけた男が申し出た。
「リコ様、うちでお昼を食べていって下さいよ!!　お祝いに腕を揮うので御馳走させて下さい!!」
その申し出にリコは頷き、四人は男の経営する食堂で昼食をとることになったのだった。
＊＊＊
「あの……ここでのんびりしてていいんですか？」
昼食を終え、寛いでお茶を飲んでいる三人に花は聞いた。
それに答えたのはトールドだった。
「ハナ様、ご心配なさらなくても、もうすぐ王城から迎えの馬車が参ります。今頃、リコ様がハナ様をご正妃に迎えられたことはコステイ中に広まっているでしょうからね。それだけ広まれば安心です。

王もわざわざ民の反感を買ってまで、王太子の正妃とすることはなさらないでしょうから」

そう言って、花の右手小指にはまった指輪と首筋に残る赤いアザを見た。

花は隠してしまいたい気持ちを懸命に抑え、微笑んだ。

「でも、本当に王様はご納得して下さるんでしょうか？」

「まあ、俺の女癖の悪さは有名らしいからな、父上も諦めるだろう……もちろんそんなもの噂だ、噂。俺は殆ど身に覚えがない」

今度はリコが答えたが、その内容に花は胡乱な視線をリコに向けた。

――ほとんどって……あるんじゃん。

心の中で突っ込んでいた花だったが、そこへザックの声が割り込んだ。

「あ、私のせいかも知れないですね。私のが混じっているのかも。ハッハッハ！！」

笑って言うザックを一同は無視した。

そうこうしているうちに、トールドの言う通り本当に王城からの迎えの馬車が食堂の外に停まったのだった。

馬車の中で花はずっと抱えていた疑問を口にした。

「あの……前から聞こうと思っていたんですが、王太子殿下の所から私一人で逃げたって言うのは無理がありませんか？」

花のもっともな疑問になぜかリコは目を逸らし、窓の外を見る。そして、横からはトールドの不自然な咳払いが聞こえ、斜向かいに座るザックの顔が嬉しそうに輝いた。

「いやぁ、さすがハナ様はユシュタルの御使いと言われるだけありますよね！！　王太子を昏倒させ五階から逃げ出し、なおかつ門番まで昏倒させてお逃げになったんっすから！！」

「いえいえ、だからその設定に無理があるんじゃないですか？」

嬉しそうに説明するザックに花は冷静に突っ込んだが、ザックは更に言い募る。

「そうですか？　でも王太子はそう信じていますよ？」

「……王太子殿下ってお馬鹿さんなんですか？」

こんな無茶苦茶な話を信じるなんて馬鹿以外有り得ない。あの凶悪変態がそんなに馬鹿だとは思えないが。

「馬鹿と言うより、大馬鹿だな」

窓の外を見ていたリコがぼそっと呟く。

それを聞いた花は、セルショナードの民に酷く同情したのだった。

その後、王城へ到着した花達は一旦リコの部屋へと向かったのだ

が、運の悪い事にその大馬鹿に出会ってしまった。

「これはこれは泥棒猫の……いや、男の場合はなんて言うのか……とにかく、流石としか言いようがありませんね、兄上。弟の正妃に手を出してのうのうと城へ帰還されるとは」

「ハナはお前の正妃ではなかった。そして今は私の正妃だ」

嫌味な王太子の言葉にもリコは平然と答えると、花の右手をとって王太子に見せつけるように、その小指にはまった指輪に口づけをした。

それを見て、にこやかに笑っていた王太子の顔が強張る。

「それにしても、その細い体でよく一人で逃げ出したものです。てっきり誰かが手引きでもしたのかと思いましたよ」

そう言って王太子は花の細い首筋に付いた赤いアザをジットリと見つめた。

――――やっぱり疑ってるじゃないかー!!

花はその視線に耐え切れず、首を竦めてリコの後ろに隠れようとしたが、そこへザックの豪快な声が響いた。

「ハッハッハ!!　やっぱりユシュタルの御使いはさすがですな!私なんてハナ様の拳で吹っ飛びますから!!　ねえ?」

ザックはそう言うと、殴って下さいと言わんばかりの態度で花の前に立ちはだかった。

――　ええ！？　何、その無茶振りは！！

花は心の中で絶叫し微笑んでやり過ごそうとしたが、どうもその場の空気がそれを許しそうにない。

「……」

その場の誰もが沈黙し注目する中、花はごくりと唾を飲み込み拳を握り締め――

「あ、……あちょ～！」

花の掛け声？　と共に拳は、ぽふっとザックの鳩尾に入った。

「……」

一瞬の沈黙の後……。

「うわあッ！！」

ザックが叫びながら後ろに吹っ飛んだ。

――　えええ！？

あまりに白々しいザックの演技に花は心の中で驚き悲鳴を上げるが、ザックは倒れ込んだまま痛みに呻いている……ように見えるが、絶対に笑いを堪えている。

花はどうすればいいのか分からず、チラリと救いを求める視線をリコへとやるが、リコは俯き加減に片手で顔を覆っていた。

まるで「なんてことを」と嘆いているようにも見えるのだが、リコもまた絶対に笑いを堪えている。
それは小刻みに震える肩と、もう片方の腕を自身のお腹に回して必死に抑えている様子から窺えた。
花は恐る恐る王太子に視線をやると、王太子は青ざめて立ち尽くしていた。

――ええええ!?　なんで青ざめてるの!?　まさか信じているの!?

そして後ろの王太子の近衛達もまた青ざめ、「今のは新たな攻撃魔法の詠唱か？」などと口にしていた。

――いやいやいや、そんな訳ないから!!　やっぱり馬鹿なの!?　王太子も馬鹿ならその近衛も馬鹿なの!?

どう収拾をつけたらいいのか分からずうろたえる花だったが、そこへトールドが口を開いた。

「さ、ハナ様、いつまでもここにいると馬鹿が感染(うつ)りますから、お部屋に行きましょう」

そう言って、その場に他のみんなを残したままトールドは花を案内して歩き出す。
花はというと、そんなトールドを見て更に居た堪れない気持ちになっていた。

――――　笑われるのも引かれるのも辛いですが、無反応が一番辛い事を今知りました……。

そう嘆きながら、王城にあるリコの部屋へと向かったのだった。

68．一歩進んで二歩退がる。

「面(おもて)を上げよ」

王の言葉に花はリコと共に伏していた顔を上げた。

花の顔は緊張に青ざめこわばっている様に見えたが、そうではない。

この場に満ちる、闇の色濃い淀んだ空気に気分が悪くなっていたのだ。

花は今、リコと共にセルショナード王に面していた。

顔を上げる事を許されながらも直視はせずにそっと王を窺った花だったが。

――――わかっ！！

リコと同じように少しクセのある燃えるような赤い髪に少し暗い翡翠色の瞳の王は、リコの父親と言うより兄にしか見えなかった。

――――そうか……魔力が強いから当然姿も若いままなんだ……。

改めてこの世界の不老長寿とでもいうべき事象に驚いた花だったが、それにしても、と花はその場にいる者達をさり気なく観察して違和感を覚えた。

いくら不老長寿とはいえ、皆が若すぎるのだ。

マグノリア王宮の主だった政務官達に比べて格段に若い。

そして、王の隣に立つローブを目深に被った魔術師らしき男に目を向けた。

――　あれがクラウスとか言う魔術師かな？

そんな事を考えていた花の耳に王の言葉が入ってきた。

「そなたがマグノリア皇帝の側室だった娘か？　ユシュタルの御使いなどと言われている？」

「……はい」

王の問いに素直に答えた花だったが、王はそれには頓着した様子もなく一人呟くように続ける。

「それにしても、皇帝の趣味も変わっておるな……」

もうすっかり慣れっこになったその言葉に花は動じなかったが、続く言葉に動揺した。

「リカルド、そなたの趣味もずいぶん変わったらしいな。それもまさか、儂の許可もなく正妃を娶るとはな」

しかしリコは動じた様子もなく、頭を下げて弁明する。

「私は此度、初めて己の心が儘ならぬ事を知りました。マックスには悪い事をしたとは思いますがどうしようもないのです。どうかお許し下さるようお願い申し上げます」

その言葉に反応したのは王太子だった。

「誰が許すものか！！　その娘は私の――」

「マックス」

王太子の激昂した言葉を静かに王は遮る。
そして再び花に視線を向け、問うた。

「娘よ、そなたはこのままリカルドの正妃となる事を望んでおるのか？　そなたがマグノリア王宮から消えた時、皇帝は荒れ狂い力を暴走させたと聞き及んでおるが？」

その言葉に顔を再び伏せていた花はきつく目を閉じた。
しかしそれはほんの一瞬で、その事に気付いた者はいない。
そして目を開けた花はゆっくりと顔を上げ、王の目を真っ直ぐに見つめた。それが如何に無礼な事であろうと花は構わず、強い視線を向けたまま答える。

「私はリカルド殿下の正妃となりました。今はただその事実のみが重要なのです」

王は花の視線に眩しそうに目を細めた。
暫くその場に沈黙が落ちたが、王はもう一度花に問う。

「娘、名は何と申す？」

「花と申します」

花は込み上げてくる涙を必死に堪え微笑んで見せた。
それに王はフッと軽く笑うとリコへと視線を向ける。

「リカルド、この婚姻を認めよう」

「ありがとうございます」
「父上！！」
「王！！」

王の許諾の言葉に礼を述べるリコと花だったが、そこへ異議の声を王太子だけでなくクラウスも上げた。

「クラウス、何だ？」

静かに問う王に、クラウスは頭を下げ発言の許可を得た。

「ハナ様にお伺いしたいのですが……二日前に完全に封鎖されている国境が四人の男達に突破されてしまいました。姪であるハナ様を迎えに参ったと申していたらしいのですが……ご存知でしたか？」

その言葉にリコがピクリと反応した。

「……いえ、存じませんでした」

花の答えにクラウスはローブの奥でほくそ笑んだ様に見えた。

「おや、そうでしたか。リカルド殿下は御存じでいらしたでしょう？　あれ程派手に突破されれば、お気付きにならない訳がありませんものね？」

「――ああ」

苦虫を噛みつぶしたような顔をして答えたリコにクラウスは満足そうにし、更に花に問う。

「名は何と申しましたか……ハナ様、大変申し訳ありません。あなたの叔父上のお名前を忘れてしまいまして、何とおっしゃりましたか？」

クラウスの試すような問いに、花は必死で考えを巡らせた。

護衛達だろうか？　しかし、花を姪とするなら……花に忠誠を誓ってくれた元騎士。

ルークからジャスティンが元近衛騎士だと言う事は聞いていた。

そして、花をセインの養子にする事を検討していたのも知っている。

だとしたら答えは一つしかない。

「……カルヴァです。ジャスティン・カルヴァと……私の義父はセイン・カルヴァですから」

花の答えに残念そうにしたクラウスに、花はそれが当たっていた事を知った。

ジャスティンが迎えに来てくれているのだ。

その事実に花の胸は熱くなり、再び涙が込み上げてくる。

花は、王へと向き直り頭を下げた。

「叔父であるジャスティンに私がリカルド殿下の正妃となった事を報告したく存じます。どうか、叔父が参上した折には面会を許して頂けるようお願い申し上げます」

「私も我が正妃の叔父上に是非祝福して頂きたい。父上、私からもお願い申し上げます」

リコも花と一緒に頭を下げ請願した。

それに王は考えるように黙り込んだ後、小さく「考えておこう」と答えたのだった。

そうして終わった王との面会の後、二人は部屋に戻った。
部屋に入った途端、花は繋いでいたリコの手をサッと離す。

「ハナ……」

リコの何かを訴えるような声に、花は微笑んで応えた。

「なんでしょうか？」

その優しげに見える微笑みに、リコは再び花との距離が開いたのを感じた。

「……いや、なんでもない」

迎えが来たと告げなかった事を弁解しようとして、リコは止めた。
リコは己のとった行動が間違っていたとは思わないし、同じ事があれば再び同じ様にするだろう。
きっと花ならば、理解しているはずだ。ただ、受け入れられないだけで。
だから仕方がない事だと己に言い聞かせる。
ただ、少し心を許してくれたようだった花に再び拒絶された事がリコの心を苦しめるだけなのだ。
リコは花の柔和な笑顔を見る事ができず、視線を逸らしたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ジャスティン様、昨日からハナ様と第一王子の話で街は持ち切りです」

カイルの焦れたような声が、タベルナ（食堂兼宿屋）に取った部屋の一室に響いた。

別れて二日後に、街へ南門から入って真っ直ぐ王城へと向かう道の二軒目のタベルナで落ち合う約束通り、四人は合流していた。

昨日、王からの布令で第一王子であるリカルドとユシュタルの御使いと言われる娘の正式な婚姻が発表され、またその恩赦と称して国境の完全封鎖が解かれたというのだ。もちろん、結界はまだ張り巡らされたままだが。

そしてその報せは各国を駆け巡る。

「ええ、私たちも何度か聞きました。ハナ様がリカルド王子のご正妃になられたと」

カイルに応えたジャスティンの言葉を最後にその場は沈黙に包まれた。

続く重たい沈黙の中、ポツリとコーディの言葉が落ちる。

「一体どういう事なのか、意味が分かりません」

「……セルショナードは、陛下がどれほどハナ様を大切に想っていらっしゃるか正確に理解しているようですね。これは陛下を苛(さいな)んで楽しんでいるだけの様に感じます。センガルの事にしてもそうです

が……」

ジャスティンはずっと感じていた事を吐露した。

あまりにも不確かで奇矯な考えの為、口に出す事が憚られていたものだ。

「しかしなぜ？　セルショナード王が陛下に恨みを抱く事など何もないはずです！」

カイルの吃驚した声にもジャスティンは落ち着いて答えた。

「それをこれから調べに参りましょうか」

「え……どちらへ？」

「王城です。せっかくハナ様が機会を下さっているのですから、無駄にする訳には参りません」

コーディの疑問にそう答えると、ジャスティンは再びあのガッシュとの会話で見せた楽しそうな笑みを浮かべたのだった。

69．心と体のバランス。

「それでは、セルショナードへ侵攻を開始する事が可決されました。詳細はこの後の軍部関係者を集めての軍議にて決しますので、その内容は明日、この場にて報告致します」

結局、そこまでの決議に至るまで、花が拉致されてから十日近くが過ぎていた。

そしてディアンが閉会を告げようとしたその時、セルショナード国境からの急使が駆け込んできた。

「申し上げます！　セルショナード王からの通達でハナ様が……ハナ様がセルショナードの第一王子の正妃になったと……」

使者の声は最後には力尽きたように消えていき、その場で咽び泣くように肩を震わせた。

そして、議場は大混乱に陥った。

「どういう事だ！？」

「ハナ様が王子の正妃に！？」

「それでは、このままセルショナードに侵攻してハナ様を奪還しても、我々が略奪者になるではないか！！」

「いや、元々報復攻撃なのだから」

「だからと言って、ハナ様をお連れする事は叶わんではないか！！」

騒ぎ立てる大臣達とは別に、レナードやディアン、セイン達はただひたすらルークを心配していた。

しかし、ルークは片肘をついて頬をのせたまま目を閉じており、

先程からの様子となんら変わりなく見える。
議会はセルショナード侵攻の是非についての訌争が再び始まっていた。
そもそも、ここまで決議に時間が掛かったのも花の存在をよく思わない者達の尤(もっと)もらしい反対があったからなのだ。
一時はどうなる事かと思われた皇帝の力の暴走も落ち着いたように見える今、邪魔でしかない花が戻る事が許せないのだ。
『癒しの力』は確かに魅力的だ。
だがそれ以上に己の欲する権力・地位は魅力的だった。

「確かにハナ様のお力は稀有なものではあります。しかしやっと落ち着いた国情を再び戦によって混乱させていいのでしょうか？　ここは一旦、ハナ様の事はおいて、落ち着いて考えるべきです」
「民達がハナ様を望んでいるのだ！！　それをこのままセルショナードに奪われたとあっては、民にどう申し開きをするのだ！！」
「しかし、ハナ様がセルショナードの王子の正妃となった今、我々には手出しが出来ぬ！」

そんな怒号が飛び交う中、内大臣補佐が薄ら笑いを浮かべて呟く。

「それにしても、ハナ様は意外としたたかで多情な……！？」

その言葉は最後まで続く事はなかった。
内大臣補佐はいきなり血を吐き出し、その場で座したまま意識を失ったのだ。
一瞬にして議場は静まり、皆が恐る恐る皇帝を窺うが、やはり皇帝は何も変わらず静かに目を閉じているだけだった。
それでも皆が皇帝の心情を理解したようで、結局はセルショナードへの侵攻が可決されたのだった。

＊＊＊

午後からの軍議を前に、一旦執務室へと戻ったルークにレナードが口を開いた。

「ルーク、ハナは……」

しかし、その後に上手く言葉を継ぐ事が出来ない。

「構わない」

レナードの躊躇う言葉を遮る様にルークは告げた。

「ハナが生きていればそれでいい。リカルドの正妃ならば酷い扱いも受けないはずだ」

「ルーク……」

平淡な声だったが、それをどれ程の思いで吐き出しているのかレナードに推し量る事など出来ず、結局レナードは何も言う事が出来なかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

軍議では、兵の数や攻め込む場所等の詳細が決まり、急ぎ準備を進めて十日後に侵攻を開始する事となった。

そして、軍議が終わりレナードと近衛を連れて自室へと向かっていたルークに何者かが呼び掛ける。

「陛下」

それに振り返れば、そこには真っ直ぐな黒い髪を腰近くまで伸ばした黒い瞳の娘が立っていた。

レナードは目を眇めて娘を見る。

――――　どこの馬鹿娘だ？

身なりからどこぞの貴族令嬢であろう事は分かるのだが、身元が分からない。

「あの、陛下……私……」

娘は少し脅えた様子を見せながらもその声にはしっかりと媚びたものも含まれており、その目的は明らかであった。

そんな娘の様子を見て、ルークはフッと笑う。

ルークの見せた笑顔に安心したのか、娘は前へと一歩進み出た。

――――　まずい！！

レナードが娘の危険を察した時には手遅れだった。

娘はその場から弾き飛ばされた様に石壁へと激突し倒れ伏す。

そしてそのままピクリとも動く事はなく、レナードには息をしているのかどうかも確認できなかった。

「目障りだ」

一言吐き捨てると、ルークは踵を返し歩み去った。

レナードは近衛の一人に娘を助けるように目配せをしてルークの

後を追ったのだった。

＊＊＊

自室に戻ったルークはレナードを下がらせると洗面台へと急いだ。
そして吐いた。
何度も何度も吐き、吐くものがなくなってもなお吐き気は込み上げてくる。
それでも何とか起き上がり口をゆすぐが、それ以上動く気力がなくそのまま座り込むと洗面台に背を預け、なんとか呼吸を整えようとした。

力の制御が上手くいかないのだ。
触れるまでもなく皆の卑しい欲望が流れ込んでくる。
先程の娘にしても、花と似たような容姿(なり)をして、どれ程の卑しく醜い心だった事か。
それでもただルークの心を正常に保っていられるのは、薄汚い欲望ばかりの中、レナードやディアン達のルークを心配する切実な想いが伝わってくるからだ。
だがそれも限界だった。

頭では理解している。
花が無事にセルショナードで過ごすには、国民にも人気が高いと言う第一王子の正妃となる事が最善だと。
しかし心がそれを拒絶する。
自分以外の誰かが、花の柔らかな頬に、唇に触れ、あの温かな体を抱きしめるのかと思うと我慢ならない。
全てを壊してしまいたくなる衝動をなんとか抑えるが、それでも力が暴れだそうとして鏡が割れた。
細かな破片が降り注ぎルークの体を傷付けるが、その体の痛みさ

えも感じない程にルークの心は激痛に襲われていたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

レナードはルークの部屋から下がった後、ジャスティンの妻であるシェラサナードの滞在する部屋を訪れた。

「まあ、レナード、ずいぶん大きくなったのねぇ？」

「お久しぶりです、シェラサナード様。ですが、最後にお会いしたのは四年前でしたので私は今と変わりなかったと思います」

「……そう？　私の覚えているレナードはクリスくらいだったと思うんだけど……」

シェラサナードはそう言って、今年五歳になる息子のクリストファーを見る。

クリスはもう寝る用意をしており、レナードに挨拶をすると乳母と共に寝室へと向かった。

「すみません、こんな時間に」

謝罪するレナードにシェラサナードは柔らかく微笑んだ。

「いいの。あなたが来る事は分かっていたからお茶も用意しているのよ」

レナードは勧められたソファへと座ると暫く黙ってお茶を味わい、

それから口を開いた。

「ルークがもう限界なんです。今日二人を傷付け、そのうちの一人は残念ながら亡くなりました。今のルークに近づく事自体が大きな過ちなので、自業自得と言えばそうなんですが……」

そこでレナードは言葉を切り、シェラサナードが注いでくれた二杯目のお茶を口に含んだ。

「俺はあの時も何も出来ませんでした。そして今は、あの時以上にルークは苦しんでいるんです。俺は……」

「大丈夫よ」

苦悶の表情を浮かべて吐き出すレナードの言葉をシェラサナードは穏やかに遮った。

「あなたやディアンのお陰でルークは今までに何度も救われているわ。この先もきっとあなた達の力が必要になるから、できたらこれからもあの子の側にいてあげて。どうか助けてあげてね」

シェラサナードの言葉はすうっとレナードの心に優しく沁み込んでいった。

重たかった心が少し軽くなる。

その後暫く会話を続けてから、レナードは何度もシェラサナードにお礼を述べると、部屋を辞したのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

翌朝、ルークは重い体を無理に起こし身支度をしていた。
そこへノックの音が響き、近衛がシェラサナードの来訪を告げる。
「おはよう、ルーク。ちょっと早いけど一緒に朝食を食べようと思って」
そう言うとルークに有無を言わせず、侍女たちに朝食の用意を指示する。
「姉上……？」
困惑するルークに構わず、シェラサナードは薄い水色の瞳を細めて微笑む。すると柔らかい金色の巻き毛も朝陽に反射してキラキラと輝く。
「あら、ルーク……少し背が伸びた？」
「……いえ、恐らくもう何十年も変わってないと思います」
「そお？　まあ、そう言うことにしておきましょう」
その後、用意された朝食を前にしても食欲のない様子のルークを見てシェラサナードが口を開いた。
「ルーク、ハナ様は大丈夫よ。きっとあなたの許へ戻ってくるわ」
その言葉にルークは力なく微笑んだが、シェラサナードはテーブルの上に置かれたルークの手を包み込むように握って続けた。

「ルーク、この私が言うのよ？　間違いないわ。それにジャスティンが迎えに行っているんだから、絶対よ。しかもあの……リリアーナまでいるのよ。ふふふふふ」

心なしかシェラサナードの柔らかい微笑みに影が差したように見え、ルークの手を握る力がかなり強まったような気もしたが、気のせいだろう。

「姉上……ありがとうございます」

ルークもまた、レナードと同じようにシェラサナードの言葉にわずかだが心が軽くなったように感じた。

そして、久しぶりに朝食を口にしたのだった。

70．血は水より濃い。

花は王と面会してからほとんど一日をリコの部屋で過ごしていた。

「私かザック、トールドの付き添いがないと部屋から出てはダメだ。正妃の証は簡単には外せるものではないが、私より魔力の強い者が外そうと思えば外せる。それでも普通はそんな事は誰もしないが、ここには普通じゃない王太子(ばか)がいるから気をつけてくれ」

そう忠告されて、あの凶悪変態に出会う事を考えれば部屋に籠もっているほうがマシだと思えたのだ。

幸いリコの部屋は広く、興味深い本が何冊もあるので退屈はしないですんでいる。

そして今、花は曇った窓ガラス越しに外を眺めながら、外は寒いのだろうなとぼんやり考えていた。

――― ジャスティンたち大丈夫かな？

花を迎えにセルショナードへ入国していると言うジャスティン達を心配していた花は、次第にルークへと想いを募らせていった。

それから、花はふと自分の手元を見て曇った窓ガラスに相合傘を描いていた事に気付く。

――― ぎゃあああ!! 相合傘って!! 私は小学生か!?

もちろん日本語の為、この世界の人たちが見ても理解はされないだろうが、そういう問題ではなく自分自身に恥ずかしい。

慌てて真っ赤な顔でゴシゴシと消すと、小さくため息を吐いて再

び窓の外を眺めた。

「ハナ」

突然、後ろから声をかけられた花はハッとして振り向いた。
声の主を確認した花は一瞬泣きそうな顔をしたが、すぐにいつもの微笑みを浮かべる。

「なんでしょうか？」

「なんだ？」

尋ねたリコに聞き返されて花は困惑するが、リコは花に近づくと問い詰めるように聞いた。

「なぜそんな顔をするんだ？」

「そんな顔？」

花は意味がわからず問い返しながら思わず後退ろうとしたが、その花の腕をリコは逃がさない様に捕らえる。

「俺が呼びかけると、いつも一瞬泣きそうな顔をする」

そう言われて初めて花は自分が心の内を一瞬でも見せていた事に気付いた。しかし動揺した花は、リコに何と答えればいいのかがわからなかった。

「ハナ？」

再び名前を呼ばれた花は小さく呟く。

「……似てるんです」

「なにが？」

わからないといったようにリコは眉を寄せるが、花は俯いてもう一度呟いた。

「声が……ル、陛下の声と似てるんです」

その言葉にリコは思わず掴んでいた花の腕を離した。だがそれに気付いた様子もなく花は続ける。

「普段は、少し話し方が違うからそうは思えません。でも……名前を呼ばれると……」

花の言葉は途切れ、リコは俯いたままの花をやる瀬なく見ていた。しかし大きく息を吐き出すと、リコは無理に明るい調子で言った。

「まあ、似ていてもおかしくはないだろうな。かなり濃い血縁関係なんだから」

「……え？」

その言葉に驚いて花は顔を上げる。そんな様子の花にリコも驚いたように眉を上げた。

「なんだ、まさか知らなかったのか？　俺は皇帝の甥にあたる。俺

の母が皇帝の姉だったからな」

リコの言い方ではどうも周知の事実らしいが、花にとってはそれまでの沈んだ気持ちが飛んでしまうほどの衝撃的事実であった。

そう言われてみれば、マグノリア王宮でもリコの話題は頻繁になされていたように思う。

それは戦時中の敵国の王子と言う以上に、マグノリアの先帝皇女の息子というためだったのか。そしてあまりにも当然の事過ぎて誰もそれには触れなかったのかも知れない。

――――えっと……それじゃあ、ルークはリコのおじさん!?……ええっと……。

リコの部屋付きの侍女達がリコの母の元侍女だったと聞いて、リコのお母さんは亡くなったのだろうかと思っていはいたが、まさかルークの姉だったとは思いもよらなかった。

花は何と無く気まずくて、話題を変えるようにリコに聞く。

「リコは……何歳なんですか?」

「は?　今年で九十四歳だが?」

「そうでしたか……」

話題を変える為に聞いた花だったが、やはりどうにもこの世界の年齢に馴染めず脱力する。

「そういえば、ハナは何歳なんだ?」

「……二十一歳になりました」

「なんだ、ずいぶん若いんだな」

「……そうですね」

「……」

応えた花の声を最後に、その場に微妙な沈黙が落ちる。しかし暫くしてリコは何かを思い出したようにハッとした。

「そうだ！　ハナ……ジャスティン・カルヴァがこの街に来ている」

「え……」

その言葉に花は驚くがそれ以上が続かない。

「先程、王に面会を求めてきたらしい。どんな駆け引きを使ったのか、王は明日会う事を承諾した。だから恐らくハナも明日には会えるはずだ」

「あの……私……」

やはり花は上手く言葉を発する事が出来なかった。

リコはそんな花に優しく微笑みかける。

「ひとまず私の正妃の叔父として城に滞在してもらうよう手配する。まあ……彼の妻は母の妹だから私の義理の叔父にもなるんだがな……」

その言葉に花はクスリと笑う。

「ややこしいですね」

「縁戚関係にない王族なんていないからな……」

花の嬉しそうな笑顔を見てリコも笑った。

どうやらこの世界でもヨーロッパ王室のように、王族はみな親戚といった感じらしい。

そのままクスクスと笑う花をリコは嬉しそうに見ていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

翌日、いよいよ花はジャスティンたちと面する事となった。

それは王の後ろに控えた形でセルショナード側の人間としての面会だったが、それでも花は嬉しかった。

王に跪拝するジャスティンたちを目にしてほんの数日が数年の再会に思え、涙が込み上げてくる。

一通りの挨拶が終わった後、いよいよ花に面したジャスティンは花の右手小指の指輪を見てもただ優しく微笑むだけで、今まで通りの態度を変えることはなかった。

「ハナ様、この度は誠におめでとうございます。ハナ様の叔父として、リカルド殿下のご正妃となられた事本当に嬉しく思います。ただ何分急な事でしたので、お祝いの品を用意する事ならず大変心苦しく思っております。申し訳ございません。ですが本来私どもはこ

ちらを届けに参った次第でございます。どうぞお受け取り下さい」

ジャスティンの祝いの口上が述べられ、その後に続いた言葉と共にコーディが進み出て献じた物を見て花は驚く。

それは花が大切にしていたシューラだった。

「あ……ありがとう……ございます」

久しぶりに手にしたシューラは記憶よりも少し軽いような気がしたが、それでも花の手にしっかりと馴染んだ。

その様子を見ていた王が問う。

「それは？」

「これはシューラと言う楽器です」

花の返事に王は興味深そうにする。

「では、ひとつここで奏でてみよ。そうだな……それとそなたの奇跡の歌声とやらを聴いてみたい」

その言葉に異を唱えたのはクラウスだった。

「王、そのような戯言を――」

「私も聴いてみたい」

しかし、それを遮るように王太子も同意する。

当然、花の意見を聞かれるわけもなく、結局その場でシューラを奏でながら歌う事になってしまった。

クラウスは「楽には全く興味がありませんので」と、数人とその

場から辞したが。

――――……これはこれで恥ずかしいんですが……。

花は緊張しながらも、念のために何度か弦を弾いた。

結構な距離を運ばれたはずのシューラの調律が少しも狂っていない事に花は驚く。

そして、花は歌った。

優しくシューラを爪弾きながら、マグノリア王宮でよく歌っていた愛の歌を。

その澄んだ歌声は、シューラの音色にのって王城内に響き渡る。

すると、その場に立ち籠めていた黒い靄のようなものが昇華していく様に薄くなり、重かった空気が少し軽くなったようであった。

そうして歌い終えた花は顔を上げて驚く。

「あれ？」

思わず声が漏れてしまった。

王と王太子、それに幾人かの姿が消えていたのだ。

どうも途中で「気分が悪い」と退室したようなのだが、花の歌を止めなかった所をみるとお咎めがある訳ではないらしい。

結局、なんともいえない空気を残しながら花はリコの自室へとジャスティンたちと共に戻る事にした。

そのまま王達の事に気を取られていた花は、リコの顔色が酷く悪かった事には気付かなかったのだった。

71．それぞれの思惑。

「王！　リカルド殿下の正妃とその縁者たちの面会を許すだけでも甘い措置ですのに、なぜ滞在する事まで許したのですか！？」

クラウスの焦れたような声にも、王は頭を抑えたままゆっくりと答えた。

「そなたは何を心配しておる？　いくらあのカルヴァと言う男の魔力が強かろうとも我らの敵には成り得ないことはわかっておろう…正妃の縁者が訪ねてくれば歓迎し、持て成すのは当然の事。いくら敵国の人間とはいえ、その礼儀を欠いては各国から何を言われるかわからん。これ以上卑怯者の誹りを受けるはこの国にとって……」

王の言葉はそこで途切れてしまった。

それでもクラウスが何かを言おうとしたのを王は片手で制し、立ち上がる。

「どうも頭に霞がかかった様ではっきりしない。暫く休む」

王はそう告げるとそのまま去り、己の抗議が通らないままクラウスは王を見送ることになった。

だがクラウスは気にした様子もなく薄く笑うと、一人静かに呟いた。

「少し遊びが過ぎたか……」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

部屋に戻る頃にはリコの顔色も回復したようだった。
そして一行が部屋に入るなり、ジャスティンはリコに向かって立礼の最敬礼をした。

「リカルド殿下、ハナ様を保護して下さり誠にありがとうございました」

「ジャスティン？」
「ジャスティン様！？」

ジャスティンの突然の言動に花もカイル達も驚いたが、それ以上にリコは驚いていた。

「どういう意味だ？」

訝(いぶか)しげに問うリコに、ジャスティンは顔を上げ答える。

「言葉通りの意味でございます。ハナ様をセルショナード王達からお守り頂いた事を大変ありがたく思っております」

「……俺はお前達の大事な皇帝の側室を、手出しできないように正妃にしたんだぞ？」

リコのせせら笑うような言葉にもジャスティンは微笑みを崩さない。

「殿下、私の妻は殿下の御母君の妹姫でありました」

当たり前の事実を微笑んで告げるジャスティンに、リコは真顔に戻った。

花やカイル達と同様に、それまで茫然と二人のやり取りを見ていたザックとトールドは、ジャスティンのその言葉にハッと息をのむ。

「……どこまで知っている？」

目を眇めて問うリコに、やはりジャスティンは微笑んだまま。

「ほんの少しだけ。私はほとんど何も知りません」

一瞬、顔を顰めてジャスティンを見たリコだったが、フッと頬を弛めるといつもの笑んだ顔に戻った。

「暫く五人で再会を楽しめばいい」

そう言うと、リコはザックとトールドと共に部屋から出て行った。

花は二人のやり取りが何を意味するのか全くわからなかったが、とにかく今はその事を考えるのを止めて、ジャスティン達に向き直った。

「ジャスティン、カイル、ジョシュ、コーディも……ここまで来てくれて本当にありがとうございます」

花は感謝の気持ちを込めて深く深く頭を下げた。

そんな花にカイル達は慌てる。

「どうかハナ様、顔を上げて下さい！」
「私たちはハナ様をお守りする事ができませんでした……」
「我々が不甲斐ないばかりにハナ様を大変な目に……御髪を……申し訳ありません……」

今度は三人が言葉を詰まらせ、涙をのんで深く頭を下げる。
それに今度は花が慌てる番だった。

「そんな！　どうか頭を上げて下さい！！　みんなのせいなんかじゃないですから！！」

「ジョシュ、カイル、コーディ、頭を上げなさい。ハナ様がお困りになっておられる」

そう三人に告げるとジャスティンも花に真剣な顔を向ける。

「ハナ様は何一つ選択をお間違いにならなかった。お辛かったでしょうに……御髪を……それでも、無事お会いする事ができて本当に良かった……」

ジャスティンが何を知っていて何を知らないのか、やはり花にはさっぱりわからなかったが、それでもその心からの言葉に花は再び涙が込み上げてくる。

「か……髪は自分で切ったんです。だから大丈夫です……あの……お茶の用意をお願いしてきます」

涙を隠すように踵を返すと、花は侍女たちの控室へと向かったのだった。

「まあ、ジャスティン様！！」

花がお茶の用意をお願いした侍女はジャスティンを見るなり、用意していたお茶をこぼしそうな勢いで驚きの声を上げた。

そしてその声を聞き付けた他の二人の侍女たちも慌てて控室から出て来ると、同じ様に驚く。

ジャスティンはそんな様子の侍女たちに落ち着いて挨拶をした。

「お久しぶりです。ケイト、ルーシー、ジュディ」

侍女たちは頬を染めて、ただコクコクと頷くだけだった。

そして花もまたその様子を見て驚いていた。

――――侍女さん達の様子にも驚きですが、ジャスティンったら全員の名前を覚えているんですね……恐るべし……。

三人はリコの母であるマグノリア皇女の輿入れの際に付いてきた侍女たちだったのだろう。

だとすればジャスティンとも顔馴染みなのも頷ける。

二日前に紹介された侍女たち三人は花にはどこか堅苦しく、よそよそしい態度だった。

侍女たちにとってみれば、先日まで皇帝の側室だった娘をいきなりリコの正妃だと紹介されたのだから納得が出来ないのも当然だろう。

しかも、二晩ともリコの寝台で寝たのは花だけで、リコの寝た形跡がないのだから不審にも思っているはずだ。

「無事にシェラサナード様とご結婚なさる事ができたようで、私達

喜んでいたんですよ」
「遅くなりましたが、おめでとうございます」
「シェラサナード様はお元気でいらっしゃいますか？」

機関銃の如く話し始めた侍女たち三人を穏やかに相手にするジャスティンを見て花は改めてジャスティンを尊敬していた。

――――うーん……ジャスティンって女性の扱い上手いよね……それにしてもこの侍女さん達、こんなにしゃべるんだったんだ……。

この二日間で必要な事以外、口を開かなかった侍女たちの変わりようにも驚いた花だった。

暫くゆっくり話をした後、ジャスティン達はリコの指示で用意された部屋に案内された。その際、二人は花の下に残り、交代するようにその後残りの二人が部屋へと行く。

それからジャスティンとカイルは侍女の案内で王城を見て回る事になり、やはり二人は花の下に残った。

どうやら、常に二人は護衛の為に花の側に付いていてくれるらしいのだ。

それが花にはとても嬉しく、今までの常に緊張していた状態から少しだけ解放されてとても有難かった。

そして、花はかなり長い間シューラを弾いていた。

久しぶりに手にした事が嬉しくて、指が限界を訴えるまで続けたのだ。

シューラを弾き終えると、ジョシュもコーディもとても嬉しそう

な顔をしていた。

「再びハナ様の歌声を聴く事ができるなんて嬉しくて……」

しかもコ―ディは今にも泣きそうだった。

そんなコ―ディに花も嬉しく思う。だが、ふとある事に気付き窓へと近づいた。

――― もやもやが……消えてる？

先程、王の謁見の間でも感じたが、気のせいかとも思っていた。

しかし今、外を見てみると王城を覆っていた黒い靄が完全とはいかないまでも随分薄くなっているのだ。

――― まさか、私の歌が原因だったり？……いや、さすがにそれは……。

ジャスティン達とも話していてわかったのだが、どうやらこの黒い靄は花にしか見えていないらしく、本当に薄くなっているのかはみんなに聞いてもわからないだろう。

その為、花は半信半疑ながらも、今度はアカペラで歌ってみる事にした。

そうして歌い終わり――

――― ……消えちゃったよ、もやもや……。

今度は花の見える範囲での黒い靄が完全に消えた様だった。

――― なんか……ちょっと……。

今まで『癒しの力』だの『奇跡の歌声』だの言われてはいたが、どこか他人事のように感じていた花は改めて自分の力というものを実感して驚く。
それと同時に少し怖くもなったのだった。

夕食はリコの計らいでジャスティン達四人と一緒にとる事ができた。食後のお茶を飲んでいるとリコ達が戻って来た。
リコ達は別で夕食をとったらしい。
その後、時間も遅くなってきたので花はみんなに挨拶をして寝室へと下がった。
それなのにいつまでも部屋から出て行こうとしない四人にリコは少し苛立ったように告げた。

「――お前ら、俺達は新婚なんだから、いい加減退室しろ」

それにジャスティンが「はて？」といった調子で眉を上げ、カイル達は聞こえていない訳もないのに無視を決め込んでいる。
続く沈黙の中、リコが口を開いた。

「ジャスティン、二人だけで話がある」

「……わかりました」

そう答えるとジャスティンは三人に部屋に戻る様に告げた。渋る三人にジャスティンは「交替の時間が来たらお願いします」と言って三人を下がらせたのだ。

「まさか、ここで不寝の番をする気か？」

顔を顰めて聞くリコに、ジャスティンは当然だと言う様に肩を竦める。
それにリコは大きくため息を吐き、ザックは大笑いし、トールドは不満そうな顔をしたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ジャスティンとの話を終え、寝室に下がったリコは寝台へと近づいた。
すでに寝入っている花にリコは思わず笑いを洩らす。

「癒しの力か……」

ポツリと呟いたリコの顔は一瞬苦しそうに歪んで見えたが、気のせいだったかも知れない。
リコは暫くいつもの穏やかな顔で花を見つめていた。
それから花の頬にかかった髪を優しく梳いて耳へとかけてやると、そっとその頬にキスを落としたのだった。

72．伝わる想い。

翌朝、一人寝台で目を覚ました花はある事に気付いて窓辺へと近付き外を見た。

――― あ……もやもやが復活してる。

昨日消えた様に見えた黒い靄が再び王城を覆っていた。
色々な疑問が花の中で大きく膨らんでいくが、どうにも上手く考えられない。

――― 腹が減っては戦はできません。

結局、何一つ答えを出さぬまま、花は身支度を整えて居間へと向かったのだった。

昨日までなるべく花の傍で過ごすようにしていたらしいリコは、朝食を一緒に食べた後すぐに出て行ってしまった。
ジャスティン達が来た事で肩の荷が下りたのだろうか。
そして今、部屋には花とカイル、コ―ディそしてトールドだけだった。ジャスティンとジョシュは王城を見て回って（正確には調べて）いるのだ。

――― うーん……やっぱりもやもやが消えた？

シューラを奏で歌った花は、その後、窓の外を見ながら再び考えていた。

――――それにしても、私の力ってなんなんだろう？

今までは皆がユシュタルの御使いなどと言っていても「まあ、『神様』も使徒だって言ってたし」ぐらいの軽い気持ちだった。

「魔力が満ちた」と言われても花にはそれを知る事はできないし、傷を癒す事が出来ても驚きはしたが、魔法の溢れるこの世界ではどこか自分の力ではないように感じていた。

それが、黒い靄の様なものが花にしか見えない事実と、歌うことによって一時的とはいえ靄を消す事が出来る事実を目の当たりにすると自分の力について考えざるを得ない。

――――『神様』……私の体に何かしたのかな？

花の脳裏には、昔何かの特集でみた悪の組織が一人の男を改造している図が浮かぶ。

――――いやいやいや、そんな記憶ないし。バイク乗れないし。ま……まさか！！　あれって実はアブダクション（宇宙人による誘拐）で、何かをインプラント（埋め込み）されたとか！？……『神様』って本当は宇宙人！？

とりとめもなく色々考えたが結局は『神様』が宇宙人だろうが、悪の組織だろうが花になんらかの力を与えてくれた事は間違いないと結論付けた。

だとしたら、『神様』は今もどこかで見守ってくれているのかも知れない。

そう思うと花は少し心強く思える。――――――ほど心も広くなく、腹が立った。

――― この状況ってちょっと酷いと思うんですけど!! 世界を癒すって、余りにも労働条件悪すぎませんか？ もし、いつか天国とか行って他の神様に会ったら絶対訴えてやる!!

そう思いつつ、それでも「扱いが酷い」と怒っている自分に花は驚く。

我が儘なのだろうか、それともこれくらいは許される？

常に言われるままに従い、自分の主張というものをした事のなかった花にとってはよくわからない。

――― ……それでも、やっぱり私は我が儘だ。

花がこの世界に存在している理由は、ユシュタールの人々を癒すため。

でも、花にとっては「ルークの傍にいたい」だけ。

その為には何としても、マグノリアに戻らなければ。

花はチラリと自分の右手小指を見た。

それでも、ルークにもういらないと言われたら……そんな不安が、リコの正妃になると決めてから何度も何度も花を襲う。

――― でも……もういらないって言われても、ジャスティンに頼んで侍女でも下働きでも何でもやって……ストーカーになる!!

花は拳を握り締め、決意を新たに？したのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

シェラサナードとの朝食を終えたルークは、ほんの僅かに軽くなった気持ちに有難く思いながら、執務室へと向かった。
その後、朝議や謁見などの煩わしい日常業務をこなしながらも、力を安定させることに意識を集中させる。
溢れ出ようとする力に影響され気を弛めれば、もはや誰のものかもわからない執念と化した強い欲望が流れ込んでくるのだ。

ルークがふと窓の外を見上げれば、すでに月が天に懸かっていた。
それは美しい満月。

「ルーク？」

窓の外を見上げたままのルークに、レナードが心配そうに声を掛けた。

「……月光の塔へ行ってくる。護衛はいらん。一人にしてくれ」

ルークはそう言うとレナードの返事も聞かず、その場から消えた。

そして祈りの間へと足を着けた瞬間、ルークは己の行動を後悔した。
あれほど輝いていた場所が、今はただ色褪せて在るだけだったのだ。
花が歌っていた窓辺へと近づき天を仰ぐが、月はただ静かに光を落とすだけ。
ルークはその場で座り込んで頭を抱える様にして俯いた。込み上げてくる荒々しい感情を鎮めるために何度も大きく息を吐き出す。

それからゆっくりと瞳を閉じたのだった。

＊＊＊＊＊

「満月……」

花は窓辺で独り言のようにポツリと呟いた。
それにジャスティンが優しく応える。

「ハナ様、こちらの王城にも『月光の塔』はあるようですよ」

「行きたいです」

ジャスティンの言葉に、花はすぐに塔へと望んだ。

「では、私が案内致します。リコ様、よろしいでしょう？」

花の望みに、トールドは心配そうにリコを窺いながらも、案内を申し出る。

「……ああ、かまわない。ザック、念の為にお前も行った方がいい」

リコは頷きながらザックも行くように促したが、ザックは戸惑いを見せた。

「しかし、殿下……」

「行け！」

ザックの躊躇いを断ち切るようにリコは強い口調で命じた。
それにザックは無言で頭を下げて応じたので、結局七人と大人数で塔へと向かう事になり、花は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。
これはただ、花の我が儘だったから。

塔はマグノリア王宮のそれと寸分違わぬ造りだった。
ジャスティン曰く、王城もマグノリア王宮の規模を小さくしたような感じで造りに大した違いはないらしい。
花は窓から空を見上げたが、月は暗く霞んで見えた。

それでも花は願いを込めて歌った。

その歌はただ、自分のため。
ルークへと想いを伝えたくて。

私に『神様』がなんらかの力を与えてくれているのなら、どうか伝えて欲しい。

月は霞が晴れ、眩しいほどに輝き花を照らしだす。
その輝きはゆっくりと王城へ、セルショナードへと広がる。
月の光に花の想いをのせて、風が王の結界を越えて光を運び流れゆく。
淡く銀色に輝く月の光はセルショナードを包み、マグノリアをも包み込む。
セルショナードの人々は伝え聞いていた奇跡に驚き、その温かい優しい光に涙を流し、マグノリアの人々は失ったはずの奇跡に喜び涙した。

＊＊＊＊＊

俯いたままだったルークは、ふと感じた温かさに顔を上げた。
そして目にした光景に驚く。
祈りの間が、まるで光の花畑のように一面に輝き、その中を光の妖精が舞い踊っているかのように、天窓から月光が降り注いでいたのだ。
その光はルークにふわりと優しく纏いつき、それからゆっくりと雪の結晶が溶けていくように消えていく。
そのたびにルークの冷え切った心は、少しずつ温められていった。

「ハナ……」

祈りにも似た花の想いは、眩い光となってルークに降り注ぐ。
伝わる想いに優しく包まれ、ルークは再び瞳を閉じたのだった。

73．物は言いよう。

『……ごめんなさい。どうか、許して……お願い。ルークを……あの子を……』

体中が締め付けられ息が出来ないような痛みと記憶の苦しみから解放されたリコは、青白い顔のまま寝室の窓から外を眺めていた。

花の澄んだ歌声が響き渡った奇跡の様なひと時が終わり静寂に満ちた今も、月は光り輝いて王城を、街を優しく照らしていた。

これほどに明るい月夜など随分久しぶりだった。

どれくらい時間が経ったかはわからない、ガチャリと開いた扉の向こうに花が立っていた。

その姿は居間からの光を浴びて淡く照らされ、その眩しさにリコは目を細める。

「リコ？」

花は暗い寝室で窓際に腰かけている人物に一瞬驚いたが、それがリコだとわかると問うように呼びかけた。

リコは月の光に照らされて、その瞳を金色に輝かせている。

「リコ？」

花は再び呼びかける。

本当にリコなのだろうか？　月光に薄く浮かび上がる姿はリコそのものなのだが、纏う雰囲気がいつもと違うのだ。

しかし、リコが部屋に明かりを灯した瞬間、その幻想的ともいえる姿はかき消え、いつもの優しい微笑みを浮かべたリコに戻っていた。

「綺麗な歌だったな……疲れただろう？　もう休んだ方がいい」

そう言うと、リコは花に何も言わせず、寝室からさっさと出て行ってしまったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「おはようございます！！」

ノックもなしに、朝から元気よく入って来たザックは担いでいた大きな木箱をドサッと床に下ろした。

と、同時にガシャンと中の何かが割れた音がしたが、ザックは気にした様子もなくジャスティンに目を止めると無邪気な瞳を輝かせた。

「ジャスティン殿！！　聞きましたよ、その魔剣の事！！　是非一度、見てみたいものです！！」

国境で百名以上のセルショナード軍を撃破したジャスティン達一行だったが、その殆どがジャスティンの魔剣によるものだったと伝え聞き、その魔剣についてリコ達は調べていた。しかし、皆が口を重くし語ろうとしなかったのだ。

何せ、兵達の魔力はそのままに、体に傷一つ負わずに倒されたと言うのだから不思議な事この上無い。

それがやっと昨夜、療養の為に王都に戻っていた一人の兵から聞きだす事が出来たのだ。ザックはその内容を聞いて、俄然、興味が湧いたらしい。

今まで話し合いをしていた四人はザックの言葉になぜか急に無言になる。それを不思議に思いながら花は口を開いた。

「そういえば、ジャスティンの魔剣の事は私も陛下から伺った事がありましたけど、どんな魔剣なのかは教えて下さらなかったので…どのような力の魔剣なのですか？」

無邪気な花の問いに一同は目を逸らしたが、ジャスティンは優しく微笑んで答えた。

「ハナ様、この子は女の子なので女性に害を成す事はまずはないですから安心して下さい。しかし、少し我が儘な子で、好き嫌いが激しくて気分屋なので困った事になる可能性もありますから、ここで紹介するのはやめておきますね」

上手く誤魔化した説明に、カイル達三人は「物は言いよう」だなとジャスティンを改めて尊敬した。

花はなんとなくその場の空気を読んで了承したが、この場には空気をまったく読まない男が一人いるのだ。

「え〜、我が儘な女の子って俺大好きだな〜。是非、お相手願いたいなぁ。ジャスティン殿、一晩でいいから貸し――」

「ザック」

場の空気に無頓着なザックの言葉をリコは遮った。
そして、軽く咳払いをして続ける。

「その箱は何だ？」

その問いにやっとザックはジャスティンの魔剣から視線を外した。

「ああ、それは街のみんなからのハナ様への贈り物です」

「え！？」

ザックの言葉に花は驚きの声を上げる。

「いやあ、昨夜の歌声は素晴らしかったですからねぇ。なんでも感謝したいって色々預かったんですよ。手紙も入ってます。あ、もちろん呪はかかってないですよ、ちゃんと調べましたから」

――――さっき、ガシャンっていってたよな……どんだけ、ぞんざいな奴なんだ、こいつ……。

カイル達三人は心の中で呆れていた。
トールドはいつもの事と慣れているのかザックを無視して箱を開け、割れてしまった紙に包まれたボトルらしき物を取り出し、それに添えられた手紙を確認する。
その包みからはポタポタと液体が零れ落ちており、それをトールドは魔法で全て取り除く。

「どうやらこれは、サグラン通りのマイサからのカリン酒だったようですね」

「えー！！　惜しいことしたな、マイサのカリン酒は絶品なのに！！」

――――　お前のせいだろうが！！　お前の！！

残念そうに言うザックに、三人は心の中で突っ込む。

そんなやり取りの中、花は未だに驚いて半ば放心状態であった。

――――　えっと……感謝って私に？……手紙？？？　あれ？？？

今まで、マグノリア王宮で貴族達から阿（おもね）るような謝辞の言葉や煌びやかな贈り物を貰った事はあったが、このように街の人達からなんらかの贈り物を貰った事などなかった。ましてや手紙など……

もちろん、セレナ達はとても嬉しそうに感謝の言葉などをくれたが、王宮で働く人々は畏敬の念を抱いているらしく、また花がやはり皇帝の側室という立場もあってか明らかに遠慮していた。

「ハナ様、大丈夫ですか？」

呆然としたままの花にジャスティンは心配そうにする。

それにやっと花は我に返り、微笑んで答えた。

「ええ……はい、大丈夫です」

「ハナ様、ご覧になられますか？」

トールドの言葉に、花は勢いよく頷いて箱の側へと近づいた。

そんな花の様子を見てから、リコはジャスティンに声をかける。

「ジャスティン、俺はもう出るが、いい加減俺の部屋で俺の正妃を

攫う計画を話し合うのはやめろ」

「おや、この計画にはもちろん殿下も加担して頂くのですよ」

去りかけたリコは立ち止り、振り向いた。

「……もし、嫌だと言ったら？」

「ご冗談を」

ジャスティンは軽く片眉を上げて答え、それにリコも肩を竦めて答えた。

「ああ、冗談だよ……ちっとも面白くなかったがな」

そう言って苦笑するとザックと共に去って行った。

ちなみにザックは最後に「ジャスティン殿、俺、諦めませんから～」と言い残していったのだった。

そんなやり取りをトールドは心配そうに見ていたが、花は手紙に夢中で全く気付いていなかった。

『正直なところ、戦が始まって以来、不安で堪りませんでした。しかし、ハナ様の美しい歌声に淀んでいた心が徐々に晴れていくようでした。まだ戦が終わったとはいえませんが、これからの事に希望を持っていきたいです。本当にありがとうございます』

手紙の内容はこの様なものが多かった。

街の人たちの率直でちょっとぶっきらぼうな感謝の言葉に花の胸は締め付けられそうだった。

昨夜は、ただ自分の為に歌っただけなのだ。
だから本当はこんなに感謝される資格なんかない。
それでも、花は心温められる街の人たちの気持ちに報いたかった。
そして、ルークの為だけでなく、できる事なら世界を癒すために少しでも努力をしようと、新たに決意したのだった。

余談だが、手紙の中には『長年、悩まされていた肩コリが治りました』『女房が優しくなりました』などといった内容もあり、花はクスクスと笑いを洩らしていたが、『行方不明だった猫が帰ってきました』という内容には首を捻ったのだった。

その後、シューラを弾く前に何気なく外を見た花は驚いた。

――――おお!?

まだ今日は一度も歌っていないのだが、王城を覆っている黒い靄が薄くなっているのだ。

――――……月光効果?

そんな事を考えながら暫く窓の外を眺めていると、トールドが来客を告げた。

「第三王子がですか?」

「ええ、ハナ様にご挨拶をなさりたいと。お通ししてよろしいでしょうか?」

「……もちろん、かまいません」

そう応じながらも、花は王太子のようだったらどうしようと緊張に笑顔が引き攣りそうになっていた。

しかし、居間へと通された第三王子を見て花は奇声を上げた。――心の中で。

――うひょおおおお!!　なにこれ、なにこれ!?

「はじめまして、義姉上。僕はセルショナード王国、第三王子のニコラウス・セルショナードと申します。どうぞ、ニコスと呼んで下さい」

王子はそう挨拶すると、少しつり上がった眉を下げ、眦の少し垂れた大きな翡翠色の瞳を細めてニッコリと微笑んだ。

燃える様に赤い髪といい、その姿はリコのミニチュア版だった。

リコより少し大きめの瞳と、ふっくらとした頬が幼さを象徴している。

「はじめまして、ニコス。私は花、どうぞよろしくお願いします」

淑女らしい挨拶を返した花は、そのまま気になった事を聞いた。

「ニコスはおいくつなんですか？」

「七歳です。でも、もうすぐ八歳になります」

ハキハキと答えるニコスに、花は悶える。

――― か……かわいい!! どうしよう!? すっごくかわいいんですけど!!……お持ち帰りしたらダメかな?

「ハナ様、それは新たな国際問題に発展しますから残念ですが、お諦めになって下さい」

突然聞こえたジャスティンの声に驚き、花は振り向いた。そして顔を真っ赤にしながら問う。

「……私、声に出してました?」

「はい」

――― ま……またやってしまった……。

今度は羞恥に悶えた花だったが、なんとか気を取り直してニコスに声をかける。

「失礼しました。ではニコス、あちらに美味しいお菓子があるので、一緒にお茶にしましょう」

なんだか怪しい誘い文句を口にして、花はニコスを応接ソファへと案内した。

ニコスの侍従やジャスティン達は、少し離れた場所に控える。

そして用意されたお茶を飲んで落ち着いた頃に、ニコスが口を開いた。

「僕、義姉上にお礼を申し上げたくて……」

「お礼?」

ニコスの言葉にキョトンとして花は聞き返した。
それにニコスは笑顔で答える。

「はい、僕ずっと怖かったんです。みんなは見えないって言うんですけど、一年くらい前から城に黒い靄の様なものが掛かり出して……どんどん濃くなって、すると父上達の様子も変わっていって……僕すごく怖くて部屋から出られなくなったんです。でも、義姉上がお歌を歌って下さったら、靄が消えるんです。夜になったらまた出てくるけど……でも、昨日の夜のすごく綺麗なお歌から靄がずっと薄くなって、だから僕部屋から出られる様になったんです……信じられないかも知れないですけど……」

意気込んで話すニコスの言葉に花は驚いていた。
しかし、そんな様子の花を誤解したのか、ニコスの言葉は徐々に勢いをなくしていく。それに花は慌てて応える。

「いいえ、信じます。私も……私も黒い靄の様なものが見えますから」

「本当に!?」

「ええ」

驚いたような、喜んでいるようなニコスの顔に花は微笑んで頷いた。
それから暫く靄について話した後、花はシューラを奏でたり、ニコスにシューラの弾き方を教えたりして二人で楽しい時間を過ごしたのだった。

74．誤魔化しはダメ。

満月の夜から毎晩、花は月光の塔で歌っていた。
すると欠けゆく月はそれでも精一杯、花の歌声を遠くへと届けようとしているかのように光り輝くのであった。

「耳障りな音だ」

花の歌声に辺り一面がきらきらと輝く夢のような光景を、王城の一室から冷めた目で見ていたクラウスは呟いた。

「少し遊び過ぎたな。すっかり壊れてしまった」

「クラウス様……」

ガーディが心配そうに声を掛けるが、窓辺に立つクラウスは気にとめた様子もなく続ける。

「壊れてしまったものは徹底的に壊せばいい。ガーディ、あの娘を殺せ。これ以上は邪魔になるだけだ。ここは煩(うるさ)すぎるゆえ、私は神殿に戻る」

クラウスは無機質な声でガーディに命じると、そのまま闇に溶け込むように消えてしまった。その場に顔を伏したガーディを一人残したまま。
やがて顔を上げたガーディは光り輝く天を仰ぎ見たのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

リコの灯したぼんやりとした薄明かりの中で眠る花の顔を、カーテンの隙間から差し込む月の光が照らしていた。

リコは寝台に腰かけて、掛け布から覗く花の右手小指に光る指輪をジッと見つめていた。

そして花にそっと顔を寄せる。

「――　ルーク……」

花の口から洩れた名前に、リコはピタリと動きを止めた。

それから自嘲めいた笑いを洩らして起き上がると、窓辺へと近づく。

結局は己の宿命から逃れることなどできはしないのだ。

しばらく下弦の月を眺めていたリコは音も立てずに寝室から出ると、居間に控えるジャスティンに声をかけたのだった。

＊＊＊

「ハナ、話がある」

ここ最近、朝食を終えるとすぐに出かけていたリコが、その日は花に真剣な表情でそう告げた。

「なんでしょうか？」

花も真剣な面持ちで、リコの示した椅子へと座る。

ザックとトールドは出て行ってしまっていたので、部屋にはジャスティン達と六人だけであった。

「明日、ハナはジャスティン達と城を出て、そのままマグノリアに向かってもらう。詳しい計画はジャスティンとすでに詰めてあるから、後でジャスティンから聞いてくれ。指輪は明日、城を出る際に外すつもりだ」

突然の言葉に花は驚いたが、その内容が徐々に飲みこめてくるにつれ、様々な感情が花の心を乱した。

マグノリアに帰れる！

喜びに溢れそうになる一方、不安も募る。

「リコは……リコ達はどうするのですか？」

私を逃がせばリコはまずい立場に立たされるのではないか、花は一番の不安を口にしたが、そんな花にリコは不敵に笑いかけた。

「二人の婚姻は上手くいかず、ハナは実家に戻るだけだ。まあ、ハナは出戻りと言うやつだな。国境の完全封鎖も解かれた今、何も問題はないさ」

その冗談交じりの言葉にも花の不安は拭いきれない。

「なぜ、こんなに急に？　最近、王は御姿を現さなくなったと聞きました。それに関係があるのですか？」

「……」

リコの正妃として入城してから七日、ただ無暗に過ごしていたつもりはない。

満月の夜以降、挨拶に来るようになったセルショナード貴族達に面しながら、猫をかぶった極上の笑顔でこの国の内情を出来る限り聞き出していた。

それによると最近、王だけでなく、主だった大臣達まで朝議に参加しなくなったのだそうだ。

しかし、以前の大臣達が代理を務めている為、国政が滞る事はなく表立った混乱は今のところないらしい。

その以前の大臣達というのは、ここ一年で王の不興をかって閑職に追いやられた者達であり、それを聞いた花は王との対面時に感じた不自然さ、政務官達の顔ぶれの若さに納得したのだった。

一年前――それはちょうどクラウスが神殿の推薦書を持って現れた時期と重なる。

クラウスは強大な魔力と多くの弟子を有し、長らく空いていた王宮の筆頭魔術師へとたちまち就いたのだ。

「何があったんですか？」

花はもう一度、問い詰める様に聞いた。

しばらく躊躇いをみせていたリコだったが、やがて大きく息を吐き出すと重たい口を開いた。

「王太子（おおばか）がおかしい。まあ、おかしいのは前からだし、変態で偏狂で変質な奴だが、無暗に人を殺す事は今まではなかった。だが、昨日、一昨日と側室が二人殺された。あれではまるで……いや、とに

かく、このままではハナに危険が及ぶのは目に見えている。本当は今すぐにでも逃がしてやりたいが、準備が整わない。今、ザックとトールドが協力者達と準備を整えているから、明日まで待ってくれ……すまない。結局、何一つ約束を守る事ができなかったな」

花を不安にさせないように説明を省いたリコは正しかったのかもしれない。

リコの言葉に花は、あの闇に再び囚われてしまうような恐怖を感じたのだ。

それでも確認しておきたかった。

「リコは……リコは本当に大丈夫なんですか？」

「――俺は、俺の宿命に立ち向かうしかないさ」

答えにならないリコの答えに花が戸惑っている間に、リコは出て行ってしまった。

「ジャスティンはいったいどこまで知っているんですか？」

リコを見送るしかなかった花はジャスティンを真っ直ぐに見つめて聞いた。

それにジャスティンは困った様に嘆息する。

「申し訳ありません。本当に私は殆ど何も知らないのです。ただ……ハナ様は『予言者』と言われる者がいることをご存知ですか？」

「ええ……この国の前の筆頭魔術師がそうだったと聞きました」

花はジャスティンの言葉に空白のピースが埋められそうな、そんな感じがしていた。

『予言者』とはその名の通り、予言の魔力を持つ者の事だ。

この予言の魔力は、魔力の中でも最も稀有なものとされ、しかも女性しか強く有し得ないものとされている。男性は有していてもせいぜい少し先の事をぼんやりと感じる、いわゆる『勘』程度のものなのだ。

セルショナードは筆頭魔術師である予言者の魔力と現王の強大な魔力で急激に発展を遂げ、そして、予言者が亡くなってからは国勢に影が差し始めたのだった。

「――シェラサナード様は予言の魔力をお持ちなんですか？」

「はい。あまり強くはないので少し曖昧で近い未来の事しかわからないようですが……ですがその力のお陰で、シェラは他国の王族へ嫁す事なく私の許へと降嫁して頂けたのですから私にとっては幸運でしたね」

稀有な存在である予言者をみすみす国外に出すことなど、普通は有り得ない。

そう言って優しく微笑むジャスティンに、花は応えることができなかった。

どうしても気持ちが焦れてしまう。

「リコは本当に大丈夫なんでしょうか？」

「……リカルド殿下の御母君はかなり強い予言の魔力をお持ちだったそうです」

その言葉に花は驚く。

「え……じゃあ……この国には……」

「そうですね、一つの時代に強い魔力の予言者が二人現れるだけでも珍しいですのに、同じ国に存在したことになります。しかし、殿下の御母君……クリスタベル様はその事はお隠しになっておられたようですので、私もつい最近まで知りませんでした。もしクリスタベル様のお力を先帝陛下がご存じでおられたら、きっとお側からお離しにはならなかったでしょうからね。クリスタベル様は、幼い頃よりセルショナード王をお慕いしておられたのですよ。そして自ら望まれてこの国に嫁された」

新たに知った事実に花は言葉も出なかった。それはカイル達三人も同じようだった。

「クリスタベル様はお幸せだったようです。しかし、リカルド殿下がお生まれになってからたった十七年でお亡くなりになってしまわれました。それから殿下は御苦労をなされたようですが……皮肉なものですね、預言者と言うのは肝心の己の未来は視えないのだそうですよ。クリスタベル様がお亡くなりになる直前のシェラへの手紙には、その事を酷く嘆いた文面が綴られていたようです。何があったのかはわかりませんが……あのセルショナード王とクリスタベル様の間にお生まれになったリカルド殿下の魔力があの程度というのが私には信じられませんでした」

その言葉に皆ハッと息をのんだ。

しかしジャスティンは、深く長く息を吐き出すとガラリと態度を変えた。

「私たちがこれ以上、セルショナード王家に関わる事はありません。私達はマグノリアへと戻るのですから」

ジャスティンはそう言うと、明日からの詳しい計画の説明を始めた。

花はリコを心配しながらも、マグノリアへと戻る事へ意識を集中するよう努力するしかなかったのだった。

75．後悔先に立たず。

リコが執務室代わりに使っている部屋に、ザックとトールドが報告の為に入って来た。
窓の外をぼんやりと眺めたままのリコへトールドが心配そうに声をかける。

「リコ様、本当にハナ様をマグノリアへと、皇帝の許へとお帰しになるのですか？」

「そういう約束だ」

「しかし、先程も街でたくさんのハナ様への謝辞と賛美の声を掛けられました。民達も戦の影に脅えておりましたから……またマグノリアへ侵攻した兵たちの多くがハナ様の歌によって癒されていると……センガルでの事は兵たちの心の傷になっておりますから」

「――なあトールド、それらは全て誰のせいだ？　マグノリアへの侵攻を決めたのは誰だ？　センガルの殺戮を指示したのは誰だ？」

「リコ様、それは……」

リコの口調は穏やかだったが、トールドはその答えに詰まった。
しかし、それをすぐにリコは引き継いだ。

「父上だ。しかしその責任は父上だけにあるのか？　父上を唆した者、父上を止めなかった者、悪いのは誰なんだ？……ただ逃げ回ってばかりだった俺はどうなんだ？」

「ですがリコ様は、ハナ様をお助けになったではないですか」

「それは誰の為だ？　国の為、戦を止める為、いくらでも理由はあるさ。だが本当にそうなのか？　俺は……俺の為にハナを利用したに過ぎないんじゃないか？　いずれにしろハナの為でないのは確かだ。その上、更に俺達はハナに救いを求めるのか？」

そこまで一気に吐き出すと、リコは己を落ち着けるように深く息を吸った。

「今、国境の向こうでは着々とマグノリア軍が進軍の準備をしているのはお前も聞いているだろ？　上手くいけば、三日後には無事合流できるだろう」

「しかし、だからといって戦は――」

「止められないだろうな」

トールドの言葉を遮ったリコは、振り向いて続けた。

「俺は結局、父上を説得してみせると言った約束も、ハナを守ると言った約束も、守る事ができそうにない。それならせめて、皇帝の許へ帰してやるという約束くらいは守りたい……なあ、なぜ父上はハナが歌うのを止めないと思う？　俺はそれに賭けているんだ」

リコは再び窓へと向き直ると、それ以上の話を打ち切ってしまった。

その事を理解したトールドは諦めのため息を吐くと、「残念だったな」となぜか嬉しそうに笑うザックの鳩尾に一発拳を入れてから、部屋を出て行った。

「今、本気でやったよな？　俺、防御魔法で防がなかったらマジで死んだよな？」

と、文句を言いながらザックもトールドを追って出て行った。

長い付き合いの二人が、リコが一人になりたいのを察して出て行ってくれた事に感謝しながら、リコは昨夜のジャスティンとの話を思い返した。

なぜ急に父上は変わってしまったのか、ずっと疑問に思っていた。父上は誰よりもこの国を思い心を砕いてきたというのに、今は破滅に導いているとしか思えない。

だが、父上は変わったのではなく操られていたのだ。

そんな事が闇の魔力で可能だとは思いもよらなかったが。

ジャスティンの剣に宿る魔族・リリアーナが言うには、魔族にとっても異質の力で、リリアーナとは相性がよくないらしい。しかもクラウスに対しては脅えてさえいると。

クラウス。

やはりあの男が全ての元凶だったのか。

魔族でもないのに闇の魔力を操り、魔族を脅えさせるなど、クラウスはいったい何者なのか？

わからない事ばかりだが、とにかく今は、父上達を正気に戻さなければならない。

それと同時に、早急にハナを逃がさなければ。

これ以上、彼女を巻き込む訳にはいかない。

嫌な予感に、心がざわつく。

なぜ、彼女を王城に連れて来たりしたのだろう。

どこで俺の選択は間違った？

いや、初めから間違っていたんだ。裏切り者になろうとどうしようと、彼女をマグノリアへと逃がすべきだったのだ。

「くそっ！！」

リコは固めた拳を強く壁へと叩きつけた。

やはり俺は弱虫の卑怯者でしかなかった。

だが、もう選択を間違ってはならない。

それが例えどんなに辛いものでも、逃げてはならないのだ。

＊＊＊＊＊

毎日遊びに来るようになったニコスと、花はいつものようにシューラを弾いていた。

「義姉上、王城の靄がすっかり消えてしまいましたね！」

嬉しそうに笑うニコスに、花は曖昧に微笑むだけだった。

確かに花も最初は、靄が消えたと思っていた。

でも、何かがおかしい。

胸の中を覆う不安がそう思わせているだけで、ただの思い過ごしならいいのだが。

花は気を取り直すためにお茶を頼みに、自ら侍女たちの控え室へと向かった。

控え室へと近づくと、男女の囁き合うような声が聞こえてきたの

で、花は思わずそちらの方へと足を向けた。

「――気配が消えてん……でもやっぱり無理……」

「いえ、私の方こそ無理を言って……十分ですから、もう立って下さい」

「ごめんなぁ、役立たずで……」

そこにいたのはジャスティンと、ジャスティンの足元に跪いている妖艶な美女。

二人が花に気付き、視線を向けた。

「お……お邪魔しました」

なんとなく気まずくて去りかけた花をジャスティンが引き止める。

「ハナ様、せっかくの機会なので紹介させて下さい。この子が私の剣に宿っているリリアーナです」

「あ……はじめまして、花と申します」

花はリリアーナの美しさに圧倒されながらも何とか挨拶を口したが、リリアーナは花を上から下までジロジロと眺めてから口を開いた。

「ふ～ん……この子がねぇ……まあ、人の好みも色々あるしなぁ」

嫌味を全く感じないその言葉に花は微笑みを返す。

「あんなぁ、ハナペチャんお願いしてもええ？」

「――リリアーナ」

ジャスティンの窘める声にもリリアーナは気にした様子もない。

――　ハナペチャん……ハナペチャ？ハナちゃん？……ハナペチャん？　お上手です！！

花も気にするどころか、妙に感心していたが。

「ルークにお願いして欲しいんやけど……ちょっとでええから、ルークの精気を吸わせてって――」

「……はい？」

花の微笑みは固まったまま、今度は強く窘めているジャスティンの声も耳に入らない。

しかし、思考はめまぐるしく動いていた。

――　えっとえっとえっと……どういうことどういうこと……？

空回りするだけであったが。

そこへジャスティンが何事もなかったかのように、いや、リリアーナの口を強引に塞いでいる所を見るとそうとも言えないが、それでもいつものように微笑んで花に尋ねた。

「ハナ様、何かこちらに御用でしたか？」

「あの……侍女さん達にお茶を頼もうと……」

「かしこまりました。それでは私が言い付けておきますので、どうぞハナ様はお戻り下さい」

そう促されて、花は微笑みながら素直に引き返したのだった。

花を見送った後、ジャスティンは呆れたようにリリアーナを再び窘めた。

「リリアーナ、からかいすぎですよ」

「え？　本気やったのに？」

「リリー……」

「でもあの子、顔色良くなったしええやん」

顔色が良くなったと言うより、真っ赤になったという方が正しいのだが、悪戯っぽく笑うリリアーナの頭を、ジャスティンは嘆息しながらも優しく撫でたのだった。

一方、花は居間へ戻るなり、走り出して寝室へと駆け込んだ。

その様子にニコスも護衛達も驚き心配したが、花にとってはそれどころではなかった。

――――　えっとえっとええっと……さっきのは……いやいやいや、違うから！！　変換間違っちゃダメだから！！　間違っちゃダメ！

！……あれ？　でも……いやいやいや、と、とにかく……落ち着け！

花の動揺はしばらく続いたのだった。

その後、ニコスが帰った後に花はジャスティンからあるものを渡された。

「ハナ様、これはリリアーナの気から作ってもらったものです。これを持っていて下されば、万が一、逸(はぐ)れてしまった時でもハナ様の居場所がわかりますし、もし何かあった時には少しですが助けになるはずです」

そう言って渡された物はオパールの様な、濃い黒の中にも様々な色が混じり合った不思議な色彩を放つ石だった。それを小さな巾着に入れて首から提げる。

「ありがとうございます……あの、ひょっとして先程はこれを作って下さっていたんですか？」

「ええ、もちろん。それ以外に何を？」

優しく微笑み問い返されて、花は言葉に詰まった。

「……え？　いえ……特に何というわけではないんですが……」

なぜか花は再び動揺し視線をさまよわせたが、ふとジャスティンの魔剣に目を止めた。

「ジャスティン……リリアーナさんの形が変わってないですか？」

魔剣の形状が幅広の真っ直ぐなものから、剣先が少し湾曲した細身のものに変わっているようだったのだ。

「ええ、よくお気づきになられましたね」

「まさか、これを作って下さったせいですか！？」

花は急に心配になって訊いた。

「もちろん違います。これは、この子の本来の剣としての形なのですよ。剣として戦うための。レナードの魔剣、メレフィスも剣として戦う時には形が変わりますよ。ディアンのアポルオンは……どうなるのかわかりませんが……」

「魔ペンの戦闘モード……」

「「……」」

花の心配は杞憂に終わったのだが、その場には何とも言えない空気が残ったのだった。

76．緊張感は意外と大事。

「王妃、そなたはこの子をどう視る？」

「この子は……この子はこの国を……この国をきっと救ってくれます」

「……そうだろうな、私とそなたの子なのだから当然だな」

「王……申し訳ありません……」

「何を謝る？　そなたに罪はない。そしてこの子にも。誰にも罪などないのだ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

次の日は早朝から厚い雲が空に垂れ込め、今にも雨粒を落としそうだった。しかも朝食を終える頃には濃い霧までもが街を覆い始めた。

「姿を隠す事ができますから、却って有難いですよ。まあ、私の男らしさは何をもってしても隠せませんがね。ですので、ご一緒できなくて残念です」

心配そうにする花に、ザックが安心させるように笑う。
その気遣いに花が微笑み返した所に、扉を激しく叩く音が部屋に響いた。
皆が身構えつつトールドが応対して扉を開けた瞬間、王の近衛騎士達が傾れ込んで来た。

「リカルド殿下に叛意ありとの事、身柄を拘束せよとの命を受けて参りました。我々に大人しく従って下されば、捕縛などといったご無礼は致しませんので、何卒ご容赦を……」

「何を馬鹿な事を！」

近衛隊長の言葉にトールドが噛みついたが、リコはトールドを手で制して落ち着いた様子で隊長に問う。

「その命は王から下されたのか？」

「は！」

「では、私は王の下へと連れられるのか？　王が直接、裁断されると？」

「恐らく……」

隊長の返事は判然としなかったが、それでもリコは微笑みさえ浮かべて応じた。

「では、行こう」

「殿下」

「リコ様！」

うわずった声を上げたザックとトールドがリコへと近寄ろうとして、二人の前に騎士達が立ちはだかる。

「あなた方の同行は許されておりません」

ザックとトールドは必死に怒りを抑えているようだったが、それを宥めるようにリコが声をかける。

「何日も何度も面会を願い出ていたが叶わなかった。だからこれはいい機会だろう？」

「リコ……」

花の心配そうな声に、扉の前で足を止めたリコは振り向いていつもの穏やかな微笑みを浮かべたが、花の右手に目を止めると困ったように一瞬眉を寄せた。

「すまない……」

リコは小さく謝罪してジャスティンへと視線をやる。それを受けてジャスティンが頷いたのを確認すると、踵を返し部屋から出て行ってしまった。

その場には重たい沈黙だけが残ったが、しばらくしてザックが気を取り直したように笑う。

「いや～なんか先手打たれちゃった感がありますねぇ。奴らは新月まで動かないと思ったんですがね。では、どうやら雲行きも怪しいので、計画前倒しで行きましょうか！」

その言葉と同時に、皆が準備に動き出す。
と言っても、ほぼ整っているので後は荷を背負うくらいのものだが。
それでもその場に立ち尽くしたままの花にジャスティンが近づき、声をかけた。

「ハナ様、ご心配でしょうが私どもにはどうしようもありません。むしろ、このままここにいても却って殿下の枷になり兼ねませんから……」

「……わかりました」

本当はわかってなどいなかったが、自分が足手まといにしかならない事だけは理解している。
花は簡単な準備を整えて居間へと戻った。と同時に、今度はノックも無しに騎士たちが傾れ込んで来た。
それにザックは大きくため息を吐いてぼやく。

「んだよ、今度は王太子かよ……」

部屋へと押し入って来た騎士、王太子の近衛たちはザックのぼやきを無視して花に向かって告げた。

「ハナ様、王太子殿下がお呼びでございますので御同行をお願い致します」

カイル達が剣の柄に手をかけるが、ジャスティンが花の前へと進み出て、穏やかに問いかけた。

「リカルド殿下のご正妃である私の姪に、王太子殿下がいったいどのような御用がおありだというのですか？」

「そなたに伝える必要はない」

ただならぬ雰囲気に青ざめた花に、ザックが小さく囁いた。

「ハナ様、第二回お姫様救出作戦決行です。ここが四階なのが些(いささ)か物足りませんがね」

その言葉の意味を花が飲みこむ前に、ザックは花を担ぎあげた。

「ぐえっ！！」

潰れた蛙のような声を再び発した花は気が付けば窓の外、そしてザックに担がれたまま地へと降り立っていたようだが、ザックは花を下ろすことなくそのまま走りだす。

今度は目を開けていたにも関わらず、花には何が起こったのか理解が出来なかった——どころか、目を回していた。

少しずつ状況が飲み込めてくると、カイル達も側にいる事がわかる。

そして、ジャスティンが一瞬のうちにザックの隣へと並んでいた。どうやら転移して来たらしいのだが、同じ様に王太子の近衛たちも転移したり、窓から飛び下りたりして追って来ている。中には魔術師らしき姿も見られた。

皆が走りながら、追いすがり立ちはだかる敵とも言える王太子の近衛達と剣を交え、魔法を繰り出していた。

状況は緊迫していた。

それなのに——

「あちょー！！」

ザックは攻撃魔法を繰り出す度に気合の声？を発している。
そして、その声に王太子の近衛達は恐れ慄(おのの)いている様にも見えた。

――――なんかもう……勘弁して下さい……。

花は緊迫した状況にも関わらず脱力してしまった。
しかし、ふと違和感を覚えてザックに担がれたまま、辺りを見渡す。
花を捕えようとしている兵達、王太子の近衛たちに混じって多くの兵たちがいるのだが、その兵達はザックやジャスティン達の攻撃を受けても、再び立ち上がり向かって来るのだ。
その目は皆、暗く淀み底知れぬ闇を滲ませている。
数では圧倒的に不利だったが、恐らく魔力や剣の実力でその差を打ち砕く事が出来ただろうに、次第に押されていった。

「気持ち悪い奴らだな～」

やはり全く緊張感のない声で呟いたザックは、そっと花を下ろした。
花やザック、ジャスティンたち七人は、暗く淀んだ目をした兵達に囲まれてしまっていた。

「なるほど、リリアーナが嫌がるわけです。趣味が悪い。――さて、どうしましょうか」

ジャスティンもまた、状況にそぐわず落ち着いている。
花にはどうする事も出来ないとわかっていたが、それでも必死に

考えを巡らした。

協力者達と落ち合うはずだった場所はここからでは遠すぎる。上手く落ち合えたとしても、ずっと追われながらの逃走となるだろう。それで本当に国境まで辿りつけるのだろうか？　足手まといの私がいるのに？　それよりもここからだと……

「王にお会いしましょう！！」

花の言葉に、ザックとトールドの顔に何かの感情が浮かんだが、それは一瞬で誰も気付く事はなかった。

花は眉を寄せるジャスティンに懇願するように続ける。

「このまま逃げ回るより、王にお会いしてこの状況を止めてもらう方が早いはずです！」

王太子を止める事が出来るのは王だけだ。

以前、お会いした王ならば何とかわかってくれるかも知れない。

リコだっているはずだ。

「やはり宿命とは変えられないものなのでしょうか……」

「え？」

小さな声のそれは花には聞き取れなかったが、ジャスティンは優しく微笑んだ。

「わかりました」

「ジャスティン様！？」

ジャスティンの承諾にカイル達は驚いたが、花は感謝するように微笑みを返す。
そして、にじり寄る兵達に焦りながらも、屈みこみ急いでスカートをたくし上げだした。

「「「ハナ様!?」」」

今度はジャスティンもトールドも驚いたように声を上げた。
この世界の女性は、胸元を大胆に見せる衣服は纏うが、決して足を見せる事はないのだ。
しかし、花にとってこの長いスカートは走り難くてしょうがない。
靴は足に馴染むものを選んでいたので問題はないのだが。
膝辺りで邪魔にならないようにスカートを結ぶと起き上がり皆に笑いかける。

「大丈夫です！　私、脚線美には意外と自信がありますから!!」

昔、沙耶に褒められた事を思い出しての花の発言だったが、当然、的は外れている。

「え～、そうなんですか？　でしたら今度ぜっ!?」

一人動じていないザックが花に笑いかけたが、言葉は途中で途切れた。

「……ジャスティン殿、敵を前にして味方にダメージを与えてどうするんですか」

「何の事でしょうか?……さて、では私はこの子と道を切り開きま

すので、あなた達はハナ様をお守りして王の下へとお連れして下さい」

ジャスティンは剣の柄を握って微笑んだが。

「――加減出来ぬ、どうか許してほしい」

瞑目して祈る様に囁いたジャスティンの言葉は誰の耳にも届かず、地に落ちた。

そして目を開けたジャスティンは、殺気を漂わせた厳しい表情で剣を抜いた。その刀身は花に授けてくれた石と同じ様に濃い黒の中に様々な色を煌めかせている。

ジャスティンが脇構えの様に剣を右脇に構えて重心を低くしたのと同時に、花の手を握るザックの手に力が込められる。

「行きます」

ジャスティンの合図と共に、花もザックの握る手に力を込め瞬時に駆け出した。

一歩先に踏み出したジャスティンの切り開いた道筋をザックに手を引かれ必死で走る。

頬にぬめりとした生温かなものが散った感触がしたが気を取られてはダメだ。

後ろは振り向かない。

追いすがる兵をカイル達が往(い)なしているのも感じたが、花は前だけを向いてひたすら走った。足が縺(もつ)れることなく走れるのはザックが何かしてくれているのだろう。

やがて喧騒が徐々に遠のき、後ろにカイル達の気配もしなくなった事に悲しみが込み上げてくる。

私はなぜ走っているのだろう。
いったい何のために？私に何が出来るというのだろう？　皆を盾にしてまでしなければならない事なの？
もういや、こんな思いはもういや！！

込み上げる嗚咽を堪えて強く目を閉じた瞬間、急に立ち止ったザックの背にぶつかってしまった。
そのままザックは花を背に庇うように立つ。
そこへ兵らしき数人の駆け寄る足音と共に、軽い足音が響いた。

「義姉上！！」

「ニコス！？」

護衛に囲まれたニコスが、花へと駆け寄って来たのだ。

「義姉上がお逃げになられるのを、僕もお手伝いしようと思って！！」

勇ましく言うニコスはそれでも少し震えている。
そんな様子のニコスを見て花は逆に気持ちを落ち着ける事が出来た。
逃げてはダメだ。今、私ができる事をしなければ。

「違うの、私は王にお会いしようと思っているの」

「父上に？」

驚いたニコスだったが、すぐに決意したように拳を握り締めた。

「でしたら父上は今、裁きの間にいらっしゃるようですから、こちらの方が近いです！」

そう言って走り出すニコスを護衛達と慌てて追ったが、ザックが花の気持ちを代弁してくれた。

「殿下、危険ですからここまでで十分です！」

「いやだ！！　僕はもう隠れないって決めたんだ！　父上達がおかしくなっているのはわかっているのに何もしないのは嫌だ。せめて、少しでも力になりたいんだ！！」

その言葉にザックはそれ以上何も言わなかった。
花もニコスの王子としての言葉を受け止める。
そうして花たちは裁きの間へと辿り着いたが、入口を守る騎士達に阻まれてしまった。

「義姉上、行って下さい！！」

ニコスが騎士達を抑えつけ叫んだ。
花はニコスとその護衛達に感謝しながら、ザックと共に裁きの間へと足を踏み入れたのだった。

77．リカルデントで歯は丈夫。

「私の息子を殺せと、そなたらは言っておるのか？」

「決してそのような……」

「ではどういう意味だ！？」

「王……王はこの国にとって決して失ってはいけない御方なのです」

「……本当にそうなのだろうか？」

「王？」

「……」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

裁きの間へと踏み込んだ花は、その異様さに立ち竦(すく)んでしまった。

明かりひとつ灯されていない薄闇の中、秤を持った少年の姿が浮き彫りにされた壁を背に座る王と、部屋を囲むように無言で立つ大臣達。

皆の目は、一様に暗く淀んで闇に滲んでいたのだ。

そして部屋の中央、冷たい石床にはグッタリとしたまま動かない

リコが横たわっていた。

「リコ！！」

「殿下！！」

花とザックがリコへと駆け寄ろうとするが、ザックはすぐに立ち止まると花を引き寄せ防御魔法を発動させた。

部屋の奥、闇に隠れるように立つガーディの隣にいるローブを纏った魔術師らしき男が花たちに向かって攻撃魔法を仕掛けたのだ。

幸い花は無傷で済んだのだが、ザックはその場に崩れ落ちるように座り込んでしまった。

「ザック！？」

「大丈夫です。ちょっと疲れただけですから、私より殿下をお願いします」

そう言って笑うザックの言葉を信用して花はリコに駆け寄る。

「リコ……？」

そっとリコに触れるとその体は小さく息衝いており、花はホッと息を吐いた。

リコは温かな手に反応したのか、苦しそうに呻きながら花へと顔を向ける。

「ハナ？……何で……き……」

痛みのためか、リコの言葉は途切れがちではっきりしない。

ハナはリコの体を調べ、胸に己で掻きむしったような傷を見つけ

た。それ以外に大きな外傷はないようだったが……
と、そこへ魔術師の男が口を開く。
「やれやれ、邪魔が入りましたな。しかし殿下はまだ話が出来る程のお元気がおありのようですよ、王？」
耳障りに響くその声に王がピクリと反応し、リコへと手をかざした。
途端、リコが酷く苦しみ始めた。
「リコ！？」
ハナは驚いて王を見やるが、王は無表情のまま苦しむリコをその暗く淀んだ瞳に映すだけ。
そして、それは他の大臣たちも同様であった。
「やめて下さい！！」
花は王に向かって叫んだが、何の反応も得られない。
だが、ガーディは不思議そうに首を傾げた。
「何を今更おっしゃっておられるのですか？　ハナ様もリカルド殿下をこのように苦しめておられたでしょうに」
「何を言って……」
ガーディの言葉に花は疑問を投げかけようとするが、それをリコが遮る。
「ちがう！……ハナ……聞くな……うあっ！！」

再び激しく苦しみ出したリコに花はどうすればいいのか分からないまま、目を向けて驚く。

「これは……？」

リコの体に何重にも巻きついて縛りつける茨の蔓のようなものが見えるのだ。

花はそれを取り除こうと手を伸ばすが掴む事ができない。

「おや、呪が見えるのですか？」

「呪！？」

花の驚きに、ガーディは優しく微笑む。

「ええ、殿下は幼き時に王によって呪を施されました。魔力が満たされないように器を封じられているのですよ。ですからここ何日かはハナ様のお歌に随分苦しめられたでしょうね。ハナ様のお歌には器に魔力を満たすという素晴らしいお力がおありになるようですから」

「――そんな……」

ガーディの馬鹿にしたような口調も気にはならず、ただその内容に花は打ちのめされた。

今、目の前で酷く苦しむリコを見て花は息が詰まる。

私はこれほどの苦しみを何度もリコに与えていたのだろうか？

「ちが……ハナ……」

苦しみに悶えながらも必死でリコは否定するが、それでも苦しみから逃れようと己の胸や喉を掻きむしる。
花はこれ以上リコが自身を傷付けないようにと、リコの手を取った。
リコの爪が花の手に食い込むが、花は怯む事なくその手を強く握り返すと、王へと向き直り睨みつけるように暗く淀んだ瞳を真っ直ぐに射貫く。

「王様！　なぜこのような事を為さるのですか！？　リコが――リカルド殿下がこのように罰せられる程の何をしたと言うのですか！？」

花の凛とした声と澄んだ瞳に、王の闇に滲んだ瞳が揺らめく。

「儂は……私は――リカルドが……私を殺す……予言者が……」

王は頭を抑えて呻くように不明瞭な言葉を吐き出す。

「ガーディ様、やはりあの娘は危険です。クラウス様のおっしゃる通り王はもはや壊れかかっています。早くあの娘を殺してこんな茶番は終わらせましょう」

魔術師の男がガーディに訴えかけるが、ガーディは応えずただ楽しそうに事の成り行きを静観するだけだった。

「王様……」

花は王の心の揺蕩を感じ取り、リコの手を離して王へと近づく。
が、それをさせまいと魔術師の男が花へと攻撃魔法を放った。

「！！」

「ハナ様！！」

リコとザックが弱った体で、それでも必死に花を防御魔法で守った。

そして力尽きた様にグッタリとする二人に花は唇を噛みしめながらも王の側へと寄り、その瞳を覗き込んだ。

「王様、お願いです。どうかリコを、殿下を呪より解放して下さい。殿下はこの国の事を何より思っておられるのです。その殿下が王様を弑するなどと……」

「……国を？……リカルドはこの国を救う……」

花と視線を合わせた王の瞳は徐々に、暗く淀んだ色から翡翠色へと輝きを取り戻そうとする。

「ガーディ様！！」

魔術師の男は焦慮に声を上げるが、それでも動かないガーディに痺れを切らして今度は王へと何事かを詠唱し放った。

それを受けてしまった王は低く哮り、側にいた花を突き飛ばした為に、花は勢いよく倒れ石床に転がってしまった。その衝撃に体は痛み、口の中には鉄の苦い味が広がる。

「ハナ……」

心配そうな声でリコは這うようにして花へと近寄るが、急に再び体を捩り呻き始めた。

王もまた、頭を抑え獣のように唸りだす。
同時に王の体から黒い靄のようなものが滲み出し、辺りに広がり始めた。

「……完全に壊れたな」

その場に不釣合いな、楽しそうな声でガーディが呟く。
黒い闇の侵食は、ただその場に人形のように立ち尽くしていた大臣たちをも飲み込んでいき、ジワリと闇に溶かしていくように、その体を蝕んでいった。
それなのにやはり大臣たちは動くことなく、やがてその姿を消していく。
花は苦しむリコを抱えるようにして、ただその闇が近づくのを見つめる事しか出来なかった。

「ハナ様！！」

切迫した声を上げたザックが花たちへと近づき防御魔法を発動させるが、力の衰えと共に徐々にその範囲も狭まっていく。
我に返った花は、目の前に迫る闇から苦しむリコとザックと共に逃げなければと、必死に考えをめぐらすのだが何も浮ばず焦るばかり。
逃げるといってもどこへ？
王から滲み出る闇は益々広がりをみせて、今にも部屋から溢れ出していきそうだった。
とにかく、苦しむリコの体からこの縛(いまし)めを解かなければ。
無駄だと知りつつ、花はリコの体に巻きつく茨の蔓の幻影を掴もうとしたが、やはり掴むことなど出来はしない。
だが花は、よりきつくリコの胸に蔓が巻き付いているのを見るや否や、いきなりそこへ口づけた――いや、噛み付いた。

「ええ！？――！？」

ザックは驚愕に満ちた声を上げたが、その後の光景に言葉を失くした。

花が噛みついた瞬間、リコの体を淡い光が包み込んだのだ。それから眩い光がリコの体から放たれた。

あまりの眩しさに誰もが目を瞑る。

そして再び目を開いた時には部屋を覆っていた禍々しい闇が消えていたのだった。

「殿下！？」

「リコ……？」

リコはまだその場に蹲（うずくま）ったままだったが、その体を縛る蔓はもう見えない。

「――噛むなよ……ハナ」

ゆっくりと顔を上げながら、今にも泣きそうな顔で花に笑いかけるリコの瞳には金色の光が揺らめいていた。

しかし、すぐにリコは顔を顰め荒く息を吐く。

「リコ……」

花の心配を滲ませた声に、リコはなんとか再び微笑む。

「心配ない。まだ力の制御が上手く……できないだけだ」

「殿下の器がこれ程とは……」

リコを見て呆けたように呟いたザックは、なんとか気を取り直して笑った。

「ハナ様って意外と大胆なんですね――俺、惚れそう……」

「え……いえ……あの、固くて手で開かないものって、歯で開けたりするからつい条件反射で……」

「……野性的（ワイルド）ですね」

予想外の言葉にザックは吹き出し、リコも笑うのだがその瞳は悲痛に満ちていた。

「結局……ハナに救われてしまったな、すまない」

リコは花を見つめ、そっとその下唇を親指で優しくなぞった。

何度も強く噛みしめた為に腫れて血が滲んでいた花の唇は、リコに癒されその柔らかさを取り戻す。

「リコ？」

リコは花の問いかけにいつもの穏やかな笑みを浮かべたが、すっと花から視線を外すと王へと向き直った。

そして苦しそうに歪む王の翡翠色の瞳を、決意と悲しみに満ちた金色の瞳で真っ直ぐに見つめたのだった。

78．親愛なるひとたちへ。（前書き）

読んで下さり、ありがとうございます。
少し残虐に思われる表現があります。

78．親愛なるひとたちへ。

「ガーディ様、あの娘……王の呪を解きましたぞ……」

花の突飛な行動により魔力の器を解放されたリコを見て、魔術師はまるで脅えているかの様にガーディに訴えた。

しかし、ガーディは楽しそうにその顔に笑みを浮かべる。

「やはりおもしろいな」

そう呟くと、ガーディは魔術師を冷たく一瞥（いちべつ）しただけでその場から消えてしまった。

「ガーディ様！！……くそっ！！……」

その場に一人残された魔術師は恐慌をきたして口汚く罵った。

そしてその目に狂気を宿し、王城を崩壊させかねないほどの最大の攻撃魔法を放つ。

あまりにも咄嗟の事に対応が遅れたが、それでもリコは花とザックを庇うように前に立ち塞がって対抗しうる防御魔法を発動させた。

だが、まだ力が安定しない為にすべてを防ぎきる事が出来ない。

激しい衝撃音の後に花が目にしたのは、苦しそうに椅子からすべり落ち石床へと膝をつく王の姿だった。

王がリコの防御魔法を補ったのだ。

「父上！！」

リコがふらつきながらも王へと近づき傍に跪く。

「父上！！」
「王！！」

部屋にはニコスや異変に駆け付けた元大臣らが駆け込んで来た。
魔術師が消滅した事で、閉じられていた扉が開いたようだ。己の力を越えた魔法の発動と共に魔術師はその体を塵と化してしまったのだった。
王は駆け込んで来た者達へと視線をやり、元は宰相であった男に声をかけた。

「メルク、急ぎ宝剣を持ってきてくれ」

王の言葉にメルクと呼ばれた男は酷く辛そうな顔を見せたが、すぐに表情を戻すと一礼をしてその場から姿を消す。

「リカルド、すまない……私の弱さゆえに、結局はそなたに辛い宿命を負わせてしまう……」

「父上、私は……」

リコの言葉は途中で途切れた。メルクが宝剣を持って現れたのだ。
それを受け取った王はそのままリコへと差し出す。

「リカルド、この剣で私の胸を突いてくれ」

「父上！？」

驚愕の声を上げたのはニコスだった。
しかし、ニコスをすぐ側に立つ者が押し止める。ニコス以外のこ

の場にいる者達は皆、避けられぬ宿命を理解しているのだ。

「ニコス、そなたにも恐ろしい思いをさせてしまったな……またこの先は辛い思いをさせてしまう。でもどうか、皆と共にリカルドを支えてやってくれ」

「――はい」

涙を堪え絞り出すように答えたニコスに王は微笑みかけ、その場の者達を見渡した。

そして、剣を受け取るのをためらうリコに諭すように言う。

「そなたにもわかっておるだろう？　私は闇に浸食されてもう助かりようがない。この剣で闇を封じてくれ。本来なら私自身で為すべきなのだが、私にはもうこの剣を抜くことすらできぬ。今のそなたなら扱えるはずだ。私の中の闇が再び暴走せぬ間に……」

セルショナード王家の宝剣は封魔の剣。扱う事が出来るのは選ばれた者のみ。

リコは覚悟を決めた様に、その優しい顔を厳しい表情に変えて剣を受け取った。

花は言葉を発する事もできず、ただその場に座り込んで目の前の光景を信じられない思いで見ていた。

王はいったい何を言っているのだろう？

その花の震える肩にそっと、優しく手が置かれた。

花は縋る様にその手の主を見上げて、その瞳を涙で滲ませる。

「ジャスティン……」

カイル達もトールドもいる。
彼らは皆、傷と埃と血にまみれていたが、それでもここにいてくれる事に花は大きく安堵の吐息を洩らした。

「ハナ様、退室致しましょう。お立ちになる事は出来ますか？」

ジャスティンは花に気遣わしげに声をかけ、カイル達に目配せをする。
カイル達は花の下へ跪き手を貸そうとしてくれたが、花は動こうとしなかった。

「ジャスティン、私は……」

これは私がリコの呪を解いた結果なのだろうか。
花はその場から逃げ出したい気持ちを必死で抑え、宝剣を手にしたリコを見つめ続けた。
宿命というのは、リコが王を――子が親を殺す事なのか。
そんなものからは逃げて当たり前だ！
予言とは悪い事を避ける為にあるのだと思っていた。でもこれでは悲劇を生んだだけではないのか。
いったいどこからやり直せばこの宿命は避けられたの？
『神様』はいったい何をしているの！？

花は嗚咽を堪えるだけで精一杯だった。
そんな花に王が慰めるように優しく微笑みかける。

「ハナ、そなたには感謝したい。私がこうして正気を保っておれるのもそなたのお陰だ。愚かな私からリカルドを救ってくれた。そして王妃の……クリスタベルの想いを伝えてくれた」

花は何も応えられず、ただ首を振ることしかできなかった。
王が何を言っているのかわからない、わかりたくもない。

「マグノリアの……此度の戦は全て私の罪である。この命で償えるものではもちろんなく、きちんと裁きを受けるべきである事は重々承知。しかし、時間がないゆえどうか許して欲しい。そして見届けて頂きたい」

「――承知致しました」

王の言葉にジャスティンは一瞬の沈黙の後、厳しい表情で承諾した。
最後に王はリコへと視線を戻す。

「リコ……どうか許して欲しい。私も王妃もそなたが生きる事を心から望んでいたのだ。その為にそなたがどれ程の苦しみに嘆く事になろうとも……すまない。そして出来る事ならマックスを……」

王はそれ以上話を続ける事ができなかった。
体から再び滲みでようとする闇を抑えるかのように蹲り、唸る。

「リコ……早く……」

リコは悲痛な顔をして、それでも決意に金色の瞳を光らせて鞘から剣を抜いた。
臣たちから微かなどよめきが上がる。
宝剣がリカルドを認めたのだ。
花はただ、悲鳴を上げないように両手で口を抑え見つめる事しかできなかった。

それでも結局、リコが王の胸へと剣を静かに突き立てた時、花は目を瞑ってしまった。
その閉じた瞼の裏にも、眩しいほどの閃光が煌めく。

「父上……」

静かに流れ出す王の血と共に、ニコスの小さな声が冷たい床に染み込んでいく。
剣を手から力なく落としたリコは横たわった王の体を抱き起こし、安らかな王の死顔を見つめ続けていた。
その頬をとめどなく涙が零れ落ちる。

ただそこには厳かな沈黙が流れるのみ。
やがて悲しみに満ちた部屋にゆらゆらと淡い光が舞い始めた。

「……母上？」

リコの小さな囁きに応えるように、光は優しく全てを包み込んでいく。

それはまるで月の光。
厚い雲に覆われ、暗く翳る世界を明るく照らす真昼の奇跡。
優しい光の輝きは花が月光の下で歌っているかのように温かく、リコの、皆の嘆きを癒していったのだった。

＊＊＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

親愛なる妹へ

元気にしているかしら？
侍女達からの噂で、ジャスティンとずいぶん仲良くしているようだと聞いたから、きっと元気ね。
お父様にもやっと認められたのだから嬉しいでしょうけれど、あまり羽目は外さないように……まあ、あの子がいるとそれも難しいかしら？

私の方は、もう長くないと思います。
日々、魔力が流れ出していくのがわかるのです。
それなのになぜこれほどに視えてしまうのでしょうか。それともこれが、死に向かうという事なのでしょうか？
ただ死にゆくだけの何もできない私を運命は嘲笑っているのかもしれません。

己の宿命がもし視えていたのなら、私は王を望む事はなかったでしょう。
私は王とリカルドに苦しみを生む事しかできなかった。私はリカルドを選び、王はそれを承諾して下さいました。
それがリカルドにどんなに辛い宿命を負わせてしまうことになるのかがわかっているのに。

もうすでに運命の歯車は動き出しているのです。
皆の過酷な宿命が、ひとつの大きな運命へと糾(あざな)われていくのでしょう。
その運命に、王もリカルドも翻弄され苦しむというのに、あまり

にも強く激しい為に私にはどうする事もできない、ただ嘆くことしかできないのです。

そして、ルークもまた過酷な宿命を負い、運命に翻弄される一人なのです。

あの子と別れた時にはまだ小さな少年だったけれど、今は立派な青年になっているのでしょうね。

ルークは繊細で優しい子だから、きっとこの先に待ち受ける悲しい宿命に酷く苦しむ事になるでしょう。

でもきっと、この苛烈な運命からの救いは現れるはずです。

王とリカルドに苦しみしか残す事のできない私ですが、それでも月へ願い祈るのです。

このまま月の光となって暗闇の中でも皆を明るく照らしたい。

どうか、私の愛する人たちの苦しみを、嘆きを癒してあげたい、と。

そして、できることなら……

79．白馬に乗った王子様。（前書き）

少し残酷に思われる表現が含まれるかも知れません。

79．白馬に乗った王子様。

「姉さま……」

曇天の空の下、優しく光り輝く真昼の奇跡を王宮の窓から眺めていたシェラサナードは、そっと呟いた。

その頬を流れ落ちる涙を見て、クリスが心配そうに足元に縋（すが）る。

「母さま……かなしいの？」

「――いえ、大丈夫よ。心配してくれてありがとう。私はこれから陛下にお会いして来ますから、クリスはテイラにご本を読んでもらってなさいね」

優しく微笑んでクリスの頭を撫でると乳母のテイラに目配せをして頼み、シェラサナードはルークの執務室へと急ぎ向かったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「殿下……」

温かな光が消えてしまった後も、暫く王の亡骸を抱いたままのリコにザックが心配そうに声をかける。

リコはそっと王を横たえ、側に控えていたメルクに視線をやった。
それを受けてメルクは黙ったまま深く礼をすると、王の亡骸へと手を伸ばす。
厳かな時間が流れる裁きの間に、突如耳障りな声が割り込んだ。

「あーあ、ついにやってしまったんですね、兄上」

転移によって現れた王太子の声は、座り込んだままだった花のすぐ耳元で響いた。
と同時に、花の喉元に冷たい感触が伝わる。
王太子は小刀（ナイフ）を花に突き付けているのだ。
突然の事にジャスティンもカイル達も動く事ができなかった。
魔力を大量に消費してしまっているジャスティン達に比べて、王太子のそれはあまりに強大で邪悪な力に満ちている。

「ハナ！！」

リコの青ざめた顔を見て、王太子は厭な笑いを洩らした。

「ククク……兄上は狡い。いつも私の欲しいものを奪っていく。臣の忠誠も、民の信頼も、父上の愛情さえも……だから一つくらいはくれてもいいでしょ？」

「マックス、何を言っているんだ……それにハナは私のものでは――！？」

リコの憂慮を含んだ言葉は途中で途切れる。
花と王太子の姿が裁きの間から消えてしまったのだ。

「ハナ様！！」

ジャスティン達の切迫した声が部屋に響く。
今、魔力の安定しないリコをはじめ、ジャスティン達も王太子を追って転移することは不可能だった。

「メルク!!　マックスはどこへ飛んだ!?」

焦燥に駆られたリコの問いにメルクは動揺を抑えて答える。

「殿下は……気配を消しておられるようで追う事が出来ません」

「くそ!!」

リコが花に与えた指輪の気配を追う事さえできない。
騒然とする場にジャスティンの魔剣が小さく鳴った。
ジャスティンは厳しい表情で剣の柄を握る。

「月光の塔です!!」

言うが早いか、ジャスティンは駆け出し、カイル達もそれに続く。

「転移できる者は転移して王太子を止めろ!!」

リコもその場の者達に怒鳴るように命じると、駆け出す。
王太子の闇に沈んだ瞳には狂気しか映していなかった。
花が王太子の側室達のようになる事を考えただけでリコの胸は潰れそうになったのだった。

＊＊＊

いきなり目の前の景色が変わった事に花は驚いた。
しかし、よく見ればそこは月光の塔の祈りの間、しかも花の喉元に突き付けられていた小刀がないことに勇気づけられ、花は逃げ出そうと立ち上がりかける。
途端に後ろへ押し倒され背中を強く打ちつけてしまった。
衝撃に一気に肺の中の酸素が押し出され、そのまま肺が委縮してしまったかのように酸素を取り入れる事を拒む。
王太子は苦しむ花に馬乗りになって嬉しそうに笑った。

「この小刀を覚えているか？　これはハナが髪を切り落としたものだ。今度はどこを切り落とす？　その小さな耳がいいかな？」

呼吸（いき）をすることもままならない花は、抵抗するどころか動くことすらできなかった。
それでも花は痛みと苦しみの涙が滲んだ瞳で、王太子の闇に沈んだ瞳を睨み付ける。
ヒヤリとした小刀が耳に当てられ、花は覚悟を決めたが……
瞬間　――――
花の胸元でリリアーナの石が虹色の閃光を発した。
その眩しさに思わず目を瞑った王太子の小刀を握った手を、小さな巾着から飛び出した黒い子猫のような獣が噛みついた。

「ッ！？」

思わず小刀を取り落として王太子が怯んだ隙に花はその場から這うように逃げ出したのだが、小さな獣はすぐに消されてしまった。
花は思わず目を閉じ、それでもそれは一瞬で、逃げる事を止めなかった。

そんな花を嘲笑うように、わずかな距離はすぐに詰められ、王太子に再び捕らえられてしまう。

「なんで逃げる？」

歯を食いしばって抗う花に王太子は首を傾げる。
それから何を思ったのか急に嬉しそうに笑った。

「ああ、そうか……逃げられないようにすればいいんだ。死んでしまえば、もう逃げられないな？」

王太子は不気味に呟いて、花の首に手をかける。
痛む肺に必死で酸素を取り入れていた花は、じわりと首を絞められて徐々に意識を手放していった。

――――ルーク……。

＊＊＊

リコが月光の塔にわずかな時間で辿り着いた時、祈りの間の入り口ではジャスティン達も先に転移した者達も足止めされていた。
王太子の魔力で扉は固く閉ざされ、祈りの間全体に結界が張られているのだ。
今、この場に王太子の魔力を超える者はいない。
闇に沈んだ王太子の魔力は計り知れないほどであった。

「くそ！！」

リコは何度目かの悪態をついた。
器がいくら大きくても、力を使いこなせないのでは意味がない。
安定しない力をなんとか集中し高めようとするが、上手くいかなかった。
ジャスティンにしても、リリアーナの戦闘形で闇に囚われた多くの兵達を相手にした為に大量の魔力を消費していた。
皆がなんとか、王太子の結界を破ろうとするが叶う事はなく、ジャスティンは限界を超えた力で結界を破ろうと試みるのだが、それをリリアーナが邪魔をするのだ。

「リリー……」

ジャスティンの焦れた様な声が絶望感漂うその場に落ちる。
しかし、急にジャスティンはハッと振り向いた。
一拍遅れて、その場の誰もが突然の気配に息を呑む。

「なんで!?」

ザックは突如として現れた人物を見て驚きの声を上げた。

「――どけ!!」

力あるその言葉に皆が無意識に従うと同時に、パシンッ!!と甲高い音と共にその場に衝撃が走った。
その衝撃は塔全体に伝わる。

花は朦朧とする意識の中、激しい音と微かな衝撃を感じた。

「なっ!?　お前――!?」

王太子の驚駭に満ちた悲鳴があがり、圧し掛かる重みがなくなった事に花は不思議に思い、ゆっくりと目を開けた。

……ルーク？

音にならない声で花は呟いた。

これはきっと最期に自分の願望が見せている幻だ。

そうとわかっていても、動かない体でなんとか幻影に手を伸ばそうとするが、やはり動かない。

ルークの顔は今にも泣きそうに見えた。

どうせ最期なら笑顔がいいのに。

そう思った花の頬に温かい手が触れた。そして、その手は首をすべり胸へと移る。

すると温かい感覚と共に、花の呼吸も体も楽になっていった。

「ハナ……痛みは？」

徐々に意識がハッキリとしてきた花の耳に、ずっと聞きたかったルークの声が届く。

「……ルーク？」

信じられない思いで花はルークへと、今度は動く手を伸ばした。

その手をルークは握り締める。

――――　あたたかい……。

ルークの優しい瞳が涙に滲んで見えるのは、花の瞳が涙に濡れているからだろうか。

「ルーク！！」

花の切望が滲んだ声に、ルークは花を抱き起すとそのまま強く抱きしめた。

「ハナ……」

抱きしめられたその温かな感触も、耳に聞こえる優しい声も、そして懐かしい匂いもすべてがルークだった。

苦しみではない、喜びに息が詰まるほどギュッと花はルークに抱きつく。

今の花はセルショナードの事も、ユシュタールの事も何もかも忘れ、ただルークに再び会えた喜びで満たされていた。

涙が花の頬を伝う。

その涙は、今までの苦しみと悲しみを全て洗い流すかの様にとめどなく溢れ出てルークの温かい胸に沁み込んでいったのだった。

80．また会う日まで。

「ハナ！！」

祈りの間へと踏み込んだリコはすぐにその足を止めた。そしてルークの腕の中にいる花を見て、思わず目を逸らす。

「ハナ様！！」

ジャスティン達も花の元へと駆け付け、そして片膝をついて騎士の最敬礼をする。

「陛下……」

「――ジャスティン、ジョシュ、カイル、コーディ……皆、御苦労だった」

ルークはジャスティン達に労い（ねぎら）の言葉を掛けると、花へと優しく声をかけた。

「ハナ、立てるか？」

その言葉に、花はルークの胸に顔をうずめたまま頷く。なんとなく恥ずかしくて顔を上げられないのだ。

そうして俯いたままルークの手を借りて立ち上がった花だったが、そこへ王太子の唸るような声が響いた。

「なんで……なんでお前がここに！！」

王太子は咆哮と共に闇の魔力によって増幅された攻撃魔法を繰り出した。
しかしルークはそれを簡単に防ぎ、反転させようとしたがすぐに抑止して破断する。王太子はすでにその体を闇に囚われ、呻き苦しんでいたのだ。

「マックス……」

リコの苦渋に満ちた声が王太子の呻き声と混じる。

「ハナ」

ルークはそっと花の視界を遮る様に抱き寄せ、微かに震えるその背を宥めるように優しく撫でた。
だが、ルークの手にいつも柔らかく絡んでいたはずの艶やかな花の長い髪がない事に、ルークの纏う気が急激に冷たくなり圧力を増す。
それは花でさえ感じる程であった。

「ルーク？」

「……何でもない」

心配そうにする花にルークは安心させるように微笑みかける。
そしてリコへと向けた視線は、厳しいものに変わっていた。

「リカルド、その剣で王太子を楽にしてやれ」

ルークはトールドが持っている宝剣に目をやり、リコへと命じる

ように告げた。
しかし、その言葉に躊躇(ためら)いを見せたリコをルークは蔑(さげす)むように笑う。
「私がやろうか？」
その声の冷たさに花はルークの衣服を強く握り締めたが何も言わず、ただ瞳を閉じてルークの胸の鼓動を聞いていた。
リコは歯を食いしばり、ルークを睨み付けるとトールドから剣を受け取り、部屋の隅で蹲(うずくま)る王太子へと向かった。
王太子はもはや、近づくリコに攻撃を加える事もなく、その体から闇を滲ませはじめている。
その闇はリコをも飲み込もうとするかのように押し寄せるのだがリコに触れると、途端に霧散していった。
「――殿下？」
今までにない現象にザックも他の者達も、そしてリコ自身も驚くが、それをルークは呆れたように見ていた。
「お前達はその剣の力に気付かないのか？」
その問いに答えられないまま、それでもリコはこれ以上苦しむ王太子を見ていられず、剣へと魔力を注ぐ。すると、先程よりも魔力の消費が感じられないばかりか、魔力が安定し強い力を感じるのだ。
その事に、ルークの言葉の意味を何となくだが理解した。
この宝剣はヴィシュヌの剣。
ユシュタールをヴィシュヌが統治した時に共に戦った剣であり、王国建国の折に、時の皇帝より初代セルショナード王である皇子に

下賜されたものだった。
ヴィシュヌの再来とまで言われる皇帝の出現によって剣が力を得ているのだろうか。
しかし、リコはそれらの事を一旦全て忘れ、目の前で苦しむ王太子に意識を集中させた。

「マックス、すまない」

王太子には抵抗する力さえなく、ただ為されるがままであった。
リコが静かに王太子の胸に剣を突き立てると再び剣から閃光が放たれ、その場に蠢いていた闇が一瞬にして晴れていったのだった。

「兄うえは……ずるい……」

王太子は闇から解放された、涙に滲む翡翠色の瞳をリコへと真っ直ぐに向けて呟くと、その瞳を閉じた。

「……そうだな」

リコはもはや届かないであろう言葉を王太子へ静かに返した。
暫しの沈黙の後、王太子の亡骸を駆けつけていた王の近衛達に託すと、リコは血に汚れた剣を払った。その剣筋に沿って床に血が散り、宝剣は刃こぼれひとつなく輝きを取り戻す。
剣を鞘へと納めたリコは、厳しい表情でルークへと向き直った。

「皇帝陛下、私はこれ以上貴国との戦を望みません。よって講和による和平の締結をお願いしたい。此度の戦は全て我がセルショナードに非があり、我が国は全面的に帝国側の条件を呑むつもりです」

そう言うと、メルク達に同意を促す。

「お前達も異存はないな」

「……はい」

その場にいる元大臣たちも、王と王太子を欠いた今、これ以上の帝国との無益な戦を続ける事は望んでいなかった。それがこの先、どんなにかセルショナードにとって苦しいものになろうとも。

「……受け入れよう。しかしセンガルへの仕打ちを思えば条件は厳しいものとなるぞ？」

ルークはリコ達へと険しい表情で問う。

「承知しております」

リコの返答を受けて、ルークはジャスティンへと顔を向けた。

「ジャスティン、そなたに全権を委ねるゆえ、悪いがもう暫くセルショナードへ留まり講和に向けて話を進めてくれ」

「かしこまりました」

深く礼をするジャスティンの額にルークは手を翳した。

「陛下……」

「これは私のではない」

ジャスティンの困惑したような声に、ルークは苦笑して魔力を移

す。

その途端、リリアーナが抗議するように小さく剣が鳴った。

「これは……」

「姉上からだ」

「しかし、これ程の力は……」

ルークから与えられたシェラサナードの魔力は、彼女の器の半分以上にもなる程であった。

「心配しなくとも姉上はお元気だ。今、マグノリアの者達の魔力は満たされている」

そう言って、ルークは今まで黙って成り行きを見ていた花に微笑みかけた。

「ハナ、そなたのお陰だ」

「え？」

突然の言葉に花は驚いた。

「ハナがマグノリアに歌を届けてくれたからな」

「……届いていたの？」

「ああ」

その言葉に花は瞳を涙で濡らしたが、それでも嬉しそうに微笑んだ。
今までの悲しみと苦しみから解放される様にハナの心は軽くなっていった。
が、そこへ気の抜けた声が割り込む。
「あ、あの～」
その場の者達が皆、声の主であるザックに注目した。
「ところで……皇帝陛下？　なんでここにいるんすか？」
今更のようで尤(もっと)もな質問に、今度は皆の視線がルークへと集まった。
花も思わず、ルークを見上げる。
当のルークはリコへと目を向け、そしてその手に在る宝剣に視線を移した。
「その剣――そのヴィシュヌの剣が本来の力を得たからだ。それによってこの場にも小さいながらマグノリア王宮と同じ力が存在している。それに……」
ルークは一度、言葉を切った。
一番の大きな理由は、勢いを増していた虚無の力が先程急に衰えた為だった。
恐らく宝剣によって王の闇を封じたからではないのか？　ルークの推測は、王太子の闇が封じられた事で更に顕著に表れた虚無の衰えに確信に変わっていた。
しかし、その事は告げなかった。
ルークは小さく息を吐き出し、花の瞳に溢れる涙を親指で拭う。

「今……私の魔力は満たされているからな……」

結局その事だけを告げ、リカルドへと視線を戻した。

「リカルド、そなたの力はまだ安定していないが、その剣が真の主とそなたを認めたのだ。そなたはこれからヴィシュヌと……リカルド・ヴィシュヌ・セルショナードと名乗るがいい」

ルークの言葉に、リコは金色に輝きだした瞳を驚きに見開いた。

臣達からは驚嘆の声が上がっている。セルショナードの歴代王達の中でヴィシュヌの称号を冠した者はいないのだ。

王達の死を払拭するような吉事に沸き立つセルショナードの臣達をそのままに、ルークはジャスティンに告げた。

「では私はハナを連れて帰るが――」

その言葉にトールドが驚き反応した。

「ハナ様を連れて帰るって……一気にマグノリアまで転移する気ですか!?　そんな無茶な!!　ハナ様のお体にどれ程のご負担が――」

「大丈夫だ」

トールドの抗議をキッパリとルークは撥ね付ける。

花は心配そうにするトールドへ安心させるように微笑んだ。ルークが大丈夫と言うなら、大丈夫なのだ。そして同じ様に心配に顔を曇らせているリコへと微笑み……。

「――あ!!」

花はルークから離れ、リコの傍に行った。

「リコ、指輪を……」

そう言って、右手を差し出す。

その小指にあるのは翡翠色に光る指輪。

「……ああ」

リコは花の右手をそっと手に取り、なぜか顔を顰めた。

花の手の甲に己が付けた傷痕を見つけたのだ。

「ハナ、左手も出して」

その言葉に素直に従った花の左手にも同じ様にリコの爪痕が残っていた。

リコは小さく囁くように治癒魔法を詠唱する。途端に花の両手の甲から傷が消え去り、なめらかな白い手に戻った。

一瞬で傷を治した事にリコの力の強さが窺える。その事が嬉しくもあり、花はリコに向かって微笑んだ。

「ありがとう」

その微笑む花の顔を見つめ、リコは握ったままの両手を引き寄せて、何事かを花の耳元で囁いた。

花は一瞬、キョトンとした顔をしたが、すぐにその顔に再び笑みを浮かべる。

リコはそんな花の微笑みを見て苦笑すると、花の右手に意識を集中させた。

それまでの様子をルークは無表情に、それでも拳を強く握り締め黙って見ていたのだが、リコの詠唱の後に起きた出来事に一瞬、驚きに目を見開いた。
それはジャスティンやザック、今まで一緒に行動を共にしていた六人以外のその場にいた全ての者達も同様で、驚きにざわめきだす。

花は再び体が痺れるような、それでも最初の甘い痺れとは違う、少し痛みを伴うことに顔を顰めて目を閉じたが、小さくパリンと何かが割れてしまったような音に目を開けた。
そして、自分の右手小指から指輪が消えている事に気付く。
しかし、それ以外に何も変わった事はなかったので、リコへと感謝の気持ちを込めて再び微笑んだ。

「ありがとう」

その言葉にもリコは苦笑して応えただけだった。
そして花は周りの動揺には気付かずルークの下へと戻る。

「ハナ……」

「はい？」

少し戸惑ったようなルークの声に花は不思議そうに返事をしたが、ルークは花を抱き寄せるだけだった。
それからルークはリコの瞳を真っ直ぐに射貫いたが、リコも怯むことなくその厳しい程の視線を受け止める。暫く黙ったまま、睨み合うように視線を合わせていた二人だったが、やがてルークが口を開いた。

「感謝する」

「――いえ……」

リコは小さく答えると、目を逸らした。

そんなリコから花へと、ルークはその視線を和らげて微笑む。

「ハナ……帰ろう」

「はい」

花はルークに嬉しそうに答えると、ジャスティン達に感謝の気持ちを込めたお礼の言葉を口にした。

「ジャスティン、カイル、ジョシュ、コーディ、ありがとう。マグノリアで待っていますね」

それから再びリコへと向き直る。

「リコ、本当に今までありがとう」

三度の言葉と同時に向けられた花の笑顔は本物の、心からの笑顔だった。

それにリコは目を細めて微笑みを返す。

ルークはジャスティン達へと視線を向け、それを受けたジャスティンが強く頷いたのを確認すると、花と共に一瞬にしてその場から消えてしまった。

「殿下……よろしかったのですか？」

トールドの躊躇いがちな問いに、リコは呟くように答えた。

「俺は……ハナの本当の笑顔が見たかったんだ」

「え？」

リコの声は小さくトールドには聞き取れない。

しかし、リコは構わずに続けた。

「別に諦めた訳じゃないさ。今回はあまりにも……誰にとっても公平（フェア）じゃなかったからな」

そう言って苦笑したリコの顔は、それでも楽しそうだった。

しかし、すぐに決意に満ちた厳しい表情へと改めると、リコは臣下達へと向き直ったのだった。

81．只今、戻りました。

「殿下！　今のはいったいどういう事なのですか！？」
「ハナ様はリカルド殿下のご正妃ではなかったのですか！？」

ルークと花が消えた後、セルショナードの臣下達からは次々と戸惑いの声が上がった。

マグノリアまで転移するという皇帝の驚異的な力にも驚愕していたが、それよりもなぜ皇帝が花を連れて行ってしまったのか――いや、そもそもなぜリコは花から正妃の証である指輪を外したのかが理解できなかった。

しかもその時に起きた出来事――　花の右手小指から指輪が砕け散るように消えた時、花の纏っていたリコの気配までもが同様に散ってしまったのだ。

花が真実リコの正妃だったのならば、先程のように簡単に花からリコの気配が消える事など有り得ない。

それはユシュタールの民にとって周知の事実であり、常識であった。

「――あれは仮初めの指輪だ。無理に纏わせた私の気を指輪によって縛っていたに過ぎない」

「それではハナ様は……」

リコの答えを聞いた臣下の一人から思わず洩れ出た言葉がその場に落ちる。

いつの間にか、祈りの間には重たい沈黙が流れていた。

これからセルショナードは厳しい時代を迎えるだろう。
しかし、ヴィシュヌの名を冠したリコが王として立つのなら、そしてユシュタルの御使いと言われる花が正妃としてリコの隣に立つのならば乗り越えられる、国民もきっと共に困難に立ち向かってくれる。そう期待せずにはいられなかったのだ。
そんな臣下達の気持ちを理解しているリコは、大きく息を吐き出すと再び口を開いた。

「お前達も、本来ならマックスが――王太子がハナを正妃に迎えようとしていた事は知っているだろう？　しかしそれがどんな結果をもたらすことになったか……私はそれを避ける為にハナを保護していたに過ぎない。時期がくれば彼女をマグノリアへと帰す約束だった」

つらつらと出て来る尤もらしい言葉にリコは自身で呆れていた。
これではまるでリコが花の為に尽力していたようではないか。
いったいどれ程の嘘を重ねればいいのだろう。
母であるクリスタベルの予言がリコを縛り付ける。

「――ハナを王太子の正妃として帝国に揺さぶりをかけ、セルショナードの民に癒しをとクラウスは王へ進言していたそうだが……そもそもこの戦の目的はなんだったのか……」

吐き出すように小さく呟いたリコの言葉に答えはなかった。
いつの間にか姿を消してしまったクラウスの目的が何だったのか、答えられる者はこの場にはいない。
だが、全てにおいて責任があるのはクラウスではなく自分達なのだ。その事を自覚している臣下たちの気持ちは重い。
と、そこへ今まで沈黙を守っていたジャスティンが口を開いた。

「リカルド殿下には出来るだけお早く王位に就いて頂きますようお願い申し上げます。そうでなくては講和を進める事ができませんので」

その言葉に皆が我に返った。

ユシュタールに在る国は全て絶対君主制である。セルショナードに王がいなくては帝国と和平を成すこともできないのだ。

いつまでも後ろを振り返ってばかりいてはいけない、前を向かなければ。

「ジャスティン殿、申し訳ないが講和については今暫くお待ち頂きたい。我々は王と王太子殿下の崩御を国民に……国内外に布告を発し、急ぎリカルド殿下に御即位して頂くゆえ――」

「もちろん構いません」

この混乱を治めるには暫く時間がかかるだろうが、新しく王となるリカルドとセルショナードの政務官達の手腕を見るにはいい機会だ。

メルクの申し出に微笑んで答えたジャスティンは、最後に一言付け加えた。

「国内外には……ハナ様のお立場も明確に布達して頂きたい」

「――もちろんだ」

リコの強い返答にジャスティンは深く頭を下げたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ハナ、大丈夫か？」

なんだか『神様』に届けられて初めてこの世界に来た時の感覚に似ているような、ふわふわした気分だった花の耳に、ルークの心配そうな声が入って来た。

「……ハナ？」

花を守る様に抱きしめているルークの腕に僅(わず)かに力が入る。

ルークに心配をかけている事に我に返った花は慌てて目を開けるが、一瞬、眩暈(めまい)を起こしてふらついてしまった。

「ハナ！！」

ルークは花に回した腕に力を入れて支える。切羽詰まったルークの声に、花は深呼吸を何度か繰り返して応えた。

「――大丈夫です……少し立ち眩みしただけですから」

ルークの心配に滲んでいる金色の瞳を見つめて微笑んだ花は、次第に周りに目を向ける余裕が出てきたのだが……。

「グっ！！」

危うく驚きの声？　を上げそうになったが、どうにか堪(こら)える事ができた。

花とルークが着いたマグノリア王宮の月光の塔にある『祈りの間』には、多くの驚きに満ちた顔があったのだ。
レナードやディアンはもちろん、セイン、ガッシュ、グラン……そして、内大臣のドイルや外大臣のコーブ達までいる。

「あ……あの、只今戻りました」

なんとか動揺を抑え気を取り直した花はルークから少し離れ、深々と頭を下げた。
それに安堵と喜びに顔を輝かす者、残念そうな顔をする者といたが、その中でなぜかいるアポルオンが声を上げた。

「姫さん……ひどい顔だな！」

その言葉に花はハッとして、青ざめる。
言われた内容ではなく、アポルオンを見てリリアーナの石の事を思い出したのだ。
当のアポルオンは無言のディアンに制裁を受けながら、「ギャッ！！……ちがっ！！間違えたんです！！……ひどい恰好って……言いたかっ……」と悲鳴を上げていたが。

「どうした？」

花の顔色に再び心配そうに顔を曇らせたルークに、花は訴えた。

「私……リリアーナさんの石が……リリアーナさんが気を集めて作って下さった石が私を守って下さったんですが……」

上手く言葉を継げない花だったが、それでもルークは理解したようで安心させるように花の背を軽く撫でて微笑んだ。

「それは心配しなくていい。リリアーナは大丈夫だ」

ルークの言葉にホッとした花に、レナードが近づき声をかけた。

「ハナ……よく頑張ったな」

レナードの率直な言葉が花の心に沁みて涙が込み上げてくる。レナードの碧い瞳もいつもより輝き滲んでいるようだった。

しかし、レナードはルークに向き直ると、微かに怒りを含んだような声で諫める。

「陛下、無謀すぎです！！　セルショナードからマグノリアまで転移するだけでも無茶ですのに、ハナ様までご一緒になど――ハナ様にどれ程のご負担が……」

レナードの小言をルークは全く聞いていない様子でセイン達に顔を向けると近づく事を許した。

すると、皆が駆け寄る様に近づき嬉しそうに顔を綻ばせる。

「ハナ様がお戻りになられて本当に宜しゅうございました」

「あの……ご心配をおかけしました」

再び深く頭を下げた花に皆は慌てるが、その中、離れた場所にいるドイルが困惑したように声を上げた。

「陛下、これはいったいどういう事ですか！？　リカルド殿下のご正妃になられたハナ様がなぜここに……それにハナ様の気配が……？」

その問いにルークの気が刺すように冷たくなっていく。

「――リカルドの正妃になったというのは偽りであった」

ルークの厳然とした言葉に一部の者達がざわめきだした。

そこへアポルオンを踏みつけていたディアンがルークへと近づき進言する。

「陛下、陛下もハナ様もかなりお疲れの様ですので、今日はもうお休みになった方が宜しいかと存じます」

ルークはその言葉に頷くと、ディアンへと耳打ちするように告げた。

「――急ぎ、セルショナードへの進軍を中止するよう伝えろ。セルショナード王と王太子が斃れた。リカルドが王位を継ぐだろうが、先程そのリカルドからの講和の申し入れを受けた。詳しくは後ほど話す……では、後を頼む」

ディアンがルークから離れ恭順の意を表したのを見届けると、ルークは花をそっと抱き寄せて囁く。

「ハナ、もう少しだけ頑張ってくれ」

花が不思議に思いルークへと顔を上げようとした瞬間、ふわりとした感覚が再び襲い、気がついた時には青鹿の間へと移動していた。

少し気分が悪いが、恐らくセルショナード王城からマグノリア王宮へとあまりにも遠い距離を転移した為に、平衡感覚が少し狂っているのだろう。

それでも花は自分よりもルークが力を使いすぎている為に、辛いのではないかと心配になる。

「ルーク……大丈夫？」

「大丈夫だ」

花の心配そうな問いにルークはすぐに答えると、そのまま花の頬にキスを落とす。急なルークのキスに動揺する花の耳にセレナ達の驚喜する声が入って来た。

「ハナ様！！？」

「――セレナ、エレーン……」

慌てて駆け寄ってくる二人に花は嬉しそうに応えた。
ルークは小さく溜息を吐くと、セレナ達へと花の背をそっと押す。
二人は泣き崩れるように花の足元で膝をついた。

「ハナ様……お戻りになられて……よかっ……」

いつもは冷静なセレナが嗚咽まじりに安堵の言葉を紡ぐが、上手くいかないようだった。エレーンに至っては、声もなく涙を流している。
花も同じ様に膝をついて、その瞳に涙を溢れさせた。
青鹿の間に戻り、セレナとエレーンに再会してやっと花はマグノリアに戻って来たと実感する事ができたのだ。

「セレナ、エレーン、ただいま。――心配かけてごめんなさい」

花の言葉に二人はただ首を振るだけだった。
暫く再会を喜んでいた二人だったが、やがてセレナが気を取り直した様に背筋を伸ばす。

「――私、湯浴みの用意をして参ります。エレーン、あなたはお茶の用意を」

目尻の涙を拭いながらセレナはそう言うと、花の手をそっと取って立ち上がる様に促し、自身も立ち上がる。そして、数歩後ろに下がるとずっと黙って見守っていたルークに深く頭を下げた。

「陛下、申し訳ございません。大変な御無礼を――」
「構わない」

ルークはセレナの言葉を遮ると、同じ様に立ち上がって深く頭を下げるエレーンにも顔を向けて命じた。

「二人とも、ハナは酷く疲れているから休む準備をしてやってくれ」

その言葉に二人は急ぎ動き出す。
確かに疲れていた花は、湯浴みの用意ができるまでソファに座ろうと向かいかけたのだが、再びルークに抱きとめられた。

「ハナ……」

心の底から絞り出したような、安堵と苦しみが混じったような声で名を呼ぶルークに花は不安が込み上げてくる。
やはりルークは辛いのではないだろうか？
魔力や魔法の事がよくわからない花でも、今日のルークがかなり無茶な事をしていたのはわかる。

私が休むより、ルークが休む方が先だろう。
見上げたルークの顔色はやはり悪いようで、花は先にルークに休んでもらおうと口を開いたのだが、言葉を発する事はできなかった。
ルークに口を塞がれてしまったのだ。

「んっ……」

乱暴なほどに性急で深い口づけに、花は息をすることも儘ならなくなる。
足に力が入らず凭れかかる花を更に強く抱きしめたルークは、それでも唇を離すことなく花の舌を絡め取る。
が――

「ッ！？」

急に口内にピリっとした痛みが走り驚いた花だったが、それ以上にルークは驚いたようにハッとして唇を離した。

「……ルーク？」

束の間、驚いたように花を見つめていたルークは、不思議そうに呼び掛ける花の声に気を取り直して口を開いた。

「ハナ……怪我をしているのか？」

そう問われて初めて、花は先程の痛みが口内の傷のせいだった事に気付いた。セルショナードの王城で、王に突き飛ばされた時に切ったものだろう。

「……そうみたいです」

花の返事にルークは一瞬困ったような顔をしたが、すぐに優しく微笑み、再び唇を合わせた。
今度は優しくゆっくりと。

「……ふ……あっ！？」

ルークの舌が花の口内の傷を優しく舐める。と、同時に強烈な甘い痺れが花を襲った。花は思わず縋(すが)るようにルークの腕をギュッと掴むが、耐えられそうにない。
そう思った瞬間、ルークはそっと花から唇を離し、最後にもう一度軽く口づけてから顔を起こした。
花はぼんやりとしながらも、今の甘いキスが治癒魔法だった事に気付く。ずいぶん心臓に悪い治癒魔法だが。

「……ありがとうございます」

「――いや……」

なんとかお礼の言葉を口にした花に、ルークは苦笑して応えた。
そこへエレーンがお茶を運んできてくれたので、花とルークはソファに腰をおろして久しぶりにゆっくりと、エレーンの淹れてくれたお茶を楽しんだのだった。

82．備えあれば憂いなし。

――― なんじゃこりゃー!?

湯浴みの前にふと見た自分の姿に、花は愕然としてしまった。

あまりにもひど過ぎるのだ。

花に付着していた泥や埃、そして血はどうやらルークがいつの間にか浄化魔法で綺麗にしてくれていたらしいのだが、あちこち擦り切れて破れているドレスはシワだらけのヨレヨレ。髪もすっかり艶をなくしてあちこちに飛びはねている。

――― これは確かに、アポルオンさんの言う通り酷い顔……恰好だな……。

この姿をみんなに見せていたのかと思うと、花は落ち込んでしまった。しかも、この姿でルークとキスまでしてしまった事が恥ずかしくて思わず悶えてしまう。

――― いや、もっと恥ずかしい事とかしてますけど!! でもそれとこれとは別でして……シチュエーションが大事って言うか……ただでさえ、見劣りするのにー!! すみませんでした!!

誰に言い訳しているのか、謝罪しているのかはわからないが、とりあえず花はひたすら心の中で悶えていたのだった。

その後、自分で切り揃えていた髪をセレナに整えてもらった。

セレナもエレーンも短くなってしまった花の髪に酷く心を痛めていたが、花は笑って気にしていない事を伝えた。髪の毛はまた伸び

る。それよりもこうしてセレナ達に再会できたことがどんなに嬉しい事か。

そして、少し休むつもりで寝室にいくと、ルークが椅子に座って書類に目を通していた。

「ルークは……休まなくて大丈夫なの？」

寛(くつろ)いだ様子のないルークに、花は心配そうに声をかけた。

「――ああ……俺は大丈夫だから、ハナは気にせず休むといい」

優しく微笑むルークは確かに顔色が良くなっている。

しかし、それでも花がためらっていると、ルークの優しげな表情に困惑が浮かんだ。

「もし気になって休めないのなら、俺は居間にいようか？」

その言葉に慌てて花は首を振り、寝台に入った。

ルークには傍にいて欲しい。――でも何かがおかしい。

寝台に横になり、心に芽生える不安の原因を確かめたくてジッとルークを見ていると、それに気付いたルークは再び優しく微笑んだ。

「どうした？」

「……なんでもないです」

その笑顔に少し安心して花は目を閉じると、あっという間に眠りに落ちてしまった。

目を閉じた花を心配そうに見ていたルークは、すぐに聞こえてきた穏やかな寝息に笑いを洩らし、大きく息を吐き出すと、ルークも

また椅子に座ったまま目を閉じたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今朝の無意味な朝議が終わり、いつものように執務室に戻ったルークはその瞬間、セルショナードからの強烈な力を感じた。
と、同時に突如として虚無の勢いが衰えたのだ。――正確に言うならばセルショナードとの戦が始まる以前の勢いに戻ったと言うべきだが。

――この力は……。

喜ぶべき力の発現に、ルークはなぜか胸騒ぎをおぼえた。
それは、その後に起きた奇跡を目の当たりにしても鎮まることなく、ルークは急ぎディアンやセイン達を呼び出した。
そこへ、シェラサナードがやって来たのだ。

「陛下……」

「わかっています、姉上」

心配そうに顔を曇らせたシェラサナードに強い口調で応えると、ルークは皆に告げた。

「私はこれからセルショナード王城へ飛ぶ」

「陛下！？」

ルークの言葉にその場の者達は驚き、息を呑んだ。ルークが王宮を離れるという事がどういう事なのか、皆十分に理解している。しかも、いくらルークでもセルショナード王城まで飛ぶなど無茶でしかない。

「心配するな、大丈夫だ。セルショナードの宝剣は私に味方してくれる」

「どういうことだ!?」

焦った声で問うレナードに、ルークは苦笑して答えた。

「ヴィシュヌの剣の真の主が現れた。私はそれを見届けてくる」

ルークの声は落ち着いているようだったが、その表情は厳しいものに変わっている。

「陛下、どうかジャスティンに私の力をお届け下さい」

驚きのあまり言葉を発する事も出来ない者達の中、シェラサナードは急ぎ前へ進み出た。シェラサナードの力を預かったルークは、レナードやディアン達に向かってその表情を崩さないままに命じた。

「力ある者は祈りの間で待機せよ。ドイルやコーブも呼び出せばいい。理由は適当に……ハナを迎えに行ったとでも。――皆、万一の場合に備えてくれ」

「……万一の場合……」

ルークが姿を消した後、誰かの慄(おのの)くような声が執務室に落ちたの

だった。

＊＊＊

ルークは剣の導くままに月光の塔へと飛んだ。そして、瞬時に状況を悟った。

結界を破り、踏み込んだ祈りの間で目にした光景にルークは戦慄する。

「ハナ……」

恐る恐る触れた花の頬は温かく、安堵のあまり眩暈がする程だった。

だが、抱きしめたその体は以前よりも明らかに細くなっている。そして、花の体の傷、短くなった髪に抑えられないほどの怒りが湧き上がった。

それでも、腕の中で心配そうに見上げる花の為になんとか堪えたが、伝わる花の苦しみと悲しみに、ルークもまた苦しんだのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

目を開いたルークは、立ち上がり窓辺へと近づいた。

いつの間にか雲の晴れた空を斜陽が赤く染め上げている。

大きく息を吐き出したルークは眠る花の呼吸を確かめると、部屋にこれ以上ないほどの防御魔法を施して、そっと寝室から出た。

「ハナは大丈夫なのか？」

「――ああ、今は休んでいる」

レナードの問いに、ルークは素っ気なく答えた。

ディアンはジッとルークを見ていたが、軽く息を吐き出すと、いつものように口を開く。

「それでは陛下、いったいセルショナードで何があったのかお教え下さいますでしょうか？」

ルークは、青鹿の間の居間に集まった者達を見渡した。

詳しい経緯の説明と今後の方針を明日の朝議までに決める為に、主だった臣下達を呼び寄せたのだ。

「詳しくはジャスティンに聞かねばわからんが、リカルドがセルショナード王を討った。その後に王太子もだ。それは私も見届けた。よって王位はリカルドが継ぐだろう。リカルドはヴィシュヌの剣に真の主と認められたのだ」

ルークは闇の魔力については触れなかった。ただ簡潔に事実を述べただけだ。

「ヴィシュヌの……」

思わず洩れでた誰かの呟きが、静まり返ったその場にこぼれ落ちる。

あまりの事に呆気に取られていた内政長官のグランは、その声に我に返って声を上げた。

「リカルド殿下は父王と弟君を手にかけられたのですか！？」

その言葉に、ルークの纏う気が圧力を増したように重くなる。

「――そんなに驚く事か？　私は兄上を殺めたぞ？」

「ルーク！！」

凍りそうな程に冷たいルークの言葉に、グランはハッとして青ざめ口を噤んだ。強い口調で窘めるようにルークの名を呼んだレナードの顔も僅かに青ざめている。

暫し冷たい沈黙が青鹿の間に流れたが、それはルークによって破られた。

「玉座とはいったい何なんだろうな……」

まるで嘆くように呟いたその言葉はあまりに小さく、聞き取れない者が多かった。

それから重たい空気のまま、講和についての話し合いは夜遅くまで続いたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

話し合いの途中も、ルークは何度か花の様子を窺いに寝室へと足を運んだ。

そしてすっかり夜も更け、皆が王宮にある自室に戻った今も、花は起きる気配がなかった。

食事もとらないまま眠る花をルークは心配したが、花は穏やかな寝息をたてていたので、そのまま寝かせることにした。

それだけ疲れているのだろう。
今日の忌まわしい出来事が花にとってどれほどの負担だったのか。
ルークは花に触れようと伸ばした手を、暫く躊躇った後、結局下ろした。

花に触れれば、先程のキスように衝動を抑えきれなくなるかも知れない。
それは花を傷付ける。
ルークは自身の中に渦巻く醜い嫉妬や怒りを恐れていた。
わかっているのだ。
花とリカルドのつながりは偽りだったと。

リカルドが花の指輪を外した時に、ルークは理解した。
花には魔力が全くない為か、傍にいる者の気に染まりやすい。それはルークもよく知っている事だった。
リカルドは己の気を指輪によって縛り、その指輪と花の纏った気配によって正妃と皆に思わせていたのだろう。
だが、花の右手小指にはめられた指輪を目にした途端、ルークの心と体は嫉妬の炎で焼き尽くされそうになった。しかもリカルドの花を見る瞳にはしっかりと愛情が映っていたのだ。

ルークは再び燃え上がりそうになる醜い感情を抑える為に、何度も深呼吸を繰り返した。

そもそも、なぜリカルドは指輪の偽装をしてまで花を助けたのか。
いったい何をどこまで知っていると言うのだろうか。
それにリカルドのあの力は……。

「くそっ……」

思わず洩れでたルークの声は、静まり返った部屋に響いたのだった。

83．言葉は最も危険な凶器。

――― あれ？……朝？

カーテンの隙間から差し込む光に目を覚ました花は、慌てて起き上がった。

そして辺りを見回して、やっとここが青鹿の間の寝室なのだと気付く。

花は思わず自分の頬をつねって確認してしまった。

――― 夢じゃない？

そんな典型的な行動をしてしまうくらいにマグノリアに戻れたことが信じられなかった。

それなのに、嬉しさよりも寂しく感じるのはルークがいないからだ。

差し込む光の強さはもうすでに朝議の始まっている時間だと告げているのだから、ルークがいないのは当然なのに。

花は身勝手な自分の心を宥めるように大きく息を吐き出した。

と、そこへルークが現れた。

「ルーク！！」

嬉しそうに顔を輝かせる花を眩しそうに目を細めて見たルークは、声に心配を滲ませて聞いた。

「ハナ……大丈夫か？」

「はい、大丈夫です……けど、寝すぎてしまいました」

気まずそうに答える花に、ルークはホッとしながらも楽しそうに笑った。

「まったくな。だが、顔色も良くなったようだ」

安堵したように微笑むルークに花は思わず見惚れる。

――――ルーク……カッコ良すぎ！！

久しぶりに、改めて見る美麗すぎる姿のルークに、なぜだか花は恥ずかしくなってしまった。

頬を染めて俯く花を見るルークの瞳は愛情に滲んでいたが、すぐに逸らすと小さく息を吐き出して今度は残念そうに微笑んだ。

「もう行かなければ……花は腹が減ってるんじゃないか？　朝食をとって、今日は一日ゆっくり過ごすといい。ではまた夜に」

そう告げると、慌てて顔を上げた花を置いて消えてしまった。

「……」

あっという間に去ってしまったルークに、花はなぜだか違和感を感じた。

ルークは朝議を抜けて来てくれたのだろうから、急いで戻るのは当たり前だ。

でも――――何かがおかしい。

再び俯いた花は、枕元に視線をやってハッとした。

寝台にルークの寝た形跡がないのだ。

――――　やっぱり私は……。

花は心に淀む不安を押さえつけるように唇を噛みしめて、身支度に取り掛かったのだった。

＊＊＊

「やはりお疲れだったのですね。陛下もずいぶんご心配なさっておいででしたが、お顔の色も戻られたようで安心致しました」

「あの……」

「はい？」

身支度を手伝ってくれながら嬉しそうに話すセレナに、花はルークが昨晩どこで休んだのか聞こうとして、やめた。

「……いえ、なんでもないです」

そう言って微笑む花に、セレナは不思議そうにしながらも続ける。

「お夕食もお召しになられなかったので、お腹が空いてございましょう？　今、エレーンが用意しておりますから」

夕食どころか、昼食も食べていなかった花は確かにお腹が空いていた。

そうして花は、朝食をとった後ゆっくりと過ごす事にしたのだが……。

――― ああ、私なんて事を……せっかく届けてもらったシューラを置いてきてしまった。

午前にシューラを弾くことはセルショナードでも日課となっていたのだが、昨日の騒動ですっかり忘れてしまっていた事を花はひどく後悔した。

「セレナ、エレーン……シューラをありがとう。すごく嬉しかったです。でも、あの……セルショナード王城に置いてきてしまいました。ごめんなさい」

「何をおっしゃられるのですか！　私たちにお謝りになられる必要などございません！！」

「そうでございます。お役に立てたのなら私共も嬉しゅうございます。シューラはきっとジャスティン様がお持ちになってお戻り下さいますでしょうから……ああ、それよりも使いを出して先に届けて頂きましょうか」

頭を下げた花に二人は慌てたが、エレーンに続いたセレナの言葉に今度は花が慌ててしまった。

「いいえ！　それはあまりに申し訳ないです！！　大丈夫です！」

結局、シューラは何事にも抜かりのないジャスティンが持ち帰ってくれるだろうと、それまで待つ事になったのだが、使いを出すまでもなく三日後には、ジャスティンによって花の下へと届けられたのだった。

＊＊＊

その日は久しぶりによく眠れたお陰で体の疲れは殆どなく、午前中はゆっくりと本を読んで過ごす事が出来た。実際、十八時間近く眠ったようだ。

しかし、花が戻った事を聞き付けてか、早速面会の申し込みが入っているようだった。

それらは全て断っていたのだが、一人の少女がどうしても受けて欲しいと中々引き下がらなかった。

どうやらどこかの貴族の侍女見習いのようなのだが、どうも受けてもらえるまで戻ってくるなと言い付けられているようなのだ。

セレナとのやり取りに気付いた花は、少女が気の毒に思えて受ける事にした。

そうして午後になってやってきた伯爵令嬢は、以前、正妃候補に決まったと花に挨拶に来た三人のうちのタラコさんであった。

「ハナ様、イザベラ様のお越しです」

――――　そうそう、イザベラさん！！　タラコさんはイザベラさんでした！！

セレナのお陰で、すっかり忘れていたタラコ令嬢の名前を思い出した花は、無事にイザベラと儀礼的な挨拶を交わし、応接ソファへと落ち着いた。

「ハナ様、今日はご無理を言って申し訳ありませんでした」

「いえ、構いません。大切なお話がおありになると伺いましたが？」

「ええ、実はそうですの」

花の言葉に嘘臭い微笑みを浮かべて答えたイザベラは、ジッと花を見つめて小さく呟いた。

「もう陛下の気を纏っているのね、ずうずうしい」

「え？」

あまりに小さいイザベラの声は花には届かず、思わず聞き返したのだが、イザベラはそれには応えず心配気に顔を曇らせて再び口を開いた。

「昨日は大変恐ろしい事がセルショナードで起こったそうですわね？　ハナ様もその場に居合わせてしまったとか……大丈夫でございますの？」

花は昨日のセルショナードでの出来事をイザベラがすでに知っているらしい事に驚きながらも、なんとか微笑んで答えた。

「ご心配頂きありがとうございます。でも大丈夫です」

イザベラはそんな花にわざとらしく驚いて見せた。

「まあ！　大丈夫だなんて……ハナ様はご立派ですわね！！　もし私がその場に居合わせていたなら恐ろしくて、とても正気ではいられないと思いますわ。やはり市井の方はたくましい神経をお持ちですのね」

「イザベラ様！！　ハナ様に失礼です！！」

イザベラのあまりにも無神経な言葉に、控えていたセレナが思わず抗議した。

しかし、イザベラはそんなセレナを不快そうに見る。

「まあ、なんてこと……ハナ様の侍女は私に何という口をきくのかしら。主人達の会話に口を挟むなんて礼儀知らずもいいところ……ハナ様、側に置く侍女は選んだほうがよろしくてよ？　でないとハナ様の品位も疑われてしまいますわ。まあ、市井の方に品位なんてないのかしら……でも、なんでしたら私が新しい侍女を紹介致しますわ」

「それには及びません」

つらつらと嫌味を述べるイザベラに、花は怒りに青ざめながらもキッパリと断った。

確かにイザベラは名門伯爵家の令嬢であり、男爵家のセレナとは同じ貴族でも家格が違うのかも知れないが、だからといって今の言い様を許すわけにはいかない。

花はいつも以上にニッコリ微笑んだ。

「イザベラ様？　申し訳ありませんが、大切なお話とやらがないようでしたらご退室頂いてもよろしいでしょうか？」

毅然とした花の態度に、イザベラは顔を引き攣らせながらも微笑みを浮かべた。

「いいえ、もちろん大切なお話はございましてよ。でも、この様に侍女が口を挟むのでは……ハナ様、お人払いをお願い頂けます？」

「なりません」

イザベラに否定の言葉を返したのは、今まで扉の内側に黙って立っていた近衛のランディだった。

今は花の護衛達がその役目を果たせない為、ルークの近衛達が花の護衛を務めているのだ。

しかも花は気付いていなかったが、扉の外には今までより一人増えた二人の近衛が立っており、また花の護衛の人数を増やす為にレナードは急ぎその人選を進めていた。

イザベラはランディを睨みつけはしたが、先程のセレナの様に貶める事はしなかった。

恐らくそれは、ランディが次男とはいえ、イザベラと同じ家格の名門伯爵家の出身であり、ルークの近衛という立場だったからだろう。

「ここは女同士の内緒話も出来ないのね……まあ、いいわ」

独り言のようにイザベラは呟いて、何かの呪文を唱える。

瞬時にランディは剣に手をかけたが、すぐにその呪文の内容に気付いたのか、眉を寄せながらも剣から手を離した。

「今のは？」

不思議に思って聞いた花の問いに、イザベラは馬鹿にしたように微笑んだ。

「まあ……ハナ様ったら、こんな簡単な魔法をご存じないのですか？　これは聞かれたくない話をする時の魔法ですわ。これで私たちの会話は他の者には聞こえませんのよ」

――――　そんな魔法まであるんだ。便利というか、馬鹿らしいと言うか……。

心配そうに二人を窺うセレナ達に花は微笑みを浮かべながらも、得意満面なイザベラに呆れていた。

「それで結局、大切なお話というのは何なのでしょうか？」

この馬鹿馬鹿しい茶番をさっさと終わらせたくて、花は話を促した。

そんな花を申し訳そうに見ながらも、イザベラはもったいぶった口調で話し始める。

「私……ハナ様がお戻りになられて本当に嬉しく思っておりますのよ。何と言っても、ハナ様のお歌には素晴らしいお力がおありですものね……皆様もその事は喜んでおられるようですわ……でも……ユシュタルの御使いと言われるハナ様にご遠慮なされて、恐らく皆様おっしゃられないでしょうから、私が心を鬼にして申し上げようと思いましたの」

イザベラは一旦言葉を切ると、紅茶を口に含んだ。

花はイザベラが何を言いたいのかがわからず、ただ黙って聞いていた。

すると、先程までの微笑みが嘘のように、その目に侮蔑の色を浮かべてイザベラは告げた。

「この青鹿の間からご退去なさいませ」

その言葉に花は目を見開いた。

「そもそも、この青鹿の間はご正妃様の『白凰の間』に次いで位の高いお妃さまのお部屋。それをいくら『癒しの力』をお持ちだからといって、市井の出であるハナ様がお使いになられる事自体が間違っているのです。しかもハナ様は事もあろうに他国の王子のご正妃にまでなられた方。例え偽りだったのだとしても、再び陛下の許にお戻りになられるなど信じられないほど厚顔というもの。陛下はお優しくていらっしゃるから、何もおっしゃられずにハナ様をお受入れになられたのでしょうが、本来ならハナ様から身を引くべきなのです。皆様、ユシュタルの御使いとハナ様にご遠慮なさっているでしょうから私が申し上げに参りましたの」

そこまで言い切ると、イザベラは魔法解除の呪文を唱えて立ち上がり、青ざめた花の顔を満足そうに見下ろした。

「それでは私、これで失礼致しますわ。お見送りは結構です」

そして、さっさと扉の外へと消えてしまった。

花は見送りの為にソファから立ち上がったものの、そのままそこから動く事は出来なかった。イザベラの言葉にすっかり打ちのめされていたのだ。

「ハナ様、大丈夫でございますか？」

「何をおっしゃられたのです？」

心配そうなセレナとエレーン、そしてランディに向かってそれでも花は微笑んだ。

「大丈夫です。ただやはり少し疲れたので休みますね」

そう告げると、花は溢れだした不安を胸に抱えて寝室へと下がっ

たのだった。

84．そうだ、南にいこう。

イザベラに投げつけられた非難は、リコの正妃になると決めた時から覚悟していたものだった。

それでもルークの傍にいられるなら、何を言われても平気だと思っていた。

しかし――。

『陛下はお優しくていらっしゃるから、何もおっしゃられずにハナ様をお受入れになられたのでしょうが……』

イザベラのこの言葉は、ずっと花の心の中に淀んでいた不安を大きく膨れ上がらせ、溢れ出させてしまったのだ。

ルークに嫌われてしまうことが、本当はずっと不安で怖かった。

――――やっぱり私は……。

昨日のキスからよそよそしくなってしまったルークの態度。

ルークは花に触れなくなっていた。

以前は花が戸惑うほどに触れていたというのに……。

ルークは優しい。

だから、花に出て行くようには言わないが、やはり受け入れる事が出来ないのだろう。

それにいずれルークはイザベラか、他の二人のどちらかを正妃として娶る事になるかも知れない。

花はそれを、ルークの優しさで側に置いてもらうだけの立場で見ていなければならないのだ。以前、三人に面した時はチクリと胸が痛みはしたものの、これ程までに苦しく、辛い事だとは思いもしなかった。

「いらない」と言われても、侍女でも下働きでも何をしてでもルークの近くにいたいと思っていたけれど、このままここにいるのは耐えられそうにない。

長椅子で膝を抱えて俯いていた花は、寝室の扉を控えめにノックする音に顔を上げた。

気が付けば、陽はもうかなり傾いている。

花が寝室にいる時は、セレナ達から声をかけて来る事は珍しいので、不思議に思いながらも応じた。

「はい？」

「ハナ様、急ではございますが、セイン様から面会の申し込みが来ておりますが、どうなさいますか？」

「もちろん、お受けして下さい！」

セレナに慌てて答えながら、花は急いで立ち上がった。

セインはジャスティンが花を助けにセルショナードへ入国する理由の為に、花を養女にしてくれたのだ。

その事を失念していた自分を花は呪った。本来なら昨日、花からお礼を言うべきだったのに。

そうして青鹿の間に現れたセインは少し疲れてはいるようだったが、ジャスティンとよく似た面立ちに優しい微笑みを湛えていた。

セインもまた魔力が強いので、その姿は三十代前半といった所だが、口髭を生やしている為か、もう少し年上の印象を与えている。

「ハナ様、お疲れのところ無理を申しましたことお許し下さい。しかし、昨日より随分お顔の色も良くなられた様で安心致しました」

その柔和な顔に安堵の色を浮かべるセインは本当に優しそうで、花はセインが義父となってくれた事が嬉しかった。

「ご心配をおかけして申し訳ありませんでした。本来なら私の方からお礼とお詫びに伺うべきでしたのに。この度は私の為にお力添えを頂いて……私を養女にまでして頂き、本当にありがとうございました」

深く頭を下げる花に、セインは恐縮したようだ。

「ハナ様、お顔をお上げになって下さい。ハナ様の養父とさせて頂けるなど、私には身に余る光栄。私には娘もおりませんから、妻共々大変喜んでいるのですよ。もう少し落ち着きましたら、改めて妻とご挨拶に伺いますので、よろしくお願い致します。では、このような簡単な挨拶で申し訳ありませんが、今日はこれで失礼致します」

そう言うと、セインは早々に退室してしまった。

講和についての朝議が長引いているらしいので、恐らくその合間を縫って挨拶に来てくれたのだろう。

椅子を勧める事もせずに、再び礼儀を欠いてしまった事を後悔しながらも、花はソファに座って考えを巡らせた。

マグノリア皇帝の寵妃――それが花の価値だ。

当然、ユシュタルの御使いとまで言われる『癒しの力』も花の価値ではあるが、セインにとって果たしてそれは、花を養女にしてまで価値のあるものだろうか。

そこまで考えて、花は我に返った。

――違う！　セインはそんな事を考えて私を養女にしてくれたわけじゃない……ただ、純粋に私を救ってくれるためだ……たぶん。

どうしても他人（ひと）を信用する事ができない、そんな花の厭な部分が浮かび上がって来た事に、花は自分で自分を嫌悪した。

負の感情に囚われてしまった花は、どうしてもいつものように「まあ、いっか」と流し、前向きに考えることができなかったのだ。

そうして夜になると、疲れを理由に早々に寝室へと下がったのだが、眠る事など出来ず、結局花は寝台に腰をかけて考え込んでしまった。

本来、死ぬはずだった花がこの世界にいるのは、ユシュタールの皆を癒す為。

『癒しの力』が私の価値ならば、やはり私は世界中に音楽を、癒しを届けなければ。

ルークの傍にいたい、ルークを守りたいと思っていたけれど、結局何も出来なかった自分がルークの傍にいる資格はないのだ。

それならば、世界中に癒しを届ける事が出来たら、少しはルークの為になるのではないか。みんなの魔力が満たされたなら、少しはルークの負担が減る？

以前、リコ達とコステイまで旅したように、旅芸人の一座に入れてもらえば、世界中を回れるだろうか。

――でも寒いの苦手なんだけどな……そうだ、南に向かうのはどうだろう？　南……サンドル王国を目指す？

サンドル王国はユシュタールの最南端に位置する王国で、マグノ

リアからは海を渡らなければならない。
以前から花は、他国の使者とは面会をしなかったし、書状や贈り物も受け取る事はなかった。
それに業を煮やしたのか、一度、花が散歩中に突如サンドル王国の者が嘆願に現れた事があったのだ。それはカイル達護衛がすぐに追い払ったが、その者達の切羽詰まった様子に、花は申し訳なく思ったものだった。

――でも……私は本当に世界中の人達を癒す事ができるのかな？　セルショナードでも結局、みんなに守られて、ルークに無理をさせてまで迎えに来てもらっただけ。それに……ッ！！

花は急に込み上げてきた嗚咽を堪えた。
昨日の記憶が恐怖となり、突如として花を襲ったのだ。
明らかに花を狙って来ていた兵達の闇に沈んだ目。頬に散った血の感触。迫り来る闇。

――私は……私は何をした？　私に何ができた？

王が施したというリコの呪を花は解く事が出来た。
しかしその結果は、リコが父親である王を討つ事だった。そして、リコは弟である王太子も討たなければならなかったのだ。
それは宿命と誰もが諦めていたけれど――。
忌まわしい記憶が花を責め苛む。
花は必死で震える体を抱きしめたが、抑える事は出来なかった。

＊＊＊＊＊

「ハナ？」

寝室に入ったルークは、花の様子がおかしい事に気付き、急ぎ駆け寄った。

花の顔は真っ青になり、細い体を震わせている。

「ルーク……」

ルークを見上げた花の瞳から涙が溢れ出した。

そんな花に胸が張り裂けそうになりながらもルークは触れる事が出来ず、すぐに俯いてしまった花に視線を合わせる為に膝を付いた。

「どうした？」

ルークの優しい問いに、花は首を横に振るだけ。

「今日……馬鹿な女に何を言われた？」

花がイザベラと面した事を当然ルークは知っていた。そしてその無神経な厚かましさに怒りが込み上げたのは言うまでもない。

ルークは花の様子にイザベラが原因かと更に怒りを募らせた。

「ちっ、違います……そうじゃないんです。そうじゃなくて私は……」

ルークの声に冷たいものを感じ、花はなんとか声を絞り出して否定したが、気持ちが混乱していてどう言えばいいのかわからない。

ルークは心配そうに顔を曇らせながらも、優しく促した。

「ハナが？」

ダメだ。ルークの優しい顔を見ると甘えてしまう。
触れて欲しい。抱きしめて欲しい。そして、この恐怖を、不安を取りのぞいて欲しい。
そんな言葉が飛び出しそうで、花は唇を噛んだ。

感情を押し殺して俯く花を、ルークはとうとう耐えきれずに抱きしめた。
目の前で花が悲しみ苦しんでいるというのに、これ以上ただ見ているだけなどできなかったのだ。
腕の中の花は折れそうなほど細く、微かな震えと共に伝わってくる感情にルークは酷く後悔した。

あの忌まわしい出来事に傷つかない訳がないのだ。
いつも毅然として微笑んでいても、花がその心にどれ程の苦しみを抱えているのか、分かっていながら自身の醜い嫉妬に囚われて、更に花を不安にさせ傷付けてしまった。

「違う、ハナ……そうじゃないんだ……」

ルークは上手く言葉を継ぐ事が出来ずに、荒く息を吸った。

「ハナは何も悪くない、すべて俺が……俺の醜い感情がハナを傷付けるのが怖かったんだ」

「ルークが……私を傷付ける？……それは私を……嫌いになったからですか？」

「まさか！　そんな訳あるはずがない！！」

ルークの言葉を信じたい。でもルークは優しいから。
優しい言葉に縋りそうになる自分を奮い起こし、そっとルークから離れようとする花をルークは逃さない様にと腕に力を込めた。

「信じてくれ、ハナ」

「でも……私は何も出来ませんでした。みんなに迷惑をかけて、守られて……リコの――」

「あいつの名は言うな!!」

怒気を含んだルークの声に、花はビクリと肩を揺らした。
自分の怒りで花を怖がらせてしまった事をルークは悔やみ、苦しげに顔を歪めて力なく腕を下ろし身を引いた。

「すまない……ハナがあいつの名を口にするだけでどうしようもない怒りが込み上げてくる。そしてそれをハナにぶつけてしまう……それが俺は怖い。それでも……傍にいて欲しい。俺にはハナが必要なんだ」

「私は……ルークの傍にいてもいいんですか？　何も出来なくても……ルークは嫌じゃないですか？」

拒絶される事を脅えているような花の震える声に、ルークは強く否定した。

「何をバカな事を!!　花がどれ程の事をしてくれたか……花を嫌いになれる訳がない!!　こんなに……こんなに大切なのに……」

最後は絞り出すように言うと、ルークは花を再び強く抱きしめた。

苦しいはずのその抱擁に、花は安堵し、感謝するようにありったけの勇気を集めてキスをした。
それは上手く出来ない、たどたどしいキス。
ルークは一瞬驚いたようだったが、すぐに応えると激しい程のキスを返した。
息が詰まるようなキスの後、花はルークに回した腕にギュッと力を入れて、今にも泣き出しそうな声で囁いた。

「ルークが私を必要としてくれるなら……嬉しいです。私はルークに触れてほしいです。私はルークになら何をされても傷付きません……いらないって言われない限り」

「……やめてくれ」

花の言葉にルークはギュッと目を瞑り、苦しそうに訴える。

「ご、ごめんなさい。私……」

ルークの優しさをやはり勘違いしてしまったと、慌ててルークから離れようとした花は、柔らかな枕へと押し倒された。

「ルーク？」

「これ以上、俺を煽らないでくれ」

花はルークの言葉を、その後に続いたキスによって理解した。
昨日のキス以上に性急で乱暴なキスはやがて全身に広がっていく。
それは苦しいくらいに激しくて、痛いほどに甘い。
怖いくらいの激情に、花は今までルークがどれほど気を使ってくれていたのかを始めて知った。

それでも花はルークのぬくもりを肌に感じ、ルークに触れられる喜びに、胸がつまるほどの幸せに包まれたのだった。

８４．そうだ、南にいこう。（後書き）

※妻＝正妻です。（セインは妻一人ですが）

85．順番待ちは長蛇の列。

まだ陽も昇らない早朝、グッスリ眠る花を抱き寄せてルークは震える息を吸い込んだ。
花が再び腕の中に戻って来た喜びに、心が激しく揺さぶられている。

この上なく愛しい存在。

それなのに、昨晩は花に無理をさせてしまったのではないかとルークは悔やみ、今度は傷つけないようにそっと抱きしめて花の額にキスを落とす。
と、花がパチリと目を開けた。

「すまない……起こしてしまったな」

ルークは申し訳なさそうに花に声をかけたのだが、花は応えることなくルークの顔をジッと見たまま何度も何度も瞬きを繰り返した。
そして、いきなりルークの頬を軽くつねる。

「痛い？」

花の突然の行動に驚き、ルークは無意識に頷いてしまった。
すると花は急いで手を離し、優しくいたわるようにルークの頬を撫で、今度は自分の頬を強くつねると、その目にじわりと涙を浮かべた。

「……いひゃい」

ルークは慌てて花の手を取り、赤くなった頬をそっと優しく撫でた。
変わらず突飛な行動をとる花を愛しく思いながらも、まだ溢れる花の涙に心配になる。
「そんなに痛むのか？」
その問いに、花は小さく首を振ってルークにギュッと抱きついた。
「夢じゃない」
「ん？」
「夢じゃない。ルークがいる」
「……ああ」
「毎晩、夢を見たの。でも……」
涙を堪えて更に強く抱きつく花に、ルークはその感情を抑え切れなくなる。
花以上に強く抱きしめ、そして何度もキスをした。
軽く、深く、触れるだけのように、貪るように。
やがて花は背中にまわされた大きな手に安心して、再び眠りに落ちていったのだった。
＊＊＊
微かな物音に花が目を覚ますと、ルークが身支度を整えていた。

「ルーク？」

「ハナ、起き上がらなくていい」

起き上がろうとした花をルークはすぐに制した。その言葉に花は甘えて、ボフッと枕に埋もれる。

身体に力が入らない。

それでも、目はルークを追ってしまう。

ルークは花と目が合うと、優しく微笑み寝台へと近づき腰かけた。

「ハナ……」

優しく花の髪を梳きながら、ルークは何か言いかける。

しかし、結局言葉にならないようで、そっとキスを落とすと、大きく息を吐き出して立ち上がった。

「今晩……遅くなるかも知れないが、できたら起きて待っていて欲しい」

ルークは花が大きく頷いたのを確認すると、屈んで再び花に軽くキスをして消えてしまった。

花は、初めてルークに「起きて待っていて欲しい」と言われた事に驚きながらも、幸せを噛みしめた。

――――我ながら単純だな……。

昨日までの不安が嘘のように晴れていた。

当然忌まわしい記憶も、この先への不安もまだ花の中に在る。

それでも、ルークが傍にいてくれるなら、傍にいられるなら花は

立ち向かえる勇気が湧いて来るのだった。

＊＊＊＊＊

ルークは自身の執務室ではなく、ディアンの執務室へと飛んだ。
レナードも瞬時に現れる。

「ルーク、どうした？」

滅多にディアンの執務室に足を踏み入れる事などないルークの行動に驚き、レナードはルークを見据えた。
と言うより、敢えてルーク以外を視界に入れなかった。

ディアンの執務室は、雑然とした自分の執務室やルークのそれとは違って、完璧に整理整頓が行き届いている。恐ろしいほどに。
その壁に並んだ書棚で何よりも場所を占めているのは、その背表紙に大きな文字で『レナード観察記録』と記された物。それが何十冊も並んでいるのだ。
そして、中には一冊だけ違う手蹟で『アポルオン観察記録』と記された物があるのだが、それは実はアポルオンがこっそり差し込んだものであり、中身は白紙である。
ディアンはあくまでもそれを無視しているのだが、アポルオンはその白紙の記録を開いては嬉しそうな吐息を洩らしているとかなんとか……。

更に、もう一つの大きな書棚に並んでいるのが、『〇〇伯爵家重要機密』などの、帝国の貴族達の家名と共に重要機密の文字が記された背表紙の冊子が並んでいる。そしてそれはよく見れば、帝国の

貴族達だけでなく、七王国の王族・貴族の名も並んでいるのだ。
この執務室に侵入を試みようとした者達は、ディアン暗殺を企む者達の数十倍に上るのだが、未だかつて、それを果たし得た者はいない。

ディアンは突然現れたルークに驚きもせず、暗黒笑顔を見せた。

「おはようございます、陛下。それで、どのように為されますか？」

「ハナと私の前に二度と姿を見せない様に」

それだけ言うと、ルークはディアンの返事を待たずにその場から消えてしまった。

「え？　おいっ！　ルーク！！」

さっぱりわかっていない様子でルークを追ったレナードに、ディアンは愛情を込めた？　溜息を吐く。
二人の問答は、昨日花に面した伯爵令嬢――イザベラについてだった。
別にイザベラの行動に非があったわけではない。ただ、ルークが許せないだけなのだ。
それゆえ表立って処罰するわけにはいかず、ディアンへと任す事にしたのだった。

「さて、どうしましょうか……」

そう一人呟くディアンの顔は、それはそれは楽しそうなものであった。
イザベラの父親である伯爵の言動は最近目に余る。

本人は内大臣ドイルの腰巾着として、ドイルを隠れ蓑に上手く立ち回っているつもりなのだろうが、ディアンにしてみれば、目の前で裸踊りを見せられているくらいに目障りなのだった。
そして結局、イザベラの実家である伯爵家は、ディアンお得意の『生かさず、殺さず』によって零落していくのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

レナードはうんざりしていた。
もうすぐ夜の刻（二十二時）になろうというのに、講和条件についての朝議は終わりそうにない。
そもそも今、条件について論じ合う事自体がおかしいのだ。議論する事は別にあるというのに。
しかし、大臣達は如何にセルショナードから絞り取れるか、平たく言えば、自分たちの懐にどれだけ入れられるかを論争しているのだ。
当然、セルショナードを属国にすべしという意見も出た。
これはルークの一睨みで潰えたが。
あまりの馬鹿馬鹿しさにレナードが思わず溜息を洩らした時、突然ルークが立ち上がった。
途端に議場は静寂に包まれる。

「これ以上は無駄だ」

それだけ告げると姿を消してしまったルークを追って、レナードもまた消える。

ディアンは唖然とした様子の大臣達に呆れながらも、口を開いた。

「今、我々が為さなければならないのは一日も早いセンガルの復興と、軍の補強、二度と他国からの侵入を許すことのない様に軍の配置の見直し、国境警備の強化などです。明日からはそれをお忘れなきようお願い申し上げます」

そう言うと、議会の終了を告げ、ディアンもさっさとその場から消えてしまったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ハァナ」

「ひゃうっ！！」

長椅子で本を読んでいた花は、突然耳元で甘く囁くようにルークに名を呼ばれて悲鳴？　を上げた。

「もう！　いきなり声をかけるのはやめて下さいって言ってるじゃないですか！！」

耳を抑えて真っ赤になった花は後ろに立つルークに文句を言うが、当のルークは嬉しそうに微笑んでいる。

そんなルークに、花はムムっと眉を寄せたが、すぐにその顔に笑みを浮かべた。

「早かったですね？」

遅くなるかも知れないと聞いていたので、深夜になるかと花は思っていたのだが、まだ二十二時を回った所だ。

「ああ……あまりに馬鹿らしいので、切り上げてきた。もう、いい加減あの――」

花の隣に腰かけたルークは、その言葉を切った。

微笑んで話を聞いていた花は、そんなルークに少し首を傾げる。

その仕草が愛らしくて、ルークは思わず軽く口づけた。

花と二人でいる時に、あの馬鹿共の話をするのはあまりに無駄だと思えたのだ。

ルークは隣に座る花にもう一度キスをした。先程よりも深く。

唇を離すと、ルークは一度大きく息を吸った。

「ハナ……俺は以前、ハナを面白半分で側室にしたと言ったが……」

そこでルークは再び言葉を切った。花は心配そうにしてはいたが、黙って聞いている。

「俺は生涯、正妃も側室も娶るつもりはなかった」

「ルーク？」

花は思わずルークの手を握った。吐き出すように言うルークがとても苦しそうだったのだ。

それは以前、セルショナードの王太子が言っていた事に関係があるのかも知れない。『皇帝は皇太子時代に何人もの側室を殺めた』と。

だが花は、例えそれが事実だったとしても、無視する事に決めていた。大切なのは今のルークなのだから。

冷静に考える花の気持ちが伝わった訳ではないだろうが、ルークは花の握った手を握り返して微笑んだ。

「子を生す事が帝位に就く者の義務だという事もわかっている。だが、そんなものはどうでもよかった。……まあ、それは今も変わらない。それがジャスティン達にどれだけの負担をかけるかもわかっているのにな……。貴族達は妃を娶れ、子を生せと五月蠅いが、その一方であいつらは自分の帝位継承権が何位なのか指折り数えているんだ」

そう言って薄く笑うルークは、心底貴族達を嫌悪しているようだった。

「ハナはこの国の帝位継承権を持つ者達が何人いるか知っているか？」

「……百人くらいですか？」

「いや……はっきりわかるだけでも、五百人は下らないだろうな……」

ルークの答えにハナは驚き、目を見開いた。

そんな花にルークは微笑むが、その瞳には苦悩が宿っている。

「今、帝位継承権第一位に在るのは皇太子だ」

「え？　でも……」

「ああ、今は空位だから継承権第一位の者は存在しない」

存在しない者が第一位の継承権を持っているなんて訳がわからない。

花の考えに同意するようにルークも苦笑を洩らした。

「そして第二位は……ジャスティンだ」

その言葉に花は再び驚く。その気持ちをルークは汲みとった様にゆっくりと説明を始めた。

「この世界では魔力が第一だ。魔力が強い者ほど優先される。よってそれは継承権でも表れる。もちろん、直系子孫が優先はされるが……それ以外においては、より皇統に近く、より魔力の強い者が優先される。よって今、このマグノリアでの帝位継承権はジャスティンの後に、ディアン、レナードと続く……そしてジャスティンの子であるクリストファーが今は何位だったか……が、あと十年もすれば第三位になるだろうな」

その説明で花は理解した。

あの時――セルショナード王がジャスティンに自身の最期を見届けるように懇望していたのは帝国王宮の侍従長にではない、第二位の帝位継承権を有する者に対してだったのだ。

とすれば、講和についてルークがジャスティンに全権を委ねたのも……。

「あれ？　ジャスティンのお子さんは第三位になるんですか？」

母が先帝皇女ならば、ジャスティンよりも皇統に近いのではないか、そう思って花は聞いたのだが、その問いにルークは何故だか、

嫌そうな顔をする。
しかし、諦めたように息を吐き出すと、再び口を開いた。
「帝位継承権は度々入れ替わる。リカルドが今何位なのかは知らないが、近いうちにあいつが第二位の継承権を得るだろう」
その言葉に花は心底驚いた。もう何度驚いたかわからない。
しかし、当然と言えば当然なのかも知れない。リコはクリストファーと同じ様に、先帝皇女を母に持ち、しかもヴィシュヌの名を冠す程の魔力を発現させたのだから。
考えたくはないが、ルークにもしもの事あればリコがマグノリア皇帝とセルショナード王とを兼任することになるのだ。
「まあ要するに、この魔力は別としても、俺の代わりはいくらでもいるという事だ」
自嘲めいたルークの言葉に、花は握り締めた手に力を入れて大きく首を振った。
ルークの代わりなどいるわけがない！
例え、ルークに魔力の欠片もなくても、花にはルークでなければダメなのだ。
ルークは花のそんな強い想いを読みとったのか、嬉しそうに微笑むと握った手に口づけた。
それから、おもむろに花の足元に跪く。
「ルーク？」
ルークは不思議そうに問う花の瞳を熱い眼差しで見上げた。
「ハナ、俺の指輪を受けて欲しい」

「ルーク！？」

今度は驚きの声を上げて立ち上がろうとする花を、ルークは握った手に力を込めて押しとどめる。

「……いやか？」

珍しく不安を含んだ問いに、花は慌てて首を振った。

――――　いやなわけがない！！　でも……。

「今は正妃の証と呼ばれているが……指輪は本来、男が愛する女に贈るものだ。独占欲の塊でしかないが……俺は二度とハナが他の男の指輪をしている所を見たくない。ハナを独占したいんだ」

そう言うと、再び花の涙に滲む瞳を見つめた。

「愛している」

ルークの告白に、花はただ頷くことしかできなかった。

胸に溢れる気持ちが言葉にならない。

それでも花の想いはルークに伝わった。

ルークは一度花の右手に口づけると、何事かを唱える。

次の瞬間、リコの時と同じように――いや、あの時以上に体中に甘い痺れが走り、花は目を閉じてルークの手をギュッと握った。

そして目を開けた花が見たのは、自分の右手小指に光る指輪。

それはルークの瞳と同じ綺麗な金色で、その中にはまるでプラチナに輝く星のように光が瞬いている。

「きれい……」

花は思わず呟いた。

その震える唇をルークが塞ぐ。

優しく甘いキスの後に、ルークは花を強く抱きしめた。

「馬鹿な貴族達が何を言おうと関係ない。正妃など、ただの称号でしかないんだ。俺はこの先の生涯、ハナ一人だけだ」

「――でも……」

花はいつまでこの世界にいられるのかわからない。いられたしても、魔力のない花はすぐに老いていくだろう。

そんな花の不安を追い払うように、ルークはキッパリと告げた。

「かまわない。俺の傍にいてくれるなら、ハナがしわくちゃの婆さんになろうが、どうなろうがかまわない」

花がいなくなった後に自分がどうなるのかは、わからない。だが花が存在する限りは、もう二度と離さない。

そう強く心に誓ったルークは、再び花を強く抱きしめた。

息苦しいほどの抱擁は心地よく、花は喜びに震える身体をルークにそっと委ねたのだった。

番外編。レナードの縁談。

小鳥の囀る声で目覚めたレナードはそのまま窓辺へと行き、勢いよくカーテンを開けた。
外は明けゆく太陽の爽やかな光に包まれている。
いい一日になりそうだ、と思ったレナードは朝食をとりに家族用の食事室へと向かいかけて、足を止めた。

――――　待て……このパターンは嫌な予感がする。

そう考えたレナードは王宮の兵舎の食堂へ転移しようとしたのだが、そこへノックの音が響いた。
レナードの部屋に入室するのにノックをするのは屋敷に仕える者達だけだ。その事に安堵して、入室を許可する。

「入れ」

「おはようございます、おぼっちゃま」

朝の挨拶と共に入って来たのは、父である先代からユース侯爵家に仕える執事のメーシプだった。

「――メーシプ!!　いい加減、その『おぼっちゃま』って言うのはやめろ!!」

「おや、おぼっちゃま、反抗期でございますか？」

「んな訳あるか!!　俺はもう立派に成人した大人だ!!」

「おぼっちゃま、立派な大人の男性は私の様な老体に怒鳴りつけたりなどしないものでございます。嗚呼、おぼっちゃまもお小さい頃はそれはそれはお可愛らしかったのに……雷が怖いと私に縋りついて朝までお離しになって下さらなかったり……」

「な！？……そんなガキの頃の話を……」

グウっと言葉に詰まったレナードに満足したのか、メーシプはキリリと表情を改めると背筋を伸ばして用件を伝えた。

「おぼっちゃま、奥様がお呼びでございます」

「んな！？……は…母上が！？」

「はい」

青ざめたレナードに、メーシプは表情を変えずに答えると、そのまま退室していった。

その後、メーシプが懐から手帳を取り出して何事かを書き付けていたのをレナードは知らない。

メーシプはユース侯爵家の使用人達がこぞって入会する会の会長である。その名も『レナード様を愛でる会』、通称『おぼっちゃまを弄(いじ)る会』。

ちなみに名誉会長にはディアンが就いている。

＊＊＊＊＊

レナードは非常に重い足取りで母の待つ居間へと向かった。
できればこのまま逃亡してしまいたい。

――――　そうだ！！　そうしよう！！

扉の前で決意を固めたレナードは転移しようとしたのだが……。

「レオナルド、何をしているの？　早くお入りなさい」

凛とした女性の声が居間の中から聞こえた。
間違いなく母の声である。
レナードはゴクリと唾を飲み込んで、扉を開いた。

「レオナルド、遅いわよ？　いい女はね、待たすのは平気だけど、待たされるのは嫌いなの。だから私は待たされるのが嫌い。そんな事もわからないから、いつも振られるのよ。ほら、あんまり待たせるから爪が伸びてしまったわ」

ゆっくりとした口調で、それでも口を挟む隙を与えず話すレナードの母――アンジェリーナは、その白くなめらかな手をレナードへと差し出した。
レナードはソファに浅く腰かけるアンジェリーナの足元に膝をついて、差し出された手を取り口づけると、そっとアンジェリーナの膝の上に手を戻して立ち上がった。

「母上、残念ながら私はもう王宮へ行かなければ――」

「レオナルド」

アンジェリーナは優しくレナードの言葉を遮った。

この口調で名を呼ばれたら、絶対に逆らってはいけない。それは百四十三年のレナードの人生においての『生き延びる為の五カ条』の一つである。

そもそもこの『レオナルド』という呼び名は、アンジェリーナの出身国であるサンドル王国におけるレナードの呼称であり、アンジェリーナ以外にそう呼ぶものはいないのだが、とにかくレナードはこの呼び方が苦手だった。

「私、そろそろ孫の顔が見たいの。きっとあなたのお父様もユース家の跡継ぎが生まれない事には、ゆっくり土の下で眠っていられないと思うわ。あなたはお亡くなりになったお父様にまだ心配をかけたいの？」

「……母上、なぜ私に言うのですか……父上の跡を継いだのはディアンです。まずディアンに言うべきじゃないですか？」

「いやだわ、レオナルド……あなた、まさかあのディアンにお嫁さんが来てくれると思っているの？　私なら嫌だわ、あんな性格の悪い子」

レナードは母の言葉に、「あなたそっくりです」と返すのを必死で堪えた。そしてなんとか婉曲に断れないかと試みる。

「母上、残念ながら私は先程母上がおっしゃっておられた様に、恋人に振られてばかりです。しかもその理由は全て同じ、『あなたの事は大好きだけど、あなたのお兄さんの事を考えると、この先を望む事はできないから別れましょう』なんです。と言うわけで――」

「レオナルド」

かなり自虐的であったが、それでも手段を選んでなどいられないレナードの言葉を、再びアンジェリーナは遮った。

「もちろん、あなたが振られた理由なんて知っているわよ。だからディアンが義兄になっても構わないっておっしゃって下さるお嬢さん方を揃えたわ。さ、どのご令嬢にする？」

そう言ってアンジェリーナは応接テーブルに並べてあった数枚の姿絵を指し示した。

「そ、それこそ、その縁談はディアンに勧めたらいいじゃないですか！！」

「いやだわ、飲み込みの悪い子ね。ディアンに嫁ぐのは嫌だけど、ギリギリあなたなら我慢するって言ってくれた娘達なのよ。それもディアンを屋敷から遠ざけるという条件付きでね」

「当主を屋敷から追い出してどうするんですか！？　それでしたら私が屋敷を別に構えるのが普通でしょう！？」

「じゃあ、それでいいわ。で、どの娘にする？」

「え？　いえ……ですから……」

どんどん追い詰められていくレナードは、アンジェリーナの後ろに控える侍女が何か手帳に書き付けているのに気付かない。

「と、とにかく！！　ギリギリ我慢されてまで結婚なんてしたくありません！！」

「レオナルド」

アンジェリーナは美しく整った顔に優しい微笑みを浮かべた。

「以前あなたに縁談を勧めた時には、『陛下にまだ一人のお妃様もいらっしゃらないのに、私が先に妻を娶るわけにはいきません』と言ったわよね？」

「……はい」

「私はまだお目にかかっていないけれど、ハナ様はとても可愛らしい御方ですってね？」

「……はい」

「なんでもあのディアンと対等に渡り合っていらっしゃるらしいわね？」

「……はい」

「それで……陛下とハナ様が初めてお会いした時に、あなたも一緒だったとか？」

「……はい」

あまりの迫力に、ただ頷く事しかできないレナードの喉元に、アンジェリーナは立ち上がると持っていた扇子を突き付けた。

「なぜそのように素敵なお嬢さんをみすみす逃すのかしら？」

「す……すみません」

理不尽極まりない言葉にも、レナードはただ謝る事しか出来ない。

「まあ、それは今更言ってもしょうがない事ぐらいはわかっているのよ、私も」

その言葉にレナードはあからさまにホッとした。

「で、どのお嬢さんにする？」

結局振り出しに戻ってしまった事に、レナードは急に直立すると……。

「あ！　大変だ！！　陛下が助けを呼んでいる！！」

と、棒読みして消えた――というか、逃げた。

「……ちょっと、からかいすぎたかしら？　それにしても、あの子……逃げ方があの人そっくりだわ」

一人呟いたアンジェリーナは、居間の暖炉の上に視線を向けた。

そこにはアンジェリーナの夫であり、レナード達の父親である先代ユース侯爵の肖像画が掛けられてある。

レナード達の父親は早くに妻を亡くし、後を継ぐ子供にも恵まれていなかったのだが、二百五十歳以上離れたアンジェリーナと公務で訪れたサンドル王国で出会い、大恋愛の末に結婚したのだ。アンジェリーナの実家は代々、サンドル王国の神殿の神官を務めており、なぜか双子が生まれやすい家系だった。

ちなみにアンジェリーナは『レナード様を愛でる会』の名誉顧問

である。

＊＊＊＊＊

「遅いぞ」

レナードがルークの執務室に足を踏み入れた途端、ルークの叱責が飛んだ。

「申し訳ありません、陛下。朝から母上に捕まりまして……」

いつもの元気な挨拶をする気力もなく、レナードは小さな声で謝罪の言葉を述べた。

言い訳するなど男らしくない事もわかっていたが、ぼやかずにはいられない。

そんなレナードに、ルークは気の毒そうな視線を向けた。

「そうか……災難だったな……」

幼い頃にはレナードの屋敷でしばしば過ごしていたルークは、アンジェリーナという人間をよく知っている。その為、レナードがアンジェリーナから解放されたのではなく、逃げて来たのだろう事も容易に想像出来た。

そしてルークは、アンジェリーナが再び領地に戻るまでの間、弄られ続けるだろうレナードに同情し、それ以上は何も言わなかったのだった。

番外編。レナードの縁談。（後書き）

読んで下さり、ありがとうございます。

86．追憶は口に苦し。

その昔、セルショナードは帝国に次ぐ大国であった。
しかし、ターダルト王国との戦より衰退の一途をたどった王国は、その後に続く苦難の長い時を耐え忍び、強い魔力を持った王の誕生を待ち望んでいた。
そして遂に得た強大な力を持った王と、時を同じくして生まれた予言者。
この二人によってセルショナードは、かつての栄光を取り戻し、再び大国と呼ばれるほどの豊かな国になったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あにうえはずるい！！」

いつものように国内視察と称して王城から逃げ出そうとしたリコの足下に、幼い弟が縋りついた。

「マックス……」

リコは屈み込んで弟のマックスに視線を合わせると、その小さな頭を撫でながら困った様に笑った。

「私はすぐに戻るから……それまで父上や姉上達を頼むな？」

「あにうえはずるい！！　ぼくは……あにうえといっしょにいきた

いのに！！」

「……お前がもう少し大きくなったらな」

もう一度マックスの頭をクシャリと撫でるとリコは立ち上がり、リコを睨むように見ていたマックスの乳母へと弟を託した。

そして、待っていたザックやトールドと共にその場から立ち去った。

＊＊＊

「兄上！！」

もう何度目かわからない旅を終えて、次に発つまでのほんの一時を王城で過ごしていたリコの部屋へ、マックスが血相を変えて飛び込んで来た。

「マックス、どうした？」

「兄上が呪われているというのは本当なのですか！？　兄上は『呪われた王子』だと……だから一緒に旅に出てはいけないとお爺――」

「マックス」

信じられないといった様子のマックスの言葉をリコは静かに遮った。

「マックス、それは本当だ。だから……大臣の言う通り、もう私には近付くな」

リコはそう告げるとサッと立ち上がり、驚くマックスを置き去り

に早足で自室を出て行った。

『呪われた王子』

ある日、予言者が告げた不吉な未来は、当時の重臣達を震撼させるものだった。

帝国から嫁した王妃が生んだ王子は呪われている。王は王子の手にかかり斃れる、と。

『不安の芽は早々に摘むべきです』

かねてより王妃をよく思っていなかった者達――重臣達の一部、そして予言者は婉曲ながら、それでも王子を殺せと強く進言した。

だが、王はそれらに一切応じなかった。

心優しい王が、愛する王妃の生んだ我が子を殺せるはずがないのだ。

結局、王は王子の魔力を封じる呪を施す事で臣下達を納得させ、それ以上この予言について触れる事を禁じた。

しかし、予言の存在を知らないまでも、第一王子であるリコの立場を疎ましく思う者達は、いつしかリコを『呪われた王子』と陰で呼ぶようになったのだった。

リコ達の次の旅はとても長いものになった。

どうしても王城へ戻る気になれなかったのだ。

そんな数年に亘る旅の途中、リコ達の元に、長らく空位だった王太子の座に第二王子であるマックスが就いたと言う報せが届いた。

恐らくマックスの外祖父である大臣や外戚達が強く推したのだろう。

「……王はお優し過ぎる」

悔しさの滲むトールドの言葉に、リコは苦笑した。

「だからこそ、私は生かされているのだ」

自嘲めいたリコの言葉は、その場に静かに落ちた。

＊＊＊

次にマックスに会った時、その瞳には明らかにリコへの憎しみが宿っていた。

第一王子であるリコを排そうとする外戚達に色々と吹きこまれたのだろう。

マックスは純粋すぎるのだ。

それではこの王城で生き抜く事は出来ない、心を壊してしまう。

そんなマックスの視線をリコは静かに受け止めた。リコを憎む事で心を保てるならば、それでいい。

「兄上は……呪われているくせに……それなのに父上も宰相達も兄上に信を置く。兄上は狡い。さっさと自身でその呪われた命を絶つべきなのです！！」

吐き捨てるようにそれだけ言うと、マックスは踵を返し去って行った。

マックスの言う通り、さっさとこの命を絶ってしまえば楽になれるのだ。

だがリコには母との約束がある。

「俺は卑怯だな。それさえも、卑しく生きる為の言い訳にしている

……」

「殿下？」

「リコ様、何を……？」

一人呟いたリコの言葉の意味を掴みかね、ザックもトールドも心配そうに顔を曇らせる。

母との約束――母の予言はリコ以外、誰も知らない。知らせてはならない。

『――まさか、そんな！！』

あの時リコを愕然とさせたそれは、未だに信じられないでいる。

いまわの際の母の意識は朦朧としていて、何を言っているのか母自身わかっていなかったかも知れない。

しかし――。

母の死から二年後、母の予言は現実となった。

マグノリアの皇太子であった第一皇子を斃し、その座に第二皇子が就いたのだ。

――――　いや、違う。そうではない。あれは……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「殿下？……殿下！！」

ザックの呼び起こす声に、リコの意識は一気に覚醒した。
リコは急いで長椅子から体を起こすと、辺りを見回す。

「……ザック……俺は……寝ていたのか？」

「そうですよ、うなされていた様でしたが、大丈夫ですか？」

「……そうか」

昨晩は遅くまで、ジャスティン達と講和を進めるにあたって前段階となる協議をしていた。
その後、執務室代わりのこの部屋で雑務をこなし、少し仮眠をとる為にこの長椅子に横になった事を、やっとリコは思い出した。
浅い眠りの中、昔の事を夢に見ていたのだ。
リコは乱れた髪を掻き上げながら、大きく息を吐き出す。

「お疲れの様ですね～。では、今日はサボっちゃいますか？」

ザックの心配を隠した明るい声に、リコは小さく笑った。

「大丈夫だ……皆もう、評議の間に集まっているのか？」

「はい、いえ……あの……」

珍しく歯切れの悪い返事をするザックに、立ち上がって扉へと向かっていたリコは不審そうに振り返った。

「なんだ？」

「いえ……なんでもないです！」

「……いつも通り、変な奴だな」

眉を寄せてザックを見たリコは、そのまま踵を返して部屋から出て行った。その後をザックも「その言い様は酷いです～！！」と叫びながら追ったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

評議の間に集まっていたのは、トールドとメルク、そして数人の元大臣達だった。

本来この場に集まるはずの重臣達は、王の闇に飲み込まれてしまい、その姿を現す事はもはやない。

しかし、この場にいる顔ぶれを見渡したリコは疑問に思わずにはいられなかった。

その全てが、リコが『呪われた王子』として王城で過ごしていた頃からリコを擁護し、敬意を以って接してくれていた者達なのだ。

王がその言動に変調をきたし始めた時、一番にその職を追われたメルク。

それから相次いで職を追われたこの者達は、閑職とはいえ別の職を与えられ、王城から追い出されることはなかった。

リコが王の変貌を聞きつけ急ぎ王城へ戻った時には、王はすでに全くの別人と言っていい程に変わってしまっていたのだが……。

――――　父上はいったい何をどこまでご存じだったのだろうか……？

評議の間に入ってからずっと黙ったまま考え込んでいたリコは、

メルクの声に我に返った。

「リカルド殿下……ご報告致したい事がございます」

「なんだ？」

「我々は先程、暫定官府として連名で布告を発しました」

その言葉にリコは驚く。

「どういう事だ！？　私はまだ許してないぞ！！」

「はい、厳罰は覚悟の上でございます。これが、我々の名で発布した物でございます」

リコはメルクの差し出した書面を引っ手繰（たく）る様にして取り、急ぎ目を通した。

そしてその内容に激昂する。

「これは……これは一体何だ！？　これではまるで全て父上が――王が悪いようではないか！！」

怒りのあまり声が震える。だが、リコとてメルク達の行動を理解はしているのだ。

ただ、どうしようもない程のやりきれない感情を怒りに変えてぶつけているに過ぎなかった。

「誰がこんな……誰が狂王などと信じるんだ！！」

布告の内容は実に簡潔だった。

それは、リコが王家の宝剣であるヴィシュヌの剣に真の後継者と認められ、ヴィシュヌの名を冠した事。
その剣を以て、狂王と化した王と、それに並ぶ王太子を討ち果たした事。
帝国への突然の侵攻、それに及ぶ戦は王の暴挙であり、両国共に苦しめるだけの無益な戦を終わらせる為に、全面的に王国の非を認めた上で講和を申し入れた事。
明後日、リコの即位式が執り行われる事。
そして最後に、花がリコの正妃になったとの先頃の布達は偽りであり、花の名誉を損なうものであった事を謝罪していた。

「殿下、今ではありません。我々は後年に向けて布告を発したのです」

メルクの言葉の真意にリコは顔を顰めた。

「民は王の――為政者の気持ちまで酌んではくれません。目の前にある現実のみで判断するのです。これからこの国は厳しい時代を迎えます。それによって民たちに先王の時代を顧みさせてはならないのです。今、厳しい生活があるのは先王の悪行のせいだと――先王に泥をかぶって貰わねばならないのです。これから王となる殿下に一片の曇りもあってはなりません。民に不満を抱かせては導くものも導けませぬ」

「わかっている……わかっているさ、それくらい。だが……父上はずっとこの国を思っておられたんだ。それなのに私が……」

王は数年前から何度もリコを呼び戻そうとしていた。
しかし、リコがそれに応じる事はなかった。それが己に施された呪を解く為だと、わかっていたのだ。

わかっていたからこそ、その後に待ちうけるものが怖くて、リコは逃げ回っていたのだった。

「王は殿下にあのような忌まわしい責を負わすおつもりはありませんでした。殿下の呪をお解きになった後には……自尽なさるおつもりでした」

メルクの言葉にリコは青ざめる。

「……何を……何を言って……」

王ほどの力を持った者の施した呪は、施術者本人でなくては普通は解く事ができない。そして、施術者が滅んでも、術は残る。

セルショナードの発展に陰りが見え始めた頃、王は決意したのだ。王子の――リコの呪を解く事を。だが、それが果たされる事はなかった。

メルクは目を閉じて暫し王を憶(おも)う。

『メルク、見てくれ。今の私は宝剣を抜く事さえ出来ない。生に縋る私の弱い心は、死という闇に囚われてしまったのだ。もはや己の命を絶つことも叶わぬ。結局、あの子に重い責を負わせてしまう……メルク、この先のあの子を、リコをどうか支えてやってくれ』

その疲労濃い顔に厳しさを湛え、目を開けたメルクは静かにリコを見つめ、膝をついた。

「殿下……王とは幾多の犠牲の上に立つものであります。ですが、殿下はお一人ではございません。我々は殿下が王として立たれるの

に足元が揺らぐようでありましたら、いくらでもその土台となる覚悟でおります。殿下は足元をお気になさる必要はございません。前だけを向いて下さればよいのです。どうか真っ直ぐに、前だけを向いてお進み下さるようお願い申し上げます」

その言葉と共に頭を下げ平伏したメルクに続き、ザックやトールド、そしてその場にいる全員が同様に平伏した。

ただ一人、その中に立つリコは、メルクの言葉を深く胸に刻むようにゆっくりと息を吸い込む。そして、一息に応諾の言葉を発した。

「承知した」

力強く決意に満ちたリコの声は、評議の間に凛と響いたのだった。

87．母は強し。

「ルーク？」

ルークの起き上がる気配に、花は目を開けた。

部屋はまだ薄い闇の中だ。早朝というより、未明と言った方がいい時間だろう。

「ハナ……まだ寝ているといい、まだ夜も明けていない」

そう言って優しく花の髪を梳くルークを花はぼんやりと見ていたが、やがてゆっくりとその瞼を閉じた。ルークは穏やかな寝息をたて始めた花を起こさないようにそっと寝台から抜けだすと、苛立ちを抑えるために大きく息を吐き出して意識を集中させた。

先程、王宮に張った結界が反応したのだ。

どうやら早馬が着いたらしい。

なんの知らせかは分からないが、花から離れなければならない事にルークは苛立っていた。

今日は新月なのだ。

何も起こるはずがないと自分に言い聞かせるのだが、それでも不安は込み上げてくる。

闇の気配がないか、侵入者はいないか王宮の隅々まで魔力で探ると、いつもより多い警備兵とアポルオンの気が感じられた。

恐らく、レナードとディアンも同様に警戒しているのだろう。

その事にルークの心は少しだけ軽くなる。

最後にルークは、花と部屋に施した防御魔法に綻びがないか確認すると、眠る花の額に口づけて、その場から消えたのだった。

＊＊＊＊＊

「どこからだ？」

ルークは執務室に入った途端、その場に控えていたディアンを問い質した。

執務室にはディアンの他に、レナードとセインもいる。

「セルショナードからです。どうやら本日、リカルド殿下の即位式が行われるようですね。これがその内容です」

ディアンの差し出した書面を受け取ったルークは、サッと目を通して皮肉な笑みを浮かべた。

「なるほどな……この内容では各国は対応にかなり戸惑うだろうな」

「ええ、恐らく。ですが、セルショナード国内での混乱はそれ程ないでしょう。リカルド殿下は元々国民には人気がありましたし、王の変貌ぶりは噂になっていたようですから。まあ、名君が突如として暴君に変わる事はそれほど珍しい事でもありませんしね」

「……ああ」

ディアンの言葉に、ルークは考え込むように短く答えた。

穏やかだった君主が豹変し、暴君と化す事は、このユシュタールでは珍しい事ではない。それは皇家の　呪われた血とでも言うべきなのか。

実際、帝国でも三代前の皇帝は突如として暴君と化し、民に圧政を布いた。それを皇弟が討ち果たし、その座に就いたのだ。
それが二代前の皇帝となる。
しかし、その皇帝に子はなく、結局、暴君と化した三代前の皇帝の皇子であったルークの父親が継いだのだった。

「各国としても、この知らせを歓迎すべきなのかは迷うところでしょうが、ジャスティンが即位式に臨席する事から、帝国の意思は伝わるでしょう」

そこまで淀みなく意見を述べたディアンは、チラリとルークを窺った。

「で……陛下はどうなされますか？」

「……リカルドの即位を歓迎する祝辞と、祝いの品を適当に贈っておけばいいだろう」

「かしこまりました。ですが陛下、そのお顔では歓迎していらっしゃる様には見えませんが？」

「顔は関係ない」

ディアンの言葉にも、ルークは不本意そうに顔を顰めたままだ。
そのやり取りを微笑みながら見ていたセインが口を開いた。

「リカルド殿下の即位が終われば、すぐにでもジャスティンが講和の為の使者と戻るでしょうから、私はその為の準備を進めます。それにしても……セルショナードは運よく交渉の切り札を手に入れましたね」

「……別に、切り札にもならんだろう」

更に顔を顰めたルークに、レナードが笑いを堪えて言う。

「ルーク、意地を張るな。お前、大人げないぞ」

「うるさい。黙れ、バカ」

それから始まった二人の大人げないやり取りに呆れてディアンは出て行き、セインもまた、以前のルークに戻った事に安堵しながら出ていったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

うっすらと目を開けた花は、部屋がすっかり明るい事に気付いて慌てて起き上がった。

長椅子に腰かけて書類に目を通しているルークは、すでに身支度が整っている。

「……おはようございます。あの……寝坊してしまいましたか？」

気まずそうに挨拶をする花に、ルークは微笑んだ。

「いや、まだ朝も早い……先ほど早馬が着いた為に俺は早く起きただけだ」

「早馬？」

途端に花は心配そうに顔を曇らせた。

「悪い知らせじゃない。セルショナードから、リカルドの即位を知らせるものだ」

それを聞いて花はホッとしたのだが、ルークは少しのためらいを見せた後、花の傍に来て寝台に腰かけた。

「ハナ……これが先ほど届いたセルショナードからの布告の内容だ」

そう言って、ルークは一枚の書面を花に差し出した。

この内容はすぐに噂になる。面白おかしく馬鹿な貴族達に語られ花の耳に入るより、先にきちんと伝えておいた方がいい。

そんなルークの思いを読み取った様に、花は静かに書面に目を通した後、微笑みながら返した。

「ありがとうございます」

「ああ……」

花はルークの気遣いが嬉しかった。だから少なからず布告の内容に衝撃は受けたが、ルークに心配をかけないようにと微笑んだのだ。

だが、リコの苦しみを思うと悲痛な思いが込み上げてくる。それを隠すように、花は小さく息を吐き出した。

と、その小さな吐息までを奪うように、花の唇をルークの唇が塞いだ。

「んっ!?」

そのまま枕に押し倒された花は、何がなんだかわからずに何度もルークのキスを受けた。
甘い刺激にクラクラしている花の喉元へと、ルークの唇は伝い下りて鎖骨をなぞる。
そして――

「ぎゃおう！！」

花はいつもの？　悲鳴を上げた。

「な、何でまた噛むんですか！！」

首元を抑えて真っ赤になった花に、ルークは笑いを堪えている。
それを見た花は怒ったようにムムっと眉を寄せた。

「怒りでもいいから、俺の事だけ考えてくれ」

小さな声で呟いた言葉は花には届かない。
ルークは立ち上がると、睨み付ける花に構わずその額に口づけを落とした。

「今夜は食事を共にしよう」

「――え？」

そう言ってすぐに消えてしまったルークに、花は怒りも忘れて驚いた。
セルショナードから届いた布告によってルークは忙しくなるのではないかと、花は思ったのだ。

またルークが無理をしなければいいなと、心配しながら朝の身支度に取りかかった花は、鏡に映った首元の歯形を目にして再びルークへの怒りを思い出した。

――――もう！　ルークのバカ！！　変態！！

それから、ルークへ怒りを燃やしていた花は、リコやセルショナードへの心配と不安をすっかり忘れていたのだった。

＊＊＊＊＊

「ハナ様、あの……面会の申し込みが来ているのですが……」

申し訳なさそうに伺うセレナに花は読んでいた本から顔を上げた。今日もゆっくり過ごそうと、面会の申し込みは全て断って貰っていたのだが、わざわざ花に伺うと言う事は、よほどの相手なのだろう。

「どなたなのですか？」

興味を引かれて尋ねた花は、その答えに驚いた。

「レナード様達の御母君でいらっしゃる、アンジェリーナ様です」

＊＊＊

午後になって青鹿の間にやって来たアンジェリーナはとても美しく、成人した息子が二人いるとは思えないほど若々しかった。
そして、アンジェリーナは花を見た瞬間、吹き出した。

――― 今まで色々な反応をもらったけど、吹き出されたのは初めてだなぁ。

軽くショックを受けながら微笑んだ花に、アンジェリーナは謝罪した。……笑いを堪えながら。

「ご、ごめんなさい、ハナ様。違うのよ……クク、ハナ様を見て笑った訳ではなくってよ。ただハナ様が……」

全く説得力のない謝罪である。
アンジェリーナが落ち着くまで待って、やっと自己紹介を兼ねた挨拶をする事ができた花はソファへとアンジェリーナを勧めた。

「本当にごめんなさいね、いきなり笑ったりして。ハナ様があまりにも……ぷっ！」

――― もうこの際、指さして笑ってくれてもいいです……。

半分やけくそでそんな事を思っていた花だったが、嫌な気分は全くしていなかった。

「あの……私も未だに信じられないですから。陛下の側室にして頂いた事は――」

困った様に微笑む花に、アンジェリーナは慌てて遮った。

「あら、本当に違うのよ。ハナ様は噂通りお可愛らしい方だわ。ホント、あの子……陛下にはもったいないくらい。私が笑ったのは、ハナ様があまりにも……クク、陛下の気を纏ってらっしゃるから、おかしくて」

「はあ……」

チラリと花の右手小指の指輪を見てアンジェリーナは更に笑うのだが、花には何がおかしいのかさっぱりわからない。

「あの子……陛下はハナ様に愛の言葉を囁いたりするのかしら？……ぷっ！！」

「ええ！？」

昨晩の事を思い出した花は顔を赤くした。

「だって、あの無表情な顔でそんな、ぷっ、どの面下げて……あ、間違ったわ……クク、愛の言葉なんて！！　ククク……ダメ、笑いが止まらない……」

――――えっと……なんと答えればいいのでしょうか……？

目に涙を溜めて笑いを堪えているアンジェリーナに花はなんと返せばいいのかわからない。

なんとか再び落ち着いたらしいアンジェリーナは、深呼吸を何度か繰り返すと、少し顔を引き締めて話し始めた。

「陛下はね……成人する前まではよく屋敷（うち）に遊びにいらっしゃったのだけど、私は一度も陛下のお声を聞いた事がなかったの」

「え……？」

驚きに声を上げた花だったが、続く話に更に驚く。

「陛下はお生まれになった時から産声も上げられなくて……陛下の乳母――と言っても何人も変わったのだけれど、その者達も一度として陛下のお声を聞いたことがなかったらしいわ」

そこでアンジェリーナは一旦言葉を切ると、お茶を飲んだ。

「それが、陛下が三歳におなりになった頃に分かったのだけど、私の双子の息子達とだけはどうやらお話しなされていたようで……ジャスティンが教育係についてからは陛下も少しは他の者ともお話しになられるようになったのだけれど……要するに恥ずかしがり屋さんだったのね……その陛下が……クク……愛の言葉を口にしていらっしゃるとしたらもう……笑わずにはいられないでしょう？　そうよね！？」

「え？　はい」

思わず条件反射で答えた花だったが、今聞いた話に戸惑うばかりだった。

――――というか、今の話を『恥ずかしがり屋さん』でまとめていいのでしょうか……。

微笑みながらも花は幼い頃のルークを想って胸を痛めていた。

しかし、アンジェリーナは再び笑い出している。

「でも……ハナ様が現れて下さってよかったわ」

「え？」

考え込んでいた花は、いつの間にか笑いの止まっていたアンジェリーナの言葉に驚いた。

アンジェリーナは先程とは違った柔らかな笑みを花に向けている。

が、すぐにその笑みはディアンそっくりの黒い微笑みに変わった。

「ディアンにしてもそうなのだけれど、陛下の女性関係を今まで誰も知る事が全く出来なくて……器用にも魔力の気配を上手くお隠しになってしまうのよね」

「そうなんですか……」

微笑みながらアンジェリーナの話を聞いていた花だったが、その内容には胸がチクリとしていた。もちろんルークの過去に女性が何人もいただろう事はわかっているが、やはり心は苦しい。

「……嫉妬はしても、それを表に出さないのがいい女だと私は思うわ」

「はい？」

いきなり話が変わった事に驚いた花だったが、ニヤリと笑うアンジェリーナはやはりディアンとよく似ていて、花は二人が親子だと実感せずにはいられなかった。

「それに器用な男って、嫌味で私はあまり好きじゃないわ。それに

比べてレオナルドは……クク」

どうやらアンジェリーナは笑い上戸らしい。

しかし、急に背筋を伸ばすと顔を顰めて呟いた。

「いやだ、もう邪魔が来たわ」

その言葉と同時に、青鹿の扉が勢いよく開いた。

「母上!!　何を言ったのです!?」

血相を変えて、文字通り飛んで?　来たらしいレナードとは対照的に、アンジェリーナはその美しい顔に優しい微笑みを浮かべてレナードを見た。

「まだ何も。これからよ」

「母上、お願いですからやめて下さい!!」

「あなたがそこまで言うならしょうがないわね。じゃあ、五歳の誕生日にディアンからもらった――」

「人の話を聞いて下さい!!　しかも子供の頃の話など……」

「あら、嫌なの?　じゃあ、大人になってからの、あなたがあの積極的なお嬢さんに――」

「それもやめて下さい!!　息子の過去をバラして何が面白いんですか!?」

「あなたの反応」

「……母上……」

脱力するレナードに、アンジェリーナは更に言い募る。

「レオナルド、そもそも女同士の会話に割り込むのは無粋な男のする事よ。そして私は無粋な男が嫌い」

「誰のせいだと――」

「レオナルド」

優しく名前を呼ぶアンジェリーナの声に、その口を閉ざしたレナードとは逆に、花は疑問を口にした。

「レオナルド？　レナードの事ですか？」

「ええ、ハナ様はご存じなかったかしら？　私はサンドル王国の出身なの。レオナルドは私の出身国でのレナードの呼称なのよ。レオナルドが嫌がるから、この呼び名で呼んでるの」

「なるほど」

楽しそうに笑うアンジェリーナの説明に、花は納得した。

「母上、後半部分の説明がおかしいです。ハナ様も納得しないで……」

「じゃあ、ディアンの事はなんて呼ぶんですか？」

「ディアンの事はディアンなの。あの子は反応がなくて面白くないのよ」

「二人とも私の事は無視ですか？」

「ディアンはサンドル王国では、何て呼ぶんですか？」

「ダイアンよ」

「え？……ダミアン？」

「……」

聞き返した花の言葉に、一瞬無言になった二人だったが、すぐに気を取り直したらしいアンジェリーナがニッコリ微笑んで立ち上がった。

「ハナ様、まだお疲れでしょうに、無理を言って申し訳ありませんでした。邪魔でしかない邪魔者が現れたので、私はこれでお暇致しますわ。またお時間のある時にゆっくりと女同士の話をしましょうね」

「ええ、是非。こちらこそ何もおもてなし出来なくて申し訳ありませんでした。とても楽しかったです」

花も立ち上がって返した挨拶にアンジェリーナは微笑むと、レナードに厳しい視線を向けた。

「さ、できれば息子であって欲しくないもう一人のかわいくない息子に会いに行くから、案内して」

「いやです」

「レオナルド」

「ディ、ディアンの執務室なんて、何度も行った事があるでしょう!?　いい大人が一人で行けない訳じゃ――」

「レオナルド」

レナードの名を再び優しく呼んで、その言葉を遮ったアンジェリーナの顔は、美しさに輝いている。

「レオナルド、一つ教えてあげるわ……女の子には、例えまだ幼い子供でも大人の女性扱いしてあげるものよ？　そして成熟した大人の女性には、少しくらい子供扱いしてあげるのが、いい男の条件よ。わかったかしら？」

「……はい」

その返事に満足したのか、アンジェリーナは花に退室の挨拶をすると、レナードを引き摺りながら出て行った。

それを見送った花は『母は強し』だな、と感心したのだった。

88．笑顔の裏側。

「ハナ様は素敵な方ね」

ディアンの執務室に連行されて――いや、案内していたレナードはアンジェリーナの言葉に頷く。

「ええ、もちろんです。芯も強くて頭もいいですし、控えめで――」

「レオナルド」

同意するレナードの言葉を優しく遮ったアンジェリーナの顔には呆れているような表情が浮かんでいた。

「レオナルド。女性はね、笑顔の裏に色々なものを隠しているのよ。それがわからないからあなたはあんな事に……」

「いい加減その話はやめて下さい！！　そもそもあれは――」

大きく溜息を吐くアンジェリーナに反論しかけたレナードだったが、目の前に迫ったディアンの執務室の扉が開いた事で、その言葉を飲み込んだ。

「あれは？　その続きを是非聞きたいですね、レナード」

開いた扉に凭(もた)れかかって爽やかに黒く微笑むディアンに、レナードはたた首を横に大きく振るだけだった。だが、ディアンはそんなレナードにさっさと見切りをつけて、アンジェリーナの手を取り、その甲に口づけた。

「お久しぶりです、母上」

「あら、私はずいぶん前から屋敷に滞在しているのよ？　どうして久しぶりなのかしら？」

「きっと神の悪戯でしょう。私たちが出会わないように、すれ違いを仕組んでいるに違いありません」

「相変わらず、あなたの神は都合がいいのね」

「それ以外にどんな価値が？」

爽やかに微笑みながら交わされる二人の会話を聞きながら、レナードはそっとその場から去ろうとしたが、当然それは許されなかった。

「レオナルド、どこへ行くのかしら？」

「……ちょっと、そこまで？」

「レオナルド、久しぶりに親子三人そろったのよ？　どうせ陛下からお許しをもらって――と言うより、陛下に命じられてハナ様の許に来たのでしょうから、時間はあるはずよ？　これもきっと神様の采配ね。一緒に過ごさなければ申し訳ないと思わない？」

「……そうですね」

アンジェリーナの『神』も大概都合がいいのだが、レナードは諦めてソファに腰掛けたアンジェリーナの側に立った。

向かいに座ったディアンは満足そうにそれを見ていたが、アンジェリーナに向き直ると、その顔に皮肉の色を滲ませた。

「で、母上のご実家からは何と？」

「あら、他人事のように……あなたの伯父なのよ？　それにしても、よくわかったわね？　私の元に兄から連絡が来た事を」

「ええ、私の大切な母上に何かあってはと心配で、常に気を配っておりますので」

「まあ、嬉しい事を。それで……あなたの伯父から手紙を預かったわ」

「ハナ様宛てに？」

「もちろんよ」

「え！？」

相変わらず微笑みながら交わされる二人の会話を黙って聞いていたレナードは思わず声を上げた。そんなレナードに構わず、アンジェリーナは持っていた小さな鞄から書状を取り出し、テーブルの上に置く。

ディアンはいきなりその書状を取り上げて開くと、読み始めた。

「おい！！」

驚くレナードを無視して、ディアンは早々に読み終わったその書状を懐へと仕舞う。

「サンドル王家は相当切羽詰まっているようですね」

「ええ、そうね。王籍から除籍して勘当した私にまで頼み込んで来るくらいだから」

サンドル王国は他国よりも非常にユシュタルへの信仰心が強い。そして王家と神殿は密接に結びついており、神官達はみな王家に連なるものであり、王籍に在る者が多い。

アンジェリーナはレナード達の父親であるユース侯爵と出会った当時、サンドル王国の王太子と婚約中であった。王太子の正妃となる事が決まっていたのだが、家族の猛反対を押し切って、ユース侯爵と駆け落ち同然に結婚したのだった。

「母上……よろしいのですか？」

心配そうに顔を曇らせるレナードに、アンジェリーナはとっておきのドス黒い笑顔を見せる。

「無視すればいいのよ。あの陰惨な王城にハナ様がお出向きになられるなんて、とんでもないわ」

そう言うと、アンジェリーナは立ち上がった。

「さ、見たくもない息子達の顔も見た事だし、最後にあの無表情な顔でも見て帰ろうかしら」

「やめて下さい、ルークの機嫌が悪くなります！！　王宮の者達に迷惑です！！」

「それもそうね、ハナ様に何を暴露されたかヤキモキさせている方が楽しいわね」

「母上！！　だから、何を言ったのですか！？」

「それはもちろん秘密よ」

「母上！！」

「いやだわ、レオナルド。女の秘密を詮索するなんて、男として最低」

「……」

「レナード、無駄な抵抗はやめて母上を馬車までお送りして来て下さい」

「あら、こちらのかわいくない息子も私をさっさと追い返そうとするのね？」

「何か問題でも？」

「ないわ」

アンジェリーナは再び脱力しているレナードを引き摺って、ディアンの執務室から出て行った。

それを見送ったディアンは深い溜息を吐くと、執務机に浅く腰かけ、腕を組んで考え込むように目を閉じたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

茜色に染まるサイノスの街を眺めながら、花はセルショナードの王都・コステイの事を思い出していた。
セルショナードの方が早くに陽は傾くので、もうコステイの街は宵闇に包まれているだろう。

花は込み上げる悲しみを抑えるかのように胸に手を当て、そして歌った。
昔、留学先で聴いたその歌は、神への賛歌なのか、愛の賛歌なのか、それとも壊れた世界を嘆く歌なのか。
愁いを帯びた旋律は、サイノスの街に物悲しく響き渡る。
それでもその歌声は優しい癒しを与え、人々の心に沁み込んでいったのだった。

歌い終わった花は、後ろからルークに抱きしめられた。
ルークの気配は感じていたので驚きはしなかったのだが、花は困った様に俯く。

「ルーク、ごめんなさい」

「……何かあったのか？」

花の頭に口づけて、その唇を柔らかな頬へとすべらせていたルークはその動きを止め、花の謝罪に訝しげに返した。

「髪の毛は自分で切ったんです。そのせいで心配をかけてしまいました」

先程、久しぶりにルークと夕食を共にするという事で、気合を入れたセレナ達にあれこれと世話を焼かれた時に、花の髪がルークの元へ届けられたと聞いて花は驚愕した。

まさか、あの時に切り落とした髪の毛がその様な趣味の悪い事に使われていたなどと、思いもよらなかったのだ。

ルークの腕の中で向きを変えた花は、ルークの顔が苦しそうに一瞬歪んでいたのを見逃さなかった。それでもルークはその顔に花を気遣うような微笑みを浮かべる。

「すっかり短くなってしまったな……」

肩までになってしまった花の髪を優しく梳きながら残念そうにルークは呟いた。

花はルークの優しさを感じて、ニッコリと微笑む。

「大丈夫です。私はムッツリスケベなので、またすぐに伸びます」

「……ムッツリスケベ？」

「え！？……いえ、大事なのはそこではなくて……」

気にしていない事を伝える為に、明るく冗談で返したつもりの花だったが、ルークには通じなかったようだ。恥ずかしくなった花は、慌てて話を戻した。

「あ、あの、本当にごめんなさい。いきなり髪の毛が届けられたら、驚きますよね。私の国では古来より髪の毛に魂が宿るって言われて

て、呪いにも使われたりとか――」

焦って取りとめもなく話し続ける花の言葉を、ルークは遮るように尋ねた。

「いや、別に呪は施されてなかったが……気になるのか？」

「気になるっていうか……あれ？……ひょっとして、まだあったりとかしませんよね？」

「……あるが？」

「え？……うそおおおお！！！」

ルークの返事に花は一拍置いた後、まるで某有名絵画のように叫んだ。

幼い頃に、花が悪戯をするとなぜか髪を梳きながら言い聞かせられた、ナニーだった美津の言葉を思い出す。『髪は女の命と言うくらいですからね。綺麗な心を育てれば、髪も綺麗に輝くのですよ。でも悪い心を持てば、悪いものが髪に乗り移ってしまいますよ』と。

セルショナードの王太子から逃れようと花が髪を切り落としたあの時、花は酷く負の感情に囚われていた。だとしたら悪いものを喚び寄せてしまうかも知れない。

「なんで捨てないんですか！？　怨念が乗り移ったらどうするんですか！？　呪いの日本人形みたいに伸びたりするんですよ！？　えんがちょなんです！！」

「……」

花の言葉の半分以上が理解できないルークだったが、とりあえず処分したいのだと言う事だけはわかった。

「……要するに、処分したいんだな？」

ルークの問いに花はブンブンと大きく頷いた。

先程まで、花を気遣いながらも心に淀んでいた陰鬱な気分が消えている事に、ルークは苦笑しながら何事かの呪文を唱えた。

すると、ルークの手元に少し大きめの文箱が現れた。

「それは？」

「ハナの髪の毛が入った――」

「ぎゃあああああ！！」

ルークの言葉を終わりまで待たず、花は悲鳴を上げて文箱から遠ざかった。

「……なぜそこまで怖がるんだ？　自分の髪だろう？」

「だからこそです！！　私は自分を知っているんです！！　髪は長い友達なんです！！　日本人の心なんです！！」

「……」

花自身、テンパっていて何を言っているのか分からないのだから、到底ルークに理解できるわけがない。

ルークは諦めたように大きく溜息を吐いた。と同時に、一瞬ルークの手元に青白い炎が浮かび上がり、あっという間に文箱も炎も消

えてしまった。

「あれ？」

不思議そうにする花に、ルークは説明した。

「今のは攻撃魔法の一種だ。あれくらいの対象物なら、この世に塵一つ残さず消してしまえる」

「ええ！？　すごいですね！！」

感嘆する花は、安心したような、嬉しそうな顔で微笑んだ。

「ありがとうございます」

「ああ……」

「ルークって便利ですね！」

「……」

ニコニコと微笑む花に、ルークは何も言わなかった。

その為、安堵のあまり洩れ出たその言葉が、ルークを微妙な気持ちにさせていた事に花は全く気付かなかったのだった。

89．能ある鷹も爪を見せる。（前書き）

流血表現があります。苦手な方はご注意下さい。

89．能ある鷹も爪を見せる。

明け方、無意識に眠る花を抱き寄せたルークの意識は、一気に覚醒した。
花の体が熱い。

「ハナ？」

そっと呼びかけてみるが反応はなく、ただいつもより浅い呼吸で花は眠り続けている。
ルークは心の中で己に悪態をつきながら起き出すとガウンを羽織り、医師を呼ぶために居間へと向かった。

「ルーク？」

ゆっくりと目を開けた花は心配そうな顔のルークを目にして、驚いたように何度か瞬きをする。

「ハナ、苦しくないか？　熱があるんだ。どうやら疲れがでたらしい」

ルークの言葉を聞いて、そういえば昨夜から体が少しだるかったかな？　と花は思い当たった。
今までずっと張りつめていた緊張の糸が切れて、体が疲れを訴えているのだろう。
ぼんやりと考えていた花を見てルークは眉を寄せた。

「体調が悪かったなら、なぜ早く言わないんだ?」

心配のあまり強い口調になっているルークに、花は安心させるように微笑んだ。

「気付かなかったからです」

そしてふと、窓から差し込む光に朝議の始まる時間が近い事に気付いた。

「ルーク、朝議が始まります」

「ああ……」

返事をしながらもルークは動こうとしない。

「……ルークは王様なんだから、皆の前で偉そうにふんぞり返って威張らないとダメです」

「ハナ……」

「でも、そんなルークも好き……」

「……」

ゆっくりと目を閉じた花に、ルークは色々な言葉を飲み込んだ。

それから諦めの溜息を小さく吐いたルークは、頬にかかった髪を優しく梳いて、呼吸の落ち着いた花に口づけると立ち上がった。

「ルーク」

そっと部屋を出て行こうとして、ルークは呼びかける花の声に立ち止まる。

「どうした？」

「いってらっしゃい」

「……いってきます」

あまりにも晴れやかな笑顔を向けられて、思わず初めての挨拶を返してしまったルークだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

レナードは、相変わらず私利私欲むき出しの発言を繰り返している大臣達が不思議でしょうがなかった。

――――なぜ、これ程に不機嫌なルークを前にして、そこまで鈍感な馬鹿になれるんだ？

目の前に座るルークは明らかに機嫌が悪い。

いつも以上にピリピリしたルークの気がレナードを痛めつけているのだ。

花の体調が悪い事はレナードも耳にしているので、ルークの不機嫌の理由をわかってはいるのだが、それでもこうまで尖った気を振りまかれていたのでは堪ったものではない。

しかし、ディアンは不機嫌なルークを気に留めた様子もなく、い

つものように黙ったまま目を閉じている。そしてセイン達はなんとか馬鹿達の相手をしながら、問題解決へと導こうとしていた。

そんな平素と変わらない無駄な時間が流れていく中、急にディアンがその双眸を開いた。

同時に、ルークとレナードが一瞬にしてその場から消える。

いきなり消えた二人に驚いた大臣達がざわつき始め騒然となる議場に、トーン、トーン、トーン、と軽い音が響く。

途端に議場は静寂に包まれた。

ディアンが自身の腰かけた椅子の肘掛をゆっくりと指で叩くその音が、騒がしい議場にあってなぜ皆の耳に届いたのかはわからない。ただ、まるで心臓に杭を打ちつけられているように感じる小さな音を耳にしたその場の者達は口を閉ざし、青ざめて下を向いた。

今、宰相と目を合わせたら石にされてしまう。

恐怖に慄く大臣達をゆっくりと見回したディアンは、静かにその口を開いた。

「我々には解決をしなければならない問題が山積みではありますが……その前にどなたか私の疑問を解決して頂きたい。――たった今、王宮に八人の侵入者が現れました……」

ディアンから告げられた言葉に誰もが驚き、息を呑んだ。

この場にいる者達はある程度以上の力を有しているので、ルークの張った王宮の結界が破られれば、気が付くはずだった。

では、それ程の力を持った者の侵入か。

だが、ディアンに動じた様子はない。

「――さて、一体誰が侵入者達を陛下の結界内へと引き入れたのでしょうか？　私はそれが知りたいのです。恐らく、陛下もその答えをお望みになられるでしょうね」

結界は破られたのではなく、誰かが引き入れたのか。
未だに侵入者達の気配を感じられないながらも納得した者達は、では犯人は誰なのか？　とチラリとディアンに視線を向け、ピシリと固まった。
ディアンは疑問を口にしながらも、その顔に恐ろしいほど慈愛に満ちた笑みを湛えて、ただ一人を見つめていたのだ。
そしてその視線の先にいる一人の男――ダンケル伯爵は蒼白になった顔に玉のような脂汗を浮かべて、微動だにせず俯いていた。

「ダンケル……」

外大臣コーブが思わず呼んだその名が、静まり返った議場にポツリと落ちた。

＊＊＊＊＊

レナードは両手を腰に置いて、大きく息を吐き出した。
先程までルークの重い気の圧力を受けていた為に肩が凝っている。
それをほぐすように首を回すと、目の前の男達に視線を向けた。
そこには剣を構えた男が六人、その背後に術者らしき男が二人いた。

「で、お前達はどこへ行くつもりなんだ？」

男達はじりじりと僅かに後退したが、レナードの問いに答えはない。

「……無視かよ。なんで皆、俺の事無視するかな？　いいよ、自分で答えるよ。お前達は後宮へ行くつもりなんだよな？　だって、この先は後宮の入り口だもんな？」

ぼやくように呟いたレナードはやはり返事を貰えずに、再び大きく息を吐き出した。

と、体の自由を奪われ、縛られた様に手足が動かなくなる。

「お？」

唯一動く口から、驚きの声が洩れた。

どうやら、術者の魔法で体を拘束されたらしい。

「――こいつは近衛隊長だ！！　剣を抜かせるな、今のうちだ！！」

リーダーらしき男の声と共に、六人が一斉に斬りかかって来た。

「おお？」

なぜか楽しそうな声を上げたレナードは動かないはずのその身を屈め、最初の一太刀を躱すと、その男の懐に入り込み鳩尾を打った。そのまま男の手首を捻り上げて剣を奪いその首を斬りつけ、一歩、二歩と後退する。

だが結局、勢いよく噴き出した鮮血を浴びて顔を顰めた。

「あー、くそ！……あ、悪いけどこれ借りるな？」

少しも悪びれた様子のないレナードの言葉は、すでに事切れている男には届かない。

しかしそんな事には構わず、怯む男達の前に奪った剣を掲げて笑

うその顔は、見る者にディアンと双子だという事を思い出させるには十分だった。

「なかなか良い剣だ。お陰で、お望み通り俺の剣を抜かなくて済むな？」

「くそっ！！」

誰かが舌打ちと共に放った攻撃魔法をレナードは簡単に防ぐと、間髪を入れず魔力を乗せて打ち掛かって来た男の剣を身を低くして受け流し、後ろに迫った男の足を払った。体勢を崩したその男の喉に剣を走らせ、再び打ち掛かってきた男の剣を軽々と受け止めて踏み込むと、その腹に拳を打ち込む。

男は血を吐き、その場に倒れた。

魔力を込めたその拳を受けた男は、当然息をしていない。

そしてレナードは、先程から自身に結界を張って鬱陶しく詠唱している術者の元へ、床を一蹴りして近づき、驚きに目を瞠る術者の胸に剣を突き立てた。

リーダーらしき男が倒れ、最後の一人が背を向け逃げ出すと、レナードは手にあった剣をその男に向けて放った。剣は男の背から心臓を貫いて、その男と共に地に転がる。

「悪いな、殺せと魔王の命令なんだ」

呟いたレナードは、目の前に横たわる男の顔を踏みつけた。

普段の温厚な姿からは想像ができない程の非情さを見せるレナードは、間違いなくマグノリア帝国皇帝の近衛隊長であった。

「お前は勝手に死ぬなよ？　本当に本当に申し訳ないが、お前一人

ぐらいは生かしておかないと、冥王の逆鱗に触れる」

踏みつけられた男は、先程のレナードを拘束したものとは比べ物にならない程の力でその体を縛り付けられている。
瞬きも、舌を動かす事も出来ず、ただ辛うじて呼吸が出来る程度なのだ。

それはあっという間の出来事だった。
王宮の警備兵や、近衛が駆けつけるまでの短い時間にレナードは侵入者八人を打ち倒したのだ。
術者二人は当然の事、剣を持った六人もかなりの魔力だったにもかかわらず、レナードの敵ではなかった。
その後、続々とその場に警備兵達が駆けつけ、後片付けを始めだした時、近衛のアレックスがレナードの側に現れた。

「ハナ様は？」

「ご無事です。陛下が青鹿の間にいらっしゃった時には我々も侵入者に気付き、すぐに後宮内をはじめ、王宮内を隈なく調べ始めましたが、今のところ他に侵入者はいない模様です」

「そうか……念のために、引き続き警戒をしてくれ」

レナードがアレックスに指示を出していると、冥王――　ディアンが現れ、倒れた男を見て片眉を上げた。

「たったの一人……」

その呟きを聞いたレナードは思わず後じさる。
ディアンはそれ以上は何も言わなかったが、レナードに爽やかす

ぎる程の微笑みを向けた。

「さ、さあ！！　身を清めて陛下に報告に行かないとな！！　ハハハ！！」

大きな声で独り言？　を言ったレナードは、逃げるように自室へと飛んだ。

それから部屋付きの侍従が湯の用意をする間、ソファに座り込むと、ふかーくふかーく息を吐き出した。

侵入者の気配を感じて転移する直前、ルークは「殺せ」とレナードに命じて花の許へと飛んだのだ。

いつもはそこまでの関知はしないルークなのだが、よほど機嫌が悪いのだろう。

そして、本来なら宰相が侵入者を査問する事などしないのだが、査問（主に精神的な拷問）はディアンの趣味なので誰も邪魔をしない。

が、魔王の命令によって、査問の相手が一人しか残っていない為、冥王の機嫌も非常に悪かった。

もちろん、侵入者相手に容赦するつもりはレナードにもない。だが、それにしてもだ。

――――　なんか俺、ひょっとして貧乏くじばかり引いてないか？

自身の鈍感さには気付いていないレナードは、誰もが『今更！？』と驚くような事を考えながら、バスルームへと向かったのだった。

90．どっちもどっち。

薬が効いたのか、お昼前にはすっかり元気になった花は寝台で体を起こして本を読んでいた。と、そこへ朝議に出ているはずのルークが急に現れたので花は驚いた。

「何かあったのですか？」

「いや、何も。大丈夫か？」

気遣う様にルークは優しく微笑んだが、それでも花は何かがあったのだろうと察した。

だが、それ以上は何も訊かずに花も微笑み返す。

「はい、もう大丈夫です」

それから、ルークとお昼を一緒に過ごせた事を花は素直に喜んだのだった。

＊＊＊

ルークとの昼食を終えた花は念の為に横になり休んだが、結局わずかな時間しか眠れなかったので早々に寝台から起き出した。

そして、居間でセレナ達と取り留めのない話をしていると、護衛の近衛からコーディがセルショナードより戻ってきた事を伝えられた。

「もしハナ様のお身体にご負担がないようでしたら、少しだけご挨

拶に伺いたいと申しておりますが、どうなされますか？」

「もちろんです！　是非！！」

暫く後に青鹿の間を訪れたコーディは、少し疲れている様だったが、それでも元気そうだった。

「ハナ様、コーディ・アシュラン只今戻りました」

「コーディ……」

膝をついて最敬礼をするコーディの無事な姿を目にして、花は嬉しさのあまり言葉を詰まらせた。そんな花にコーディは顔を上げて微笑み、言葉を継いだ。

「私が皆より先に戻りましたのは、こちらをハナ様にお届けする為です」

恭しくコーディが差し出したのは、花がセルショナード王城に置いてきてしまったシューラだった。

「……ありがとうございます」

花はシューラを震える手で受け取りお礼の言葉を口にしたのだが、それ以上は込み上げる感情に胸がいっぱいで上手く伝える事が出来なかった。

それでも何度か深呼吸を繰り返して気持ちを落ち着けると、コーディに椅子を勧めた。

「いえ、私はすぐに失礼致しますので……ああ、やはり少しだけお言葉に甘えさせて頂きます」

辞退しかけたコーディは、自分が座らなければ花もまた座らないだろう事に気付き、勧められたソファへと腰を下ろした。

「ハナ様、お体の具合が宜しくないと伺いましたが……ご無理をさせてしまい申し訳ございません」

「いいえ、もうすっかり元気になりましたから。それよりも、コーディが無事に戻って来られて本当に嬉しいです。……コーディはいつ王城を発ったのですか？」

やっとコ―ディが無事に戻って来たことの喜びを伝える事が出来た花は、同時に湧いてきた疑問を口にした。

「ハナ様が陛下とお戻りになられた次の日に……私だけ一足先に発ちましたが、ジャスティン様もカイルとジョシュと共に、リカルド殿下の即位が終わればすぐに発つ予定でしたので、恐らく明日にはご出立なされて……四日後にはお戻りになられると思います」

それを聞いた花は安堵の吐息を洩らした。

「そう……では、講和の為の使者の方と戻られるんですね？」

「はい……いえ、まあ……」

使者として誰が来るのだろうかと、花は知っている政務官達を思い浮かべたのだが、コーディの返事はずいぶん歯切れの悪いものだった。

そんなコーディの態度に不思議に思い、花は首を傾げる。

「どなたがお見えになられるのですか？」

「はい。あの……リカルド殿下が――いえ、セルショナード王が直接お見えになられます」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

セルショナード王――リコ達の来訪を控えた前日、再び王宮に侵入者が現れた。

しかし、今回は強引にルークの結界を破っての侵入だった為、すぐさま警備兵達の知るところとなり、六名の侵入者が警備兵と数名の近衛によって捕らえられたのだった。

「またサンドル王国なのか！？」

ディアンの報告内容を聞いたレナードが驚きの声を上げた。

前回の侵入者達の件にしても、ダンケル伯爵の背後にはサンドル王国がいたのだ。

「ええ、どうやらサンドル王国は王太子が乗り出してきたようですね。あそこの王太子は相当性質（たち）が悪いですから」

「……」

ディアンのサンドル王国王太子に対する評価を聞いたその場の者達――ルークとレナード、セイン、そしてグランは、色々と思うところはあるものの口には出さなかった。

「だが、あいつら……侵入者達は浮民だろ？　あれほどの力を持った奴らを雇うとなると、ずいぶん金がかかっただろうに……」

侵入者達の型も何もない荒っぽい力技のみの剣筋から、レナードは浮民の傭兵達だろうと当たりを付けていた。

浮民とは、どの国にも籍を置かず、旅芸人などで身を立てて各国を放浪している者達の事であり、その中でも特に魔力の強い者達は術者や傭兵となり、行商人達の護衛などに雇われる事が多い。

また、規律違反などで軍を追われた者が傭兵となり浮民となる事もある。

あれ程の力を持った術者や傭兵達をあの人数雇うとなると、相当の金銭が必要となるはずだ。

「あの国はお金だけはありますからね。しかも、民達は馬鹿みたいにユシュタルへの信仰心が強い。恐らくユシュタルの御使いと言われているハナ様を自国に迎え入れる為と名目をつければ、布施と称していくらでも徴取できるでしょう」

「迎え入れるって……」

呆気にとられたレナードの呟きを聞いて、ディアンは溜息を吐いた。

「ですから、あそこの王太子は性質が悪いと言っているでしょう。これらはあくまでも警告です。あの国からの要望に応じなければ、

この先いくらでも嫌がらせに使い捨ての傭兵達を送り込んで来ますよ。そしてあわよくばハナ様を略奪しようとするでしょうね」

「なんだよそれ！？」

今度は怒りを含んだレナードの声が執務室に響いた。

そこへグランが静かに口を開く。

「しかし、そこまで強引に事を進めれば、さすがに各国の非難は免れないでしょう？　セルショナードの前例もある事ですし……」

「いえ、残念ですがそれは期待できないでしょう。何もハナ様を欲しているのはサンドル王国だけではありません。セルショナードで毎晩続いたあの奇跡は、瞬く間に各国に広がり、いよいよハナ様のお力が本物だと知らしめてしまったようです。ハナ様のお力は各王家も喉から手が出るほど欲しいものでしょうから、いつサンドル王国のように暴挙にでるか……」

その言葉に皆が息を呑んだ。

ルークは黙ったまま目を閉じていたが、その心情は穏やかなものではないだろう。

「ですが、ハナ様は陛下のご側室です。それを……本当に帝国皇帝の側室を略奪するつもりなのでしょうか？　この時期に？」

セインの疑問は尤(もっと)もなものだった。

今、ユシュタールは勢いを増す『虚無』によって崩壊の危機に瀕している。

そしてその『虚無』を抑える為に、世界の崩壊を防ぐ為に、各国はマグノリア帝国皇帝の力を必要としているのだ。にもかかわらず

……。

「――この時期だから尚更なのです。我々は別に今までも仲良しこよしでやってきた訳ではありません。いつの時代も、どの国も、己の利を追求して虎視眈々と他国の隙を狙っていたではないですか。今、ハナ様のお力を手に入れる事が出来たなら、どれ程の強みになる事でしょうか」

淡々と述べるディアンの言葉を誰も否定する事はできなかった。

そもそも各国の王族達が皇帝に頼らなければならないのは、虚無を抑える為に必要とする魔力に、自身の『生成力』が追いつかないからなのだ。だとすれば、魔力の『器』を満たす力を持つ花が手に入るなら、皇帝の力を必要としなくても――今のように帝国の顔色をうかがわなくてもよくなる。

花は今や、皇帝の寵妃としての価値ではなく、『癒しの力』を持つユシュタルの御使いとして、皆の欲をかき立てる存在になってしまったのだ。

一度、王宮から攫われるという失態を犯してしまった以上、この先、欲深い者達はなんとかして王宮警備の穴を突こうと躍起になるだろう。

ルークは込み上げる焦燥と苛立ちをなんとか抑えていた。

今でさえ花を王宮に閉じ込めてしまっているというのに、これ以上籠の鳥にしてしまっていいのだろうか。

だが、花を手元から離すなどと耐えられない。再び奪われるような事があってはならないのだ。

しかも、もしあの事が知れたら……。

突如襲いかかって来た恐怖に慄然とする心を、ルークは必死で押し殺した。

そんなルークにディアンは一瞬心配そうな視線を向けたが、誰に

も気付かれる事無くすぐに表情を戻すと、再び口を開いた。

「以前より、陛下の元には各国からのハナ様への招待状が届いてはおりましたが……ハナ様がセルショナードよりお戻りになられてからのこの短い間に、ハナ様を独占する事へ抗議する書簡が招待状と共に届くようになりました。更に、一部の狂信的な馬鹿達が、陛下がハナ様を……無理に閉じ込め自由を奪っているのだと、だから救出すべしと計画を立て始めているようです。この馬鹿達を煽り、裏で糸を引いているのはサンドル王国の王太子で間違いないでしょうが……」

「なあ、ハナ様の意思を無視して、そこまでサンドル王国の王太子はやるのか？だって王太子は……」

信じられないと言った様なレナードの言葉に、ディアンはその顔に凶悪な程の笑みを浮かべた。

「だからこそでしょう？　しかし、いくら追い詰められているからといって、女性の意思を無視して奪おうなどと、愚の骨頂。口説き落として手に入れるからこそ、喜びが得られるのだという事を徹底して教えて差し上げないといけないでしょうね」

その笑みを見たレナード、セイン、グランの三人は、背筋に冷たいものが走り抜けた。

ただ一人、無表情のままのルークは急に立ち上がると、何も言わずにその場から消えてしまった。それをレナードが追う。

「さてと、お昼ですか……私は侵入者達を眺めながら食事を頂きましょうかねぇ」

ディアンもそう呟くとその場から消え、残った二人は顔を見合わせた。

しかし、どちらもディアンが呟いた言葉の意味を考えることは敢えてせず、その場から立ち去ったのだった。

91．バナナはおやつですか。

昼食を花と約束していたルークは青鹿の間へと飛び、目にしたものに眉を寄せた。

「何だ？　それは」

ルークの視線の先にあるのはテーブルの上に載った三つのバスケット。

「お弁当です」

嬉しそうに答える花に、ルークは更に眉を寄せた。

「……オベントウ？」

ユシュタールに弁当という概念はない。

仕事などで外に出掛けることはあっても、昼食は家に戻って食べるか、食堂で済ませる。

また、長距離の移動の際は、貴族階級の者達は料理人を同行させるし、一般庶民は現地調達で調理するか、せいぜい日持ちのする乾パンやチーズ、干し肉などをそのまま食すのだが、弁当とは意味合いが違う。

「はい。これからピクニックに行きましょう」

「ピクニック？」

ユシュタールにはピクニックもない。
だが花は眉を寄せたままのルークを気にすることなく、バスケットを一つ差し出した。

「自分の荷物は自分で持つのが遠足のルールなんです」

「エンソク……」

新たに出てきた知らない単語に、ルークはそれ以上考える事は無駄だと悟り、素直に花に従う事にした。
そんな二人の行動を周囲は驚きに満ちた表情で見るのだが、花はそれには頓着せずにもう一つをセレナに渡し、最後の一つを持ち上げた。

「申し訳ありませんが、レナードはその敷物を持って下さい」

折り畳まれた柔らかな床敷を指して花はレナードにお願いした。

「あ？　ああ」

戸惑いながらもレナードが床敷を持つと、出発？　した花とルークとセレナと、そしてレナード。
ルークとレナードがいる為、花の護衛達はエレーンとお留守番である。

王宮の回廊を行き交う者達は、普段姿を見せるはずのない場所に現れた皇帝に驚き（恐らくそれだけではないが）、更に花を伴っている事に驚愕しながら慌てて深く頭を下げるのだが、一行が通りすぎると、その後ろ姿を呆気にとられた様に見送った。

だが、目聡い者達は花の右手小指の指輪に気付き、喜びと安堵に胸を撫で下ろした。

一部の利己的な者達を除いた王宮の者達は皆、花がルークの正妃となる事を望んでいるのだ。

そして、この事は瞬く間に王宮内に広がった。

当然、セレナとエレーンも花の指輪にはすぐに気付いていたが、敢えて触れる事はせず、後でコッソリ二人で祝杯を挙げていたのは秘密である。

「どこに行くんだ？」

行き先を問うルークの言葉に、花はニコニコと微笑む。

「今日はとてもお天気がいいですから、絶好の遠足日和ですね」

「……」

ピクニックはどうなったのかと思いはしたが、ルークはもう何も言わなかった。

「本当は中庭などが良かったんですが、あそこは人目に付きやすいので、別の場所にしました」

「……」

人目に付くとまずいらしいピクニック――いや、遠足はいったい何をするのだ、とルークは頭を悩ませていたのだが、そうこうしているうちに花の目的地に気付いた。

「月光の塔か」

「はい。あそこは大きな天窓がありますから。窓を開ければ風もよく通りますし、人目にも付かないですからうってつけの場所だと思います。ただ神聖な場所ですから少し悩みましたが、いけない事をするわけではないので、大丈夫だと思います」

「……そうか」

なぜか返事が遅れたルークだった。

そして到着した月光の塔、祈りの間で花はセレナと窓を開け放ち、レナードに床敷を敷いてもらうと、そこへ靴を脱いで上がり、座った。

「……」

直接床へ座るなど貴族階級の者達にとっては有り得ないこの世界の三人は花の行動に驚いて、無言のまま花を見つめていた。

「慣れないかもしれませんが、どうぞ？　セレナも」

「いえ、私は……」

諦めたように素直に従ったルークとレナードとは違い、セレナはためらいを見せた。

いくら床敷の上とはいえルークや花達と同じ席？　に着くなどと、セレナには恐れ多いのだ。

「ダメです。お弁当は皆で囲んで食べるのが、遠足のルールなんで

すから」

「……ハナ様、これがエンソクと言うものなのですか？」

早々に悟って口を閉ざしてしまったルークの代わりに、レナードが疑問を口にした。

「はい、いつもと違う場所で皆と一緒にお弁当を食べるんです」

正しい様で、何だが微妙に違う花の遠足論に突っ込める者はこの場には残念ながらいない。

「マグノリアにも、貴族の子女達が通う学院があると聞きましたが、そこでは遠足のようなものは無かったんですか？」

マグノリア――正確にはユシュタールにも学校はある。

学校では、庶民達は読み書きや簡単な計算などの基本を学ぶが、幼い頃より教育係などがいる貴族の子女達は勉学の為ではなく、集団生活を学び、学友を作るという意味合いで十歳から十二歳となる子ども達が二年間、それぞれの階級の学校へと通うのだ。

だがなぜか、花の問いにルークとレナードは遠い目をした。

「学院か……そう言えば、そんな物もあったな……」

「ええ、確かにありましたね……」

皇子であったルークが学校へ通ったのかどうかはわからなかったので、一般的な事を訊いたつもりの花だったのだが、二人の不自然な態度に疑問が湧いた。その為、更に質問をしようとしたが、それはセレナの慌てた様な言葉に遮られた。

「あ！　いえ！！　こ、この様な……エンソクの様なものはなかったです！！」

「……そうなんですか？　残念ですね」

花はそう応えると、二人を深く追求する事は諦めて、お弁当を広げる事にした。

「料理人の方達に無理を言って作ってもらったんですが、すごくおいしそうですね」

お弁当を広げて嬉しそうに微笑む花に、一同も頷いた。

そして、和やかに四人で食事をしていたのだが、あらかた食事が終わった頃、レナードが急に立ち上がった。

「あ！　しまった！！　ちょっと兵舎に用事があるんだった！！」

するとセレナまで立ち上がり……。

「まあ、大変！！　エレーンに大切な事を伝えるのを忘れておりました！！」

と、二人は暫く側を離れる事を深く謝罪しながら去っていった。

「……」

――――　レナードどころか、セレナまで……白々しさではレナードの方が何枚も上手でしたが……。

二人を呆れて見送っていた花だったが、窓辺にとまった二羽の小鳥に気付いてそちらに目を向けた。
季節外れの暖かい風が、花の頬を優しく撫でて柔らかな髪と戯れる。
ルークは、花の姿があまりにも儚げに見え、今にも消えてしまいそうな恐怖に、思わず花へと手を伸ばした。
が――

「はとポッポ」

「……は？」

花の不可解な呟きを聞いたルークは伸ばしたその手を宙でとめた。
しかし、何事もなかったように振り返った花は、ルークの伸ばしたままのその手に気付くと、そっと両手で包み込んで遠慮がちに微笑んだ。

「ルークは……少しは楽しめましたか？」

「――ああ」

『はとポッポ』が何なのか疑問に思わない事はなかったが、それはひとまず（恐らく永遠に）置いて、ルークは不安そうな花の問いに頷いた。

「私もすごく楽しいです」

ホッとしたように笑う花に、ルークも微笑み返す。
花は微笑みながら、それでもその瞳に真剣な色を宿らせてルークを見つめた。

「ルークが楽しんでくれたのなら、私はすごくすごく嬉しいです」

「……そうか」

ここ最近、どこかルークが緊張しているように花は感じていた。

リコ達の来訪を控えている為ではない、何か苛立ちを含んでいるような……だから少しでもルークの気分転換になればと行動に移してみたのだが、独りよがりだったらどうしようと、少し不安だったのだ。

だが、今度はルークがためらうような、困ったような顔で微笑んだ。

「ハナは……窮屈ではないか？　ここから――王宮から出たいとは思わないか？」

「――まさか！」

ルークの言葉に花は驚いたように声を上げたが、すぐに落ち着いて否定した。

「いいえ、全く思いません。少しもそんな風には感じないです。それに……私はずっとずっとルークの傍にいたいんです」

「ハナ……」

心からのこの気持ちが伝わってほしい。

そう願いながら花は微笑んで繋いだままの手を強く握ると、同じようにルークの手にも力が込められた。

瞬間、花は引き寄せられ、気が付けば柔らかな床敷の上に寝転ん

でルークの顔を見上げていた。
ルークの左手は庇うように花の後頭部に添えられている。

「あれ？」

何が起こったのか分からず不思議そうにする花を見下ろして、ルークはニヤリと笑った。

「せっかく二人が気を利かせてくれたんだから、有効に使わないとな」

「……え？」

まだ思考が追いついていない花の唇にルークは自らの唇を重ねた。
ルークが優しく花の唇をなぞっていると、徐々に花の動揺した気持ちが伝わってくる。どうやら、思考が追いついたらしい。
ルークは花からそっと離れて、真っ赤になった花を見下ろした。

「あ、ああ、あの！　こ、ここは祈りの間です！！」

「そうだな」

あっさり肯定したルークは、動揺する花に再び顔を近付けると、花の額、こめかみ、頬へと軽いキスを落としていく。

「ルーク！！」

うろたえる花の頬に唇を触れたまま、ルークは訊いた。

「いけない事か？」

「え？」

「これは、いけない事なのか？」

「あの……その……」

低くかすれた艶のあるルークの声に花の胸は激しく高鳴る。

何と言えばいいのか、そもそも自分が何を言いたいのかわからずに口ごもった花は視線をさまよわせて出入口の扉に目をとめた。

ルークは、まるで花の心を読んだように――　というか、実際読んだのか、花に軽いキスを繰り返しながらも、優しく微笑んで囁く。

「心配しなくても、結界を張ってあるから誰も入っては来れない。それに……」

花の耳元に響くルークの声は甘い。

「――声も洩れない」

「ッ！？」

その言葉にこれ以上ないほど真っ赤になった花は、自分の口を手でふさいだ。

ルークは、瞳に涙をためて焦る花が可愛くて仕方がないのだが、花の方は限界だった。

このままだと、心臓が破裂してしまう。

「だ、だだ、ダダダ、ダメです！！　遠足はお家に戻るまでが遠足なんです！！」

嫣然と微笑んで再び近づいてくるルークを見ないように花はギュッと目を瞑ると、必死で押しとどめた。
が、ルークを押さえる手のひらに細かな震えが伝わる。
それを不思議に思った花がそっと目を開けて窺うと、ルークは必死で笑いを堪えていた。

「ッ！！――からかったんですね！？」

ルークは堪え切れず、遂に吹き出した。
伝わる花の想いにルークは感情が昂りすぎて、冗談にしないと自分を抑えられそうになかったのだ。

起き上がる花に手を貸しながらも笑いの止まらないルークに、しばらくムっとして怒っていた花だったが、声を出して笑うルークを見ているとその怒りも続かない。
しかも、抱き寄せられて謝るように優しく頭を撫でられては尚更だった。

その後、戻って来たレナードとセレナ、そしてルークと共に再び歩いて祈りの間を後にした花は、青鹿の間に入った途端、ルークに「お家に戻ったがどうする？」と耳元で囁かれ、もう一度その顔を赤く染めたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

翌日の昼過ぎ、マグノリア王宮はにわかに騒がしくなった。

そして花の元にも、ジャスティン、カイル、ジョシュが無事に帰還したとの報告と共に、セルショナード王――リコ達一行の来訪が伝えられたのだった。

番外編。ディアンの憂慮。

小鳥の囀る声で目覚めたレナードはそのまま窓辺へと行き、勢いよくカーテンを開けた。
外は明けゆく太陽の爽やかな光に包まれている。
いい一日になりそうだ、とレナードは――

「思えるかー！！」

と、太陽に向かって吠えた。
その声に驚いて小鳥達は慌てて飛び立っていく。

「朝から騒々しいですね、レナード」

溜息混じりにディアンはレナードを窘めて、そのまま優雅にお茶の入ったカップを口へと運んだ。
そんなディアンへと向き直ったレナードは、いつもは優しい曲線を描く眉を吊り上げる。

「ディアン！　なんでお前が俺の寝室で朝っぱらからお茶なんか飲んでるんだ!?　メーシプ!!　お前も呑気に給仕なんてするな!!」

空になったディアンのカップにお茶を注いでいたメーシプがその言葉に動きを止めた。

「ディアン様、どうやらおぼっちゃまは寝起きが宜しくなかったようでございます」

「まったく……それで人に当たり散らすとは困ったものですね……」

「いやいや、待て待て……俺が悪いのか？　そうなのか？　いや、そうじゃないだろ？　目覚めた自分の枕元でお茶飲んでる奴なんかがいたら、誰だって怒るんじゃないのか？」

あまりにも当然のような態度で寛ぐディアンに、レナードは怒る自分が間違っているのかと錯覚しそうになる。

「そもそも、俺の寝顔なんか見て何が面白いんだ！？」

「おや、レナード……寝ているのに自分の寝顔が面白くないと、なぜわかるんですか？」

「え？……お、面白いのか？」

怒りに任せた問いかけに、心外だと言わんばかりに問い返されレナードは焦るのだが、ディアンはメーシプとチラリと視線を合わせただけで、再びカップを口へと運ぶ。

「な、なあ、俺の寝顔って面白いのか？」

不安そうに顔を顰めるレナードを無視してディアンは話題を変えた。

「ところでレナード、今日は確かキャロライン嬢とデートでしたね？」

「無視かよ！……って、え？　なんで知ってるんだ？」

「運良く私も今日は休みなので、ご一緒しようと思いましてね」

「いやいやいや、待て待て待て……おかしいって、何かおかしいって……いや、確実におかしいって……俺はとっくに成人した大人だ。うん。なぜ、その俺が兄同伴でデートに行かなければならないんだ？」

冷静に、慌てずに、落ち着いて対処しようと心掛けていたレナードだったが、ディアンはそんな事もわからないのかと言わんばかりに大きく溜息を吐く。

「それは私が暇だからです」

「理由になってねえよ！！」

やはり冷静に対処するのは無理らしいレナードの突っ込みに、再びディアンは溜息を吐いた。

「しょうがないですね、では三つ選択肢を差し上げましょう。一、私を伴ってデートに行く。二、近くに私の姿を見ながらデートをする。三、常にどこからか私の視線を感じつつデートをする。さあ、どれにしますか？――ああ、心配しなくても寝所までは付き合いませんから、お会いになってすぐに……と言うのもありですかねぇ」

「……一番でお願いします」

爽やかに微笑むディアンに、何かを諦めたらしいレナードだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「あの……レナード様？」

「キャロライン、これは俺の双子の兄のディアンだ」

「……ええ」

隣へチラリと視線を向け、ディアンを不本意そうに紹介するレナードに、キャロラインは「言われなくても分かります」との言葉を賢明にも飲み込んだ。

「初めまして、キャロライン嬢。お噂は兼々お伺いしておりますよ」

「ひっ！！」

爽やかに微笑んでいるはずのディアンを見たキャロラインはなぜか青ざめ、まともな挨拶を返せなかった。

その日、街中にある貴族の子女達が利用する人気のサロンはかなり客足が悪く、いつもは賑やかな店内も静まり返っている。そんな微妙な空気の中、ぎこちなく会話は進んでいったのだが、突然レナードが立ち上がった。

「すまない、キャロライン。王宮に侵入者が現れたようだ」

それだけ言うと、レナードはあっという間に消えてしまい、後に残ったディアンとキャロライン。

優雅にお茶を飲むディアンとは対照的に、キャロラインはそわそわと落ち着かない。

「キャロライン嬢」

「はいっ！！」

「お父上のファンテ男爵はお元気ですか？」

「え、ええ！！」

「そうですか、それは良かった。先頃のサンドル王国とマリサク王国の戦の影響で取引先を失ったと……それどころか大きな損害を受け、大変な負債を抱えてしまったと伺ったものですから、心配していたのですよ」

「……」

「負債総額は確か、三億――」

「あのっ！！　私、用事を思い出しましたので！！　こ、これで失礼致します！！」

慌てて立ち上がったキャロラインはディアンの返事も待たず、駆け出す勢いでサロンを後にしたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「おかえりなさい、ディアン」

屋敷の居間に入った途端、声を掛けられたディアンは、驚く事な

くその相手に微笑みかけた。

「母上、お戻りになられていたのですか？」

「ええ、レオナルドに恋人ができたと聞いて。是非、紹介してもらおうと思ったのだけれど、一足遅かったようね？」

「ええ。恐らくその機会はないと思います。申し訳ありません、母上」

アンジェリーナの向かいのソファにゆっくり腰を掛けると、申し訳ないと思っている様には全く見えない顔でディアンは謝罪した。

「で、いくらなの？」

「正確には確認をしないと分かりませんが、三億程ですよ」

「そう。で、どうするの？」

「どうするも何も……どうせレナードはすでに用意しているんでしょうから？」

「はい、その様に申し付かっております」

側で黙って控えていた執事のメーシプが頷く。

「では、それと同じ額を侯爵家の方から回して、レナードの財産に穴埋めしておいて下さい。もちろんレナードには悟られないように」

「かしこまりました」

メーシプへ指示するディアンの言葉を聞いて、アンジェリーナは眉を上げた。

「あら、素直に払ってあげるの？」

「ええ。元々レナードは彼女の家に援助するつもりだったのですから、それを止める事は出来ませんよ」

「あの子は本当に……甘いわね……」

「父上にそっくりですからね。目的を持って自分に近づいて来た者達を、承知していながら受け入れるのですから、どうしようもありません」

二人の間には暫く言い様のない沈黙が落ちた。

「ごめんなさい、ディアン」

「――なぜお謝りになられるのですか？　私は母上の……父上と母上の子供として、レナードと共に生まれて来れた事だけは神に感謝してもいいと思っている程に嬉しいのですよ。それに、レナードの存在は私を救ってくれているのですから」

「ディアン……私は貴方を愛しているわ」

「もちろん、存じておりますよ。母上の愛情を疑った事など一度もありません」

「……ありがとう」

「いいえ、お礼を言われる様な事は何も。さあ母上、美しいお顔をいつまでも曇らせているのはおやめになって下さい」

ニヤリと笑うディアンに、アンジェリーナもその顔から愁いを晴らして同じ様にニヤリと笑い返した。

そして今度は、先程とは違った明るい沈黙が流れる。

「貴方の様にいい男がいつまでも独りというのもどうかと思うわ。早く素敵な女性を見つけなさいな」

「さあ、それはどうでしょうかね。今は愛すべき手のかかる弟達の面倒を見るだけで精一杯ですから」

「かわいい弟達の面倒を見てくれるのは母親として嬉しい限りだけれど、あまり無茶はしないでちょうだいね。昔……学院に通っていた頃の様に……」

「あれは若気の至りですよ。今はもう少し上手く立ち回れる様になりましたから、ご心配には及びません。それでは私はちょっと王宮の様子を見て参ります」

そう言って立ち上がったディアンに、アンジェリーナは呆れた声を出した。

「貴方の部下達が侵入者の真似事までするとは知らなかったわ」

アンジェリーナの言葉にディアンは再びニヤリと笑い、その場から消えた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ディアン！！　なんでお前の部下達はわざわざ王宮に忍び込むんだ！？」

「いったい何をそんなに怒っているんですか？　いい訓練になったでしょうに。ああ、欲求不満ですか？」

「違うわ！！――とにかく、手続きを踏んでちゃんと王宮門から入る様に指導しておいてくれ！！」

「次からは、気を付けるように伝えておきます」

「次こそは、だ！！」

怒りが治まらない様子でレナードが消えてしまうと、それまで黙って二人のやり取りを聞いていたルークが小さく息を吐いて、口を開いた。

「ディアン、お前ちょっとレナードに対して過保護すぎないか？あいつだって十分わかって――」

「おや、嫉妬ですか？」

「……誰に、何に対してだ？」

「私は陛下の事も愛しておりますので、ご心配なさらないで下さい」

「……」

ルークはそれ以上の気味悪い会話を続けることは止め、侵入者達――ディアンの部下達から集まった情報を元にした報告を聞く事にしたのだった。

番外編　ディアンの憂慮。（後書き）

花が現れる数十年前の出来事でした。

92．急いては事を仕損じる。

「謝恩使として、まさか王直々にお見えになられるとは思いもよりませんでしたな。よほど使いをなされるのがお好きらしい。前回のご訪問は従者としてお見えになられていたと伺いましたが？」

謁見の間に並び立つ大臣・政務官達の中から上がった声に、リコは目の前に座す皇帝からそちらへゆっくりと金色に光る瞳を向けた。その視線を受けた声の主――内大臣のドイルはたじろいだ様に一歩後退する。

この場には今、新たなセルショナード王を一目見ようと、集まれる限りの大臣・貴族・政務官達が集まっていた。

「確かに、前回の訪問の折は挨拶もせずに失礼した……しかし内大臣殿、あなたは何か勘違いなさっておられるようですね。我が国は此度の戦、全面的に非を認めた上で停戦を申し入れはしましたが、敗戦を認めた訳ではありません。貴国に従属した覚えもなければ、謝恩の為に訪れる謂われもない、ただ円滑に講和を進める為に私は訪れたのです」

その言葉通り、リコは一国の王として、来訪の挨拶と暫く王宮へ滞在する事への謝辞を述べる為に、腰に剣を佩いて立ったまま、玉座の皇帝――ルークに面していた。

リコの後ろにはザックとトールド、他数名が続くが、その者達は皆膝をついている。

牽制の為に投げつけたドイルの言葉は見事にはじき返されたのだった。

「や、敗れたも同然ではないか！　力ある者を次々と失った貴国がこれ以上戦を続けても我が帝国に勝てぬは必至！！」

それでも、なんとか遣り込めようとするドイルの声は甲高く耳に障る。

「さあ、それはどうでしょう？　『果て』に面していない我が国には何の枷もありません。今、再び開戦する事になれば、私は宝剣を手に力の全てを戦に注ぐでしょうからね」

剣の柄に手を掛けて冷静に返したリコの言葉に、その場にいる多くの者達が恐れ慄いた。

当然、レナードは己の剣の柄を握りいつでも抜刀出来る様にルークの後ろで構えてはいたが、政務官達の情けない姿を目にして、呆れたように小さく溜息を洩らした。同様にルークの背後に控えているディアンは、なぜか嬉しそうに微笑んでいる。

だがルークは、先程からずっと射貫くような眼差しでリコを見据えていた。そしてリコもまた、厳しい表情でその視線を受け止め返している。

「そんなに熱く見つめ合っている所を見せつけられると、思わず嫉妬してしまいそうですよ、陛下」

笑みを含んだディアンの揶揄に顔を顰めたルークは、それでもリコから視線を逸らさずに無言で立ち上がった。

「明日だ――すべて明日からだ。今日はゆるりと休まれるが良かろう」

ルークはそれだけ告げると、その場から消えてしまった。

「では、皆様方のお世話はこちらにいる政務長官のセインがさせて頂きますので、明日からの話し合いに備えて、今日はご用意させて頂いた部屋にてごゆっくりお休み下さい」

「――お心遣い感謝する」

ディアンの黒く爽やかな笑顔に、リコは厳しかった表情を改めて本物の爽やかな笑顔を返して謝辞を述べると、進み出て来たセインに従ってザックやトールドと共に謁見の間を後にしたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「本当にあのヘタレっぷりは見事でしたね」

「はい。実に見事なものでした」

「ああ、本当にな」

「いや、そこ感心する所なのか？」

ディアンが先程のドイルや政務官達の態度に感心したように呟いたのをきっかけに、ジャスティンとレナードが同意した。だが、軍大将のガッシュには何が見事だったのか、さっぱり分からないようだ。

「というかレナード、ずるいぞ。お前はこっち側だろうが！　理解している振りはやめて、ほれ、素直に分からないって顔しろよ」

「……ガッシュ殿、それはあまりにも酷いじゃないですか。私にだって脳みそくらいはあります」

「お前の方が酷いだろうが。俺にだって脳みそはあるぞ？　カチコチだがな！！」

「あの、そろそろ本題に戻った方が宜しいのでは？」

レナードとガッシュの情けないやり取りはグランの申し訳なさそうな声によって打ち切られた。

この小さな会議室にはルークとレナード、ディアン、そして明日からの交渉に臨む予定の者達が数名、ジャスティンと詰めの協議をする為に集まっている。

「ああ、すまん。それにしても、帝国の威信を下げる様なあんな馬鹿共を晒してしまっていいのか？……まあ、俺もバカだが自覚はあるからな！！」

なぜか威張るガッシュを見て微笑みながら、リコ達の案内から戻って来ていたセインが口を開いた。

「ガッシュ殿、どこの国にも家柄と地位だけの浅慮な者達は多かれ少なかれいるものです。それを今更隠し立てしても無駄でしかありません。それよりも、我々がこの講和で成し得なければならないのは、現在のセルショナードから絞り取る事ではなく、ここで恩を売り、この先、如何様にも出来る柔軟な条約を結ぶ事です。特にあのリカルド殿下の――いえ、王のあの力には価値がありますからね。そしてそれはセルショナード側も十分に理解しています。ただ問題はその事を我が国の馬鹿な政務官達が理解していない事です。だか

らこそ、今回の講和に王自らがお見えになられたのですよ」

辛辣に政務官達を評するセインの柔和な笑顔が怖い。

「まあ、馬鹿共に黙って頂くにはあの王の力を直接感じて頂くのが一番でしょう。我が国の者達は金色の瞳に睨まれると弱いですから。やはり常日頃、その瞳で恐怖政治が行われているからですかねぇ」

「……」

セインの説明を補足したディアンの言葉は、更にその場に微妙な空気を生んだ。

「よ、要するに、はったりをきかす為に王が直接来られたんだな。だが、国の方は大丈夫なのか？　即位したばかりで、まだ混乱も激しいんじゃないか？」

気を取り直したガッシュがジャスティンへと問いかけた。

「多少の混乱は残しておりますが、すぐに落ち着くでしょう。セルショナードの新しい政務官達は……正確には新しいとは言えませんが、とにかくあの方達ならリカルド様がいらっしゃらなくても大丈夫です。彼らは……」

それからジャスティンは、知り得る限りのセルショナードで起きた全ての事を、その場の者達に語ったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ハナ様、アンジェリーナ様から贈り物が届いております」
「アンジェリーナ様から？」
ディアン経由で間違いがないと言うその贈り物を受け取った花は応接ソファへと座り、添えられたカードを読んで嬉しそうに顔を綻ばせた。
そして、ワクワクした様子で包みを開き――固まった。
「ハナ様？　大丈夫でございますか？」
「ハナ様、何が……？」
心配したセレナやエレーンの声に気付いた花は、慌てて包みを元に戻した。
「いいえ！！　何も！！　す、素敵な物を頂いて驚いてしまって…おほほほほ」
贈り物を胸に抱えて立ち上がった花の顔は赤い。
不思議そうにするセレナ達に微笑みかけながら、花は後じさるように歩を進め、そのまま寝室へと消えて行った。
その後、花がウロウロオロオロとブツの隠し場所に迷っていると、控えめに寝室の扉がノックされた。
「はひ！？」
「ハナ様、ジョシュとカイルが帰還の挨拶に伺いたいと……」

「は、はい！　是非、お会いしたいです！！」

うわずった声で返事をしてしまった花だったが、セレナの言葉にすぐに気を取り直すと、居間へと急いで戻ったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

夜の刻（二十二時）を少し回った頃、現れたルークは突然花を抱きしめた。

「ルーク！？」

驚く花を無視して、ルークは更に花を抱く腕に力を込めた。

ジャスティンから聞いた話が、ルークを堪らない気持ちにさせていたのだ。

だが、それを花に言う訳にはいかなかった。そもそも、何を言えばいいのかわからない。

ただ黙って抱きしめるルークに、花は腕を回してその背をそっと撫で続けた。

「もう少し遅くなるかと思っていました」

ルークの腕の力が弛んだのを感じた花は、何事もなかったようにルークを見上げて嬉しそうに微笑んだ。そんな花に、ルークは眩しそうに目を細める。

「――ああ、明日からは遅くなるかも知れないが……ジャスティン達にはもう会ったんだろう？」

「はい、ジャスティンには夕刻に少しだけ。すごくお忙しそうですのに申し訳なくて……でも、リリアーナさんにもお礼が言えましたし、お元気そうだったので安心しました。それで……」

「……それで？」

言葉を詰まらせた花にルークは顔を顰めながらも先を促した。

しかし、花が続けた言葉はルークの予想とは違って、リコ達の事ではなかった。

「その……カイルとジョシュもお昼過ぎには挨拶に来てくれたんですが、明日からコ―ディともう護衛に復帰してくれると……でももっと休んだ方が……それに怪我をしてしまった三人も……」

花が攫われた際に重症を負った護衛の三人は療養の為に王宮から離れていたのだが（王宮はルークの気が怪我人に障った為）、ずいぶん回復していると聞いて花は安堵していた。

だが、明日から兵舎に戻り完全に回復するまでリハビリを兼ねて王宮警備に就くと聞いて、またカイルやジョシュもセルショナードから戻ったばかりだというのに、リコ達の受け入れ準備にセイン達を手伝っていたコ―ディと共に護衛に復帰すると聞いて心配になったのだった。

「……ハナが心配するのも無理はないが、あいつらが希望している事だから、好きにさせてやればいい」

「はい……」

頷きながらも、自分のせいで怪我をさせてしまった三人に改めて申し訳ない気持ちで沈みそうになっていた花の頭をルークは優しく撫でながら微笑んだ。

「ハナがそうして心を痛めれば、あいつらはもっと傷付く。あいつらは自分達の任務を果たせなかったと酷く己を責めているらしいからな」

「そんな――！！」

驚いて上げた声はルークの手で優しく塞がれた為に途切れてしまった。

「あいつらがこんなに早く復帰できるのはハナのお陰だ」

「ふぇ？」

口を塞がれたままマヌケな返事をした花にルークはクスリと笑う。

「ハナが歌を……セルショナードから毎晩届けてくれたからな。だから、あいつらの傷もこんなに早く治ったんだ」

その言葉に花は目を見開いた。

歌で怪我を治せる事は知っていたが、まさかセルショナードから遠く離れたサイノスにまで届いた歌で治せるとは思ってもいなかったのだ。

ルークは花の唇をそっと親指でなぞりながら、口を塞いでいたその手を頬へとすべらせてジッと花の顔を見つめた。

自分の力を花はいったいどこまで知っているのだろうか。
花の歌を聴けば、皆の魔力は満たされ、傷も癒える。確かに『癒しの力』はあるのだ。
だが、その力に差が生じている。
傷を負った護衛達と同じ療養所で傷を癒していた他の者達と、護衛達との回復の差は明らかであったらしい。
王宮の者達にしても、皆の魔力が平等に満たされるわけではないのだ。
花と関わりある者、繋がりの深い者ほど、どうやら『癒しの力』の影響を強く受けている。
その事にいったいどれだけの者達が気付いているのだろうか。
そして、何よりあの事は――リカルドは間違いなく気付いている……。

「ルーク？」

心配そうな花の声に、深く考え込んでいたルークは我に返った。
いつの間にか険しくなっていた表情を慌てて緩めると、ニヤリと笑って花の耳元で甘く囁く。

「――もう休むだろう？」

「そそ、そうですね！　明日から忙しくなるなら、早くグッスリ眠った方がいいですよね！！」

顔を赤くした花は、そそくさと寝台へと寄り、勢いよく掛け布をめくった。
と、何かがバサッとルークの足下へ転がり落ちた。

「……」

「……」

それは、『＜図解付き＞愛の技巧と焦らしのテクニック　～これで男性はメロメロに～』と大きく銘打たれた本。

アンジェリーナから贈られたその本は今、女性達の間で大人気なのだそうだが。

「……メロメロにしてくれるのか？」

なんだか嬉しそうなルークの言葉に、花は深く深く撃沈したのだった。

93．真相は微笑みの中。

「――では、以上で賠償額につきましては合意に達しましたので、後ほど担当官達に詳細を詰めて頂きましょう。またセンガルの復旧につきましては、セルショナード軍の将校達を労働力として順次受け入れると致しまして……身の安全は一応保障させて頂きますが、その他については保障出来かねますが宜しいでしょうか？」

「もちろん、それは構いません。本来ならば貴国の方々に八つ裂きにされても文句は言えない立場なのですから。将軍たちもそれは承知しております」

セインとトールドを代表者として昼過ぎから始まった講和条約に関しての協議は、予想以上に早く進んでいた。

事前にジャスティンがある程度の条件を提示していた事もあり、また優秀な政務官達が集まっているというのも大きな要因だろう。

しかし、何よりも絶対君主制である両国の君主、皇帝と王が臨席しているのだから、当然と言えば当然かもしれない。

「彼の君は……」

「明後日にはご到着なさるはずです」

「かしこまりました。予定通りのようですね。では、最後に王にご協力頂く案件ですが――」

「私はサンドル王国とその隣国、マリサク王国に接する『果て』を抑えようと思うが……どうでしょうか？」

セインの言葉を遮るようなリコの提案内容にその場の者達がかすかにざわめく。

だが、リコの視線はルークへ真っ直ぐに向けられており、それを受け止めたルークは感情の窺えない無機質な声で答えた。

「……どこでも」

「――しかし、その両国はセルショナードからは海を隔ててなお、遠い地です。やはりセルショナード隣国のターダルト王国と北東の海周辺の方が王には……」

「我々はあなた方にもう十分に恩赦を受けている。よって、これ以上は無用です。ですから私の力を質とするならば、やはり一番『虚無』の勢いが激しいサンドルとマリサクへと当てるべきでしょう。さすれば、皇帝陛下のご負担はかなり減る。一瞬にして我が国土を灰になされる程には力の余裕が持てるはずです」

セインの戸惑いと心配を表した言葉に微笑みながら、それでもリコは断固とした態度で述べた。

本来ならば、この度の戦について全面的に非を認めたセルショナードは講和条約においてもっと不利な立場に立たされるはずであった。

しかし、セルショナードはヴィシュヌの名を冠す程の力を発現させたリコを切り札として、ずいぶんと軽い戦時賠償ですんだのである。

正確に言うならば、リコはそもそも己に発現した有り余る力を、ユシュタールの崩壊を防ぐ為に使うつもりであった。

だがそれを切り札として賠償の代価としたのは、セルショナードの未来を斟酌したジャスティンの配慮であり、マグノリア側を納得

させるためにも『果て』に力を注ぐことによって、強大な魔力を保持するようになったリコを封じると言う名目を持つ為でもあったのだ。

「ただ、私はこれ程の力を有してからまだ日が浅い。その為に陛下にはお教え頂きたい事が多分にあります」

「……では、粗方の条件は決まりましたので、この後は各担当官で詰めの協議に入りたいと思います。お手数ですが、各々それぞれ別室にお移り下さい」

微笑んだままのリコの言葉に含まれるものを察したセインは気を利かせ、その場の者達に退室を促した。その言葉に従い、政務官達は早々に出て行く。

「ジャスティン、申し訳ないがそなたには残ってもらいたい」

「……かしこまりました」

政務官達と立ち去りかけたジャスティンをリコは引きとめた。それが何を意味をするのか理解したセインは心配そうな視線をジャスティンに向けたが、何も言わずに協議の場として使われていた会議室の扉をそっと閉めて立ち去ったのだった。

静まり返った部屋にはルーク、レナード、ディアン、そしてジャスティンとリコ、ザック、トールドの七人が残るのみ。

「さて……では陛下、セルショナード王にはまず魔力の扱い方からお教えした方が宜しいのではないでしょうか？」

爽やかに微笑むディアンの提案にザックが笑いながら応える。

「ハッハッハ！！　相変わらず宰相殿は陰険ですねぇ」

「そういう貴殿は相変わらず鷹揚で羨ましい限りです」

「いやあ、それ程でもありませんよ」

笑みを絶やさない二人の応酬にもその場の空気は和むことはない。そこにリコが大きく溜息を吐いて口を挟んだ。

「宰相殿、皆様方も私の事はリカルドと呼んで欲しい。この二人のこともザック、トールドと」

「ありがとうございます。それではリカルド様、私の事もどうぞディアンとお呼び下さい。そちらのお二方も。ああ、それと陛下の後ろに何か見えるのは幻ですから無視して下さい」

「んな訳あるか！！」

思わずディアンの言葉に反応してしまったレナードは、ハッとして真顔に戻ると、「申し訳ない」と小さく謝罪した後に「レナードと呼んでくれ」と付け加えた。

「――それではお互いの自己紹介も終わったようですし、そろそろ本題に入りましょう。リカルド様、私をお引き留めになられた理由を伺ってもよろしいでしょうか？」

柔和な笑みを浮かべるジャスティンだったが、その眼差しはとても厳しい。

「ああ、すまない。ジャスティンに確認したくてな。父上を狂わせた……クラウスの正体を」

リコの問いはその場に一瞬の静寂をもたらした。

が、すぐにジャスティンは申し訳なさそうに微笑んだ。

「……申し訳ありませんが私には分かりかねます」

「そうか？　そなたならよく知っていたと思ったんだがな……」

リコはあっさりと引き下がり、今まで黙っていたトールドが発言の許可を得る為に小さく礼をした。

「僭越ながら失礼致します。……リコ様は、前王達の変調からこの数カ月、クラウスについてお調べになっておられました。そもそもクラウスは一年ほど前にサンドル王国主神殿の推薦状を持ってセルショナード王城に現れたのです。サンドル王国主神殿からの推薦状とあっては、我が国の者達が信じない訳がありません。更に、その身に宿した魔力の強さと従えた魔術師達を鑑みれば疑う余地もなく、あっという間に筆頭魔術師へと上り詰めました。――残念ながら、前王のご存命中にその正体を突き止める事は出来ませんでしたが、我々がセルショナードを発つ前日に大変興味深い報告がサンドル王国より届いたのです」

「それはそれは……いったいどのような？」

「ディアン殿、あなたはよくご存じのはずです」

ディアンの黒い微笑みにもトールドは無表情のまま応えるのだが、

そこへザックが痺れを切らしたように割り込んだ。

「あーもう、回りくどい事はいいじゃないっすか。はっきりしましょうよ。私達は七十五年前に起きた事の真相が知りたいんですけど」

ザックの軽い口調とは対照的に、その場の空気は重く沈んでいく。なんとか無表情を装っているレナードだったが、内心は舌打ちしたい気持ちでいっぱいだった。しかし、目の前のルークは何も変わった様子を見せず静かに座している。

「――あなた方がどういった理由で七十五年前の事を疑問に思われたのかは存じませんが、この先の両国にとって必要な事だとは思えません。どうぞこの時間を有意義にお使いになられるようお願い申し上げます」

「本当に必要ないと思うのか？」

更に笑みを深めたディアンの言葉にリコは問い返した。だが、その答えを待たずにリコはルークへと向き直る。

「陛下、あなたは七十五年前……臣にも民にも慕われていた皇太子殿下をその手にかけ、皇太子の座に就かれた。そして簒奪者とまで罵られながら何も語られる事はなく、甘んじてその非難を受けられた。だがあれは……いえ、とにかく私はあなたが当時、皇太子であった兄君を――フランツィスクス殿下を本当に殺められたとは思えないのです」

「――どういう意味だ？」

今まで沈黙を守っていたルークの静かな問いは重く、その場を支

配する。
リコは一度目を閉じて深く長く息を吐き出すと、決意したように真っ直ぐにルークへと強い眼差しを向けた。
「言葉通りの意味です。それともはっきり申し上げた方がよろしいでしょうか？　クラウスは――フランツィスクス殿下だと」
圧し潰されそうな程の気が部屋を満たす。
その中、ルークはまるで微笑んでいる様に目を細めてリコを見つめ返した。
「……リカルドと二人だけで話がしたい」
ルークの言葉に異を唱える者はなく、皆が黙って立ち上がり部屋から出て行く。
そしてルークとリコの二人だけを残して、最後に部屋を出たレナードは扉を閉めるとそのまま結界の施された堅固な扉を見つめた。
そこへディアンが微笑みながら声をかける。
「心配しなくても陛下はまだ大丈夫です。少なくともハナ様がおられる限りは……」
「ああ……だが、ルークが苦しむ事には変わりないだろう？」
レナードの方こそよほど苦しいのではないかと思える程にその声は頼りない。
そんな弟の背をまるで慰める様に軽く叩いたディアンは、珍しくそれ以上は何も言わずに他の三人が控える隣室へと入って行ったのだった。

94．応答せよ。

「リカルド……そなたは何をどこまで知っている？」

二人きりになった会議室は急にその広さを増した様に思われるほどに、ルークの冷たい声が静寂の中によく響いた。

「フランツィスクス殿下がサンドル王国で匿われ、生き延びられてからセルショナードに現れるまでに何を為されていたのかを述べられる程には」

「……姉上は、そなたに何を語られたのだ？」

「――さあ、それは……母上の言葉はまるで詩のように曖昧で、まともな意味を成さないものが多かったので。ですが、殿下の生存は一つの鍵となりました」

母の予言についてルークが触れた事に僅かに動揺しつつも、リコは正直に答えた。

「どのような？」

「それを申し上げる前に一つ確認したいのですが……陛下はハナが一体何者なのかご存じなのですか？」

「……いや」

ルークの返事を聞いたリコは驚いて目を見開いた。

「何者かもわからないのに傍においたのですか？」

「それが問題なのか？……では、そなたは知っているのか？だからセルショナードでハナを助けたのか？」

「――いいえ、それは私にもわかりません。最初はただ母の言葉に半信半疑ながら従ったにすぎないのです。母は『闇夜で迷うマグノリアの小鳥を助けて』とだけ。それがハナの事なのかどうかも確証のないままに。ですが――いえ、とにかく確かにハナが何者かは問題ではない。問題はハナの力です」

「……」

核心に迫ろうとするリコの言葉にルークは黙り込んだ。しかし、リコは焦燥も露わにルークへと詰め寄る。

「陛下、あなたにはわかるはずです。私の中に未だ残るハナの力が。私に施されていた父上の呪を解いたのは、この力です。これは『癒しの力』などという生易しいものではない。恐らく、たった一滴にもならない程の僅かなハナの血……それが私の中で力となり父上の――父上程の力を持つ者の呪を解いてしまった。そればかりか、枯渇しかけていた私の魔力を解放された『器』いっぱいに満たしてしまったのです。その力はハナの歌声どころではない」

真っ直ぐに見つめるリコの眼差しの強さに、ルークは思わず目を逸らしてしまった。

ルークも以前から薄々は気付いていたのだ。

だが確信したのは、あの――セルショナードから戻った花に口づ

けた時、その口腔内にあった傷を舐めた時だ。かすかに滲んでいた花の血は力となり、無理をした為に魔力の消費が激しかったルークを一瞬で癒してしまった。

それは花の精神（こころ）の中で感じた光にも似てとても心地よく、そしてあまりに強いものだったのだ。

その事実にルークは慄然とした。

しかし、不安そうに見上げる花に気付いて、慌てて全ての感情を抑えて取り繕いはしたのだが……。

「ご心配なさらなくても、私はハナに口づけ以上の事はしておりませんよ」

「……わかっている」

苦笑するリコの声に我に返ったルークは、顔を顰めて答えた。

「その口づけさえも、指輪を作り出すまでです」

その言葉にルークは訝しげな視線をリコへと向けた。

「あの時――父上の呪に苦しんでいた時、ハナは私に……噛みついたんです」

「……は？」

「ハナは私の胸元に――」

「いや……ちょっと待ってくれ……」

思わずルークはリコの言葉を遮ってしまった。

今聞いた言葉が信じられない。というか出来れば信じたくない。

「――苦しみのあまり掻きむしって出来た傷からどうも……ハナの唇に滲んでいた血が私の体内に入った様ですね」

「……何をやってるんだ、ハナは……」

「……」

「……」

花を理解するのはやはり無理だと悟ったルークの諦めを含んだ呟きを最後に、その場には微妙な沈黙が落ちた。

が、気を取り直したらしいリコは、再びその眼差しに強い意志を宿してルークを見据えた。

「とにかく……ここ最近の王宮での騒動は私も聞き及んでおります。いよいよ、あの――サンドルの王太子が動き出したと」

ルークもまたいつもの様に感情の窺えない無表情な顔に戻っていた。

「私が言える立場ではありませんが、間違ってもハナが奪われる様な事があってはなりません。もしあの力の事が洩れる様な事があっては……」

リコの言葉によって引き起こされた醜く渦巻くさまざまな感情を、ルークは固く目を閉じて抑え付けた。

そして再び開いたその瞳は凍りそうなほどに冷たいものだった。

「サンドルの血か……」

「全ての始まりも、そして終わりも」

吐き捨てる様に呟いたルークの言葉に、リコは母の最期の言葉を以って応えた。

そうして二人の話し合いは、途中からディアン達を交えて深夜にまで及んだのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ハナ、先に休んでいろと言ったはずだが」

夜もかなり深まった頃、まだ起きて書物机に向かっている花を見てルークは眉を寄せた。

だが、ルークの言葉を気にした様子もなく、花は振り向いて微笑んだ。

「もうそんなに遅い時間ですか？……絵の練習に夢中になっていたので気付きませんでした」

花の手元には何かの図鑑らしき物と描きかけの……何かがあった。

「……そうか」

それを覗いたルークは毒気を抜かれたような声で小さく頷くと、

立ち上がった花を抱き寄せた。
しかし、ルークはそれきり何も言わず、右手を花の頬に添えてジッと見下ろすだけ。

「ルーク？」

不思議に思って呼びかけた花の頬を、ルークはいきなりつまんだ。

「ふょっ！？」

驚く花を無視して、ルークはそのまま黙り込んでしまう。

「……リゅーク、いたいでひゅ」

暫く我慢していた花だったが、さすがにジワリと痛みだしたので抗議の声を上げた。
すると、ルークはハッとして慌ててその手を離した。

「ああ、すまない……」

謝罪の言葉を口にしたルークは、赤くなった花の頬を優しく撫でながら治癒魔法を施すのだが、何故か花を見つめたまま再び黙り込んでしまった。

「……ルーク、大丈夫？」

常ならぬ態度のルークに、花は心配になって問いかけた。

「ハナ……」

「はい」

交渉が上手くいかなかったのだろうか？　何かよくない事が起こったのだろうか？　と、花は覚悟を決めてルークに返事をしたのだが。

「何をやってるんだ、お前は……」

「え？……あれ？　私ですか？」

呆れた様に呟くルークの問いが突然すぎて、その意図がわからない。

「ええ……」

訳がわからないまま、それでも一生懸命に答えを考えていた花をルークは抱き上げた。

「ルーク！？」

「もう休むぞ」

「ええ！？　私の答えは――」

結局、花の答えはルークの唇に塞がれ、何が何だかわからないまま花は朝を迎える事になったのだった。

95．理想と現実。

「ハナ様、陛下が『大使の間』にお出でになられるようにと……」

「……え？　今からですか？」

「はい」

今まで執務中に（それ以外にもだが）呼び出されたことのなかった花はセレナの言葉にかなり驚いた。

しかし、待たせてはいけないと急いで身支度を整え、呼び出された『大使の間』という皇帝が個人的な謁見を行う部屋へと向かう。

その一行はカイルと新しく増えた護衛の二人、そして迎えに来たルークの近衛二人にセレナという大所帯であった。

――――なんか、色々すみません。

大名行列とまではいかないが、その仰々しさに申し訳なく、少し恥ずかしく思いながらもなんとか平静を装って歩く。

そして、すぐに通された大使の間では、ルークとその後ろに控えるレナード、側近くにはディアンとセインが立っていた。

――――おおう！！　お仕事中？　のルークを初めて見た――！！

これが噂のギャップ萌え！！　いや、なんか違う。とにかく、かっこいいです！！　いつも以上に偉そうで……いえ、威厳があると言うべきか……。

と、心の中で悶えながらも、花は完璧な所作でルークに挨拶をす

ると、皆にも会釈をして挨拶をした。

「ハナ様、お呼び立て致しまして申し訳ございません。ハナ様にどうしてもお会いしたいと言う迷惑な御方達がいらっしゃいまして、陛下は仕方なく――」

「どうでもいいから、さっさと呼べ」

楽しそうなディアンの言葉を遮って、ルークがセインへと促した。

セインは苦笑しながら控えの間に続くらしい扉を開くと、そちらにいる人物に声を掛ける。

「皆様方、どうぞお入り下さい」

そうして部屋に入って来たのはリコ、ザック、トールドと花の予想通りの人物だったのだが……。

「義姉上！！」

「ニコス！？」

軽い足音を立ててリコの後ろから駆け寄って来るのは、セルショナードの第三王子――今は王弟であるニコスだった。

「こんにちは！　義姉上」

「……こんにちは、ニコス」

驚いた花はそれでも膝をついて、嬉しそうなニコスに視線を合わせると挨拶を返した。

「ニコスも来ていたんですね？　全く知りませんでした」

「僕、マグノリアに遊学するんです。王宮に滞在させてもらうので、これからよろしくお願いします」

「……そうですか。では、こちらこそよろしくお願いします」

頭を下げるニコスを見て、なんとか微笑みながら花は応えた。

新王であるリコには子がいないので、セルショナードの第一王位継承権はニコスに在る。

その為、ニコスは人質となるのだろう。

だがニコスも自分の立場を理解しているようで、頭を上げると、まるで花を気遣う様に微笑み返した。

「僕、義姉上にまたお会いしたかったから、この国に来る事を望んだんです」

心配をかけないように笑うニコスの王族としての覚悟と意志の強さを見て、花は再び微笑んだ。

「ニコス……私の事は花と呼んで下さいね」

「あ！　そうでした！！　そうですよね！！　では……ハナと」

「ええ」

なぜか妙に力を入れて納得するニコスを不思議に思いながらも花は立ち上がると、リコ達へと向き直った。

「セルショナードでは大変お世話になりましたのに、ご挨拶が遅く

なり申し訳ありませんでした」

「いや、こちらの方こそお礼を申し上げるべき立場だ。挨拶が遅くなってすまない」

頭を下げる花に苦笑してリコは挨拶を述べると、ルークの指輪が在る花の右手を取ってその甲に口づけた。

途端――ピシリと大使の間が大きく軋む。

挨拶だとわかっていても、その所作が恥ずかしくて頬を染めた花だったが、その音に驚いて辺りを見回した。

しかし、リコは気にした様子もなくクスリと笑って花の手を離し、続いてザックが相変わらず呑気な調子で挨拶をした。

「ハナ様、お久しぶりです。十日ぶりですかね？　いや～ハナ様にご挨拶したいって申し上げても、なかなか通してくれなくて～。ちょっと遅くなってしまいましたよ」

「……お久しぶりです。ザックは全くお変わりないようで安心しました」

ニッコリ笑う花に、なぜかザックは胸を張る。

「私、これでも近衛と兼任して宰相補佐官になったんですよ！！」

「え……それは……セルショナードもずいぶん思い切った人事（じんじ）を……」

「ちょっ、ハナ様？　どういう意味ですか？」

「あ！　すみません！　つい本音が！！」

「ハナ様、それはダメ押しにしかなってないですよ」

慌てた花の謝罪を聞いて、ザックは口を尖らせてぼやいた。

そんな二人のやり取りを見て笑いながらリコが説明する。

「陛下の御前に出るにはそれなりの地位が必要なんだが、前回使者として訪問した折の官職が……免職になって以来、誰も引き取り手がなくてな……。結局、メルクが引き取ったんだ。まあ、トールドが同じ宰相補佐官として、任務はしっかりこなしてくれるからそれは安心なんだが」

「……なるほど」

部下の不始末は上官の責任。

何かと問題児であるらしいザックは親の責任と言う事で、父親であるメルクが引き取ったのだろう。

そういえば、メルクは魔力が強い割に老け込んでたなぁ……などと、花はメルクを思い出しながら、トールドと簡単な挨拶を交わした。

「ちょっと、王まで何いってるんですか！？」とのザックの抗議はみな無視している。

そこへ、今まで黙って成り行きを見ていたマグノリア側――ディアンが口を開いた。

「一通りの挨拶も無事に終わった様ですし、もう思い残すこともございませんね？　では、協議を再開致しましょう」

その言葉に従って花は退出しようとしたのだが、そこへニコスが慌てて声を上げた。

「ハナ!!　待って下さい!!」

「――ニコス？　どうしたんですか？」

踵を返しかけた花はニコスへと視線を合わせる為に再び膝をついた。

その花の両手をニコスはギュッと握りしめる。

「僕、ハナにお願いがあるんです」

「はい、なんですか？」

「僕と結婚して下さい！」

再び大使の間が軋む。

そして、その場の空気が固まった。

が、ザックは「王！　先を越されちゃいましたね!!」などと陽気に笑っている。

「……はい？？？」

ずいぶん遅い花の反応にも、周囲の反応にも気付いていないのか、ニコスは無邪気に笑う。

「僕、先日八歳になったんです。だからあと十年経ったら成人するので、僕の正妃になって下さい」

――――　あ、なんだ、十年後か……って、安心してる場合じゃなくて。えっと……これは、いわゆる幼稚園の先生に憧れるような感じのものなのかな？

そんな事を考えながらも花は上手い言葉が見つからず、曖昧にしか応えられない。

「あの……でも私、ニコスよりかなり年上ですし……」

「おや、陛下は理由にならないようですね」

ディアンが楽しそうに呟く。

「たったの十三歳じゃないですか。ハナは陛下と百二十歳以上も離れているんですよ？　十三歳なんて問題じゃないです」

「え？……ああ！！　本当ですね！！……そうか、そんなに……」

「……」

皆が今更な事実に驚いているらしい花を見て驚く。

「……人質は殺してもよい決まりだったな？」

「いやいや、ないない！！　曲解しすぎだ！！」

今まで黙っていたルークが発した言葉はとても物騒なもので、レナードは慌てるのだが……。

「では、交渉決裂ということで、再び開戦しますか？」

「何言ってんだ!!　ディアン、お前も止めろ!!」

煽るディアンに止めるレナードの苦労も空しく、花とニコスには届かないのか二人の危険な？　会話は続く。

「……ダメですか？」

「ダ、ダメって言うか……私は一応陛下の側室ですから……」

「……」

動揺する花の言葉はその場に微妙な沈黙を落とすのだが、やはりザックだけは「あ、一応なんだ」などと呑気に笑っている。

「だけどハナは前に言っていたじゃないですか。兄上のお顔が一番の理想だって」

「ニコス……」

困ったような声はリコのもの。

「僕は兄上によく似ているって言われるから、剣の稽古も魔法もここでいっぱい勉強して強くなって、大きくなったらハナの理想の男になります!!」

「そそそ、それは、その!……や、やっぱり理想と現実は違うっていうか……」

ニコスの暴露話に狼狽してしまった花は自分が何を口走っている

のか分かっていない。

「現実とは常に残念なものですよね、陛下」

「……」

「王、よかったですね!!　理想だそうですよ!!　問題は中身ですかね?」

「……」

どうにも収拾のつきそうにないこの場を治めたのは、心なしか引きつった笑みを浮かべたセインだった。

「――さっ、それではニコラウス殿下はご到着なされたばかりでお疲れでしょう。お部屋にご案内致しますのでどうぞこちらへ」

「あ、じゃあ僕ハナと一緒に――」

「ハナ様はこの後にご予定がございましたね?」

無邪気なニコスの言葉を遮ったセインは、まるでディアンのような笑顔を花に向けた。

「えっ……と、ありましたです。はい」

ぎこちない返事をした花は、素直にセインに従うニコスを見てホッと胸を撫で下ろした。

そうして、花も立ち去った後の大使の間には、どうにもならない程の微妙な空気が残ったのだった。

96．三人寄れば文殊の知恵。

冬のこの時期は夕の刻を回るとあっという間に陽が傾き、薄い闇が空を覆い始める。

薄暮の街を、王宮にある自室から眺めていたジャスティンは現れた気配に気付き、いつもの柔和な笑顔を浮かべて振り向いた。

「忙しい所、呼び出して申し訳なかったね」

「いえ、こちらこそ遅くなりまして申し訳ありません」

微笑んで応えたディアンは窓辺まで歩み寄ると、ジャスティンの隣へと並んだ。

そして暫く黙ったまま、二人で目の前に広がる美しい景色を眺めた。ゆらめく斜陽が、まるで炎に包まれているかのように街を緋色に染め上げている。

「――ジャスティンはクラウスを……やはりクラウスはフランツィスクス殿下だとお思いですか？」

やがて口を開いたディアンの顔にはいつもの笑みは浮んでいない。

「……少なくともあれは、私の存じ上げる殿下ではありません」

「……そうですか」

たったそれだけの短い問答を交わすと、二人は再び窓の外へと視線を戻した。

そんな静かに流れる時間の中、これ以上の沈黙が耐えられないとでも言うかの如く、ジャスティンの執務机の上に大事に置かれている魔剣がカタカタと音を立てた。

「ああ、すまなかったね。リリアーナ、出ておいで」

その言葉を聞いて光輝きパッと現れたリリアーナは、いつものようにジャスティンに絡みついて唇を尖らせた。

「んっもう、うち待ちくたびれてしもうたわぁ」

「悪かったね、リリアーナ。まだレナードは来ていないけれど、いいかい？」

そしていつものようにテキパキとリリアーナのなめらかな手足を自身から剥がしながら、ジャスティンは問いかけた。

「あん♪　もうっ……まあ、メレフィスはあとでもええしぃ。ディアン、久しぶりやなぁ？　相変わらずうち好みの真っ黒な気やわぁ」

「お久しぶりです、リリアーナ嬢。あなたも変わらずお美しいですね」

「そんなん当然やわぁ。でもディアンの気をもらえたらもっと綺麗になれるのになぁ……」

艶っぽい流し目を送るリリアーナにディアンは爽やかに微笑んで返す。

「残念ながら私はこの後も予定が詰まっておりますので、代わりに

この中身を差し上げましょう」

ディアンがそう言って差し出したのは、プルプル震える一本の黒いペン。

それを見たリリアーナはフンっと鼻を鳴らした。

「アホがうつるから、それはいらんわ」

「おや、それは残念ですね。これに用があると伺ったものですから、てっきりやっと引き取って下さるのかと思いましたのに」

「ごめんなぁ。それとこれとは別やわ」

申し訳なさそうにディアンに謝罪しながらも、リリアーナはその黒ペンを受け取った。

「と言う訳で、あんたに用があるんや。はよ出てきぃや」

しかし、リリアーナの呼び掛けに応える様子もなく、黒ペンは沈黙する。

「ふうん？　いつの間にこんな生意気になったんやろ。まあ、ええわ……十、九、八、――」

なぜかカウントダウンを始めたリリアーナの声に呼応して、アポルオンが慌てた様子で輝き現れた。

「ひ、久しぶりだな！　リリアっぐガぁあああああ！！」

引き攣った笑みで挨拶をしようとしたアポルオンの声は途中で悲

鳴に変わる。

「ほんまに久しぶりやなぁ？　あんたのアホな顔を踏むんも。いつからあんたみたいなアホな坊やがうちを待たせるくらいに偉くなったん？」

リリアーナは自身の履いた艶やかに黒光りする皮のブーツ、そのピンヒールでアポルオンの顔を踏みつけながらなまめかしい笑みを浮かべた。

「ズズズビバ、ズビバゼ……」

「はあぁ？　聞こえんわぁ」

アポルオンの謝罪らしき言葉も聞こえない？　ようでリリアーナは踏みつけている足に更に力を入れる。

「ズ、ズビバゼン、デジ、ダ！！」

「リリアーナ、それくらいにしてあげなさい」

困ったように眉を寄せて声をかけたジャスティンに、リリアーナは顔を輝かせて振り向くと、アポルオンからようやく足を離してそのまま抱きついた。

「いやん♪　ジャスティン様ったら、ほんま優しいんやからぁ」

「はいはい、ありがとうございます。で、リリアーナはアポルオンに用事があったんでしょう？」

また絡みついたリリアーナの手足をジャスティンは微笑みながらほどく。

「あんっ♪……まあ、そうなんやけどぉ。アホにって言うかぁ……」

珍しくリリアーナは言葉を濁すと、一部始終を楽しそうに見ていたディアンへとチラリと視線を向け、踏まれた箇所を押さえながらのそりと起き上がるアポルオンを見て、またディアンへと視線を戻した。

「なんでしょうか？」

リリアーナの視線に気付いたディアンがいつもの暗黒笑顔を浮かべて優しく問いかける。

「んーっと……なあ、ディアンはアホと契約してあげへんの？」

「ありえません」

「リリー……」

リリアーナの言葉に即答するディアンと、感極まった様にリリアーナを見つめるアポルオン。

「リリアーナ、いったいどうしたのですか？」

ジャスティンは今までにないリリアーナの発言に驚いたようだ。

「うん……うちが口出す事やないってのは当然わかってるんやけどぉ……でも、アホの顔色悪いやろ？」

「……」

リリアーナの言葉を聞いたジャスティンとディアンはアポルオンを振り向き見たが、その浅黒い肌の顔色はよくわからない。

が、いつもより若干、魔力が弱いような……気はする。

アポルオンはリリアーナが自分を心配してくれている事に驚き、ポカンと口を開いてアホ面を晒していた。

「契約もせんと、このままここにいてもアホはどんどん弱って、そのうち消滅してしまうで？」

「おや、それは興味深い話ですね。理由を伺っても宜しいですか？」

「ディアン様……」

ディアンの声は本当にただの好奇心から知りたいといった調子なのだが、アポルオンは感動のあまり目に涙を溢れさせた。

「あの剣が……あのセルショナードの王が持つ剣が本来の力を取り戻したからなぁ。うちら魔族にはきついわ。力のない魔物やったらあっという間に消滅してしまうくらいや。うちやメレフィスはちゃんと契約に従ってここにおるから平気やけど、アホはなぁ……」

人間との契約を持たない魔族が森から出る事は本来許されない。

それはヴィシュヌがユシュタルより授けられた剣――封魔の剣を手に人間を脅かす魔族を討ち破った時より定められた掟。

しかし、長い年月を経て、剣はその効力を失いかけていた。

それが、リコが手にした事によって再びその力を取り戻したのだ。

封魔の剣は掟を破る者達を――押しかけ魔族のアポルオンを戒める。

魔族に伝わる話をリリアーナから聞いたディアンは、慈愛に満ちた笑みを浮かべてアポルオンに向き直った。

「ディアン様……あの……」

「なるほど……やはりあなたはアホで間違いないと言う事ですね」

期待した言葉とは少し違うが、それでもついに契約を決意してくれたのだろうかと、ディアンへとアポルオンは駆け寄ろうとした。

が、その目の前に突如レナードが現れた。

「すまない！　遅くなってしまった！！」

「ぎゃ！！　突然現れんじゃねえ！！　少しは空気読めよ！！　このバカレナード！！」

「な！？　お前に空気読めとか言われたくないわ！！　このアホ魔族が！！」

そして始まったいつもの低次元な争い。

「うるせえ！！　お前なんかリリーに喰われちまえ！！」

「バッ――！！」

「ちょっとぉ、うちを巻き込まんといてや。それにレナードのは、うちには毒にしかならんから無理やわぁ」

「え……」

「ブハッ！！　振られてやんの！！」

「ア、アホか！！」

「――レナード、アポルオン、もうそれくらいにして下さい」

いつまでも終わりそうにない醜い諍いに呆れたジャスティンが、大きく溜息を吐いて止めに入り、やっとその場が治まった所で、ディアンが嬉しそうにレナードに話しかけた。

「レナード、アポルオンは遂に自然に還るらしいですよ？　メレフィスに最期のお別れをさせてあげましょう」

「いいえ！！　ディアン様、俺は森へなんて帰りませんからね！！」

「いや……そういう意味なのか？　それ……」

状況は今ひとつ理解できなかったが、それでも二人の言葉が食い違っている事だけは理解できたレナードだった。

＊＊＊＊＊

その後、魔族達をジャスティンの執務室に残して、レナード、ディアン、そしてジャスティンはその隣室で彼らを待っていた。

契約を交わした魔宝に宿る魔族は契約主からあまり離れては、その姿を現す事が出来ないらしい。

そんな魔族達が主に無理をさせてまで話し合わなければいけない

事は何なのか、気にならない訳ではなかったが、追求する事はしなかった。
レナードもジャスティンも己に仕えてくれる魔族を信用している。
例えそれが、創世の時代には人間と対立していた存在だったとしても。

「――ああ、確かにここの所は『森』近くの魔物の出現がないらしい。先程、その報告が届いたんだが……そうか、ヴィシュヌの剣か……」

セルショナードの宝剣の事を聞いたレナードは納得したように呟いて黙り込んだ。
確かに、リコの佩いていた剣からはとても強い力を感じたが、それがアポルオン程の力を持った魔族にまで影響を及ぼすとは思ってもいなかった。
この先、アポルオンをどうするつもりなのか気にはなるが、ディアンの考えている事がさっぱり読めないレナードは結局考える事を止めた。ディアンはいつも大きく間違えた手段を取るが、結果を間違えた事は今まで一度もないのだから。
やがて、ノックもなしに部屋の扉が大きく開くと、リリアーナが飛び込んで来た。

「お待たせやわぁ、ジャスティン様。わがまま言うてごめんなぁ？」

「いいえ、構いませんよ」

またまた絡みついたリリアーナの手足を優しくほどきながらジャスティンは柔和に微笑んで応えた。

「ディアン様！！　俺は絶対、死んでもディアン様から離れません

からね！！」

リリアーナの後に入って来たアポルオンの迷惑な宣言に、ディアンは爽やかに微笑んだ。

「そうですか？　では、まず死んでみましょう」

「ちょちょちょっ！！　ちょっと待って下さい！！」

その右手に氷塊のようなものを浮かび上がらせたディアンを見て、今度は傍から見ても分かる程にアポルオンはその顔色を悪くして後じさった。

「ディアン！！　ここでそれを発動させるな！！」

「……」

慌てるレナードに無言のメレフィス、それを呆れた様子で見るジャスティンとリリアーナと、あっという間に部屋は騒がしくなる。

が――

ハッと魔族たちが何かに気付いて、急にその姿を消した。

と同時にレナード、ディアン、ジャスティンは、王宮の異変を感じ取った。

そこに王宮を揺るがす程に大きな音が鳴り響く。

しかし、三人はまるで金縛りにあったかの様に身動きが出来ず、その場に留まるしかなかったのであった。

97．謝罪は誠意を込めて。

ニコスやリコ達と対面した二日後、花はニコスに王宮案内をしていた。

以前は毎日の日課だった散歩も、セルショナードより戻ってからは取りやめていたので、ルーク達との遠足以来、久しぶりにのんびりと王宮内を歩く。

とは言っても、護衛の四人とセレナ、そしてニコスの侍従に護衛の二人という大所帯だとあまり寛げはしないのだが、花はなるべく気にしないようにしていた。

「やっぱり、セルショナードの王城と違って広いですね」

「そうですね。でも、造りはあまり変わらないのでしょう？」

「はい、だから迷わずにすみそうです」

安心したように言うニコスに、花は微笑んだ。

「でも話に聞いていた通り、この王宮には魔力がとても満ちているから、転移も楽にできそうです」

「そうなんですか？」

「はい、歴代皇帝の力もとても強く感じますし、それに何より陛下の力がすごいです」

興奮した様子のニコスは自分を落ちつけようと、ふうっと息を吐

いた。

「やっぱり陛下はすごいです……兄上もここにきてより一層お力を増したようですし……僕は敵いそうにないです」

悲しそうに呟くニコスを見ていられなくて、花は立ち止まると膝をついてニコスの手を握り締め慰めの言葉をかけた。

「そんな事ないと思います！　ニコスはまだまだこれから成長するんですから！！」

「そうですか！？　じゃあ、僕、ハナを諦めなくていいんですね！！」

「……え？」

ギュッと花の手を握り返して嬉しそうに笑うニコスに、何か間違えてしまったような気がした花だった。

そうして、お昼過ぎに訪ねてきたニコスとお茶を楽しんだ後の王宮案内は、あっという間に夕の刻を回り陽も落ちてきたので、最後に『月光の塔』を見てから今日は終わりにしようと、塔へと向かっていた。

「ハナ、今日は満月ですね」

「ああ！　そうですね！！……では、今日は雲も少ないので、もうすぐ綺麗なお月さまが顔を見せてくれますね」

ニコスの少し期待のこもった言葉に花は微笑んだ。

――― そうだった、今日は満月か……ということは、私がこの世界に届けられてちょうど……百日になるのかな？

などと考えながら、長い渡り廊下を終えて塔へと足を踏み入れた。

その時――

王宮を揺るがすように大きな音が鳴り響いた。

それはまるでノートルダム大聖堂の鐘の音のように高く、低く、強く、優しく、鳴り響く。

その音を耳にした瞬間、花は考えるより先に走りだしていた。

「――ハナ！！」

切迫したニコスの声が後ろに聞こえる。セレナや護衛達の声も。

それでも花は皆が追ってこない事に気付きもせず、祈りの間へと繋がる階段を駆け上った。実際の大聖堂の鐘の音と違い、すぐに鳴り止んでしまった音に花の焦燥は募り、更に足を速める。

はやく！　はやく！！　はやく！！！

もつれそうになる足を叱咤して息を切らしながら、ようやく辿り着いた祈りの間。

その扉に手を掛けようとして、突如それは阻まれた。

「ハナ！！」

珍しく焦った様子のルークが後ろから花を抱き寄せたのだ。

「ルーク！？…離して！！」

「ダメだ！！」

花はルークの腕から逃れようと必死で抗った。

「ハナ！　ここに何者かが侵入したんだ！！」

「違う違う！！　ルーク、違うの！！」

その瞳に涙を浮かべ、切望の滲んだ声で花はルークに向き直って訴える。

ルークは花を抱きしめて、宥めるようにその背を何度も優しく叩いた。

「とにかく落ち着いてくれ、ハナ……」

徐々に落ち着いた様子を見せ始めた花の顔を覗き込んで、ルークもまた落ち着いてゆっくりと説得する。

「何者かの気配はもう感じられはしないが、危険がないとは言い切れない。だからハナを入れる事はまだ出来ない」

だが、花は黙って涙を流しながら首を何度も振る。

気持ちが昂りすぎて言葉にならない。

そこへ、リコが現れ、続いてジャスティン、レナード、ディアン、ザックと現れたのだが、皆一様に青ざめていた。

「レナード、悪いが室内（なか）を確認してくれ」

ルークは花を抱きしめる腕に力を込めてレナードに命じると、扉から数歩下がった。

花は焦れる気持ちを抑え、黙ってそれに従う。
大きく頷いたレナードは、警戒しながら扉に手を掛けた。
皆が危急に備えて構え、そして扉は開かれた。

「――なっ!?」

そのまま室内へ足を踏み入れたレナードの驚きの声が聞こえる。

「何だこりゃ?」

ザックの気の抜けた声も。
花はルークの腕の中からそっと室内を窺い、そして震える手で口を押さえた。
皆が不思議そうに、祈りの間の中央に突如現れた物体の周りに身構えながらも徐々に集まっていく。

「……ピアノです」

未だ室内へとは近づこうとしないルークに抱きしめられたまま、花は震える指の隙間からなんとかか細い声を出した。

「……ピアノ?」

ルークは花に優しく尋ねた。

「ええ、ピアノです」

答える花の声は涙に濡れている。

危険はないと判断したらしいルークは、やっとその腕から花を解放したが、そのまま震える花の手を強く握り、警戒しながらも祈りの間へと導いた。

夢にまで見たピアノが目の前にある。

その黒く艶めいて光輝くグランドピアノを花は信じられない思いで見つめた。

「これがピアノってやつなのか？」

以前の花の言葉を思い出したらしいレナードが、少し呆けた様子で花に問いかけた。他の皆は訳が分からないといったように眉を寄せている。

花はピアノから目を離さずに何度も小さく頷いた。

「――イテッ！！」

ピアノに触れようとしたザックが、その手をすぐに引いて呑気に笑う。

「あー、なんかすっげえ強力な防御魔法が施してますね～」

「え？――」

「ハナ！！」

驚く花をルークは再び強く抱き寄せた。

その場の者達も皆、一気に緊張したように構える。何もわからないままに皆の視線を追った花が目にしたのは、ヒラヒラと舞い下りて来る一枚の紙。

ゆっくりと揺れ落ちるその紙をジャスティンがさっと取り、目を

通して一瞬眉を寄せた。
そして、黙ったままルークへと差し出す。
受け取ったルークもまた、目を通して眉を寄せる。
ルークの腕の中からチラリとそれを覗き見た花は礼儀も忘れ、慌ててその紙を引っ手繰った。

「ハナ？」

常ならぬ花の態度に驚くルークにも気付かない程に、花はそこに書かれた内容に呆然としてしまった。
それは、日本語で書かれた神様からの手紙。

『花ちゃんへ？
ごめんね、うっかりピアノを届けるのを忘れていました。テヘ☆
神様より』

「う、うっかりって……」

やがて、ポツリと呟いた花は手紙をギュッと握りしめてわなわなと震えだした。
もはや涙も乾いている。

「ハナ、大丈夫か？」

心配そうなルークの声に答える事もできない。
皆も訳が分からないまま怪訝そうに見つめる中、花の身体は力を失くして、ふらりと傾いだ。

「ハナ！！」

ルークは慌てて花を抱きとめた。

「ハナ！！」
「ハナ様！！」

皆も心配して駆け寄って来る。
どこか怪我でもしたのかと、ルークは花の身体をさっと調べたが、特に異常はみられない。
なんの魔力も感じられなかった為にうっかり花に渡してしまった紙が、何か悪影響を及ぼしたのだろうかと、ルークは後悔した。

「ハナ、どこか痛むのか？」

「……って……」

「どうした？」

花の口から零れる小さな声を聞き取る事が出来ない。
そして、もう一度口を開いた花を見て皆が耳を澄ましたのだが……。

「……テヘ☆ってなんなのぉ……」

切迫した空気が漂う祈りの間に、脱力した花の声が静かに響いたのだった。

98．希望の光。

「ハナ、大丈夫か？」

心配に顔を曇らせて問うルークに、花はなんとか深く長く息を吐き出して気を落ち着けると微笑んで答えた。

「はい、大丈夫です。少し……ええ、少し驚いてしまっただけです」

――神様のいい加減さに……いや、いい加減どころじゃないよね？

神様に不満を募らせながらも体に力を入れると、ルークの手を借りてしっかりとその場に立った。

そして、安心してもらう為に周りにもその笑顔を向けた。

いつの間にか、ニコスや護衛達も祈りの間へと駆け付けている。

――……大事になってる気がする。もう！　神様ったら、なんでこんな大騒動にしてくれてるの!?　もっと穏便にできなかったのかな!?　私の時はもっと……あれ？　でもすぐにルーク達が来たんだっけ??　とにかく、あの音が――音!!?

花はハッとすると急いでピアノに近付き、その手で触れようとした。

「――ハナ!!」

が、それは再びルークによって阻まれた。

「ルーク！！　放して下さい！！」

花の苛立ちを含んだ声にルークはわずかに怯んだが、それでも花を放す事はなかった。

「ハナ！　危険だと言ってるだろう！！」

「でもっ！！」

先程の音はピアノが乱暴に扱われた為に鳴り響いたような音だった。その為、どこかを傷めたのではないかとの心配が花の心をあっという間に占め、ザックの言っていた防御魔法の事はすっかり抜け落ちてしまっていたのだ。

花はルークに捕らえられながらも、開いた屋根から弦の張った内部を覗きこんだ。

ざっと見ただけでは、ピアノが傷ついているのかどうかはわからない。それでもひとまずの無事を確認した花はいくぶん落ち着きを取り戻した。

と、同時にルークだけでなく、皆が驚き呆気にとられて花を見ている事に気付く。

「あの……ごめんなさい……」

取り乱した自分が恥ずかしく、そして申し訳なくて花は顔を赤くして俯いた。

「ハナ……その防御魔法は私にも解く事が出来ないほど強力なものだ」

「はい」

「だから触れると危険な事はわかるな？」

「はい」

「それでも大丈夫だと思うのか？」

「はい……え？」

「その紙には何が書かれているんだ？」

「そ、それは……」

なんとか逸る気持ちを抑えてルークの静かな言葉に頷いていた花は、最後の問いに何と答えればいいのかわからずに言葉を詰まらせた。

――――え、えっと……今ここで神様の事を言ってもいいのかな？

でも、ルークは神様の事を嫌っているようだったし……それに上手く説明できる自信がない……。

動揺しながら花は救いを求めるようにチラリと周りを窺ったが、更に焦ってしまうだけだった。

皆も興味深く花の答えを待っているのだ。

「これは……あの……」

――――どうする？　どうすればいいの？　えーん！！　神様のバカー！！……でも……。

心の中で一通り泣きごとを言った花はそれでも覚悟を決めた。
ゴクリと唾を飲み込んで、クシャクシャになってしまった神様からの手紙を更に強く握り締めると、顔を上げて微笑む。

「これは、あとで説明します」

「え……」

堂々とした花の後回し宣言に皆が言葉を失う。
その中、ルークだけは微笑む花を真っ直ぐに見つめ、花もまた強い意思を込めて見つめ返した。
やがてルークは諦めたように大きく溜息を吐くと、頷いた。

「……わかった」

「ええ!?」

ルークの承諾にザックが驚きの声を上げる。
だが、花は嬉しそうに振り返ると、恭しくそっとピアノに触れた。
そして、何事もなく無事な様子の花に皆が驚愕しているのにも気付かずに、なだらかな曲線を描く側板を優しく撫でながら正面へと向かい、恐る恐るその鍵盤蓋を開いた。

「ハナ!!」

今度はリコが焦ったように花の手を取った。

「リコ!!」

次から次へと現れる障害に花は限界に近かったが、次いだザックの言葉に思わず拍子抜けしてしまった。

「ハナ様、大丈夫ですか！？　なんかすげえ、歯をむき出してますけど！！」

「は……？」

一瞬、何を言ってるのかと思ったが、どうやらいつもの冗談ではなくザックは本気らしい。しかも、それは皆が同意見のようで一様に険しい顔をして、剣を佩いている者は柄に手を掛けている。

皆からピアノへ視線を落とした花は、確かに蓋を開けたピアノが大きく歯をむき出しにしている怪物のように見えない事もない事に気付いた。

――こ、ここは笑ったらダメだよね？　というか……さすがにもう泣きたいんですけど……。

込み上げる笑いが涙に変わりそうで慌てて俯いてしまった花の手を、ルークはリコから解放した。

「――陛下！！」

リコの抗議を無視して、ルークは花に優しく囁いた。

「聴かせてくれ、ハナ」

「……え？」

「それがずっと望んでいた楽器なんだろう？　その音色を聴かせて

くれ」

驚いて顔を上げた花にあたたかく微笑みかけてルークは後退すると、花から、ピアノから少し離れた。　まるでもう邪魔はしないとでも言うように。

そのルークの行動に、リコも皆も警戒しながらも従う。

「ルーク……」

花は涙を堪えて、ルークに感謝の気持ちを精一杯の笑顔で返した。

そして改めてピアノに向かう。

指が、体が震える。

高鳴る期待と少しの不安、溢れる想いを胸に花は指先に全ての神経を集中させた。

ポーン――と柔らかく響いた音は静寂の中に沁み込んでいく。

皆がその音色に息を呑む。

先程の、心に恐慌をきたすような音とはまるで違う、澄んだ美しい音。

花はまっすぐに通る音にホッと安堵の息を吐き出して、耳に、指に、体に懐かしく響く音に心を浸した。

それから和音もいくつか奏でてみたが、調律に狂いはなく、またどこも傷んだ様子もなかった。それどころか柔らかな軽いタッチは花の指によく馴染む。

花は無意識に椅子を引き出して腰をかけると、全てを忘れて弾き始めた。

何カ月もピアノを弾いていなかった花の指は、それでも自然と鍵盤の上を走りだし、徐々にそのなめらかさを取り戻す。

心から希(ねが)う楽しみ、喜びを、花はその指から紡ぎ出していく。
希いを言葉にできなくても、想いを音楽で伝えることができる。
澄んだ音色は空気を揺らし、さざ波となって皆の心を優しく揺さぶった。

花の歌声は浄化、奏でるピアノの音色は希望。
不安に満ちた心を、未来(さき)の見えない暗い道を、明るく照らす光となる。
やがて優しい音色は風になって海を渡り、光となってユシュタール中に降り注ぐ。
それはまるで、祝福の鐘の音ように鳴り響き、皆の心にあたたかな希望の光を灯したのだった。

番外編。メレフィスの災難。

「なあ、聞いたか!?　リリアーナさんがまたやっちまったって!!」

まだ少年と言ってもいい程の年若い数人の集団の中に、銀色の瞳を持った少年が楽しそうに走り込んで来た。
その顔は浅黒い肌が赤く見えるほど、興奮に染まっている。

「ああ、契約主をまたヤッちゃったんだろ?」

集団の中では年長の若者が冷静に応え、そこから皆が好き好きに話し始める。

「もうこれで何人目になる?」
「そもそもリリアーナさんが魔宝に宿る事自体無茶なんだよ」
「だよなー」
「俺らの中でもリリアーナさんは最凶の……いや、最強クラスの力を持つのに、人間の為に力を使うなんてもったいないよ」
「でも確か、進んで立候補したって聞いたぜ?」
「ああ、それはリリアーナさんらしいっつうか……俺らもある意味ありがたいっつうか……」
「リリアーナさんに勝る力を持つ奴なんてあんまいないしなぁ」
「アポルオンやメレフィスだって力では勝ってるけど、迫力で負けてるし」
「いや、迫力で言ったら勝てる奴なんていないって」
「だよなー」

などと、楽しそうにおしゃべりに興じる彼らの姿は皆一様に浅黒い肌に漆黒の髪、その髪から覗くくるりと巻いた角、そして銀色の瞳という男性魔族特有のものだった。

ここは果ての森の『心央』と呼ばれる場所。

魔族達は森から一歩でも外に出ると掟に縛られ、その魔力を削ぎ落されたように力を弱めるが、森ではその力を遺憾無く発揮できる。

よって、好きなように森の中を転移できる為、住まう場所もそれぞれで普段は集団で行動する事もないのだが、たまにこの『心央』ではこうやって情報交換などが行われていた。

「そろそろ強制送還になったりするのかな？」

「それで長老たち集まってるのか？」

「じゃあ、新しい娘が選ばれるって事か？」

「あの魔剣は女の子しか受け入れないからなぁ」

「そんな！！　アイニーが選ばれたらどうしよう！？」

「え？　お前アイニーの事が好きだったのか？」

「でもアイニーって……」

「いや、それを言うなら女の子はみんな……」

今日、特に若者たちが集まっているのは、魔族の長老達が久しぶりに寄合（よりあい）を行っているからだった。

そこにもう一人、若い魔族が声を上げながら駆け寄って来た。

「お～い！　長老達が集まれってさ！！」

その言葉に、皆が顔を見合わせる。

「え？　俺ら？　リリアーナさんの後任の事じゃなかったのか？」

誰かが上げた疑問の声に答えられる者は当然その場にはおらず、不思議に思いながらも皆が長老達の許へと転移して行ったのだった。

＊＊＊＊＊

「双剣に！？」
「そういやそんなもんもあったなぁ」
「まだ決まっていなかったのかよ……」

あらかたの若者達が集まった所で始まった最長老からの説明は、その場に大きな動揺をもたらした。
双剣と呼ばれる一対の剣に宿る者が長らく決まらず、今回強制的に決める事になったのだ。

「やだよ、俺。なんで人間の為になんか働かなきゃならねんだよ！」
「バーカ！　そんなん、みんな一緒だっつうの！」
「誰か立候補しろよ～」

口々に不満が上がる中、長老の一人がポツリと呟いた。

「掟じゃから仕方ないのう」

その言葉を聞いた途端、皆は黙り込んでしまった。
『掟』には逆らえない。
それは魔族達の血に浸み込んでいる絶対的な存在である。

「では……どうやって決めるんですか？　双剣ということは、我々から二人選出しないといけないんですよね？」

暫く続いた沈黙を破って一人の若者が挙げた問いは誰もが知りたい事だった。
皆が答えを求めて最長老へと注目する。
最長老は「コホン」と一つ咳払いをして、厳かにその言葉を口にした。

「クジ引きじゃ」

「……え？」

「クジ引きで決めるんじゃ」

「……」

長老達が寄り集まって決めた結果がクジ？とは誰もが飲み込んだ言葉だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

次の日、長老達や他の者達が見守る中、公正にクジ引きは行われた。
といっても、その結果はすぐに出る事になったのだが。

一人の若者――ロタンと言う魔族が、「私は『残り物には福がある』と信じているので、残った物がいいです」と、用意された棒形式のクジを持つ係を引き受けた。
そこへ「んじゃ、俺いっちば～ん！！」とアポルオンがクジを引

き、見事に『頑張れ！』と書かれたクジを当てたのだ。
それには長老達も慌てふためいた。
なにしろ、当たりを引いたのが当代随一と言われる程の力を持ったアホ――　アポルオンだったからだ。
ただの魔宝ならばそこまでの問題にはならなかったかも知れないが、今回の魔宝は双剣である。相対する剣に力の差を生じさせてはならない。
よって、もう一人の魔族は必然的に決まった。

「……メレフィス……本当に、本当に申し訳ないが……引き受けてくれぬか？」

最長老は皺だらけの顔を引き攣らせてメレフィスへと乞うた。
若い娘達からは悲鳴が上がっている。
尊敬する最長老の頼みを断れるわけもなく、メレフィスは黙って頷き了承の意を表すと、そのままアポルオンの許へと向かった。

「おかしいな～。一番乗りは福があるはずなんだけどなぁ～？」

と、ブツブツ呟いていたアポルオンは、近付いて来るメレフィスに気付いてニカッと笑う。

「あ、メレフィス！　災難だったなぁ～。でも、これからもよろしく――ギャッ！！　いてぇって！！　ヤメ……！！」

アポルオンをタコ殴りにするメレフィスを止める者は誰もいなかった。
メレフィスの気持ちは痛い程にわかる……以前に、いつもの光景であるからだ。

「……なあ、お前アレわざとだろ？」

悲鳴を上げているアポルオンを横目に、難を逃れた若者の一人がロタンにこっそりと尋ねた。

「ああ、だってアポルオンなら絶対一番に引くだろ？　しかも他より飛び出てるクジを」

「驚くくらいにア……単純だからなぁ、アポルオンは」

それを聞いていた他の若者達も会話に加わる。

「でもアポルオンはア……単純だけど悪い奴じゃないぜ？　ちょっと申し訳ないっつうか、なんつうか……」

「確かにアポルオンはいい奴だよ。ア……単純だけど」

皆がアポルオンへ同情を示し、ロタンは困ったように笑って弁明を始めた。

「アポルオンには悪い事をしたけど……アポルオンに決まれば必然的にメレフィスが選ばれる事はわかってたからな。アポルオンの暴走を止める事が出来るのもメレフィスしかいないし……」

「確かに二人とも俺らとは段違いに力が強いけど、メレフィスだっていい奴だぜ？」

一人が訝しげに眉を寄せて呟いた。

そこへロタンと仲の良い若者が何かに思い当たったように声を上

げた。

「ああ、そうか！　お前、アイニーの事好きだから――！！」

「バッ！　でかい声出すなよ！！」

慌ててロタンはその者の口を塞いで当たりを見回したが、集まっている若者達以外には聞こえた様子もなく、ホッとして若者の口から手を放した。

「なるほどな、アイニーはメレフィスに惚れこんでるからなぁ」

他の若者が納得したように呟き、また別の若者も続く。

「それを言うなら、女の子はみんなメレフィスの事が好きだろ？」

「確かにメレフィスはかっこいいもんな……しゃべらないけど」

「それがまたクールだとか何とかって女の子達が……」

「……」

憧れの混じったメレフィスを評する言葉はなぜか徐々に小さくなり、そして皆は無言でアポルオンの方に視線を向けた。

メレフィスはいつの間にかいなくなっており、アポルオンは女の子達に囲まれている。

「アホのバカ！　あんたのせいでメレフィス様が遠くに行っちゃうじゃない！！」

「どうしてくれんのよ！！　このアホ！！」

「メレフィス様にこれ以上迷惑かけたら、その鼻の穴からあんたの足りない脳みそを掻き出してやるから！！」

メレフィスがいる時には決して見せる事のない剣幕で女の子達はアポルオンを詰っている。
そして、アポルオンは中央に大人しく正座してうなだれていた。

「かわいいなぁ～アイニー」

「……」

うっとりと呟くロタンを、皆が驚いたように振り向き見た。
ちなみに「脳みそ」発言がアイニーのものである。

「ま、まあ、でも……アポルオンとメレフィスには悪いが、強力なライバルが減ったという事で……」

「あ、ああ……」

ロタンと仲がいい若者の言葉に皆が同意するように頷いた。
魔族は超実力主義である。
一夫多妻はもちろんのこと、多夫一妻だって可能なのだ（正確に言うなら婚姻制度そのものもないが）。

「……ロタン」

「なんだよ？」

皆の視線が自分へと集まっている事に怯んだロタンは思わず後じさったが……。

「　グッジョブ！！　」

「……へ？」

恋と戦争に手段は選ばず――皆の心が一つになった瞬間であった。

その後、アポルオンとメレフィスは若者達に盛大に見送られて旅立ったのだった。

99．焦りは禁物。

祝福の鐘のような花のピアノの音色は希望の光となって世界中に、そして『果て』にまで響き渡った。

その音色を耳にしたサンドル王国の王太子は明るく輝く亜麻色の髪を揺らし、形のいい唇に皮肉を滲ませて大きく笑った。

「なんだよ、これ……有り得ない程の力技じゃないか！　なあ？……さて、どうしようか？」

ガーディは王太子の独り言の様な問いかけには答えずに、眩く光る窓の外を見つめて目を細めた。

が、すぐに次々とカーテンを引いていく。

「殿下、大丈夫ですか？」

「ああ、問題ないよ。でも確かに……耳障りだね」

皮肉な笑みを浮かべたままの王太子は部屋に控えていた侍女に退室を命じ、窓辺の長椅子からソファへと移った。

王太子の一連の動きには全く無駄がない上にとても優雅で、初めてその姿を見た者は恐らく驚きに目を瞠るだろう。

「クラウス様は大丈夫でしょうか？」

王太子の側に控えたガーディは心配そうに顔を曇らせて口を開いた。

「心配はいらないさ。けど……すっかり壊れてしまったからね。それでもあの方は、徹底的に壊す前に徹底的に遊ぶつもりだよ」

「世界を巻き込んでですか？」

「巻き込む……ね。まあ、僕はせいぜい楽しませてもらうさ」

そう呟いた王太子は部屋に防音魔法を施して、未だ鳴り響く希望の音色を遮断したのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

優しい音色に包まれて、ずっと渇望していたピアノに触れた花の心は柔らかに潤い満たされていく。

それと同時に花の意識は現実へと舞い戻り、世界中が希望の光に包まれた奇跡の時間は終わりを迎えた。

花はふと、ルークをはじめとした皆がその場に立ったままである事に気付いたのだ。

チラリと窓の外に目を向けると、綺麗に満ちた月はすでに夜空に昇っている。

どれ程の時間を過ごしたのか理解した花は一気にその興奮も醒め、急いで椅子から立ち上がった。

「あ……あの、ごめんなさい。お待たせしました……」

花は慌てて謝罪の言葉を口にしたが、誰も何も応えない。

ただその顔は希望に満ちているように明るく、涙を流している者もいるのだが、花は自分勝手に皆を長く待たせてしまった事で罪悪感が募り、それには気付かない。

――― ど、どうしよう……みんなずっと立って待っていてくれたんでしょうか？　何時間も……なんて失礼な事をしちゃったの!?　ああ、やっぱりどうしよう!?　あ、手紙!……そうだ!!　手紙の説明をしないと!!

尚も続く皆の沈黙が更に花の焦りを募らせる。
何か言わなければと思うのだが、動揺した花の思考は混乱をきたしていて何も思い付かない。
そして、花は限界に達してしまった。

「って、テヘッ☆」

思いがけず口からこぼれ出てきたのは、先ほど脱力した神様からの言葉。
小首を傾げた花を見て何名かが大きく仰け反っている。

――― ぎゃあああああ!!　すみませんすみません!!　やっぱりこんなんで誤魔化せるわけがないんです!!　わかってます!!　わかってるんですけど!!　えーん!!　どうしたらいいの!?

結局、半泣き状態で途方にくれていた花を救ったのはルークだった。

「ルーク……」

「何も言わなくていい」

ルークはその腕に隠すように花を抱き寄せて優しく微笑んだ。
しかし、すぐに表情を改めると厳しい視線を周囲に向けた。

「皆、それぞれ持ち場に戻れ。お二方も、もうお戻りになられた方がよかろう」

有無を言わせぬ口調で告げたその言葉にジャスティン達が了承して頷くのを確認すると、ルークは花を連れてその場から消えてしまった。

「――リカルド様、もう夜も更けて参りましたのでお部屋に戻られた方がよろしいでしょう。ニコラウス殿下もお疲れでしょう？」

「は、はい」

ジャスティンの言葉にやっと我に返ったニコスは涙で濡れた頬を袖で拭うと、名残惜しそうにしながらも侍従達と祈りの間を後にした。

ディアンは花とルークが消えてすぐにその場から立ち去っており、レナードはセレナや花の護衛達に指示を出している。

「セレナ、ハナ様は陛下と共に青鹿の間に戻られたから急いで戻った方がいい。お前達も交替の時間は過ぎているだろ？　引き継ぎを済ませたら、また明日に備えて休め」

そうして皆が祈りの間を後にする中、リコだけは目を眇めてただジッとピアノを見つめていた。

その顔はとても苦しそうに見える。

「リカルド様？」

「……何でもない」

心配そうなジャスティンの声に応えたリコは、空に浮かび上がる満月に一度チラリと視線を向けると、その場から消えてしまった。

珍しく黙ってリコの側に控えていたザックもすぐに後を追う。

そしてたった一人、最後に残ったジャスティンの顔はとても険しいものになっていた。

だが、何度か大きく深呼吸を繰り返してようやくいつもの柔和な顔に戻ったジャスティンは部屋を出て扉を閉めると、祈りの間全体に防御魔法を施して月光の塔を後にしたのだった。

＊＊＊＊＊

「ルーク……ごめんなさい」

青鹿の間に戻ってからずっと黙ったまま強く抱きしめるルークに、花は謝罪の言葉を口にした。

ピアノに夢中になるあまり、全ての事を忘れてしまっていた。

その結果、みんなを長時間待たせてしまった上に、何かまたルークを苦しめてしまったのだろうかと花は思ったのだ。

しかし、ルークは驚いたように顔を上げた。

「なぜ謝る？」

訝しげなルークの問いに、花は申し訳なさそうに続けた。

「いっぱいみんなを待たせてしまいました。それにまたルークに迷惑をかけて……」

「また？　ハナに迷惑をかけられた覚えは一度もないが？」

「それは……それはルークが優しいから……」

花の言葉を聞いたルークは噴き出した。

「俺を優しいと評するのはハナくらいのものだな」

「そんなこと……」

ないとは言い切れない程に花も冷酷非道の皇帝陛下の噂は聞かされている。

それを察したようにルークはにやりと笑って、花に軽いキスを落とした。

まるで先ほどまでの事が嘘のような少し意地悪ないつのもルークだ。

「食事にしよう。腹が減っただろ？」

そう言って、その腕から花を解放して居間へと向かおうとしたルークの腕を花は慌てて掴んだ。

「ルーク、待って……待って下さい」

「どうした？」

「あの……話を……先ほどの手紙の事を……」

微かに震える花をルークは目を細めて見た。

「……ハナが話したくないなら無理に話さなくてもいい」

優しく気遣うルークの言葉に、それでも花は大きく首を振った。

「違います。ルークには聞いて欲しいです。私の事を、神様の……事を……」

「ハナ……」

縋るようにギュッと強く袖を掴む花の手をルークは優しく解いて包み込むと、そっと口づけた。

そして、花の震える瞳を覗きこんで安心させるように微笑み、静かに頷いた。

１００．それは杞憂です。

長椅子にルークと並んで座った花は一度大きく深呼吸をすると、バルコニーから落ちて神様に拾われてからこの世界に届けられるまでの全ての事を話した。
それほど長い話ではなかったが、最後まで何も口を挟まずに聞いていたルークはその後も暫く黙ったままだった。

「ごめんなさい、ルーク」

「なぜまた謝る？」

再び謝罪の言葉を口にした花に、ルークは眉を寄せた。

「今まで黙っていて、ごめんなさい」

あの時――『神様』の事を初めて口にしたあの時のルークはとても苦しそうに見えて言えなかった。
だけどその後もずっと言えなかったのは怖かったから。
本来なら、花の寿命はバルコニーから落ちた時に尽きるはずだったと神様は言っていた。
いくら花に『癒しの力』があっても、所詮は神様の意思で生かされているにすぎないのだ。
この世界で曖昧な存在の自分が怖い。
そして、ルークに嫌われる事が何よりも一番怖い。

怯えたように俯く花の頬をルークは両手で包んで顔を上げさせると、そのまま震える唇へ唇を重ねた。

それはとても優しく、緊張にこわばっていた花の体と心はふわりと解れていく。
しかし、やがて唇を離したルークは目を細めて悲しそうに微笑んだ。

「ハナの判断は間違っていない。もしあの時その話を聞いていたら俺はハナを……傍に置いたりはしなかっただろうな。だから感謝している」

「ルーク……」

今またルークは苦しそうに見える。
その苦しみを取り除きたくて、でもどうすればいいのか分からないままにルークへと伸ばした花の手は引き寄せられ、そのまま強く抱きしめられた。
ルークは花の柔らかな頬に口づけるように唇を寄せてかすれた声で囁いた。

「ありがとう」

それはとても小さな、小さな声。
だが、その言葉は花の心に深く沁みていく。

溢れる気持ちが言葉にならない。
それでも伝えたい。
強く強くルークを抱きしめて、強く強く想う。

今までの世界で不幸だったわけじゃない、ただ全てを諦めていただけ。
だけどこの世界でかけがえのない人に——　ルークに出会えた。

ルークが存在してくれるだけで強くなれる。もう諦めたりなんてしない。
今を精一杯生きていきたい、生きていく。
「私も……ありがとうございます。ルークが……ルークでいてくれて、この世界に存在してくれて、ありがとうございます」
花の存在価値が世界を癒すことならば、いくらでも頑張れる。
ルークの生きるこの世界さえ愛おしいのだから。
苦しいほどの抱擁の中、それでもルークのあたたかい愛に包まれて強く決意した花にはどれくらいの時間が経ったのかはわからない。
ただ優しい沈黙が寝室に流れていた。
が――
グゴゴオオオ!!
「……」
「ハナ」
「はい」
「相変わらずお前の腹は雄弁だな」
「そうですね」
「食事にするか」

「そうですね」

ルークは小刻みに肩を震わせながら顔を赤くした花に軽く口づけて立ち上がると、花の手を取り居間へと向かったのだった。

＊＊＊＊＊

「そういえば……」

いつもよりかなり遅い時間の食事となったが、それでも食後のお茶を二人で楽しんでいた花は、ふと思い出したように口を開いた。

「どうした？」

「神様はすごくレナードに似ていました。レナードは神様を大人にした感じと言うか……」

何気なく発言した花は、その事をすぐに後悔した。
花の言葉を聞いた途端にルークが顔を顰めたのだ。

「あ、あの……ごめんなさい」

「いや、違う。花が謝る事じゃない」

慌てて謝罪した花だったが、ルークは困ったように苦笑して、なぜか先ほどよりも更に顔を顰めた。

「ルーク？」

「ああ、まあ、その……レナードとディアンの家――ユース侯爵家の起こりはずいぶん昔のとある皇女の子が始まりとされているんだが……皇女はとても信心深く、祈りの間で毎日祈りを捧げていたらしい。そして、ある日……ユシュタルの御子を懐妊したと……」

「……はい？」

ルークが言いにくそうに説明してくれたその内容に花は驚き呆気に取られた。

が、それはまだ序の口だった。

「皇女は男の子を産み、その子がユース侯爵家の祖となったらしい。それに、レナードとディアンの母君であるアンジェリーナ殿のご実家――要するにサンドル王家だが、あそこも……とある信心深い王女が……」

「……神様の御子を御懐妊されたんですか？」

「――ああ」

「……」

――うわー！！　何それ！？　どっかの神話の全能神なみに節操ないんじゃ……神様なにやってんのよー！！　いや、やることやって……って、ちがーう！！

神様の知られざる実態というか、驚愕の事実を知ってしまった花の思考はどうにも落ち着きをなくして暴走しそうになる。

黙ったまま苦笑いしか出来ない花を見てルークも同意するように頷くと、再び口を開いた。

「まあ、正直なところ俺は信じてはいなかったんだがな。特にサンドルは……」

一旦言葉を切ったルークは大きく息を吐いた。

そして続ける。

「王女が産んだのは男の双子だったらしい。そして、男子のいなかった王の後を一人が継いで王位に就き、もう一人は神官として生涯を過ごしたらしいが……『神の血を薄める事無かれ』と、近親婚を繰り返している。その為か、特に最近では子が産まれ難く、産まれても病弱な者が多い」

実際に今現在のサンドル王国王太子も病弱で長らく神殿から出る事はなかったらしい。

王太子の地位に就いたのも、双子の兄であった先の王太子がマリサク王国との戦で命を落としたからだ。

サンドル王も床に臥して長く、病弱な王太子の為にも花を欲しいとほざくサンドル王家に激しい怒りが湧く。

王太子の婚約者だったアンジェリーナを帝国は奪ったのだから、などと。

「……ルーク？」

いつの間にか険しい顔になっていたルークを見て、花は心配そうに声をかけた。

慌てて表情を緩めたルークは微笑むと、神の事を聞いてからずっと懸念していた事を口にした。

「ハナは……ユシュタルと直接会って大丈夫だったのか？」

「え？」

「ユシュタルに何もされなかったか？」

「ええ！？」

「ハナはかわいいからな」

「えええ！？」

どうやら本気で心配しているらしいルークの言葉に花は悲鳴にも似た驚きの声を上げた。

――― 何これ！？　なんなの！？　羞恥プレイなのぉ！？

「ユシュタルはどうにも手が早いようだ。ハナはかわいいから……危うかったんじゃないのか？」

「そそ、そんなわけないです！！　私なんて！！　滅相もございましぇん！！」

舌をもつれさせながら苦労して花は否定したが、ルークはどうも半信半疑の様子だ。

――― いやいやいや、どう考えてもあり得ないから！！　皇女とか王女とか絶対美人さんだったんだから！！　私なんかを同列に考えないでぇ！！　神様は素通りでしたってばー！！

自分で考えていて虚しいが、ルークはもちろんの事、アンジェリーナや他の貴族達を見てもみんな綺麗な顔ばかりなのだから仕方がない。

激しく悶える花に、ルークは更に追い討ちをかける。

「もちろん、ハナが初めてだっ――」

「ぎゃあああああ！！」

続くルークの言葉を予想した花は遮るように悲鳴を上げて立ち上がった。

「もう無理です！！　もう耐えられません！！　これ以上は我慢できないですぅぅ！！」

顔を羞恥で真っ赤に染めた花は目に涙を溜めて叫びながらトイレへと駆け込んだ。

「……トイレか」

花の奇行に納得したように一人呟いたルークはカップに残っていたお茶を飲み干して立ち上がると、居間を後にしたのだった。

１０１．心裏に真理。

「あなた方は何をそのように反対されるのです！　ハナ様がご正妃になられるのに不都合な事がどこにありましょうか！？」

「不都合だらけではないですか！　確かにハナ様は素晴らしいお力を有しておられる。しかし、ハナ様は何の身分もお持ちでなければ、その出自も確かではないのですぞ！」

「何をおっしゃられるか！　ハナ様はそこにおられるセイン殿の――カルヴァ侯爵家の養女となられた。よって御身分は申し分もなく、しかもユシュタルが皇帝陛下の許にお遣わしになられた方なのですよ！？」

「それは確かな事なのですか！？　陛下には未だハナ様の事を詳しくお教えしては頂けませぬ。ですからハナ様が本当にユシュタルより遣わされて来られたのか我々が知る術はないでしょう？　それに、侯爵令嬢となられたからと言ってその出自までは変わりませぬ！！」

世界が希望の光で包まれた奇跡の一夜がまるで幻だったかのように、翌朝からはまた醜い争いが朝議の場で始まっていた。

花を正妃にとの声がいよいよ高まっているのだ。

しかし、相変わらず一部の貴族達から反発の声が上がり、あの夜から三日経った今も結論に達する事はなかった。

マグノリアは絶対君主制とはいえ、正妃に関しては皇帝の一存で決められるものではなく、内大臣ドイルのような最上位貴族過半数の承認を要するのだ。

それもまた、遥か昔の醜い権力争いから生まれた因習であった。

ドイル達とて、仮に自分達の娘を後宮に送り込む事が出来たとしても皇帝の寵愛を得る事がもはや難しい事ぐらいは理解していた。

花の右手小指には間違いなく皇帝のものである指輪も在るのだから。

だが娘を正妃の座に就かせる事さえできれば、例えただの飾りに過ぎないとしても権力は握れる。幸い、花の後見についたセインには権力に対する欲がない。

とすれば次代の皇帝についても上手く事を運べるかも知れないのだ。

「では先のセルショナードのようにハナ様が奪われでもしたらどうなされる？　ここ最近の王宮内の騒動でもわかるようにハナ様を手に入れんと暴挙に出る者達は多い。その者達を抑止する為にもハナ様には確固とした地位が必要なのです！」

「それについては心配する必要もないでしょう。力ある術者に聞いた所によるとハナ様のあのお力は『果て』にまで届いたそうです。ならばわざわざ危険を冒してまで王宮に忍び込むより、自国でハナ様のお力が届くのを待てばよろしいのですから」

「なんと悠長な！　それはあまりにも暗愚というものです！」

「何をおっしゃられるか！！　失礼にも程がありますぞ！！　そもそもあなたは――」

際限なく馬鹿馬鹿しい内容で続く議場に花のピアノの音色が優しく響きはじめた。

すると途端にそれまでの尖った空気は消え失せて、皆が心の平静を取り戻していく。

そして、結局何の結論も出ないままこの日の朝議も終わりを迎えたのだった。

＊＊＊＊＊

「いや～なんか他人(ひと)ん家のケンカって見てると面白いですね～」

「……」

ザックの呑気な発言を聞いた近衛のアレックスは色々な突っ込みを全て飲み込んで黙って立っていた。

先ほどまでザックはコッソリ（でもないが）朝議の場に潜り込んでいたのだが、今はルークの執務室でなぜかお茶を飲んでいる。

セルショナードとの講和条約は無事に締結したが、未だに細かい調整などがあり他の者達が奔走している中、する事のない（はずもないのだが）ザックは暇を持て余しているのだ。

「ってか、なんであの人達ってあんな堂々と陛下の御前でその寵妃であるハナ様の事を貶められるんすか？　すげえ度胸ですよね。それともひょっとしてただの馬鹿なの？」

「ええ、限度を超えた馬鹿なんです」

ザックの言葉にディアンが微笑んで答えた。

「粛清とかしないんすか？　あんなの潰してしまえば早いでしょ？」

物騒な内容を発言しているとは思えないほどザックの口調は明る

く、ディアンも更にその笑みを深くする。

「この国は、例えるなら老朽化した屋敷のようなものなのです。――古い屋敷というものは自らの重みで沈んでいく。そして土台は地に埋まり柱は腐っていきます。しかし、腐った柱を一度に取り除いてしまえば、屋敷は崩壊を免れません。ですから、一つ一つ丁寧に土台を掘り起こして腐った柱を取り除き、新しいものにすげ替えていくしかないのですよ。幸い我が国には新しき柱となる優秀な人材はたくさんおりますから、この先、腐った柱を取り除くのに何の不都合もありませんがね」

「へー！　なるほどね！！」

ディアンの言説に納得顔で答えたザックは、側にいたレナードに小声で訊いた。

「で、あんたの兄さんは何て言ったんだ？　かいつまんで教えてくれ」

「え？……要するに、あれだ……一度に粛清を行うのは無理って事だ」

「ああ！　そう言うことか！！　あんた頭いいな！！」

「いや、それは……」

慣れない褒め言葉にレナードはうろたえ、そんな二人を微笑ましく――黒く微笑んで見ていたディアンは再び口を開いた。

「セルショナードでは、この度の変事で優秀な政務官達だけが残り、

愚鈍な政務官達は一掃できたそうで羨ましい限りです。ああ、そういえば子育てに失敗した方はいらっしゃるようですが……まあ、政治的手腕と子育てとは結び付かないのでしょうねぇ」

「へ～誰だろ？　俺の知らない奴かな～？　あ、王の話し合いが終わったみたいですんで、これで失礼しまーす！」

ザックは思い当たる人物がいないのか考えるそぶりを見せたが、リコの動きを気配で悟ると、さっさと消えてしまった。

「……自由すぎるだろ」

呆れたようなレナードの呟きが急に静かになった執務室に響く。もちろん自由に振る舞う事を容認しているのは自分達だが、ザックは予想の範囲を超えている。

「まあ、それが彼の才能でしょう」

爽やかに微笑みながらもディアンは先ほどからずっと黙ったままのルークへ問いかけるような視線を向けた。

「――潮時だな」

無機質な声で吐き出したルークの言葉にディアンの顔から笑みが消えた。

「では、いつ？」

「明日にでも」

「かしこまりました」

レナードはルークの言葉を聞いて一瞬眉を寄せたが、二人のやり取りからその真意を悟ると息を呑んだ。

「ルーク……」

思わず洩れ出たレナードの声を最後に重たい沈黙が部屋に落ちたその時、扉をノックする音が静かに響いた。

「ランディです」

近衛のランディが今回新たに組み直された王宮警備についての報告に訪れたのだ。

それから、暫くその報告に耳を傾けていたルークは突然手を挙げてランディを遮ると、扉の内側に控えているアレックスに声をかけた。

「アレックス、行ってこい」

「しかし……」

「ハナではもう対処しきれんだろうから、お前が行ってこい」

「アレックス、ややこしい事になる前に……お前が対応した方がいい。ここはいいから行って来てくれ」

「……かしこまりました」

最初はためらいをみせたアレックスも、ルークの重ねた言葉とレナードの後押しを受けて拝命の敬礼をすると、ランディを一度チラリと見てから消えた。

「ランディ、あなたも気になるでしょうから行っても構いませんよ？」

「――私には関係のない事ですので」

ディアンの笑みを含んだ急な言葉にもランディは真面目な顔を崩さずに答えると、先ほど中断した報告を淡々と続け、詳しい内容が記された書類をルークへと提出して執務室を後にした。

「なかなか強情ですね」

「そうだな」

「これだけお膳立てされてるのになあ」

「……」

その方面関してはいつも鈍いレナードの驚きの発言を聞いてルークとディアンは黙り込んだ。

「どうかしたのか？」

自覚のないレナードは訝しげに問いかけたが、二人とも答える気はないらしい。

「陛下、事件です」

「事件だな」

「え？　どこで？」

「では私はすぐにでもメーシプに教えたいのでこれで失礼いたします」

「ああ」

「え？　何を？」

戸惑うレナードの疑問の声を無視してディアンは消えてしまい、ルークもそのまま目の前の書類に視線を落とした。

「え？？？」

結局、レナードがその答えを得る事はなかった。

ただ、ユース侯爵家執事のメーシプが書き記している『おぼっちゃま成長記録』には新たな一頁が加わったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

花にとって神様がピアノを届けてくれた事は、例え今までうっかり忘れられていたとしても、とても嬉しく感謝してもしきれないほ

どの喜びだった。
しかし、問題が一つ。
ピアノに施された防御魔法があまりにも強力で花以外は誰も触れない為に、移動させる事が出来ないのだ。
その為、花は毎日午前と午後の二回、月光の塔へと通う事になった。
本当ならば何時間でもピアノに触れていたいのだが、やはりセレナや護衛達を待たせてしまう事が申し訳なく、一歩（二時間）だけと決めた。それでも待たせすぎではないかと心配したが、皆の強い否定を受けて有難く甘えさせてもらう事にして、その時間を大切に過ごしている。
そして花達は今、月光の塔へと向かっているのだが……。

「ザック殿、妹にはもったいない程の有難いお話ではありますが、ハナ様の侍女としての職務もありますから……」

「え～、でも決まった相手はいないんだよね？　ハナ様だってご自分の侍女が幸せになれるなら応援してくれますよね？」

「え？　それは……セレナが幸せになれるならもちろん……」

「私はハナ様の侍女でいられるのが一番の幸せなんです！！」

「俺、強気な女の子って大好きなんだよね～」

月光の塔へ続く渡り廊下で繰り広げられているこの賑やかな光景も、もう三日目になっていた。
ザックは花達が後宮を出た所で大抵ふらりと現れるのだが、どうもセレナの事を気に入ったらしく、いきなり求婚したかと思ったら

断られ、それでも懲りずに毎回口説いているのだ。
しかも今日はセレナの兄であるアレックスも加わって更に賑やかになっている。

――――うーん、こんな時って私はどうすればいいのかなぁ？　人の恋路を邪魔すると馬に蹴られちゃうしなぁ……。でも、セレナってたぶん……。それにザックがこんなにしつこいのも、らしくないっていうか……？？？

花がザックと行動を共にしたのは二週間ほどだが、それでもなんとなくザックの恋愛傾向は把握していたつもりだった。
だがそれも間違いだったのかと悩む。
そもそも花にはルーク以外に恋愛経験がないので、正直こんな場面でどう対処すればいいのか全くわからない。

そうこうしているうちに、祈りの間へと一行は到着した。
花の姿を確認した警備の者達は嬉しそうに顔を輝かせて扉を開けてくれる。
そんな彼らに花は微笑んでお礼を言うと、高揚する気持ちを抑えてピアノへと近づいた。

あの日から祈りの間には警備兵が常駐するようになったのだが、花がピアノを弾く時間帯は希望者が殺到し、公平を期する為に新たに王宮警備が編成し直されたほどだった。
また、警備兵達の仕事はもう一つ増えていた。
それは少しでも近くで花の奏でるピアノの音色を聴きたいという民達が王宮周辺に集まって混雑するようになり、騒動を避ける為に警備が必要になっているのだ。
とはいえ、問題が起こる事はまずないだろう。
そこに集まる者達の顔はみんな前向きで明るく希望に溢れ、思い

やりに満ちている。

やがて響き始めた柔らかな音色に、人々は心を寄せて穏やかなひと時を過ごす。

花の奏でる優しい音楽は人々を温かく包み込んで世界を癒し、希望に満ちた光となって日々を明るく照らすのだった。

１０２．旅は道連れ世は情け。

またいつもの無駄な論戦が始まる。
その日、朝議に出席する誰もがそう思っていた。

新しい議案が挙がれば、それがどんな良案であれ、必ず派閥間の利権を求めた醜い争いに発展する。
そして結局は主だった者達が小さな会議室で審議し、皇帝の名に於いて施行される事になるのだ。
元来、議会は皇帝一人の肩に圧し掛かる負担を減らす為に設けられたものだったが、それが今は足枷にしかなっていない。
だがそれは、独断的な任命権を持つ皇帝の――ルークの選択でもあったのだが……。
その日、いつもの無駄な論戦が始まる事はなかった。

「今日は皆に知らせたい事がある」

ルークの静かな声が謁見の間に冷たく響いた。
その場をゆっくりと見回す皇帝の視線にさらされた者達は何人もが耐え切れないように俯き、ただ息を潜めてやり過ごす。
そして、ルークは最後に緊張した面持ちで青ざめているドイルを真っ直ぐに見据えた。

「ドイル」

「は、はい」

さすがにドイルが目を逸らす事はなかったが、返答するその声は妙に上擦っている。

「そなたは内大臣の任に就いてからどれくらいになる？」

「私は……」

「兄上がお生まれになってすぐだったか？」

「い、いいえ。それは私の父でして……」

「ああ、兄上の外祖父であった先代のドイル伯爵か……」

懐かしむ様な口調ではあったが、ルークの瞳はとても冷ややかに見える。

ドイルはごくりと唾を飲み込むと、震える声を必死で抑えて続けた。

「わ、私は……陛下が、皇太子位へとお昇りになった後に……」

「昇った、か……。確かに、生まれながらに皇太子であった兄上と違って、私は昇ったと言うべきなのだろうな」

「いえ！　決してそのような――　！！」

ルークの声はただ事実を確認しているような平淡なものだったが、ドイルは慌てて立ち上がり否定しようとした。

それをルークが手で制す。

「別に構わん、事実だ。だがそうか……では、親子二代に亘（わた）る長き

の務め、ご苦労であった」

「はっ！……は？」

ルークからの思わぬ労いの言葉に頭を下げようとしたドイルだったが、すぐにそれが意図する事に気付き固まった。

ざわりとその場に小波（さざなみ）の様な動揺が広がっていく。

「そなたの領地は緑豊かで、冬でもずいぶん暖かいと聞く。この先を過ごすには最適の地であろう」

「……へ、陛下は私に退官をお命じになっておられるのですか？」

「今はまだ、な」

柔らかな言葉に含まれるもの――今、従うなら穏便に退官するだけで終わらせられるのだ。

無駄に抵抗すれば先ほど持ちだされた領地までも取り上げられる事になるのか、それとも命まで取り上げられるのか。

ドイルは力抜けたようにストンと椅子に落ちた。

心に濁りのある者達が恐慌をきたして震える体を必死で抑えている中、青ざめながらも口を開いたのは外大臣のコーブだった。

「陛下、恐れながら……その、ドイルの後任は……」

「ドイルだけではない」

「それは……」

「余の考えはディアンに伝えておる」

それきり口を閉ざしてしまったルークの代わりに、ディアンが懐から取り出した料紙を淡々と読み上げていく。

ディアンの顔にいつもの笑みが浮かんでいない事が、もう覆す事のできない決定事項なのだと皆に知らしめた。

これによって長きに亘り宮中に蔓延(はびこ)っていた醜悪な政務官達が刷新されるのだ。

更迭される者達の周章狼狽する態度とは逆に、新たに任命される者達は驚くほど落ち着き払っていた。それはまるで予(かね)てより内々に知らされていたように。

「決して……決して私はハナ様を正妃になど認める事はありませんぞ!!　この首を引き換えにしてでも!!」

突然、最上位貴族に当たる一人の伯爵がまるで錯乱したかのように立ち上がって叫んだ。

「……そなたは何を寝ぼけた事をぬかしておるのだ?」

一瞬にして静まりかえった朝議の場にルークの何も感情の窺えない、ただ無機質な声が響く。

「ハナが正妃になろうが、なるまいが……ハナが余の生涯ただ一人の妃である事に変わりはない」

ルークの言葉が意味する事に、誰もが息を呑んだ。

「お、お妃様がお一人のみなどと無茶苦茶な!!　お世継ぎはどう

なさるおつもりですか！？」

ルークの冷厳な態度に、真っ赤になっていた伯爵は目が醒めたように一気に青ざめ震え始めたが、それでも必死で抗弁する。

「そなたの帝位継承権は何番目にあるのだ？」

「……は？」

変わらぬ声音で突如問われた内容に驚いて、伯爵は何度か目を瞬(しばた)いた。

「さ……い、今は三十四番目に、継承権は三十五位なります」

何とか思考を巡らせて答えた伯爵にルークは容赦のない笑みを浮かべる。

「余の後を継ぐ者がそなたの前に三十三人いて、そなたの後ろには何百人といる。それで……世継ぎがどうかしたのか？」

「……」

どうもこうもない。直系が必要だ。
言いたい事も山ほどある。
だが、言えない。

全て帝国の為と口に出来ても、本当は我欲でしかないと自覚している。
真っ直ぐに己を見つめる皇帝の冷徹な視線にさらされて、伯爵はそれ以上言葉にする事が出来ず大きく息を吸うと、黙って席に着い

た。

その様子を静かに見ていたディアンはほんのりと微笑んだ。

そして、謁見の間の隅で目立たないように立っていたジャスティンはホッと安堵の息を洩らす。

ジャスティンが朝議の場に姿を現す事など滅多になく、その存在に気付いている者は少ない。そこにザックがコッソリと近づいた。

「なんだか陛下の周りのみんなは嬉しそうっすね」

「……出ましょうか？」

柔和に微笑んだジャスティンはザックと共にその場を辞して、後宮の入り口付近へと転移した。

「ようやく陛下が……負うべき必要のなかった罪と責からの解放を望んで下さった事が我々は嬉しいのですよ」

「へ～。んじゃあ、腐った柱のすげ替え時期ってのは、陛下の決断待ちだっただけなんすね」

納得したように呟くザックの言葉にジャスティンは一瞬目を見開いたが、すぐに察して「そうですね」と頷く。

「陛下はとてもお優しい方ですから……」

「優しい？　冷酷非道の皇帝陛下が？」

からかうように笑うザックにジャスティンも笑って返す。

「噂というものは当てにならないものですよ」

「まあ、それが故意に流されたものなら尚更ですよね～」

色々と含んだ笑みを交わしていた二人は、月光の塔へと向かう為に現れた花を見て今度は本物の笑みを浮かべた。

しかし、ジャスティンは花へと駆け寄ろうとしたザックを片手で遮ると、穏やかに告げた。

「今日は私が塔まで付き添いますので、ザック殿はもう結構ですよ」

「え～何言ってるんですか。旅は道連れ世は情けですよ。人数多い方が楽しいですし」

「私は侍従長として、王宮で働く者を守る義務もありますから」

「へ～！　そりゃ、ご苦労様です。で、誰から誰を？」

「節操無しの甲斐性無しから、とある騎士に恋する乙女を」

「とある騎士って俺の事かも……」

「更に勘違いも甚だしい自惚れ野郎と加えておきましょう」

そうして、この日の花達にはザックだけでなくジャスティンまでもが加わり、再び賑やかな一行となって月光の塔へと向かったのだった。

１０３．人の噂も七十五日。

「ザッカリー・マルケス、只今戻りました～」

リコの執務室代わりにもなっているマグノリア王宮客間の応接室に戻ったザックは気の抜けた挨拶をしながら、まとめて置かれている書簡が先ほどよりも増えている事に気付いて面白そうに笑った。

「王ってば、今日もすげえモテモテっすね～」

その言葉にリコは目を通していた書類からチラリと書簡の方へと視線を向け皮肉な笑みを浮かべた。

「この国はやはり相当腐っているようだな。縁談を持ちかけて来ているものはまだかわいい方だ。中にはあからさまに返忠の意と取れるものもある。これら全部、お前の懐に入っている分も合わせて後でディアンに届けてくれ」

「あれ？　目を通さないんですか？　結構ナイスバディなお嬢さんからも預かりましたよ？」

「興味ないな。そんな事よりザック……お前、ちょっとやり過ぎじゃないか？　人様の恋愛にあまり首を突っ込むなよ」

「え～？　人様じゃないですよ～。俺はいつだって本気ですから。恋は先手必勝です！！」

「……そうか。まあ、あと数日せいぜい頑張ってくれ」

リコの力ない応援に、ザックどころか今まで黙々と書類仕事を進めていたトールドもハッと顔を上げた。

「帰るぞ。無事に講和も成し遂げた今、これ以上ここにいても下らん権力争いに巻き込まれるだけだ」

帝位継承権第二位を得たセルショナードの若き王は、地位と権力を望む者達にとって格好の的になっていた。

しかも、ヴィシュヌの名を冠す程の力を有したのなら、ひょっとして現皇帝がいなくても虚無を抑えられるのではないか？その様な愚かな考えを抱く者まで現れてきている。

また、このまま皇帝が子を生す事がなければ、魔力の強さによってはリコの子がジャスティンの子であるクリスを抑えて帝位に就くとこだって十分にあり得る。もちろん母親が皇家により近い事が条件ではあるが。

毎日毎日、舞い込んでくるお茶会やら晩餐会への招待状や縁談の申し込みの処理に、セルショナードから連れて来た政務官の手を常時割かないといけないほどであった。

「しかし……ハナ様のことはよろしいのですか？」

トールドのためらいがちな、それでも率直な問いにリコは唇を引き結んだ。

「……私では無理だ」

「リコ様……」

リコはすぐに何事もなかったかのように表情を緩めたが、その嘆

くような微かな呟きにザックもトールドもそれ以上は何も言えなかった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

夕の刻を回り、青鹿の間で本を読んでいた花の許へ、火急の用件があるからと面会の申し込みが入った。

元・内大臣のドイルとその腰巾着二人だ。

その日の朝議での出来事はあっという間に王宮内に広がり、当然花の耳にも入っていたので、いったい何の用なのかと興味を持った花は面会を承諾した。

そして三人を青鹿の間へと迎え入れたのだが。

「ハナ様の奏でられる音楽は本当に素晴らしいもので……」

「歌声は奇跡としか言いようがありませんな」

「いやいや、ハナ様はお力だけではない。その凛としたお姿も……」

「……」

三人の豹変ぶりは凄まじく、一通りの社交辞令的な挨拶が終わっても花への美辞麗句を並べ立てていた。

いつになったら終わるのかと花がいい加減うんざりしてきた頃、ドイルがコホンと一つ咳払いをしてもったいぶった口調でようやく本題らしき事を話し始めた。

「今、ハナ様はご側室というお立場ですが、我々ならご正妃にして差し上げる事が出来ます」

「まあ、それは……」

――― 大きなお世話です。

温和な笑みを浮かべて花は本音を抑えた。

しかし、ドイル達は花の笑顔に心情を誤解してか、尚も尊大に言い募る。

「我々をハナ様の後見に付かせて頂けたなら、ハナ様をとやかく言う輩（やから）もいなくなりますぞ」

――― そりゃ、あなた方がとやかく言う輩の筆頭ですから。

とは、その場にいる者達――ドイル達の侍従も含めた全員の心の中での突っ込みだった。

花を排除しようとするのではなく、抱き込む事に急きょ方針転換したらしいドイル達に、花は怒りを通り越して呆れるしかなかった。

それでも穏便に断ろうと試みるのだが、目の前の三人にはどうにも通じない。

「有難いお話ではありますが、私にはもうセインが後見に付いて下さっておりますし、ご正妃などとても恐れ多い事ですので……」

「何を悠長な事をおっしゃられているのですか」

「ハナ様は今や、強欲な者達から狙われていらっしゃるのです。ハナ様をお守りする為にもご正妃の地位は必要なのですぞ」

「私どもは陛下とハナ様の御為を思ってですな――」

ここまで厚顔な態度を貫ける三人に皆は唖然としており、侍従達はずっと懐に忍ばせている辞表を今すぐ叩きつけたい衝動を抑えるのに必死だった。

その中でただ一人、笑みを絶やさない花に皆が尊敬の念を抱く。

「私の為に皆さま本当にありがとうございます。ですが、私のような身にはあまりに過ぎたお申し出、皆さま方のお気持ちだけ有難く頂戴させて下さい」

婉曲な断り文句にドイル達は一瞬ポカンとしたが、すぐにその顔に白々しい笑みを張りつけて聞き分けのない幼子をあやすように再び花への説得を始めた。

「ご謙遜はハナ様の素晴らしい美徳ではありますが、今はそれどころではないのですぞ」

「そうですか……」

「ええ、それはもう。信じられない事に下々の者達の中には、陛下がハナ様を無理に閉じ込めていらっしゃるなどと噂する者もいるのですよ。そんな噂を一掃する為にもハナ様には確固とした地位が必要なのです」

「……」

花もその噂を耳にした時には驚いたが、噂なんてものは下手に触れば更に大きくなるものなので、放っておくのが一番だと思っていた。

しかし、目の前の三人は事を大きくしたいらしい。

「……わかりました」

「おお、ご理解頂けましたかな？」

頷いた花を見て、やっと承諾するかと安堵の息を吐いた三人に花は満面の笑みを向けた。

「はい。私が月光の塔から陛下への愛を叫べば、誤解なされている方々にも伝わるのではないかと思うんです」

「――なんですと？」

「毎日二回で十分でしょうか？それとも、もっと多い方がよろしいでしょうか？」

「……」

ニコニコと微笑む花は冗談を言っているようには見えない。

本気なのだろうかと、誰もが言葉に詰まり微妙な沈黙が落ちた。

そこへ、急に冷めた声が割り込んだ。

「それには賛成しかねるな」

「陛下！」

「陛下！？」

嬉しそうな花とは対照的に、ドイル達は悲鳴じみた声を上げた。

いつの間にか現れていたルークは、寝室へと繋がる扉に凭れかか

って冷ややかに三人を見据えている。

「へ、陛下がいらっしゃられたのなら、わ、私達はこ、これで……」

慌てたドイル達は挨拶もそこそこに、まるで逃げ出すように部屋から出ていってしまった。

その情けない様を軽蔑の眼差しでルークは見ていたが、一度大きく息を吐き出すと手振りでその場の者達に下がるように命じ、花を抱き寄せてその柔らかい頬をそっと撫でた。

「……大丈夫か？」

「はい、大丈夫です」

心配そうに見下ろすルークに花は安心させるように微笑んで答えた。

「俺の決断が遅くなってしまったせいで、ハナには随分辛い思いをさせてしまった……すまない」

「――いいえ、本当に大丈夫です。でも……ルークは大丈夫ですか？」

「ああ……大丈夫だ」

ルークの方がよほど辛そうな顔をしているのに花を気遣ってくれる。

花はギュッとルークに抱きついて、その温かな胸に頬を寄せた。

以前、誰かから聞いた話を思い出す。

政務官達はその殆どが先帝陛下の――政(まつりごと)に興味がなく臣下に任せきりだったというルークの父親の代から変わる事がなく、腐敗しているのだと。

花はルークやディアンがなぜそのままに放置しているのだろうと思ってはいたが、酷く苦しそうなルークを見ているとそんな事はどうでもよくなった。

どうかルークがこれ以上苦しい思いをしませんように、どうかルークのこれからが幸せなものになりますように。

そう願わずにはいられない。

「ハナ……」

暗く澱んでいたルークの心は伝わる花の想いに昇華されていくように軽くなっていく。

ルークはその瞳に心配の色を滲ませて見上げた花の唇に、感謝するようにそっと口づけを落とすと、ゆっくりと唇を離して柔らかく微笑んだ。

その穏やかな笑顔に花はホッと安堵した。

と、気が付けば花は応接ソファに座るルークの膝の上に座っている。

「……あれ？」

一瞬の出来事に驚く花を見てルークはいつものようにニヤリとした笑みを浮かべたが、次に花を呼ぶ声はとても真剣だった。

「ハナ」

「はい」

花が頬を染めながら間近にある美麗すぎる顔を見ると、ルークは金色に輝く瞳で真っ直ぐに花を見つめていた。

「俺はハナを愛している」

「は、はい……」

ルークの突然の愛の告白に、花は思わずその真摯な瞳から視線を逸らして俯いた。

そんな花の真っ赤になった耳元にルークは唇を寄せる。

「だが俺は、まだハナからもらっていない」

「……え？」

思わず顔を上げた花の頬にルークは両手を添えて、今度は逸らす事を許さないかのように捕らえた。

「『大好き』とは何度も伝えてもらった。言葉でも気持ちでも。しかし、それ以上の愛の言葉を一度ももらった事がない」

「え！？」

「月光の塔から叫ぶよりも俺に伝えて欲しい」

「ええ！？」

「嫌なのか？」

「いい、いえ、いえ！　いいいや、いやな、いやなわけじゃななな、ないんですが……」

花にとって「愛してる」と言葉にするのはかなり恥ずかしいのだが、それをどう説明すればいいのかわからない。

「そこまでの気持ちがない？」

「もも、もち！　もち！！　もちろんありまっす！！　溢れ返って溺れそうなほど！！」

「だが、溺れてはくれないんだな」

「えええ！？」

恥ずかしい。

とても恥ずかしいが、悲しそうに微笑むルークを見ていると、やっぱりきちんと言葉にして伝えたいと思う。

花は覚悟を決めると睨むようにルークを見つめ、思いきって口にした。

「あ……あい、愛してるってばよ！！」

「……」

「……あれ？」

焦るあまりなんだか某アニメの主人公的な言葉になってしまった

ような気がする。

「……てばよ？」

「え！？……そ、そんな事言いました？」

「……」

「ええ……えええっと……」

――――　うわーん！！　失敗しちゃった！！　どうしよう！？　ルークにどう言えば！？……い、いっそのこと私の世界ではそう言うって事に……無理かな？　いや、でも日本を代表する文化だし……うーん……。

「……」

必死で考えを巡らせていた花は、それが全てルークにダダ漏れになっている事には気付いていなかった。

そしてルークは、やっともらった愛の言葉を喜ぶべきなのかどうなのか、微妙な気持ちで悩む事になったのだった。

１０４．虎と狼。

「先ほどの演奏も素晴らしかったな」

「リカルド王……」

青鹿の間へと戻る途中、月光の塔を出た所でリコが唐突に声をかけて来た。

「今から少し話をしたいんだが、いいか？」

「ええ、もちろん」

花が口にした自分の呼び名に苦笑しながら問うリコに、花は頷いて了承した。

今夜はマグノリアを発つリコ達の為に非公式の晩餐会が催される。花も出席する事にはなっているのだが、おそらくリコとゆっくり話す事は出来ないだろう。

それどころかこの先、もうリコ達と会う事もないかも知れないのだ。

「んじゃあ、応接の間に行きますか。トールドが手配してるはずだし」

ザックの言葉に従い、そのまま花達一行は応接の間へと向かった。

そうして、応接の間で落ち着いた二人は和やかにお茶を飲んでいたのだが、ふと落ちた沈黙の中でリコがポツリと呟いた。

「……鐘の音に似ているな」

「え？」

「あの……ピアノとか言う楽器は様々な音が出るんだな。だが……」

「ああ。ええ、そうですね。確かにピアノには『鐘』を表現した曲もたくさんある程ですし……」

『鐘』をモチーフにしたピアノ曲を何曲か頭に思い浮かべて答えていた花は、なぜだかリコが酷く辛そうに見えて言葉を途切れさせた。

「リコ？」

「いや、すまない……」

謝罪の言葉を口にしたきり、リコは何事かを考えるように暫く黙り込んでしまったが、次に花へと向けた視線には強い意志が宿っていた。

「ハナ、俺は国に帰って俺の務めを果たさなければならない。だが、あの別れの時に言った俺の気持ちは今でも変わらない」

「リコ……」

セルショナードでの別れの間際にリコが花の耳元で囁いた言葉。

『この先何があっても俺はハナの味方でいる。例えそれが神に背くことになっても――』

あの時には感謝の気持ちを表したものだと受け止めたが、今のリコを見ているとそれだけではないように思えて花は戸惑った。

「実はこれを……ずっとハナに渡したかったんだ」

そう言ってリコは懐から小さな箱を取り出した。

小箱の中でなめらかなビロード地に包まれて乳白色に輝いているのは、月のしずく。

それはまるで、凪いだ海に映る満月をすくい取ったかのような曇りない輝きを放っている。

「……真珠？」

「ああ。月を映した真珠には闇を払う力がある。これは母が持っていたものだから、特に力が強い」

「え？　でもそれじゃあ……」

その説明を聞いた花は、リコのお母さんの形見の品になる物を受け取ってもいいのかとためらった。

そんな花にリコは困った様に笑ったが、急に視線を上げると、その後ろに向かって問いかけた。

「陛下もハナが持っていた方が良いと思われるでしょう？」

突然のリコの言葉に驚いて振り向いた花の後ろには、無表情のルークと苦笑するレナードが立っていた。

「陛下！？」

「ハナ……」

ルークはソファを回り込んで花の側まで来ると、立ち上がった花の細い腰を抱き寄せてそのまま口づけた。

――――　ええええっ！？　ひ、人前です！！　人前なんです！！

花の心の叫びは伝わっているはずなのに、ルークは気にした様子もなくゆっくりと唇を離した。

深くはないが、軽くもなかったキスに皆の前で抗議する訳にもいかず、花は顔を真っ赤にして俯く事しか出来ない。

そんな花の耳に、ルークの冷ややかな声が入ってきた。

「我が妃へのお心遣い感謝する。確かに……姉上のお力をお借りできれば、ハナにとって非常に心強いだろう」

ルークはそう告げると、側に控えていたセレナに受け取るように命じた。僅かに苦い表情を浮かべたリコは、それでも大きく息を吐いて小箱をセレナへと渡す。

その様子をぼんやりと見ながら、花はルークの言葉の意味について考えていた。

ルークにしても、リコにしても何を言っているのかさっぱりわからない。

リコが退室の挨拶を述べて部屋から出ていった後も考え込んでいた花は、再びルークに口づけられてやっと現実へと引き戻された。

「ルーッ！？」

だが、今度のキスは花の全てを奪うように深く激しいものだった。

いつの間にか部屋には二人だけになっていたが、尚も続くキスに花は戸惑い、なんとか逃れようとしたのだが叶わない。

「ルーク……ま、待って――」

「ダメだ」

花のかすかな抵抗の言葉さえもルークはあっさり奪ってしまう。

そしてこの後、ルークとの時間を過ごした花は晩餐の為の準備に苦労する事になったのだった。

＊＊＊＊＊

その夜の晩餐会は皇帝による個人的なものであり、出席者は十数名程であった。

花は用意された席に着いて静かに皆が揃うのを待っていたが、心の中ではルークへの悪口を並べ立てていた。

――ルークのバカ!!　変態!!　スケベ!!

首元まである華やかなドレスを纏って穏やかに微笑む花はとても優雅に見え、誰もその心中には気付かない。

やがて花は気持ちを落ちつける為に一度大きく息を吐くと、そっと室内を見回した。

――えーっと……たった十数人の食事にこの長卓……普段はこ

の上でボウリングをしていますと言われても私は驚かないです。

非公式の個人的なものでもこうなのかと、花は空いた席の方が明らかに多い豪勢に飾り立てられた長卓を見ながらルークの苦労を思った。

それでも最後にルークとリコが着席して始まった晩餐会は、以前の楽師達を招いた公式晩餐会に比べてかなり和やかに進み、花も肩の力を抜いて楽しむ事が出来ていた。

花はリコの右隣に配され、反対側にはニコスが座している。ルークはリコの正面に座しているので、花とは斜向かいに座る形になっているのだが、隣も向かいもなんだか遠い。

――――でもまあ、まだ普通に会話できるからいいのかな？　糸電話を使って会話とかちょっと面白いけど……。

そんな事を考えていた花の側へ、ニコスはマナー違反にならないよう気を付けながらも一生懸命じわじわと近寄って来ている。

その姿が可愛らしくて花も少しだけニコスへと近付いた。

「ハナは、葡萄酒は飲まないのですか？」

先程から水しか口にしない花にニコスが尋ねた。

「ええ、お酒はあまり強くないので」

「僕は早くお酒が飲めたらいいなって思います。だって、大人の証拠ですから」

無邪気なニコスの言葉に花は思わず笑みをこぼしたが、ニコスが

飲んでいる薄桃色の飲料が気になり尋ねてみた。

「ニコスは何を飲んでいるの？」

「カフィアです」

「カフィア？」

「はい。こういう特別な席で子供が飲むものです。僕には少し甘すぎますけど」

ほんの少し不満を見せて答えるニコスに花は再び微笑んだ。

そんな花を見て、ニコスも微笑み返す。

「ハナも飲んでみますか？」

「そうですね」

花が頷くと、ニコスは後ろに控える給仕の者に新しくカフィアを用意するようにと頼んだ。

ルークは楽しそうに会話している花とニコスを横目で見ながら、ディアンとトールドの冷めた話し合いに耳を傾けていたのだが、花がカフィアを口にしている事に気付き、そちらに視線を向けた。

カフィアにはアルコールが含まれている。

花が酒に弱い事は初めて食事を共にした時に聞いていたのだが、さすがに幼い子供でも口にするカフィアでは酔う事もないかとすぐに思い直し、ルークは再びディアンとトールドの話し合いに意識を戻した。

が――

花は何の前触れもなく突然立ち上がると、皆からの視線を気に留める事もなく、ゆっくりと息を吐き出した。

「あつい……」

呟いた花はいきなり自身の首元のリボンをほどいて、小さな釦（ボタン）を外し始めた。

皆が驚きに息を呑む中、大きく音を立てて椅子を倒したルークは花の側に現れ、一瞬後には花を抱きしめてあっという間に消えてしまった。

「……ハナ？」

そして微妙な沈黙が落ちたその場には、呆然としたニコスの小さな声だけが残されたのだった。

＊＊＊＊＊

「ハナ、大丈夫か？」

ルークが腕の中にいる花を心配そうに見下ろして問いかけると、花は身を捩（よじ）ってその腕から抜けだした。

「んー、あつい……」

再び呟いた花はまた釦を外し始める。

「……」

真っ赤になった顔といい潤んだ瞳といい、花は完全に酔っている。
徐々にはだけていく花の胸元から目を逸らしたルークは、ひとまずエレーンに水を頼もうと思い、ふと室内の様子に気がついて顔を顰めた。
花を連れて青鹿の間へと飛んだつもりだったが、慌てるあまり自室の寝室に飛んでしまっている。

「……」

自分のバカさ加減に呆れながらも部屋に控える侍従に水を用意させようと、踵を返したルークの上着の裾を花は掴んで引き止めた。

「ハナ？」

どうしたのかと振り返ったルークに、花は上目遣いで悲しそうに呟いた。

「行っちゃダメ」

「……」

はっきり言って可愛すぎる。
だがこのまま押し倒すわけにもいかず、とにかく花を休ませようとしたルークを逆に花は勢いよく引っ張って押し倒した。

「ハナ！？」

足が不安定な状態で寝台に仰向けになったルークの上に花は馬乗りになった。

驚くルークを見下ろすその目は据わっている。

「ルークも……あつい？」

問いかけながらも花は確信をもってルークのカッチリした礼服の釦を外していく。

されるがまま呆然と花を見上げるルークに、花は嫣然と微笑みかけてゆっくりとキスを落とした。

今までにないほど積極的な花の口づけに、ルークの理性も身体も限界に近づいていく。

花の唇はルークの頬へと滑り、耳朶を舐めて、そのまま舌を首筋に沿って這わす。

「……ッ！？」

そして、花はルークの首元に噛みつき――穏やかな寝息を立て始めた。

「……」

ルークは色々な衝動を抑える為に無駄だと知りつつ何度も深呼吸を繰り返すと、花からそっと離れて起き上がり、控える侍従に花の侍女達と念のために医師を呼ぶように命じた。

そして皆が到着するまでの間、ルークは檻に閉じ込められた狼のようにウロウロと部屋の中を歩き回る事になったのだった。

１０５．はじめてのお遣い。

「ふおっ！？」

かすかな物音で目覚めた花は起き上がろうとして自分の姿に驚き、すぐに掛け布に包まって悶えた。

――――　ぬほおおお！？　なんで全裸！？　っていうか、ここはどこー！？

「ハナ、大丈夫か？」

身支度を整えていたルークは花の奇声に振り向くと、その様子に気付いて急ぎ寝台に歩み寄って花の額に手をやった。

「だだ、大丈夫ですけど！！」

「けど？」

ルークは心配そうに眉を寄せている。

「わ、私、すっ、すすっ！！　裸です！！」

「……そうだな」

「こ、ここは青鹿の間ではありません！！」

「……そうだな」

「昨日からの……記憶がありません」

「……そうか」

昨夜、晩餐の席でニコスと楽しく話をしながらカフィアを飲んだ所までは覚えているのだが、そこからの記憶がない。

そんな自分が情けなくて花の気持ちは重く沈む。

「……体調は悪くないか？」

「はい……大丈夫です。ありがとうございます」

落ち込んで俯く花の頭を慰めるように撫でながら問うルークの優しさに、余計居た堪れなくなったが、それでも花は掛け布に包まったまま姿勢を正すと思い切って尋ねた。

「あの……昨日の夜、私は何をしてしまったんでしょうか？」

「……いや、何も」

「え？　でも……じゃあ、何で私は裸なんでしょうか？」

「……暑いと言って、自分で脱いだんだ」

「ええ！？　じ、自分で！？」

「ああ」

――――　ぬほおおお！！　どど、どうしよう！！　私、ルークの前

で全部脱いじゃったんでしょうか！？　それは恥ずかし過ぎるうぅぅ！！

ルークの前どころか、危うく大勢の前で脱ごうとした事を花が覚えていないのは幸いである。

ちなみに全裸なのは、セレナ達が駆け付ける前に眠りながらも寝具の中で一人もぞもぞと脱いだからなのだが、もちろんそれも覚えていない。

花はなんとか深呼吸をすると気を落ち着けて、もう一つの疑問を口にした。

「それで……ここはどこなんでしょうか？」

「……私の自室だ」

「え？　ルークの？……どうしてここに？」

「……ハナ」

「はい」

「カフィアには微量だがアルコールが含まれている」

「はい……知りませんでした」

ルークの話題転換には気付かず、花は悄然として答えた。

成人するまで甘酒さえ飲んだ事のなかった花は、二十歳になったお祝いに初めて沙耶の家でお酒を飲んだのだが、乾杯からの記憶が全くなく、気付いた時には翌朝だった。幸い二日酔いはなかったのだが、沙耶に何があったのか訊いても答えはもらえず、ただ「お酒

はもう飲まない方がいい」とだけ忠告されたのだった。
その為、花はそれ以来お酒を避けてきたのだが、やはり沙耶の前でも脱いでしまったのだろうかと思い悩んだ。

「……今まで誰かと酒を飲んだ事があるのか？」

昔の事を恥ずかしいながらも懐かしく思い出していた花は、ルークに問われて我に返った。

「え！？……い、いえ……あ、沙耶と――友達と一度だけ」

「……そうか」

ルークは少しホッとしたような顔をして、花の頭を再び撫でた。

「次からは気をつけた方がいい」

「……はい。大変ご迷惑をおかけしました」

花は寝台の上で正座したまま、深く頭を下げた。

「いや……とにかく、私はもう行かなければならないが、ハナはどうする？」

「え？」

「セレナが隣に控えてはいるが、青鹿の間まで連れて行った方がいいか？」

「い、いえ！　大丈夫です！　セ、セレナがいてくれるなら。だか

ら、あの……ルークはお仕事頑張って下さい」

「……わかった」

これ以上の迷惑をルークにかけたくなくて、花は慌てて断った。

ルークは花の言葉を聞いて僅かに苦笑を洩らしたが、その柔らかな唇に軽く口づけると今度は優しく微笑んで立ち上がり、消えた。

一人ルークの寝室に残った花はしばらく悶々と落ち込んでいたが、なんとか気を取り直すと、じっくりと部屋の中を観察した。ルークの寝室は初めてで、なんだかドキドキする。

だが今は使っていないせいか、かなり味気ないように思えた。

それから花は掛け布に包まったまま起き出すと、ふと思いついてその場に屈み込み寝台の下を覗く。

「……当たり前か」

何もない空間を見て一人呟いた花だった。

その後、セレナに支度を手伝ってもらって青鹿の間に戻ったのだが、そんな花の姿を見た王宮の者達は驚きに目を見開いた。

それもそのはず、妃が皇帝の自室で過ごす事など過去に一度も例がなく、この驚きの事実は瞬く間に王宮に広がり、やはり皇帝陛下にとってハナ様はそれほど特別なのだろうと噂される事になったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

セルショナード王達一行がマグノリア王宮を発つその日、謁見の間では最後の会見が行われていた。
とは言っても、それほど堅苦しいものではなく終始和やかに進み、そろそろ散会し出立という頃になってディアンがザックへと問いかけた。

「ザック殿はこのままサンドル王国へ向かわれるのでよね？」

「ええ、王の名代として挨拶に。あ、何か事付けとかあります？ついでなんで構わないですよ？」

「……」

ザックの返答に誰もが突っ込む事を控え、その場に一瞬の沈黙が落ちた。
特に親交があるわけでもないサンドル王国に『ついでの事付け』など頼めるわけがない。
しかし、ディアンは爽やかに微笑んで頷いた。

「では、お言葉に甘えてもよろしいでしょうか？」

「……」

その言葉に皆はゴクリと唾を飲み込む。
ディアンから頼まれる事など厄介事以外はないだろうに、ザックは満面の笑みで応えた。

「もちろんいいですよ。いやあ、宰相殿から頼み事をされるなんて、ちょっとすごくないですか？　ねえ、王？」

リコは嬉しそうなザックからそっと目を逸らすと、ボソリと呟いた。

「そうだな。空から槍が降るかも知れん……」

「ええ？　私、別に誓約を破ったりなんてしてないですけど？」

それだけ大変な事になるのではないかとうリコの揶揄もザックには通じない。

ディアンはそんなやり取りを気に留めた様子もなく、胸元から魔ペンを取り出した。

「これをサンドル王国の王城まで持って行って頂けませんか？」

ディアンの言葉と同時にペンは光輝き、いささか顔色の悪いアポルオンが姿を現した。

「ディアン様！　何でですか！？　俺の事捨てるんですか！？　そんなの嫌です！！　トイレ掃除でも何でもやりますから側に――っ！？」

悲痛な声を上げて詰め寄ろうとしたアポルオンの額に、ディアンは勢いよく書面を叩きつけた。

「別にペンを手放す訳ではありませんよ。ただ……お前にしか出来ない事を頼みたいのです。詳しい事はそれに書いてありますから、後でしっかり読んでその軽い脳みそに叩き込んでおきなさい」

「ディアン様……」

遂にディアンに認められたと感動している様子のアポルオンを横目に、ザックが確認する。

「ああっと……じゃあ、私はそのペンをサンドル王城まで運べばいいんっすね？」

「ええ、お願い致します。あともう一つ……」

再びに爽やかに微笑んだディアンはザックに応えながらレナードへと視線を向けた。

その気味悪い視線を受けたレナードは色々と諦めた様子で溜息を吐くと、用意するように言われていた物をザックへと差し出す。

それはレナードの持つ魔剣と、かつては対であった元・魔剣。

「こちらも一緒に運んで頂けますか？　サンドル王城で私の配下の者がザック殿に接触致しますので、その時に渡して下さい」

「あ、なるほど。確かにペンはともかく、王城に剣を持った者が入城するのは厳しいですからねぇ」

納得顔でザックはレナードから剣を受け取った。

ディアンは満足そうに微笑むと、涙ぐんで佇むアポルオンへと向き直る。

「アポルオン、それに書いてある事は少々難しいかも知れませんが、お前なら出来るはずです」

「はい！」

「もし危険を感じるような事があったら、迷わず飛び込むんですよ」

「はい！」

「期待していますからね？」

「はい！」

「……」

ディアンの言葉に嬉しそうに頷くアポルオンをそれ以上見ていられなくて、その場の者達は窓の外に視線を移し、雲ひとつない空を眺めた。

そんな微妙な空気には気付かずに、アポルオンはディアンを窺いながら恐る恐る口を開く。

「あの、ディアン様……俺が帰ってきたら、その……」

「ああ、そうですね。もし再び私の目の前に現れるような事があれば、是非私からお願いしたい事があります」

「ディ、ディアン様！！」

感極まったアポルオンは手の中の書面をグシャリと握り締め、それを見て笑みを深くしたディアンへと飛び付いた。

しかし、そんなアポルオンの額にディアンが持っていたペン先を突き立てると、「んがっ！？」との声を最後にアポルオンは輝き消えた。

「それではザック殿、このペンだけは、丁重に扱って下さいね？」

「もちろん、任せといて下さい」

ザックが爽やかに微笑むディアンから魔ペンを受け取ると、それまで黙ってその様子を見ていたリコはゆっくりとルークへ向き直った。

そのリコの腰にセルショナードの宝剣――ヴィシュヌの剣がない事に気付いている者は少ない。

「――陛下、どうか……よろしくお願い致します」

謝辞を述べたリコの最後の言葉に、ルークは厳しい表情のまま大きく頷いた。

「――承知した」

こうして、セルショナード王達一行は寒空の下、それぞれの目的地に向け二手に分かれて出発したのだった。

番外編。セレナの事情。

――― 普通だわ……。

それが、初めてセレナが花に面した時の印象であった。

多大な期待をしていた訳ではないが、それでも皇帝陛下のご側室になられる方は非の打ちどころがないご令嬢なのだろうと勝手に想像していたセレナは拍子抜けしたのだった。

＊＊＊＊＊

その日の早朝、セレナの実家は兄のアレックスより遣わされた先触れの使者がもたらした知らせに大騒ぎになった。

兄の所属するマグノリア帝国近衛隊の隊長であり、最上位貴族であるユース侯爵の実弟で自身も爵位を持つレナード・ユース卿が訪れると言うのだ。

セレナの父親は王宮門で書記官として働いてはいるが、かなり下位にある貴族の為、上位貴族以上の者が屋敷に訪れる事など滅多にない。

屋敷中が騒然とする中、セレナも急ぎ起き出して身支度を終え、どうにか体裁を整えた頃に訪れたレナードは、爽やかで偉ぶった所もない噂通りの好人物だった。

そして、早朝から訪問した事への非礼を詫びた後に切り出したレナードの用件は驚くべきものであった。

今まで貴族達からの再三にわたる申し入れを無視して、妃を娶る

事を頑なに拒んでいた皇帝がようやく迎える事になった側室に、侍女としてセレナに仕えて欲しいというのだ。

通常ならばこの上ない程名誉ある要請に喜ぶべきなのだろうが、セレナの両親は恐れ慄いた。

それもそのはず、皇帝の側室に仕える事になれば、必然的に皇帝とも接する事になる。

皇帝は冷酷非道との噂を裏付けるかの様に、ほんの数日前にもとある伯爵令嬢を不敬罪で重く罰したばかりなのだ。

セレナの両親にしてみれば、大切な娘を危険に曝すだけにしか思えない話だったのだが、セレナにとっては光明を見出したようであった。

――――これで婚約を解消できる！

セレナには結婚を間近に控えた婚約者がいた。

相手は三十八歳年上の中位貴族になる子爵で家格から言えば玉の輿になるのだが、セレナにはどうしてもその相手が好きになれなかったのだ。

だからと言って、良縁だと娘の為に喜んでいる両親に嫌だとは言えなかった。

そして五十歳を過ぎ、いよいよ婚期の迫っていたセレナにとって、このレナードからの要請は誰も傷付ける事のない唯一の逃げ道になった。

皇帝の妃に仕える侍女になれるなど非常に栄誉ある事なので、その為に縁談を断ったとしても相手の面目を保つ事が出来る。

――――たとえ……ご側室になる方が嫌な女性でも、この先どのような扱いを受ける事になるとしても、このまま生理的に受け付けない相手と結婚するよりはマシよ。それにお兄様や、この明らかに人

の良さそうな近衛隊長様がそんなに酷い話を持って来るとも思えないし……。

そう覚悟を決めたセレナは、心配する両親に暫くの別れを告げ、そのまま王宮へと上がった。

そこでレナードから侍従長のジャスティンを紹介され、やはり悪い話ではないと確信すると共に、同じく侍女として仕えるエレーンとも挨拶を交わし、上手くやっていけると安堵したのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

――それにしても、私はなんて狭量で浅はかな人間だったのかしら……。

セレナは皇帝陛下のご側室――花を知れば知るほどに当初自分が抱いた思いが恥ずかしくなっていた。

花に初めて面した時、皇帝陛下はこの女性のいったいどこに惹かれたのだろうと不思議に思ったのだ。

柔らかな物腰と落ち着いた所作からはそれなりの身分が窺えたのだが、ずいぶん大人しく容姿はいたって普通。

しかし、容姿に関しては侍女としての腕の見せ所とばかりに張り切った。

セレナもエレーンも行儀見習いの為に侍女として上位貴族の令嬢に何度か仕えた経験があったので、その知識と技術の全てを注いで花を磨き上げ、満足のいく結果が得られた事を喜んだのだ。

だが容姿なんてものはおまけに過ぎないのだと、花の人柄に惹かれていくと同時に強く思うようになっていた。

花は戸惑いを見せる事はあっても、セレナとエレーン――侍女に対しても丁寧な態度を崩さず、常に感謝の気持ちを表す。

正直な所、侍女がたったの二人で大丈夫なのかと最初は心配していたのだが、花は他の令嬢達のように我が儘を言う事も一切なく、普段は本を読んで静かに過ごすので逆に時間を持て余す程であった。

また、花が本を読む事に疲れた時などは女同士三人で他愛もないおしゃべりをして楽しんでいる。

ただ七王国のどこか――遠い地方から来たにしても、この世界に関する花の知識のなさが気になったが、セレナもエレーンも深く追及する事はなかった。

しかし、当然のことながら貴族達にとっては無視できない問題である。

花と面しては事あるごとに詮索するのだが、結局何も知る事は出来なかった。

穏やかに微笑みながら不思議と心に響く柔らかな声音で、花はいつの間にか別の話題へと転じさせて貴族達の質問を上手くかわしているのだ。

やがて貴族達は『微笑むしか能のない娘』と評し始めたのだが、セレナもエレーンもその頃には花の微笑みの中にある強さを感じ取っていた。

そして、セレナやエレーンから何とか探り出そうとする者達も後を絶たない。

セレナがレナードからの要請を受けた時には、なぜ侍女の選出にわざわざ近衛隊長が関わっているのだろうと疑問に思ったのだが、それもすぐに納得した。

花の素性やその他あれやこれやと詮索しようとセレナ達に接触して来るだけでなく、セレナ達を取り込んで花に害を為そうとする者までいるのだ。

その為にセレナの家族を利用されそうになった事も一度や二度ではない。

それらは全て兄のアレックスやレナードが対処しているのだが、セレナの家族は兄を除けば両親の二人だけなので比較的守り易いのだろう。

ちなみにエレーンはユース侯爵家の――正確に言えば、宰相であるディアンの遠縁に当たる為に心配はいらないらしい。

初めてセレナがその事を知った時、それではエレーンがあの有名な珍事件の被害者だったのかと同情しつつ、当事者に会えた事にほんのちょっと感動したのは内緒の話である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ねえ、セレナ……やっぱり陛下はあの噂通り、ふ――」

「エレーン！！」

ある時、ポツリと呟いたエレーンの言葉をセレナは慌てて遮った。

本当はセレナ自身も何度か考えた事ではあったのだが、花に仕える者としてさすがにそれを口に出す事は憚られていたのだ。

『あの噂』――それは長い間、妃を娶る事のなかった皇帝に対して密やかに囁かれていた『不能、女嫌い、男色家』との噂である。

当初、セレナは皇帝の気をすっかり纏っている花を見て二人の関

係を疑う事もなかったのだが、花の身の回りの世話をしているうちに気付いたのだ。

――――　ハナ様と陛下はまだ……？？？

『女嫌い、男色家』の噂は、花に接する皇帝を見ていれば間違いだとすぐにわかる。

花を見る皇帝の瞳には明らかな愛情が映っているのだから。

「私……初日にハナ様の悲鳴を聞いた時にはとても驚いたんだけど……でも陛下ならそれもありなのかと……」

「……ええ」

エレーンの遠慮がちな言葉に、セレナも今度は頷いた。

セレナが仕えて初めての夜、寝室から聞こえて来た少し変わった花の悲鳴に「いったい何が!?」と、かなり驚き心配したのだが、不寝の番をする近衛が動いた様子もなく、一晩中ドキドキして眠る事が出来なかったのだ。

「――思うんだけど……」

口にするべきではないと思いつつ、やはり気になるものは仕方がない。

セレナが重たい口を開いた事に、エレーンは興味津々の様子で続きを待っている。

「陛下はハナ様をとても大切になさっているから……」

今までに『皇帝陛下は冷酷非道』との噂を嫌と言うほど聞いてい

たセレナは、初めて皇帝が花に会いに青鹿の間に現れた時には恐ろしさのあまりお茶を注ぐ手が震え、こぼさない為に非常に苦労したのだった。

だが花に優しく接する皇帝を見るうちに、その噂も嘘なのかと思うようになっていた。

そして、花を唯一の妃に選んだ事に尊敬の念さえも抱くようになったのだが、普段の皇帝を知る護衛達に言わせればその優しさも微笑みも花の前だけであるらしく、初めて目にした時には信じられずに自身の頬をこっそり抓ってみた程だったらしい。

「きっとあの夜……ハナ様は初めての事に驚きになられてしまったのよ。それで陛下も慎重になられているんじゃないかしら……」

「ああ！　きっとそうね！　ハナ様はとてもお若いからご経験がおありでないのよ！」

勢いよく頷いたエレーンは、それでもすぐに不満そうに唇を尖らせた。

「だとすれば、そこはやっぱり陛下が多少強引にでも進めてさしあげるべきだわ……ハナ様だって陛下の事をあれほど深く想われていらっしゃるんだもの。恥ずかしさはあっても、嫌な訳じゃないと思うわ」

「そうよね……」

傍から見ても深く想い合っている二人に進展がない事がセレナとエレーンにはとにかくもどかしかった。

そうして、何とか二人の仲を進展させようと奮闘するセレナとエレーンの無言の圧力に花が気付く事はなく、皇帝――ルークは敢え

て無視を続けたのだった。

番外編。セレナの事情。（後書き）

読んで下さり、ありがとうございます。
番外編、続きます。

番外編。アレックスの苦慮。

セレナは奇跡というものを目にして初めて神の存在を心から信じた。

セルショナードの急襲から始まった戦は悪化の一途を辿り、センガルの凶報に人々が嘆き悲しむ中で花が起こした奇跡は、人々を悲しみと憎しみの深淵から救い出したのだ。

月の光と共に降り注いだ花の歌声は人々を癒し、冷えた心を温め優しく包み込んでいったのだった。

そこから花を取り巻く全てが変わってしまった。

確かに、花の歌から紡ぎだされた奇跡にセレナは驚くと同時に震えるほどの喜びを感じてはいたが、今までと花が変わった訳ではない。

その思いはエレーンも護衛達も同様で、王宮中の人間が花への扱いを変えた事に苛立ちを覚えていた。

＊＊＊＊＊

「セレナ！」

セレナに呼びかけるランディを見たアレックスは、思わず柱の陰に身を隠してしまった。

――――　いや、決して覗きをする訳じゃないんだけど……。

自分に虚しい言い訳をしながらも、結局そっと二人の様子を窺う。
アレックスはここ最近二人の間に流れる空気が以前とは違う事に気付いたのだが、兄として友人としてどうすればいいのか分からないのだ。

「……ランディ様」

所用で後宮から出ていたらしいセレナは驚いたように立ち止まりランディへと振り向いた。
そんなセレナの頬はほんのりと赤く染まっている。
珍しく人のいない回廊でランディはセレナへと歩み寄り、いつもは厳しい表情を緩めて微笑んだ。

「ずいぶん殺伐とした気を発しているな。それに眉間にしわが寄っている。」

ランディはからかうようにセレナの眉間を人差し指で軽く突いた。

「いいえ！　これは、その……」

真っ赤になって眉間を慌てて隠したセレナの頭を、今度は労わるようにポンポンと叩く。

「大変だろうが、あまり思い詰めるなよ」

「……はい」

それだけ言うと、ランディは更に顔を赤くして頷いたセレナに再び微笑みかけて去っていった。

――なんだ、それだけか？　でもまあ……。

アレックスはセレナが初恋相手であるランディの事をずっと胸に秘めていたのは気付いていたのだが、ランディが昔のように妹としてセレナに優しくしているのか、それとも久しぶりに再会したセレナに別の感情をもって接しているのかはよく分からない。

どうもはっきりしない関係なのだが、それでもランディのお陰でセレナの尖っていた気が和らぎ、少し肩の力が抜けた様子にアレックスは安堵した。

――だがこの先、ハナ様の侍女として今以上に苦労する事になるだろうな……。

この階級意識の強い王宮で、下位貴族出身である自分が経験したような苦労を妹にもさせてしまうのかと思うと、あの時の判断は間違っていたのではないかと悔いてしまう。

アレックスは嫡男として十代の頃から父親の後を継ぐべく書記官を目指していたのだが、三十歳を過ぎた頃から先祖返りとでも言うのか、かなり強い魔力を発現させ始め、急きょ進路を変更して騎士団入団を希望した。

このまま安全に過ごして下位貴族である男爵家の家督を継ぐよりも、騎士となって功績を上げ、認められた方が両親や妹により良い暮らしをさせる事が出来ると思ったのだ。

しかし、無事に入団を果たしたアレックスは、騎士団が思い描いていたようなものではなかった事を知った。

やはり極めて高い魔力が求められる騎士団には必然的に上位貴族以上の子息が多く集まっており、特権階級特有の傲慢さで下位貴族

出身のアレックスを蔑む者達がいたのだ。
その中にあってランディは近衛隊長のレナードに次ぐ程の良家の出身でありながら気さくで親しみやすく、当初アレックスが思い描いていた騎士――剛健にして高潔そのものだった。
そしてアレックスはこの尊敬すべき友人に恥じないようにと周囲の雑音を無視して努力を重ね、遂にその実力と人格を認められて近衛隊への昇格を果たした。
皇帝の側近くに仕える近衛騎士は並の騎士よりも秀でた魔力と、何よりも廉潔な人格を求められる。それ故に騎士の中でもほんの一握りにしか与えられない栄誉であった。

近衛に昇格してからはあまりに忙しく、隊舎に入舎したアレックスは実家に戻る事がなかなか出来なかったのだが、それでもセレナが婚約相手の子爵をどうしても好きになれず悩んでいる事には気付いていた。
そこであの日、急ぎ花の侍女になれそうな娘を探していたレナードに、差し出がましい事と思いながらもセレナを推挙したのだった。

――セレナは何でも自分の中に溜めこんで我慢するからなあ。もっと自分の意見をはっきり主張すればいいんだが……。

小さい頃から我が儘を言う事のなかった年の離れた妹が、アレックスは心配で仕方がなかったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「セレナ！！　ハナ様と陛下がついに――！！」

「ええ！」

嬉しそうに笑うエレーンにセレナもまた嬉しそうに笑い返した。

正直な所、花の首元に歯形を見つけた時には「初心者相手に何をやっているの！？」と、心の中で激しく皇帝を罵ったのだが、なんとか微笑みを浮かべてエレーンと目配せをすると、何でもない風を装ったのだった。

今夜は二人でコッソリ乾杯しようと提案するエレーンに頷いて、セレナは昼食のメニューを確認する為に青鹿の間の外に控える後宮付きの侍女の元へと向かった。

直接花の世話をするのはセレナとエレーンの二人だけだが、青鹿の間のすぐ側にある部屋には大勢の後宮付き侍女や小間使い達が控えている。

――――　陛下のお力も安定しておられるそうだし、これで全てが良い方向に進むわ。

それはセレナがそう思った矢先の出来事だった。

花が攫われたのだ。

目の前で花が襲われたというのに、何も出来なかった自分をセレナは酷く責めていた。

心配するアレックスやエレーン達の前では気丈に振舞いつつも、重く圧し掛かる皇帝の気を感じながら、いっその事もっと魔力が弱ければこのまま死んでしまえるのにとさえ思う事もあった。

だが、再び奇跡は起きた。
セルショナードに囚われているはずの花の歌声が風に乗り、月の光に輝いてマグノリアに降り注いだのだ。
セレナを慰めるように優しく纏う淡い光に、涙が止まらなかった。
――――ハナ様は必ずお戻りになられる。
強く確信したセレナはようやく笑顔を取り戻して皆を安堵させ、心配をかけていた事を謝罪すると、さっそく前向きに行動を始めた。
そしてエレーンと共に花が戻る事を信じて月へと毎日祈りを捧げ、待ち続けたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

花がマグノリアに――皇帝陛下の許に無事に戻り、戦争も終結したと知らせる吉報に国中が歓喜した。
更に花が奏でるピアノの音色に人々が希望を持ち、ようやく明るさを取り戻した王宮の回廊を、アレックスもまた心軽く騎士団の鍛錬場へと向かっていたのだが、少し先にいる一団に気付いて急ぎ柱の陰に身を隠した。
――――俺……こんなのばっかりだな……。
自分の行動に情けなく思いつつも、結局そっと様子を窺う。
そこには上位貴族の令嬢達四人に取り囲まれるようにして立って

いるセレナがいたのだ。

「あなたは一体いつまでハナ様の侍女でいる気なの？」
「たかが下位貴族の娘がいつまでもハナ様の侍女でいるなんて図々しい！！」

セレナに罵声を浴びせている彼女達は、最近結成されたばかりの『ハナ様親衛隊』の面々であった。

初めの頃は花に対して悪意を持つ者が殆どだったのだが、『癒しの力』が知れ渡るようになってからはその歌声に魅了され、慕う者達の方が遥かに多くなっていたのだ。

特に年若い令嬢達の中には崇拝していると言ってもいいほどに心酔している娘達もおり、花の元にピアノが届けられてからは遂に『ハナ様親衛隊』なるものが結成されたのであった。

ちなみにその許可を令嬢達から求められた花は、驚きのあまり飲んでいた紅茶に激しく咽せてしまったらしい。

結局、花は頑なに固辞して珍しく譲らなかったので、『ハナ様親衛隊』は非公認なのである。

「ハナ様はお優しいから、あなたで我慢なさっておられるのでしょうけど、きっと恥ずかしい思いをなされているはずだわ！」
「さっさとあなたから暇（いとま）を頂きなさいよ！！」

通常、位の高い妃には身分の高い貴族の娘が侍女として仕えるものである。

その為、花が皇帝の妃として認められ、その地位を確立していくと同時に、下位貴族出身のセレナでは不足だと言う声が上がるようになっていた。

所用でセレナが青鹿の間から一人出れば、これ見よがしに投げつ

けられる嘲笑と侮蔑。
アレックスは黙って耐えている妹を庇う事も出来ず、何もしてやれない自分が歯がゆくて仕方なかった。
そして今もまた、出て行くことも叶わず見ているしかないのだ。
だがセレナは怯む事なく、真っ直ぐに背筋を伸ばして令嬢達を睨み返した。

「確かに私の貴族としての身分は低いですが、侍女としての能力はもちろんの事、生活魔法やその他の魔法を扱う魔力は皆様方以上のものだと自負しております。ですから、この先も誇りをもって私はハナ様にお仕えさせて頂きます」

「な……なんて生意気な……」
「わ、私達にそんな態度をとるなんて……」

予想外のキッパリとしたセレナの態度と強気な発言に令嬢達は狼狽しながらも、必死で反駁(はんばく)しようと試みるのだが後が続かない。
セレナはそんな令嬢達に「では、失礼します」と述べると、その場から堂々と歩み去った。

「セレナ……」

令嬢達の姿が見えなくなった所で、アレックスはセレナに声をかけた。
セレナは一瞬、ビクリと肩を揺らしたが、振り向いた時には笑みを浮かべていた。

「お兄様？……ひょっとして、今のご覧になっていました？」

「ああ、だが……何もしてやれなくて悪かったな」

「いいえ、お兄様が気になさる必要はありません。私は大丈夫ですから、心配なさらないで下さい」

そう言って更に深く微笑むセレナには確かに落ち込んだ様子は見られない。

「だが、俺がそもそもお前を侍女にと隊長に――」

「お兄様！！」

ずっと抱いていた後悔を吐露しようとしたアレックスの言葉をセレナは強い口調で遮った。

「私はお兄様にとても感謝しております。ハナ様にお仕え出来る事がこの上ない喜びなのですから。その為なら、先ほどのような事は大した問題ではありません。確かに……ハナ様の侍女として相応しくないのではと悩んでいた時期もありました……でも先日、ハナ様から素敵なお言葉を頂いたんです。だからもう迷う事はありません」

「そうか……」

――ハナ様は聡いお方だから、セレナを取り巻く状況に気付いていらっしゃるのかも知れないな……。

アレックスはそう思い、嬉しそうな妹の顔を見下ろして微笑んだ。

「それに……ランディ様にも声をかけて頂いて、自信を持てるようになりました」

「……そうか」

続いたセレナの言葉を聞いたアレックスは咄嗟に答える事が出来なかったのだが、頬を染めてはにかむ妹を見てゆっくりと頷いた。

――― なんだ、やっぱりそうなのか……じゃあ、もう俺の出る幕はないなあ……。

成長した妹が嬉しくもあり、寂しくもあった。

兄心は複雑である。

だが結局、二人の仲は恋敵（ザック）の登場にも全く進展する事なく、アレックスは却ってもどかしい思いをする事になったのだった。

そしてセルショナード王が発って三日後、セレナがランディに一通の書簡を届ける為に鍛錬場へとやって来た。

何でもその書簡は、ザックが「私が発ってから三日後に渡して下さい」と、花に事付けていたのだそうだが……。

「――あの野郎……」

その場ですぐに開封して目を通したランディは唸るように低く呟くと書簡をグシャリと握り潰し、あっという間に灰にして消してしまった。

「ランディ様！？」

驚くセレナにランディは慌てて表情を緩めると、何事もなかったかのように微笑んだ。

「いや……わざわざ、すまなかったな。ありがとう」

「いいえ、とんでもございません……それでは、私はこれで失礼致します」

「……ああ」

たったそれだけのやり取りしかない二人の様子を見たアレックスは、焦れたように小さく嘆息した。

が、更にその様子を見守っていた近衛の面々は呆れたように溜息を吐いた。

セレナとランディの関係は色恋沙汰に疎いレナードが知るほどに隊の食堂でも話題になっているのだが、同時にアレックスの心配性ぶりも話題になっているのだ。

「いい加減に妹離れして、早く嫁さんもらえばいいのになぁ……」などと、仲間達に心配されている事には気付いていないアレックスだった。

１０６．珍種じゃなくて新種です。

「……母上？」

リコはすっかり衰えて棒きれのようになってしまった母の――クリスタベルの腕を優しくさすりながら、何かを必死で伝えようとするその口元に耳を近付けた。

「……私たちはただの駒……神は……楽しんでいるのかしら？　私たちが必死で抗い、絶望し……嘆き悲しむ様を見て……」

「母上、何を言って……」

「運命とは……神の戯れ……私達を……破滅へと導くのは……神は――」

「まさか、そんな！！」

母のかすれたか細い声は、それでもリコの耳にはっきりと届いた。

そして愕然とした。

『神』とは人々を救ってくれる存在ではなかったのか？

確かに、満月の夜に捧げる祈りは形骸化してしまっているけれど、それでもリコは――ユシュタールの民は神を信じている。

その神がまさか――。

「母上？　今のお言葉は……」

嘘だと言って欲しい。間違いだと。

意識が朦朧としている母に無理な願いを口にしそうになって、リコは慌てて口を噤んだ。
母はもう何も見えてはいない、何も聞こえてはいないのだ。
「……創世と…終焉……全ての始まりも…そして終わりも――」
弱々しく続いたその言葉を最後に、クリスタベルは息を引き取った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

耳に心地よく響いていたピアノの音色が鳴り止むと、リコは甦る母との記憶に蓋をするように大きく息を吐き出して立ち上がった。
「そろそろ行こうか」
その言葉を合図に、一行はひと時の休憩を終えてすぐに準備を整え、セルショナード王城に向けて出発した。
先ほどまで聴こえていたピアノの音色のお陰で、皆の顔には疲れも見えず、一様に明るい。
今からなら夕刻には王城に着く事ができるだろう。
それほどマグノリア王宮から離れているというのに、花の奏でるピアノの音色はまるですぐ近くにある神殿が鳴らす、時を告げる鐘の音のようにはっきりと耳に届いていた。
少し集中して『果て』に意識を向ければ、輝く音色にゆっくりと『虚無』の勢いが衰えていくのを感じる事も出来た。

花の演奏が終わると『虚無』は再び世界を飲み込もうと蠢き始めるのだが、それでも僅かに世界は抗う力を取り戻している。それを後押しするようにリコが力を注げば『虚無』の動きは鈍り、やがて窺うようにその場に滞留するのだ。

リコはサンドル王国とマリサク王国の『果て』に力を注いでいるだけにすぎないが、それでも体から流れ出す魔力は膨大で、失われていく力に恐怖を覚えた。

とすれば、今まで殆ど一人で世界の『果て』を支えていた皇帝の孤独と喪失感はどれ程のものだったのか。その途方もない強い力と精神力にリコは畏怖の念を抱かずにはいられなかった。

その皇帝にとって花の存在はリコや皆が思う以上に癒しであり、救いなのだろう。

――――だが、ハナは……。

あの日、ピアノの音色を初めて耳にしてから、どうしても母の最期の言葉――創世の神話の一節が頭から離れないのだ。

リコはふと手綱を引いて馬を止めると、後ろへと振り返った。

「……神に対抗し得るは、神のみか……」

マグノリアの方向に厳しい視線を向けて呟いたリコの声は小さく、葉擦れの音にかき消されていく。

「リコ様？　如何なさいましたか？」

「いや……すまない。何でもない」

突然馬を止めたリコに驚いて訝しげに問うトールドに、リコはい

つもの穏やかな笑みを浮かべて答えた。
そして再び馬を歩かせ始めたリコはセルショナード王城へと続く道を真っ直ぐに、前を向いて進んで行ったのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

花は持っていたシューラをそっと置いて、残照がまだ淡く朱色に染め上げている黄昏時の街を窓から眺めた。
ピアノが届けられてからも毎日シューラは弾いているのだが、今日は体調が悪く、すぐに弾く事を止めてしまった。

久しぶりに月のものが来たのだ。
今回もずいぶん遅れていたので気にはしていたのだが、ルークとの事を思えばまた別の心配もあったのであまり考えないようにしていた。
考えるとどうしても深みに嵌り込んでしまうから。

この世界は魔物を除けば、おおよそが地球と同じ生物で構成されているように思える。
それでも確実に違う点が一つ。
姿かたちは似ていても、全ての生物には大なり小なり器があり、魔力を持っているのだ。
その中で、花だけが異質な存在。

小さく息を吐いた花は、落とした視線の先にあった自分の手——その指先を隠すようにギュッと握りしめた。

――― 大丈夫。私は大丈夫。この世界で生きて行く。

言葉にならない、形にならない恐怖に飲み込まれそうになる自分に必死で言い聞かせると、花は自身を落ち着ける為に何度も大きく深呼吸をして立ち上がり、セレナ達に声をかけた。

「少しだけ寝室で休みますので、何かありましたら声をかけて下さい」

「あまりお辛いようでしたら医師に薬を処方して頂きますので、どうか我慢なさらずにおっしゃって下さいませ」

「ありがとう。でも、それ程ではないので大丈夫です」

心配するセレナとエレーンに微笑みかけて寝室へ入ると、行儀が悪いとは思いつつドレスのまま寝台に横になった。

眠るつもりはない。ただ少し休みたいだけ。
体の奥深くから力が失われていくような倦怠感。

――― 疲れたな……。

ふと浮んだ言葉に、花自身が驚いて閉じていた目を慌てて開けた。

――― あれ？　私、疲れてるのかな？　そっか、そうだよね……。

やっぱり疲れているから、すごく色々な事があってストレスが溜まっていたから、だから生理も遅れたのだと納得して、花の気分は少し浮上した。

そして腹部の鈍痛を逸らす為にゴロリと寝返りを打った花は広い寝台を目にして、とある問題に気付いた。

――― ルークに……なんて言えば……？

便利な浄化魔法のお陰で、『漏れない、臭わない』事はすでに実証済みで心配はないのだが、前回と違って今はルークと並んでただ寝ている訳ではない。

とすると、こういう場合にはどうすればいいのか。

花は痛みも忘れて勢いよく起き上がると、ウロウロと部屋の中を歩き回り始めた。

――― こういうのって自分から言うものなのかな？　それは恥ずかしいよね？　うーん。……それとなく察してくれないかな？　って、それはそれで嫌かもー！　じゃあ、どうすればいいの？　みんなどうしてるんだろう？

色々と考えるのだが、空回りするだけで結局どうすればいいのかがわからない。

しかし、花は突然ピタリと歩みを止めると、ゆっくりと書物机へと振り向いた。

書物机にある一番の上の抽斗（ひきだし）――鍵は掛けていないが、セレナ達も勝手には触らないその抽斗を開ける。

「……」

抽斗の中には、最近では滅多に開く事がなくなった『生まれて来た事を後悔させてやるリスト』と、その下に例の本が隠れるように収まっているのだ。

花はリストの下から例の本――アンジェリーナから贈られた『く

図解付き＞愛の技巧と焦らしのテクニック』を取り出して恐る恐る開いた。

「……。」

何頁かパラパラと簡単に目を通した花はそっと本を閉じて抽斗へ仕舞うと、窓辺へと近付いてすっかり宵闇に包まれた街を見下ろした。

「……ふふ」

薄闇の中、静かな寝室になぜか放心したような花の乾いた笑い声が響いたのだった。

＊＊＊＊＊

「何だ、それは？」

その日、ルークは久しぶりに鍛錬場でレナードを相手に剣を握ったのだが、政務官達を刷新したお陰で執務が滞る事もなく、寧ろいつもより早い時間に青鹿の間の寝室へと訪れる事が出来た。

そして目にした物に、驚くよりも半ば呆れて花に問いかけた。

「枕です」

「それは見ればわかる」

答えた花に、ルークもすぐに応えた。
寝台の中央には枕がいつかと同じ様に並べられて左右に区切られているのだ。

「こっちが私の陣地で、そっちがルークの陣地です」

「……何の為に？」

「え？」

「何の為にお互いの陣地が必要なんだ？」

「え……えっと……」

――― 何の為って聞かれても……どう答えればいいの？　えっと……えっと……。

前回は上手くいったので（朝には意味を為してなかったが）、今回もこれで押し通すつもりでいた花は理由を聞かれて困惑してしまった。
必死で考えを巡らせた花の口からどうにか出て来た答えは……。

「障害です」

「……障害？」

「あの……あ、愛は……障害がある方が燃えるんだそうです。だから……これから数日障害があればきっと……」

「ああ、……なるほど」

ようやく納得したらしい言葉をルークからもらえた花はあからさまにホッとして微笑むと、いそいそと自分の陣地に横になり目を閉じた。

が、――穏やかでない気配を感じて再び目を開けた。

「ルーク!?」

ルークは愛の障害（枕）を次々に寝台から落としている。

そしてあっという間に全てを取り除くと、驚き起き上がろうとした花を強く抱き寄せた。

「待っ――」

抗議しようと開いた花の口はルークによってすぐに塞がれてしまった。

やがて唇を離したルークはそれでも強く花を抱きしめたまま、掠れた声で囁いた。

「どんなに障害があろうとも……俺はハナを諦めない」

「ルーク……」

その言葉に喜びとも不安ともつかないよくわからない感情が押し寄せ、花はルークから身を引く事も忘れて金色に光る瞳を見つめた。

ルークはそんな花を見つめ返して優しく微笑むと、腕を緩めて軽くついばむようなキスを繰り返し、いつものニヤリとした笑みを浮かべた。

「今はここまででいい。だが、この先は……待てば待つ程にきっと燃えるんだろう？」

「え？」

「期待して待っていればいいんだな？」

「ええ！？」

今度は楽しそうに弾んでいるルークの言葉に、花は安堵しつつも激しく動揺して金色の瞳から目を逸らした。

次の日、花はアンジェリーナに宛てて『超初心者にお勧めの本があれば教えて下さい』との手紙を送ったのだった。

１０７．戸締り用心。

「う〜ん、う〜、う〜ん……」

とある港町のとある宿屋。その一室から聞こえる奇妙な呻き声に、宿屋の主人は扉の前で眉をひそめていた。

それというのも、この部屋のお客は今、花街へと出掛けていて留守にしているはずだったからだ。

ひょっとして客の留守を狙った盗人か？　と、主人が大きな片手鍋を握り締めて部屋の様子を廊下から窺っていると、後ろから当の客に声をかけられた。

「あれ〜？　おやっさん、何してんすか？」

「あ、お客さん。シー！　静かに。あのですね、なんか部屋から声がするんですけど……盗人ですかね？」

やっと戻ってきた客にホッとしながらも、主人は人差し指を立てて静かにするよう促し、状況を説明した。

その客は素直に口を閉ざして黙り込むと、主人と同じ様に扉へと耳を近付けた。

「あ、あ〜……」

「お客さん、心当たりあるんですか？　もし、お連れの方がいらっしゃるなら、ちゃんともう一人分払って下さいよ」

どこか気まずそうに声を上げた客を見た宿屋の主人は、素早く頭

を切り替えて商魂たくましく客に詰め寄った。
　すると客は慌てて首を横に大きく振り、弁解を始める。
「いや、違う違う！　あれは……あれだ！　の、呪いなんだよ！」
「呪い！？」
「そうそう。呪いのペンをだなあ、サンドル王国の神殿でお祓いして貰うっていう依頼を受けてだな……」
「そ、そんな物騒な物、持ち込まないで下さいよ！！」
　血の気の引いた宿屋の主人を安心させるように、客は震えるその肩を力強く叩いて人好きのする笑顔を浮かべた。
「大丈夫！　そっとしておけば、今の所は他の人間に害を加える事はねえから。な？」
　どうにか言いくるめて宿屋の主人を追い払うと、その部屋の泊り客――ザックは、一度大きく溜息を吐いてから部屋へと入った。
「お前なあ、何をさっきから唸ってんだ？　便秘か？」
「おお、ザック。今晩は早いな？　てことは、明日はいよいよ出発なのか？」
　ここ数日、酷い嵐で海が荒れていた為に、ザック達一行はサンドル王国へと渡る船の出るマグノリア帝国最南端の港町で足止めされていた。
　そして、今日になってようやく天候も回復し、明日には船が出港

するそうだと供の者から伝えられたザックは、本来の宿へと戻って来たのだった。

「ああ、明日の朝一で出港だってさ～。船乗りさん達は早起きだね～。で、呻き声の原因はそれか？」

ザックは呻き声の主――アポルオンが手にしている書面を見て尋ねた。

「そうなんだよ、俺にはどうも理解できなくて……」

頷いたアポルオンはザックへとその書面を差し出した。

それを受け取ったザックは目を通すと、片手でごしごしと目を擦り、それからもう一度書面へと視線を落とし、更には裏面まで確認してしまった。

「……」

しかし、何度見直しても、ザックの目にはたったの一行しか映らない。

それはかなりの達筆で書かれた簡単な一言。『さっさと森へ帰りなさい』とあるだけ。

「あ、あ～……っと、うん。悪いが、俺にもちょっと意味がわかんねえな」

ザックは目を泳がせながら、珍しく丁寧に書面を折りたたむとアポルオンへと返した。

「ま、まあ、あれだ！　きっとサンドル王城に行けば、そこで詳し

く説明してもらえるんじゃないか？」

「そうか！　そうだよな！！」

ようやく答えを見つけて喜ぶアポルオンから目を逸らしたまま、ザックはボソリと付け加えた。

「――だったらいいな」

「ん？　何か言ったか？」

「いや、とにかく！　サンドル王国に入る前には気配を消してもらわないといけねえからな？　もう勝手にペンから出て来るんじゃねえぞ？」

「おう！　任せとけ！！」

こうして普通のペンに姿を変えたアポルオンを連れたザックとその一行は、翌早朝、晴れ渡った空の下、一路サンドル王国を目指して港町を出発した。

その後――ザック一行がサンドル王城へと無事に入城を果たし、セルショナード王の名代として挨拶を済ませたとの報告を最後に、ザックと普通のペンの消息は途絶えたのだった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ハナ様、申し訳ありませんが、今からお召替えをして頂けますでしょうか？」

「え？　はい……？」

今日は特に何も予定はなかったはずなのにと思いつつ、素直に従って着替えた花は、鏡に映った自分の姿を見て目を丸くした。

――――　あれ？　この恰好って……？？？

「あの、これはいったい……？」

なんだかとても楽しそうに見上げているセレナとエレーンに疑問を投げかけた花だったが、二人は微笑むばかりで答えは得られない。

「あまりお待たせしてはいけませんわね。さあ、ハナ様」

結局、花は不思議に思いながらもセレナに促されて居間へと戻り、そこにいた人物を目にして驚愕した。

「ルッ――陛下！？」

「ハナ」

花に優しく微笑みかけるルークの姿があまりにも違うのだ。

いや、美麗な顔はいつもと変わってはいないのだが、髪色がプラチナブロンドからよくある茶色に、瞳の色も金色から少し濃い琥珀色へと変わっている。

また衣服も普段の豪奢な衣装から、花がセルショナードでリコ達と旅をしていた時にリコが着ていたような一般貴族の略装を身に纏

っていた。

「その姿も可愛いな」

驚いて茫然としている花に構わず、ルークはその頬に軽くキスを落とした。

花もまた、若い貴族令嬢達が街へと遊びに行く時のようなあまり目立つ事のない簡素な衣服に着替えていたのだ。

「陛下……あの、これは……」

戸惑いを隠さない花にルークは悪戯っぽく笑いかける。

「街へ行こう」

「え？」

「今からならちょうど昼食時だ。街の食堂で何か食べよう」

「それは――」

「大丈夫だ」

王宮から離れても大丈夫なのかと心配の言葉を口にしようとした花を、ルークは穏やかに遮った。

「今はリカルドと……ハナのお陰でかなり力に余裕が生まれている。だから、少々王宮から離れたとしても何も問題はない」

「……本当に？」

「ああ」

ルークの言葉に花は込み上げる涙を必死に堪えた。

ずっと――何十年も王宮から出る事の叶わなかった、それほどに負担を強いられていたルークが街へと出られるのなら、ルークが少しでも義務から解放されて息抜きが出来るのなら、これ程に嬉しい事はない。

涙を浮かべながらも嬉しそうに微笑む花を見て、ルークは少し困った様に微笑み返すと、今度は唇に少し長めにキスをした。

「へ、陛下……」

レナードやセレナなど、まだ周囲に人がいる事を思い出した花は顔を赤くして、力ない抗議の声を上げた。

それを意に介した様子もなく、ルークは花の頬に手を添えて何事かを呟いた。

「……今のは？」

何だかよくわからないのだが、何か今までと自分が違う気がして花は自身を見下ろした。

そして目の前のルークもまた何か違う気がして、首を傾げる。

「俺とハナの気配をかなり弱めた。街では目立たない方がいいからな」

「気配を……弱める……」

ユシュタールの人々は自身の持つ魔力をオーラのように纏っている。

魔力が強いとそれだけ気配も強く現れ、近しい人には香りのように移すので、花がセルショナードでリコ達に匿われていた際にはルークの気配を隠すために色々と苦労したのだが……。

「――気配って簡単に隠したり出来るんですか？」

「ん？　ああ、ある程度の魔力がある者なら自身の気配くらいはな」

「そうですか……」

ある程度と言っても、恐らくルークやディアン、ザックくらいの力の強さは必要なのだろう。

納得したように呟いた花は、なぜか急にニッコリ笑ってルークを見上げた。

「それで今まで陛下は女性関係を知られる事がなかったんですね？」

「……何の事だ？」

「アンジェリーナ様がおっしゃっていました。陛下もディアンも女性の気配を上手く隠してしまわれるって」

「……」

相変わらず花は微笑んでいるのだが、その真意が読み取れず、困惑したルークは思わず目を逸らし、そのまま側で固まったように直立しているレナードへ視線を向けた。

しかし、当然ながら、レナードにこの微妙な空気を緩和する術があるはずもない。

母の名前が出た事ですでに動揺していたレナードは、更にルーク

の視線を受けて限界に達した。

「し、しまった!!　もうこんな時間か!!　そ、それでは、私は予定が予定しておりますので、これにて失礼です!!」

「……」

「……」

動揺しすぎたレナードは、白々しさを越えた怪しい発言をして逃げてしまった。

その後に訪れた気まずい沈黙。それを破ったのはセレナだった。

「ハ、ハナ様、あの……付添いを連れていない若い娘は悪漢に狙われやすいので、必ず陛下のお側にいらっしゃって下さいませ」

「あ、はい。わかりました。気を付けます」

ようやくいつもの笑顔で応えた花に安堵して、ルークは気を利かせたセレナに感謝するように軽く頷いた。

そして強く花を抱き寄せる。

「では、行こう」

「え?」

「それではハナ様、お気を付けて行ってらっしゃいませ」

「あ――」

まさか転移して街へ行くとは思っていなかった花はルークの言葉に驚き、見送るセレナとエレーンに挨拶も返せないまま、青鹿の間――王宮を後にしたのだった。

108．バカップルで行こう。

「ハナ、大丈夫か？」

街中の人目に付かない路地裏に転移したルークは、腕の中の花に心配そうに問いかけた。

「……はい。大丈夫です」

いつもの穏やかな笑みを浮かべて頷いた花は、ルークの腕の中から覗いた賑やかな街の様子にその瞳を輝かせた。

ルークは色々な意味で安堵して嬉しそうな花を腕から解放すると、その華奢な手を握った。

「では、さっそく行こうか？」

花はルークに手を引かれて、路地裏から雑踏の中へと紛れ込んだ。

初めて歩くサイノスの街――その大通りには、目立つように色とりどりに飾り付けられた露店が立ち並び、その奥には様々な店が軒を連ねている。

そんな活気に溢れた華やかな街をルークと一緒に手を繋いで歩いているなどと夢のようで、興奮が抑えられない。

――――はお！　は、初めての！！　で、でで、デートです！！

ルークと手を繋いでます！！　ご飯のいい匂いもして、人がいっぱいで、どどど……どう、どう――！？

知らずルークの手を握る手には力が入り、興味深く辺りを見回す

花の胸は高鳴る。

「ハナ、少し落ち着け」

「はう！？」

伝わる花の興奮を宥めるように、ルークは繋いだ手のその甲をゆっくりと親指で優しく撫でた。

そのくすぐったいような、痺れるような感覚に震えが走る。

花は何とか深呼吸を繰り返して気を落ち着けようと努力しながら、恥ずかしそうにルークを見上げた。

「……ルーク？」

「ああ。……それでいい」

問うように呼びかけた花に応えたルークは少し歩みを緩め、握った花の華奢な手を持ち上げて口づけた。

「ルーク！」

「ハナにその名で呼ばれるのが好きだ」

耳まで赤くした花を見下ろして微笑むルークに、上手く言葉を返す事ができない。

このままきっと心臓が飛び出してしまう。

それ程に花の胸はキュッと締め付けられたように甘く苦しかった。

「ど、どこへ……向かっているんですか？」

辛うじて出て来た言葉は在り来たりの質問だったが、ルークは気にした様子もなく答えた。

「とりあえずは昼食にしよう。この先に昔よく利用した食堂がある。今は息子に代替わりしたらしいが、味も変わってないと聞いた。今からならそれ程には混んでいないはずだ」

「それは……すごく楽しみです！！」

立ち並ぶ露天など心惹かれる物はたくさんあるのだが、やはりルークの――好きな人の楽しそうな過去に触れる事が出来るのは嬉しい。

――――　それにしても……。

花は先ほどから、かなりの視線を感じていた。
それも特に女性から。
見惚れるようにルークを見つめた後に突き刺さる視線が痛い。

――――　ええ、おっしゃりたい事はよくわかります。どうもすみません。

感じる視線をわざわざ確認しなくても、女性達の頭の中は覗けなくても、考えている事は間違いなくわかる。

「どうした？」

女性達の気持ちは理解できても、落ち込んでしまうのは仕方ない。
しかし、ルークに心配をかけてしまった事に慌てて、花は取り繕うように微笑んだのだが、間近にあるルークの顔は色素が変わって

もやはり美麗すぎてうろたえてしまう。

「――ルークは……カッコ良いです。良すぎです」

「そうか？」

顔を赤く染めて言う花を見てルークは不思議そうに眉を寄せた。

前から薄々感じてはいたが、ルークはどうも自分の容姿に関心がないらしい。

お妃候補の令嬢達は皇帝という地位だけでなく、その容姿にも惹かれているのだろうし、きっとそれらも関係なくルーク自身に惹かれている人もいるはずだと花は思うのだが、それを口には出さずにルークを一人占めしている自分は卑怯なのではないかと胸が痛む事もあった。

でもこれだけは譲れない。

あたたかなルークの手に縋るようにギュッと力を入れると、ルークは立ち止まって繋いだ手とは別の手を花の柔らかな頬に添えた。

「ハナは可愛い。可愛すぎる」

「く、こっ――！！」

「くこ？」

ルークの言葉を聞いた花は身体中の血液が顔に集まっているのではないかと思う程に、顔が熱くなって思考が停止しそうになる。

上手く呼吸さえ出来ない。

それでも喉に詰まった息と同時になんとか言葉を絞り出した。

「ここっ、これがバカップルって奴ですね！？」

「……バカップル？」

「いえ……すみません。何でもないです。ちょっと憧れてただけなんです」

「……そうか」

相変わらずルークには花の言葉の意味が理解できなかったが、いつも通り気にしない事にして、再び花の手を引いて歩き始めた。

それから雑多な通りを抜けて道を一本脇に入ると、町並みは少し落ち着いた雰囲気に変わり、そこに素朴な趣の食堂があった。

ルークは花の背に手を添えて店内へと導き入れると奥に空席を見付け、そこまで花を連れて行き椅子を引いた。

完璧な紳士だ。

「……ありがとうございます」

王宮では皇帝という立場上決して有り得ないルークの行動に花は驚いて、小さな声でしかお礼を口に出来なかった。

「ハナは特に苦手な物はなかったな？　注文は任せてもらっていいか？」

「はい。お願いします」

今度ははっきりとルークに答えて、花は店内を失礼にならない程度に見回した。

小じんまりとした店構えとは逆に奥行きがあって意外と広い店内

は、板張りの床と壁、それに頑丈そうな木材で出来たテーブルと椅子が並べられ、それぞれのテーブルの上には小さな空き瓶に数輪の野花が挿して置いてあり、素朴な空気の中に柔らかさを醸し出している。

そして、まだお昼前だと言うのにテーブル席もカウンター席も多くのお客で埋まっており、花と同じ様に男性に連れられて訪れたらしい女性客の姿もあった。

すぐに運ばれてきたのはイギリスの大衆料理のフィッシュアンドチップスのような料理でワンディッシュ式に豪快に盛り付けられたものだった。

周りを見ても皆同じ料理のようで、どうやらこのお店の定番料理らしい。

そして何より、昼間だと言うのに皆が水代わりに葡萄酒などを飲んでいる。

地球でもランチの際にワイン等を軽く飲む習慣もあるが、どうもこの世界の人々はアルコールに強いらしく食事の際には当然のように酒類が出て来るのだ。

しかも、お酒を全く飲まない花が匂いだけですぐに気付く程にかなりアルコール度数が高い。

「あの……ルークもお酒の方がいいんじゃないですか？」

花に付き合ってなのか、ルークもレモネードのような柑橘系飲料を頼んだらしい。

「いや、別に構わない。それより食べられそうか？」

「はい」

嬉しそうに答えた花はルークに倣ってビネガーソースを料理にかけると、一口サイズにナイフで切り分けて口へと運んだ。

「おいしい！」

「そうか、なら良かった」

思わず感嘆の声を上げた花に、ルークは安堵したように微笑んだ。昔、花がイギリスへ留学した際にうんざりする程に寮で出された物と違い、しつこい油っぽさがなくあっさりとして、それでいて香辛料が効いていて香ばしく食欲をそそられる。

「これ……何のお肉なんですか？」

興味深そうな花の問いに、ルークはニヤリと笑って訊き返した。

「知りたいのか？」

「い、いえ……やっぱりいいです」

やはり世の中には知らない方が良い事もあるのだろうと思い、慌てて引き下がった花を見たルークは、今度は楽しそうに笑った。

「マダラだ」

「え？」

「マダラの肉だ」

「ええ？……ルークは意地悪です」

からかわれていた事に気付いた花は、少し拗ねたような声で応えた。

ルークは未だに楽しそうに笑いながら、それでも謝罪するようにテーブルの上に置かれた花の手を優しく撫でる。

「マダラはかなり珍しい魚だが……そもそも、海から遠く離れたこのサイノスではあまり海魚を食べる事は出来ない。それをこの店では独自の取引先があるらしく、割と安価で提供してくれるから人気があるんだ」

「なるほど」

ルークの説明を聞いた花は先ほどの事も忘れ、納得して頷いた。

二人は食事をもう終わらせる所だったが、気が付けば店内は先ほど以上にかなり混み合い、給仕の若者が忙しそうに立ち働いている。

カウンターの奥では店主が絶えず鍋を振り、その隣では奥さんらしき女性が揚げ物をしていた。

そこへ、花達が座っているテーブルの空いている椅子へ、酒が入っているらしいグラスを持った男がどっかりと腰を下ろした。

「わりいが、相席いいか？」

もうすでに座っている男に花は戸惑って目の前のルークを窺うと、ルークは一瞬周りに視線を向けたが、すぐに男へと冷たい視線を投げかけた。

「俺達はもう出るから、構わない」

ルークの返事を聞いた花は、残っていた飲料を飲もうと慌ててグ

ラスを手にした。
その花の右手小指に男はチラリと視線を向け、それからルークにのっそりと顔を近付けて花には聞こえないように小声で話し始めた。

「兄ちゃん、政略結婚だったのか？　それだけ男前ならもっと良い女と結婚できただろうに、もったいねえな……。なあ、上手い商売の話があるんだがどうだ？　見た所、どっかの貴族の次男坊くらいだろ？　それで、あの嫁さんの家に婿養子に入ったのか？」

ルークは男の不愉快な言葉を顔色一つ変えずに聞いていた。
花は二人の邪魔をする事はせず、さり気なく視線を逸らして店内の賑わいを見ている。

「ハナ……悪いが、水を一杯貰って来てくれないか？」

「あ、はい。わかりました」

ルークに申し訳なさそうに頼まれた花は、頷くとすぐに席を立った。
その背を見つめるルークに、男は下卑た笑いを浮かべる。

「兄ちゃん、話がはええな。これからあんな女より――ッ！？」

言いかけた男は声を喉に詰まらせた。
ルークがテーブルに置いた男の手――その僅かな指の隙間にナイフを突き立てたのだ。
それは一瞬で、指先から危険を感じるまで男はルークが皿からナイフを取った事にさえ気付かなかった。

「失せろ」

たったそれだけの一言に、なぜこれ程の恐怖を感じるのか男にはわからなかった。

男にとって目の前の若造は一財産築けそうなほど綺麗な顔を持っただけの、大した魔力もないお坊ちゃんにしか見えなかったはずなのに。

ルークは動かない男を目にして呆れたように大きく息を吐き出すと、ナイフを引き抜いて皿へと戻し、男の腰かけている椅子をテーブルの下から勢いよく蹴った。

と、椅子は見事に男の尻の下から滑り出て、頼る物のなくなった男は後ろへ無様に転がり倒れてしまった。

大きな物音に店中の注目が集まる中、よろよろと起き上がった男は青ざめた顔のまま、それでもルークに向かって「覚えてやがれ！」とお決まりの文句を吐き捨てて逃げ出したのだった。

「どうしたんですか？」

水を持って戻ってきた花に、ルークは何事もなかったように微笑みかけた。

「いや、何でもない。どうやらあの男はかなり酔っていたらしい」

「……そうですか」

納得してはいないだろうが、それ以上は何も言わずに水を差し出した花から、ルークは礼を言って受け取ると一気に飲み干して立ち上がった。

「行こう」

代金は注文した時点で支払う仕組みなので、そのままルークは花の手を取って店を出ると、再び大通りに向かって歩き出したのだった。

１０９．古典的活劇。

ルークに手を引かれて戻った大通りは、様々な商品が並べられた露店とそれを眺めたり買い求めたりする客などで溢れ返り、花は再び胸躍る興奮にその瞳を輝かせた。

この日は幸いなことに薄い雲が空を覆ってはいたが、真冬とは思えない程に暖かく穏やかな日和で、外を歩くのも全く苦にはならない。

「このまま露店を見て回るか？　それともどこか別の場所に行ってみるか？」

「露店を見たいです！」

それからルークと見て回った露店には食料品や日用雑貨、果ては護身用の武器や何だかよくわからない物まで売っていて冷やかすだけで十分に楽しかった。

その中で、地球では中国で発達してアジアに広まった螺鈿（らでん）細工の小物を置いてあるお店に花は目を止めた。

――――　どちらかというと、この世界って西洋っぽいけどこんな物もあるんだ。……って、うわっ……高いなあ。

表示された値段を見て思わず品物を置いた花に、店主がニコニコしながら声をかける。

「お客さん、これは東国のカラカングから仕入れた品ですからね。珍しくて値が張りますが、それだけの価値はあるものですよ。ご主

人に買って頂いたらどうですか？　ねえ、ご主人？」

「ああ、もちろんだ。ハナ、どれがいい？」

「ええ？　でも……あの、私……」

店主は花の指輪を見て、その背後から守るように立っているルークを夫と判断したようだった。

だが花は『ご主人』と言う言葉に戸惑い、更に値の張る物を買ってもらう事にためらってしまった。

「でも……さっきもご飯をごちそうになったばかりで、いえ、それを言うならそもそも衣食住を保証してもらってて、幸せで、贅沢で、それに、えっと、だから……」

顔を赤くしてうろたえる花を見てルークは苦笑した。

「ハナは俺の妻だ。妻を養うのは夫として当然だから何も気にする必要はない。それに幸い俺は……」

そこで言葉を切ったルークは、今度はニヤリと笑って花にだけ聞こえるように囁いた。

「恐らく世界一の金持ちだから心配するな」

「ルーク……」

花の心を軽くするために、普段なら絶対に口にしないような言葉を冗談っぽく添えてくれたルークの優しさが嬉しくて、おかしくて、笑いが込み上げてくる。

「……お客さん、どれにします？」

痺れを切らしたような店主の声に我に返って、花は慌てて商品を選び始めた。

そして両手のひらサイズの小物入れを手に取る。

「それにするか？」

「あ、はい。……あの、すごく図々しいお願いをしてもいいですか？」

「もちろん構わないが、何だ？」

花の願いなどいくらでも叶えてやるのにと思いながら、ルークは言い淀む花を促した。

「あの……セレナとエレーンにも何かお土産に買ってもいいですか？」

たったそれだけの願いに拍子抜けしたルークは噴き出した。

「それだけか？」

サイノス中の店の物を買い占めたって構わないのに花は酷く申し訳なさそうにしている。

もっと我が儘を言って欲しいくらいで、ルークは更に促した。

「せっかくだから、もっと買えばいいだろう？」

「え？」

花自身の為に選んだ物とよく似た小物入れを二つ選んでいた花は驚いたように手を止めた。

店主はルークの言葉にホクホクと微笑んで待っている。

花は一瞬困惑したようだったが、ふと何かを思い付いたような顔をしてルークを見上げた。

「ルークもレナードにお土産を買いますか？」

「……何の為に？」

レナードはルークが王宮にいない為に起こるかも知れない万一の事を考えて、王宮に残っている。

「あ、ディアンにも？」

「……だから何の為に？」

「渡さないんですか？」

「絶対に有り得ないな」

「……そうですか」

「……」

なぜかガッカリした様子の花を見て僅かに心を動かされたルークだったが、やはりこれだけは譲れなかった。

あの二人に何かを贈るなど、気持ち悪くて仕方がない。

そうして二人は螺鈿細工のお店を後にして、また人々の流れに乗って通りを歩きだした。

ちなみに、その頃のレナードはと言うと……。

「へっくしょいっ！！」

と、盛大にくしゃみをしていた。

「おや、レナード、風邪ですか？　そういう場合は水を張った風呂に氷を入れてしばらく浸かり、その後に裸で踊るとすぐに治るそうですよ」

「治るか！！　ガキの頃じゃあるまいし、そんな嘘はもう信じないからな！！　そもそも、俺が風邪なんてひくわけないだろ！？」

「ああ、バカは――」

「魔力が強いからだ！！」

昔の事を思い出したのか、レナードは怒りながらディアンから書類を引っ手繰ると、さっさと自分の執務室へと戻って行ったのだった。

＊＊＊＊＊

「ルーク、あれは何ですか？」

しばらく大通りを進んだ所で見かけた露店に花は興味を引かれてルークに尋ねた。

そこには色とりどりの液体が大きな透明の瓶に入れられて並んでおり、まるで子供の頃に一度だけ乳母の美津とその息子さんに連れて行ってもらった花火大会の屋台にあったかき氷屋を思い出す。

「ああ、あれは――」

花の背を押して、店へと近づきながら説明しようとしたルークの言葉は途切れてしまった。

先ほど食堂で絡んで来た男が二人の前に立ちはだかったのだ。

気が付けば、ルークと花は柄の悪い男達に取り囲まれている。

男はニヤニヤと優越に顔を輝かせてお決まりの文句を口にした。

「よお、兄ちゃん。さっきはよくもやってくれたなあ？」

「ルーク……」

心配そうに見上げる花をルークは抱き寄せて安心させるように微笑んだ。

「大丈夫だ」

「はい」

その言葉に花は大きく頷いて微笑み返した。

花にとってはルークと一緒にいれば不安に思う事などないのだが、

ただこの状況に別の心配をしていたのだ。

――― なんというか、あまりにも古典的なセリフを言ってるけど……このまま本当に古典的な展開になるのかな？　この人達、大丈夫かな？

十人程の屈強な男達に取り囲まれているというのに怯えた様子もなく、二人の世界になんだか浸っているようなルークと花を見て、男は苛立ったように声を張り上げた。

「聞いてんのか!?　てめえ、ふざけんな!!」

怒鳴り散らした男は近くにあった露店に置いてある樽を蹴飛ばした。

それは花が興味を引かれたお店で、その店主らしきおばさんと、誰かの悲鳴が上がる。

花は男の酷い行動に腹が立ったが何も言わず、ギュッとルークの服を掴んだ。

ルークは慰めるように花に回した手でその細い腰をポンポンと叩くと、盛大に溜息を吐いて、あいていた右手を軽く振った。

「ここじゃ、他の者に迷惑がかかるから場所を移そう」

その言葉に厭な笑いを見せた男は他の者達に指示を出し、二人が逃げ出せないように距離を詰めた。

「逃げ出そうったって、そうはいかねえからな。だが、確かにここじゃあ面倒だ。付いて来い!」

そうしてルークと花は、男の先導で路地裏へと向かった。

「ここらでいいだろう」

狭い路地裏を抜けて振り向いた男がそう告げた場所は、建物と建物の間に挟まれて人目に付かないような何かの資材置き場だった。

そして男の言葉を合図に、今まで黙っていた柄の悪い男達が野次を飛ばし始める。

「ホントに女みてえな綺麗な兄ちゃんだな、おい」

「俺、兄ちゃん相手なら有り金全部出してもいいぞ」

「出たよ、こいつの変な趣味が！！」

「まあ、どっち相手にでも商売が出来らあ」

下卑た笑いでその場が包まれる。

それを聞いていた花はポツリと呟いた。

「悪漢に狙われるのはルークの方でしたね……」

「……」

花にとっては当然というべき男達の態度で、何気なく口にしただけなのだが、ルークにとっては花の言葉にどう反応すればいいのかわからなかった。

と、そこへ食堂での男――どうやらこの無法な集団の頭目らしい男が怒鳴りつける。

「てめえら、いい加減にしろ！！」

途端に男達は口を閉ざした。

ルークが簡単に見ても頭目の魔力は意外と強く、街の警備兵を上回るようだ。

「俺を馬鹿にした事はぜってえ許せねえ。痛え思いさせてやったら、どっかに売り飛ばしてやる！　それに隣の嫁さんも良く見りゃ可愛いじゃねえか。この女も……」

勢いよく捲し立てていた男の声は急に弱まっていく。

不思議に思った男達が視線を向けると、頭目は顔を真っ青にしてガタガタと震え出していた。

「お頭？　どうしたんすか？」

しかし、問いかけた男達も次第に力を失くし、膝をついて苦しそうに呻き始めた。

ルークの抑えていた魔力が頭目の言葉を聞いて途端に怒りを帯び、その体から滲み出しているのだ。

「……ルーク？」

花には魔力の事はさっぱり感じられなかったが、ルークが怒っている事だけはわかった。

今度はルークを心配して見上げた花の不安そうな瞳に、ルークは慌てて気を落ち着かせた。

「ハナ……せっかく街へ出て来たと言うのに、嫌な思いをさせてすまない」

僅かに顔を顰めて困ったように笑うルークを見て、花は大きく首を振った。

「私はルークと一緒にいられるだけで幸せですから、大丈夫です」

相変わらず二人だけの世界にいるルークと花を邪魔する者はもはやいない。

ルークは花を強く抱き寄せると、そのまま柔らかな唇に口づけた。

それは置かれている現状にそぐわない程に深く、長く、激しい。

「ル、ルーク！　人前ではダメです！！」

ようやく唇を離したルークに花は真っ赤になって抗議したが、ルークは微かに笑って首を傾げた。

「そうか？」

「そうです！　だって……あれ？」

恥ずかしそうに周りを見回した花は驚きの声を上げた。

「だ、大丈夫で――」

「大丈夫だ」

先ほどまで二人を取り囲んでいた男達が地に倒れ伏している。

怪我をしているようには見えないが、全員意識がないようだった。

「皆、酒の飲み過ぎだろう。時間を無駄にしてしまったから、さっさと戻ろう」

「でも……このまま放っておいていいんですか？」

何かの魔法かとは思いつつ、呼吸はしっかりとしているようなので深く追及する事は止めてルークを信じることにした花だったが、このまま放置しておくとまた悪事を働いて誰かに迷惑をかけるのではないかと心配になる。

ルークは後ろに振り返ると、すぐに花へと向き直り頷いた。

「ああ、大丈夫だ。すぐに警備兵が駆け付ける」

「そうですか……。あの、それじゃあ、先ほどのお店に戻ってもいいですか？」

ルークの言葉に安堵した花は、樽を蹴飛ばされてしまったおばさんが心配になってお願いした。

二人の完全な巻き添えで商品を駄目にされてしまったのかもしれないのだ。

「では行こう」

もう一度強く花の手を握り締めたルークの手を、花もまた強く握り返して、二人はおばさんの店へと戻る事にしたのだった。

１１０．太陽でライブ。

「お～い。いい加減に起きろよ」

暗い路地裏で失神していた男達は誰かに強く蹴飛ばされて意識を取り戻した。

口調はゆったりとしているが、扱いはかなり乱暴だ。

「な、なんだ？」

「くそ！　何しやがる！」

未だ痺れるような感覚に囚われながらも、どうにか起き出した男達は目の前に立つ若い男二人をさっそく威嚇し始めた。

「んだ？　どこのお坊ちゃんだ！？」

「てめえら、ふざけんな！！」

だが二人の若者は堪えた様子もなく、呑気に何かを話し合っている。

「このままこいつらを捕縛して警備詰所に連れて行くのは面倒だよな？」

「やはり警備兵を呼んだ方が早いか」

それを聞いた男達はいきり立って若者二人に数人がかりで飛びかかった。

「この野郎！！」
「ふざけた事いってんじゃねえぞ！」

が、あっという間に叩きのめされる。

「な、なんだ！？」

まだ体が動かずに見ていた者達も、当の返り討ちにされた男達も何が起こったのかさっぱりわからなかった。
ただ、地に叩き伏せられた者達の呻き声が暗い路地裏に不気味に響く。
その中で、ようやく意識を取り戻した頭目が若者二人を見て悲鳴じみた声を上げた。

「ひいいっ！　き、きき騎士じゃねえか！？」

頭目は二人の圧倒的な魔力に恐れ慄いている。
その様子を訝りながら、目を凝らして若者二人の姿を見た男達もようやく気付いた。

「そ、その剣！？」

誰かの上擦った声が上がる。
貴族の若者が腰に剣を佩いて街へと遊びに来る事は珍しくもないが、目の前の若者二人の剣には、その柄の先に騎士の証である銀色の盾に交差した剣の紋章が刻まれているのだ。
ちなみに紋章にある剣の色で所属する隊が分かるのだが、男達がそれを知るはずもない。

「き、騎士は一般人に手を出したら、い、いけねえはずだろ！？」

「そそ、そうだ！！」

「……なあ、ランディ。自称一般人の方々が何かほざいていらっしゃるようだが、どうする？」

「そうだな。確かに騎士団には厳格な規律があって、一般人に力を揮う事は許されていないからな」

ランディと呼ばれた若者の言葉に男達はホッとして気を弛めたが、それもつかの間――。

「だが、残念な知らせがある」

続いたランディの言葉は一旦そこで途切れ、男達に厳しい視線が向けられた。

「お前達は犯罪者であって、一般人とは認められない」

「と言う訳だ」

もう一人の若者が馬鹿にした調子で蒼白になった男達に笑いかける。

すると、男達の中の一人が這うように逃げ出し、続いて動ける者達は一目散に逃げ出した。

だが、ランディが転移して前方へ現れ、男達の行く手を遮る。

「逃げるなよ」

たったそれだけ呟いたはずなのに、なぜか男達の体は何かに縛られたように動けなくなり、地面へと再び倒れた。

「アレックス、そっちは終わったか？」

「ああ」

その場に残っていた者達も、もう一人の若者――アレックスに捕縛されていた。

「お、俺達は何もしてねえ！！　変な兄ちゃんにいきなり襲われたんだ！！」

「そ、そうだ！　なのにこの仕打ちは許せねえ！！」

「俺達が犯罪者だって証拠はあるのかよ！？」

「確か規律を破った騎士には厳しい罰則があるんだろ？　へへへ。どうする？」

「今、俺達を解放するなら許してやるぜ？」

捕縛されて尚、白々しく無実を訴えて食い下がる男達に二人は呆れたように大きく息を吐いた。

「ランディ、こいつらうるせえ。どうする？　口も縛るか？」

「そうだな……」

頷きながらランディは男達を見下ろした。

「確かに、騎士団の規律を破った者には厳しい罰則が待っているな」

ランディの言葉に男達は顔を輝かせ、口々に「俺達は被害者だ！」「責任を取らせてやる！」と叫びだしたが、それを意に介した様子もなくランディは続けた。

「だが、やはり残念な知らせがある」

再びそこで言葉を切ったランディは、一番口やかましく罵っていた男の腹を片足で踏みつけて身を屈めた。

「私達は近衛隊に所属する騎士であり、近衛騎士には如何なる規律も、その行動に制約もない」

秘密を囁くようなランディの小さな声がその場に浸透するには少々時間がかかった。

近衛騎士に命令を下す事が出来るのは皇帝、皇太子、そして皇帝の正妃の三人のみである。

非常時に自身で判断して迅速に動けるように、その三人以外からの束縛を受ける事がないのだ。

それ故に、近衛騎士には高尚なまでの人格が求められる。

「こ、近衛騎士って皇帝……陛下の……？」

大通りの喧騒が遠く聞こえる中、誰かの呆けたような声がようやく重苦しい沈黙を破った。

「え？　だって……え？」

「まさか……さっきの？」

「いや、そんなわけ……」

次々と上がる声は理解できないと言うより、理解したくないと言ったものだった。

そして再び、恐る恐るランディとアレックスの――近衛騎士が佩いている剣へと目を向ける。

その柄にある騎士の紋章――銀色の盾に交差した金色の剣が光り輝き、男達はその眩しさに目を閉じた。

こうして、サイノスの街で長い間警備兵達が手を焼いていた無法集団は頭目を筆頭に幹部達が捕らえられ、壊滅する事になったのだった。

＊＊＊＊＊

「おばさん、大丈夫でしたか？」

「ああ！　お嬢さん、あんたも無事だったんだね？　よかった、よかった」

花とルークの無事な姿を見た露店の店主はホッと胸をなでおろすと、続け様にしゃべり出した。

「いやね、あんた達があの男達と行っちまった後に、どこぞの貴族の坊ちゃん達が数人やって来て、散らかった物を片付けるのを手伝ってくれたんだよ。幸い商品には殆ど傷が付かなかったし、坊ちゃん達も店の物を買ってくれたりで助かったくらいさ。最近はお貴族様も捨てたもんじゃないよ。やっぱりハナ様のお陰かねぇ？　街のみんなも明るくなって戦争前の活気に戻ったし、そんな中でさっきの奴らだけがいつまでもゴミクズみたいにのさばって……。魔力が強いだか何だかで警備兵達も役に立たなくてねえ。で、結局は警備兵が駆け付けて助けてくれたのかい？」

「はあ……」

あまりの勢いに押されて、花は気の抜けた返事しか出来なかったのだが、ルークに至っては口を閉ざしたまま僅かに後退している。

そこへ、ルークの背に誰かが突き当たった。

「おっと、ごめんよ」

それは十歳くらいの少年だったが、ルークはすぐにその細い腕を掴んだ。

「――盗った物を出せ」

「ええ？　お兄さん、何の事？」

「いいから、出せ」

断固としたルークの態度に、少年――スリの少年はしぶしぶ懐からルークの皮財布を取り出して返した。

そのやり取りを、花は未だ大きな声で話し続ける店主に圧倒されて気付いていない。

ルークが黙ったまま財布から銀貨を一枚取り出して渡してやると、喜びに顔を輝かせて受け取った少年は「お兄さん、ありがとう！」と言って走り去って行った。

その後ろ姿を見送って、大きく息を吐いたルークは花へと向き直って驚き慌てた。

「待て！　ハナ、それは――！！」

が、時すでに遅し。

花は店主から貰った綺麗な水色の飲料を飲み干してしまった。

「ルーク？」

不思議そうに問いかける花にルークは答える事なく、花を抱き寄せると店主に水を頼んだ。

花が口にした飲料は女性でも水代わりに飲む物なのだが、カフィアよりも多くアルコールが含まれているのだ。

すぐに王宮に戻らなければと考えながら、ルークが店主から水を受け取る為に手を伸ばしたその隙に、花はその腕からするりと抜け出していきなり駆け出した。

「ハナ！！」

驚いたルークの呼びかけにも止まる事なく、花はすぐ側の広場中央にある噴水の縁にトンッと勢いよく飛び乗って、急ぎ駆け寄るルークへと振り向いた。

そしてニッコリ笑って右手を天へと真っ直ぐに挙げると、高らかに名乗りを上げた。

「いちばんっ！　こいずみ　はな！　元気いっぱい歌います！！」

「ハナ……」

ルークが心配そうに見守る中、花は陽気に歌い始めた。

そんな花を「なんだ、なんだ？」と初めは面白おかしく見ていた周囲の者達は、すぐに心奪われたようにその場に立ち尽くして聴き入った。

その明るい歌声に誘われたかのように、太陽が雲間から顔を出して柔らかな光を花へと降り注ぎ、季節外れの温かな風は戯れるよう

に花へと纏い、その美しい旋律を出来る限り遠くへと運んでいく。

穏やかな陽光の中で楽しそうに歌う花の姿は眩しいほどに煌めいて、皆の胸にその美しさを刻みつける。

春風のようなぬくもりに包まれた真冬の奇跡はやがて終わりを迎えたが、皆の心は明るい光で満たされていた。

花は一度ゆっくり息を吐き出すと、ルークに向かって嬉しそうに微笑んだ。

「ルーク！　大好き！！」

大きく叫んで飛び付いた花をルークはしっかり抱きとめると、愛おしそうに頬を寄せ、そして唖然として自分達を見ている周囲へ目を向けた。

花はルークの胸に顔を埋めてすでに寝息を立てている。

「……騒がせてしまったな」

そう呟いて苦笑したルークは、花を抱いたままその場から消えた。

同時に、周辺から何人もの若者の姿までもが一瞬にして消える。

「……え？　今のって……」

呆気に取られたような誰かの声が噴水の水音しかしない広場に小さく落ちた。

そこから次第に驚きの声は大きくなり、辺りは騒然となっていく。

「今、二人同時に転移したか？」

「まさか……」

「いや、でも確かに……」

「それに詠唱もしないで転移できる者があれほど……」

人一人を抱えて転移するなど、街の人々は見たことも聞いたこともなかった。

しかも、今思えば消えた二人を守るような布陣で立っていた若者達――その者達は詠唱なしで転移して消えたのだ。

そして何より、あの歌声。

「あの娘さん……」

「ルーク、大好きって……」

「その名前って確か……陛下の……？」

「まさか本当に今のは……？」

その場にいる者達は思わず自分を見下ろした。

大した器ではないが、それでも魔力は一杯に満たされ、怪我や持病に悩んでいた者達もそれが癒えている事に気付く。

「――ハナ様だよ！！」

あの露店のおばさんが迷いない声で叫び、そこから広場、大通り、サイノスの街は興奮に満ちた歓喜の声に包まれていった。

こうして、花とルークの初デート――お忍び街中散策はサイノスの街に小さな奇跡と大きな喜びをもたらして終わった。

その後、皇帝陛下とハナ様のお忍びデートの噂はあっという間に広まり、二人の仲睦まじい姿が少々大げさに語られると同時に、陛下がハナ様を無理に閉じ込めているといった馬鹿馬鹿しい噂は消えていったのだった。

111．呆気ない幕切れ。

「陛下、何をおっしゃっておられるのです？　なぜ、兄上が？　なぜ、私が――」

皇帝の執務室に呼び出されたルークは、今しがた告げられた内容に愕然としていた。

その様子を見たフランツ――ルークの兄はかすかに苦笑を洩らした。

普段のルークは無表情で感情を表に出す事など滅多にない。

それ故に幼い時から何を考えているのかわからないと評され、最近は急激に増していく力と共にその存在を恐れられているが、本来のルークは繊細でとても優しい人間なのだ。――自分とは違って。

だがこの先、その優しさがルークの枷となり、ルーク自身を蝕んでいくのだろう。

その皮肉に、込み上げてくる笑いをフランツは必死で抑え、穏やかな口調でルークを宥めにかかった。

「ルーク、もう決まった事だ。近く朝議の場で陛下が言明なされるから、お前も心得ておきなさい」

「……兄上もなぜ黙って従おうとなさるのです？　今まで兄上がどれ程この国の為に力を注いでこられたか。それを、その兄上が廃太子などと……」

「ルーク、そなたの魔力はすでにフランツを超えておる。帝位継承の定めに従い、そなたが皇太子となるは必然。いつまでも駄々を捏ねるは童（わらわ）のようで見苦しい」

物憂げな中にも苛立ちを含んだ皇帝の――ルークの父親の声は重くその場に響く。

「定めに従うならば、そもそも陛下が――」

「ルーク！！」

ルークが思わず口にしそうになった言葉を、フランツが今度は厳しく遮った。

しかし、皇帝はそんな二人の様子を気にも留めず用は済んだとばかりに執務室を出て行き、重い沈黙の中にルークとフランツは残された。

「――父上は私を恐れておられるのだ」

小さく溜息を吐いて、暫く続いた沈黙を破り口を開いたフランツに、ルークが焦れたように詰め寄る。

「それは……兄上のお力が父上よりも勝っておられるからですか？でしたら父上こそ定めに従い兄上に譲位するべきなのです！」

「……ルーク、そうではない」

「兄上？」

皮肉気に微笑んで皇帝の執務机に浅く腰をかけたフランツを見て、ルークは眉を寄せた。

殆ど政務を行う事のない皇帝の代わりに、皇太子であるフランツが長い間その任を担ってきたのだ。

その指導力と道義に満ちた人柄で臣下からの信も厚く、民からの人気も高い兄をルークは尊敬し、慕っていた。

しかし、なぜかルークは今目の前にいる兄に違和感を覚えたが――。

「私に双子の弟がいたことはお前も知っているだろう？」

「……はい」

「弟のエーベルは七歳の時に亡くなった。だが、あれは……私が殺したのだ」

「な――――！？」

どこか冷めたような、淡々とした口調で語る兄の言葉にルークは絶句した。

今のは聞き間違いではないのか、それとも冗談なのかと必死で兄の顔を探るが未だ皮肉げに歪んだ笑みが浮かんでいるだけだった。

「あれは事故だと誰もが思っていたが、父上――陛下だけはどうやらご存じだったようだな。それで……今はもう初めから存在しなかったかのように皇籍からさえもエーベルは名を消されてしまった」

ルークの困惑にも構わずに話し続けたフランツは、ゆっくりと立ち上がった。

「父上が恐れておられるのは私の中に在るサンドルの血――。ルーク、サンドルの双子は神の御子などではない。ただ……呪われているだけだ」

そう言い捨てて、フランツは茫然としているルークを残し執務室から出て行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「邪魔な記憶だな……」

サンドル王国主神殿の奥――居住区になっている区画の一室で浅い眠りから目覚めたクラウスは、一人呟いて窓辺へと近づいた。

この国はどこよりも早く春が訪れる。

その暖かく気だるげな午後のひと時、先程まで響いていたマグノリアからの澄んだ音色に共鳴したかのように光り輝く外の景色をクラウスは眺めた。

「アリーシャス……」

クラウスは皮肉気に唇を歪め、現れた気配の方へと振り向いた。

「そろそろ潮時でしょうかね？」

優雅に応接ソファへ腰をかけた王太子は、ずっと部屋にいたかのように自然な口調でクラウスへと問いかけた。

「……今回はかなり手間をかけたのだがな。しかしまあ、まだわからぬ。拠るものが大きければそれだけ失った時には――。ああ、そうか。あの魔族の坊やが森へと帰ったからか……」

「そうですね」

突然話題を変えたクラウスに訝る事なく王太子は頷く。

「相変わらず……甘いな」

クラウスは再び窓の外を眺めて、楽しそうに笑った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ルークは執務椅子の背にもたれ、入室の許可を得て入って来たディアンをしばらくの間見つめていた。

ディアンと共に執務室へと舞い込んだ温かな風が、マグノリアにもうすぐ春が来ると告げている。

「陛下、私をお呼びと伺いましたが……そんなに私の顔をご覧になりたかったのでしたら、後ろへ振り向けば宜しいでしょう。少々気が抜けておりますが、似たようなものがありますよ？」

「いや、何も抜けてないだろ？　むしろ愛と勇気と常識を足してくれ」

「お前達の鬱陶しい顔にはうんざりだ。よってその存在をどうにかしろ」

「いやいや、存在はどうこう出来るものじゃないからな。そこはいい加減受け入れてくれ」

ディアンの揶揄と応えたルークの言葉に、後ろに立つレナードが異を唱えた。

が、いつもの如くレナードの言葉を華麗に流し、ディアンは話題を元に戻す。

「ところで陛下、御用は何なのでしょうか？」

「ああ、先程リカルドから書簡が届いた」

「ひょっとして文通なされているんですか？　気持ち悪いですね」

「気持ち悪いのはお前の頭だ。どうせ内容はわかっているだろう？」

「……問題児が迷子になった件ですか？　あちらも大変ですねぇ」

「だが、迷子は一人じゃないだろう？」

ルークの問いかけに、ディアンは何の事かわからないと言った顔で肩を竦めた。

その強情さにルークは呆れたように溜息を吐く。

「今更……『果て』の崩壊を前に、なぜ魔族が動かないのかなどと調べてどうなる？　そんな理由を付けてまで森へとアホを帰したのは心配だったからじゃないのか？」

「……邪魔だったからですよ」

いつもの微笑みを浮かべたディアンにルークはもう何も言わず、レナードへと振り向いた。

「レナード、ヴィシュヌの剣を持って来てくれ」

「わかった」

すぐに頷いたレナードは剣を取りに転移した。

リコよりセルショナードの宝剣であるヴィシュヌの剣を預かった日からずっと、ルークが剣に触れる事はなく、レナードが大切に保管していたのだ。

真の主が現れた剣は本来の力を取り戻し、人間を脅かす魔を戒めている。

ルークの力であと一押ししてやれば、各地に出没している力の強い魔物も完全にその姿を消すだろう。

レナードが消えると、ルークはディアンに再び問いかけた。

「怖いのか？」

「――陛下は私を買い被っていらっしゃる。そのような上等な感情は私にはありませんよ」

唐突な内容だったが、ディアンには十分に伝わったようだ。

しかし、その答えにルークは顔をしかめた。

「お前こそ自分を卑下しすぎだ。ディアン、お前は……兄上とは違う。レナードだっているんだ。だからお前は絶対に大丈夫だ」

確信に満ちた強い口調で諭すように告げるルークの言葉に、ディアンはしばらく沈黙していたが、やがて滅多にない柔らかな笑みを

見せた。

「……そうですね」

その微笑みは重苦しかった部屋の空気を和らげる。

と、そこへレナードが戻ってきた。

「悪い、待たせたな」

「……」

「……」

「あれ？　待ってた……よな？」

急ぎ戻ったレナードは待たせた事への謝罪を口にしたのだが、二人は何も応えない。

かと思いきや、ディアンがなぜか残念そうに溜息を吐いた。

「レナード、貴方が何かと間が悪い男だということはよく知っておりますから、今更どうこう言うつもりはありません。ですが、これからはわかりやすいように貴方の事を間男と呼ぶ事にしましょう」

「なんでだよ!?　何か色々おかしいよな!?」

「……お前ら兄弟はどちらもおかしいから心配するな」

いつものやり取りが始まった二人に呆れて、ルークは仲裁？　に入ったが、一度大きく息を吐くと、表情を厳しいものに変えて立ち上がった。

「レナード」

呼ばれたレナードもまた表情を改めると、一歩後退して片膝を立てて跪き、両手で鞘を支えてルークへと剣を捧げた。

レナードとディアンが見守る中、柄を手にしたルークは剣が欲するままに力を注ぎ、やがて解放を求めて大きく唸り始めた剣を一気に抜いた。

瞬間――圧倒的な力が波紋となり王宮に、サイノスに、マグノリアに、そして世界へと広がっていく。

闇を払い、魔を薙ぎ倒していく力は、一瞬に煌めく風のように世界を渡り、止まることなく『果ての森』を駆け抜ける。

そして遂に『果て』へと突き当たった力はその勢いのままに『虚無』を押し戻し、それでも足掻き出ようと蠢く闇を圧した。

こうして、数十年続いた『虚無』の暴走は、この時を以って沈静したのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3079o/

猫かぶり姫と天上の音楽

2011年9月27日01時51分発行